京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2023-9

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二三－九

長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡

長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡

2024年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡

2024年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

調査地全景（南南西から）

溝3185土器出土状況（南西から）

溝3185出土土器

1　護岸3001（北東から）

2　水制3410（北から）

１　４区第１面〔Ⅱ期〕全景（北東から）

２　水制4035（南東から）

1　八双金具

2　小刀

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、桂川大下津地区他掘削工事に伴う長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

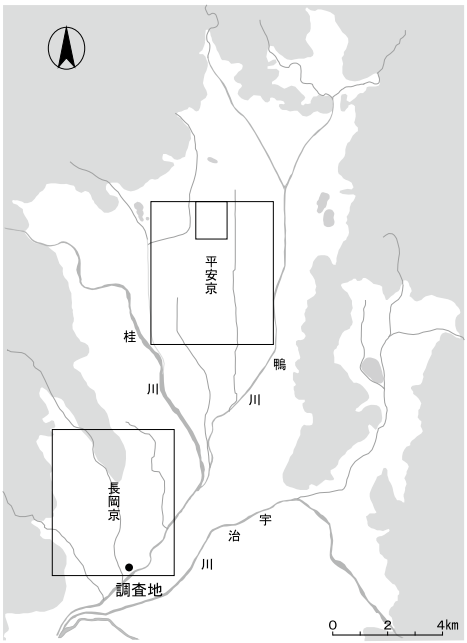
令和６年12月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡　（京都市番号　21NG269） 長岡京跡左京第671次調査（７AN-YMM-３）
2	調査所在地	京都市伏見区淀水垂町地先
3	委　託　者	分任支出負担行為担当官　近畿地方整備局 淀川河川事務所長　波多野真樹
4	調 査 期 間	2022年10月13日～2023年５月31日
5	調 査 面 積	3,130㎡
6	調査担当者	松永修平・柏田有香・中谷俊哉・三好孝一・布川豊治・伊藤　潔
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「納所」・「淀」・「神足」・「円明寺」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	松永修平：１、２、３－（１）～（３）、４－（１）～（４）、５ 柏田有香：３－（１）・（４）・（５）、４－（１）・（２）・（４）～（８）、５－（１） 三好孝一：４－（５） 付章１：株式会社パレオ・ラボ 付章２：丸山真史（東海大学人文学部）
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 5
（１）地理的環境 …… 5
（２）歴史的環境 …… 5
（３）周辺調査 …… 9
３．遺　　構 …… 11
（１）基本層序 …… 11
（２）２区の遺構 …… 15
（３）３区の遺構 …… 20
（４）４区の遺構 …… 30
（５）５区の遺構 …… 35
４．遺　　物 …… 41
（１）出土遺物の概要 …… 41
（２）土器類 …… 42
（３）瓦類 …… 51
（４）木製品 …… 52
（５）金属製品・銭貨 …… 57
（６）石製品 …… 62
（７）土製品 …… 62
（８）動植物遺存体、その他 …… 63
５．ま と め …… 67
（１）今回の調査成果 …… 67
（２）溝3185出土の土器群について …… 77
付章１　自然科学分析 …… 83
付章２　出土した動物遺存体 …… 127

図　版　目　次

巻頭図版１　遺構　調査地全景（南南西から）

巻頭図版２　遺構　溝3185土器出土状況（南西から）

巻頭図版３　遺物　溝3185出土土器

巻頭図版４　遺構　１　護岸3001（北東から）

　　２　水制3410（北から）

巻頭図版５　遺構　１　４区第１面〔Ⅱ期〕全景（北東から）

　　２　水制4035（南東から）

巻頭図版６　遺物　１　八双金具

　　２　小刀

図版１　遺構　２区第10面・３区第11面〔Ⅺ期〕平面図（１：500）

図版２　遺構　２区第９面・３区第10面〔Ⅹ期〕平面図（１：500）

図版３　遺構　２区第８面・３区第９面〔Ⅸ期〕平面図（１：500）

図版４　遺構　２区第７面・３区第８面〔Ⅷ期〕平面図（１：500）

図版５　遺構　３区第７面〔Ⅶ期〕平面図（１：500）

図版６　遺構　２区・３区第６面〔Ⅵ期〕平面図（１：500）

図版７　遺構　２区第５面〔Ⅴ期〕平面図（１：500）

図版８　遺構　２区・３区第４面〔Ⅳ期〕平面図（１：500）

図版９　遺構　２区・３区第３面〔Ⅲ期〕平面図（１：500）

図版10　遺構　３区第２面〔Ⅱ期〕平面図（１：500）

図版11　遺構　３区第１面〔Ⅰ期〕平面図（１：500）

図版12　遺構　２区南壁・断割トレンチ南壁断面図（１：80）

図版13　遺構　竪穴建物2800実測図（１：60）

図版14　遺構　竪穴建物2770実測図（１：60）

図版15　遺構　竪穴建物2355実測図（１：60）

図版16　遺構　柱列2740・2751実測図（１：50）

図版17　遺構　柱列2702・2705実測図（１：50）

図版18　遺構　柱列2694・2654実測図（１：50）

図版19　遺構　井戸2666実測図（１：50）

図版20　遺構　３区上段西壁断面図１（１：100）

図版21　遺構　３区上段西壁断面図２（土色）

図版22　遺構　３区下段西壁断面図１（１：100）

図版23　遺構　３区下段西壁断面図２（土色）

図版24　遺構　３区北壁断面図（１：100）
図版25　遺構　溝3428、土坑3412・3386実測図（１：80、１：20）
図版26　遺構　土坑3147、溝3100・3185・3240、流路3400断面図（１：60）
図版27　遺構　土坑3056・3182、井戸3058実測図（１：50）
図版28　遺構　柱列3233実測図（１：40）
図版29　遺構　溝3185土器出土状況図１（１：100）
図版30　遺構　溝3185土器出土状況図２（１：100）
図版31　遺構　溝3100・3185断面図（１：40）
図版32　遺構　溝3055断面図、土坑3374・3385実測図（１：50）
図版33　遺構　護岸3200実測図１（１：100）
図版34　遺構　護岸3200実測図２（１：100）
図版35　遺構　護岸3200実測図３（１：100）
図版36　遺構　３区護岸断割断面図（１：50）
図版37　遺構　護岸3001実測図１（１：100）
図版38　遺構　護岸3001実測図２（１：100）
図版39　遺構　護岸3001実測図３（１：100）
図版40　遺構　水制3410第１段階平面図・断割断面図（１：60）
図版41　遺構　水制3410第２段階平面図（１：60）
図版42　遺構　水制3410第３段階平面図（１：60）
図版43　遺構　地業3006・3007実測図（１：60）
図版44　遺構　４区第８面〔Ⅷ期以前〕・第７面〔Ⅷ期〕平面図（１：250）
図版45　遺構　４区第６面〔Ⅶ期以降〕・第５面〔Ⅵ期〕平面図（１：250）
図版46　遺構　４区第４面〔Ⅴ期〕・第３面〔Ⅳ期〕平面図（１：250）
図版47　遺構　４区第２面〔Ⅲ期〕平面図（１：200）
図版48　遺構　４区第１面〔Ⅱ期〕平面図（１：200）
図版49　遺構　４区第１面〔Ⅰ期〕平面図（１：200）
図版50　遺構　４区西壁断面図１（１：100）
図版51　遺構　４区西壁断面図２（土色）
図版52　遺構　柱列4107・4085・4099実測図（１：40）
図版53　遺構　X=－120,824セクション断面図（１：50）
図版54　遺構　X=－120,834セクション断面図（１：50）
図版55　遺構　４区南壁断面図（１：50）
図版56　遺構　水制4035最下層船材出土状況実測図（１：60）
図版57　遺構　水制4035石積最下段実測図（１：60）
図版58　遺構　水制4035石積実測図（１：60）

図版59　遺構　護岸4031杭列実測図（１：60）
図版60　遺構　土坑4011・4012、柱穴4009・4014～4016・4032～4034・4041・4042実測図（１：50）
図版61　遺構　護岸4001・水制4045実測図（１：100）
図版62　遺構　護岸4001実測図（１：100）
図版63　遺構　護岸4001断割１実測図（１：50）
図版64　遺構　護岸4001断割２・３断面図（１：50）
図版65　遺構　５区第10面〔Ｘ期〕・第９面〔Ⅸ期〕平面図（１：200）
図版66　遺構　５区第８面〔Ⅷ期〕・第７面〔Ⅶ期〕平面図（１：200）
図版67　遺構　５区第６面〔Ⅵ期〕・第５面〔Ⅴ期〕平面図（１：200）
図版68　遺構　５区第４面〔Ⅳ期〕・第３面〔Ⅲ期〕平面図（１：200）
図版69　遺構　５区第２面〔Ⅱ期〕・第１面〔Ⅰ期〕平面図（１：200）
図版70　遺構　５区北壁断面図（１：100）
図版71　遺構　５区東壁断面図（１：100）
図版72　遺構　礫敷5047、井戸5028、溝5021実測図（１：50）
図版73　遺構　地業5002・5003実測図（１：60）
図版74　遺物　土器実測図１（１：４）
図版75　遺物　土器実測図２（１：４）
図版76　遺物　土器実測図３（１：４）
図版77　遺物　土器実測図４（１：４）
図版78　遺物　土器実測図５（１：４）
図版79　遺物　土器実測図６（１：４）
図版80　遺物　土器実測図７（１：４）
図版81　遺物　土器実測図８（１：４）
図版82　遺物　土器実測図９（１：４）
図版83　遺物　土器実測図10（１：４）
図版84　遺物　土器実測図11（１：４）
図版85　遺物　土器実測図12（１：４）
図版86　遺物　土器実測図13（１：４）
図版87　遺物　土器実測図14（１：４）
図版88　遺物　土器実測図15（１：４）
図版89　遺物　土器実測図16（１：４）
図版90　遺物　土器実測図17（１：４）
図版91　遺物　土器実測図18（１：４）
図版92　遺物　土器実測図19（１：４）
図版93　遺物　土器実測図20（１：４）

図版94　遺物　土器実測図21（１：４）
図版95　遺物　土器実測図22（１：４）
図版96　遺物　土器実測図23（１：４）
図版97　遺物　土器実測図24（１：４）
図版98　遺物　瓦類拓影及び実測図１（１：４）
図版99　遺物　瓦類拓影及び実測図２（１：４）
図版100　遺物　瓦類拓影及び実測図３（１：４）
図版101　遺物　瓦類拓影及び実測図４（１：４）
図版102　遺物　瓦類拓影及び実測図５（１：４）
図版103　遺物　瓦類拓影及び実測図６（１：４）
図版104　遺物　瓦類拓影及び実測図７（１：４）
図版105　遺物　瓦類拓影及び実測図８（１：５）
図版106　遺物　瓦類拓影及び実測図９（１：４）、瓦刻印拓影（１：２）
図版107　遺物　木製品実測図１（１：４）
図版108　遺物　木製品実測図２（１：４）
図版109　遺物　木製品実測図３（１：４、木51のみ１：６）
図版110　遺物　木製品実測図４（１：４）
図版111　遺物　木製品実測図５（１：４）
図版112　遺物　木製品実測図６（１：４）
図版113　遺物　木製品（卒塔婆）実測図１（１：４）
図版114　遺物　木製品（卒塔婆）実測図２（１：４）
図版115　遺物　木製品（卒塔婆）実測図３（１：４）
図版116　遺物　木製品（船材）実測図１－１（１：20）
図版117　遺物　木製品（船材）実測図１－２（１：20）
図版118　遺物　木製品（船材）実測図２（１：10）
図版119　遺物　木製品（船材）実測図３（１：10）
図版120　遺物　木製品（船材）実測図４（１：10）
図版121　遺物　木製品（船材）実測図５（１：10）
図版122　遺物　木製品（船材）実測図６（１：10）
図版123　遺物　金属製品実測図１（１：２）
図版124　遺物　金属製品実測図２（１：２）
図版125　遺物　金属製品実測図３（１：２）
図版126　遺物　金属製品実測図４（１：４）
図版127　遺物　金属製品実測図５（１：４、金59・60のみ１：８）
図版128　遺物　銭貨拓影１（１：１）

図版129　遺物　銭貨拓影２（１：１）
図版130　遺物　石製品実測図１（１：４、石１～３のみ１：２）
図版131　遺物　石製品実測図２（１：６）
図版132　遺物　石製品実測図３（１：８）
図版133　遺物　石製品実測図４（１：６）、土製品実測図（１：４）
図版134　遺構　１　２区第10面〔Ⅺ期〕全景（北から）
　　２　２区第９面〔Ⅹ期〕全景（北から）
図版135　遺構　１　竪穴建物2800（北西から）
　　２　竪穴建物2770（北東から）
図版136　遺構　１　竪穴建物2355（北西から）
　　２　落込2392（3464）・溝2841（南西から）
図版137　遺構　１　２区第８面〔Ⅸ期〕全景（北から）
　　２　柱列2751（北西から）
　　３　柱列2740（北西から）
図版138　遺構　１　２区第７面〔Ⅷ期〕全景（北から）
　　２　柱列2705・2702（北西から）
図版139　遺構　１　２区第６面〔Ⅵ期〕全景（北から）
　　２　２区第５面〔Ⅴ期〕全景（北から）
図版140　遺構　１　２区第４面〔Ⅳ期〕全景（北から）
　　２　井戸2666（北から）
　　３　井戸2666下層半裁状況（南から）
図版141　遺構　１　３区下段第11面〔Ⅺ期〕全景（北から）
　　２　土坑3472（東から）
図版142　遺構　１　３区下段第10面〔Ⅹ期〕全景（北から）
　　２　３区下段第９面〔Ⅸ期〕全景（北から）
図版143　遺構　１　畑3444（北から）
　　２　溝3451土器出土状況（南西から）
図版144　遺構　１　３区下段第８面〔Ⅷ期〕全景（北から）
　　２　溝3428（南西から）
　　３　溝3428土器出土状況（南西から）
図版145　遺構　１　３区下段第７面〔Ⅶ期〕全景（北から）
　　２　流路3400重圏文軒丸瓦出土状況（北から）
　　３　土坑3386土器出土状況（東から）
図版146　遺構　１　３区下段第６面〔Ⅵ期〕全景（北から）
　　２　溝3185土器出土状況（北西から）

3　溝3240土器出土状況（東から）
図版147　遺構　1　土坑3056瓦出土状況（北から）
2　土坑3056瓦出土状況（詳細）（北から）
3　土坑3392土器出土状況（北から）
図版148　遺構　1　３区上段第４面〔Ⅳ期〕全景（北東から）
2　３区下段第６面〔Ⅰ～Ⅲ期〕全景（北から）
図版149　遺構　1　３区上段第３面〔Ⅲ期〕全景（北東から）
2　溝3055（2646）と堀2123（左側）（南西から）
図版150　遺構　1　３区上段第２面〔Ⅱ期〕全景（北東から）
2　護岸3473（南東から）
図版151　遺構　1　３区上段第１面〔Ⅰ期〕全景（北東から）
2　護岸3200（南東から）
図版152　遺構　1　水制3410竹蛇籠検出状況（北東から）
2　水制3410錨出土状況（北から）
3　地業3006・3007（北東から）
図版153　遺構　1　４区第８面〔Ⅷ期以前〕全景（北から）
2　４区第７面〔Ⅷ期〕全景（南から）
3　４区第６面〔Ⅶ期以降〕全景（北から）
4　柱列4085（南南東から）
図版154　遺構　1　４区第５面〔Ⅵ期〕全景（北東から）
2　４区第４面〔Ⅴ期〕全景（北東から）
図版155　遺構　1　４区第３面〔Ⅳ期〕溝4047（北から）
2　４区第２面〔Ⅲ期〕全景（北から）
3　４区第１面〔Ⅱ期〕全景（東南東から）
図版156　遺構　1　水制4035、溝4030断面（南から）
2　水制4035最下部（南東から）
図版157　遺構　1　水制4035船材出土状況（北から）
2　水制4035船材細部（北東から）
3　水制4035船材と石積石材（北から）
図版158　遺構　1　水制4035上段船材転用状況（南東から）
2　水制4035瓦・礫敷き検出状況（南東から）
3　護岸4031（北東から）
図版159　遺構　1　土坑4011・4012、柱穴群（西から）
2　土坑4012（北東から）
3　４区第１面〔Ⅰ期〕全景（北から）

図版160　遺構　1　護岸4001南半全景（北から）
　　2　護岸4001北半、水制4045（北東から）
　　3　護岸4001断割（東から）
図版161　遺構　1　５区第10面全景（西から）
　　2　落込5071土器出土状況（北西から）
　　3　５区第９面全景（西から）
　　4　５区第８面全景（西から）
図版162　遺構　1　５区第７面全景（西から）
　　2　５区第６面全景（北東から）
図版163　遺構　1　５区第５面全景（西から）
　　2　５区第４面全景（西から）
　　3　井戸5028（北西から）
図版164　遺構　1　５区第３面全景（西から）
　　2　溝5027瓦出土状況（北西から）
　　3　５区第２面整地層八双金具出土状況（北東から）
　　4　５区第２面全景（西から）
図版165　遺構　1　５区第１面全景（南から）
　　2　地業5002・5003（南西から）
　　3　地業5002断面１（南西から）
　　4　地業5002断面２（南東から）
図版166　遺物　土器類１
図版167　遺物　土器類２
図版168　遺物　土器類３
図版169　遺物　土器類４
図版170　遺物　土器類５
図版171　遺物　土器類６
図版172　遺物　土器類７
図版173　遺物　土器類８
図版174　遺物　土器類９
図版175　遺物　瓦類１
図版176　遺物　瓦類２
図版177　遺物　木製品１
図版178　遺物　木製品２
図版179　遺物　木製品３
図版180　遺物　木製品４

図版181　遺物　木製品５
図版182　遺物　金属製品１
図版183　遺物　金属製品２
図版184　遺物　金属製品３
図版185　遺物　金属製品４
図版186　遺物　銭貨、石製品１
図版187　遺物　石製品２
図版188　遺物　石製品３、土製品

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）　……　1
図２　調査区配置図（１：1,500）　……　2
図３　２区調査前全景（北西から）　……　3
図４　３区調査前全景（北西から）　……　3
図５　４区調査前全景（南から）　……　3
図６　５区調査前全景（南西から）　……　3
図７　３区重機掘削状況（南西から）　……　3
図８　２区作業状況（北から）　……　3
図９　ドローン撮影状況（西から）　……　3
図10　オルソ測量状況（北から）　……　3
図11　報道発表風景（南から）　……　4
図12　地元向け説明会風景（南西から）　……　4
図13　土層剥ぎ取り作業状況（南から）　……　4
図14　２・３区埋め戻し終了状況（南東から）　……　4
図15　周辺遺跡分布図（１：50,000）　……　5
図16　周辺調査位置図（１：5,000）　……　8
図17　２・３区土層模式柱状図（１：40）　……　12
図18　４・５区土層模式柱状図（１：40）　……　13
図19　溝2790実測図（１：80）　……　16
図20　落込2392、溝2779・2841断面図（１：120）　……　17
図21　柱列2609・2636実測図（１：50）　……　19
図22　土坑3472実測図（１：20）　……　21

図23　土坑3392実測図（１：20）　…… 23
図24　護岸3473平面図（１：50）　…… 26
図25　護岸3001使用石材に穿たれた矢穴跡の拓影（１：８）　…… 28
図26　地業3020実測図（１：50）　…… 29
図27　水制4035使用石材（１：60）　…… 32
図28　護岸4031使用石材（１：60）　…… 33
図29　落込5071実測図（１：20）　…… 36
図30　柱列5064実測図（１：50）　…… 36
図31　溝5057・5058・5060断面図（１：50）　…… 37
図32　土坑5005実測図（１：40）　…… 39
図33　溝4030出土箒　…… 63
図34　溝4030出土縄　…… 63
図35　水制3410出土縄　…… 63
図36　流路3400出土炭化穀物塊　…… 64
図37　２・３・５区遺構変遷図１（１：1,000）　…… 67
図38　２・３・５区遺構変遷図２（１：1,000）　…… 68
図39　２・３・５区遺構変遷図３（１：1,000）　…… 69
図40　２・３・５区遺構変遷図４（１：1,000）　…… 70
図41　２・３・５区遺構変遷図５（１：1,000）　…… 71
図42　２・３・５区遺構変遷図６（１：1,000）　…… 72
図43　遺構変遷図７（１：1,200）　…… 74
図44　遺構変遷図８（１：1,200）　…… 75
図45　溝3185土器取上地区（１：500）　…… 77
図46　溝3185出土土師器皿・瓦器椀の口径・器高分布グラフ　…… 78
図47　溝3185出土土器の器種組成グラフ…… 79
図48　器種組成の割合の他遺跡との比較グラフ　…… 80

表　目　次

表１　遺構概要表　…… 14
表２　遺物概要表　…… 41
表３　銭貨出土遺構一覧表　…… 60

付　表　目　次

付表１　土器類一覧表 …… 139
付表２　瓦類一覧表 …… 170
付表３　木製品一覧表 …… 175
付表４　金属製品一覧表 …… 179
付表５　銭貨一覧表 …… 181
付表６　石製品一覧表 …… 183
付表７　土製品一覧表 …… 184

長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡

１．調査経過

本調査は、国土交通省 近畿地方整備局 淀川河川事務所による桂川大下津地区他掘削工事に伴う埋蔵文化財調査である。工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」とする）による試掘調査が行われ、工事計画地の一部（約15,000㎡）に遺構の存在が確認された。そのため、国土交通省 近畿地方整備局 淀川河川事務所から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を実施した。なお、発掘調査の指導範囲が広大であること、調査期間が非出水期に限定されることから、分割して調査を行っていく予定で、今回の調査は、令和３年度に実施した１次調査に続く２次調査にあたる。令和３年度の１次調査では、弥生時代から明治時代までの11時期の遺構面を確認し、各時期の遺構・遺物が存在していることが明らかとなった。

調査区は、調査予定地全体の遺構面の拡がりを把握する目的で、１次調査から継続する２区の西半部、２区北側の３区、調査予定範囲の北端の４区、調査予定範囲の南西隅の５区の４箇所設定した。調査面積は、２区西半が720㎡、３区が1,760㎡、４区が450㎡、５区が200㎡の計3,130㎡である。調査は、令和４年10月13日から開始した。まず、重機を用いて現代盛土および河川堆積層

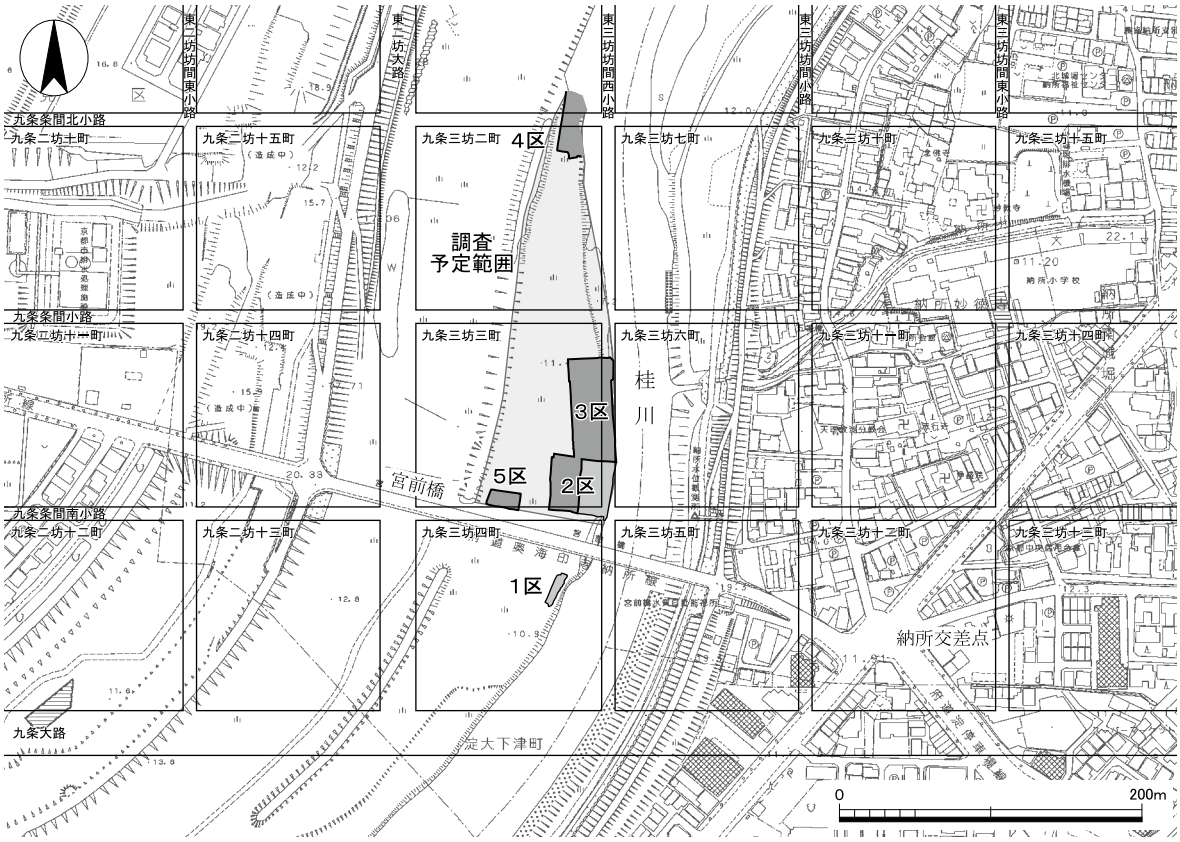


図１　調査位置図（１：5,000）

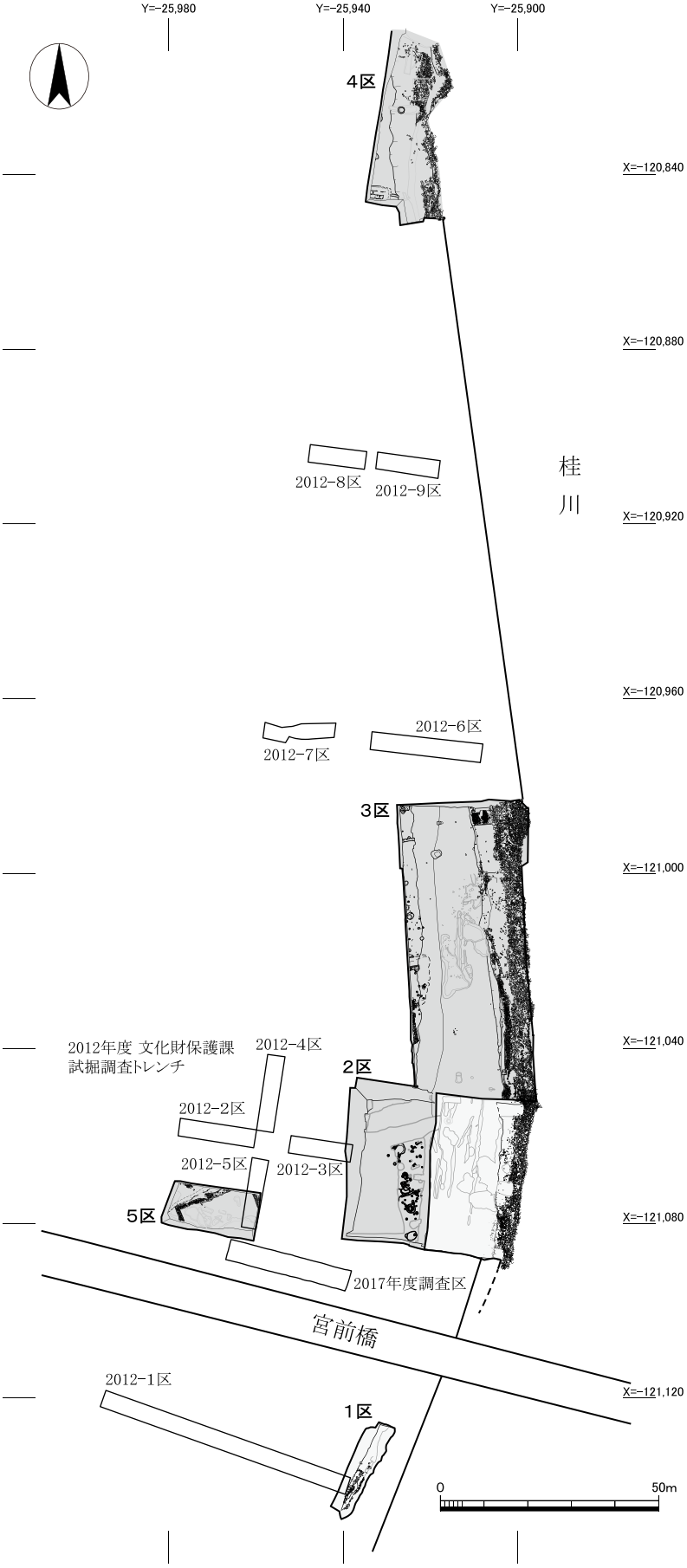


図２　調査区配置図（１：1,500）

を除去した後、人力で遺構の検出・掘り下げを行った。

２区ではⅪ期（弥生時代中期から後期）からⅣ期（室町時代後葉）までの７面７時期、３区ではⅪ期（弥生時代中期から後期）からⅠ期（江戸時代後半から明治時代）までの10面10時期、４区ではⅧ期以前（奈良時代以前）からⅠ期（江戸時代後半から明治時代）の８面９時期、５区ではⅩ期（古墳時代初頭）からⅠ期（江戸時代後半から明治時代）までの10面10時期の調査を行った。

３区は、１次調査の２区と同様に、調査区東半の上層部が現代に削平されており、西側が高く（上段）、東側が低い（下段）ため、西側と東側では調査開始面が異なる。西側では第１面（Ⅰ期）から、東側では第６面（Ⅵ期）から調査を開始した。

検出した遺構は、実測・写真・オルソ測量による記録を行った。記録作業の終了後、安全面を考慮して溝や井戸などの深い遺構の埋め戻しを行い、令和５年５月31日をもってすべての作業を終了した。調査中の令和５年３月４日には地元向け説明会を開催し、成果の公表に努めた。

図３　２区調査前全景（北西から）

図４　３区調査前全景（北西から）

図５　４区調査前全景（南から）

図６　５区調査前全景（南西から）

図７　３区重機掘削状況（南西から）

図８　２区作業状況（北から）

図９　ドローン撮影状況（西から）

図10　オルソ測量状況（北から）

図11　報道発表風景（南から）

図12　地元向け説明会風景（南西から）

図13　土層剥ぎ取り作業状況（南から）

図14　２・３区埋め戻し終了状況（南東から）

調査中は、適宜、文化財保護課の検査を受け、また検証委員である京都女子大学の梶川敏夫氏の検証を受けた。

また、調査中および報告書作成にあたり、以下の方々から御指導・御教示を得ました。記して感謝申し上げます。

網　伸也、大村拓生、小野映介、釜井俊孝、久保智康、西庄英晴、佐藤亜聖、清水みき、鋤柄俊夫、鈴木久男、鈴木康久、髙田　徹、竹本　晃、竹山真由子、谷　徹也、辻　康男、出口晶子、豊田裕章、中井　均、中西裕樹、西山良平、橋本清一、畑　大介、服部光真、馬部隆弘、平尾政幸、福島克彦、別所秀高、増田富士雄、丸山真史、美川　圭、三宅徹誠、三好志尚、森岡秀人、山中章、山村亜希、山本博則、横内裕人、吉川敏子、吉野秋二（五十音順、敬称略）

２．位置と環境

（１）地理的環境

調査地は、京都市伏見区淀水垂町地先に位置し、桂川右岸の河川敷である。現在は、調査地から、南西約2.5㎞のあたりで、北東から流れる桂川、東から流れる宇治川、南東から流れる木津川が収斂・合流し、淀川となり大阪湾へと流れる。また、調査地の位置する桂川の右岸は、西には標高200～400ｍ前後の西山山地がそびえ、それから派生する丘陵[1)]が東へ延び、段丘や扇状地、後背湿地を経て桂川となる。調査地は、京都盆地の最低部に位置する後背湿地であり、明治時代以前は、調査地付近で桂川・宇治川・木津川が合流し、巨椋池の影響も受けていたことから、水害頻発地ともなっていた[2)]。こうした水害の対策として複数回の河川の付替え・引堤工事などが行われ、現在の姿となっている。

（２）歴史的環境（図15）

調査地は、山背国乙訓郡（以下、乙訓地域と呼ぶ）の地にあたる。乙訓地域では、旧石器時代以降の遺跡が数多く存在している。ここでは主に本報告に関連する弥生時代以降の遺跡に注目する。

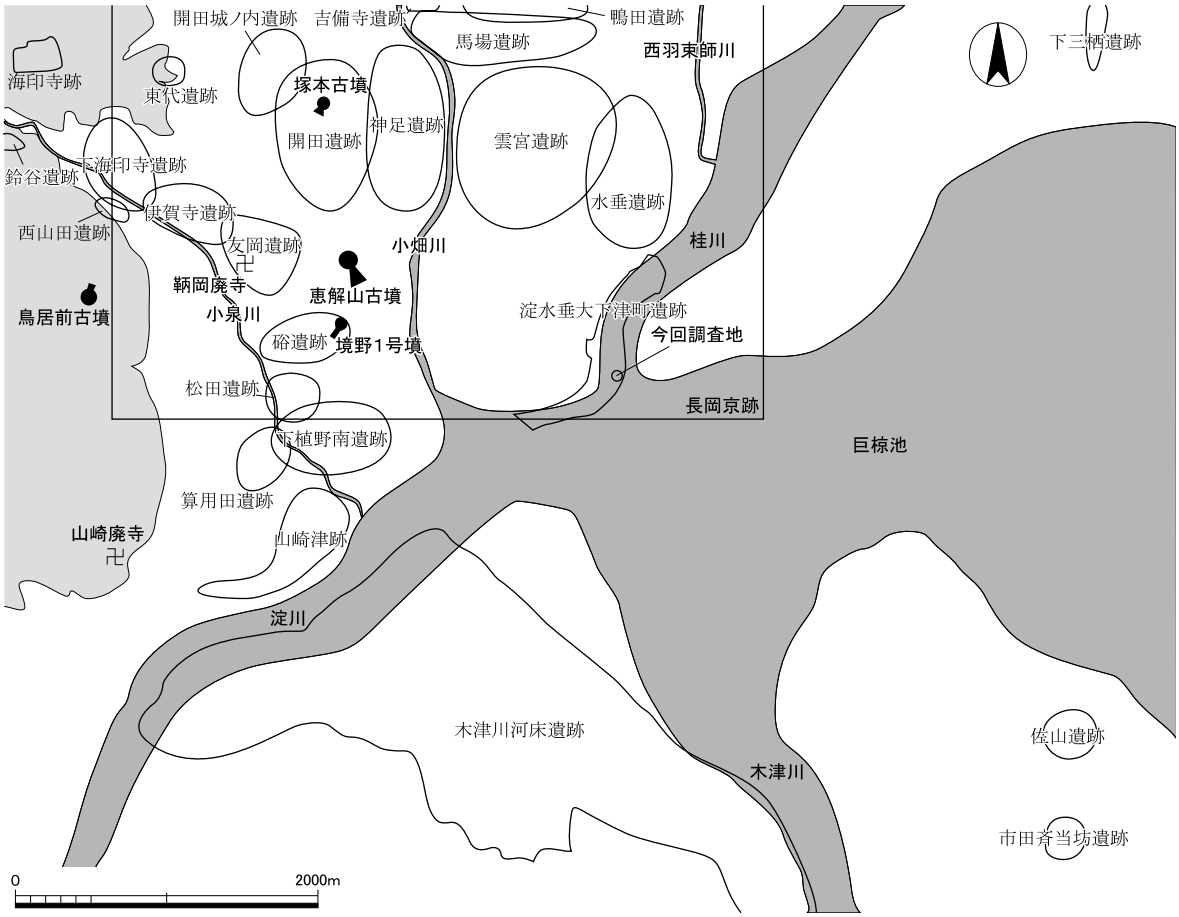


図15　周辺遺跡分布図（１：50,000）
（古代学研究会編『古墳時代から飛鳥時代へ　集落遺跡の分析からみた社会変化』六一書房　2017年　図５を参考に作成）

弥生時代から古墳時代

今回の調査地の約1.5㎞北西に位置する雲宮遺跡[3]では、弥生時代前期から居住が続き、布留式期初頭の外来系土器が多量に出土している他、石釧が出土しており、流通の結節点であったと考えられている[4]。また、雲宮遺跡に隣接する水垂遺跡は、古墳時代から飛鳥時代まで継続的に集落が営まれ、他地域系の土器が多量に出土していることや桂川近傍という立地条件から「津」的な機能が想定されている[5]。調査地の約４㎞南東の木津川右岸、現在の久御山町に位置する市田斉当坊遺跡や佐山遺跡でも弥生時代から古墳時代前期の竪穴建物が多数検出されており、外来系土器が多量に出土している。市田斉当坊遺跡では、未完成の勾玉、石包丁なども出土しており、拠点的な集落であったと考えられている[6]。木津川左岸から淀川左岸に広がる木津川河床遺跡も同様に庄内式期から布留式期の遺構・遺物が多数確認され、外来系土器の出土が目立つ。以上のように、今回の調査地周辺では、多くの遺跡で、桂川・宇治川・木津川の三川合流地という立地の特性を生かし、他遺跡・他地域との交流が行われていたと考えられ、特に古墳時代初頭にその動きが活発になる。

古墳時代前期には、桂川右岸域では大型古墳の造営が始まる。この地域での古墳の造営は、畿内政権との関係や庄内式期から定着していた在地集団とその生産力を基盤として達成されたと考えられている[7]。古墳時代中期以降も乙訓古墳群の恵解山古墳にみられるように大型古墳の造営が活発に行われ、山城全域では集落数が大幅に減少するが、雲宮遺跡・水垂遺跡では、集落が継続している。この時期は古墳の造営と集落の立地は対応関係が失われる。これは、被葬者の支配領域の拡大によるものという考えもある[8]。

飛鳥時代・奈良時代・長岡京期

飛鳥時代になると寺院の造営が始まる。向日市域の宝菩提院廃寺、長岡京市域の乙訓寺、鞆岡廃寺などがある。長岡京の条坊区割では、今回の調査区は、左京九条三坊二・三・四・五・六町と九条条間南小路・東三坊坊間西小路に該当する。これまでの発掘調査では、七条大路付近までは道路側溝が確認されているが、これより南では確認されておらず、今回の調査地付近まで条坊が及んでいたかは不明である。

平安時代

当地の地名でもある「淀」が文献資料において初出するのは、延暦23年（804）７月24日、桓武天皇が与等（淀）津に行幸する、という記事である（『日本後紀』延暦23年7月24日条）。平安京造営以前の長岡京期では、当地から約４㎞南西の大山崎の地が、陸路・水路の要地であることから山崎津が開かれていた。山崎津は、平安京遷都以後も淀津（与等津など表記は様々あるが、以下「淀津」と統一する）と共に交通の要衝として栄えた。山崎津がどのように衰退したのかについての詳細はわからないが、少なくとも室町時代以後の文献では多くが「山崎津」ではなく「山崎」や「大山崎」と記していることから、港湾機能はほとんど停止したと考えられている[9]。平城太上天皇の変（藤原薬子の変）の際には、淀津（与渡市津）に頓兵が置かれ（『日本紀略』大同５年９月11日条）、要衝として有事の際に重視されていたことがわかる。このように当地周辺は、平安時代初頭にはすでに上記に見られるように「津」と呼ばれる場所であったと考えられる。また、10世紀後

半には、検非違使が山崎・淀・今山崎で津廻を行い、津を管理する刀祢を勘問していたことが知られており、津に政所が置かれていたこともわかる[10]。特に淀津の津刀祢は、使庁官人の支配下にあり、津において主として交通上の取り締まりにあたり、院や摂関家などに対しては交通上の便宜を供与する存在であったとされる[11]。また、春日行幸や石清水行幸など平安京から移動する際には、淀で船に乗るなどの記録が多数残っており、淀が中継地となっていたことがわかる。11世紀末には、堀河天皇の春日行幸に際して、淀川南岸頭に頓宮御所が造営されている[12]。12世紀後半には石清水行幸の際に淀の浮橋で龍頭鷁首を浮かべ、宴が催されるなどしている[13]

また、「淀」や「淀津」に関しては、文献資料から、與杼神社が９世紀中頃には鎮座していたこと（『日本三大実録』貞観元年（859）正月二十七日条）、その場所が桂川右岸であること、11世紀に「東西淀」・「東淀」という表現が登場することなどから、古代において「淀」とは桂川右岸の大下津・水垂付近を指していたと考えられている[14]。また、淀姫大明神（與杼神社）の神宮寺である大徳寺も、寺伝では村上天皇（926～967）の勅許による千観内供の開基とされ、少なくとも10世紀には当地に存在していたようである[15]。

中世

先述のように、淀津は平安時代以降、平安京・京都の玄関口として栄えていたが、暦応４年（1341）には、下津に園城寺領の関が置かれており[16]、中世においても引き続き交通の要衝として繁栄していたことがわかる。また、下津には園城寺領の関だけでなく、高野山領と春日社領・興福寺領の関も置かれており、鎌倉時代後期から南北朝期にかけては、下津が中継機能の主要な部分を担い、中世後期になると対岸の島之内・納所が主要な中継機能を担うようになったと考えられている[17]。淀津の中継機能の管理は、石清水八幡宮の神人などが担っていたようである[18]。

淀の地は、大同５年に頓兵が置かれたように、古くから軍事上の要地としても注目されていた。城の存在が文献資料上で確認できるのは永正元年（1504）であるが、以後永禄２年（1559）の細川氏綱の淀城入城や、本能寺の変後に明智光秀が勝竜寺城と共に陣の両翼とするなど、「淀城（淀古城）」は、度々拠点とされていたことがわかる。さらにその後、豊臣秀吉が淀殿の産所とするために、天正16年（1588）に淀城（淀古城）の改修を行った。文禄３年（1594）に伏見城建設が決まると、淀古城は破却される。豊臣秀吉は、伏見城建設に伴う伏見港の整備、槙島堤など太閤堤の構築を行い、淀は地形的にも大きく変貌した。槙島堤の構築により宇治川が分離し、流路が変わったことで、納所は桂川と宇治川にはさまれ、納所の西でこの２川が合流するようになった。宇治川を通じて伏見の水運が発達するのに伴い、桂川右岸「西淀」よりも左岸「東淀」の納所が港湾宿駅の地として賑わうようになった[19]。

近世以降

当地が位置する淀水垂大下津町遺跡の範囲内では、おおよそ現在の宮前橋の北側が近世以降の水垂集落[20]、南側が大下津集落にあたる。17世紀後半に描かれた笹井家本『洛外図屏風』には集落の様子が描かれている。水垂村と下津村（現在の大下津）の間に與杼神社が鎮座し、うき田の森や大徳寺が描かれている。調査地の対岸で松平定綱が元和９年（1623）から築城を開始した淀城が、寛

永２年（1625）に完成し、それ以後、水垂集落は大下津や納所と共に城外町となった。水垂、大下津集落は、江戸時代を通じ、二十石（荷）船の基地として活況を呈し、淀川河川交通の拠点として栄えた[21]。また、対岸の納所との間には渡し船が運行されていた。納所町には、船着き場があり、これは朝鮮通信使も上陸したことから「唐人雁木」と呼ばれている。このように水垂集落を含む当地域は、荷揚げ港としての機能が伏見港に移って以後も、依然として交通の要衝としての役割を果たし、水運業に携わる人々が多く居住し、繁栄していたことがわかっている。明治４年（1871）の淀藩廃藩後は、群別に分散し、京都府の所属となった。その後、明治31年（1898）から行われた淀

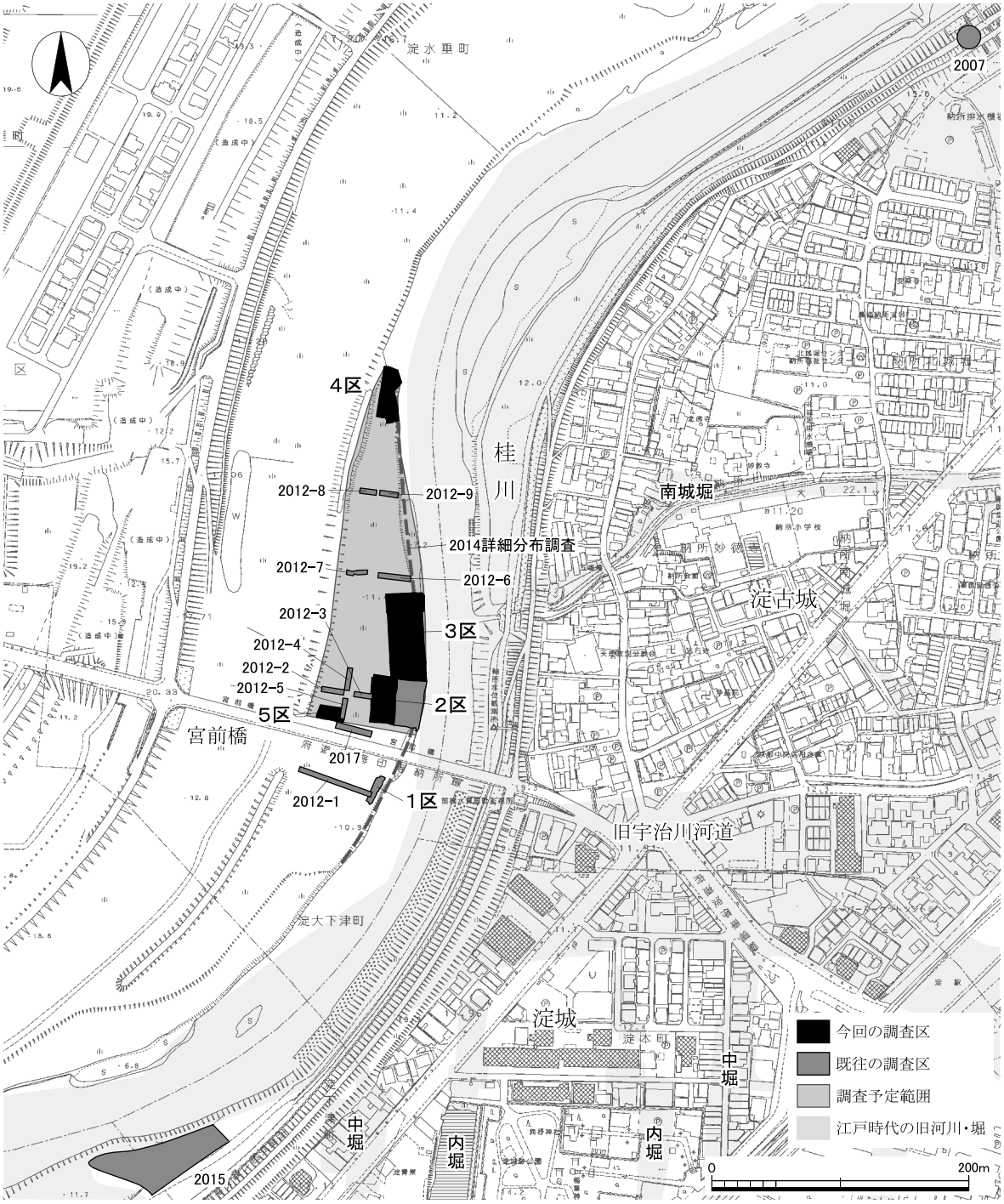


図16　周辺調査位置図（１：5,000）

川改修工事に伴い、水垂町は、約200ｍ西の新堤防上へ移転することとなった。また、宇治川で分断されていた納所と淀が陸続きとなった。平成18年（2006）には、国土交通省による桂川引堤事業に伴い、水垂町はさらに100ｍ西へ移転し、現在に至る。

（３）周辺調査（図16）

今回の調査地である桂川右岸の河川敷では試掘調査が１回、発掘調査が２回行われている。

2012年に今回の調査地近辺で行われた試掘調査[22]では、近世以降の地業（2012－３区）や石列（2012－５区）などを検出しており、これらの結果をもとに、発掘調査の指導がなされた。地業は１次調査２区の地業2135の西側延長部、石列は今回調査の５区の地業5003の一部であると考えられる。

2017年には、今回調査５区の南東部で発掘調査が行われている[23]。調査では、江戸時代前期の溝と道路を検出している。この道路は、2012－５区で検出した石列と同一直線上にあり、水垂集落内の道路と考えられている。

2021年には、今回の調査に先立つ１次調査が行われ、弥生時代から明治時代の遺構・遺物を確認した[24]。

また、対岸の桂川左岸では、2015年に今回調査地の約400ｍ南で発掘調査が行われている[25]。調査では、淀城の内高嶋に築かれた池、暗渠、石垣を確認している。これらの遺構は、江戸時代の淀城を描いた『山州御城府内之図』や『洛外図屏風』の内容と一致する。

その他、桂川左岸では、2007年に今回調査地の約700ｍ北東の地点で、納所排水樋門改築工事に伴い立会調査が行われている[26]。調査では、時期不明の石垣と飛鳥時代（７世紀中頃）の竪穴建物を検出している。

註

１）　地形分類については、『長岡京市史』資料編一　1991年　付図２　長岡京市域地形分類図を参照した。

２）　淺井良亮・大邑順三・植村善博「京都市淀、水垂・大下津地域における治水・水害史と淀川改良工事」『京都歴史災害研究』第14号　立命館大学歴史都市防災研究所　2013年　29～39頁

３）　『京都府遺跡調査報告書　第22冊　雲宮遺跡』 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1997年

４）　古川　匠「桂川右岸地域における古墳時代集落の動向（３）」『京都府埋蔵文化財情報　第118号』2012年
古川　匠「山城地域の古墳時代集落の動態」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』 同志社大学歴史資料館調査研究報告第14集　同志社大学歴史資料館　2017年

５）　古代学研究会編『古墳時代から飛鳥時代へ　集落遺跡の分析からみた社会変化』 六一書房　2021年

６）　『京都府遺跡調査報告書　第36冊　市田斉当坊遺跡』 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　2004年

７）　宇野隆志「京都盆地における古墳と集落の動態」木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』　同志社大学歴史資料館調査研究報告第14集　同志社大学歴史資料館　2017年

８）　前掲４　古川2017に同じ

９）　木村宏「淀津の盛衰と港湾機能の変遷」『人文地理』８巻６号　1957年　20～41頁

10）　『平記』天延２年（974）閏10月25日・26日

11）　小林保夫「淀津の形成と展開－淀十一艘の成立をめぐって－」『中世史研究』第９号　中世史研究会　1984年

12）　『中右記』永長２年（1097）２月10～12日

13）　承保３年（1076）から石清水行幸が年中行事化された。また、当初石清水行幸での浮橋の設置場所は山崎が利用されていたが、白河天皇の途中から淀へ変更されている。（大村拓生『中世京都首都論』吉川弘文館　2003年）。

14）　田良島　哲「〈研究ノート〉中世淀津と石清水神人」『史林』第68巻第４号　1985年　613～638頁

15）　大徳寺は、現在は桂川の引堤事業に伴い山科区へ移転している。

16）　『園城寺文書』暦応四年二月廿八日左近次郎助忠・南保三郎兵衛入道連署淀関務請文

17）　前掲14に同じ

18）　『疋田家文書』　永徳三年八月十一日など

19）　『京都市の地名　日本史地名体系27』　平凡社　1979年

20）　「水垂」という地名の表記は、文永７年（1270）に鳥羽殿を管理していた西園寺実兼に対して出された院宣が初出である。（「十一月付兵庫関悪党交名注進状案」『東大寺文書』）

21）　植村善博・大邑順三編『京都南、移転集落、水垂の歴史と生活』　文理閣　2015年

22）　「Ⅵ　試掘調査一覧」　№125・126『京都市内遺跡試掘調査報告　平成24年度』　京都市文化市民局　2013年

馬瀬智光「Ⅳ－７　長岡京左京九条三坊三・四・六町跡・淀水垂大下津町遺跡（14A004）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成27年度』　京都市文化市民局　2016年

23）　金島惠一『長岡京左京九条三坊四町・淀水垂大下津町遺跡・與杼神社旧境内』　京都市埋蔵文化財研究所調査報告2017－９　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2018年

24）　松永修平・柏田有香・中谷正和『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』　京都市埋蔵文化財研究所調査報告2021－16　公益財団京都市埋蔵文化財研究所　2022年

25）　鈴木久史「Ｘ　長岡京跡第583次・淀城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成27年度』　京都市文化市民局　2016年

26）　『京都市内遺跡立会調査報告　平成20年度』　京都市文化市民局　2009年

３．遺　　構

（１）基本層序（図17・18）

報告書作成にあたり、遺構番号は、３区のものは3001～、４区のものは4001～、５区のものは5001～と振り直した。２区のものは１次調査からの続き番号を振った。

各調査区では、弥生時代中期から明治時代までの遺構面を確認した。各遺構面と対応する時期が調査区によって異なることから、混乱を避けるため、１次調査の成果に再検討を加え、遺跡全体でⅠ期からⅪ期の時期設定を行った。Ⅰ期は江戸時代後半から明治時代、Ⅱ期は江戸時代前半、Ⅲ期は室町時代末から安土桃山時代、Ⅳ期は室町時代後葉、Ⅴ期は室町時代中葉、Ⅵ期は平安時代後期から鎌倉時代、Ⅶ期は平安時代前期から中期、Ⅷ期は奈良時代、Ⅸ期は古墳時代後期から飛鳥時代、Ⅹ期は古墳時代初頭、Ⅺ期は弥生時代中期から後期である。

各調査区の遺構面がどの期にあたるかは図17・18の柱状図に記した。調査区ごとに、第○面〔△期〕と表記する。

以下、各調査区の基本層序を記す。

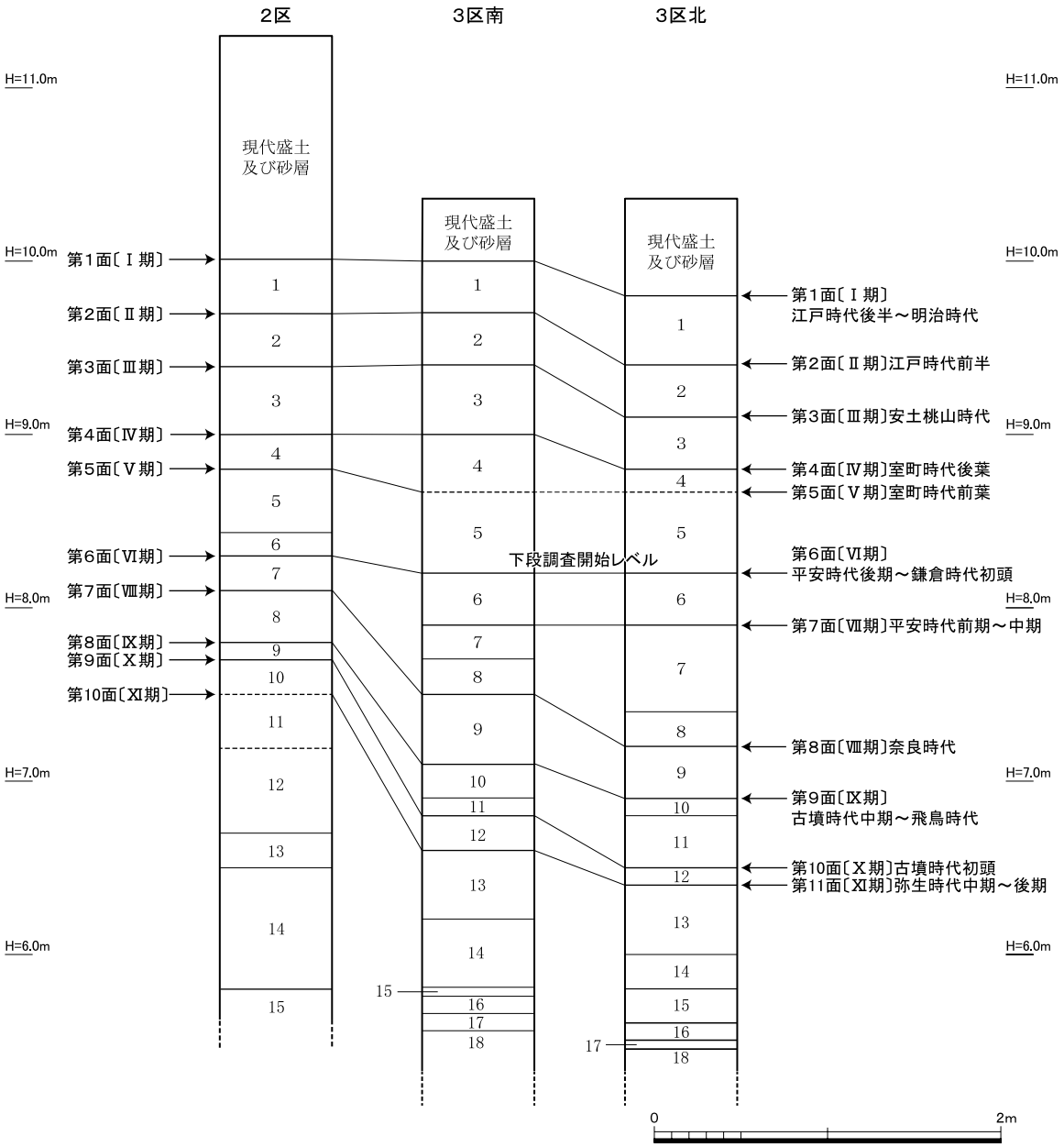
２区　現地表面の標高は、約11.3ｍである。１次調査で現地表から約2.2ｍの第３面〔Ⅲ期〕まで調査を終了しており、今回は第４面〔Ⅳ期〕（室町時代後葉）から調査を開始した。

第４面上面の標高は約9.0ｍである。これ以下約0.7ｍ、標高約8.3ｍまではシルトを主体とし、炭や土器片が混じる人為的な盛土による整地層で、標高約9.0ｍで第４面〔Ⅳ期〕、約8.8ｍで第５面〔Ⅴ期〕の調査を行った。

標高8.3ｍ以下は粘土～細砂の自然堆積層で、標高約8.3ｍで第６面〔Ⅵ期〕、約8.1ｍで第７面〔Ⅶ期〕、約7.8ｍで第８面〔Ⅸ期〕、約7.7ｍで第９面〔Ⅹ期〕、約7.5ｍで第10面〔Ⅺ期〕の調査を行った。それ以下は無遺物層である。Ⅶ期に該当する遺構面は２区では確認できなかった。

３区　遺構面の削平がない調査区西側を上段、遺構面の削平を受けた東側を下段とする。現地表面の標高は、上段が約10.3ｍ、下段が約8.5ｍである。各遺構面の標高は南に対して北が低くなるため、ここでは北端を基準に層序と遺構面の関係を述べる。現地表面から約0.6ｍまでが現代盛土および現代河川堆積物の砂層である。これ以下約1.6ｍ、標高約8.2ｍまではシルトを主体とし炭や土器片が混じる人為的な盛土による整地層である。上段では、標高約9.8ｍで第１面〔Ⅰ期〕、標高約9.4ｍで第２面〔Ⅱ期〕、標高約9.1ｍで第３面〔Ⅲ期〕、標高約8.8ｍで第４面〔Ⅳ期〕の調査を行った。また、断面観察の結果、標高約8.7ｍで第５面〔Ⅴ期〕の検出が想定され、次年度以降に調査を行う予定である。

標高約8.2ｍ以下は、シルトと粘土を主体とする自然堆積層である。下段では、標高約8.2ｍで第６面〔Ⅵ期〕、標高約7.9ｍで第７面〔Ⅶ期〕、標高約7.2ｍで第８面〔Ⅷ期〕、標高約6.9ｍで第９面〔Ⅸ期〕、標高約6.5ｍで第10面〔Ⅹ期〕、標高約6.4ｍで第11面〔Ⅺ期〕の調査を行った。それ以下は、植物遺体からなるラミナが確認できる湿地性堆積の無遺物層である。



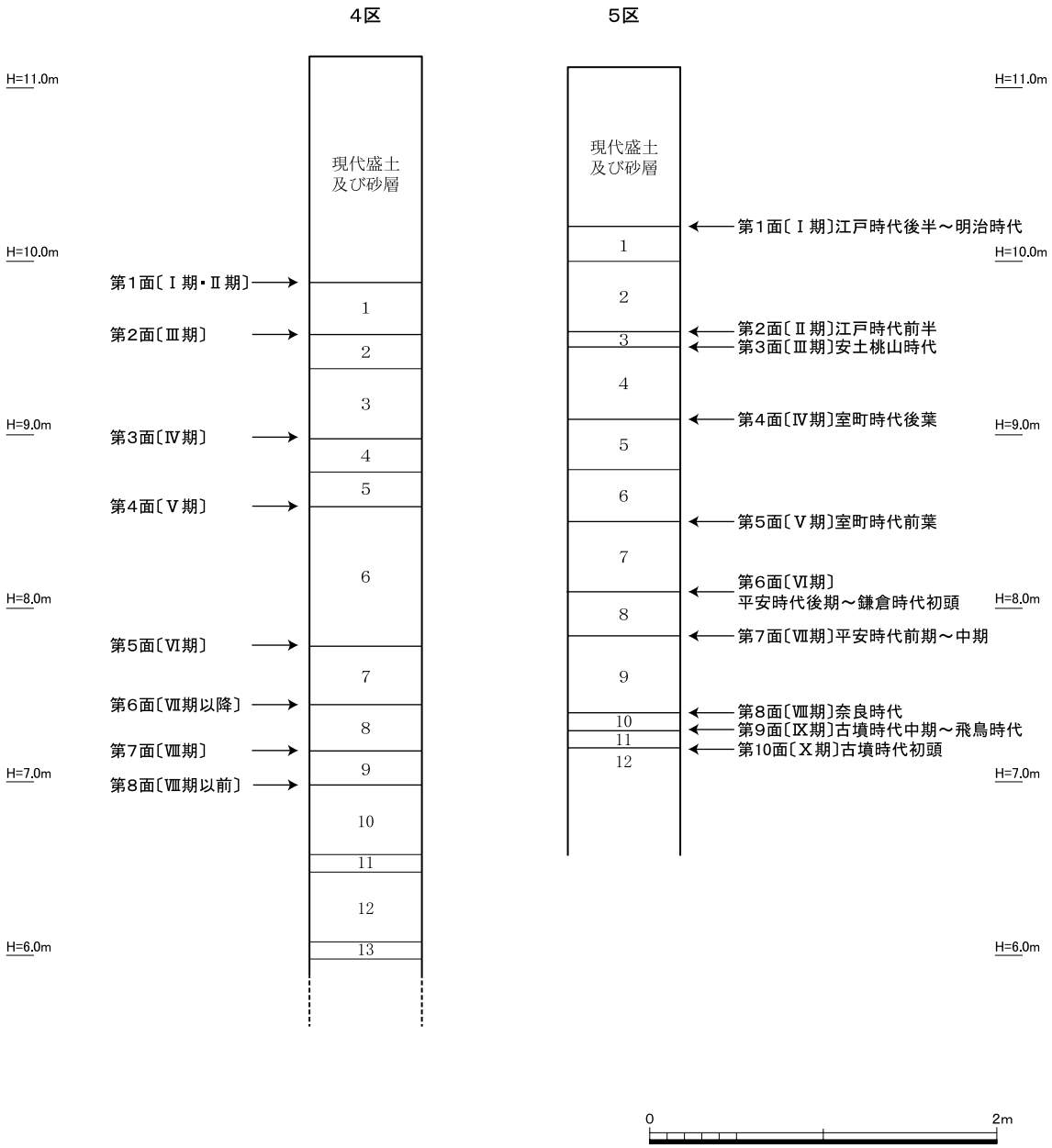
2区

1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 炭・土師器片含(第1面整地層)
2 2.5Y5/4黄褐色シルト 炭・土師器片含(第2面整地層)
3 10YR4/6褐色シルト 炭・土師器片含(第3面整地層)
4 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 炭・土師器片含(第4面整地層)
5 10YR5/4にぶい黄褐色シルト(第5面整地層)
6 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 土師器片含
7 2.5Y5/4黄褐色シルト 奈良時代頃の土師器出土(第6面基盤層)
8 2.5Y4/6オリーブ褐色粘土(第7面基盤層)
9 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 炭中量含(第8面基盤層)
10 5Y4/1灰色粘土(第9面基盤層)
11 5Y2灰オリーブ色シルト～粘土(第10面基盤層)
12 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 炭少量含
13 5Y4/2灰オリーブ色シルト 炭少量含
14 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
15 5Y4/1灰色シルト 土壌化層

3区

1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト(第1面整地層)
2 10YR5/3黄褐色シルト(第2面整地層)
3 2.5Y5/4黄褐色シルト(第3面整地層)
4 10YR5/4にぶい黄褐色シルト など(第4面整地層)
5 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘質 など(第5面整地層)
6 5Y4/2灰オリーブ色シルト(第6面基盤層)
7 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 粘質(第7面基盤層)
8 2.5Y5/2暗灰黄色シルト混じり極細砂 鉄分沈着
9 5Y3/2オリーブ黒色粘土(第8面基盤層)
10 10Y4/1灰色粘土混じりシルト 上位鉄分沈着 など(第9面基盤層)
11 7.5Y4/1灰色極細砂混じりシルト
12 10Y3/1オリーブ黒色シルト(第10面基盤層)
13 10Y2/1黒色シルト混じり粘土 土壌化進行(第11面基盤層)
14 10Y4/1黒色シルト混じり粘土
15 10Y3/1黒色粘土混じりシルト
16 10Y4/1黒色シルト混じり粘土 植物遺体からなるラミナ
17 5GY4/1暗オリーブ色シルト混じり粘土
部分的に植物遺体からなるラミナ
18 10Y4/1黒色粘土混じりシルト 植物遺体からなるラミナ

図17 2・3区土層模式柱状図（1：40）



4区

1　10YR5/2灰黄褐色シルト～細砂　炭・焼土・粗砂含（第1面整地層）
2　10YR4/2灰黄褐色シルト～極細砂
　炭・焼土多量、φ1～3cmの礫含（第2面整地層）
3　10YR4/1褐灰色シルト　炭少量、φ1～5cmの礫少量含（第2面整地層）
4　10YR4/1褐灰色シルト～極細砂　炭少量含（第3面整地層）
5　10YR3/1黒褐色シルト　炭少量含（第3面整地層）
6　2.5Y3/2黒褐色シルト～極細砂（第4面整地層）
7　2.5Y5/1黄灰色シルト～極細砂（第5面基盤層）
8　2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細砂（第6面基盤層）
9　2.5Y4/1黄灰色シルト～極細砂（第7面基盤層）
10　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト　最上部鉄分多量含（第8面基盤層）
11　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト　炭化植物多量含　ラミナあり
12　7.5Y4/1灰色粘質シルト　炭化植物層あり　ラミナあり
13　2.5Y3/1黒褐色粘土～シルト　炭多量含

5区

1　2.5Y5/3黄褐色極細砂～細砂　極粗砂・小礫含（第1面整地層）
2　2.5Y5/3黄褐色極細砂～細砂（第1面整地層）
3　2.5Y5/2暗灰黄色極細～細砂　小礫少量含（第2面整地層）
4　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト～極細砂
　φ1～3cmの礫、炭・焼土含（第3面整地層）
5　2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細砂
　粗砂・炭少量含　固く締まる（第4面整地層）
6　5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト
　φ1～5cmの礫少量含（第4面整地層）
7　2.5Y4/1黄灰色シルト　粗砂少量含　固く締まる（第5面整地層）
8　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂（第6面基盤層）
9　2.5Y5/2暗灰黄色シルト　固く締まる（第7面基盤層）
10　2.5Y3/1黒褐色シルト　やや粘質　土壌化（第8面基盤層）
11　2.5Y4/1黄灰色シルト
12　2.5Y4/1黄灰色粘質粘土～シルト　炭含（無遺物層）

図18　4・5区土層模式柱状図（1：40）

４区　現地表面の標高は、約11.2ｍである。調査区南端を基準に層序と遺構面の関係を述べる。現地表面から約1.3ｍまでが現代盛土および現代河川堆積物の砂層である。これ以下、約2.1ｍ、標高約7.8ｍまではシルトを主体とし炭や焼土が混じる人為的な盛土による整地層である。標高約9.9ｍで第１面〔Ⅰ・Ⅱ期〕、標高約9.6ｍで第２面〔Ⅲ期〕、標高9.0ｍで第３面〔Ⅳ期〕、標高約8.6ｍで第４面〔Ⅴ期〕の調査を行った。

標高約7.8ｍ以下は、シルト～極細砂を主体とする自然堆積層である。標高約7.8ｍで第５面〔Ⅵ

表１　遺構概要表

時　代	遺　　構				備 考
	２区	３区	４区	５区	
弥生時代中期～後期	土坑2440、落込2820、溝2781～2785・2790・2823	土坑3472			Ⅺ期
古墳時代初頭	竪穴建物2355・2770・2800、貯蔵穴2774、落込2392、土坑2769・2778、溝2841・2779	落込3464、溝3470		落込5071	Ⅹ期
古墳時代後期～飛鳥時代	柱列2740・2751、溝2180	畑3444、溝3425・3427・3451			Ⅸ期
奈良時代	柱列2702・2705	溝3428	柱列4099・4107	土坑5069、落込5070	Ⅷ期
平安時代前期～中期		流路3400、土坑3386・3412	柱列4085、溝4078	柱列5064	Ⅶ期
平安時代後期～鎌倉時代初頭	柱列2654・2694、溝2235・2688	溝3185・3190・3240、井戸3058、柱列3233、土坑3056・3147・3182・3392	溝4056、土坑4071、落込4069	溝5058～5060	Ⅵ期
室町時代	柱列2609・2636、溝2720、井戸2666、土坑2569、ピット2257	土坑3375、井戸3383	溝4047・4050・4057	井戸5028、礫敷5047、溝5050・5057・5072、柱穴5051～5053	Ⅳ・Ⅴ期
室町時代末～安土桃山時代	堀2123、溝2646	土坑3106・3206・3374・3385、溝3055・3100・3354	土坑4038・4043、柱穴4051	溝5025～5027、落込5037、ピット5041・5045	Ⅲ期
江戸時代～明治時代		護岸3001・3200・3473、水制3410・3430、土坑3036・3142・3156・3157・3161、柱穴3120・3134、地業3006・3007・3020、落込3050、井戸3057	護岸4001・4031、水制4035・4045、溝4030、流路4024、土坑4004・4011・4012・4029・4036、柱穴4009・4014～4016・4018・4019・4023・4032～4034・4041・4042、タタキ4025、地業4006	土坑5005、溝5010・5019・5021、落込5011、地業5002・5003	Ⅰ・Ⅱ期

期〕、標高約7.5ｍで第６面〔Ⅶ期〕、標高約7.2ｍで第７面〔Ⅷ期〕、標高約7.0ｍで第８面〔Ⅷ期以前〕の調査を行った。それ以下は、植物遺体からなるラミナが確認できる湿地性堆積の無遺物層である。

５区　現地表面の標高は、約11.1ｍである。現地表面から約0.9ｍまでが現代盛土および現代河川堆積物の砂層である。これ以下、約2.1ｍ、標高約8.1ｍまでは極細砂～細砂やシルトを主体とする人為的な盛土による整地層である。標高約10.2ｍで第１面〔Ⅰ期〕、標高約9.6ｍで第２面〔Ⅱ期〕、標高9.5ｍで第３面〔Ⅲ期〕、標高約9.1ｍで第４面〔Ⅳ期〕、標高約8.5ｍで第５面〔Ⅴ期〕の調査を行った。

標高約8.1ｍ以下は、シルトを主体とする自然堆積層である。標高約8.1ｍで第６面〔Ⅵ期〕、標高約7.85ｍで第７面〔Ⅶ期〕、標高約7.4ｍで第８面〔Ⅷ期〕、標高約7.3ｍで第９面〔Ⅸ期〕、標高約7.2ｍで第10面〔Ⅹ期〕の調査を行った。それ以下は、粘土～シルトの無遺物層である。

（２）２区の遺構

１）２区の概要

１次調査に引き続き、西半部の調査を行った調査区である。南北40ｍ、東西18ｍで、面積は約720㎡である。調査は、第４面〔Ⅳ期〕から開始し、第10面〔Ⅺ期〕までの７面の調査を行った。以下で時期ごとに主要な遺構について述べる。なお、２区ではⅦ期に該当する遺構面は確認していない。また、第10面の調査終了後に調査区南端で断割調査を行い、地形の形成過程を検討するため無遺物層に含まれる炭化材や生材の放射性炭素年代測定と古環境復元のため植物珪酸体分析を実施した。詳細は付章１を参照されたいが、２区南端の標高約6.85ｍの地点（年代試料№１）で2210 ^{14}C BP、標高約5.0ｍの地点（年代試料№３）で3045 ^{14}C BP、標高約4.1ｍ地点（年代試料№２）で3210 ^{14}C BPの年代値が得られている。植物珪酸体分析は、２区南端断割中の縄文時代晩期から弥生時代前期と推定される層から４箇所の試料を採取した。ネザサ節型やメダケ節型、ササ属型、ヨシ属、キビ属、ウシクサ属などの機動細胞珪酸体が検出されたが、イネ機動細胞珪酸体は検出されなかった。

２）第10面〔Ⅺ期〕の遺構（図版１・134）

土坑2440　調査区の南東端で検出した土坑である。検出規模は、南北約0.8ｍ、東西約0.3ｍ、深さ約0.15ｍである。１次調査で検出した土坑の西半部にあたる。弥生時代中期の土器や石器が出土した。

溝2781～2785・2823　調査区北半部で検出した南北方向の溝群である。検出規模は、長さ約1.2～９ｍ、幅約0.5ｍ、深さ0.1～0.3ｍである。遺構の主軸方位は北に対して約23～30度西に振る。遺物は出土していないが、第９面で検出した古墳時代初頭の溝2841、落込2392の底面で検出しており、これらの遺構より古いかもしくは同時期の遺構と考えられる。

溝2790（図19）　調査区南部で検出した東西方向の溝である。検出規模は、長さ約10ｍ、幅0.8～1.0ｍ、深さ約0.3ｍである。遺構の主軸方位は、東に対して約21度北に振る。１次調査で検出し

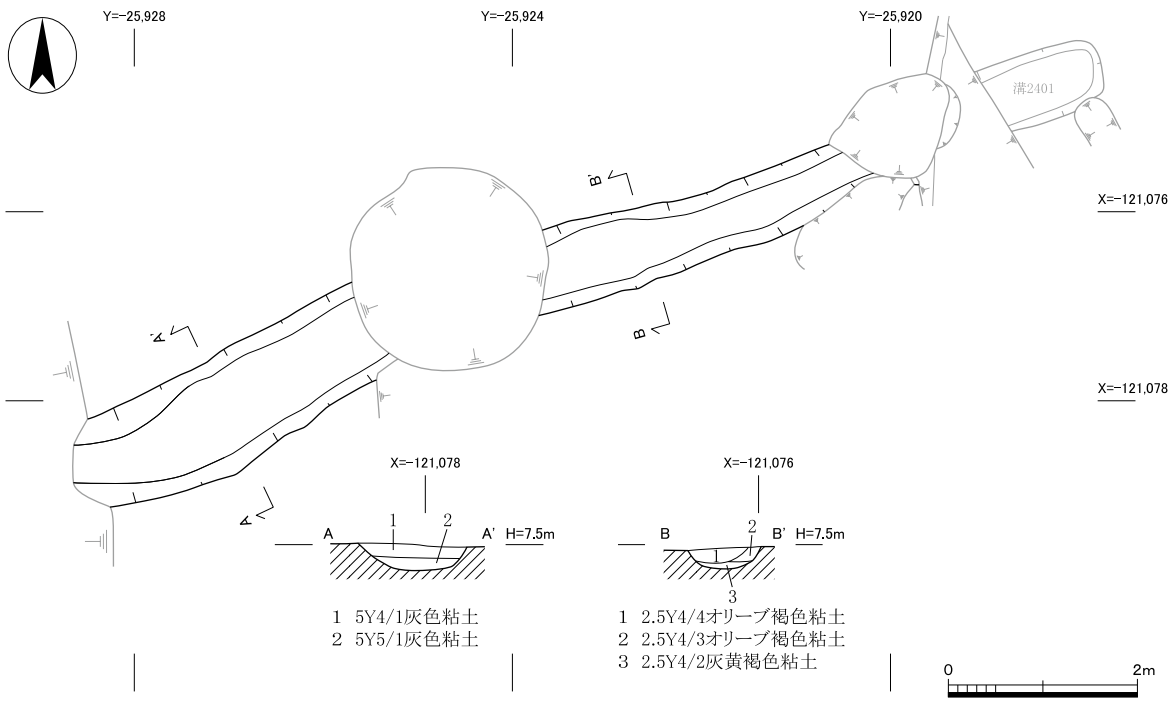


図19　溝2790実測図（１：80）

た溝2401から連続する。遺物は出土しておらず詳細な時期は不明だが、後述する古墳時代初頭の竪穴建物2355・2770との重複関係から、これらの竪穴建物よりは古い時期と考えられる。

落込2820　調査区南部で検出した南北方向の落込である。検出規模は、東西約３ｍ、南北約７ｍ、深さ約0.5～0.6ｍである。

３）第９面〔Ｘ期〕の遺構（図版２・134）

第９面〔Ｘ期〕では、竪穴建物を３棟検出した。３棟は重複しており、竪穴建物2800→2770→2355の順で建てられたことがわかる。

竪穴建物2800（図版13・135）　調査区南端で検出した平面隅丸方形の竪穴建物である。西半部を検出し、東半・南端は調査区外へ続く。検出規模は、一辺約６ｍ、深さ約0.1ｍである。建物の主軸方位は北に対して約28度西に振る。建物の壁際には壁溝が巡り、幅0.1～0.15ｍ、深さ約0.05ｍである。厚さ約0.05ｍの貼床を行う（Ａ－Ａ'、Ｂ－Ｂ'の５・６層）。床面上で、炉2837と主柱穴と考えられる柱穴2826・2827を検出した。また、１次調査で検出した柱穴2474も位置関係から、この竪穴建物の主柱穴の可能性が考えられる。炉2837は、平面円形で、径約0.6ｍ、深さ約0.1ｍである。埋土には焼土を含む。建物床面や炉2837から古墳時代初頭の土器が出土した。

竪穴建物2770（図版14・135）　調査区南部で検出した平面隅丸方形の竪穴建物である。東半部は竪穴建物2355に削平される。検出規模は、一辺約4.0ｍ、深さ約0.1ｍである。建物の主軸方位は北に対して約21度西に振る。建物の北・南壁際には壁溝が設けられる。幅0.1～0.15ｍ、深さ約0.05ｍである。主柱穴と考えられる柱穴2775～2777を検出した。掘形の径0.3～0.35ｍ、深さは0.25～0.3ｍである。

竪穴建物2355（図版15・136）　調査区南部で検出した平面隅丸方形の竪穴建物である。１次調

査で南東隅部を検出しており、今回延長部を検出した。検出規模は、一辺4.6～5.4ｍ、深さ約0.2ｍである。建物の主軸方位は北に対して約22度西に振る。建物の東・南壁際には壁溝が設けられる。幅0.15～0.2ｍ、深さ約0.15ｍである。部分的に厚さ0.05ｍ以下の貼床を行う。床面上で主柱穴と考えられる柱穴2771～2773、貯蔵穴2774を検出した。位置関係から、１次調査で検出した柱穴2365も主柱穴の可能性が考えられる。貯蔵穴2774は1次調査では土坑2361として報告している。主柱穴は、径0.4～0.5ｍ、深さ0.25～0.3ｍである。貯蔵穴2774は、平面楕円形を呈し、長径約1.25ｍ、短径約0.85ｍ、深さは約0.6ｍである。埋土に炭化物や土器片を含む。建物床面や貯蔵穴から古墳時代初頭の土器が出土した。また、貯蔵穴2774の南では平面隅丸長方形の土坑2506を検出した。１次調査で延長部を検出しており、規模は、長径約1.4ｍ、短径約0.5ｍ、深さは約0.2ｍである。竪穴建物と関連するものかは不明である。

落込2392（落込3464）（図20、図版136）　調査区北側で検出した東西方向の落込である。１次調査で検出した落込の西側延長部にあたる。また、３区の落込3464はこの落込の北肩部で、同一遺構である。調査区外西側と東側へ延びる。１次調査では落込2392は北側と南側の２つの単位を同一遺構として捉えていたが、今回の調査ではそれぞれ北側を落込2392、南側を溝2841とし、別遺構として扱った。落込2392と落込3464をあわせた規模は、長さ約34ｍ、幅約９～10ｍ、深さは0.3～0.6ｍである。遺構の主軸方位は東に対して約32度北に振る。古墳時代初頭の土器が出土した。

溝2841（図20、図版136）　調査区中央で検出した東西方向の溝である。検出規模は、長さ約16ｍ、幅約6.3ｍ、深さ約1.0ｍである。西側は調査区外へ続く。東側は１次調査で確認した落込2392の一部で、その南側に相当する。遺構の主軸方位は東に対して約32度北に振る。古墳時代初頭の土器が出土した。また、この時期の遺跡周辺の古植生を把握する目的で花粉分析と、堆積環境を復元するため珪藻分析を行ったが、花粉化石は採集されず、珪藻化石もわずかであった（付章１参照）。乾湿を繰り返す環境下にあった可能性が指摘されている。

溝2779（図20）　調査区北側で検出した東西方向の溝である。落込2392の南肩を掘り込んで掘削される。検出規模は、長さ約10.0ｍ、幅約1.1ｍ、深さは約0.4ｍである。

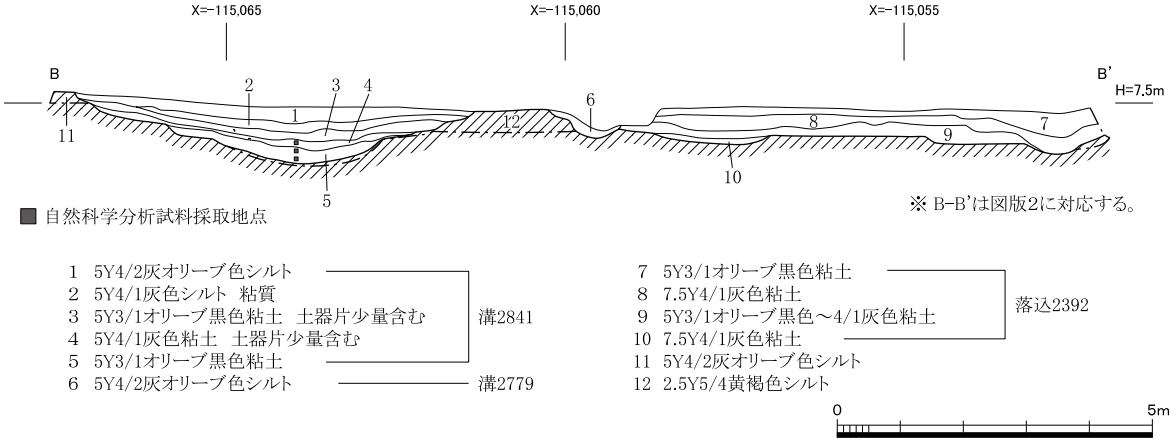


図20　落込2392、溝2779・2841断面図（１：120）

４）第８面〔Ⅸ期〕の遺構（図版３・137）

柱列2751（図版16、図版137）　調査区北東部で検出した南北方向の柱列である。２間分、柱穴３基を検出した。柱間は北から約2.6ｍと2.4ｍである。柱穴掘形の平面形は隅丸方形を呈し、一辺約0.5ｍ、深さは約0.2ｍである。遺構の主軸方位は、北に対して約33度西に振る。

柱列2740（図版16、図版137）　調査区中央で検出した南北方向の柱列である。４間分、柱穴５基を検出した。柱間は、北から1.8、1.8、2.3、2.3ｍである。柱穴掘形の平面形は隅丸方形を呈し、一辺0.6～1.0ｍ、深さ0.2～0.3ｍである。遺構の主軸方位は、北に対して約20度西に振る。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明だが、後述する溝2180との重複関係よりこちらの方が新しいため７世紀初頭以降と考えられる。

溝2180　調査区中央で検出した東西方向の溝である。検出規模は、東西約10.8ｍ、南北約3.8ｍ、深さは約0.2ｍである。遺構の主軸方位は、東に対して約32度北に振る。１次調査で検出した溝2180の延長部で検出したが、幅や深さが異なる。６世紀末から７世紀初頭の土器類が出土した。

５）第７面〔Ⅷ期〕の遺構（図版４・138）

柱列2702（図版17、図版138）　調査区南端で検出したＬ字状に並ぶ柱列で、南北２間、東西２間分を検出した。東西方向の柱列は、西側が１次調査で検出した堀2299・2350に削平されており、これより西に延長するかは不明である。南北柱列は、柱間が北から3.0、2.3ｍである。東西柱列は、柱間が西から2.0、2.1ｍである。柱掘形の平面形は隅丸方形または歪な円形で、径0.4～0.6ｍ、深さ0.25～0.3ｍである。遺構の主軸方位は北に対して約27度西に振る。時期が判別できる遺物は出土していない。

柱列2705（図17、図版138）　調査区南端で検出した東西方向に並ぶ柱列で、２間分、柱穴３基を検出した。柱間は西から1.7、1.8ｍである。柱掘形の平面形は隅丸方形で、径約0.6ｍ、深さ約0.3ｍである。遺構の主軸方位は北に対して約27度西に振る。

６）第６面〔Ⅵ期〕の遺構（図版６・139）

柱列2654（図版18）　調査区中央部で検出した南北方向の柱列である。５間分、柱穴５基を検出した。柱間は不等間で、北から0.8、1.5、2.7、2.5、2.2ｍである。柱掘形の平面形は隅丸方形または歪な円形で、径0.35～0.5ｍ、深さは0.25～0.35ｍである。遺構の主軸方位は北に対して約18度西に振る。

柱列2694（図版18）　調査区北東部で検出したＬ字状に並ぶ柱列である。南北１間、東西２間分を検出した。北側は調査区外へ延びる可能性があるが、東側への延長は確認できなかった。柱間は、南北が約2.6ｍ、東西が西から2.6、2.3ｍである。柱掘形の平面形は隅丸方形で、一辺0.5～0.7ｍ、深さは0.1～0.2ｍである。

溝2235　調査区北部で検出した東西方向の溝である。検出規模は、長さ約12.5ｍ、幅約1.8ｍ、深さ約0.2ｍである。遺構の主軸方位は、東に対して約34度北に振る。３区で検出した溝3190と同一遺構か。

溝2688　調査区北西部で検出した東西方向の溝である。検出規模は、長さ約4.6ｍ、幅約３ｍ、

深さ約0.8ｍである。溝の南側は溝2235に削平され、北側の大半は後述する溝2646に削平される。

７）第５面〔Ⅴ期〕の遺構（図版７・139）

柱列2609（図21）　調査区中央部で検出した南北方向の柱列である。４間分、柱穴５基を検出した。柱間は不等間で、北から2.0、1.8、1.2、1.0ｍである。遺構の主軸方位は北に対して約15度西に振る。柱穴掘形の平面形は隅丸方形または円形で、径0.3～0.5ｍ、深さは0.2～0.25ｍである。柱穴2616以外の４基には地下式礎石が据わる。

柱列2636（図21）　調査区北東部で検出した南北方向の柱列である。２間分、柱穴３基を検出した。柱間は不等間で、北から1.7、2.0ｍである。遺構の主軸方位は北に対して約18度西に振る。柱穴掘形の平面形は円形で、径約0.4ｍ、深さは約0.2ｍである。柱穴2637・2639には礎石が据わる。

溝2720　調査区中央部で検出した南北方向の溝である。検出規模は、長さ約13.4ｍ、幅約１ｍ、深さ約0.8ｍである。遺構の主軸方位は、北に対して約13.5度西に振る。溝の西半は、１次調査で検

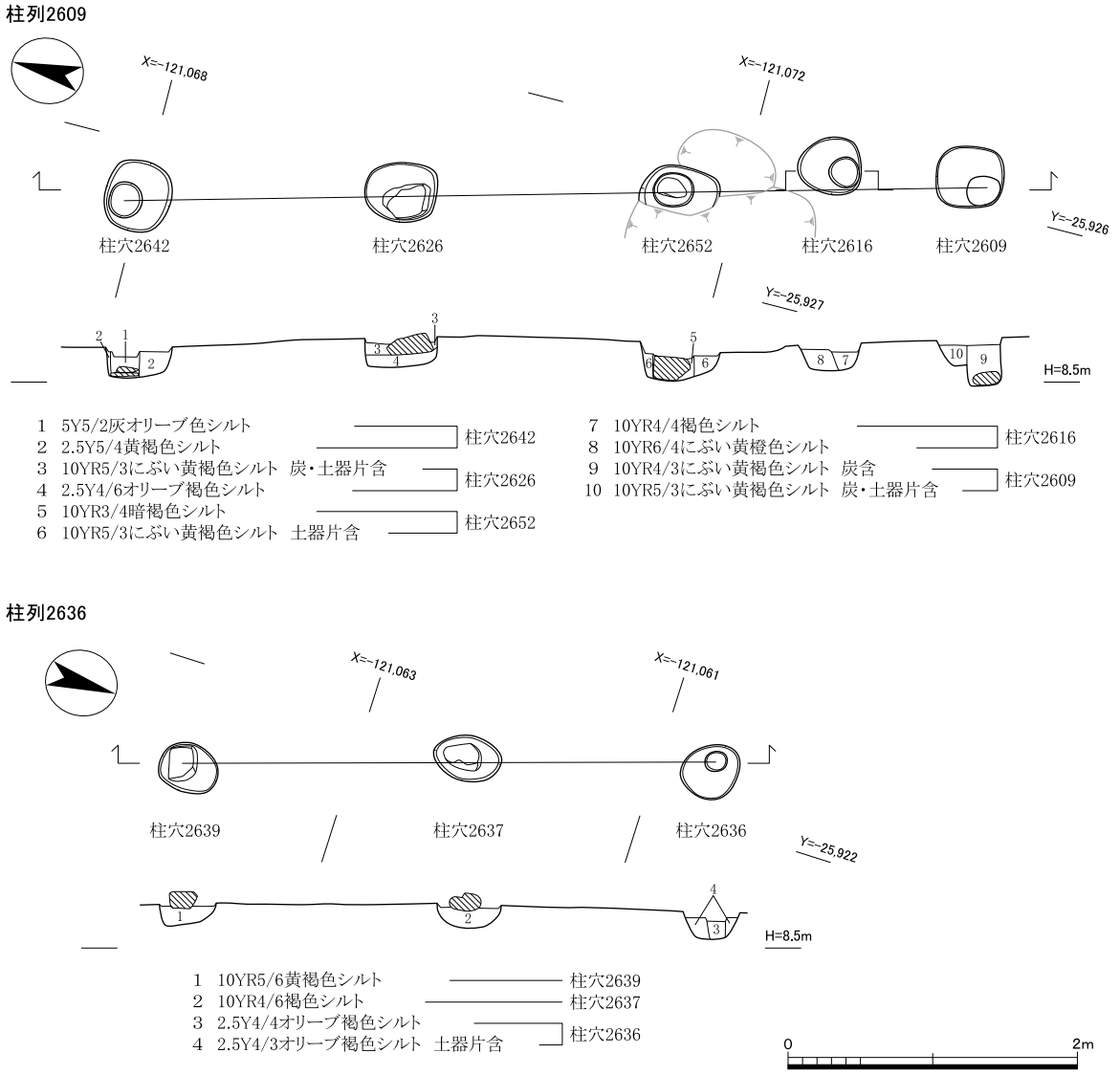


図21　柱列2609・2636実測図（１：50）

出した堀2299によって削平される。

８）第４面〔Ⅳ期〕の遺構（図版８・140）

井戸2666（図版19・140）　調査区南部で検出した円形石組の井戸である。検出規模は、掘形径2.0～2.1ｍ、内法約1.0ｍ、深さ約3.2ｍ、底面の標高は約5.1ｍである。石組は、標高5.7～8.0ｍの間で構築されており、5.7ｍ以下約0.6ｍは石組がなく、木枠が存在した可能性も考えられる。石材は径0.2～0.3ｍの川原石である。また、底面にも円形に石を配置している。底面は粘質土であり湧水層まで到達しておらず、水溜を目的とした井戸である可能性が考えられる。底面から約0.85ｍまでは自然堆積層で、井戸機能時に堆積したものと考えられる。廃絶時の埋土から室町時代後葉の土器類が出土している。

土坑2569　調査区南半で検出した土坑である。平面形は楕円形で、検出規模は短径約0.6ｍ、長径約0.7ｍ、深さは約0.2ｍである。有孔塼が出土した。

９）第３面〔Ⅲ期〕の遺構（図版９）

この時期の遺構面は、１次調査で調査済みであったが、今回検出した溝2646が、出土遺物の検討の結果、この時期に属することが判明したため、ここで報告する。

溝2646　調査区の北東隅で検出した東西方向の溝である。３区の溝3055とつながる一連の遺構である。詳細については３区の溝3055の項を参照。

（３）３区の遺構

１）３区の概要

２区の北側に位置する調査区である。調査区は、南北58～64ｍ、東西約30ｍで、面積は1,760㎡である。３区は、２区と同様に調査区の西側１/３以東が削平されて低くなっていることから、西側の上段部と東側の下段部に分けて調査を行った。上段は、第１面〔Ⅰ期〕から調査を開始し、第４面〔Ⅳ期〕までの４面を調査した。下段は第１面〔Ⅰ期〕から第11面〔Ⅺ期〕までの調査を行ったが、第１面～５面までは削平を受けるため、第６面で検出した遺構を、出土遺物の検討により、本来の成立面を推定してそれぞれの遺構面に振り分けた。その結果、下段では第４・５面〔Ⅳ・Ⅴ期〕に属する遺構は確認できなかった。以下で、時期ごとに主要な遺構について述べる。また、地形の形成過程を検討するため無遺物層に含まれる植物遺体を採取し、４箇所で放射性炭素年代測定を行った。詳細は、付章１を参照されたいが、３区北端部の標高約6.5ｍ地点（年代試料№４）で1880 ^{14}C BP、標高約6.4ｍ地点（年代試料№５）で2470 ^{14}C BP、３区中央部の標高約5.0ｍ地点（年代試料№６）で2965 ^{14}C BP、標高約4.8ｍ地点（年代試料№７）で3080 ^{14}C BPの年代値が得られている。

２）第11面〔Ⅺ期〕の遺構（図版１・141）

土坑3472（図22、図版141）　調査区南端で検出した土坑である。東半は削平されるが、平面形は隅丸方形と考えられ、検出規模は、一辺約0.6ｍ、深さ約0.3ｍである。弥生時代中期前葉の大型甕が上下逆さにして埋められていた。

３）第10面〔Ⅹ期〕の遺構（図版２・142）

落込3464　調査区南部で検出した落込である。２区の落込2392から連続する同一遺構で、北肩部に相当する。詳細については２区落込2392を参照。

溝3470　調査区南端で検出した東西方向の溝である。検出規模は長さ約6.8ｍ、幅約0.4ｍ、深さ0.1～0.2ｍである。古墳時代初頭の土器が出土した。

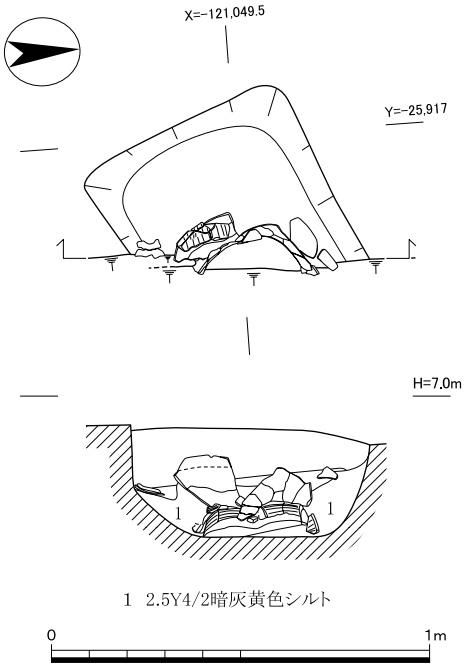


図22　土坑3472実測図（１：20）

４）第９面〔Ⅸ期〕の遺構（図版３・142）

畑3444（図版143）　調査区南半で検出した畑と考えられる遺構である。検出できたのは畝間の溝で、６条の南北方向の溝がおおむね等間隔で並ぶ。溝の検出規模は、長さ約1.5～３ｍ、幅0.2～0.4ｍ、深さ約0.1ｍである。遺構の主軸方位は北に対して約37度西に振る。また、この畑3444より北は地形が緩やかに低くなっていく。古墳時代後期と考えられる堆積層を対象に古環境復元を目的とし植物珪酸体分析を行ったところ、イネ機動細胞珪酸体が水田土壌の目安に近いもしくは上回る数が検出された（付章１参照）。畑3444より北側に水田が存在していた可能性がある。

溝3451（図版143）　調査区南部で検出した東西方向の溝である。検出規模は、長さ約５ｍ、幅約0.8ｍ、深さ約0.5ｍである。古墳時代前期から中期の土器が出土した。また、この時期の遺跡周辺の古植生を把握する目的で花粉分析を行ったが、花粉化石が検出されなかった。

溝3425　調査区中央部で検出した東西方向の溝である。検出規模は、長さ約11.0ｍ、幅0.4～1.0ｍ、深さ約0.15ｍである。

溝3427　調査区中央部で検出した東西方向の溝である。検出規模は、長さ約11.0ｍ、幅0.8～1.0ｍ、深さ約0.25ｍである。

５）第８面〔Ⅷ期〕の遺構（図版４・144）

溝3428（図版25・144）　調査区南半で検出した東西方向の溝である。検出規模は、長さ約８ｍ、幅約1.1ｍ、深さ約0.6ｍである。溝の東端は後述する流路3400に削平され、西側は調査区外へ続く。遺構の主軸方位は、東に対して約30度北に振る。南肩部から奈良時代の須恵器細頸壷が出土した。また、この時期の遺跡周辺の古植生を把握する目的で花粉分析を行ったが、花粉化石は検出されなかった（付章１参照）。

６）第７面〔Ⅶ期〕の遺構（図版５・145）

流路3400（図版26・145）　調査区南半で検出した北西から南東方向の流路である。検出規模は、長さ約16ｍ、幅約11ｍ、深さ約1.65ｍである。東側は江戸時代の護岸に削平され、西側は調

査区外へ続く。埋土の下部にはラミナなどの流水の痕跡を確認しており、機能時には水が流れる環境であったと考えられる。しかし、砂礫や粗粒砂からなる河床堆積物は堆積しておらず、これら堆積物の検討からは、氾濫流路に相当すると指摘されている（付章１（１）参照）。流路の底部の標高は、北西から南東方向に向かって低くなる。遺物については、大きく第１～７層に分けて取り上げを行った。第１層（図版26以下同　32～34層）、第２層（35～39層）、第３層（40～43層）、第４層（44～52層）、第５層（53～57層）、第６層（58～62層）、第７層（63～67層）である。遺物は、奈良時代から平安時代中期の土器類のほか、重圏文軒丸瓦や木製品、金属製品、皇朝十二銭が出土しており、おおむね下層から上層にかけて時期が新しくなる。また、第７層では、埋土に青くリン化した骨片が多く含まれていることを確認しており、特にウシやウマなどの骨が多く出土している。骨は、全体的に残存状況は良くないが、比較的良好に残存している骨の中には解体痕が見られるものもある。出土した骨などの詳細については、付章２を参照されたい。また、この時期の遺跡周辺の古植生を把握する目的で花粉分析、周辺の植生や利用植物を明らかとするため大型植物遺体分析を行った。詳細は付章１を参照されたいが、花粉分析では、マツ属複維管束亜属やスギ属、コナラ属アカガシ亜属が目立ち、ニヨウマツ林やスギ林、カシ林などが分布していたと考えられる。また、堆積環境を示す好湿性植物やソバ栽培の可能性を示すソバ属の花粉も得られている。大型植物遺体の分析では、栽培植物のイネやメロン仲間、ナスがみられ、野生の草本植物では湿性～抽水植物のヘラオモダカやイボクサなど、乾いた場所に生育するエノコログサ属やキケマン属など、木本植物ではマツ属複維管束亜属とブドウ属、カジノキ属が産出したほか、林縁に生育するノブドウも得られている。

土坑3412（図版25）　調査区南部、流路3400の南側で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、検出規模は、長径約0.6ｍ、短径約0.45ｍ、深さ約0.1ｍである。口縁部を欠く灰釉陶器の壷が出土した。時期は平安時代前期か。埋納遺構の可能性も考えられる。

土坑3386（図版25）　調査区北部で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、検出規模は、長径約1.15ｍ、短径約0.5ｍ、深さ約0.15ｍである。土師器皿や黒色土器が出土した。時期は平安時代中期。

７）第６面〔第Ⅵ期〕の遺構（図版６・146）

土坑3056（図版27・147）　調査区中央部で検出した土坑である。平面形は歪な円形で、検出規模は、径約1.8ｍ、深さ約1.4ｍである。上層には瓦類が大量に投棄されており、その直下には、幅約４～５㎝の薄い針葉樹の樹皮を敷き、さらにその下はほとんど遺物の混じらないシルト質の土で埋められていた。出土遺物の大半は瓦類で、土器類はわずかである。時期は12世紀後葉。

土坑3182（図版27）　調査区南西隅で検出した土坑である。平面形は隅丸方形で、検出規模は、一辺0.75～0.9ｍ、深さ約1.3ｍである。出土遺物の大半は瓦器で、土師器は少量出土した。時期は12世紀後半。

土坑3392（図23・147）　調査区北西隅、上段部の室町時代の遺構底面で検出した土坑である。平面形は円形で、検出規模は、径約0.45ｍ、深さ約0.2ｍである。上層からは土師器皿や壷が正位

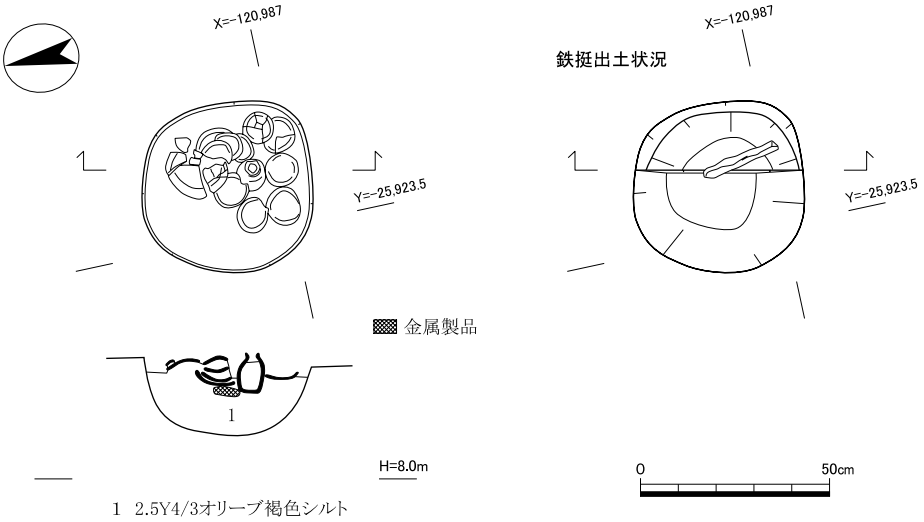


図23　土坑3392実測図（１：20）

置に据えられた状態で出土した。下層からは鉄挺と考えられる鉄製品が出土した。遺物の出土状況から埋納遺構の可能性が考えられる。時期は12世紀後半。

土坑3147（図版26）　調査区南部で検出した南北に長い不定形の土坑である。検出規模は、南北約16ｍ、東西約６ｍ、深さ約0.15ｍである。溝3240の直上に位置する土坑で、埋土からは土師器や瓦器などの土器類がまとまって出土した。時期は12世紀後葉。

井戸3058（図版27）　調査区南部で検出した素掘り井戸である。平面形は歪な円形で、断面形は２段に落ちる形状である。検出規模は、径約1.9ｍ、深さ約1.3ｍ、底面の標高は約6.4ｍである。底部は粘質土であり湧水層までは達していない。時期は12世紀後半。

柱列3233（図版28）　調査区南東部で検出した南北方向の柱列である。４間分、柱穴５基を検出した。柱間は不等間で、北から1.8、1.8、2.0、1.9ｍである。柱掘形の平面形は円形で、検出規模は、径0.3～0.7ｍ、深さは0.3～0.4ｍである。柱穴3233からは土器類がまとまって出土した。時期は12世紀後葉。

溝3185（巻頭図版２、図版26・29～31・146）　調査区東半で検出した南北方向の溝である。検出規模は、長さ約40ｍ、幅1.6～3.4ｍ、深さ１～1.3ｍである。溝はX=－121,020付近で屈曲する。遺構の主軸方位は、屈曲点以北では北に対して約22度東に、以南では北に対して約30度西に振る。溝の南北端は、ともに江戸時代の護岸によって削平され失われている。また、溝の西肩口から底部にかけて、多量の土師器や瓦器が出土した。土器が多量に出土する層位は２層（図版26－19・22層）あり、19層より上を上層、20層以下を下層として遺物の取り上げを行った。出土した土器類の個体数は千点を超えるが、９割以上が土師器皿、瓦器椀・皿などの供膳具であり、羽釜などの煮炊具や輸入陶磁器の出土数は少ない。遺物の詳細は５－（２）を参照されたい。土器類はいずれも、溝の西肩口から底部にかけて集中して出土しており、溝の西側から投棄されたと考えられる。土器は完形のものや使用痕が確認できない個体が多い。時期は上層下層ともに12世紀後半である。また、Ｄ－Ｄ'セクション（図版31）の断面観察では、２回の掘り直しが確認できる。他断面では確

認できなかったため、これが部分的なものかは不明である。

また、この溝の堆積環境を明らかとするため珪藻分析、溝周囲の古植生と利用植物を明らかとするため大型植物遺体分析、この時期の遺跡周辺の古植生を把握する目的で花粉分析を行った。詳細は付章１を参照されたいが、珪藻分析では、珪藻が多く産出され、溝内が湿潤ないし水没した状態にあったことが判明した。また、分析したすべての層位（図版26の■）において、閉鎖的で水が滞水することなく流下していく状態にあったと推定されている。土器群の直上には、部分的に洪水層を考えられる砂礫層が確認でき（図版31－９～11層）、河川が近接するなど環境変化があった可能性が考えられる。大型植物遺体分析では、栽培植物のイネや畑作物のカキノキやオオムギ、アサ、メロン仲間、ナス、ゴマが得られ、溝周辺で利用された後、種実が流れ込んだり廃棄された可能性が指摘されている。イネには籾殻や炭化籾、炭化籾殻、炭化種子が産出している。草本植物は、湿性～抽水植物、やや湿った環境に生育するもの、乾いた場所に生育するもの各種が得られ、キイチゴ属やクリ、サンショウ属などの木本植物が産出している。花粉分析では、エノキ属－ムクノキ属とトチノキ属の産出が見られるが、図版26の25層以上の層準では産出しないため、分布が縮小し、代わって増加するヤナギ属が分布を広げていたと指摘されている。草本花粉はイネ科やヨモギ属の産出が目立ち、図版26の27層以上の層準ではアカザ科－ヒユ化の産出率が微増し、これ以降に分布が拡大した可能性が指摘されている。その他、好湿性植物や栽培植物のソバ属の花粉も得られている。

溝3240（図版26・149）　調査区南部で検出したＬ字型に曲がる溝である。東端は溝3185と接続する。検出規模は、長さ約13ｍ、幅約2.4ｍ、深さ約0.5ｍである。土師器、瓦器がまとまって出土した。時期は12世紀後半。

溝3190　調査区南端で検出した東西方向の溝である。検出規模は、長さ約11ｍ、幅0.9～２ｍ、深さ約0.15ｍである。遺構の主軸方位は、東に対して約30度北に振る。東側は江戸時代の護岸に削平され、西端は室町時代の溝3055に削平される。２区の溝2235と連続する遺構の可能性がある。

８）第４面〔Ⅳ期〕の遺構（図版８・148）

土坑3375　調査区上段中央部西端で検出した土坑である。西半は調査区外へ続く。平面形は歪な円形で、検出規模は、径約0.75ｍ、深さ約0.3ｍである。時期は15世紀後葉から16世紀初頭。

井戸3383　調査区上段北端で検出した井戸である。平面形は隅丸長方形で、検出規模は、長径約4.4ｍ、短径約3.5ｍ、深さ約1.1ｍである。枠構造は確認できなかった。底部は作業の安全性を確保したため確認していない。

９）第３面〔Ⅲ期〕の遺構（図版９・148・149）

溝3100（図26・31）　調査区の東部で検出した南北方向の溝である。検出規模は、長さ約40ｍ、幅2.2～2.6ｍ、深さ約0.75ｍである。３区下段に位置し、本来の遺構成立面は現代に削平されていることから、元の幅や深さはさらに大きく深いものであったと推測される。南北共に調査区外東方向へ延長するが、江戸時代の護岸3200の構築によって失われている。X＝－121,020付近で屈曲しており、遺構の主軸方位は北側では、北に対して約４度東に、南側では約29度西に振る。底面の標

高は、北で約7.25ｍ、中央部で約7.22ｍ、南で約7.3ｍで、明確な勾配はない。埋土はシルト～極細砂の粒子の細かな堆積土がレンズ状に層を成して堆積する。埋土からは、完形の羽釜や輸入陶磁器の皿、漆器椀などが出土している。時期は16世紀中葉頃である。

また、この溝の堆積環境を明らかとするため珪藻分析、この時期の遺跡周辺の古植生を把握する目的で花粉分析を行った。詳細は付章１を参照されたいが、珪藻分析では、珪藻が多く産出し、溝内が湿潤ないし水没した状態にあったと判断される。ただし、河川や湖沼沼沢を指標する珪藻は多くなく、陸生珪藻や高層湿原、淡水底生が多く見られることから、止水域ではないが、水の交換が頻繁ではない堆積域が推定されている。断面観察でも明瞭なラミナは確認できず、一時的に水が滞水することがあっても、常時水流がある環境ではなかったと推測される。花粉分析ではマツ属複維管束亜属やスギ属、コナラ属アカガシ亜属の産出が目立つほか、エノキ属－ムクノキ属やイボタノキ属の産出率が高く、また草本花粉ではイネ科やヨモギ属の産出が多く、好湿性植物のミズアオイ属やキカシグサ属、栽培植物のソバ属なども得られている。

溝3055（図版20・32・149）　調査区南部で検出した東西方向の溝である。２区の溝2646とつながる。溝2646とあわせての検出規模は、長さ約33ｍ、幅約４ｍ、深さ約2.4ｍである。底面の標高は、３区西端で約7.15ｍ、３区東で約7.1ｍで、西から東にわずかに低くなる。東西共に調査区外へ延長するが、東側は江戸時代の護岸3200によって削平される。遺構の主軸方位は、東に対して約14度北に振る。埋土は粘土からシルトで、ラミナが確認できる層が複数あり（図版20－142・143・148）、流水があったと考えられる。埋土からは土器や漆器に加えて、「永正十四年」や「天文三年」の紀年銘が記された卒塔婆のほか、転読札や祈祷札が出土している。遺物の時期は、15世紀後葉～16世紀代のものが主体であるが、最上層の洪水層と考えられる砂層（図版20－107・108層）からは17世紀代の土器類が出土する。この頃まで窪地として残り、江戸時代前期以降の洪水によって最終的に埋没したと考えられる。

土坑3374（図版32）　調査区上段北半部西端で検出した土坑である。第４面で検出したが、断面観察により、第３面で成立していることを確認した。検出規模は、径約２ｍ、深さ約１ｍであるが、実際の規模は径約2.5ｍ、深さは約1.4ｍに復元できる。断面形状は上部がやや擂鉢形を呈し、下部は箱形を呈する。

土坑3206　調査区上段北端で検出した土坑である。平面形は隅丸方形で、検出規模は、一辺3.6～3.7ｍ、深さ約0.6ｍである。中央付近に一部レンズ状に黒褐色シルトが堆積する。遺物は小片のみである。

土坑3385（図版32）　調査区南西隅で検出した土坑である。平面形は楕円形で、検出規模は、長径約1.6ｍ、短径約1.1ｍ、深さ約0.85ｍである。北側は溝3055によって削平される。瓦器羽釜や木片が出土した。

10）第２面〔Ⅱ期〕の遺構（図版10・148・150）

第２面の遺構は、下段で江戸時代前期の護岸遺構の一部を検出した。上段では、多数の土坑や柱穴、溝などを検出した。柱穴には礎石を据えるものがある。調査面積が限定されたため、建物とし

てのまとまりを捉えることはできなかった。

護岸3473（図24、図版24・150）　調査区北東部隅で検出した南北方向の旧桂川護岸である。検出規模は、長さ約３ｍ、幅約４ｍ、高さ約1.1ｍである。江戸時代後期の護岸3200の構築や河川の水流によって削平されたと考えられ、部分的にしか遺存しないが、調査区北壁断面12層（図版24）が護岸3473の構築土の一部と考えられ、調査区北側へ続く可能性がある。構造は、拳大の円礫を斜面に敷き、その前面に杭を打ち込み、斜面の裾部には人頭大の石を据える。傾斜角度は約25度である。ただし、この円礫が露出する構造は川の流れに対して弱いと考えられ、石が流出する可能性があることから、土などで覆われていた可能性もある。この護岸の機能時の構造については今後の検討課題である。護岸の覆土からは17世紀代の土器類などが出土している。

柱穴3120・3134　調査区上段北端で検出した柱穴である。柱穴3120は、平面形は円形で、径約0.45ｍ、深さ約0.05ｍで、径約0.25ｍの礎石が据わる。柱穴3134は、平面形は円形で、径約0.4ｍ、深さは約0.05ｍで、径約0.3ｍの礎石が据わる。これら２基は南北に並び、柱間は約2.8ｍである。

土坑3142・3156・3157　調査区上段中央部で検出した土坑である。いずれも平面形は円形、埋土は暗灰黄色シルトで、こぶし大の礫を多く含む。土坑3142は、径約0.85ｍ、深さは約0.3ｍである。土坑3156は、径約0.8ｍ、深さは約0.15ｍである。土坑3157は、径約0.7ｍ、深さは約0.1ｍである。

土坑3161　調査区上段中央部で検出した土坑である。平面形は溝状で、検出規模は、長さ約2.75ｍ、幅約0.4ｍ、深さは約0.2ｍである。埋土は暗灰黄色シルトで、こぶし大の礫を多く含む。

図24　護岸3473平面図（１：50）

11）第１面〔Ⅰ期〕の遺構（図版11・148・151）

第１面の遺構は、下段で江戸時代から明治時代の２時期の護岸遺構を検出した。上段では、多数の柱穴や建物の地業、土坑、落ち込みなどを検出した。

護岸3200（図版24・33～36・151）　調査区下段東端で検出した南北方向の旧桂川護岸である。北側は調査区外に続き、南側は１次調査で確認した護岸2125につながる。西から東にかけて傾斜をもち低くなる。X＝－121,036付近で屈曲しており、主軸方位は、北側では北に対して約10～15度西に振るのに対し、南側ではほぼ正方位で、北に対して２～３度西に振る。また、この屈曲点より北側では、河川堆積や後述する護岸3100によって削平され、わずかに最背面の構造が残るのみの一方で、屈曲点の南側では良好に遺存している。また、上面は現代の盛土を伴う土地改変により削平を受ける。検出規模は、長さ約68.2ｍ、幅約5.4ｍ、高さ約1.9ｍである。法面の傾斜角度は、調査区中央（Ｂ－Ｂ’、Ｃ－Ｃ’）で約31度である。

構築方法は、径25～70㎝の大振りの石材を垂直に近い角度で積み上げ、その背面に径５～25㎝のやや小ぶりな礫と砂と粘土を互層に充填しながら、護岸の核となる石積を構築する。その表面に径25～45㎝の角礫を主体とする石材を敷き並べ、裾部付近に杭を打ち込む。表面に敷かれた石材は、面を揃えていない。また一部で修築の痕跡を確認した（図版36Ｄ－Ｄ’４層）。元来の護岸3200の上面の一部を掘り込んで、粘土とシルトを互層にし、径10～30㎝の角礫を多量に含むにぶい黄褐色シルトを充填する。使用石材は、１次調査で確認した護岸2125と同様に、砂岩・頁岩ないし粘板岩・ホルンフェルスを主体とし、チャートや花崗岩も含む。

裾部に打ち込まれた杭材の樹種は、X＝－121,020付近の11本について同定を行ったところ、マツ属複維管束亜属が６本、ヒノキ科・ヒノキ属が４本、スギが１本であった。

護岸3001（巻頭図版４、図版36～39）　調査区東端で検出した現在も機能する南北方向の桂川の護岸である。北側は調査区外へ続き、南側は１次調査で確認した護岸2125とつながる。西から東にかけて傾斜をもち低くなるが、法尻部は現在の桂川の水面（標高約6.1ｍ）より下にあり確認できていない。上面は現代の盛土を伴う土地改変により削平を受け、天端部を含めた護岸構築時の全体規模は不明である。検出規模は、長さ約70.6ｍ、幅約4.3ｍ、高さ約1.2ｍである。法面の傾斜角度は約30度である。遺構の主軸方位は北に対して約3.5度西に振る。

構築方法は、X=－121,036付近を境に北と南で構造が異なる。北側では、護岸3200を覆う砂礫（河川堆積層）の上面に杭を打ち込み、径20～50㎝の石材を敷く。石材は面を揃えていない。南側では、護岸3200の石積を利用しながら斜面上に石材を乱雑に積み上げて護岸を構築する。使用される石材は、１次調査護岸2125や護岸3200と同様に砂岩・頁岩ないし粘板岩・ホルンフェルスを主体とし、チャートや花崗岩も含む。また、花崗岩には矢穴が穿たれているものを複数確認した（図25）。矢穴口長辺は約６㎝、深さは約４㎝であり、矢穴の型式はＣタイプに位置付けられ[1)]、18世紀代のものと考えられる。

護岸東辺にも杭が打ち込まれる。杭の間隔は北にいくほど密になる。杭材の樹種は、９本について同定を行ったところ、７本がヒノキ・ヒノキ属、２本がスギであった。護岸3001には桂川に向

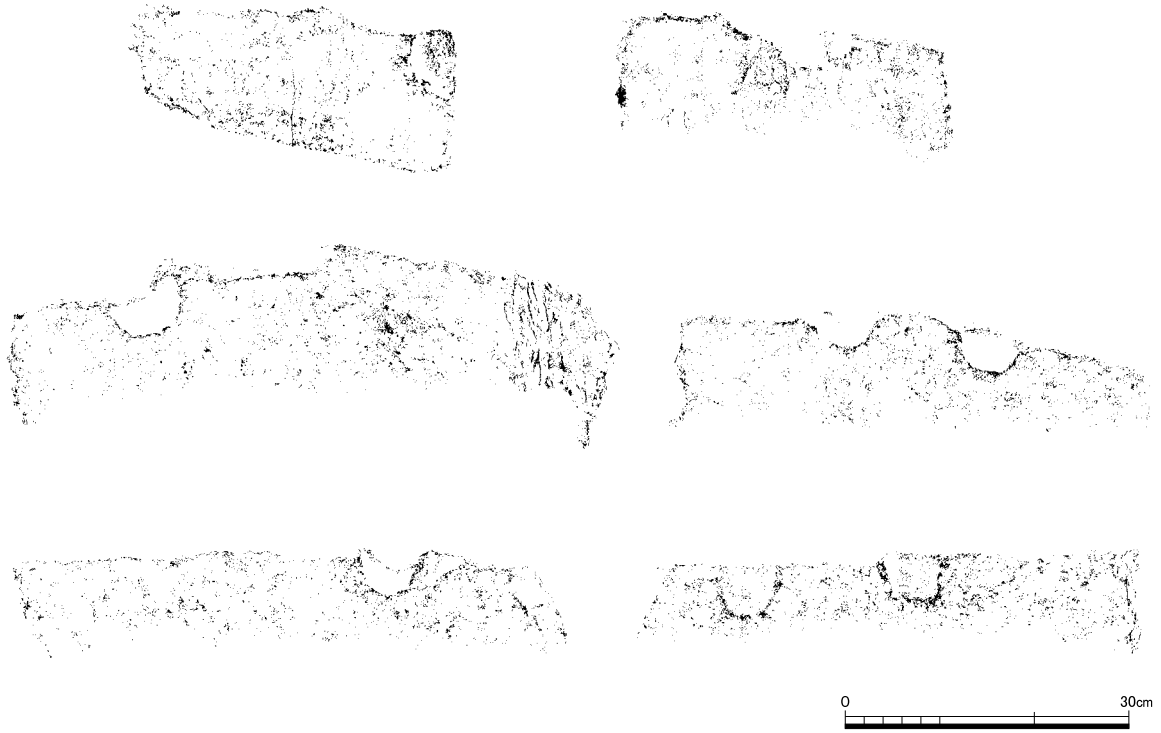


図25　護岸3001使用石材に穿たれた矢穴跡の拓影（１：８）

かって張り出す水制3410・3430が伴う。

水制3410（巻頭図版４、図版40～42・152）　調査区の北東隅部、護岸3001から桂川に向かって東側に張り出す水制である。東端部は桂川の水面以下に続くため確認できなかった。検出規模は、長さ約９ｍ、幅約8.5ｍ、高さ約１ｍである。

水制の構築は、まず護岸3200構築土または桂川の河川堆積層に杭を乱雑に打ち込み、その間に円礫または角礫を敷く（第１段階　図版40）。次にその上面に、径約10㎝の丸太を東西方向に複数配置し、丸太間には径10～20㎝の円礫を充填する。丸太は格子状になる部分もあるが、丸太同士を接合するための枘や釘などは用いていない簡易な構造である。この格子の東側には竹蛇籠が「ハ」の字状に計６列配置される（第２段階　図版41）。北西－南東方向に配置されたものが４列、南西－北東方向に配置されたものが２列である。竹蛇籠１個体の検出規模は、長さ2.2ｍ以上、直径約0.5ｍである。竹蛇籠の構造は、幅約２㎝の割竹を用い、編み竹は２本、輪竹は３本を１セットにして六つ目編みにする[2)]。籠内部には10～20㎝の角礫を充填する。竹蛇篭の西からは錨が逆さの状態で出土した。丸太と蛇籠の間には桂川の河川堆積と考えられる自然堆積層（図版40　３～５層・９層）が挟まる部分があるが、両者から出土する遺物からは明確な時期差は認められず、施工時のタイムラグによるものと考えられる。最後に、丸太材や竹蛇篭を覆うように土盛りを行い、その上面に40～70㎝の角礫を乱雑に積んで表面を形成する（第１段階　図版42）。杭材の樹種は、６本について同定を行ったところ、３本がマツ属複維管束亜属、ヒノキ・ヒノキ科が２本、スギが１本であった。出土土器や錨は幕末から明治時代のものである。

水制3430（図版39）　調査区南東部で検出した護岸3001から桂川に向かって東側に張り出す水

制である。検出規模は、長さ約６ｍ、幅約0.7ｍ、高さ約0.3ｍである。表面は、水制3410と同様に角礫を乱雑に積んで形成する。内部の構造などは、遺構のほぼ全体が桂川の水面以下に続くため確認できなかった。

地業3006（図版43・152）　調査区上段南東部で検出した南北方向の地業である。西側は調査区外へ続く。検出規模は、長さ約8.4ｍ、幅約１ｍ、深さ約0.3ｍで、径0.3～0.5ｍの角礫を面を外（東）側に揃えて並べる。

地業3007（図版43・152）　調査区上段南東部で検出した南北方向の地業である。西側は調査区外へ続き、一部が地業3006に削平される。検出規模は、長さ約5.6ｍ、幅約1.2ｍ、深さ約0.2ｍで、径0.3～0.6ｍの角礫を不規則に配置する。

地業3020（図26）　調査区上段南西隅で検出した地業である。南西側は１次調査の地業2012とつながり、東側は削平される。検出規模は、南北約0.5ｍ、東西約0.9ｍ、深さ約0.3ｍである。溝状の掘形に小礫を入れたのち、径約0.7ｍの石を据える。地業2012とあわせた規模は、東西約６ｍ、南北約1.2ｍである。

井戸3057　調査区下段北端で検出した円形縦板組の井戸である。検出規模は、径約0.95ｍ、深さ約0.55ｍである。文久永寶の四文銭が出土した。

落込3050　調査区上段南半で検出した落込である。検出規模は、南北約11.5ｍ、東西約4.4ｍ、

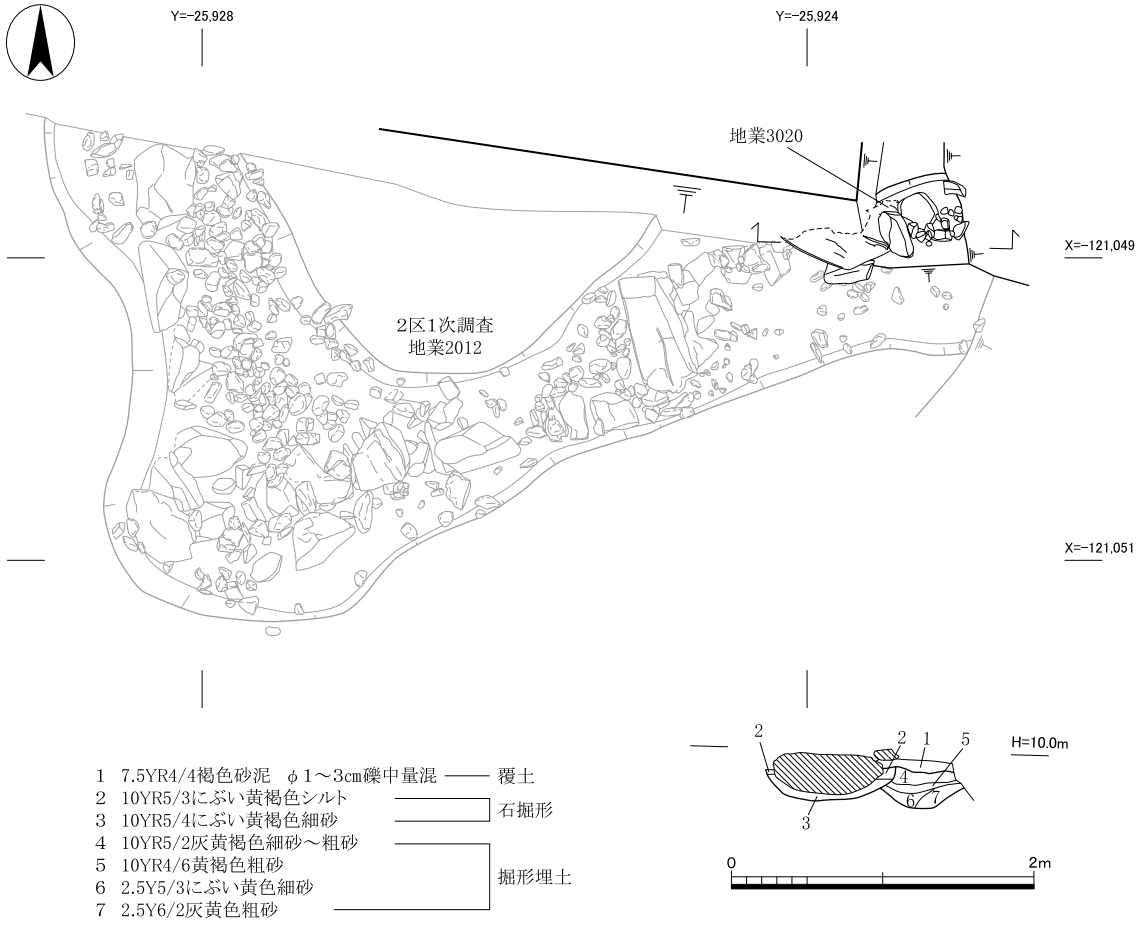


図26　地業3020実測図（１：50）

深さ約0.6ｍである。下部では、黒褐色のシルトと暗灰黄色のシルトが葉理状に堆積し、上部では比較的粒径の大きな礫を含む極細砂から砂礫が堆積する（図版20　西壁断面図47～64層）。上部の砂礫は洪水堆積の可能性が考えられる。

（４）４区の遺構

１）４区の概要

調査予定範囲の北端の調査区である。南北31ｍ、東西20ｍで三角形を呈し、面積は430㎡である。調査は第１面〔Ⅰ・Ⅱ期〕から開始し、第８面〔Ⅷ期以前〕までの８面９期の調査を行った。以下で面〔期〕ごとに主要な遺構について述べる。

２）第８面〔Ⅷ期以前〕の遺構（図版44・153）

遺構面の標高が現在の桂川の水位より低くなったため、安全面を考慮し、断割調査に留めた。標高約7.0ｍで黒褐色粘質シルトを基盤層とする遺構面を検出した。調査面積が限定されたためか、遺構は確認できなかった。

３）第７面〔Ⅶ期〕の遺構（図版44・153）

柱列4099（図版52）　調査区南端で検出した南北方向の柱列である。２間分、柱穴３基を確認した。柱間は北から1.2、0.9、1.1ｍの不等間である。方位は北に対して東に約10度振れる。柱穴掘形の平面形は円形で、径0.35～0.4ｍ、深さは0.1～0.15ｍある。柱痕跡から推測される柱径は0.05～0.1ｍである。

柱列4107（図版52）　調査区中央部で検出した南北方向の柱列である。３間分、柱穴４基を確認した。柱間は北から0.7、0.8ｍの不等間である。方位は北に対して西に約１度振れる。柱穴掘形の平面形は円形で、径0.25～0.4ｍ、深さは約0.2ｍある。柱痕跡から推測される柱径は約0.1ｍである。

４）第６面〔Ⅵ期以降〕の遺構（図版45・153）

柱列4085（図版52・153）　調査区南半で検出した南北方向の柱列である。５間分、柱穴６基を確認した。柱間は北から2.1、0.8、1.4、1.4、0.9ｍの不等間である。方位は北に対して西に約13度振れる。柱穴掘形の平面形は歪な円形で、径0.3～0.4ｍ、深さは0.1～0.25ｍある。柱痕跡から推測される柱径は0.1～0.2ｍである。

溝4078　調査区中央南寄りで検出した溝である。北西から南東に延びる。検出規模は、長さ約0.2ｍ、深さ0.1～0.15ｍで、埋土は暗灰黄色粘質シルトである。この溝の北でも平面形が隅丸方形や円形の柱穴を確認したが、調査区内では建物としてのまとまりは捉えられなかった。

５）第５面〔Ⅵ期〕の遺構（図版45・154）

土坑4071　調査区南半で検出した。平面形は楕円形で、長径約1.0ｍ、深さは約0.1ｍある。埋土は黄灰色シルト～極細砂である。

溝4056　調査区南半で検出した東西方向の溝である。検出規模は、長さ約2.5ｍ、幅0.3～0.4ｍ、深さは約0.1ｍある。埋土は灰色粘質シルトである。

落込4069　調査区中央部で検出した。調査区内では東肩を検出し、西側に緩やかに落ち込み調査区外へ延びる。検出規模は、幅約1.4ｍ、長さ約9.5ｍ、深さは約0.2ｍある。埋土は西壁断面（図版50）の61層である。土器片が微量出土した。

６）第４面〔Ⅴ期〕の遺構（図版46・154）

溝4050　調査区南半で検出した南北方向の溝である。検出規模は、長さ約20ｍ、幅1.2～4.0ｍ、深さは0.2～0.25ｍある。溝底の標高は北端で約8.3ｍ、中央で約8.25ｍ、南端では約8.2ｍで、北から南にわずかに下がる。埋土は灰色粘質シルト～極細砂である。

溝4057　調査区南半で検出した南北方向の溝である。南半は溝4050に削平される。検出規模は、長さ約11.0ｍ、幅0.2～0.4ｍ、深さ0.05～0.1ｍである。底は凹凸がある。埋土は灰色粘質シルトである。

７）第３面〔Ⅳ期〕の遺構（図版46）

溝4047（図版155）　調査区北半で検出した東西方向の溝である。西は調査区外へ延び、東は溝4030に削平される。検出規模は、長さ約3.0ｍ、幅約3.7ｍ、深さは約1.8ｍである。埋土は西壁断面（図版50）22～54層で、少なくとも１回の掘り直しが確認できる。断面観察では、ヨシなどの植物遺体が堆積する層とラミナの確認できる砂層が互層となり、滞水と流水を繰り返しながら埋没していった様子が確認できた。埋土から室町時代中葉から後葉の遺物が出土した。

８）第２面〔Ⅲ期〕の遺構（図版47・155）

土坑4038　調査区南半で検出した。平面形は歪な円形で、長径約0.7ｍ、短径約0.45ｍ、深さは約0.1ｍある。埋土はにぶい黄褐色シルト～細砂である。

土坑4043　調査区南半で検出した。平面形は隅丸方形と考えられ、東半は溝4030に削平される。検出規模は、南北約1.0ｍ、東西約0.6ｍ、深さは0.2ｍある。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

柱穴4051　調査区中央部で検出した。上部は溝4030に削平される。掘形の平面形は楕円形で、長径約0.6ｍ、短径約0.35ｍ、深さは約0.2ｍある。底部に長径約0.35ｍの砂岩の礎石が据わる。

９）第１面〔Ⅱ期〕の遺構（巻頭図版５、図版48・155）

溝4030（図版53～55・156）　調査区全域で検出した南北方向の溝である。北と南は調査区外へ延び、東半は後述する水制4035、護岸4031構築時に削平されたと考えられ、西肩部のみを検出した。検出規模は、南北約37ｍ、幅約７ｍ、深さ約3.8ｍである。主軸方位は、西肩を基準とすると、北に対して約２度西に振る。埋土は図版53の33～53層であり、グライ化した粘質シルト～極細砂が主体となる。明瞭なラミナは確認できず、河川堆積物の砂層なども認められないことから、機能時は河川とは切り離された閉鎖的な環境にあったと推測される。肩部は東下がりの状態で検出しており、溝の最底部はさらに東にあったと考えられ、深さ3.8ｍ以上、復元幅は約15ｍとなる。木製品や金属製品を含む安土桃山時代から江戸時代前期の遺物が多量に出土した。

水制4035（巻頭図版５、図版53・56～58・156～158、図27）　調査区中央で検出した、桂川に向かって東側に張り出す水制である。北端は桂川の水流の影響を受けたと考えられ、崩落する。検

出規模は、長さ約12.5ｍ、幅約6.5ｍ、高さ約1.5ｍである。構築方法は、南半では溝4030の堆積土の上に砕いた瓦と径５～15㎝の円礫を敷き詰める。中央部では、核となるコの字状の石積を構築するため、石積の下部に沈下を防ぐためと考えられる船材を転用した南北方向の胴木を敷く（図版56の木104・105）。この胴木の下部にも沈下を防ぐため径25～30㎝の石材が並べられていた（図版157）。また船材を立てて前面に杭を打ち込み、石積と土の土留めとする（木106～112）。その後、胴木の上と土留め船材の内側に径40～60㎝の大振りの石材を積み（図版57）、コの字状に石を積み上げながら（図版58）、背面にも核となる礫層を作り（図版53の26層）、間に径５～20㎝の円礫と細砂～中砂を主体とする土を互層に充填する。石積は最も遺存状態の良いところで４段分を確認した。石積の上面、前面も礫混じりの土で覆われ、機能時は不透過水制であったと考えられる。最上面は礫を含むにぶい黄褐色シルトで、非常に固く締まり路面状になる（８・13層）。土留めに使用された杭材のうち４本の樹種同定を行ったところ、４本中、３本がセンダン、１本はマツ属複維管束亜属であった。構築土からは江戸時代前期の遺物が出土した。

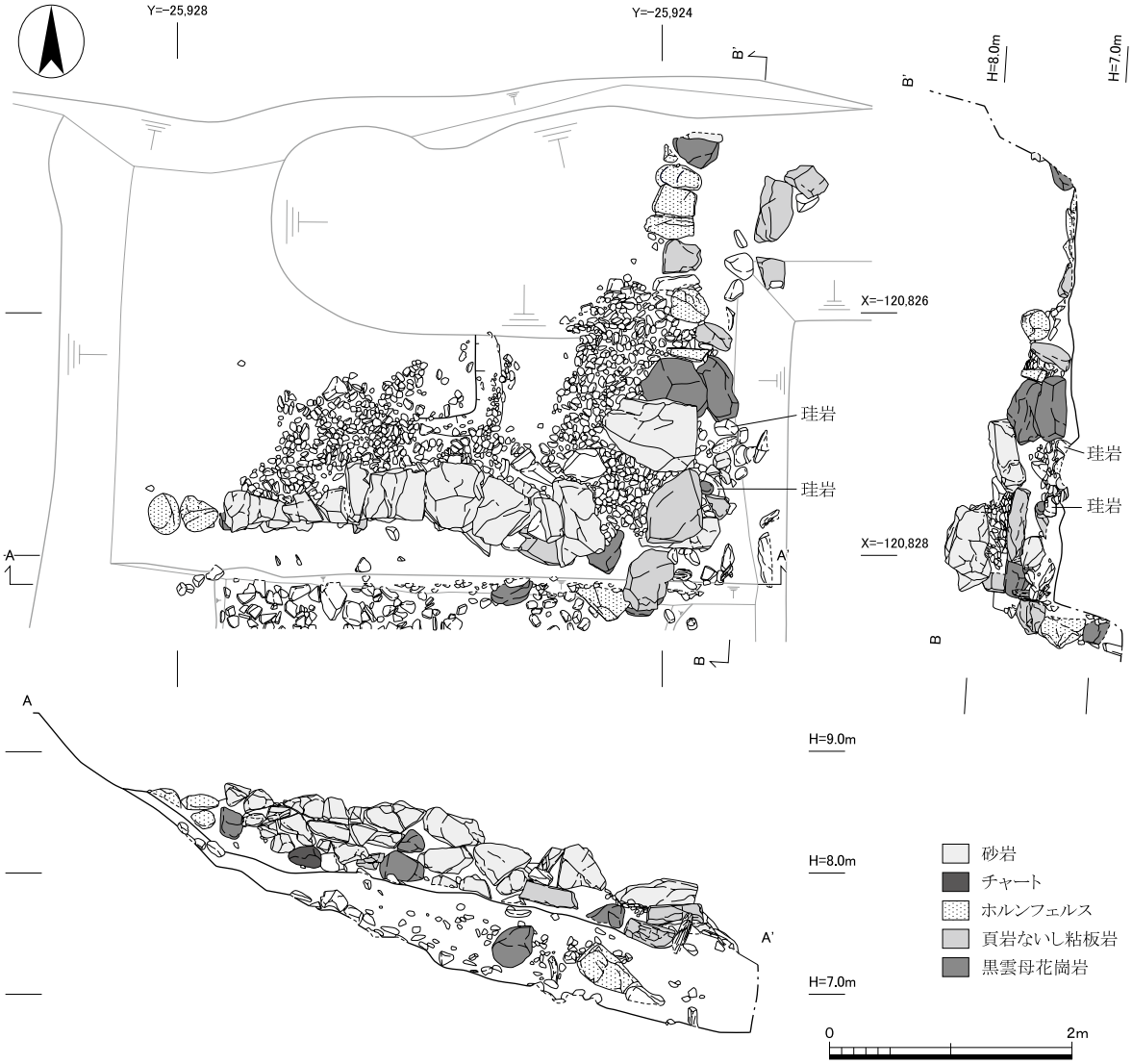


図27　水制4035使用石材（１：60）

また、この水制4035に使用された石材について、橋本清一氏に依頼し、石材鑑定を実施した。詳細は図27に示した。石積については、円磨度0.1～0.2のかなり角張った砂岩が多く、やや泥が混じる特徴のあるものは黒みがかる。その他、頁岩ないし粘板岩、ホルンフェルス、花崗岩が少ないが確認できる。また、石積背面と南半の砕いた瓦とともに敷かれた礫は、円磨度0.4～0.7の河床礫で、チャート、砂岩を主体とし、ホルンフェルス、黒雲母花崗岩、脈石岩などが含まれる。石積、背面の石材ともに自然石が主体で、割石の角礫を主体とする江戸時代後期以降に構築されたと考えられる護岸とは石材の組成が異なる。

護岸4031（図54・55・59・158、図28） 調査区南半で検出した、南北方向の石積護岸である。北は水制4035と接続し、南の断割部では石列が検出されなかったが、南壁断面で確認できた（図版55－21～27層）ため、調査区外へ延びると考えられる。検出規模は、石積が残存する範囲では、長さ約7.5ｍ、高さ約0.4ｍである。主軸方位は、北に対して約４度西に振る。溝4035の肩部斜面に杭を打ち込み、その後ろに径15～70㎝の石材を垂直に近い角度で乱雑に積む。杭材は、４本について樹種同定を行ったところ、２本がマツ属複維管束亜属、２本がヒノキ科であった。石材については、水制4035と同様、橋本清一氏による鑑定を受けた。詳細は図28に示したが、頁岩ないし粘板岩と砂岩のほか、チャート、ホルンフェルス、花崗岩がある。砂岩は丸みのあるものと角ばった

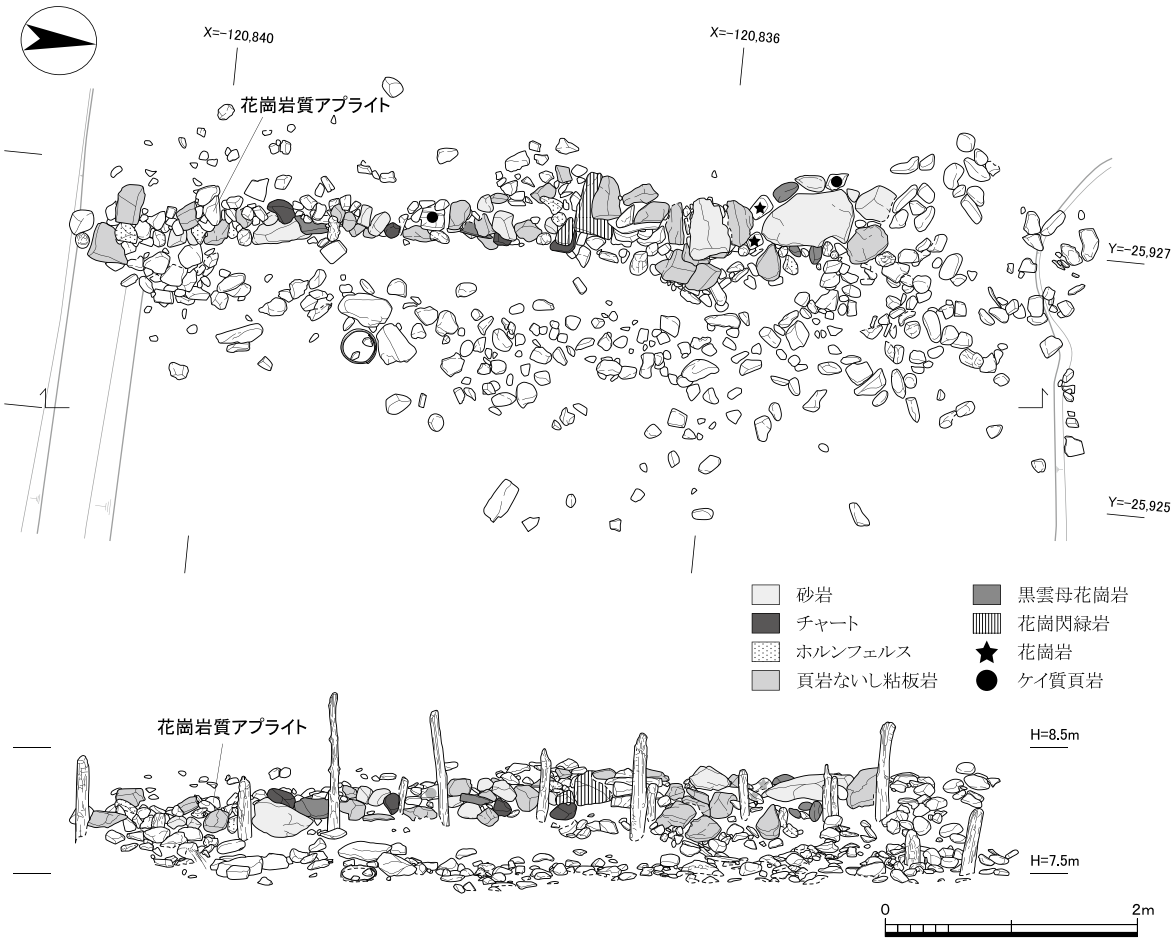


図28　護岸4031使用石材（１：60）

ものがあり、頁岩ないし粘板岩は円磨度0.1～0.2の角ばったものが多い。

土坑4011・4012、柱穴4009・4014～4016・4032～4034・4041・4042（図版60・159）

調査区南半でまとまって検出した。土坑4012は円形の掘形に瓦質土器の深鉢が据わり、その甕の一部を打ち欠いて丸瓦を差し込む。瓦は樋状に西に延び、土坑4011と接続する。樋状の瓦は西から東に傾斜することから（断面Ａライン）、瓦質土器の深鉢に何かを流し込むためのものと考えられるが、瓦質土器の内面に付着物等は確認できなかった。土坑4011は、平面形は隅丸方形で、南北約2.0ｍ、東西約1.6ｍ、深さは約0.15ｍある。土坑4011のほぼ中央に柱穴4032が掘り込まれる。柱穴4032の掘形は上方が隅丸方形で下方が円形の２段構造で、底部に花崗岩製の礎石が据わる。掘形規模は上面で南北約0.8ｍ、東西約0.6ｍ、深さは約0.3ｍある。土坑4011の南西では柱穴4009を検出した。掘形の平面形は円形で、径約0.3ｍ、深さ約0.1ｍで、砂岩の礎石が据わる。土坑4011の南東では柱穴4016を検出した。掘形の平面形は円形で、径約0.4ｍ、深さ約0.1ｍで、チャートの礎石が据わる。土坑4011の北東では柱穴4014・4015を検出した。柱穴4014の掘形の平面形は隅丸方形で、径約0.6ｍ、深さ約0.45ｍある。径約0.15ｍの柱痕跡を確認した。柱穴4015の掘形の平面形は楕円形で、長径約0.65ｍ、深さ約0.15ｍで、ホルンフェルスの礎石が据わる。

これら遺構の下層で柱穴4033・4034・4041・4042を検出した。柱穴4033は土坑4011の西辺に接し、掘形の平面形は円形で、径約0.35ｍ、深さ約0.1ｍで、花崗岩製の礎石が据わる。柱穴4034は土坑4011の南西で重複して検出した。掘形の平面形は歪な円形で、径約0.8ｍ、深さ約0.4ｍで、花崗岩製の礎石が据わる。柱穴4041は土坑4012の下層で検出した。掘形の平面形は隅丸方形で、径約0.5ｍ、深さ約0.4ｍで、花崗岩製の礎石が据わる。礎石は五輪塔の火輪を転用したものである。柱穴4042は土坑4011の北東、柱穴4014の下層で検出した。掘形の平面形は歪な隅丸方形で、径約0.6ｍ、深さ約0.3ｍで、ホルンフェルスの礎石が据わる。これらの土坑4011・4012とその周辺で見つかった柱穴群は、位置関係や花崗岩製の礎石の利用方法などが類似し、一連の遺構群である可能性がある。

柱穴4018・4019・4023　調査区南半で重複して検出した。いずれも掘形の平面形は円形で、径0.4～0.5ｍ、深さは0.15～0.2ｍ、ホルンフェルスの礎石が据わる。

タタキ4025　調査区南半で検出した。白色粘土～シルトに小礫を混ぜ、非常に固く敲き締まる。検出範囲は東西約0.5ｍ、南北約1.5ｍある。

土坑4029　調査区南端で検出した。平面形は隅丸方形で、南北約2.3ｍ、東西約1.8ｍ、深さは約0.2ｍある。埋土はオリーブ褐色細砂～粗砂で、最下層に炭化物と焼土が堆積する。

土坑4036　調査区中央の西壁際で検出した。西半は調査区外へ延びる。検出規模は、東西約1.5ｍ、南北約9.0ｍ、深さは約0.5ｍある。埋土は西壁断面（図版50）の16層である。

10）第１面〔Ｉ期〕の遺構（図版49・159）

護岸4001（図版61～64・160）　調査区東半で検出した現在も機能する南北方向の桂川の護岸である。北・南ともに調査区外へ延び、南は３区護岸3200・3001とつながる。桂川の河川の影響と現代の掘削工事により上部は大規模に削平される。北半では、東に張り出す水制4045が取り付く。

検出規模は、長さ約39ｍ、幅約4.5ｍ、高さ約2.0ｍである。主軸方位は、北に対して５度西に振る。出土遺物や構造から、３区で確認した明治時代の護岸3001に対応するものは、現代に大きく削平され、南東端の一部と水制4045、水制4045の北に続く部分のみが遺存し、大半が江戸時代後期の護岸3200と連続するものと考えられる。現在の桂川河川水位との関係上、調査は部分的な断割調査に留めた（図版63）。護岸3200と同様、径20～60㎝の大振りの石材を積み上げ、その背面に径５～20㎝のやや小ぶりな礫を含む砂とシルトを互層に充填し、護岸の核となる石積を構築する。その表面を砂礫層と砂層で覆い、上面に径20～35㎝の角礫を主体とする石材を敷き並べる。表面の石材は面を揃えない。石積背面や表面には構築過程で杭を打ち込み、土留め、石留めとする。使用石材は、１次調査護岸2125、３区護岸3200と同様、砂岩・頁岩ないし粘板岩・ホルンフェルスを主体とし、チャートや花崗岩を含む。また、杭材は８本について樹種同定を行ったところ、３本がマツ属複維管束亜属、３本がヒノキ属・ヒノキ科、スギとモミがそれぞれ１本であった。

水制4045（図版61）　調査区北東部で検出した、護岸4001から桂川に向かって東に張り出す水制である。検出規模は、長さ約８ｍ、幅約３ｍ、高さ約0.5ｍである。角礫を乱雑に積んで構築する。内部の構造や全体規模については、遺構の大半が桂川の水面下に続くため確認できなかった。

流路4024（図版54・55）　調査区東半で検出した桂川の旧流路である。検出規模は、長さ約38ｍ、幅約5.8ｍ、深さは約1.8ｍである。断面は図版54－12～21層、図版55－11～19層である。Ⅱ期（江戸時代前期）の護岸4031、水制4035を被う自然堆積層で礫層、砂層、シルト層が互層となって堆積する。上部は江戸時代後期の遺物を含む人為的な造成土で覆われる（図版54－１～３・５～11層）。この造成土は、礫を多量に含む層とシルト層の互層となり、非常に固く締まる。江戸時代後期の遺物を含み、護岸4001と同時期の造成と考えられる。

地業4006（図版50・55）　調査区南西隅で検出した掘込地業である。南と西は調査区外へ延びる。検出規模は、東西約4.7ｍ、南北約3.3ｍ、深さは約0.5ｍである。断面は図版50－２・３層、図版55－６～８層で、最下層に炭混じりの細砂～中砂を薄く敷き、粘質シルトを入れ、その上面に木の枝を束ねた連柴を格子状に組んで細い杭で結束し止める。連柴の間には部分的に粗朶状のものが確認できる。最上層には粗い砂を入れる。連柴の木材の樹種同定を行ったところ、ツツジ科とツブラジイであった。

土坑4004　調査区中央部で検出した円形土坑である。上部は撹乱により削平される。検出規模は、径約1.5ｍ、深さ約0.4ｍである。

（５）５区の遺構

１）５区の概要

調査予定範囲の南西隅に設けた調査区である。南北10ｍ、東西20ｍで、面積は200㎡である。調査は、第１面〔Ⅰ期〕から開始し、第10面〔Ⅹ期〕までの10面10期の調査を行った。以下で面ごとに主要な遺構について述べる。

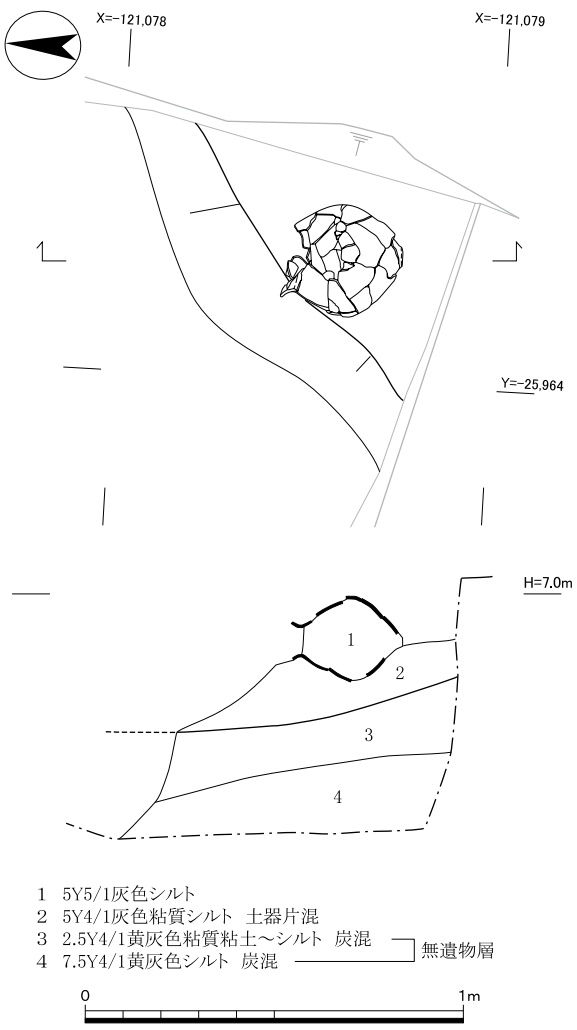


図29 落込5071実測図（1：20）

2）第10面〔Ⅹ期〕の遺構（図版65・161）

落込5071（図29、図版70・71・161） 調査区東半で検出した西から東に下がる落込である。検出規模は、東西約4.2ｍ、南北約2.6ｍ、深さは最も深い所で約0.3ｍある。埋土は北壁65・66層（図版70）、東壁断面31・32層（図版71）で、弥生土器や古式土師器の小片が混じる。調査区南東隅で、ほぼ完形の古式土師器甕が横倒しになって出土した（図29）。

3）第９面〔Ⅸ期〕の遺構（図版65・161）

標高約7.3ｍで、土器片の混じる黄灰色シルトを基盤層とする遺構面を検出した。調査区内では遺構は確認できなかった。

4）第８面〔Ⅷ期〕の遺構（図版66・161）

土坑5069 調査区東端で検出した。平面形は円形で、径約1.2ｍ、深さは約0.2ｍある。埋土は灰色粘質シルトである。

落込5070 調査区中央で検出した北西から南東方向に延びる落込である。検出規模は、最大長約6.0ｍ、幅約3.0ｍ、深さは約0.15ｍある。埋土は暗灰黄色シルトで土器の細片が混じる。

5）第７面〔Ⅶ期〕の遺構（図版66・162）

柱列5064（図30） 調査区中央で検出した東西方向の柱列である。３間分、柱穴４基を確認した。柱間は西から1.5、1.9、1.7ｍの不等間である。方位は北に対して西に約3.5度振れる。柱穴掘形

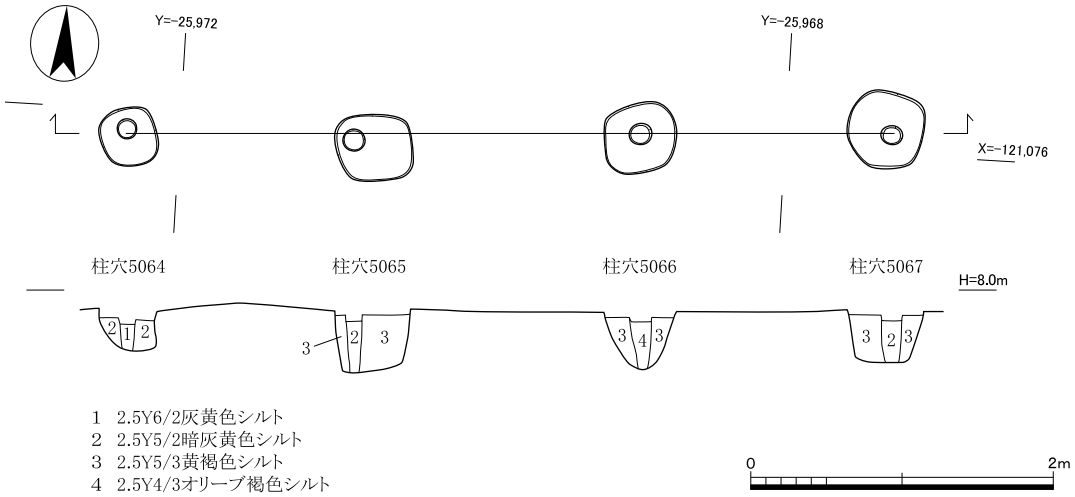


図30 柱列5064実測図（1：50）

の平面形は隅丸方形で、径0.35～0.5ｍ、深さは0.25～0.4ｍある。柱痕跡から推測される柱径は約0.15ｍである。

６）第６面〔Ⅵ期〕の遺構（図版67・162）

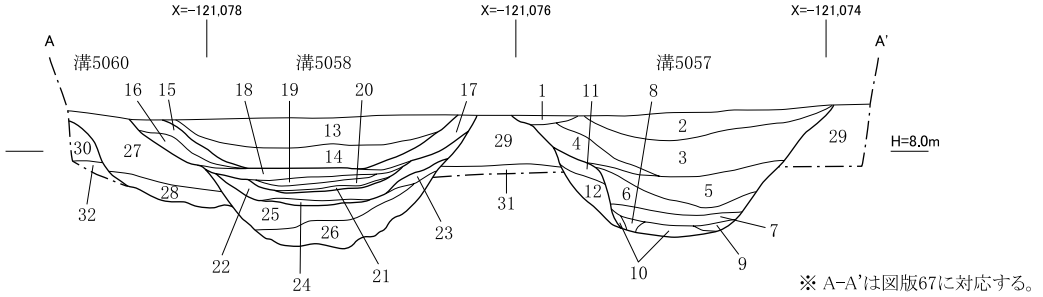
溝5058（図31）　調査区を東西に貫く溝である。東・西ともに調査区外に延びる。検出規模は、長さ約15.0ｍ、幅1.5～2.3ｍ、深さは0.85～1.0ｍある。主軸方位は北に対して約５度西に振れる。溝底の標高は、東端で約7.3ｍ、中央部で約7.4ｍ、西端で約7.25ｍと凹凸がある。中央部の断面観察の結果、少なくとも１回の掘り直しが行われたと考えられる。埋土は粘質シルトや細砂ブロック混じり粘質シルトが主体で、流水の明瞭な痕跡は確認できなかった。平安時代中期から後期の遺物が出土した。

溝5059　調査区の南東部で検出した東西方向の溝である。東・西ともに調査区外に延びる。溝5058・5060を削平する。検出規模は、長さ約6.0ｍ、幅0.7～2.5ｍ、深さは0.4～0.5ｍある。主軸方位は北に対して約15度西に振れる。溝底の標高は、東端で約7.6ｍ、西端では約7.9ｍで、西から東に下がる。埋土は東壁断面（図版71）の20・21層である。

溝5060（図31）　調査区の南端で検出した東西方向の溝である。溝5058に並行し、北肩を削平される。東は溝5059に削平される。検出規模は、長さ約4.8ｍ、幅約1.0ｍ、深さは約0.5ｍある。底面の標高は、7.6ｍ前後で、調査区内ではほぼ水平である。

７）第５面〔Ⅴ期〕の遺構（図版67・163）

溝5050　調査区東端で検出した南北方向の溝である。北・南ともに調査区外に延びる。検出規模は、長さ約5.0ｍ、幅約3.2ｍ、深さは約0.8ｍある。主軸方位は北に対して約10度西に振れる。



1　2.5Y4/1黄灰色シルト～極細砂　炭少量
2　2.5Y4/2暗灰黄色シルト～極細砂　炭少量
3　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト
4　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト　中砂～粗砂少量　炭混
5　10YR3/1黒褐色粘質シルト　中砂～粗砂中量　炭混
6　10YR3/1黒褐色粘質シルト　粗砂～極粗砂多量
7　10YR3/1黒褐色粘質シルト　粗砂少量　木質多量
8　10YR3/1黒褐色極細砂～細砂　中砂少量
9　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト　中砂少量
10　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト
（溝5057新）
11　10YR4/1褐灰色シルト～極細砂　中砂混
12　2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト～極細砂　炭混
（溝5057古）
13　2.5Y5/2暗灰黄色極細砂～細砂　炭・土器片含む
14　2.5Y5/2暗灰黄色極細砂～細砂　中砂～粗砂・炭混
15　2.5Y4/1黄灰色細砂
16　2.5Y4/1黄灰色シルト～細砂
17　2.5Y4/2暗灰黄色細砂
（溝5058）
18　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト　中砂混
19　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト　中砂混
土器細片・鉄分多量　固く締まる
20　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト
21　10YR4/1褐灰色粘質シルト　鉄分多量　固くしまる
22　10YR3/1黒褐色粘質シルト
23　10YR4/2灰黄褐色粘質シルトに細砂ブロック混
24　10YR3/1黒褐色粘質シルトに細砂ブロック混
25　10YR3/1黒褐色粘質シルト　粗砂混
26　10YR3/1黒褐色粘質シルト　鉄分多量　固くしまる
（溝5058）
27　10YR4/1褐灰色粘質シルト　中砂～粗砂・炭少量
28　10YR3/1黒褐色粘質シルト
中砂～粗砂・鉄分多量　固くしまる
（溝5060）
29　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂（第6面基盤層）
30　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト
31　10YR4/1褐灰色シルト～極細砂　鉄分多量　固くしまる
32　10YR3/1黒褐色シルト～極細砂　鉄分多量　固くしまる

0　2m

図31　溝5057・5058・5060断面図（１：50）

溝底の標高は、北端で約7.55ｍ、南端では約7.7ｍで、南から北に下がる。埋土は北壁断面（図版70）の44～51層で、少なくとも１回の掘り直しが確認できる。

溝5057（図31）　調査区北半で検出した東西方向の溝である。東・西ともに調査区外へ延びる。溝5050に削平され、溝5072を削平する。検出規模は、長さ約14.5ｍ、幅約2.0ｍ、深さは0.8～1.05ｍある。主軸方位は北に対して約６度西に振れる。溝底の標高は、東端で約7.35ｍ、中央部で約7.45ｍ、西端で約7.5ｍと西から東に下がる。中央部の断面観察の結果（図31）、少なくとも１回の掘り直しが行われたと考えられる。埋土は粘質シルトを主体とし、木質が多量に混じる層などがあり（図31－７層）、滞水状態であった可能性が考えられる。最下層から鎌倉時代、それ以外からは室町時代中葉の遺物が出土した。

溝5072　調査区西端で検出した南北方向の溝である。北・南ともに調査区外に延びる。溝5057に削平される。検出規模は、長さ約5.5ｍ、幅2.2～2.5ｍ、深さは約0.4ｍある。主軸方位は北に対して約25度西に振れる。溝底の標高は、北端で約8.1ｍ、南端では約8.0ｍで、北から南に下がる。埋土は粗～極粗砂混じりのシルト～極細砂が主体である。

８）第４面〔Ⅳ期〕の遺構（図版68・163）

礫敷5047（図版72）　調査区北西部で検出した南北方向の礫敷である。検出範囲は、長さ約2.4ｍ、幅約0.55ｍである。主軸方位は北に対して約12度西に振れる。第４面整地層の上面に粗～極粗砂の砂粒を敷き、その上に径５～15㎝の礫と瓦片が平らな面を上にして敷かれる。

井戸5028（図版72・163）　調査区南東部で検出した円形石組井戸である。掘形は径約2.8ｍの円形を呈する。石組の内径は約0.7ｍある。石材は径５～20㎝の砂岩系とチャートが主体で、花崗岩系が微量混じる。安全面を考慮し、標高約7.25ｍのところで掘り止めたため、底は確認していない。室町時代後葉の遺物が少量出土した。

柱穴5051～5053　調査区中央北半で検出した。いずれも地下式礎石をもつ柱穴である。掘形の長径0.3～0.5ｍ、深さは約0.5ｍある。地下式礎石はいずれも砂岩で径15～30㎝ある。建物としてのまとまりは捉えられなかった。

９）第３面〔Ⅲ期〕の遺構（図版68・164）

溝5025　調査区北東部で検出した南北方向の溝である。北は調査区外に延び、南は溝5026に削平される。検出規模は、長さ約3.5ｍ、幅１～1.3ｍ、深さは約0.5ｍある。主軸方位は北に対して約20度西に振れる。溝底の標高は、北端で約8.8ｍ、南端では9.0ｍで、南から北に下がる。埋土は北壁断面（図版70）19・20層である。

溝5026　調査区南東部で検出した東西方向の溝である。東と西は調査区外に延び、南肩は調査区外にある。検出規模は、長さ約9.0ｍ、幅3.0ｍ以上、深さは約1.4ｍある。調査区内での検出長が短いため主軸の判別が困難であるが、北に対して20度前後西に振れると考えられる。溝底の標高は、東端で約8.2ｍ、西端では約8.0ｍで、東から西に下がる。埋土は東壁断面（図版71）10～15層で、最下層から室町時代後葉、上層から安土桃山時代の遺物が出土した。

溝5027（図版164）　調査区西半で検出した南北方向の溝である。北と南は調査区外へ延びる。

検出規模は、長さ約6.7ｍ、幅約5.7ｍ、深さは約1.2ｍある。主軸方位は東肩部から推測すると北に対して約７度西に振れる。溝底の標高は、北端で約8.3ｍ、南端では約8.6ｍで、南から北に下がる。埋土は北壁断面（図版70）22～33層で、少なくとも１回の掘り直しが確認できる。埋土から室町時代後葉から安土桃山時代の遺物が出土した。また、溝の東肩部からは瓦類がまとまって出土した。

ピット5041　調査区中央東寄りで検出した平面円形のピットである。径約0.4ｍ、深さは検出面から約0.3ｍある。埋土はオリーブ黒色シルトで、室町時代の軒平瓦が出土した。

ピット5045　調査区中央西寄りで検出した平面円形のピットである。径約0.55ｍ、深さは検出面から約0.3ｍある。埋土は礫混じりの灰色粘質シルトで、室町時代の軒平瓦が出土した。

10）第２面〔Ⅱ期〕の遺構（図版69・164）

土坑5005（図32）　調査区中央北寄りで検出した円形土坑である。径約0.5ｍ、深さ約0.3ｍある。ほぼ完形の瓦器鉢が正位置に据わる。

溝5019　調査区中央西寄りで検出した溝である。検出規模は、長さ約3.0ｍ、幅約0.2ｍ、深さは約0.05～0.1ｍある。主軸方位は、北に対して約33度西に振れる。北端は東に拡がって土坑状となり、瓦が敷かれた状態で出土した。後述する溝5021と一連の遺構の可能性がある。

溝5021（図版72）　調査区中央東寄りで検出したＬ字状の溝である。南は落込5011に削平される。検出規模は、東西長約6.0ｍ、南北長約3.0ｍ、幅0.1～0.5ｍ、深さは0.05～0.2ｍある。主軸方位は北に対して約21度西に振れる。溝の東半から屈曲部にかけて、瓦が敷かれた状態で出土した。一部は５枚の瓦が重なる所もある。建物の雨落ちなどとして機能した可能性がある。

落込5011　調査区南東部で検出した。検出規模は、東西約6.5ｍ、幅約1.0ｍ、深さは約0.2ｍある。埋土は東壁断面（図版71）７層である。

11）第１面〔Ⅰ期〕の遺構（図版69・165）

地業5002（図版73・165）　調査区中央部で検出した溝状の掘り込み地業である。調査区内ではＬ字状に検出したが、東・南ともに調査区外に延びる。掘形の断面形は方形を呈し、検出規模は、東西約10.3ｍ、南北約3.9ｍ、幅0.8～1.7ｍ、深さは最深部で約0.55ｍある。主軸方位は、北に対して約20度西に振れる。上部を撹乱される東半部を除いて掘形内には径５～40㎝の角礫が詰まる。Ｌ字の屈曲部付近は、サイズの大きい礫を両側に小口積みにし、その間に小礫を詰める。調査区北東隅で検出した地業5003と同一遺構の可能性があるが、掘形規模、礫の詰め方に差異があるため、別遺構として扱った。

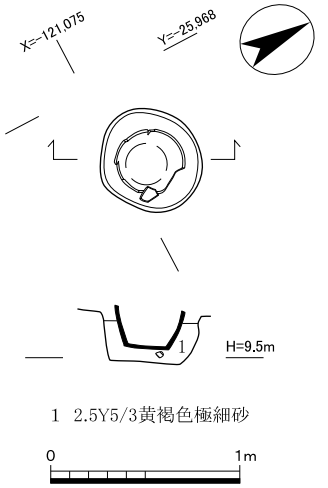


図32　土坑5005実測図（１：40）

地業5003（図版73・165）　調査区北東隅で検出した溝状の掘り込み地業である。北・南ともに調査区外に延びる。掘形の断面形は方形を呈し、検出規模は、長さ約3.4ｍ、幅0.6～0.7ｍ、深さは約0.2ｍある。掘形内に径５～35㎝の角礫が詰まる。礫は、

径の小さい礫を入れた上に、大きい礫を並べている。

溝5010　調査区北西部で検出した。北東から南西に延びる溝である。検出規模は、幅約4.5ｍ、長さ約11.5ｍ、深さは約1.0ｍある。埋土は北壁断面（図版70）の２～４層で、上層に角礫を多く含む。

註

１）　森岡秀人・藤川祐作「矢穴の型式学」『古代学研究』第180号　2008年、また現地にて森岡秀人氏に御教示いただいた。

２）　竹蛇籠の用語については、以下を参考にした。飛島邦彦「竹蛇籠の技術を伝える－人と自然が共存するおだやかな水辺の風景のために」『sabo』vol.111　一般財団法人砂防・地すべり技術センター　2012年

４．遺　　物

（１）出土遺物の概要（表２）

遺物は整理箱にして530箱出土した。内容は、土器類・瓦類・土製品が485箱、木製品20箱、石製品17箱、金属製品８箱である。

土器類には、弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器がある。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・軒桟瓦・鳥衾瓦・道具瓦がある。

遺物の帰属時期は、弥生時代から明治時代まで各時期のものがある。出土量では、平安時代後期から鎌倉時代初頭のものが最も多く、次いで江戸時代、室町時代から安土桃山時代、弥生時代から古墳時代と続く。飛鳥時代・奈良時代・明治時代の遺物は少量である。

なお、平安時代以降の土師器の型式・年代観については平尾政幸氏の編年に拠った[1)]。各遺物の個別の詳細については、巻末の付表１～７にまとめた。

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
弥生時代	弥生土器、石製品		弥生土器22点、石製品３点		
古墳時代	古式土師器、須恵器		古式土師器34点、須恵器２点		
飛鳥時代 ～奈良時代	土師器、須恵器、黒色土器、瓦類、銭貨		須恵器１点、軒丸瓦１点、銭貨５点		
平安時代 ～鎌倉時代	土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、瓦器、山茶椀、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、金属製品、銭貨、石製品、土製品、骨・貝		土師器344点、須恵器24点、黒色土器７点、灰釉陶器３点、緑釉陶器３点、白色土器１点、瓦器・瓦質土器170点、山茶椀１点、焼締陶器１点、輸入陶磁器５点、軒丸瓦12点、軒平瓦20点、木製品13点、金属製品９点、銭貨33点、石製品９点、土製品７点、骨・貝		
室町時代～ 安土桃山時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、金属製品、銭貨、石製品、土製品、骨・貝		土師器141点、瓦器14点、焼締陶器６点、施釉陶器９点、輸入陶磁器19点、軒丸瓦16点、軒平瓦31点、木製品44点、金属製品４点、銭貨２点、石製品７点、土製品７点、骨・貝		
江戸時代 ～明治時代	土師器、瓦器、土師質土器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、金属製品、銭貨、石製品、土製品、その他、骨・貝		土師器43点、瓦器６点、土師質土器１点、焼締陶器19点、施釉陶器90点、輸入陶磁器７点、磁器７点、軒丸瓦18点、軒平瓦９点、瓦12点、木製品58点、金属製品47点、銭貨７点、石製品25点、土製品３点、その他３点、骨・貝		
合　計		585箱	1556点（135箱）	54箱	396箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より55箱多くなっている。

（２）土器類（図版74～97・166～174、付表１）

１）弥生時代から古墳時代

弥生時代から古墳時代前期の土器は、２区竪穴建物2800・2355、溝2841、落込2392、土坑2778、３区の土坑3472、流路3400、溝3451・3470、５区落込5071などから出土した。２区土坑2778は竪穴建物2355の下層で検出した土坑である。また流路3400は奈良時代から平安時代の流路で、弥生土器は混入品と考えられる。古墳時代中期の土器は３区溝3055から出土した。溝3055は室町時代の溝であり、古墳時代の土器は混入品と考えられる。

土坑3472出土土器（図版74・166　１）　弥生土器の甕（１）が出土した。時期は中期前葉[2)]。大型甕で、口縁端部を下方にやや肥厚させ、櫛描波状文を施す。体部外面は粗いタテハケ、口縁部内面は粗いヨコハケ、体部内面はナデで調整する。

流路3400出土土器（図版74　２～５）　弥生土器の甕・壷が出土した。時期は中期。流路3400は奈良時代から平安時代の流路と考えられ、弥生土器は混入品である。

２・４は甕底部である。２は内面にコゲが付着する。３・５は壷底部と考えられる。いずれも摩滅が著しく調整不明。

竪穴建物2800出土土器（図版74・166　６～18）　古式土師器の壷・鉢・甕・高杯が出土した。時期は古墳時代初頭の庄内式併行期である[3)]。

６は小型の直口壷、７は受口状口縁をもつ鉢である。６・７は胎土に砂粒を非常に多く含む。８は小型の丸底鉢である。９は受口状口縁をもつ甕である。摩滅が著しいが外面の一部に煤の付着が確認できる。10は胎土に角閃石を含む生駒西麓産の庄内式甕である。11は在地産の庄内式甕と考えられ、口縁端部外面に面をもち、内面は頸部直下までヘラケズリする。12はくの字状口縁の甕である。口縁部は外反し大きく開く。体部外面下半に煤が付着する。13～15は鉢で、14は有孔鉢、15は台付鉢の底部である。16～18は高杯である。16は深い鉢状の杯部をもち、口縁部は大きく直線的に開く。脚部は屈曲して大きく開く。胎土の色調がにぶい赤褐色を呈し、搬入品の可能性がある。17は脚注から脚裾にかけてゆるやかに開くもの、18は脚裾が屈曲点をもって開くものである。

竪穴建物2355出土土器（図版74　19～27）　古式土師器の甕・壷・鉢・高杯が出土した。時期は古墳時代初頭の庄内式併行期である。

19～22は甕である。19はくの字に外反する疑口縁に斜め上方にのびる２次口縁が付加される山陰系の甕である。胎土は暗赤褐色を呈し、雲母を多量に含む。搬入品である。20・21はくの字状口縁の甕である。22は甕底部である。23は有孔鉢である。24は壷底部と考えられる。25～27は高杯脚部である。25は低脚高杯の脚部、26は脚裾が屈曲点をもって開くもの、27はゆるやかに開くものである。

溝2841出土土器（図版75・166・167　28～44）　弥生土器の壷・甕・鉢・高杯が出土した。時期は弥生時代後期後葉で庄内式併行期のものが一部含まれる。

28～33は壷である。28・29は小型の広口壷である。30は短頸壷である。調整はやや粗く、タタ

キのちハケで、体部上半はタタキ目が明瞭に残る。31は大型の複合口縁をもつ壷である。搬入品の可能性があるが、胎土は在地産のものに類似する。32は広口壷である。口縁端部は上下に拡張し、３条の擬凹線文をめぐらす。33は壷底部である。34～39は甕である。34～36はくの字状口縁をもつ甕、37は受口状口縁をもつ甕である。38はくの字状口縁の端部を摘まみ上げる。39はタタキ甕の底部である。40はくの字状口縁をもつ大型の鉢である。体部外面下半に粗いヘラミガキを施す。41は有孔鉢である。42～44は高杯。42は椀状の杯部に大きく開く低脚がつく。43は深い鉢状の杯部をもつものである。44は浅い鉢状の杯部をもち、口縁部は外反する。脚部は明瞭な屈曲点をもたずハの字に開く。

落込2392出土土器（図版75・167　45～52）　古式土師器の壷・甕・高杯・ミニチュア土器が出土した。時期は古墳時代初頭の庄内式併行期である。

45～47は壷である。45は小型の広口壷と考えられる。46は広口壷で、直立する頸部から口縁部が水平に開き、端部を上方に拡張し３条の擬凹線をめぐらす。47は広口壷で、頸部から口縁部が明瞭な屈曲点をもたずに開く。口縁端部は上方に摘まみ上げる。48・49は甕である。48はくの字状口縁の甕、49は胎土に角閃石・雲母を含む生駒西麓産の庄内式甕である。50はミニチュア土器の鉢である。51・52は高杯脚部である。52は屈曲して大きく開く低脚の高杯で、椀状の杯部がつくものと考えられる。砂粒をほとんど含まない精良な胎土で、搬入品の可能性がある。

落込5071出土土器（図版76・167　53）　古式土師器の甕が出土した。時期は古墳時代初頭の庄内式併行期である。

53はくの字状口縁をもつ甕である。体部最大径が中央より下にある。体部外面下半に煤が付着する。

溝3451出土土器（図版76　54）　古式土師器の壷（54）が出土した。時期は古墳時代前期から中期か。球形の体部から口縁がやや外反ぎみに立ち上がる。短頸壷もしくは二重口縁壷と考えられる。

土坑2778出土土器（図版76　55）　古式土師器の高杯脚部（55）が出土した。時期は古墳時代初頭。脚柱部から屈曲点をもって脚裾が開く。

溝3470出土土器（図版76　56）　古式土師器の甕（56）が出土した。時期は古墳時代前期である。口縁は内弯し、端部が肥厚するいわゆる布留式甕である。

溝3055出土土器（図版76・167　57・58）　須恵器の有蓋高杯（57・58）が出土した。時期は古墳時代中期後葉。

58は脚部に長方形の透かしが三方に設けられる。ロクロの回転方向は右回りである。

２）飛鳥時代から平安時代中期

３区流路3400からは飛鳥時代から平安時代中期までの土器がまとまって出土した。奈良時代の土器は３区溝3428から、平安時代前・中期の土器は３区土坑3412・3386、５区溝5058から出土した。

土坑3412出土土器（図版76・167　59）　灰釉陶器の壷（59）が出土した。口縁部を欠損する

が、長頸壷と考えられる。時期は平安時代前期。

溝3428出土土器（図版76・167　60）　須恵器の壷（60）が出土した。肩部に稜をもつ体部に細長い頸がつく。肩部全体に自然釉がかかる。時期は奈良時代。

土坑3386出土土器（図版76　61～64）　土師器皿、黒色土器椀・甕が出土した。時期は平安時代中期、京都３Ａ段階に相当する。

61・62は土師器皿Ａである。63は黒色土器の椀で、内面のみ黒色化したいわゆるＡ類である。64は黒色土器の甕で、同じく内面のみ黒色化したＡ類である。体部外面にはヘラミガキが施される。

溝5058出土土器（図版76・167　65～73）　土師器皿、黒色土器椀、須恵器椀が出土した。時期は平安時代中期後半から後期初頭の京都４Ａ～４Ｃ段階に相当すると考えられる。

65～71は土師器皿である。65～67は皿Ａ、68～70は皿Ｎ、71は台付皿である。72は黒色土器の椀である。内外面ともに黒色化するいわゆるＢ類である。73は須恵器の鉢底部である。底部は糸切りする。

流路3400出土土器（図版77・168　74～112）　土師器皿・杯、黒色土器椀、須恵器杯蓋・杯身・椀・壷・平瓶、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀・壷が出土した。時期は飛鳥時代から平安時代中期のものが混在する。

74～80、82～85は土師器皿Ａ、81は土師器杯Ａである。京都２Ｂ～４Ａ段階併行のものが混在する。74・75・78は内面にハケ目が見られる。86は土師器杯Ｂである。87～90は黒色土器の椀である。87～89は内面のみ黒色化したＡ類、90は両面ともに黒色化したＢ類である。87は底部外面に「大」の線刻がある。91・92は須恵器杯蓋である。91は内面が平滑で墨痕が認められ、硯に転用されたと考えられる。93～96は須恵器杯Ａ、97・98は須恵器杯Ｂである。99・100は須恵器椀で、いずれも底部糸切りの平高台が付く。101～104は須恵器壷である。101・103は倒卵形の体部に外反する頸部が付き、底部は糸切りする。103は球形の体部に輪高台が付く。104は肩部に稜をもつ体部に細長い頸が付くものと考えられる。肩部全体に自然釉がかかる。105・106は須恵器の平瓶である。105は把手が付くタイプで肩部に自然釉がかかる。107は広口の壷口縁部である。頸部外面にヘラ記号が刻まれる。108～110は緑釉陶器椀。108は内面に陰刻花文が入る。尾張産。109は削り出しの輪高台、110は削り出しの平高台で、いずれも山城産。111は灰釉陶器椀、112は灰釉陶器壷の体部以下である。

３）平安時代後期から鎌倉時代初頭

平安時代後期から鎌倉時代初頭の土器は、２区溝2235、３区溝3185・3240、土坑3056・3182・3147・3392、井戸3058、柱列3233などから出土した。種類は土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。最も出土量が多いのは土師器・瓦器で、特に溝3185からは多量に出土した。

土師器皿には、京域主流形の皿と胎土に雲母や赤色粒を含む乙訓在地形の皿があり、後者が主体である[4)]。

瓦器には、主に楠葉型・大和型・和泉型と、楠葉型と大和型の両方の特徴を併せ持つ型式（以下、ここでは「折衷型」という）がある[5)]。瓦器椀の分類は以下に従って行った。

楠葉型瓦器椀

丸みの強い器形で、口縁端部が器面に対して垂直方向から施し、鋭い線を形成する。内面見込部の暗文は長楕円の連結輪状のものと、丸みのあるジグザグ状のものが多い。

大和型瓦器椀

丸みが強く薄手の体部に良好なイブシ、比較的シャープなヘラミガキ。口縁部はわずかに外反気味。口縁端部に沈線を入れる際、真上（鉛直方向）より工具をあてることで、沈線ではなく段を成形することが最大の特徴。底径は楠葉型と比べるとやや大きい。

和泉型瓦器椀

口縁部に沈線をもたない。器壁が薄くてヘラミガキが細く、高台の断面形が三角形を呈するもの（淀川以南）とヘラミガキが５㎜前後と太く、高台の断面形が四角形を呈するもの（淀川以北）とがある。

折衷型瓦器椀

楠葉型と大和型の両方の特徴を併せ持ち、そのどちらかに帰属させることが困難なもの。全体のプロポーションの傾向としては器高が低く、底径が大きい。また今回、基本的には楠葉型または大和型の特徴を有しながらも、沈線をもたないものもこのグループに含めている。

溝2235出土土器（図版78・168　113～170）　土師器、瓦器が出土した。時期は京都５Ｂ段階に相当する。

土師器は、乙訓在地形皿（113～143）、甕（144）、羽釜（145）がある。皿は口径が8.8～9.6㎝の小皿と12.2～14.7㎝の大皿、18.6～19.8㎝の特大皿がある。いずれも胎土に雲母や赤色粒を含む乙訓在地形の特色を持つが、一部口縁部に二段ナデを施すなど京域主流形土師器皿を模倣する個体もある。瓦器は、椀（146～167）と皿（168～170）がある。146～160が楠葉型、161～165が大和型、166が折衷型、167が和泉型である。楠葉型瓦器椀は、外面にヘラミガキをするものはわずかである。高台の形状は薄い三角形を呈する。和泉型瓦器椀は外面にヘラミガキを施さず、底部内面に格子状の暗文を施す。169は内部底面にジグザグ状の暗文を施す。

溝3185出土土器　溝3185からは1,000点以上の土器類が出土した。これらの土器類の出土は、溝の西肩口から底部に集中しており、完形もしくは完形に近いものが多い。出土した土器類は、６つのエリアとそのエリアごとで上層・下層の全12群に分けて取り上げ、それぞれの群で器種構成や時期などの差異があるのか否かの検証を行った。詳細な分析・検証については、まとめに記し、ここでは、上層・下層の２つに分けて296点を図示した。

溝3185下層出土土器（巻頭図版３、図版79・80・169　171～287）　土師器、白色土器、瓦器、輸入陶磁器が出土した。時期は京都５Ｂ段階に相当する。

土師器は、乙訓在地形の皿（171～247）、京域主流形の皿（248）、杯（249）、台付皿（250～253）がある。乙訓在地形の皿は、口径が8.2～10.4㎝の小皿と13.1～15.2㎝の大皿がある。杯（249）は、底部に回転糸切りの痕跡が残る。白色土器は、高杯（254）がある。瓦器は、椀（255～283）、皿

（284～286）があり、大半が椀である。255～266が楠葉型、267～275が大和型、276～281が折衷型、283が和泉型である。楠葉型瓦器椀は、いずれも外面にヘラミガキが施されるが、口縁部付近のみのものもある。282は産地不明、内面暗文が他の個体と比してかなり密な連結輪である。284は底部内面全体にジグザグ状の暗文を施す。287は輸入陶磁器の白磁椀である。

溝3185上層出土土器（巻頭図版３、図版81～84・169　288～466）　土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器、山茶椀が出土した。時期は京都５Ｂ段階に相当する。

土師器は、乙訓在地形の皿（288～380）、皿（381）、台付皿（382～387）、甕（459）、羽釜（460・461）がある。乙訓在地形の皿は、口径が8.3～9.7㎝の小皿と13.4～15.4㎝の大皿がある。381の皿は底部に回転糸切り痕とヘラ記号が残る。瓦器は椀（388～444）・皿（445～454）がある。椀は388～407が楠葉型、408～423が大和型、424～431が折衷型、432～442が和泉型、443は産地不明だが讃岐産のものと似る。楠葉型瓦器椀は、底部外面にヘラミガキを施すものがほとんどだが、口縁部付近にのみに施すものが多い。和泉型瓦器椀は、底部内面の暗文が格子状のものと平行線のものがある。輸入陶磁器には、白磁椀（455・456）と壷（457・458）がある。458の底部には花押が墨書される。462は山茶椀の皿である。須恵器には、鉢（463）・壷（464）・甕（465・466）がある。

溝3240出土土器（図版85・169　467～501）　土師器、瓦器、焼締陶器が出土した。時期は京都５Ｂ～６Ａ段階に相当する。

土師器は、乙訓在地形皿（467～488）、高台付き皿（489）がある。瓦器は、瓦器椀（490～500）がある。490～499が楠葉型、500が折衷型である。焼締陶器は常滑産甕（501）がある。

土坑3182出土土器（図版86　502～524）　土師器、瓦器が出土した。土師器はわずかで大半が瓦器である。時期は京都５Ｂ～６Ａ段階に相当する。

土師器は乙訓在地形皿（502～508）がある。口径8.5～9.4㎝の小皿と、14.1㎝の大皿がある。瓦器は椀（509～522）、羽釜（523・524）がある。椀は509～520が楠葉型、521が折衷型、522が和泉型である。524の羽釜は三足付きである。

井戸3058出土土器（図版86・169　525～532）　土師器、須恵器、瓦器が出土した。時期は京都５Ｂ～６Ａ段階に相当する。

土師器は、乙訓在地形皿（525～530）がある。口径7.8～9.0㎝の小皿と12.9～13.6㎝の大皿がある。須恵器は、片口鉢（531）がある。口縁部は垂直に立ち上がり、断面三角形状に仕上げる。瓦器は折衷型の椀（532）がある。

土坑3392出土土器（図版86・169　533～542）　土師器が出土した。時期は京都５Ｂ～６Ａ段階に相当する。

533～541は乙訓在地形皿である。口径8.8～9.4㎝の小皿と14.2～14.4㎝の大皿がある。542は壷である。体部の中央付近に接合痕がある。口縁部はヨコナデし外反する。

土坑3147出土土器（図版87・170　543～606）　土師器、瓦器、須恵器が出土した。時期は京都６Ａ段階に相当する。

土師器は、乙訓在地形の皿（543～587）がある。口径8.3～10.2㎝の小皿と、12.6～14.8㎝の大皿がある。瓦器は椀（588～603）と皿（604・605）がある。椀は588～598が楠葉型、599～602が大和型、603は和泉型である。須恵器は杯（606）がある。底部は回転糸切りする。

柱列3233出土土器（図版88　607～616）　土師器が出土した。時期は京都６Ａ段階に相当する。

土師器は、乙訓在地形皿（607～614）と台付皿（615）、鍋（616）がある。

土坑3056出土土器（図版88　617・618）　土師器の乙訓在地形皿（617・618）が出土した。口径11.0～14.0㎝の大皿である。時期は京都６Ａ段階に相当する。

４）室町時代から安土桃山時代

室町時代から安土桃山時代の土器は、２区井戸2666、３区溝3100・3055や土坑3375、４区溝4047、５区井戸5028、溝5025～5057、第４面整地層などから出土した。この時期の土師器皿は、前時期と同様、京域主流形と乙訓在地形のものがあり、後者が主体である。室町時代後葉段階では、形状や器壁の厚みは両者の差異が小さく、ハケ目の有無や胎土の赤色粒の有無による判別が有益であるが、皿Sh（いわゆるへそ皿）ではハケ目が認められず、京域主流形と乙訓在地形の判別が困難なものがある。

溝5057出土土器（図版88　619～624）　土師器、瓦器が出土した。時期は京都９Ｂ段階に相当する。

土師器は、乙訓在地形の皿（619～623）がある。619は京域主流形の皿Ｎ、620は皿Sh、621～623は皿Ｓに相当する。瓦器は椀（624）がある。土師器の年代よりは古く、混入もしくは溝の存続年代を示すものと考えられる。

井戸5028出土土器（図版88　625～627）　土師器皿が出土した。いずれも乙訓在地形で、625・626は京域主流形の皿Ｎ、627は皿Ｓに相当する。時期は京都10Ａ段階に相当か。

溝4047出土土器（図版88　628～630）　土師器皿が出土した。いずれも乙訓在地形で、628・629は皿Ｎ、630は皿Ｓに相当する。時期は京都９Ｂ～Ｃ段階に相当か。

溝5050出土土器（図版88　631）　土師器の羽釜（631）が出土した。外面全体に煤が付着し、外面上反は被熱により器壁が剥離する。

井戸2666出土土器（図版88　632～637）　土師器、瓦器が出土した。時期は京都９Ｃ～10Ａ段階に相当する。

土師器は、乙訓在地形の皿（632～634）と京域主流形の皿Ｓ（635・636）がある。634は内面底部から口縁部にかけてハケ目が明瞭に付く。瓦器は羽釜（637）がある。内面に焦げが付着する。

５区第４面整地層出土土器（図版88　638～660）　土師器、瓦器、輸入陶磁器が出土した。時期は京都９Ｃ～10Ａ段階に相当する。

土師器は、乙訓在地形の皿（638～653）がある。638～646は皿Ｎに相当、647～653は皿Ｓに相当する。643～645は口縁部に油煙が付き灯明皿として使用されている。654は瓦器で、周縁は欠損するが、８箇所の穿孔が認められ、炉の火皿と考えられる。輸入陶磁器は龍泉窯系の青磁椀（655～659）と白磁皿（660）がある。

土坑3375出土土器（図版88・170　661～676）　土師器が出土した。時期は京都９Ｃ～10Ａ段階に相当する。

土師器は、乙訓在地形の皿（661～676）がある。661～666は皿Ｎに相当、667・668は皿Sh、669～676は皿Ｓに相当する。667・669は内面に粗いハケ目が明瞭に付く。

溝3100出土土器（図版89・171・172　677～728）　土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器が出土した。時期は京都10Ｂ段階に相当する。

土師器は、皿（677～715）、羽釜（716）がある。土師器皿のうち694・707・708が京域主流形、それ以外は乙訓在地形である。677～691は皿Ｎ、692～700は皿Sh、701～715は皿Ｓに相当する。乙訓在地形皿はハケ目を残すものが多く、713・714は内外面ともにハケ目が明瞭に付く。瓦器には、羽釜（717・718）がある。いずれもほぼ完形で、外面下半に厚く煤が付着する。焼締陶器は、備前産の擂鉢（719）がある。施釉陶器には、瀬戸・美濃系の天目椀（720・721）と小型の花瓶（722）がある。輸入陶磁器には、白磁椀（723）、白磁皿（724・725）、龍泉窯系の青磁椀（726）、青磁皿（727・728）がある。723の白磁椀と724の白磁皿の底部外面には墨書がある。727・728の青磁皿は類似品である。

溝5027出土土器（図版90・172　729～771）　土師器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器が出土した。時期は京都10Ｂ・Ｃ段階に相当する。

土師器は、皿（729～757）、台付皿（758）、鍋（759・760）、羽釜（761）、焙烙（762）がある。土師器皿は、729～731・733・755は京域主流形、それ以外は乙訓在地形である。740・741・745・750は灯明皿として使用されている。乙訓在地形の皿は、内面に粗いハケ目を残すもの、底部外面の粘土収縮皺が目立つものが多い。729～749は皿Ｎに相当、750～757は皿Ｓに相当する。759の鍋は口縁部に楕円形の穿孔がある。761の羽釜は口縁部に２個一対の穿孔がある。瓦器には、擂鉢（763）、羽釜（764）、香炉（765・766）がある。765の香炉の外面には唐草文のスタンプが押される。施釉陶器は、瀬戸・美濃系の天目椀（767）と花瓶もしくは燭台の脚（768）がある。768は外面に鉄釉がかかり、二次被熱を受ける。輸入陶磁器には、白磁皿（769）、龍泉窯系の青磁輪花皿（770）、青花の椀（771）がある。

溝5025出土土器（図版90　772・773）　焼締陶器の擂鉢（772・773）が出土した。772は信楽産、773は備前産である。

溝5026出土土器（図版90　774～783）　土師器、瓦器、輸入陶磁器が出土した。時期は京都10Ｂ段階に相当する。

土師器は、乙訓在地形の皿（774～779）がある。774・775は皿Ｎに相当、776～779は皿Ｓに相当する。瓦器は、花瓶（780）と羽釜（781）がある。780は剥離痕からハの字に開く脚が付くと考えられ、小型の花瓶などの可能性が考えられる。内面は未調整である。外面には唐草文と雷文のスタンプが押される。輸入陶磁器は、白磁椀（782）と龍泉窯系の青磁椀（783）がある。

５区第３面整地層出土土器（図版91　784～788）　土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器が出土した。

土師器は、乙訓在地形の皿（784）がある。皿Ｓに相当する。瓦器は器形不明品（785）が出土した。外面はハケ状工具で波状文を描く、内面は粗いナデで端部付近はヘラケズリする。焼締陶器は、備前産擂鉢（786）と信楽産擂鉢（787）がある。輸入陶磁器は、青磁の皿（788）がある。

溝3055出土土器（図版91　789～805）　土師器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器が出土した。時期は京都９Ｃ～11Ａ段階に相当する。一部江戸時代前期の土器が含まれるが、溝の最終埋没年代を示す最上層から出土したものであるため、ここで掲載する。

土師器は、乙訓在地形の皿（789～798）と京域主流形の皿（799）がある。789～795は皿Ｎに相当、796～799は皿Ｓに相当する。焼締陶器は、備前産の鉢（800）がある。口縁部が輪花状になる。施釉陶器には肥前系の皿（802・803）と椀（804）、黄瀬戸の折縁ソギ皿（805）がある。輸入陶磁器には、白磁皿（801）がある。

土坑3385出土土器（図版91　806・807）　瓦器が出土した。806・807は瓦器の羽釜である。807は大型のものである。

５）江戸時代

江戸時代の土器は、前期のものが４区溝4030、水制4035、護岸4031、流路4024などから、後期以降のものが３区の護岸3200・3001、４区の護岸4001、５区の地業5002などから出土した。土師器皿は、江戸時代前期では京域主流形のものが主体、江戸時代後期では乙訓在地形が主体となる。

溝4030出土土器（図版92・93・173　808～871）　土師器、焼締陶器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器が出土した。時期は京都11Ａ～11Ｂ段階に相当する。

土師器は、乙訓在地形の皿（809・810・817）と京域主流形の皿（808・811～816）、手づくねの折縁皿（818）、つぼつぼ（819・820）、塩壷（821）、焙烙（822）がある。土師器皿のうち、808～810は皿Ｎに相当、811～817は皿Ｓに相当する。811・812・817は灯明皿として使用されている。822の焙烙は、外面全面に煤が付着する。焼締陶器は、信楽産擂鉢（823）、丹波産擂鉢（824）、備前産鉢（825）・小壷（826）・花入（827）・徳利（828）、丹波産皿（829）・水差（830）がある。瓦器は、大和産擂鉢（831）と大型深鉢（832）がある。施釉陶器は瀬戸・美濃系のものと肥前系のものがある。肥前系の割合が高い。833は古瀬戸の灰釉皿で内外面とも全面に施釉される。834・835は黄瀬戸の折縁皿である。836～843は美濃系で、皿（836～838）、菊皿（839・840）、小杯（841）、天目椀（842）、華南三彩写しの大型の輪花皿（843）がある。842の底部外面には「白」の字が朱書きされる。844～869は肥前系で、小杯（844・845）、椀（846～850）、皿（851～853・856～862）、輪花皿（863～865）、鉢（854・855・866・867）、徳利（868）、大鉢（869）がある。853・863の底部外面には墨書がある。844の小杯は灯明皿に転用されている。869の大鉢は外面の一部に煤が付着する。輸入陶磁器には白磁の小杯（870）、青花の皿（871）がある。871の皿底部外面には漆状のものが付着する。

水制4035出土土器（図版94・174　872～896）　土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器が出土した。時期は京都11Ｂ段階に相当する。

土師器は、京域主流形の皿Ｓ（872・873）、塩壷（874）がある。873の土師器皿は灯明皿として

使用されている。施釉陶器は瀬戸・美濃系のものと肥前系のものがある。肥前系の割合がやや高い。875は瀬戸の折縁ソギ皿である。876～880は美濃系で、菊皿（876）、皿（877）、小壷（878）、天目椀（879・880）がある。877の小壷は総織部の振り出しである。881～892は肥前系で、皿（881～884・888）、鉢（885・886）、輪花皿（887）、大皿（889）、椀（890）、天目椀（891）、擂鉢（892）がある。881と884の皿の底部外面には墨書がある。892の擂鉢は口縁部の内外面が施釉される。肥前系擂鉢は京都では出土例が極めて少ない。焼締陶器には、備前産壷（893）、丹波産鉢（894）・擂鉢（895）がある。893の壷は体部の一部を意図的に凹ませている。輸入陶磁器には、青花の椀（896）がある。

護岸4031出土土器（図版95　897～909）　土師器、施釉陶器、輸入陶磁器が出土した。時期は京都11Ｂ段階に相当する。

土師器は、京域主流形の皿Ｎ（897・898）と乙訓在地形の皿Ｓ相当（899）、つぼつぼ（900・901）がある。901のつぼつぼの底部外面には墨書がある。施釉陶器には肥前系の皿（902～904）、椀（905）がある。904の皿底部外面には墨書がある。焼締陶器には備前産の片口壷（906）、丹波産壷（907）がある。輸入陶磁器には白磁の輪花皿（908）、青花の皿（909）がある。

土坑4011出土土器（図版95・174　910～912）　瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器が出土した。時期は江戸時代前期と考えられる。

瓦器は、大型の浅鉢（910）がある。焼締陶器は、備前産擂鉢（911）がある。輸入陶磁器は青花の椀（912）がある。

土坑4012出土土器（図版95　913）　瓦器の深鉢（913）が出土した。大型で体部上半は欠損する。

土坑5005出土土器（図版95・174　914）　瓦器の深鉢（914）が出土した。台形の低脚が三方に付く。

流路4024出土土器（図版96・174　915～947）　土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器が出土した。時期は江戸時代前期と考えられる。

土師器は、京域主流形の皿Ｓ（915～918）、焙烙（919・920）がある。土師器皿の916・918は灯明皿として使用されている。瓦器は、香炉（921）がある。焼締陶器は丹波産擂鉢（922～924）がある。施釉陶器は、備前産壷（925）、丹波産鉢（926・927）、美濃系の小椀（928・929）・皿（930）・天目椀（931）、肥前系の鉢（932・933）・椀（934～937）・皿（938～943）、大鉢（944）がある。941の皿底部外面には墨書がある。国産磁器に肥前系磁器の白磁椀（945）と染付菊皿（946）がある。輸入陶磁器には青磁椀（947）がある。

護岸3200出土土器（図版97　948～956）　土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器が出土した。時期は江戸時代後期である。

土師器は、京域主流形の皿Ｎ（948）、乙訓在地形の皿（949～952）がある。949・950は皿Ｎに相当、951・952は皿Ｓに相当し、灯明皿として使用されている。焼締陶器には鉢（953）がある。施釉陶器には肥前系の皿（954・955）がある。磁器には染付の椀（956）がある。

地業5002出土土器（図版97　957）　焼締陶器の備前産擂鉢（957）が出土した。擂目は９条１単位。

護岸3001出土土器（図版97　958～972）　土師器、施釉陶器が出土した。時期は、江戸時代後期である。

土師器は、乙訓在地形の皿Ｎ相当（958・959）と皿Ｓ相当（960～963）、つぼつぼ（964・965）、焙烙（966）がある。施釉陶器には、肥前系の鉢（967）・皿（968）・椀（970）、京・信楽系の小皿（969）・仏飯器（971）、丹波産の壷（972）がある。

護岸4001出土土器（図版97　973～980）　土師質土器、施釉陶器、磁器が出土した。時期は江戸時代後期から明治時代である。

土師質土器には、風炉（973）がある。施釉陶器には、肥前系の刷毛目椀（974）・皿（975）、京・信楽系の灯明皿（976）がある。磁器には、肥前系磁器の染付椀（977～979）、鉄釉の壷（980）がある。

（３）瓦類（図版98～106・175・176、付表２）

瓦類は整理箱にして約90箱分出土した。種類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・軒桟瓦・鳥衾瓦・輪違瓦がある。時期は、奈良時代から江戸時代までの各時期のものがある。軒丸瓦と軒平瓦は計171点出土した。その他に軒桟瓦１点、鳥衾瓦１点がある。その内、同笵・同文の分類を行って選別し、107点を図化した。また、丸瓦・平瓦・輪違瓦については残存状況がよいものを図化した。軒瓦は、奈良時代のものが１点、平安時代後期のものが31点、鎌倉時代のものが１点、室町時代のものが30点、安土桃山時代のものが17点、江戸時代のものが26点である。個々の瓦の文様的特徴・手法の特徴などの詳細については付表２に記載した。

瓦１～46は軒丸瓦である。奈良時代の軒瓦（瓦１）は、流路3400から出土した。難波宮式の重圏文軒丸瓦である。平安時代後期および鎌倉時代の軒丸瓦（瓦２～13）は、各調査区から出土したが、特に３区土坑3056からは軒平瓦とともにまとまって出土した。播磨産、山城産が多く、産地不明のものもある。室町時代から安土桃山時代の軒丸瓦（瓦14～29）は大半が５区から出土した。與杼神社との関連が窺われる。江戸時代の軒丸瓦（瓦30～46）は、大半が４区の溝4030と水制4035、５区の各遺構から出土した。３区護岸3473出土の瓦44のみ三つ葉葵文で、それ以外は巴文である。４区出土のものは安土桃山時代に遡る可能性がある。４区溝4030、水制4035出土の瓦30や瓦45・46は大型の軒丸瓦である。

瓦47は鳥衾瓦である。３区下段出土。

瓦48～106は軒平瓦である。平安時代後期の軒平瓦（瓦48～67）は、３区土坑3056からまとまって出土したほか、５区の各溝などからも新しい遺物に混入して出土した。播磨産、山城産、丹波産、のものがある。１次調査と同様、尊勝寺や鳥羽離宮金剛心院と同笵のものも含まれる。室町時代から安土桃山時代の軒平瓦（瓦68～98）は、軒丸瓦と同様、大半が５区からの出土である。また５区出土のこの時期の軒瓦は小振りのものが多い。江戸時代の軒平瓦（瓦99～106）は、軒丸瓦

と同様、多くが４区の溝4030と水制4035から出土した。瓦103～105は大型の軒平瓦で、大型軒丸瓦とセット関係にあると考えられる。

瓦107は軒桟瓦である。３区護岸3001出土。

瓦108～111は丸瓦と平瓦である。瓦108・110は、平安時代後期の軒瓦がまとまって出土した３区土坑3056出土。瓦109は４区水制4035出土。瓦111は５区溝5026出土。

瓦112は道具瓦の輪違瓦である。４区溝4030出土。

瓦113～119は刻印瓦である。刻印は７種あり、それぞれの出土点数は付表２に記載した。４区水制4035からの出土が大半を占める。

（４）木製品（図版107～122・177～181、付表３）

木製品は、整理箱にして20箱分出土した。種類は、漆器、器、箸、火付け木、刀子の柄・鞘、下駄、折敷、曲物、柄杓柄、杓子、箆、船形、玩具、人形頭、櫓、杭、卒塔婆、木札、荷札、船材などのほか、用途不明品も多い。時期は、平安時代から江戸時代までの各時期のものがあるが、４区の江戸時代の護岸関係遺構、４区の室町時代末から安土桃山時代の溝3055からの出土が多い。また１次調査に引き続き、溝3055からは卒塔婆がまとまって出土した。

木１～12は漆器である。全て室町時代後期から江戸時代前期の遺構から出土した。木１は蓋、木２～10は椀、木11・12は浅椀である。溝4030から出土した木５・６・８はいずれも外面に丸に右三つ巴文が描かれる。

木13は杯、木14は皿、木15～25は箸である。木14の皿は流路3400第４層から出土しており、平安時代前期のものと考えられる。木26～29は火付け木である。木30は用途不明の棒状木製品で、ほぼ完存する。中央を凹ませ杵形に加工する。木31は用途不明の有頭木製品である。木32は刀子の鞘である。室町時代末の溝3055から出土。木33は柄である。目釘穴があく。木34は紡輪か。木35は用途不明の板状木製品で、片側面を鋸歯状に加工する。木36は栓である。木37・38は用途不明木製品で、短い円筒状の材の先を削り尖らせる。先端は欠損する。いずれも溝3055から出土。木39～44は下駄、木45は下駄の歯である。連歯下駄の木39・40は平安時代後期の溝3185出土、木42・43は溝3055出土。差歯下駄の木41は室町時代末の溝2646出土、木44は江戸時代前期の水制4035出土である。木41は差歯の一部、木44は差歯の一部と差歯を打ち付けた鉄釘が刺さったまま残り、台には釘穴が４箇所確認できる。木45の下駄の歯は、木41と同一遺構から出土しており、木41と組み合う歯の可能性がある。木46～50は折敷である。木46～48は隅切折敷でいずれも溝3055から出土している。木46は中央に○の焼き印が押される。木47は▽の線刻があり、両端が炭化する。木48は周囲に漆が塗られる。木49・50は平折敷で、木49は木釘が残り、木50は綴紐が残る。木51は大型の長方形折敷の底板か。木釘と綴紐が残る。木52・53は曲物である。木54～56は曲物の底板で、大きさから柄杓の底板と考えられる。木57～61は柄杓の柄と考えられる。柄杓関連の遺物は全て４区の江戸時代の遺構から出土している。木62は大型の杓子か。片面に漆状のものが塗られる。溝3055出土。木63～65は箆である。木66・67は舟形である。木66は江戸時代の

流路4024から出土した。舟底中央に帆の基部と思われる棒が差し込まれている。船首にも２箇所の窪みがあり、左右の舷部分には櫂をかけるための切り込みがある。木67は平安時代後期の溝3185から出土した。舟底に２箇所、舟首に１箇所、木釘が残る。木68・69はぶりぶりとも呼ばれる毬杖の毬か。いずれも溝3185出土。木70は人形の頭である。木71は工具か。有頭状で下部には切り込みがある。木72～83は用途不明木製品である。木72は板状で、頭部に切り込みが回り、紐をかけたような圧痕がある。木73は板状で、上部に１箇所、円形の穿孔がある。木74は一部に漆状の物が付着する。木75は角柱状で、上部に紐の圧痕があり、中央部には鉄釘が斜めに打ち込まれる。木76は棒状で、一方の先端に切り込みがある。木77は板状で、先端を尖らせる。木78は角柱状で、１箇所の穿孔と、８箇所の貫通しない穴があく。木79は板状で、連続して８箇所の穿孔がある。木80は板状で、台形に加工される。木81は板状で、長方形に加工される。木82・83は薄い板状で、先端を斜めに切り落とす。木84は櫓と考えられる。水制4035から出土した。木85・86は杭である。木86は全体が六角形に加工される。

木87～99は卒塔婆である。木87は平安時代後期の溝3185、木88～98は室町時代末の溝3055、木99は室町時代末の溝2646から出土した。卒塔婆の型式分類は、西本安秀氏の分類[6]に拠る。また、墨書のある卒塔婆の釈文については、木100～103の木札、荷札と合わせて、京都大学名誉教授の西山良平氏、京都府立大学教授の横内裕人氏、京都産業大学教授の吉野秋二氏に依頼した[7]。墨書の確認できない木97の形式は、頭部はＡで下端は欠損しており不明、木98は頭部はＡで下端はⅠ、木99は頭部は不明で下端はⅡである。木100は転読札、木101は祈祷札でいずれも溝3055出土、木102は荷札で江戸時代前期の水制4035出土、木103の木簡は江戸時代前期の溝4030出土である。

木104～114は船材である。全て４区水制4035の土木資材として再利用されたものである。遺物番号は図版56の番号と対応する。木104～109は舷側板[8]である。木104は、長さ約4.6ｍの材に長さ約1.35ｍの材が重ね継ぎされる。長い材の斜めに加工された方が船首と考えられるが、短い材の小口は再利用時に切断された可能性も考えられ、どちらが船首かは確定できない。重ね継ぎ部分は、重ねた際に他の部分の板の厚みと大きな差が出ないよう厚みを調整し、通釘で接合する。長い材の上端は、高さを揃えるため細長い材を縫釘で継ぎ足している。上端には約25㎝間隔で縫釘あるいは縫釘のオトシ穴が確認でき、もう一枚舷側板が平継ぎされていたことがわかる。船内側の下端には約25㎝間隔で舷側板と船底板を接合していた通釘のオトシ穴が確認でき、幅約５㎝の船底板が当たっていたと考えられる痕跡から船底板の厚みが推測できる。船内側の材の割れ目にはマキハダが詰められる。特に船底板との接合部端に沿っては顕著である。船底板の痕跡に接する部分に方形の穿孔が１箇所あく。船外側の径がやや大きい四角錘台形で、船梁を打ち込んだものか。木105は、一方の端が切断されており、もう一方の端には方形の穿孔があく。船内側下端には約25㎝間隔で通釘のオトシ穴が確認でき、幅４～５㎝の船底板が当たっていた痕跡がある。船内側の材の割れ目にはマキハダが詰められる。木106は、下端に約25㎝間隔で通釘のオトシ穴、上端には15～25㎝間隔で縫釘または縫釘のオトシ穴が確認できる。木107は、一方の端は切断されており、もう一方の端には方形の穿孔があく。船内側下端には約25㎝間隔で通釘と通釘のオトシ穴が確認でき、

墨書釈文

木８７

「南无十一面観世菩薩」　　528×19×4　061

木８８

・「□南無阿弥陀仏三界万霊十方至親（マヽ）

「　　今此三界皆是我有　　永正十四年　敬白

・（ケン）（ウン）□□□　　右意志者為□□円中禅尼十三年忌追善也

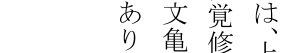
其中衆生悉是吾子　　八月廿六日　　(671)×83×4　061

型式は卒塔婆分類のＡ―Ⅰ（西本安秀氏）。永正十四年は一五一七年。「至親」の用例はないが、親の読み「シン」は、聖の唐音「シン」に通じるので、「至聖」の意を表すか。「三界万霊十方至聖」なら、『諸回向清規式』（天倫楓隠禅師、一六五七年、臨済宗の回向文などを集成）巻一から五に多数の用例。裏梵字３字目は「（バーンク）」カ。裏「今此…我有、其中…吾子」は『妙法蓮華経』巻二に所見。

木８９

・「（バン）　南無阿弥陀仏

「　　真言教主大日如来　　天文三年

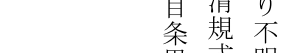
・  （ケン）（ウン）（ラン）（ウイ）（アー）（バーンク）　　□□趣者為宗音禅尼十三年忌之也敬白

□□衆生速（マヽ）身成仏　　六月十　　」　　725×102×12　061

型式は卒塔婆分類のＡ―Ⅱ。「  （バーンク）」は金剛界大日如来、十三回忌を表示する。天文三年は一五三四年。裏面左行「六月十」の下は一部折損。

木９０

・「（バン）　南無□〔阿カ〕□□

・「  （キャ）（カ）（ラ）（バ）（ア）　　□始知衆生本来成仏　　□□

□生死涅槃猶如昨夢　七　廿一日　　(598)×79×7　061

卒塔婆分類の型式は、上端はＡ、下端は欠損しており不明。「始知…成仏」「生死…昨夢」は『円覚経』（『大方広円覚修多羅了義経』）や『諸回向清規式』巻四などに所見。御殿・二之宮遺跡出土の卒塔婆（文亀二年、一五〇二年）や荒田目条里制遺構・砂畑遺跡（福島県いわき市）のこけら経に用例あり。

木91

・「(キャ)(カ)(ラ)　　×

・南無阿弥陀□〔仏カ〕×　　(208)×87×7　061

卒塔婆分類の型式は、上端はA、下端は欠損しており不明。

木92

・「(キャ)□　　□

・「　(ベン)□〔南カ〕　　(247)×(63)×4　061

卒塔婆分類の型式は、上端はA、下端は欠損しており不明。表1字目は左半だけ墨痕、2字目以下は「(カ)(ラ)(ベ)」カ。

木93

・「(キャ)(カ)(ラ)(ベ)

・「□〔(ベン)カ〕　南無阿□〔弥陀カ〕□　　(189)×71×9　061

卒塔婆分類の型式は、上端はA、下端は欠損しており不明。

木94

「□〔(ベン)カ〕　　(182)×(74)×7　061

卒塔婆分類の型式は、上端はA、下端は欠損しており不明。

木95

・×□〔道カ〕孝禅門第三忌□」

孝禅門

・×三年忌者也　敬白　　□

□月十五日　　」　　(160)×81×8　061

卒塔婆分類の型式は、上端は欠損しており不明、下端はI。裏中央行末尾の文字（梵字）は用例がない。「(シャ)」（字義は「戰敵」）カ。

木96

三慧之辰
×月廿日敬白　□
菩提者也　」　(152)×(74)×11　061

卒塔婆分類の型式は、上端は欠損しており不明、下端はI。中央行末尾は木007裏中央行末尾と同じカ。

木100

「　永正□〔七カ〕年
𑖦〔カンマン〕奉転読大般若経祈□〔所カ〕
正月一日　」　233×61×5　061

永正七年は一五一〇年。𑖦〔カンマン〕は不動明王。

木101

・「□〔マカ〕　□〔城カ〕悟故十方空
本来無東西何処有南北　丸〔テ〕　」

・「〻南無軍陀利夜叉明王守護
南無五大力菩薩　」　180×25×4　061

表1字目は右半欠損。割注右行上半は欠損、推定4字分。裏左行は余白に細字。「悟故十方空」「本来…南北」は『諸回向清規式』巻四に所見。「悟故十方空」「本来…南北」は袴狭遺跡（兵庫県豊岡市出石）出土呪符、久昌寺遺跡（石川県金沢市）出土円形木棺蓋板2点（さらに甕棺蓋1点）、別府遺跡（愛媛県北条市）出土塔婆に用例あり。

木102

・「四百十三文也　□□」

・「□□□□〔村カ〕　」　168×28×3　033

木103

・□

・□〔さいカ〕衛門　(86)×21×9　081

幅４～６㎝の船底板が当たっていた痕跡がある。船内側の材の割れ目にはマキハダが詰められる。上端には縫釘の一部が残り、別材が平継ぎされていたと考えられる。木108は、下端に約23㎝間隔で船底板を接合していた通釘と、幅５～８㎝の船底板が当たっていた痕跡がある。木109は、一方の端に重ね継ぎの圧痕と通釘が残る。上端には約35㎝の間隔で縫釘が残り、別材が平継ぎされていたと考えられる。また、方形の穿孔が１箇所あく。木110は舷側板か。一方の端は切断されている。縫釘の一部が残る。木111は部位不明。通釘が約20㎝間隔で２本残る。木112は部位不明。縫釘が位置を変えて打たれており、両端に別材が平継ぎされていたと考えられる。木113は部位不明。細長く、一辺が斜めに加工されている。木114は部位不明。通釘が約23㎝間隔で２本残る。

木115は部材である。江戸時代の流路4024出土。一方に突起があり、側面から２箇所、釘が打ち込まれている。

（５）金属製品・銭貨（図版123～129・182～186、表３、付表４・５）

１）金属製品

金属製品は、整理箱にして８箱分出土した。種類は、飾金具、刀子、煙管、簪、錘、鈴、容器類、雁股、火箸、十能、舟釘、釘、鋲、鋏、鎌、錨、カンなどがある。時代は平安時代から江戸時代までのものがあるが、江戸時代の護岸関係遺構からの出土が多くを占める。

金１・２は銅合金製の八双金具で、それらの中でもいわゆる折れ金具に相当する。素地は表面が黒味を帯びた灰色であるため、質の高くない赤銅の可能性が考えられ、多くの部分に鍍金が施される。金１は、全長23.6㎝（七寸八分弱）、幅3.2㎝（一寸強）、腰際の厚さ0.5㎝（一分半強）、中央部の厚さ0.2㎝（七厘弱）である。途中、15.8㎝（五寸二分余）の部分で約135度の角度をもって屈曲する。その比率は長短比で２対１、平面に伸ばした状態で７対３となる。素地の製作技法は鋳造による。屈曲部は鋳型に折り曲げる箇所にあらかじめ凹部設け、鋳放後に折り曲げたことが屈曲部に生じた金属疲労による亀裂の状況から推察される。裏面端面には部分的に３方向からの鑢目が観察される。その順序は逆筋違・切・筋違となり、それぞれ端面の鋳張の除去・平準化・屈曲部形成時の突出部の除去を目的として施されたと考えられる。その他の部分は鋳放しのままで随所に鋳肌が観察され、左端には鋳張が捲れた状態で部分的に残存し、右側中央から腰際にかけては鬆の目立つ部分も存在する。内面は長楕円形の凸起鏨を長辺方向に打ち込んで平準化と叩き締めを行い、屈曲部は特に丁寧に仕上げられる。それらの工程を経たのち、長辺と短辺双方の両側２箇所に直径0.3㎝（一分）の不整円形の孔が鏨状の工具を用いて穿たれる。裏面の孔の周囲にはバリが残るため、表面側から穿孔されたことがうかがえる。表面と側面は磨地とされ、表面には長辺、短辺ともに木瓜形が設けられる。その中にはそれぞれ三双と二双の陰桔梗紋の中心に雌蕊、あるいは雄蕊の葯を表したような紋様を組み合わせた意匠が鋤下彫で表される。木瓜形の周囲は一辺0.3㎝（一分）に区画された市松紋様で充填される。それぞれの彫金技法は陰桔梗紋の内側が毛彫に近い蹴彫、木瓜形の内外郭線が蹴彫、その他の部分が毛彫とされる。三双側の木瓜形右端中央部および上辺右側と下辺両側、二双側木瓜形の左側磨地部にはこれと相似形の木瓜形、両下辺には下地割付

用の罫描線が残る。桔梗紋の周囲および花蕊様の部分、木瓜形の内郭、市松模様格子柄の各単位を一つずつ隔てた部位には地紋として魚々子が蒔かれる。鍍金は水銀アマルガム技法によるもので、陰桔梗紋内側の花弁状の紋様部、木瓜形内の地紋部、市松模様の魚々子が蒔かれた部分を除く部分以外と側面全体に施される。この製品は折り曲げられた角度からみて八角形の組物に装着するために製作されたと推定され、金鍍金部と地金の黒、磨地の金色と艶消しの魚々子地による光と陰の紋様からなる荘厳な飾金具である。なお、孔やその周囲に釘や座金による擦れた部分が観察できないため未使用のままの状態で埋置されたと考えられる。金２は、長さ23.0㎝（七寸六分弱）、幅3.2㎝（一寸強）、腰際の厚さ0.5㎝（一分半強）、中央部の厚さ0.2㎝（七厘弱）となる。金１に比べ長さが0.6㎝（二分）短いが、その他の部位の法量、材質、意匠、彫法、鍍金の技法や施された部位など細部が酷似する。両者の相違を指摘するなら、裏側端面の鑢仕上げが簡略化されていること、凸起鏨が簡略化されていること、屈曲部裏面に生じた金属疲労による亀裂が観察されないこと、折り曲げられた角度が130度と金１と比較して６度狭くなることである。なお、金１と同様、長辺側の木瓜形上位右側と中央、下辺両側方、短辺側木瓜形上位両側と右側下位にこれと相似形をなす割付用罫描線が観察される。これらの諸様相から、金１と金２は本来一組の飾金具として製作されたものと考えられる。

金３～11は小刀で、いわゆる小柄と呼ばれるものである。金３は、小刀から小刀柄までが完存する。小刀柄の材質は鉄で、共柄の可能性もあるためＸ線撮影を行ったところ、茎が挿入されている状態を明瞭に確認できたため別材であると判明した。小刀は長さ12.1㎝（四寸弱）、身幅1.3㎝（四分半弱）、重ね0.3㎝（一分弱）である。腰元の中央からやや棟側に寄った位置には通有の資料にはみられない直径0.5㎝（一分半強）の円孔が穿たれている。この部分に孔を穿てば強度を減じることにもなるが、貫級刀のような機能を持たせた可能性も考えられる。小刀柄は長さ9.5㎝（三寸一分強）、幅1.4㎝（四分半強）、厚さ0.5㎝（一分半強）である。袋の接合部は錆化が著しいためＸ線撮影でも製作技法は判然としない。表面は磨地とされ、小口際には二条の節帯が設けられる。中央には糸象嵌と、それが脱落し彫り込みの溝のみが観察される部分が存在する。線象嵌に用いられた金属は黄銅色で、色調から真鍮や青銅などが候補となるが、蛍光Ｘ線分析によると亜鉛が含まれていないため後者である可能性が高い。裏面は錆に覆われているため仕上げの状況は不明である。ほぼ中央には杏仁形をなす窪みが観察され、その周縁には、銀色の光沢をもつ微細な金属が点在する。蛍光Ｘ線分析から銀の成分は検出されていないが、これを蠟が用いられた据紋が欠落した状態ととらえ、その形状と線象嵌を縄とみなし、これを図幅や絵画と比較するならば、欠落した部分には高彫された鮑の図柄が嵌め込まれていた可能性が考えられる。金４は、小刀と小刀柄がほぼ完存する。小刀は刃先にわずかな欠損があるが、刃長11.4㎝（三寸七分半強）、元幅1.4㎝（四分半強）、元重0.3㎝（一分弱）で、表面は錆化により、鑢目、刻銘ともに確認できず、刃部は研ぎ減りにより短くなる。小刀柄の素材は銅合金で、法量は長さ9.6㎝（三寸二分弱）、幅1.4㎝（四分半強）、厚さ0.5㎝（一分半強）である。成形技法は一枚の金属板を刃方で折り曲げたのち棟の裏板寄りで継ぎ合わせ、戸尻に別途製作した同材の板を組み込んで蠟付けする一枚張りとされ、全面磨地に仕上

げられる。表面には戸尻寄りに設えられた節の両側に薄肉彫で草花を表現している状態をわずかに観察できる。草花の中には菊や薄と思しき図柄も認められ、これと絵画や図幅と比較すると、籬垣と秋草を組み合わせた図案が表現されていることが類推される。金５は、小刀と小刀柄がほぼ完存する。小刀は刃長13.1㎝（四寸三分強）、元幅1.4㎝（四分半強）、元重0.3㎝（一分弱）となる。表側下半部には「和泉守藤原氏（うじ）命（なが）」と、命の最終画が長く伸ばされた一部の美濃の刀工に見られる特徴的な銘が楷書体で切られている。氏命は江戸時代に尾張で作刀した刀工[9)]で、熱田神宮には刀身に寛文四甲辰歳（1664年）などとの切付銘を持つ脇差が伝世[10)]している。小刀柄は色調と質感から真鍮と類推される銅合金製で、長さ9.8㎝（三寸二分半弱）、幅1.4㎝（四分半強）、厚さ0.5㎝（一分半強）である。成形技法は単体の金属板を折り曲げ、裏面裏板寄りで組み合わせ、これの戸尻に別途製作した板を組み込んで蠟付けした一枚張りである。表面には小口側に0.3㎝（一分）の節帯を一条設けられる。棟方中央から戸尻に寄った位置には、部分的に細かな桧垣鑢を施したのち、蹴彫によって千鳥あるいは双葉紋様を抽象化したような図柄が表現される。他の部分には先の紋様を避けながら菱形と小点を組み合わせた鏨を右上から左下へ規則的に打ち込むことにより地紋となし、裏面は縦方向の鑢地とされる。金６は、小刀基部の刃方と棟方の両区が遺存する小刀柄である。銅合金を素材とし、成形は一枚板を刃方で折り曲げ、裏板と棟の角が接する部分で蠟付した一枚張技法である。表面は小縁を設けた一体成形で、地には五弁花を表わした鏨を横位に連ねて打ち込んで石目地風に仕上げられる。そのほぼ中央には蹴彫によって長方形の区画が設けられ、区画内には丸鏨により唐草風の紋様が点描で表される。区画の両側には房の付いた団扇あるいは刷毛様の紋様が柄の部分の紋様構成をわずかに違えながら左右対称に表され、双方の柄の部分のみ横位の魚々子が蒔かれる。裏面は磨地とされる。金７は、小刀の茎が遺存した状態の小刀柄である。素材は色調から銅合金と考えられる。小縁のないいわゆる棒小柄で、成形は一枚板を刃方で折り曲げ、裏板と棟の組み合わさる部方で蠟付する一枚張技法とされる。戸尻は同質の別材を嵌め込んで蠟付し、裏面は磨地とされる。表面の左右には磨地に五分刻の縦線が２箇所ずつ表現され、それらの中央には薄肉彫で笹の幹と葉とが左右に分けて彫出される。この部分の地には、幹と葉の間にわずかな段差を設け、高い幹側を磨地、低い葉側に横位の魚々子が蒔かれる。金８は、小刀の茎が遺存した状態の小刀柄である。銅合金製で、小縁によって区画された地板には、横位の魚々子が蒔かれる。裏側は錆化によって仕上げ技法は不明ながら、この作例にまま見られる哺金や焼付金は観察されない。成形は一枚の金属板を折り曲げたのち棟方の裏板側で合わせ、戸尻には別途製作した同質の板を蠟付けした一枚張りである。表面には中央からやや右に寄った位置に、根元を左側に向けた一輪枝椿が高彫によって表現される。これと地板との間に隙間が観察されないため、丸彫あるいは裏打出による一体成形によって作り出されたと判断される。金９は、小刀の一部が錆着する小刀柄である。銅合金製で、製作技法は金属板を刃方で屈曲させ、棟方中央で蠟付する一枚張である。全体的に錆化が著しく仕上げ技法等は確認できないが、表面左下には上下に反復するような毛彫がわずかに観察される。金10は、小刀の刃と茎がほぼ完存する。柄は遺存しない。金11は小刀の刃と茎の一部である。茎の基部に目釘が目釘穴に刺さった状態で残る。

表３　銭貨出土遺構一覧表

	種　類	初鋳年	枚数	出土遺構
日本銭	和同開珎	708	2	流路3400
	神功開寶	765	2	流路3400
	長年大寶	848	3	流路3400
	貞観永寶	870	2	流路3400
	慶長一分判金	1601	1	水制4035
	寛永通寶(古)	1636	45	護岸3001・3200、水制3410、護岸4001、水制4035、流路4024他
	寛永通寶(新)	1668	27	護岸3001・3200、水制3410、護岸4001他
	寛永通寶(古・新不明)		35	護岸3001、土坑3024、水制3410、護岸4001他
	寶永通寶	1708	1	護岸3200
	文久永寶	1863	2	井戸3057、3区撹乱
	雁首銭		1	護岸3001
中国銭	開元通寶	621	1	護岸4031
	至道元寶	995	2	流路4024、5区第2面整地層
	景徳元寶	1004	3	落込3050、3区第2面整地層、護岸4001
	祥符通寶	1009	6	落込3050、護岸4031、溝4030
	祥符元寶	1009	2	水制4035、溝4030
	天禧通寶	1017	1	水制4035
	天聖元寶	1023	2	落込3050、溝4030
	景祐元寶	1034	1	水制4035
	皇宋通寶	1038	7	3区第2面整地層、溝4030、5区第2面整地層
	嘉祐通寶	1056	1	4区第2面整地層
	治平元寶	1064	2	土坑4012、水制4035
	熙寧元寶	1068	9	護岸3001、落込3050、4区第2面整地層、水制4035、5区第2面・第3面整地層他
	元豊通寶	1078	7	護岸4001、水制4035、溝4030他
	元祐通寶	1086	7	護岸4031、水制4035、溝4030、4区第2面整地層、5区第3面整地層他
	紹聖元寶	1094	6	流路4024、水制4035、溝4030他
	聖宋元寶	1101	6	4区第2面整地層、水制4035他
	大観通寶	1107	1	5区第2面整地層
	政和通寶	1111	4	落込3050、溝4030、5区第2面・第3面整地層
	淳熙元寶	1174	1	3区上段検出中
	嘉泰通寶	1201	1	3区あげ土
	洪武通寶	1368	4	3区撹乱、4区南壁、5区第2面整地層
	永樂通寶	1408	2	護岸3001、5区第3面整地層
琉球銭	世高通寶	1461	1	溝4030
不明	銭文不明		9	護岸3001・3200、溝4030他
	合　計		207	

金12は短刀で、刃と茎がほぼ完存する。茎部には鞘の痕跡と思われる木質が部分的に残る。茎尻に目釘穴があく。X線撮影では、他に目釘穴は確認できない。金13は平安時代後期の溝3185から出土した短刀で、刃と茎がほぼ完存する。刃の長さ22.3㎝、茎の長さ8.3㎝で、茎のほぼ中央に目釘穴があく。

金14～17は煙管雁首である。金14・15の内部には羅宇の破片が遺存する。金17は根元に斜めの線刻がある。金18～21は煙管吸口である。金20は全面に線刻文様がある。金21は吸口に羅宇が挿し込まれた状態である。

金22・23は簪である。金22は先端に耳かきがつく一本足の平打簪で、飾りは飛び雁文、足部分にも両面に草文を線刻する。金23は二本足の平打簪で、先端は欠損するが、耳かきが付いていた可能性がある。飾りは片面が木瓜文、もう片面が嘴合せ三つ雁金文を陽刻する。

金24～28は漁具の錘である。丸型のものと扁平なものがある。

金29は銅製の鈴である。ほぼ完形で中に玉が確認でき音が鳴る。一部金鍍金が残る。

金30は銅製の蓋である。つまみ部分に銅板を花形に加工した飾りがはまる。

金31は鏃の雁股、金32は槍先である。いずれも鉄製で、金31は奈良時代から平安時代中期の流路3400から、金32は室町時代後期の溝3100から出土した。

金33は鉄製の鍋の口縁部か。内面に蓋受けの可能性がある凸帯がめぐる。金34は鉄製羽釜と考えられる。金35は鉄製の鍋もしくは羽釜の底部と考えられる。

金36・37は火箸である。金36は鉄製、金37は銅製で宝珠頭の付く飾火箸である。

金38は鉄製の十能である。柄の差し込み口に木質が遺存する。

金39は用途不明の鉄製品である。全ての面が加工され、完形品である。凸帯状のものが付く。奈良時代から平安時代中期の流路3400から出土している。

金40は袋状鉄斧である。流路3400から出土。

金41～47は鉄釘である。金41～44は流路3400出土で、平安時代中期以前のものと考えられる。金45～47は４区の江戸時代の遺構から出土している。

金48は銅製で開き戸の肘壷か。金49は銅製の鋲である。金50・51は鉄製の鎹である。金50は大型品である。

金52は棒板状の鉄製品であるが、全体的に叩いて鍛えたと考えられる凹凸があり、鉄挺の可能性がある。埋納遺構状の３区土坑3392の土師器皿の下から出土した。時期は平安時代後期。

金53は椀形滓である。室町時代の溝3100から出土している。

金54～58は鉄製品の鎌である。全て４区の江戸時代の護岸関係遺構から出土している。金54は柄の木質と目釘が遺存する。金55～58は茎部の先端が鍵状になるものである。

金59は船を係留するための環、金60は錨である。これらはともに水制3410から出土した。金60の錨はアンカーリングと付属リングの形状から幕末から明治期のものと考えられる。[11)]

２）銭貨

銭貨は、全部で207枚出土した。内訳は、日本銭が121枚、中国銭が76枚、琉球銭が１枚、銭文

不明のものが９枚である。金貨が１枚、他はすべて銅銭である。銭種と主な出土遺構については表３にまとめた。

いわゆる皇朝銭の和同開珎、神功開寶、長年大寶、貞観永寶はすべて３区流路3400から出土した。金貨の慶長一分判金は４区の水制4035から出土した。また、琉球銭の世高通寶は京都市内では出土例の少ないものである。

皇朝銭についてはすべて、他の銭種については残りの良いものを１点ずつ図化した。図化した銭貨の詳細は付表５にまとめた。

（６）石製品（図版130～133・186～188、付表６）

石製品は、整理箱にして17箱分出土した。石鏃、砥石、石鍋、硯、五輪塔、石臼などがある。時代は弥生時代から江戸時代のものがある。

石１・２は打製石鏃である。石１は凸基無茎式、石２は平基無茎式である。

石３は磨製石刀か。刃部には敲打痕と横方向の擦痕跡、背部にも横方向の擦痕がある。

石４～17は砥石である。砥石は４区Ⅱ期の遺構からの出土が多い。石４・14・16・17は出土遺構から平安時代のものと考えられる。

石18～22は滑石製の石鍋である。平安時代後期の遺構からの出土が多い。石18以外は二次加工痕があり、温石に転用されたと考えられる。

石23は碁石である。江戸時代後期の地業3006出土。

石24～27は硯である。全て江戸時代の遺構から出土している。

石28～36は五輪塔の石材である。室町時代後半から江戸時代の遺構から出土している。石28・29は空風輪、石30は火輪、石31～33は水輪、石34は地輪、石35・36は一石五輪塔である。

石37・38は石仏で、石37は二尊立像、石38は一尊立像である。いずれも４区溝4030から出土し、底部以外は被熱を受ける。

石39は礎石である。幅約９㎝、深さ約2.5㎝の溝の中に径約３㎝、深さ約１㎝の軸受穴と考えられるくぼみがあり、門の礎石の可能性がある。

石40～42は搗き臼である。すべて江戸時代の遺構から出土した。石42は矢穴が残る。石43は粉挽き臼の上臼で、目は八分画である。石44は茶臼の上臼である。挽き木の打ち込み孔の装飾は子持菱である。

（７）土製品（図版133・188、付表７）

土製品は、整理箱にして１箱分出土した。土錘、人形、円盤状土製品、ミニチュア土器、硯、塼などがある。全ての調査区から出土し、時代は平安時代から江戸時代までの各時期のものがある。出土遺構や法量などの詳細は付表７に記載した。

土１～10は土錘である。すべて土師質である。土１は有溝の管状土錘である。土２～５は細長く、孔の径が小さい管状土錘である。土６・７は短く、孔の径がやや大きいタイプである。土８～

10は大型で短く、孔の径も大きいタイプである。土11・12は円盤状土製品である。いずれも土師質で、周縁を打ち欠いて円盤状に整形している。土13は須恵器の円面硯である。土14はミニチュア土器の擂皿である。片口が付き、内面に３条一単位の擂目が３方に入る。土15は土人形の鳩を模ったものと考えられる。体部と脚は別作りの型成形で、それを貼り合わせた後、脚から体に向けて穿孔する。素焼きである。土16はミニチュア羽釜である。素焼きで型成形である。土17は有孔塼である。側面に「十」の印が押される。

（８）動植物遺存体、その他

その他　４区溝4030からは、箒（図33）、縄（図34）が出土した。箒は、長さ25.0㎝、幅25.5㎝である。

また、３区水制3410からも縄（図35）が出土した。

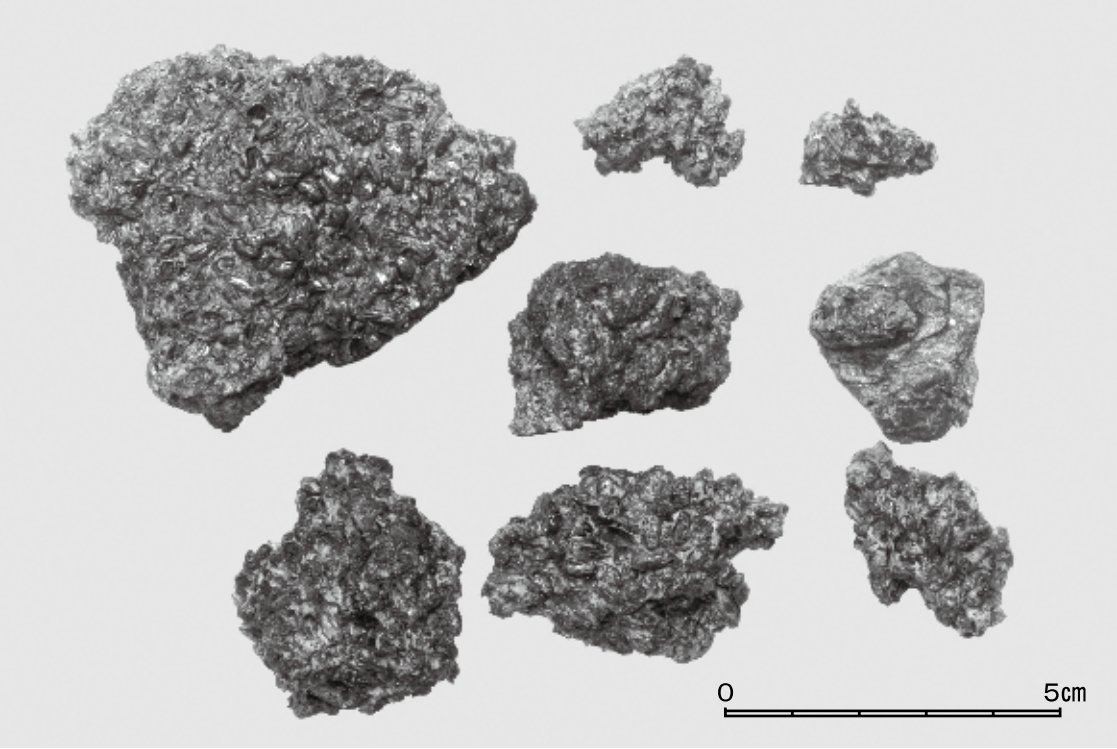
動物遺存体　平安時代から江戸時代までの遺構、整地層から破片数にして202点の動物遺存体が出土した。このうち時期が特定でき、種類や部位が同定できたものが135点ある。詳細については付章２を参照されたいが、哺乳類が最も多く85点、次いで貝類が48点が出土しており、これらのほか甲殻類と爬虫類が１点ずつに留まる。

植物遺存体　３区流路3400からは、炭化穀物塊が出土した（図36）。炭化穀物塊は、最大の塊で長さ68.7㎜、幅56.9㎜、厚さ34.0㎜を測る。塊を構成している種にはイネ、オオムギ、コムギのほか、アワやヒエ、キビ類とみられる雑穀類も含まれ、いずれも穎が残る状態のものが多い。また、炭化した植物の茎部も確認でき、一部では板状の木質が付着する箇所も確認できる。各塊には新鮮な破断面があり、一塊であった可能性がある。

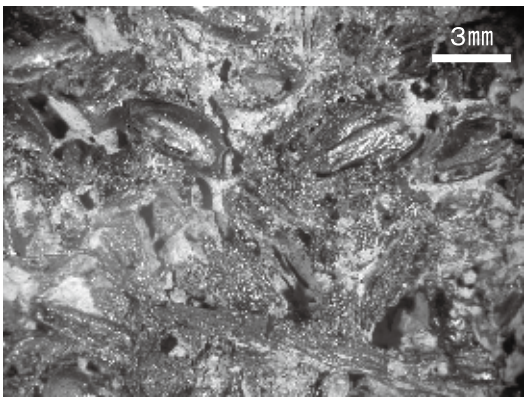
図33　溝4030出土箒

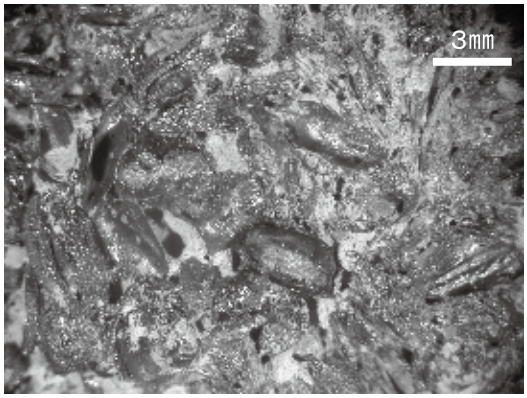
図34　溝4030出土縄

図35　水制3410出土縄

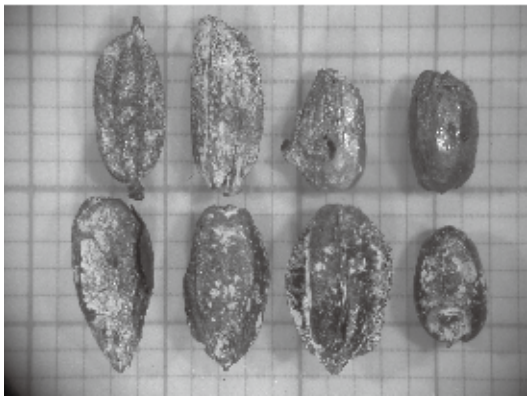


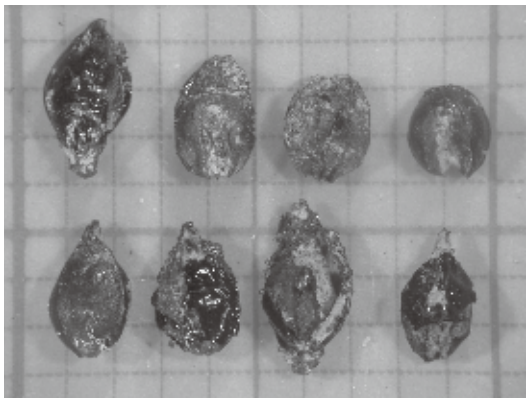
炭化穀物塊





表面拡大画像（実体顕微鏡写真）





塊から遊離した穀物類の一部（1mm桝）
（左：上段イネ、下段左3点オオムギ、下段右端コムギ　右：その他雑穀類）

図36　流路3400出土炭化穀物塊

註

1） 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

750年 840年 930年 1020年 1110年 1170年 1260年 1350年 1410年 1500年 1590年 1680年 1740年 1800年 1860年

1			2			3			4			5		6			7			8		9			10			11			12		13		14	
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	A	B

2） 弥生土器の年代については、森岡秀人「山城地域」『弥生土器様式と編年 近畿編Ⅱ』 木耳社 1990年を参考にした。

3） この時期の土器の年代については、『京都府遺跡調査報告書第33冊 佐山遺跡』 財団法人京都府埋蔵文化財研究センター 2003年、吹田直子「山城地域」『古式土師器の年代学』 財団法人大阪府文化財センター 2006年を参考にした。

4） 土師器皿の分類の基準は、『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021－16 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2023年に基づく。
「乙訓在地形」「京域主流形」という用語は、参考文献の伊藤2016に基づく。

5） 瓦器椀の型式・年代観については、佐藤亜聖（2022）を参考にし、また、滋賀県立大学の佐藤亜聖氏から直接ご教授を賜った。

6） 西本安秀「木製卒塔婆の変遷と用途に関する一考察」『網干善教先生古稀記念 考古学論集』下巻 網干善教先生古稀記念会 1998年 1231～1251頁

7） 公益財団法人元興寺文化財研究所の服部光真氏、三宅徹誠氏にも実見いただき、御教示を賜った。

8） 船材の名称は、横出洋二「伏見の船大工」『山城郷土資料館報』第９号 1991年、安達裕之『日本の船』和船編 船の科学館 1998年を参考にした。また、船大工の小川智彦氏、甲南大学の出口晶子氏からも御教示を賜った。

9） 石井昌國編著 本間薫山校閲『日本刀銘鑑』第三版 雄山閣出版株式会社 1994年

10） 奥山哲也編『新春特別展 七福神～幸福・富貴・長寿を願って～』図録 熱田神宮宮庁 2014年

11） 松井広信「四爪鉄錨の基礎的研究－船に関わるモノの型式学的考察－」『金沢大学考古学紀要』34 2013年

参考文献

（土器類）

伊藤淳史「いわゆる“乙訓在地形土師器”と呼称される中世土師器皿について」『京都大学構内遺跡調査研究年報』2014年度 京都大学文化財総合研究センター 2016年

伊野近富「平安京跡（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1980 3』 京都府教育委員会 1980年

加納敬二「乙訓財地形の土師器皿について」『平安京左京北辺四坊 第１分冊（公家町形成以前）』 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年

小森俊寛「出土遺物」『石清水八幡宮 発掘調査報告書』八幡市埋蔵文化財発掘調査報告第56集 八幡市教育委員会 2011年

佐藤亜聖「第２章 畿内産瓦器椀」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』 日本中世土器研究会編 真陽社 2022年

原 秀樹 『勝竜寺城跡 外郭土塁・空堀の調査』長岡京市文化財調査報告第73冊 公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 2019年

平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

山口　均「乙訓地域の中世土器（土師器Ⅲ）編年について」『長岡京跡　修理式遺跡・中海道遺跡』向日市埋蔵文化財調査報告第71集　財団法人向日市埋蔵文化財センター　2006年

（瓦類）

『明石市文化財調査報告６：林崎三本松瓦窯跡群発掘調査報告書』 明石市文化・スポーツ部文化振興課 2017年

『大坂城址Ⅲ　大阪府警察本部棟新築第２期工事に伴う発掘調査報告書』 財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第144集　財団法人大阪府文化財センター　2006年

『平成28年度　京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書　鳥羽離宮金剛心院跡出土品』附編 京都市文化市民局　2017年

『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報　平成４年度』 京都市文化観光局　1993年

「５　伏見城跡」『京都府遺跡調査概報　第８冊』 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1983年

『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1997年

「18　平安京右京七条一坊」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年

『史跡・名勝　嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004－11　財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年

『寺町旧域（妙満寺跡・本能寺跡）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016－18　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2018年

『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015－17　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2016年

『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017－16　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2018年

『東福寺防災施設工事・発掘調査報告書』 東福寺　1990年

『平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』附尊勝寺跡発掘調査報告　奈良文化財研究所学報第10冊 奈良文化財研究所　1961年

『相国寺旧境内発掘調査報告書　今出川キャンパス整備に伴う発掘調査　第４次～第６次』同志社大学歴史資料館調査研究報告第13集　同志社大学歴史資料館　2015年

『近世瓦の研究』奈良文化財研究所学報第78冊　奈良文化財研究所　2008年

『長岡京古瓦集成』向日市埋蔵文化財調査報告書第20集　1987年

星野猶二・三木善則『器瓦録想　其の二　伏見城』 六一書房　2006年

5．まとめ

（1）今回の調査成果

今回の調査では、２区では弥生時代中期から室町時代までの７面７期、３区では弥生時代中期から明治時代までの10面10期、４区では奈良時代以前から明治時代までの８面９期、５区では古墳時代初頭から明治時代までの10面10期の調査を行い、各時期の遺構・遺物を確認した。特に、調査予定地の北端部の４区と、南西端部の５区においても各時期の遺構面を確認できたことは、調査予定地全域に重層化した遺構面が存在することを示す重要な成果となった。また、１次調査では希薄であった平安時代の遺構を確認したことや、時期や変遷が不明瞭であった桂川の護岸遺構について詳細を明らかにできたことも大きな成果といえる。以下、各時期の成果をまとめる。

１）Ⅺ期：弥生時代中期から後期（図37）

この時期の遺構は、２区全域と３区南端で見つかった。顕著な遺構として２区の土坑2440、溝2781～2785・2823、３区の土坑3472がある。３区の土坑3472は調査区の南端で検出している。放

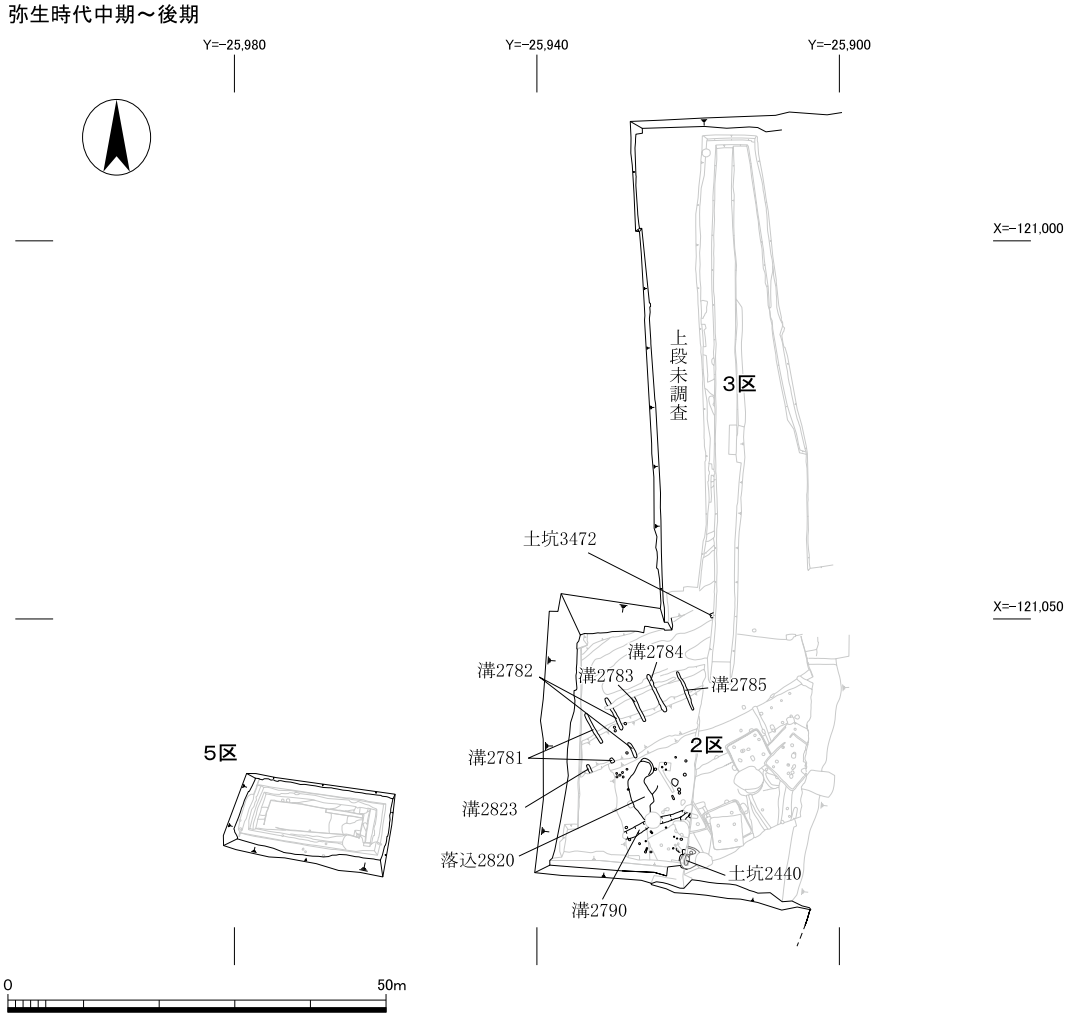


図37　２・３・５区遺構変遷図１（１：1,000）

射性炭素年代測定と堆積層の観察によって、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期のある段階で２区から３区南端付近に微高地を形成するような氾濫原での活発な洪水堆積作用があり、２区から３区において、自然堤防から後背低地へと北に向かって地形的に低く傾斜する微地形が形成されたことが判明している（付章１参照）。遺構の検出状況からも、この自然堤防上に居住域が展開したと考えられる。一方、後背低地部の３区でも累積的に土壌化層が形成され、生産域が存在した可能性があり、今後の調査で確認していく必要がある。

２）Ｘ期：古墳時代初頭（図38）

この時期の遺構は、２区全域と３区南端、５区東半で見つかった。２区南半では竪穴建物2355・2770・2800の３棟を検出した。１次調査と合わせると２区南半で検出した竪穴建物は全８棟となる。前時期の２区から３区南端に形成された微高地がさらに発達し、２区のＸ期遺構面の標高は３・５区と比較して約0.5～１ｍ高く、この時期の居住域の中心部となったと考えられる。竪穴建物の時期はいずれも庄内式併行期である。２区北半から３区で検出した溝2841や落込2392・3464、５区の落込5071は、微高地と微低地部との境に位置し、居住域の縁辺部の様相を呈している。前時期同様、３区以北には生産域が存在した可能性がある。

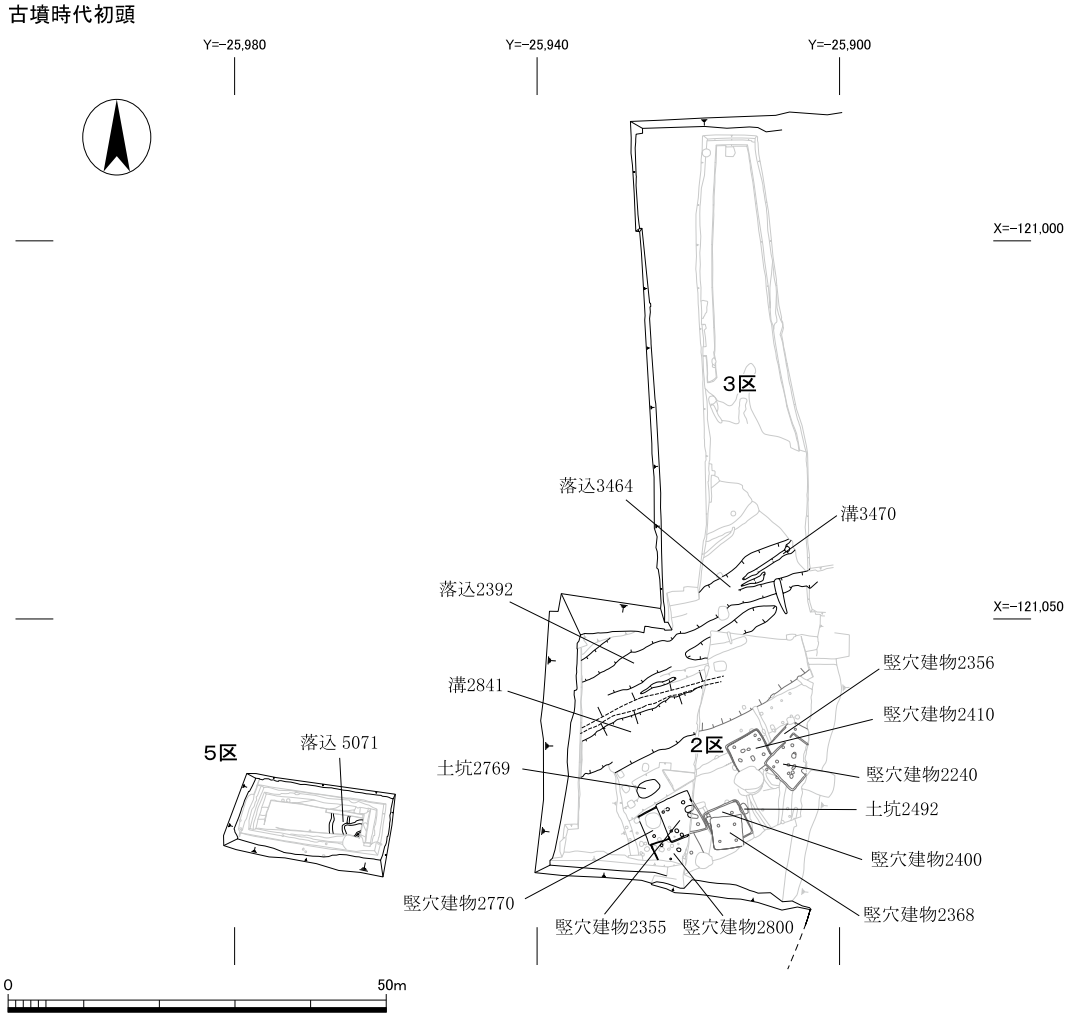


図38　２・３・５区遺構変遷図２（１：1,000）

３）Ⅸ期・Ⅷ期：古墳時代後期から奈良時代（図39）

この時期の遺構は、２区全域と３区南半、４区、５区で見つかった。

古墳時代後期から飛鳥時代（Ⅸ期）については、２区の柱列2740・2751など建物に関連すると推測される遺構、３区南半では畑の畝溝と考えられる畑3444などが検出されており、前時期（Ⅹ期）までと同様に２区は居住域、３区以北は生産域であったと考えられる。２区の柱列2740は、その掘形規模が１次調査で検出した掘立柱建物2154と同規模で、方位の振れも類似する。

奈良時代（Ⅷ期）については、すべての調査区で遺構が検出された。２区の柱列2702・2705、３区の溝3428など、４区の柱列4099・4107、５区の土坑5069、落込5070などがこの時期の遺構である。遺構密度は２区が高く、他は低い。この時期の遺構面の標高は２区が約8.1ｍ、３区北端では約7.2ｍ、４区では約7.0ｍ、５区では約7.4ｍであり、２区が最も高く、北と西に低くなる。この時期（Ⅷ期）までは２区が地形的に最も高く、また遺構の花粉・珪藻の保存状態が極めて不良で乾燥状態が維持されやすい地表環境下にあった（付章１参照）ことから、居住に適していたと考えられる。なお、長岡京の条坊と関連すると考えられる遺構は確認していない。

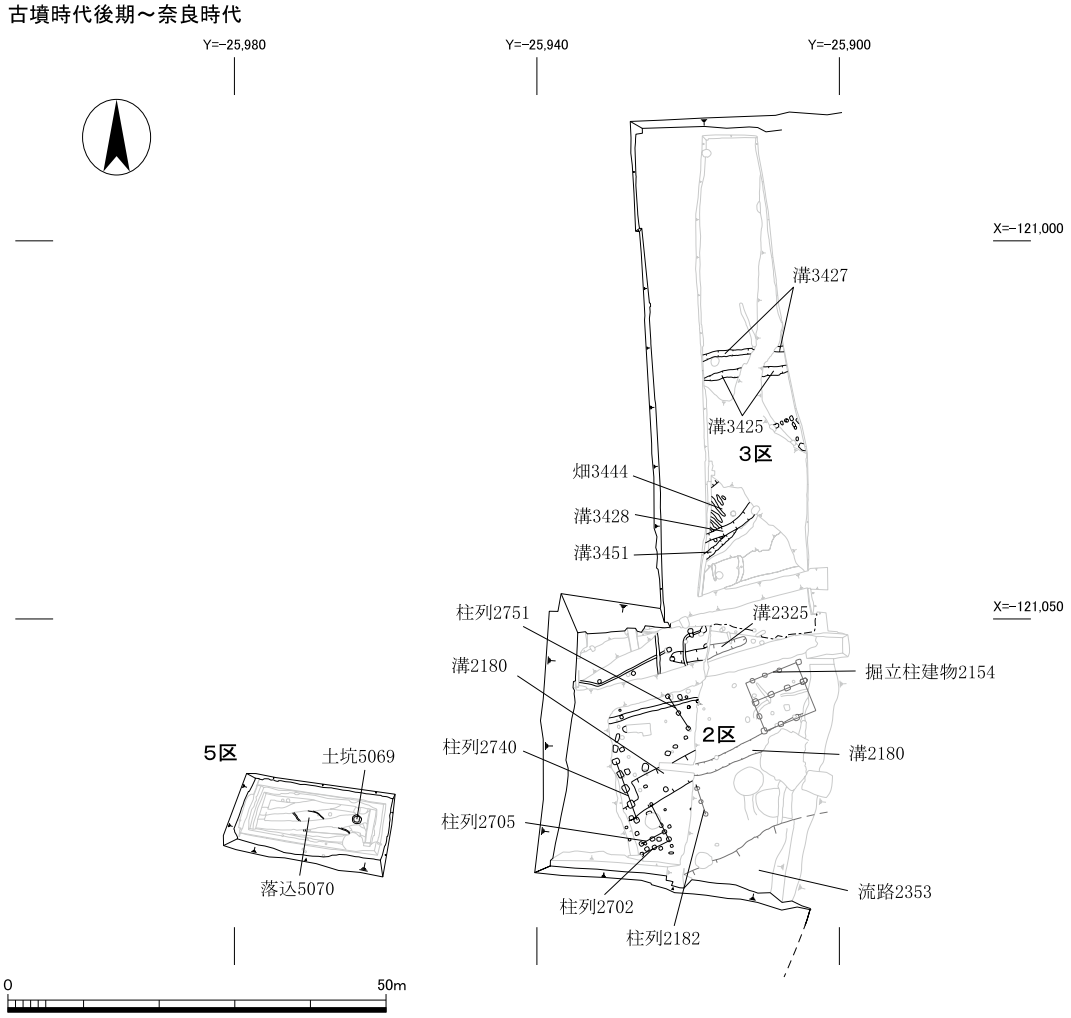


図39　２・３・５区遺構変遷図３（１：1,000）

４）Ⅶ期：平安時代前期から中期（図40）

この時期の遺構は、３・４・５区で見つかった。この時期には、２区と３区付近の氾濫原で堆積環境が不安定になり、活発な埋積が生じることにより前時期（Ⅷ期）までの地形の高低差が大幅に解消されており、そのことが遺構群の広がりと関連すると推測される。３区で検出した流路3400は、幅約11ｍ、深さ約1.65ｍと大規模で、流水の痕跡が確認できた。底部標高から北西から南西方向の流れを推測できる。堆積物の検討から氾濫流路に相当する可能性が指摘されている（付章１（１））。この流路3400からは、奈良時代後半から平安時代中期までの土器とともに、後期難波宮の重圏文軒丸瓦や皇朝銭の和同開珎・神功開寶・貞観永寶・長年大寶、釘や刀などの金属製品といった、前時期（Ⅷ期）までの出土遺物構成とは異なる多様な遺物が出土している。文献資料に「淀津」が登場する時期にあたり、当地の利用の活発化を示唆する遺物として注目される。流路3400は北西方向へ延長することを３区西壁断面で確認しており、今後の調査でこの時期の遺構の展開を確認し、淀津との関連を明らかにしていく必要がある。

５）Ⅵ期：平安時代後期から鎌倉時代初頭（図41）

この時期の遺構は、全ての調査区で見つかった。特に３区の遺構密度が高い。堆積層の検討から

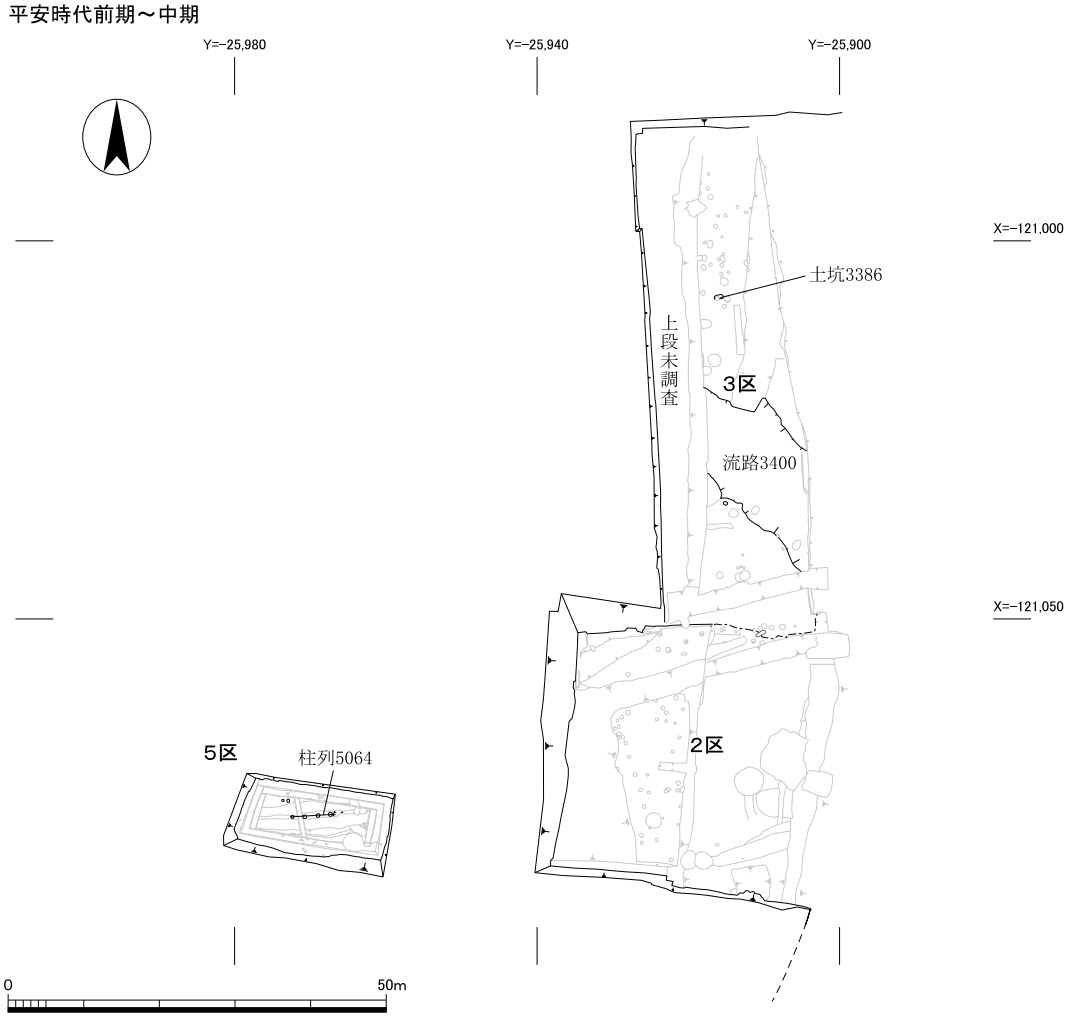


図40　２・３・５区遺構変遷図４（１：1,000）

は、この時期には氾濫原における洪水流入が前の時期よりも相対的に少なくなり、堆積環境が安定したとされる（付章１参照）。

３区では溝3185、土坑3056、土坑3182などを検出した。溝3185からは1,000点を超える大量の土師器皿や瓦器椀が出土した。出土状況から、溝の西側から投棄されたと考えられる。出土した土器類の大半が供膳具であり、煮沸具はほとんど出土していない点が特徴的である。この土器群の詳細については後の節に記す。また、埋土の自然科学分析の成果から、この溝は閉鎖的で水が滞水することなく流下していく状態にあったと推測される。掘形の形状から人為的に掘削された溝と考えられるが、調査区の中央で屈曲していることから、排水のみを目的とした溝ではない可能性も含め、その用途については今後の検討課題である。溝3185の西側には瓦がまとまって出土した土坑3056、瓦器がまとまって出土した土坑3182、井戸3058がある。これら３基は掘形径が約0.9～1.9ｍで、深さが1.3～1.4ｍあり、土坑3182の壁は垂直に近い角度で立ち上がる。いずれも底部は湧水層に達していないが、遺構の形状や遺物の出土状況などが類似する柳之御所遺跡（岩手県平泉町）で確認されている遺構が「井戸状遺構[1)]」とされており、同様の性格を有した可能性も考えられる。また、溝3185の西側では柱穴を確認しているが、現段階では建物に復元することはできなかった。

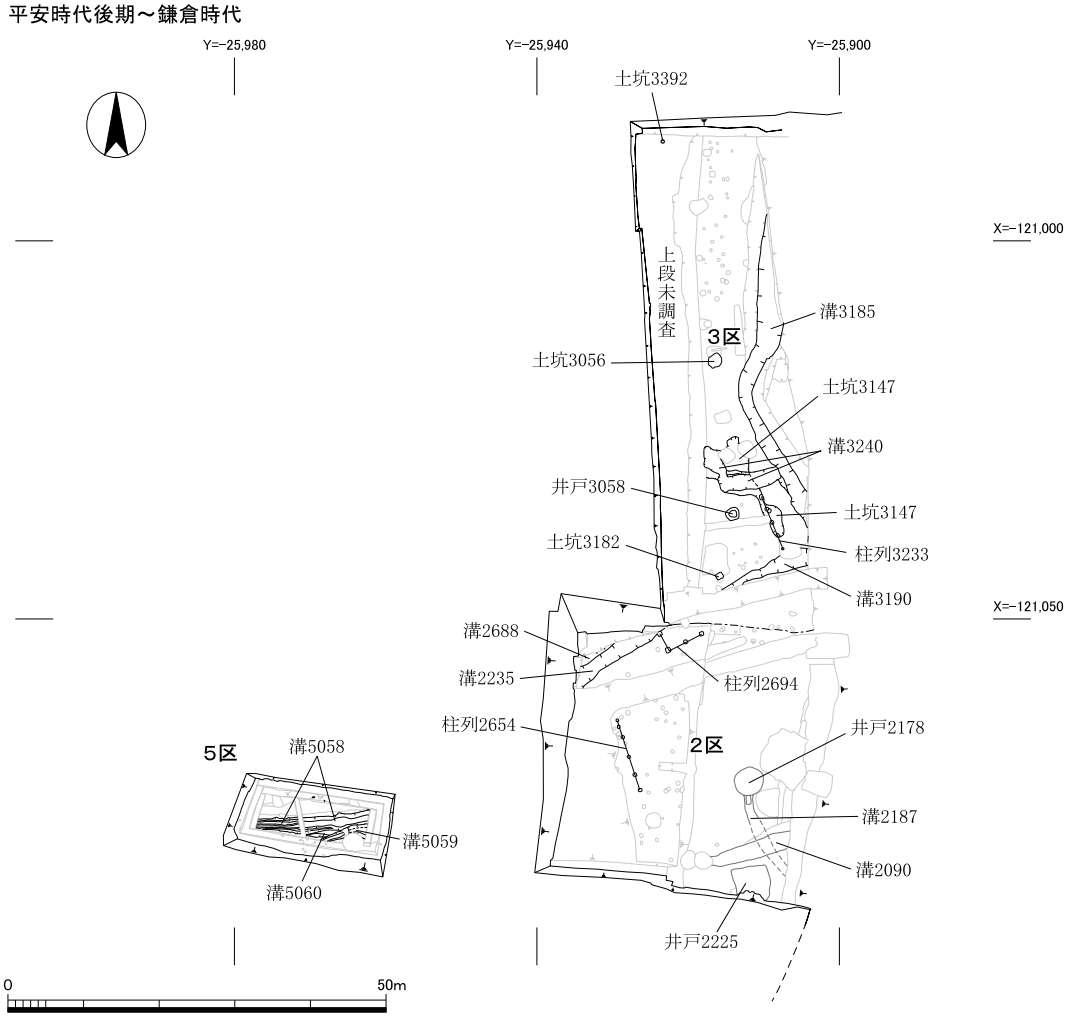


図41　２・３・５区遺構変遷図５（１：1,000）

柱穴群は調査区外西側に展開する可能性が高く、今後実施する予定の西側の調査成果を待って、溝3185や土坑群、建物の性格を再検討したい。

２区では１次調査成果を含めると井戸２基、溝４条、柱列などを検出している。１次調査で検出した井戸2225は規模が大きく、構築材に瓦を用いるなど、一般的な集落に存在する井戸とは様相が異なるものの、建物や井戸の存在からは、当時期の２区周辺が比較的安定し、居住空間となっていたことが窺える。４区では落込や土坑、５区では重複して掘削された東西方向の溝が検出された。

以上、当該時期は各調査区で遺構が確認され、出土遺物の量も多く、遺跡の一つの盛期と言える。第２章第２節で記したように、文献資料に春日行幸や石清水行幸など平安京から移動する際に淀で船に乗るなどの記録が多数確認できる時期であり、関連が窺われる。一方、この時期以降、室町時代の15世紀中頃までの遺構・遺物の出土は極めて少ない。堆積層の観察からも、鎌倉時代から室町時代にかけて、再び氾濫原の堆積環境が不安定化して氾濫原に流入する浮流洪水体積物が多くなっていることが明らかとなった（付章１参照）。１次調査１区では鎌倉時代の砂礫で埋まる流路1017が検出されており、桂川の主流路が調査地に近づいていた、または河床が高くなり氾濫

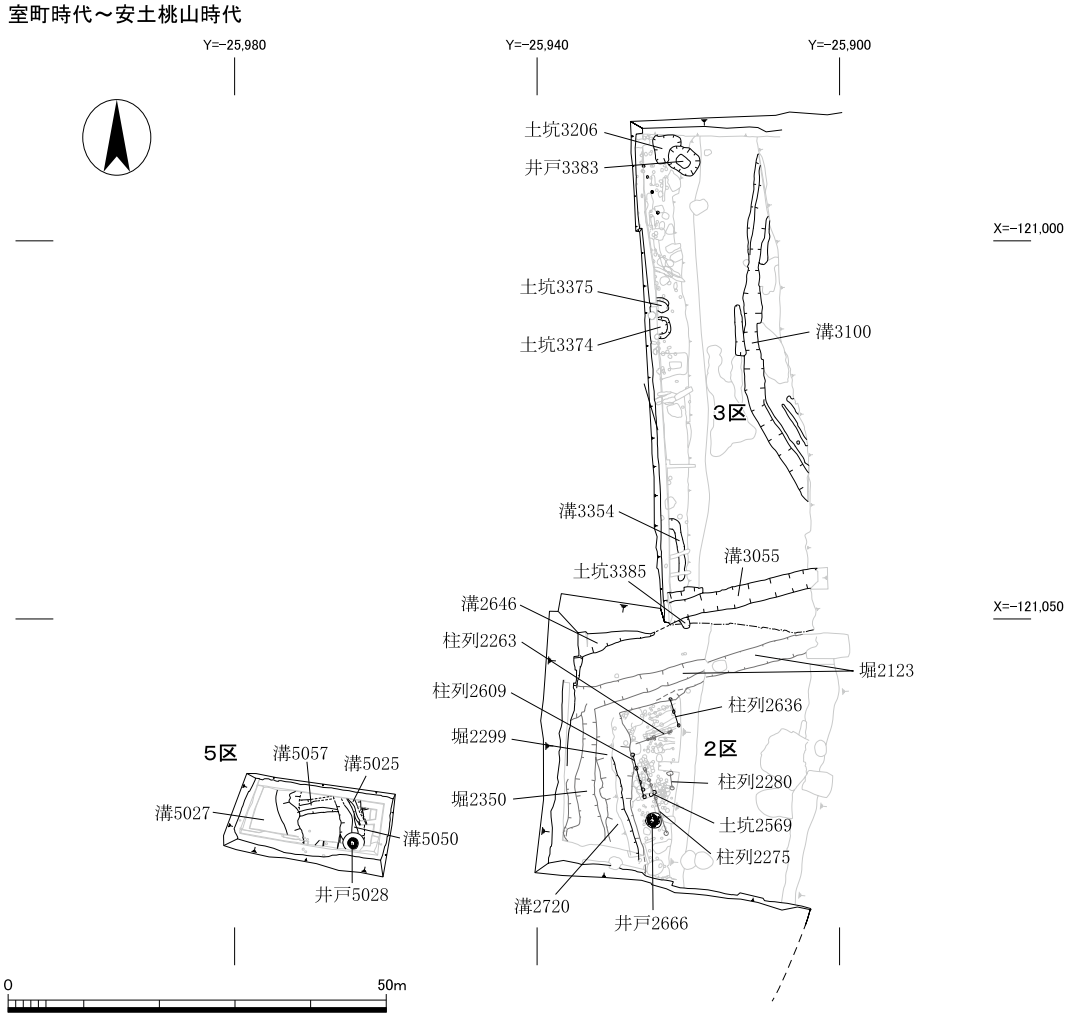


図42　２・３・５区遺構変遷図６（１：1,000）

の影響を受けやすい生活には適さない環境にあったなどの可能性が考えられる。

６）Ⅳ期からⅢ期：室町時代から安土桃山時代（図42）

この時期の遺構は、すべての調査区で見つかった。15世紀中頃にすべての調査区で人工的な盛土による大規模整地が行われ、遺構・遺物数が大きく増加する。これ以後、明治時代まで整地が繰り返される。

顕著な遺構としては、３区の溝3055（２区溝2646と同一）・3100などがある。溝3055は、１次調査で検出した堀2123と平行する東西方向の溝で、規模も幅約４ｍ、深さ約2.4ｍと類似する。出土遺物も類似し、ともに卒塔婆が出土した。今回出土した卒塔婆には「永正14年」（1517）・「天文３年」（1534）の年紀が記されているものもある。溝3100も土器の年代観からは同様の時期と考えられる。掘り直しも含めると１次調査の堀2123・2299・2350とあわせて５条の溝・堀が調査区にめぐらされていたことがわかる。４区でも同規模の溝4047、５区でも同様に何度も掘り直された溝5025・5027・5050・5057を検出している。１次調査の堀は堆積層の観察と珪藻分析から、堀底付近が空堀状態であったこと、泥層～泥質砂層の浮流洪水堆積物で埋積されていくことがわかっており[2)]、文献資料上で淀に城の存在が確認できる時期（第２章第２節参照）であることから、防御的な機能と洪水から居住域を守る機能を合わせもつ堀・溝と推測された。今回２～５区で検出した溝も類似した堆積状況が認められ、同様の機能をもつものと考えられる。また、各溝からは、先述したように木製品の卒塔婆や柿経のほか、土器では輸入陶磁器や大型の羽釜、風炉や仏花器、各種瓦類などが出土しており、５区付近に所在したと考えられる與杼神社の神宮寺である大徳寺との関連が強く窺われる。

７）Ⅱ期・Ⅰ期：江戸時代から明治時代（図43・44）

この時期の遺構は、３・４・５区で新たに見つかった。２区は１次調査で調査済みである。

顕著な遺構としては、３区と４区の護岸3001・3200・3473・4001・4031、水制3410・3430・4035や４区の溝4030、５区の地業5002・5003などがある。

桂川の護岸は、１次調査２区でも確認していたが、今回の調査で大きくみて江戸時代前期・江戸時代後期・明治時代の３時期の変遷があることが明らかとなった。前期の護岸は３区護岸3473と４区護岸4031・水制4035、後期の護岸は３区護岸3200と４区護岸4001、明治時代の護岸は３区護岸3001・水制3410・3430と４区水制4045である。江戸時代後期から明治時代の護岸に使用される石材は、１次調査の護岸2125のものと同様、頁岩ないし粘板岩の割石が主体である。一方、江戸時代前期の護岸に使用される石材は丸みをもつ自然石が主体である。江戸時代前期の護岸4031・水制4035の石材は、護岸の核の構築材として使用され、上面・前面は土で覆われた不透過水制であることから、一般的に川の流れに対して構造的に脆弱であるとされる円礫でも差し支えなかったと考えられる。その点で見ると、検出時には確認できなかったが、３区護岸3473の円礫も構築当初は土で覆われていた可能性が高い。

さらに、４区の前期護岸は、埋土に安土桃山時代から江戸時代前期の遺物を含む大規模な溝4300の東半を削平して構築されていることが判明した。溝4300は、深さ3.8ｍ以上、復元幅は約15ｍと

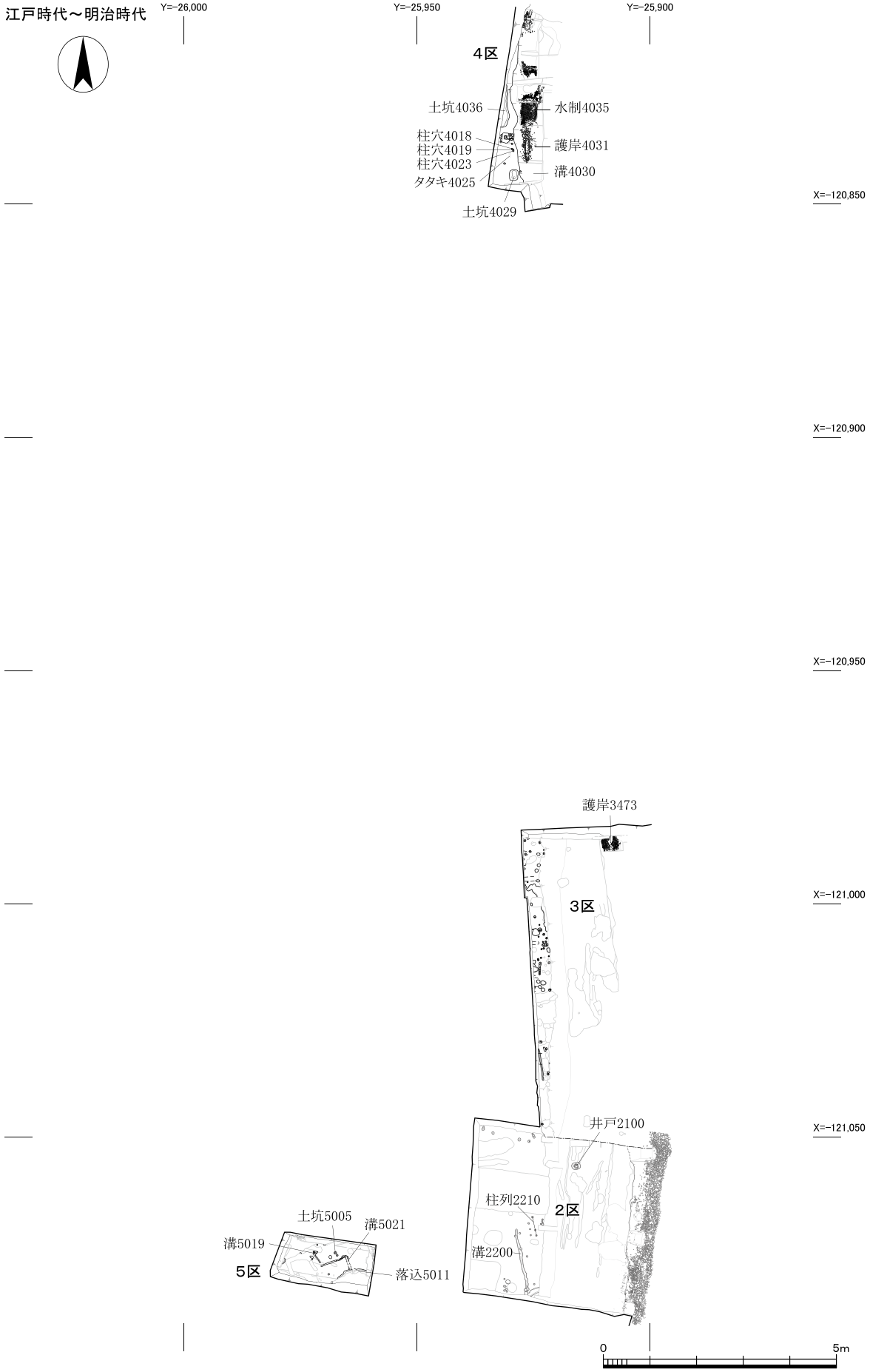


図43　遺構変遷図７（１：1,200）

図44　遺構変遷図８（１：1,200）

なり、堆積層の観察から河川とは切り離された閉鎖的な環境にあったと考えられ、この溝の機能時までは、陸地が現在よりも東に続いていたと考えられる。３区の安土桃山時代の溝3055・3100も、調査区東端で江戸時代の護岸に削平されており、江戸時代前期に桂川の川幅が拡げられたと推測され、これ以前の川幅は今よりも狭く、現在の桂川とは異なる景観であったと考えられる。この河道の拡幅の時期については、江戸時代前期の水制4035の構築土から17世紀の第２四半世紀に位置付けられる土器群とともにいわゆる古寛永通寶が出土していることから、古寛永通寶の初鋳年である1636年以降、1650年前後までの間と考えられる。寛永14年（1637）に永井尚政が木津川の河道付け替えを行い、淀城下を拡張した記録があり（『淀下津町記録』）、時期的にみて、それらと一連の土木事業であった可能性が考えられる。江戸時代以降の遺構面では、洪水由来と考えられる砂の堆積を確認しており、桂川が近接したことにより、洪水の影響を受けやすくなったことがわかる。そのため、入念な護岸工事を行い、その補修や造り替えなどの治水工事を繰り返し行っていたことが護岸の変遷から窺える。また、江戸時代前期の４区水制4035の構築材には船材が転用され用いられており、淀二十石船の拠点として栄えたとされる当地の性格を物語る遺物として注目される。

５区では平面形が「コ」の字状を呈する地業5002・5003を検出した。地業5003は、2017年度に行った南東部の調査[4]で検出した石列４と一直線上につながり、同一遺構の可能性がある。５区は、明治時代の地籍図と重ね合わせると、與杼神社旧境内に位置する（図44）。このことから、この地業は、與杼神社内の施設の建物基礎と考えられる。

同じく５区の第２面整地層からは、銅合金製の八双金具が出土した（金１・２）。この金具については、特殊な遺物であることから、金工史の第一人者である叡山大学教授の久保智康氏に調査を依頼した。久保氏は、この金具は神輿の長押に打たれた金具で、折れ角から八角形神輿のものである可能性が高いとされた。また、きわめて細かな魚々子地や全体にシャープで繊細な線彫りは江戸時代初期、寛永年間頃の作行きを示すとされた。この年代観は、出土層位の年代観と矛盾しない。さらに、製作者は特定しがたいが、同時期の最高レベルの作行きを見せることから、石清水八幡宮本殿の寛永度造営に関わった体阿弥の可能性が考えられるとした。調査地は先述したように與杼神社旧境内にあたり、與杼神社の神輿の金具である可能性が高いことから、與杼神社が現在所持する３基の神輿についても、本金具との関係を確認するため調査を行った[5]。現存の與杼神社の神輿はいずれも四角形で、また久保氏によると主に錺金具から見た各々の建造年代は、「東ノ神輿」が18世紀中頃、「中ノ神輿」と「西ノ神輿[6]」が19世紀前半と考えられ、出土品との関連は明らかにできなかった。18世紀中頃に記された『淀古今眞佐子[7]』には、與杼神社の神輿が宝暦三年（1753）に再興されたとの記述があり、一時何らかの理由で神輿がない時期があったと考えられる。出土した金具は、先代の神輿に関係するものである可能性が高いが、再興以前の神輿の形状や意匠等は不明である。しかしながら、同時期の最高レベルの技術で作られた金具が與杼神社旧境内から出土したことは、與杼神社や当地の性格を考える上で重要であると言えよう。

８）まとめと今後の課題

以上、２次調査の成果について概観した。今回の調査で、１次調査では面的な調査ができていなかった平安時代から鎌倉時代の遺構面を含め、弥生時代中期から明治時代までを通して調査することができた。その結果、遺跡の存続期間約2000年の間にも、遺構・遺物の密度は時期によって粗密があり、それは江戸時代以前では、桂川の氾濫原に位置する調査地の堆積環境の変化と連動している可能性が高いことが明らかとなった。また、今回の調査で、江戸時代前期に桂川の川幅が拡幅されたことが判明し、それより前の桂川の規模や主流路の位置は、現在とは異なると考えられる。大規模な築堤や護岸構築により河道が固定されない限り、河川はその堆積作用により主流路の位置を変えながら蛇行すると考えれば、三川合流地帯に位置する淀の地形や景観は刻々と変化したと考えられ、これは中世以前の史料に表れる「淀」や「淀津」が同じ場所を指しているとは限らないことを表し、考古学的な成果と史料の対比が困難であることを示唆している。史料との対比を可能とするためには、当遺跡を取り巻く地形環境の変化をより具体的に復元していく必要があり、今後も、自然地理学や文献史学など関連分野との連携をより密にし、調査を進めて行くことが重要である。

（２）溝3185出土の土器群について

３区第６面で検出した溝3185からは、1,000点を超える土器類が出土した。出土した土器の大半は皿や椀などの食膳具である。土器は、溝の西肩口から底部にかけて集中し、上向きになって出土し、完形もしくは完形に近いものが多い。また、瓦器椀は内面のミガキなども明瞭に残っており、使用痕跡がほとんどないように見受けられた。今回、溝3185を６つのエリア（図45）に分け、さらにそれぞれ上層・下層の２つの全12群に分けて土器の取り上げを行った。ここでは、これらの土器群について検証・考察していく。

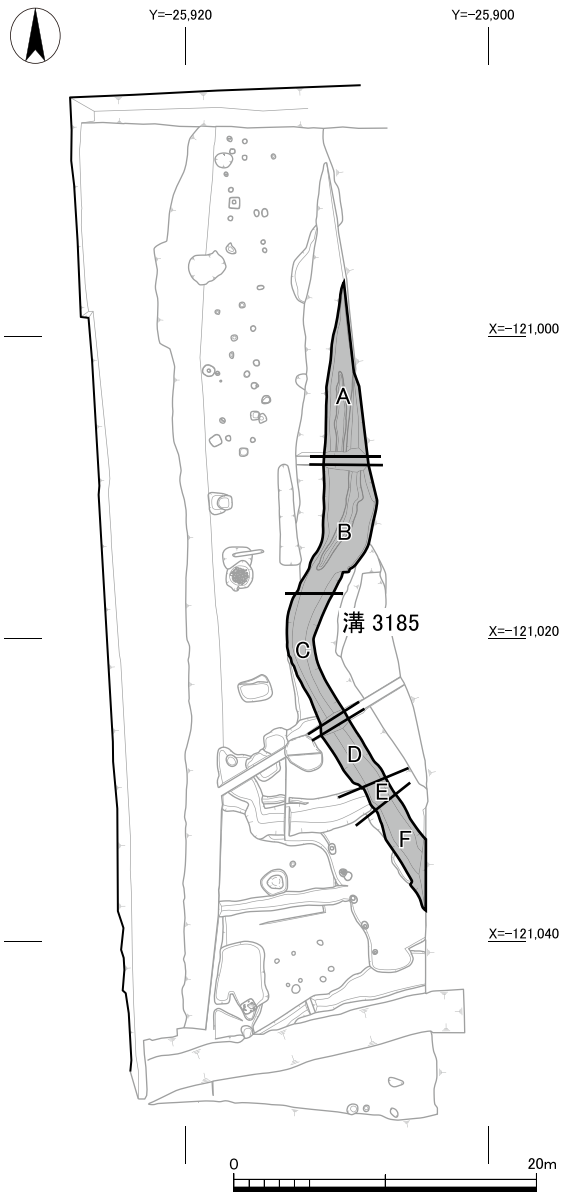


図45　溝3185土器取上げ地区割図（１：500）

１）出土土器の口径・器高分布（図46）

各群における土師器皿（大）・（小）・瓦器椀の口径分布・器高分布をみていく。口径分布では、基本的に上層・下層での大きな差異はなく、一部例外はあるものの各群ともに、土師器皿（大）は14.0～14.4㎝、土師器皿（小）は9.0～9.4㎝、

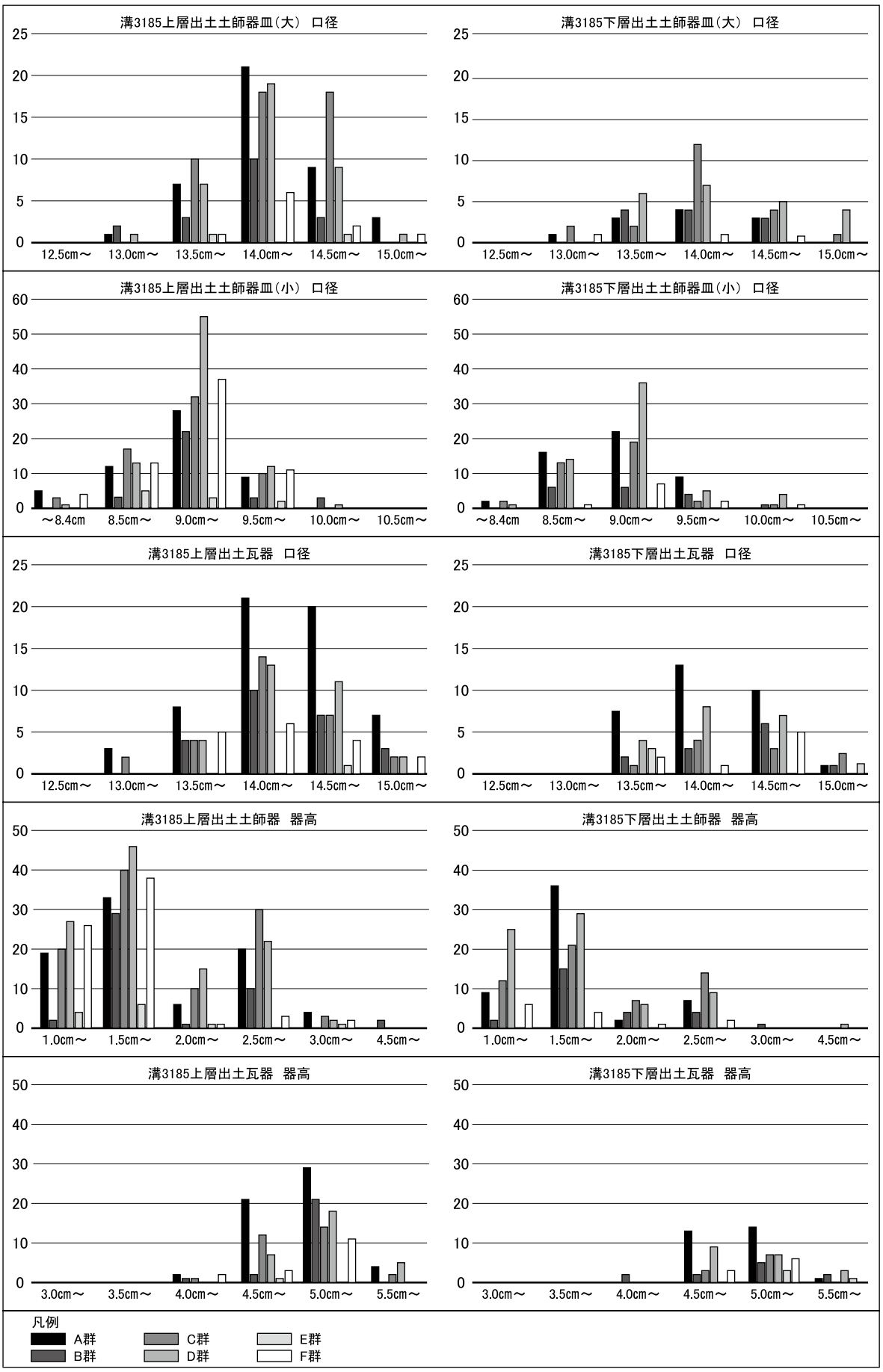


図46　溝3185出土土師器皿・瓦器椀の口径・器高分布グラフ

瓦器椀は14.0～14.4cmがそれぞれ最多を示す。器高分布でも、上層・下層での大きな差異はなく、また各群ともに土師器皿では1.5～1.9cm、瓦器椀では5.0～5.4cmが最多となる。こうした点から、土器群の各群間からは明確な時期差を認めることはできず、出土状況などを鑑みても一括性の高い土器群といえる。

２）出土土器の種類とその割合

溝3185から出土した土器は、上述したように一括性の高い土器群と考えられる。以下、それぞれの群の器種組成およびその割合を見ていく（図47）。

［上層］

①Ａ群（166点） 内訳は、土師器皿（小）60点、土師器皿（大）35点、瓦器椀66点、瓦器皿４点、灰釉陶器１点である。

②Ｂ群（112点） 内訳は、土師器皿（小）35点、土師器皿（大）24点、瓦器椀52点、山茶椀１点である。

③Ｃ群（190点） 内訳は、土師器皿（小）70点、土師器皿（大）65点、瓦器椀53点、瓦器皿１点、須恵器１点である。

④Ｄ群（202点） 内訳は、土師器皿（小）99点、土師器皿（大）51点、瓦器椀50点、瓦器皿２点である。

⑤Ｅ群（15点） 内訳は、土師器皿（小）10点、土師器皿（大）３点、瓦器椀２点である。

⑥Ｆ群（98点） 内訳は、土師器皿（小）66点、土師器皿（大）９点、瓦器椀23点である。

以上が上層での各群の比率である。上層全体では、783点中、土師器皿（小）が340点（約43%）、土師器皿（大）が187点（約24%）、瓦器椀が246点（約31%）、その他が10点（約１%）である。

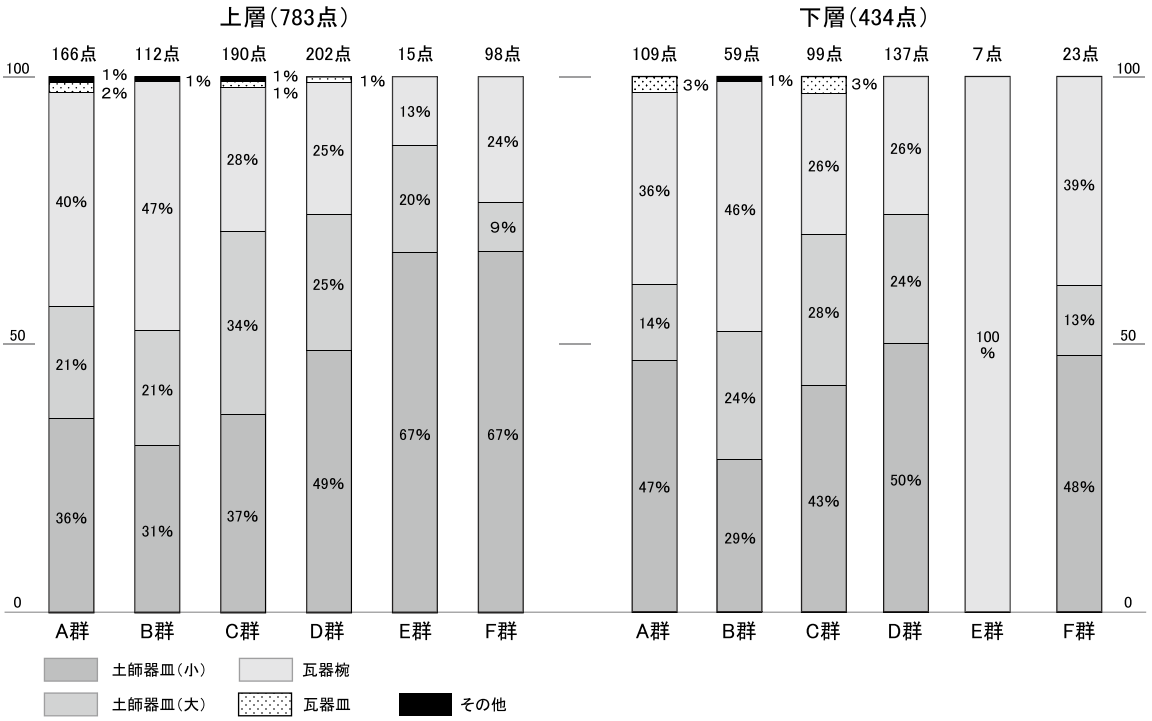


図47　溝3185出土土器の器種組成グラフ

［下層］

①Ａ群（109点）　内訳は、土師器皿（小）52点、土師器皿（大）15点、瓦器椀39点、瓦器皿３点である。

②Ｂ群（59点）　内訳は、土師器皿（小）17点、土師器皿（大）14点、瓦器椀27点、白磁椀１点である。

③Ｃ群（99点）　内訳は、土師器皿（小）42点、土師器皿（大）28点、瓦器椀26点、瓦器皿３点である。

④Ｄ群（137点）　内訳は、土師器皿（小）69点、土師器皿（大）33点、瓦器椀35点である。

⑤Ｅ群（７点）　内訳は、瓦器椀７点である。

⑥Ｆ群（23点）　内訳は、土師器皿（小）11点、土師器皿（大）３点、瓦器椀９点である。

以上が下層での各群の比率である。下層全体では、434点中、土師器皿（小）が191点（約44％）、土師器皿（大）が93点（約21％）、瓦器椀が143点（約33％）、その他が７点（約２％）である。

ここまで、溝3185出土土器の器種組成とその割合をみてきた。以下から、溝3185と同時期の他遺跡の一括土器の器種組成とその比率をみていく（図48）。溝3185から出土した土器類は、土師器が約67％、瓦器が約32％である。京都の他遺跡や他地域の遺跡における出土土器の器種組成については、宇野隆夫氏の研究[7)]を基にする。宇野氏は、京都では白河街区および下京商工業地区における資料の集成・集計を行っている。出土土器の器種組成をみると食膳具が約96％で、さらにその内土師器・瓦器が約96％を占めるが、瓦器はその中の約0.2％であり、瓦器が極めて少ないことがわ

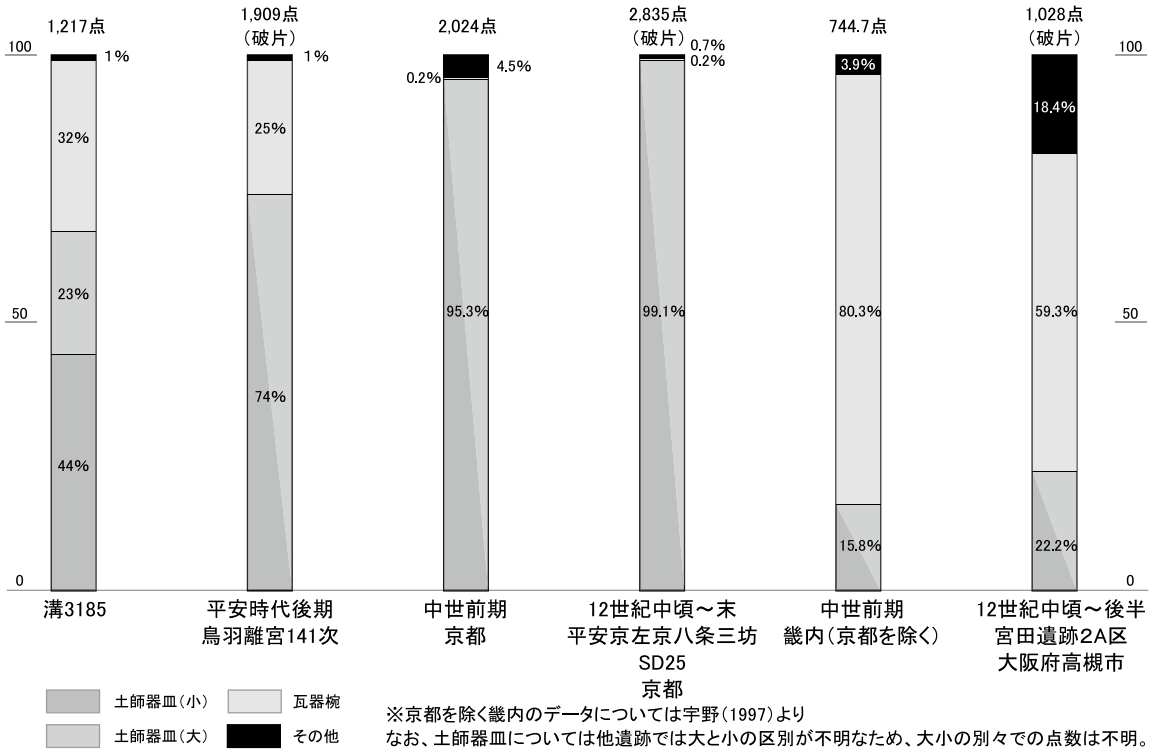


図48　器種組成の割合の他遺跡との比較グラフ

かる。京都を除く畿内では、食膳具が出土土器全体の内約81％を占め、その内の約80％が瓦器という京都とは異なる様相を示す。平安京内や白河街区、また京都を除く畿内とも異なる土器の組成を示す溝3185出土土器の傾向と比較的近い割合を示すのは、鳥羽離宮（141次調査）であり、土師器皿が約74％、瓦器椀が約25％、その他（黒色土器、輸入白磁）が約１％である。鳥羽離宮と淀は河川を通じて深い結びつきがあったと考えられ[8)]、そのことが出土土器組成にも反映されている可能性が考えられる。

一方、宇野氏は、中世前期に増加する一括投棄された土器の使用法について、使用痕を残すものが少ないことや中世前期という時代性から、「土師器・瓦器の食膳具は儀礼的あるいは宗教的な共食の場あるいは日常生活でもハレの場で使用し、１回限りの使用で捨てるものであった可能性が高く、食事の機会や集まる人数が多い格上の遺跡あるいは地区において、土器食膳具の出土が多い」としている[9)]。溝3185出土の土器類についても完形のものが多いこと、使用痕を残すものが少ないこと、一括投棄されたと考えられる出土状況などから、儀礼もしくは宴会などの共食での使用後に廃棄された可能性が考えられる[10)]。文献資料では、出土土器の年代観と一致する時期の嘉応元年（1169）などに淀にて龍頭鷁首の舟楽が行われたという記述がみられ[11)]、今後予定されている溝3185西側の調査で関連する遺構・遺物の出土状況を含め、平安時代後期における当遺跡の性格を検討していく必要がある。

註

１）　柳之御所遺跡で検出された土坑については、「非恒常的な井戸状遺構」とする説（八重樫忠郎「掘り出された平泉」『平泉の光芒』　吉川弘文館　2015年）と、「井戸状遺構」とする説（飯村均「東国のかわらけ」『中世奥羽の考古学』　六一書房　2015年）があり、前者は儀礼用または壁土採取のための土坑と推測、後者は宴会儀礼のための施設と推定している。また、鋤柄俊夫氏は、新宮下本町遺跡（和歌山県新宮市）で検出された類似の土坑について、大型の建物と隣接している点もふまえて、柳之御所遺跡の「井戸状遺構」と同様の性格の一端を持っていた可能性を考えている（「第7章　分析」『新宮下本町遺跡総合調査報告書』　新宮市教育委員会　2022年）。

２）　『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021－16　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2023年　102Ｐ

３）　公益財団法人山梨文化財研究所の畑大介氏よりご教授をいただいた。

４）　『長岡京左京九条三坊四町・淀水垂大下津町遺跡・與杼神社旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017－９　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2018年

５）　與杼神社宮司 竹山真由子氏、與杼神社神輿会会長 山本博則氏、淀連合自治会会長 西庄英晴氏にご協力を賜った。

６）　松尾神社から譲られた神輿である。

７）　宇野隆夫「中世食器様式の意味するもの　計量分析による使用法の復元」『国立民俗博物館研究報告』第71集　1997年。この中で宇野氏は、中世を12世紀後半から16世紀までと定義し、南北朝期を境に前期と後期の２つに分けている。

8） 鳥羽離宮は、鳥羽の地が水陸交通の要衝であったことなどから西国受領層との深いつながりがうかがわれる。大村拓生氏は鳥羽離宮の造営を担当したのは讃岐守高階泰仲、鳥羽に山荘をもちそれを献上したのは備前守藤原季綱といずれも西国受領層であることなどから、鳥羽離宮と西国受領層との関係を考察している（大村拓生『中世京都首都論』 吉川弘文館　2006年）。また、鳥羽離宮造営に伴い、不確定であった美豆への渡河ルートも淀に確定される（同上　大村2006）など、淀川交通の諸拠点の再編が行われた。大村氏は、長元８年（1035）の藤原頼通の石清水参詣では、淀から乗船しており、その際、美作守大江定経が酒餞を設けていることから、淀に西国受領層が倉庫とともに饗宴を行える施設を有していたと考えている（大村拓生「中世淀をめぐる交通と流通」『ヒストリア』第302号 2024年）。

9） 前掲註７に同じ。

10） 薪遺跡（京都府京田辺市）の池SG41からも、溝3185のように完形の土師器皿（大）（小）・瓦器椀などが大量に出土しており、儀式にともなう投棄と考えられている（『京都府京田辺市　薪遺跡発掘調査概報』京田辺市埋蔵文化財調査報告書 第30集　京田辺市教育委員会　2000年）。

11） 『兵範記』嘉応元年４月26日条。

付章１　自然科学分析

株式会社パレオ・ラボ

（１）調査区の層序と分析試料の採取状況

１．はじめに

発掘調査に伴い、現地野外調査を実施し、堆積層の観察と分析試料の採取を行った。ここでは、このうち２区と３区に累重する堆積層の記載と、放射性炭素年代測定、花粉分析、大型植物遺体分析、植物珪酸体分析、珪藻分析を目的とした堆積物試料の採取状況を示す。

２．観察および調査結果

２区と３区に累重する堆積層については、層相および放射性炭素年代と出土土器から、堆積ユニット１～16（以下、堆積を略する）に区分できる。図１に、２区と３区での柱状模式断面図と堆積ユニットおよび発掘調査で設定された基本層序、遺構検出面の累重状況を示す。また、図１には、堆積物試料と年代測定試料の採取位置および基本層序も併せて記載している。さらに、表１に分析試料の一覧、写真１～24に調査区の堆積状況と分析試料の採取状況を示す。

３．堆積ユニットの記載と年代

(1) ユニット16

２区の深掘トレンチ最下部の３・４地点で確認した、T.P.5.0ｍより下位の堆積層に相当する（写真５～７）。最下部は極粗粒砂、ユニット16の下半部に相当する極粗粒砂の直上には、中粒砂～粗粒砂とシルト混じりで植物遺体を含む細粒砂～中粒砂の互層が堆積する。ユニット16の上半部には、シルト質極細粒砂～細粒砂が累重する。下半部のシルト質砂に挟在する生材からは、縄文時代後期後葉に相当する3210 ^{14}C BPの年代測定値（№２）が得られた（写真６）。本ユニットは、今回２区と３区で確認できた最深部に堆積した堆積ユニットである。層相および上方細粒化する堆積サクセッションから、ユニット16は、流路縁付近の堆積層と推測される。

なお、３区の深掘トレンチでは、基底面からさらに部分的にトレンチ掘削を行っている。このトレンチ断面を記載した13地点では、堆積層の上面高度から、最下部の粘土質シルトがユニット16に対比される可能性がある。ただし、２区・３区ともユニット16は掘削深度限界付近にあたっており、非常に限られた範囲と深度しか観察できない。そのため、２区と３区におけるユニット16の層序対比については、不確定な部分が多い。

(2) ユニット15

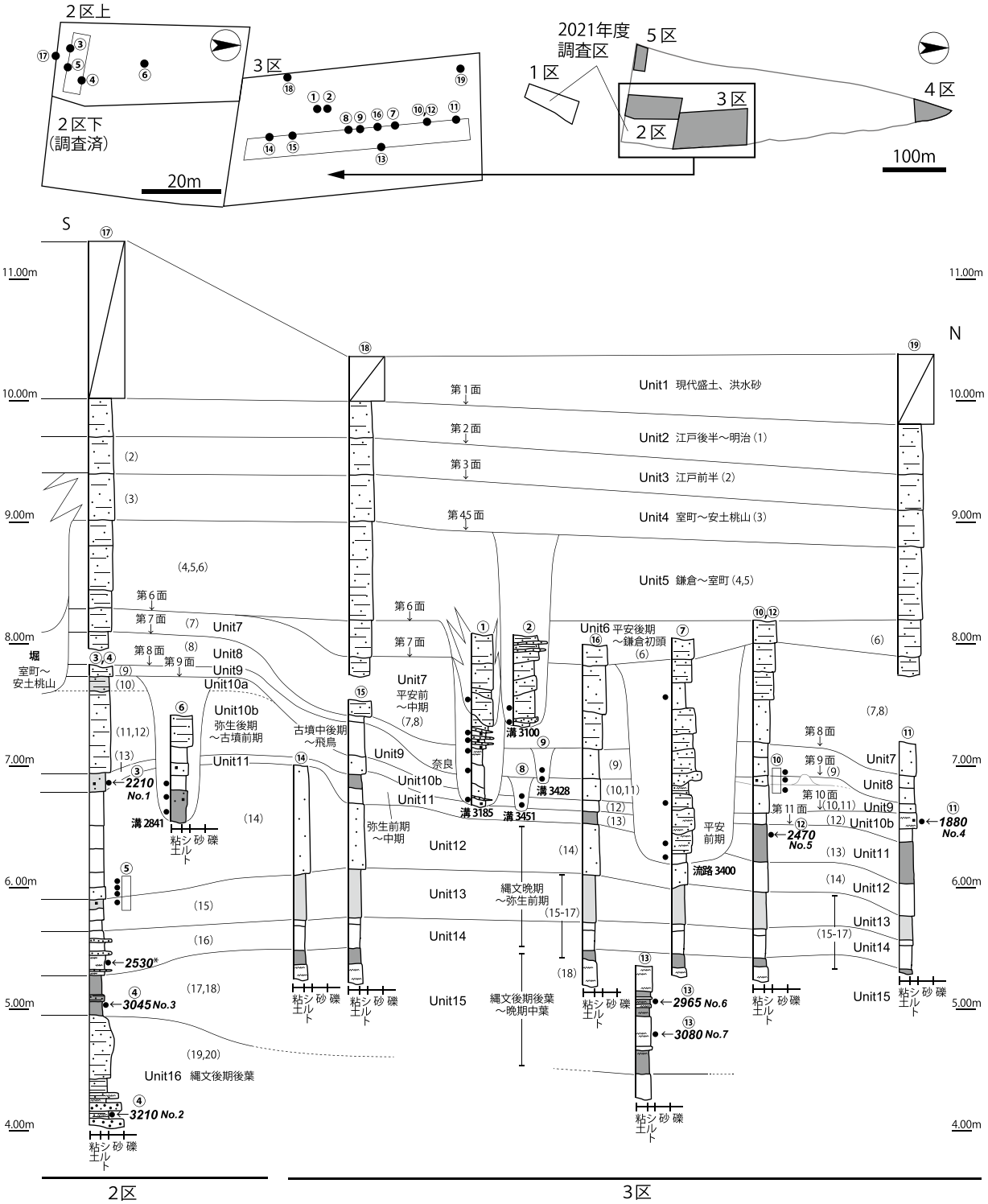
本ユニットは、T.P.5.0ｍ～5.5ｍ付近に分布する。２区と３区では、層相が異なる。２区では、暗色帯をなす腐植質粘土質シルトが連続的に累重する（写真５・７）。層内には、シルト質細粒砂の薄層が挟在する。シルト質細粒砂の薄層の直下の土壌腐植からは、縄文時代後期後葉～晩期前葉に

表１　分析試料一覧

調査区	断面、セクション	遺構面	遺構名	地点	時期	試料№	土層名	分析					年代試料№
								花粉	珪藻	大型植物遺体	年代	植物珪酸体	
3区	溝セクション	第6面	溝3185	1地点	平安時代後期	3		○	○	－	－	－	－
						5		○	○	○	－	－	－
						7		○	○	○	－	－	－
						9		○	○	○	－	－	－
						12		○	○	○	－	－	－
3区	溝セクション	第6面（※）	溝3100	2地点	室町時代（15世紀代）	4		○	○	－	－	－	－
						5		○	○	－	－	－	－
2区	深掘南壁断面	－	－	3地点	2210 BP	1		－	－	－	－	○	1
2区	深掘北壁断面	－	－	4地点	3045 BP	1		－	－	－	－	○	3
					3210 BP	2		－	－	－	－	○	2
2区	深掘南壁断面	－	－	5地点	2530BP以降～2470BP以前	1		－	－	－	○	－	－
						2		－	－	－	○	－	－
						3		－	－	－	○	－	－
						4		－	－	－	○	－	－
2区	溝セクション	－	溝2841	6地点	古墳時代初頭	1		○	○	－	－	－	－
						2		○	○	－	－	－	－
						3		○	○	－	－	－	－
3区	調査区西壁	第7面	流路3400	7地点	奈良時代～平安時代中期	1		○	－	－	－	－	－
						4		○	－	－	－	－	－
						5		○	－	○	－	－	－
						6		○	－	－	－	－	－
3区	調査区西壁	第9面	溝3451	8地点	古墳時代中期	1		○	－	－	－	－	－
						2		○	－	－	－	－	－
3区	調査区西壁	第8面	溝3428	9地点	奈良時代	2		○	－	－	－	－	－
						3		○	－	－	－	－	－
3区	調査区西壁	－	－	10地点	古墳時代後期	1		－	－	－	○	－	－
						2		－	－	－	○	－	－
						3		－	－	－	○	－	－
3区	調査区西壁	－	－	11地点	1880 BP	1		－	－	－	－	○	4
3区	調査区西壁	－	－	12地点	2470 BP	1		－	－	－	－	○	5
3区	深掘東壁断面	－	－	13地点	2965 BP	1		－	－	－	－	○	6
					3080 BP	2		－	－	－	－	○	7

※…下段部削平により、成立面とは異なる遺構面で検出している。

相当する3045 ^{14}C BPの年代測定値（№３）が得られた（写真７）。一方で、３区では、暗色帯をなす腐植質と砕屑物主体の粘土質シルトが互層をなして堆積する（写真19）。３区では、挟在する植物遺体から、ユニットの下部で3080 ^{14}C BP（№７）、上部で2965 ^{14}C BP（№６）と、ともに縄文時代後期後葉～晩期前葉に対比できる年代測定値が得られた。２区と３区では、双方で粘土質シルトの泥層が堆積する。ただし、この泥層中には、２区で植物遺体が含まれないのに対し、３区で植物遺体片が比較的多く含まれる。３区の腐植質粘土質シルトは、直下のユニット16の砂質堆積物が形成した高まり上に堆積する。２区では、ユニット16の砂質堆積物は存在せず、地形的に低い領域を埋積する。



●：分析試料，年代測定試料の採取位置 ←**3210**：放射性炭素年代測定値（BP），括弧内の数字は試料番号を示す．＊の年代測定値は，2区下での既往の測定値．
Unit：堆積ユニットを示す．Unit の後の数字は，堆積ユニット番号を示す．また，堆積ユニットに付随する括弧内の数字は，2区、3区の柱状図模式断面層序対比図での土層番号を示す．下矢印で示した数字は，遺構検出面を示す．
・丸数字で囲った数字は、柱状図の記載地点を示す。記載地点の位置は，最上段の調査区の配置図を参照.

・遺構検出面の時期は，3区の第1面（江戸時代後半～明治時代），第2面（江戸時代前半），第3面（室町時代末～安土桃山時代），第4面（室町時代後葉），第5面（室町時代中葉），第6面（平安時代後期～鎌倉時代初頭），第7面（平安時代前・中期），第8面（奈良時代），第9面（古墳時代後期～飛鳥時代），第10面（古墳時代初頭），第11面（弥生時代中期～後期）である．
2区の第1面（江戸時代後半～明治時代），第2面（江戸時代前半），第3面（室町時代末～安土桃山時代），第4面（室町時代後葉），第5面（室町時代中葉），第6面（平安時代後期～鎌倉時代初頭），第7面（奈良時代），第8面（古墳時代後期～飛鳥時代），第9面（古墳時代初頭），第10面（弥生時代中期～後期）である．

図1　2区上と3区の層序と分析試料の採取位置

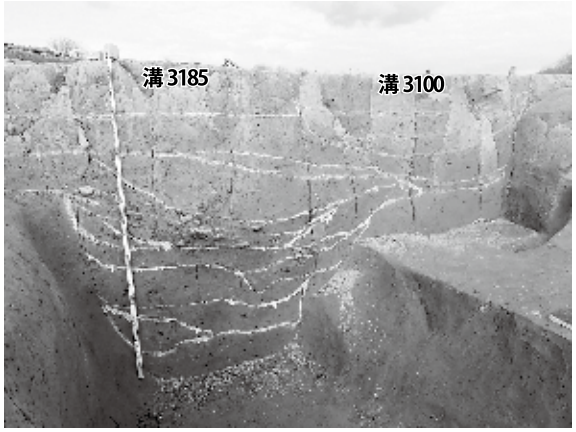


写真１　１地点（溝3185）と２地点（溝3100）の堆積状況

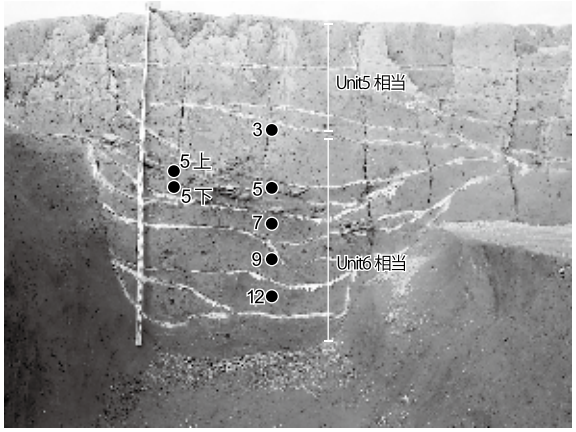


写真２　１地点（溝3185）の分析試料の採取位置

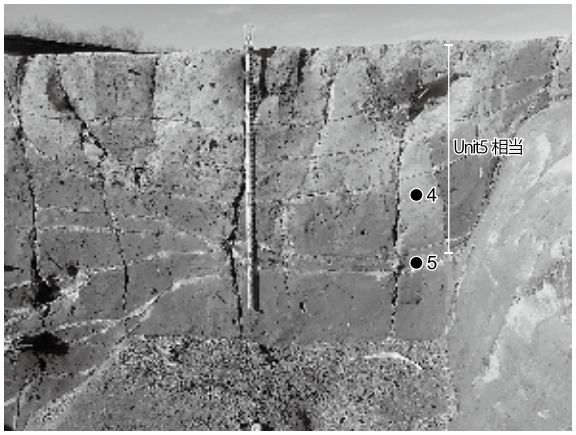


写真３　３地点（溝3100）の分析試料の採取位置

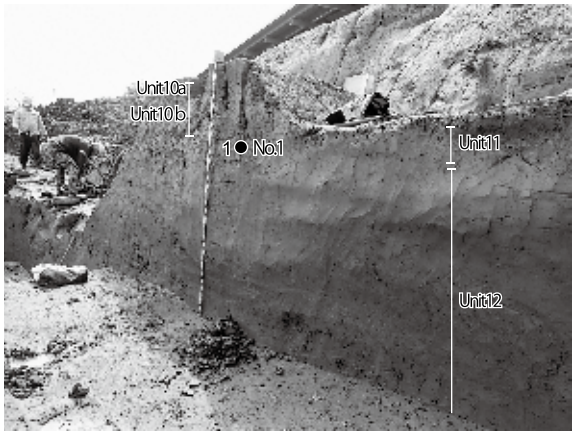


写真４　３地点の年代測定試料（No.１）の採取位置

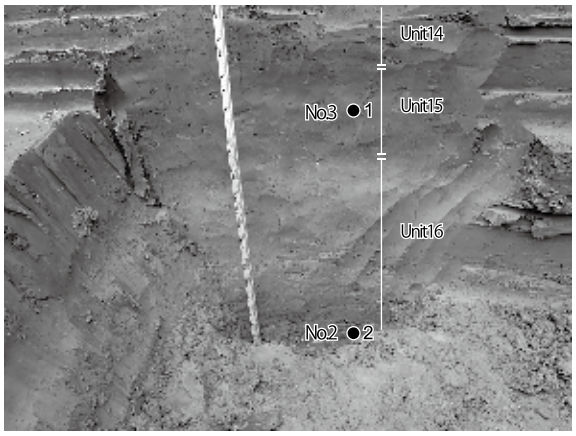


写真５　４地点の年代測定試料（No.２・３）の採取位置

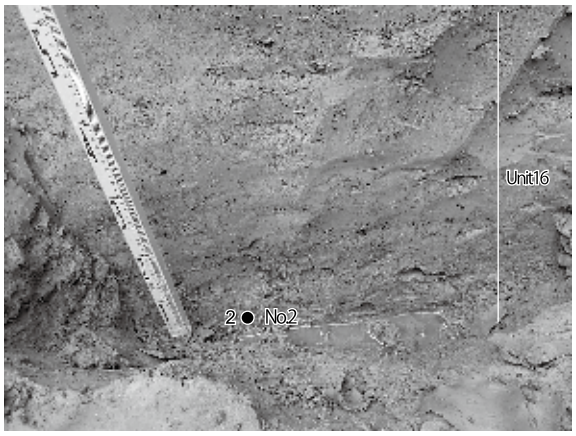


写真６　４地点の年代測定試料（No.２）の採取位置

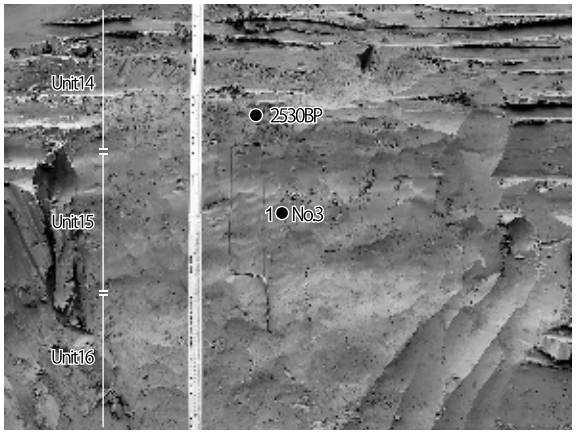


写真７　４地点の年代測定試料（No.３）の採取位置

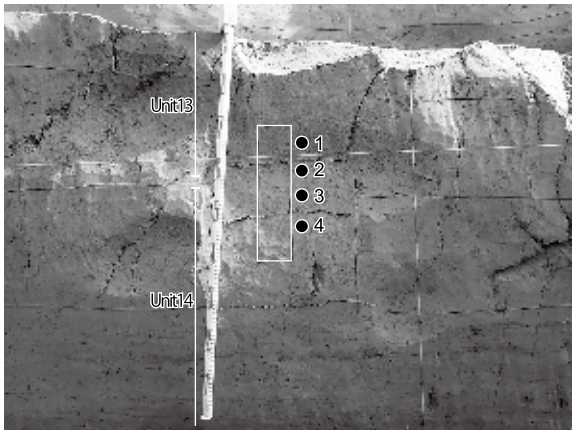


写真８　５地点の分析試料の採取位置

写真９　６地点（溝2841）の堆積状況

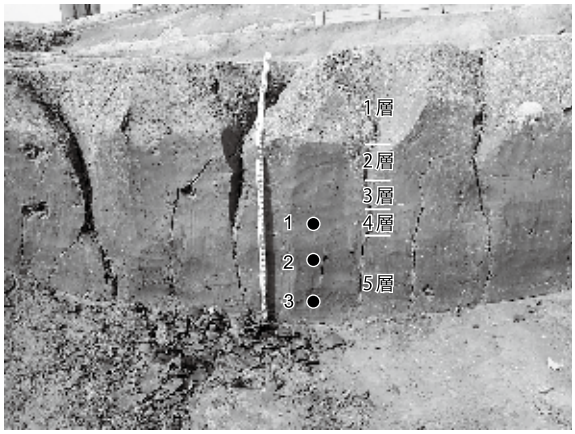


写真10　６地点（溝2841）の分析試料の採取位置

写真11　７地点（流路3400）の堆積状況

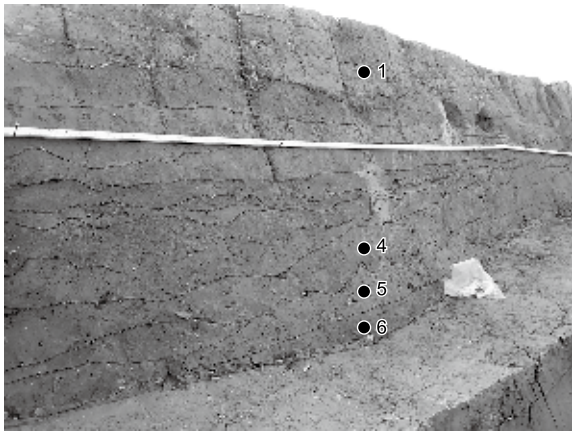


写真12　７地点（流路3400）の分析試料の採取位置

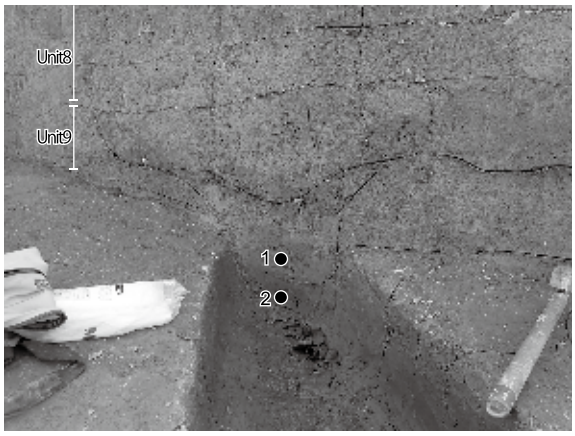


写真13　８地点（溝3451）の分析試料の採取位置

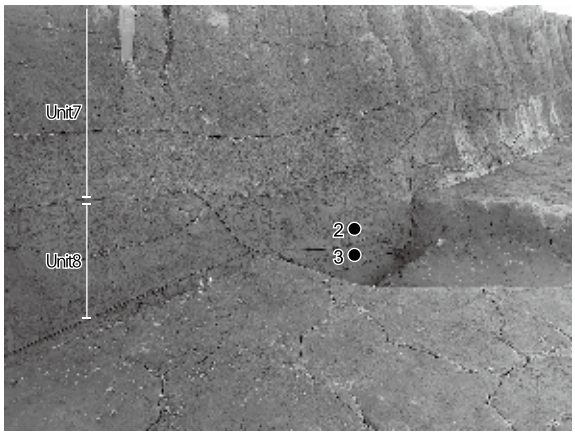


写真14　９地点（溝3428）の分析試料の採取位置

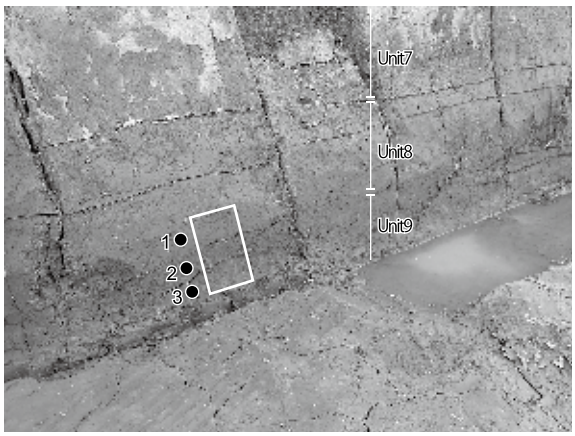


写真15　10地点の分析試料の採取位置

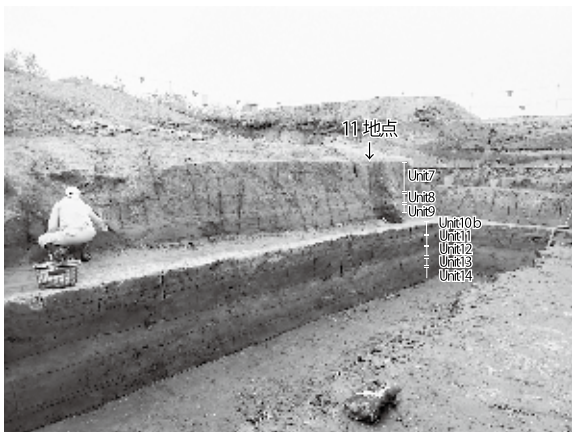


写真16　11地点の堆積状況

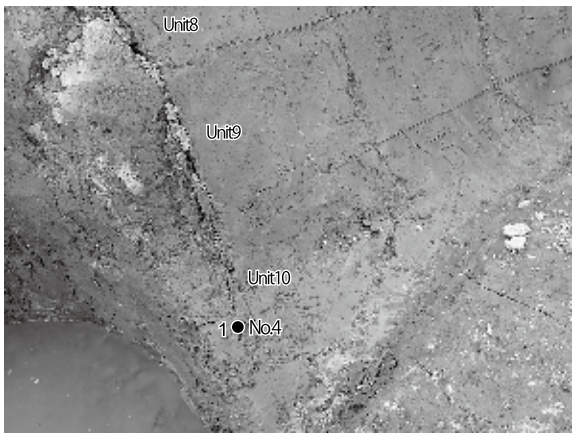


写真17　11地点の年代測定試料（No.４）の採取位置

写真18　12地点の年代測定試料（No.５）の採取位置

写真19　12地点の年代測定試料（No.６・７）の採取位置

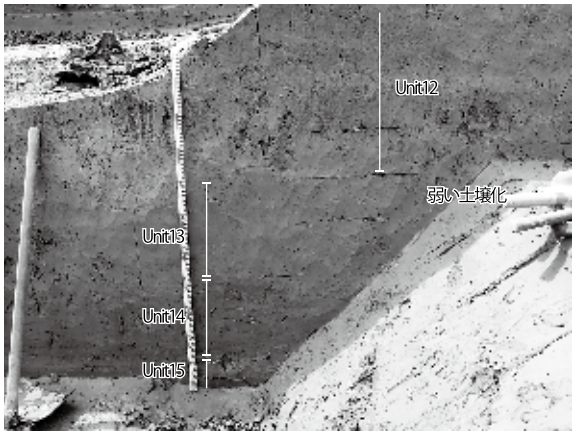


写真20　３・４地点の下半部の堆積状況

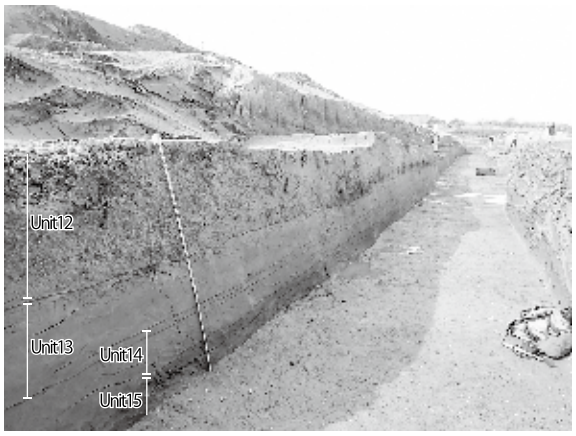


写真21　14地点の堆積状況

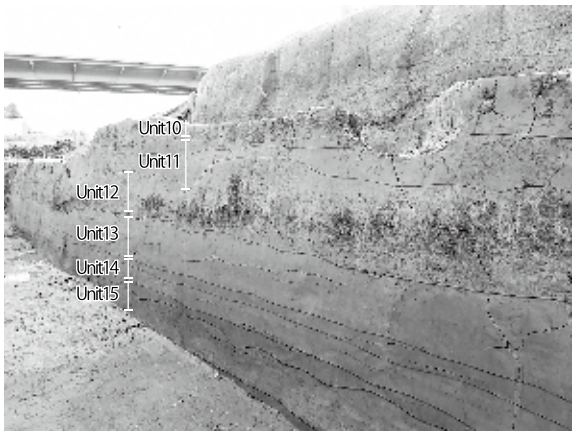


写真22　15地点の堆積状況

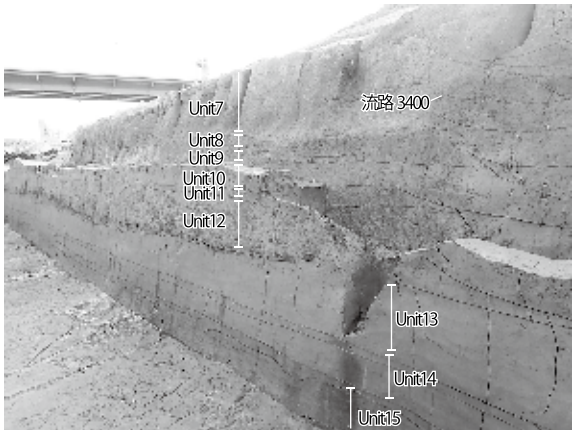


写真23　16地点の堆積状況


写真24　室町～安土桃山時代の堀の堆積状況

上記の層相と堆積状況から、ユニット15は、砂質堆積物の高まり上の２区において相対的に３区よりも乾燥傾向にある土壌発達層準、地形的に低い３区で湿地の堆積環境が形成されていたと解釈できる。２区で連続的に堆積する腐植質泥層は、泥質洪水堆積物の供給が間欠的で、さらに堆積速度や堆積量が小さい堆積環境下で累積的に形成された土壌発達層準と考えられる。また、３区に挟在する腐植質の層準については、流入する洪水の頻度や強度が弱まり、相対的に堆積速度が低下した段階に生成したと考えられる。

(3) ユニット14・13

ユニット14と13は、ともに直下のユニット15と同様に粘土質シルトからなる。分布高度は、ユニット14がT.P.5.5ｍ～5.8ｍ、ユニット13がT.P.5.8ｍ～6.1ｍである。ユニット14と13のうち、下位のユニット14は砕屑物主体、上位のユニット13は土色がやや暗色を呈し、腐植をやや多く含む層相を示す（写真16・18）。また、２区では、ユニット14の最下部にわずかに植物遺体片が葉理状に含まれる（写真７・20）。３区では、ユニット14と13ともに植物遺体は含まれていない。２区のユニット最下部に挟在する葉理状の植物遺体からは、調査が既に終了している２区下で検出された井戸2178の側壁から採取された年代測定試料において（写真７）、縄文時代晩期後葉に相当する2530 ^{14}C BPの年代値が得られている（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2023）。

層相および構成層の岩質から、ユニット14と13は、後背低地の堆積環境下にあったと捉えられる。３区では、双方のユニットともに未分解の植物遺体は挟在せず、ユニット13においては、少ないながら、腐植が蓄積しながら堆積する特徴を確認できる。このような層相と、直下のユニット15に比べて未分解の植物遺体がほぼ挟在しない特徴から、ユニット14と13では、ユニット15よりも相対的に植物遺体の分解が進行する好気的な堆積環境下にあったと推定される。よって、ユニット14と13では、常に地表面が水没する状況や、地表付近の堆積物が水で飽和するような状態にあるような湿地や浅い湛水域となる沼沢地ではなく、洪水時以外は乾燥傾向にある排水性の良い氾濫原面に相当する地形面が形成されていたと推測される。

(4) ユニット12

分布高度は、T.P.6.1ｍ～7.0ｍである。ユニットの上面の相対的な高度は、３区南端付近でT.P.7.0ｍ、北端部でT.P.6.0ｍであり、３区の北側に向かって低く傾斜している。一方で、３区南端から北側の２区にかけては、上面高度がやや低くなる程度で、T.P.6.9ｍ～7.0ｍ付近に微高地をなす地形面が形成される。

ユニットの構成層は、シルトを主体とする（写真20～23）。３区では、上面高度が低くなる北側に向かって、シルトに含まれる極細粒砂が減少する。２区の３・４地点では、極細粒砂を相対的に多く含む３区の14地点や15地点に比べ、構成層が細粒でシルト主体となる。直下と直上のユニットにおける年代測定結果にもとづくと、ユニット12は、下位のユニット14・13と同様に縄文時代晩期後葉もしくは縄文時代晩期後葉～弥生時代前期のある段階に堆積したと捉えられる。ユニット12は、砕屑物主体の層相をなしており、腐植を相対的に多く含むユニット13よりも細粒の砂を相対的に多く含む。このような層相の層位的変化にもとづくと、ユニット12の段階には、調査区付

近に流入する浮流洪水堆積物の頻度が高まり、氾濫原の堆積環境が不安定化したと考えられる。また、ユニットの構成層上面が形成した地形傾斜から、ユニット12の堆積に伴って、調査区では２区から３区の南半部付近に微高地、３区の中央付近から北半部に微低地が形成されたと捉えられる。２区および３区で南側から北側かけて低くなるユニット12の地形傾斜については、自然堤防から後背低地にかけての氾濫原の微地形を反映していると解釈できる。

(5) ユニット11

本ユニットは、直下のユニット12が形成した微地形のうち、微低地部を中心に堆積する。分布高度は、T.P.6.1ｍ～7.1ｍである。３区では、ユニット12の上面が形成した、北側に向かって低くなる地形傾斜を埋積し、調査区の南端部から北端部にかけて層厚が大きくなる。構成層は、暗色帯をなす腐植質の粘土質シルトである（写真18・22)。腐植質粘土質シルトは、植物遺体を含んでおらず、土壌生成作用を強く受けて形成された暗色帯をなす層準と解釈できる。一方で、微高地上の３区南端部から２区にかけては、ユニット11の構成層の土色の黒みが相対的に薄くなり、褐色を呈するとともに層厚も小さくなる（写真20)。放射性炭素年代値は、２区において炭化材片から弥生時代中期に相当する2210 ^{14}C BP（№１）、３区の北側で土壌腐植から弥生時代前期に相当する2470 ^{14}C BP（№５）が得られた（写真18)。さらに、少ないながら出土した土器と遺構の検出状況をふまえると、ユニット11については、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期のある段階もしくは弥生時代前期～中期に形成されたと捉えられる。

上記の年代および層相から、ユニット11段階には、縄文時代晩期後葉の洪水によって形成された氾濫原の微地形のうち、３区北半の微低地部分において、流入してきた泥質の洪水堆積物を母材として土壌が累積的に形成される堆積環境であったと考えられる。一方で、３区南端部から２区の微高地部分では、泥質の洪水堆積物の堆積がほとんど生じておらず、ユニット12が形成した地表付近で継続的に土壌生成作用が生じていたと考えられる。

以上のようなユニット12からユニット11の層相変化と年代から、縄文時代晩期後葉に２区から３区にかけては、それまで比較的平坦な後背低地の地形面上に流入した泥質洪水堆積物により、微高地から微低地への地形傾斜が形成される氾濫原の微地形が発達したと捉えられる。そして、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期のある時期ないし弥生時代前期になると、調査区付近に流入する泥質洪水堆積物の頻度と強度が低下し、微高地部分で好気的な土壌生成作用が継続する安定的で高燥な地表環境が維持されたと考えられる。微低地部分では、比較的排水性が良く、洪水時には冠水するものの、普段は地表付近が乾燥して土壌化の進行が継続するような後背低地の堆積環境にあったと推定される。上記のような堆積環境は、年代測定値と出土遺物から、弥生時代中期まで継続したと判断できる。

(6) ユニット10

本ユニット段階には、２区においてシルト混じりの極細粒砂～細粒砂がT.P.7.0ｍ～7.7ｍが比較的厚く堆積する（写真４)。このシルト混じりの極細粒砂～細粒砂の累重により、２区では、自然堤防状の微高地が形成される。微高地を形成したシルト混じりの極細粒砂～細粒砂の上部には、腐

植質の土壌発達層準が形成される。ユニット10については、土壌発達層準をユニット10a、その下位の砕屑物主体の層準をユニット10bに細分している。ユニット10aについては、２区のみに存在する。微高地が形成された２区では、土壌発達層準のユニット10a上面から古墳時代初頭の居住域が検出されている。よって、微高地部分では、古墳時代初頭に既に土壌化の進行しており、洪水による微高地発達を終えていたと考えられる。また、地形的に低い領域に相当する３区では、シルトが薄く堆積するのみである（写真16・22・23）。３区北端部では、シルト中において植物遺体片の挟在が目立つ。挟在する植物遺体片からは、弥生時代終末期もしくは古墳時代初頭に相当する1880 ^{14}C BPの年代値（№４）が得られた（写真16・17）。ユニット10については、年代測定値と上面で検出される遺構に伴う出土遺物から、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて形成されたと考えられる。

(7) ユニット９・８

本ユニットは、ユニット10が形成した微地形面に沿って堆積する。構成層は、シルト～極細粒砂や細粒砂混じりのシルトからなる。なお、ユニット９から上位のユニットは、出土遺物と遺構検出状況によって堆積年代が決定される。堆積年代は、ユニット９が古墳時代中後期～飛鳥時代、ユニット８が奈良時代である。ユニット９・８は層厚がいずれも薄く、当該期に氾濫原に流入する洪水堆積物が比較的少なく、安定的な堆積環境下にあったと推測できる（写真16・23）。ただし、相対的な層厚は、奈良時代のユニット８が厚い。よって、奈良時代には、古墳時代後期～飛鳥時代よりも調査区に流入する洪水の頻度がやや上昇した可能性が考えられる。

(8) ユニット７

平安時代前期～中期のユニット７では、直下の奈良時代のユニット８に比べ、明確に粗粒化するとともに、層厚も増大する（写真16・23）。ユニット７の構成層は、シルトを多く含み、極細粒砂～細粒砂からなる浮流洪水堆積物である。調査区付近では、ユニット８の堆積によって、縄文時代晩期後葉のユニット11段階に形成され、その後継続されてきた微高地から微低地の氾濫原の微地形のうち、微低地部分が完全に埋積される。さらに、微低地部の３区の中央付近では、本ユニット埋積後もしくは埋積がかなり進行した段階で、流路3400による下刻と急激な埋積が生じた（写真11・12）。堆積状況から、２区と３区とその付近では、平安時代前期～中期になると堆積環境が急激に不安定になり、氾濫原で活発な埋積や流路形成が生じたと認識できる。

(9) ユニット６

平安時代後期～鎌倉時代初頭のユニット６では、直下のユニット７に比べて層厚が小さい。構成層は、ユニット７と同様にシルト～極細粒砂や細粒砂混じりのシルトで構成される。堆積状況から、２区と３区とその付近では、平安時代後期～鎌倉時代初頭段階に、氾濫原の堆積環境が平安時代前期～中期よりも安定した可能性を指摘できる。

(10) ユニット５

鎌倉時代～室町時代のユニット５の構成層は、シルトを含む極細粒砂や細粒砂である。本ユニットは、平安時代～鎌倉時代初頭のユニット７・６よりも構成層が粗粒化する。また層厚は、平安時

代後期～鎌倉時代初頭のユニット６よりも大きい。なお、ユニット５もしくは直下のユニット６の上位では、人為的な地表撹乱や土壌化の影響が強まる。よって、ユニットの構成層は、氾濫原に流入した洪水層だけでなく、洪水層を母材とした整地層などの人為的擾乱層も厚く堆積するようになる。堆積状況から、２区と３区とその付近では、鎌倉時代～室町時代に再び浮流洪水堆積物の流入が多くなり、氾濫原の堆積環境が不安定化したと考えられる。調査区では、流入した洪水層を母材として、整地層などの人為的堆積物が形成される。

（11）ユニット４～１

堆積年代は、ユニット４が室町時代～安土桃山時代、ユニット３が江戸時代前半、ユニット２が江戸時代後半～明治時代で、ユニット２の上部に現代の盛土や洪水砂層が載る。構成層は、浮流洪水堆積物のシルトを含む極細粒砂や細粒砂を母材とする人為的擾乱堆積物である。ユニット４～１の層厚は大きく変わらないため、室町時代以降から明治時代にかけての２区と３区とその付近では、断続的な洪水流入や冠水が生じていたと捉えられる。

４．堆積環境の変遷

今回の発掘調査では、T.P.11.0ｍからT.P.5.0ｍまでの層厚6.0ｍのほぼ連続した堆積層の累重状況が観察できた。このうち、流路を埋積した可能性のある粗粒な砂質堆積物は、T.P.5.0ｍ付近の２区の深掘トレンチの基底部のみに存在する。この他の堆積層は、すべて浮流主体の氾濫原の埋積層である。縄文時代後期後葉には、最深部のT.P.5.0ｍより下位に、調査区付近で流路が形成されていた可能性がある。

その後、縄文時代後期後葉～晩期初頭には、縄文時代後期後葉に堆積した砂質堆積物の周囲に湿地が広がり、泥層で氾濫原が埋積される。縄文時代晩期後葉には、泥質の浮流洪水堆積物が氾濫原に多く流入するようになり、後背低地の堆積環境が形成される。この段階に２区と３区付近に形成された後背低地は、直下の３区で形成されていた縄文時代晩期後葉段階の湿地よりも地下水位が低く、水没するのは洪水時にのみで、普段は地表が乾燥して土壌化も進行するような排水性の良い地表環境下にあったと推測される。ただし、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期のある段階になると、２区から３区南端付近に微高地を形成するような氾濫原での活発な洪水堆積作用が生じる。この段階には、２区から３区において、自然堤防から後背低地へと北側に向かって地形的に低く傾斜する微地形が形成される。

縄文時代晩期後葉～弥生時代前期のある段階もしくは弥生時代前期になると、２区と３区付近では、氾濫原に流入する洪水堆積物の頻度と強度が相対的に弱まり、地表付近において土壌生成作用が卓越するようになる。このような地表環境は、弥生時代中期まで維持されたと考えられる。このうち、微低地部の３区では、時折流入する洪水泥層を母材として、累積的に土壌発達層準が形成される。

弥生時代後期～古墳時代前期には、２区において古墳時代初頭頃までに顕著な微高地形成が生じる。その後、古墳時代中後期から奈良時代までは、古墳時代前期前後までに２区から３区に形成

された南から北に傾斜する地形に沿うように、泥質の洪水堆積物が間欠的に被覆していく比較的安定した堆積環境が維持される。古墳時代前期～奈良時代の溝埋土では、いずれも花粉化石、珪藻化石の保存状態が極めて不良で、乾燥した状態が維持されていたと解釈できる。当該期には、氾濫原の堆積環境が安定的で、かつ地下水位が低く、微高地から微低地にかけての全域で排水性が良く、乾燥状態が維持されやすい地表環境下にあったと考えられる。このうち、微高地部分では、特に高燥な状態であったと推定される。

平安時代前期～中期になると、２区と３区付近の氾濫原では、堆積環境が急激に不安定になり、活発な埋積や流路形成が生じるようになる。この時期以降には、氾濫原に流入する浮流洪水物も粗粒化して、シルト混じりないしシルトを含む極細粒砂～細粒砂となる。平安時代後期～鎌倉時代初頭には、氾濫原における洪水流入が前の時期よりも相対的に少なくなり、堆積環境が安定化した時期が一定期間継続したと推定される。

しかし、鎌倉時代～室町時代には、再び氾濫原の堆積環境が不安定化して、調査区付近の氾濫原に流入する浮流洪水堆積物も多くなる。室町時代以降から明治時代までは、鎌倉時代～室町時代よりもやや堆積環境が落ち着いた可能性があるものの、堆積層の累重状況から、２区と３区付近の氾濫原では断続的な洪水流入や冠水が生じていたと捉えられる。このようななか、平安時代のある段階以降には、氾濫原での人間活動が活発化して、特に中世以降になると、流入した浮流洪水堆積物を母材として、整地なども繰り返ししながら人間活動が展開した痕跡が堆積層断面から読み取れる。

５．調査区付近の地形発達史

今年度および昨年度の発掘調査において、明確な河床堆積物が検出されたのは、現桂川の流路沿いの１区のT.P.9.0～7.0ｍ付近で検出された鎌倉時代～室町時代の砂礫層のみである（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2023）。また、今年度の発掘調査では、最深部のT.P.5.0ｍ付近で、縄文時代後期後葉の河床堆積物の可能性のある層準が確認された。１区の鎌倉時代～室町時代の河床堆積物は、現桂川の流路位置や周辺領域の歴史的環境をふまえると、中世段階の桂川の河床堆積物であった可能性が極めて高い。１区における鎌倉時代～室町時代の河床堆積物の検出からは、当該期に河床が上昇傾向にあった状況や、その後に下刻傾向へ転じた可能性が推測される。

なお、これまでの発掘調査では、現地表面から7.0ｍ前後までに累重する堆積層が観察できた。観察できた堆積層は、上述のように１区と２区最深部を除き、砂礫層や粗粒の砂層が挟在せず、すべて浮流洪水堆積物によって氾濫原へ供給された泥層～泥混じりの細粒の砂層で構成される。これらの泥層～泥混じりの細粒の砂層には、各時期の桂川の流路から供給された堆積物も多く含まれると考えられる。ただし、本遺跡の東方を流下する小畑川については、本流路が形成した扇状地面の発達方向の主軸が西側ないし南西側となる状況が、予察的な地形判読結果などから読み取れる。さらに、小畑川扇状地面やその下位の氾濫原面では、扇状地発達主軸方向に沿った流路痕跡の分布が、予察的な地形判読から読み取れる。

現状において予察段階であり具体的な地形、地質学的な情報を提示できていないが、遺跡周辺の地形学的観点から、本遺跡へ流入する氾濫原堆積物には、桂川だけではなく小畑川の影響もあったと予想される。また、奈良時代～平安時代中期の流路と考えられる流路3400については、予察的な地形判読から、小畑川に由来する流路痕跡に相当する可能性が現時点でうかがえる。なお、流路3400には、砂礫や粗粒の砂からなる河床堆積物が堆積しておらず、増田編著（2019）に解説されている氾濫流路に相当すると捉えられる。

また、昨年度の２区下で検出された、７世紀代の土器が出土した流路2353についても、同様に氾濫流路に相当するみられる。出土遺物が非常に少ないため埋積時期は確定できないが、わずかに回収された土器の相対年代である７世紀を流路の埋没年代とすると、当該期は、氾濫原の堆積環境が比較的安定していたと捉えられる古墳時代後期～飛鳥時代のユニット９や奈良時代のユニット８に対比される可能性がある。流路2353は、深さが1.7ｍ以上あり、谷状に深く侵食された流路であったと推測される。また、流路2353は、周囲の氾濫原に洪水堆積物をほぼ供給していない。上記をふまえると、流路2353が機能した段階には、周辺の流路が下刻傾向にあり、氾濫原の堆積環境は比較的安定的であったと推測できる。

一方、今年度の調査で確認された流路3400は、氾濫原が活発に埋積される段階に形成された氾濫流路と考えられる。このように、これまでの発掘調査で検出された氾濫流路の可能性のある流路は、時期によって遺跡周辺における堆積環境や流路の形成状況に違いがある。本遺跡から西方へ約700ｍに位置する長岡京跡左京第565次・下津城跡の調査地点においても、詳細が不明な点は多いが、古墳時代前期～中期前半以降から中世ないし中世以降に、本遺跡と類似する浮流泥質洪水堆積物に非常に厚い氾濫原の埋積が生じていた状況が、発掘調査の結果と基底部の放射性炭素年代から確認できる（公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター，2015；増田編著，2019）。

ところで、これまでの発掘調査により、今回の調査範囲では、ほぼ全域に室町時代～安土桃山時代に形成および埋没した深さ2.0ｍ前後の深い堀が多数検出されている。この堀は、堀底付近が空堀状態であった様子が、発掘調査および珪藻分析の結果から確認でき（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2023）、当該期に調査区近傍の地下水位が比較的低かった可能性を示唆する。この点は、上述の１区で検出された鎌倉時代～室町時代の桂川の河床堆積物の動態とも関連しており、興味深い。堀は、下半部が一部に粗粒な砂層を挟在し、泥層～泥質砂層の浮流洪水堆積物で埋積される（写真24）。また、上半部は、遺構によって厚い砂礫層や粗粒の砂層で埋積される。今回の調査で特徴的に検出されている堀が機能および埋没した室町時代～安土桃山時代は、調査区付近の氾濫原において浮流洪水堆積物が多く流入する時期に相当する。室町時代～安土桃山時代の堀については、本地域の歴史的文脈に関係すると予想される防御性の他、副次的な機能として、洪水や洪水による氾濫原面の冠水から居住域を回避させる機能に関しても、今後、工学的な観点から検討していく必要があると思われる。

以上、本遺跡で観察される堆積層については、桂川だけでなく、支流の小畑川の影響もある可能性が考えられた。本遺跡の地形発達史や層序・年代については、周辺遺跡の調査成果や詳細な地形

判読に関する検討などから、より詳細に考察していく必要がある。また、本地域は先史時代から活発な人間活動が展開する地域でもあり、本遺跡が立地する桂川低地の地形発達史や堆積環境変化は、各時代に展開する人間活動の様相とも関連づけての検討が課題となる。

（辻　康男）

引用・参考文献

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所（2023）長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡　京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-16．102p，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所．

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター（2015）京都府遺跡調査報告集　第162集　長岡京跡左京第565次・下津城跡（7ANYSK-2・YHD-2）　椋ノ木遺跡第11次．48p，公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター．

増田富士雄編著（2019）ダイナミック地層学 大阪平野・神戸 六甲山麓・京都盆地の沖積層の解析．219p，近未来社．

（２）放射性炭素年代測定

１．はじめに

２区と３区から採取した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

測定試料の情報、調製データは表２のとおりである。年代測定試料を写真25～31に示す。なお、分析試料の採取層準と断面写真および堆積層の記載については、放射性炭素年代測定の報告に示している（放射性炭素年代測定の項参照）。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

３．結果

表３に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、図２に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸め

表２　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-49785	試料No.1 調査区:2区 採取地点:3地点 採取位置:深掘南壁断面	種類:炭化材 試料の性状:最終形成年輪以外　部位不明 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-49786	試料No.2 調査区:2区 採取地点:4地点 採取位置:深掘南壁断面	種類:生材 試料の性状:最終形成年輪 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-49787	試料No.3 調査区:2区 採取地点:4地点 採取位置:深掘南壁断面	種類:土壌 状態:wet	湿式篩分:106μm 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-49788	試料No.4 調査区:3区 採取地点:11地点 採取位置:調査区西壁	種類:生の不明植物遺体片 状態:wet	湿式篩分:106μm 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L) 処理備考:土壌(ヒューミン)として処理
PLD-49789	試料No.5 調査区:3区 採取地点:12地点 採取位置:調査区西壁	種類:土壌 状態:wet	湿式篩分:106μm 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-49790	試料No.6 調査区:3区 採取地点:13地点 採取位置:深掘東壁断面 その他:d	種類:生の不明植物遺体片 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-49791	試料No.7 調査区:3区 採取地点:13地点 採取位置:深掘東壁断面	種類:生の不明植物遺体片 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)

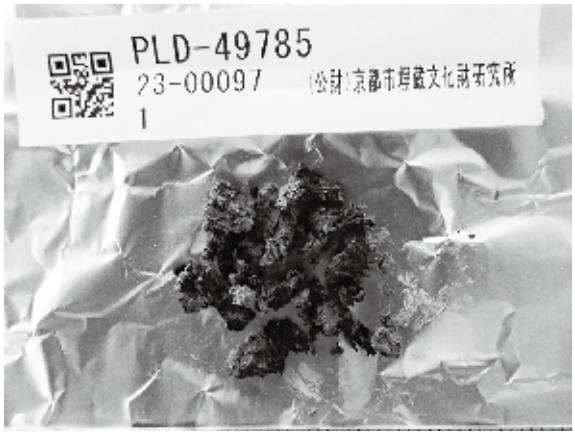


写真25　試料№1（PLD-49785）

写真26　試料№2（PLD-49786）

写真27　試料№3（PLD-49787）

写真28　試料№4（PLD-49788）

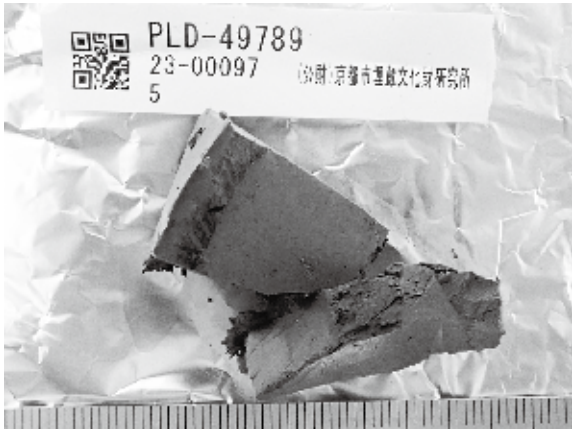


写真29　試料№5（PLD-49789）

写真30　試料№6（PLD-49790）

写真31　試料№7（PLD-49791）

表３　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±１σ)	^{14}C 年代 (yrBP±１σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD-49785 試料No.1	-26.06±0.16	2210±20	2210±20	357-345 cal BC (8.61%) 317-279 cal BC (30.04%) 256-246 cal BC (6.49%) 232-203 cal BC (23.13%)	369-335 cal BC (15.38%) 329-198 cal BC (80.07%)	2306-2294 cal BP (8.61%) 2266-2228 cal BP (30.04%) 2205-2195 cal BP (6.49%) 2181-2152 cal BP (23.13%)	2318-2284 cal BP (15.38%) 2278-2147 cal BP (80.07%)
PLD-49786 試料No.2	-25.84±0.19	3209±22	3210±20	1501-1491 cal BC (16.22%) 1483-1448 cal BC (52.04%)	1508-1429 cal BC (95.45%)	3450-3440 cal BP (16.22%) 3432-3397 cal BP (52.04%)	3457-3378 cal BP (95.45%)
PLD-49787 試料No.3	-18.65±0.27	3047±22	3045±20	1381-1342 cal BC (31.72%) 1308-1265 cal BC (36.55%)	1396-1333 cal BC (40.61%) 1326-1255 cal BC (47.71%) 1249-1224 cal BC (7.12%)	3330-3291 cal BP (31.72%) 3257-3214 cal BP (36.55%)	3345-3282 cal BP (40.61%) 3275-3204 cal BP (47.71%) 3198-3173 cal BP (7.12%)
PLD-49788 試料No.4	-21.66±0.26	1880±21	1880±20	128-195 cal AD (62.09%) 198-205 cal AD (6.18%)	86- 93 cal AD (1.62%) 119-226 cal AD (93.62%) 227-228 cal AD (0.21%)	1822-1755 cal BP (62.09%) 1752-1745 cal BP (6.18%)	1864-1857 cal BP (1.62%) 1831-1724 cal BP (93.62%) 1723-1722 cal BP (0.21%)
PLD-49789 試料No.5	-18.03±0.17	2468±21	2470±20	750-684 cal BC (33.25%) 667-659 cal BC (3.41%) 657-635 cal BC (9.79%) 620-614 cal BC (1.74%) 590-577 cal BC (4.51%) 573-540 cal BC (14.59%) 526-523 cal BC (0.98%)	759-678 cal BC (36.30%) 672-475 cal BC (58.22%) 433-424 cal BC (0.93%)	2699-2633 cal BP (33.25%) 2616-2608 cal BP (3.41%) 2606-2584 cal BP (9.79%) 2569-2563 cal BP (1.74%) 2539-2526 cal BP (4.51%) 2522-2489 cal BP (14.59%) 2475-2472 cal BP (0.98%)	2708-2627 cal BP (36.30%) 2621-2424 cal BP (58.22%) 2382-2373 cal BP (0.93%)
PLD-49790 試料No.6	-25.21±0.18	2967±21	2965±20	1222-1187 cal BC (29.76%) 1181-1156 cal BC (19.88%) 1147-1126 cal BC (18.63%)	1265-1113 cal BC (95.35%) 1061-1060 cal BC (0.10%)	3171-3136 cal BP (29.76%) 3130-3105 cal BP (19.88%) 3096-3075 cal BP (18.63%)	3214-3062 cal BP (95.35%) 3010-3009 cal BP (0.10%)
PLD-49791 試料No.7	-24.74±0.17	3079±22	3080±20	1402-1374 cal BC (22.80%) 1352-1300 cal BC (45.47%)	1414-1275 cal BC (95.45%)	3351-3323 cal BP (22.80%) 3301-3249 cal BP (45.47%)	3363-3224 cal BP (95.45%)

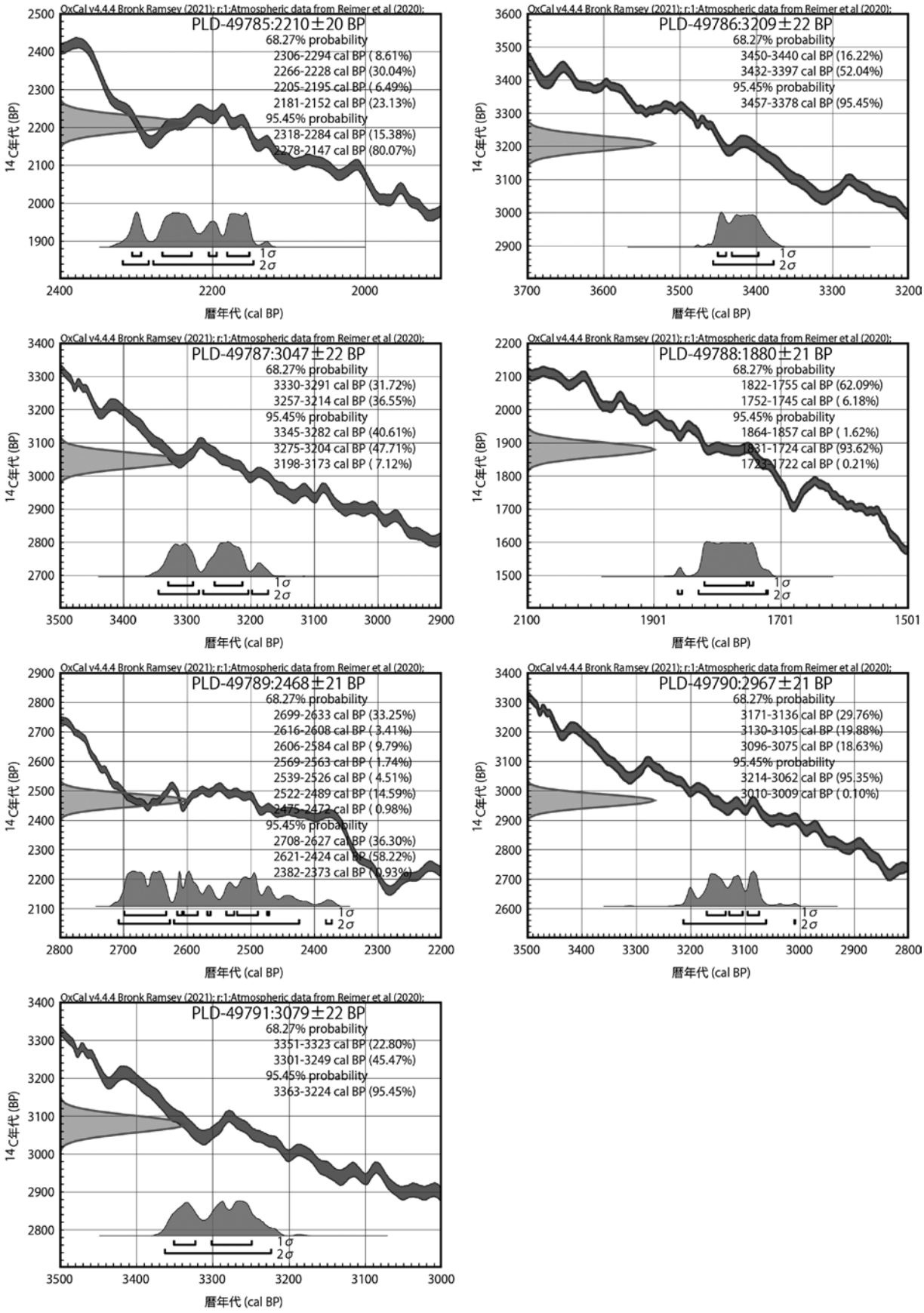

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-49785:2210±20 BP
68.27% probability
2306-2294 cal BP (8.61%)
2266-2228 cal BP (30.04%)
2205-2195 cal BP (6.49%)
2181-2152 cal BP (23.13%)
95.45% probability
2318-2284 cal BP (15.38%)
2278-2147 cal BP (80.07%)
PLD-49786:3209±22 BP
68.27% probability
3450-3440 cal BP (16.22%)
3432-3397 cal BP (52.04%)
95.45% probability
3457-3378 cal BP (95.45%)
PLD-49787:3047±22 BP
68.27% probability
3330-3291 cal BP (31.72%)
3257-3214 cal BP (36.55%)
95.45% probability
3345-3282 cal BP (40.61%)
3275-3204 cal BP (47.71%)
3198-3173 cal BP (7.12%)
PLD-49788:1880±21 BP
68.27% probability
1822-1755 cal BP (62.09%)
1752-1745 cal BP (6.18%)
95.45% probability
1864-1857 cal BP (1.62%)
1831-1724 cal BP (93.62%)
1723-1722 cal BP (0.21%)
PLD-49789:2468±21 BP
68.27% probability
2699-2633 cal BP (33.25%)
2616-2608 cal BP (3.41%)
2606-2584 cal BP (9.79%)
2569-2563 cal BP (1.74%)
2539-2526 cal BP (4.51%)
2522-2489 cal BP (14.59%)
2475-2472 cal BP (0.98%)
95.45% probability
2708-2627 cal BP (36.30%)
2621-2424 cal BP (58.22%)
2382-2373 cal BP (0.93%)
PLD-49790:2967±21 BP
68.27% probability
3171-3136 cal BP (29.76%)
3130-3105 cal BP (19.88%)
3096-3075 cal BP (18.63%)
95.45% probability
3214-3062 cal BP (95.35%)
3010-3009 cal BP (0.10%)
PLD-49791:3079±22 BP
68.27% probability
3351-3323 cal BP (22.80%)
3301-3249 cal BP (45.47%)
95.45% probability
3363-3224 cal BP (95.45%)
14C年代 (BP)
暦年代 (cal BP)
1σ
2σ

図２　暦年較正結果

ていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.27％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.27％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．考察

測定結果（以下の較正年代は2σの値）は、以下のとおりである。

試料№.１（PLD49785）は、^{14}C年代が2210±20 BP、較正年代が2318-2284 cal BP（15.38%）および2278-2147 cal BP（80.07%）である。試料№.２（PLD-49786）は、^{14}C年代が3210±20 BP、較正年代が3457-3378 cal BP（95.45%）である。試料№.３（PLD-49787）は、^{14}C年代が3045±20 BP、較正年代が3345-3282 cal BP（40.61%）、3275-3204 cal BP（47.71%）、3198-3173 cal BP（7.12%）である。試料№.４（PLD-49788）は、^{14}C年代が1880±20 BP、較正年代が1864-1857 cal BP（1.62%）、1831-1724 cal BP（93.62%）、1723-1722 cal BP（0.21%）である。試料№.５（PLD-49789）は、^{14}C年代が2470±20 BP、較正年代が2708-2627 cal BP（36.30%）、2621-2424 cal BP（58.22%）、2382-2373 cal BP（0.93%）である。試料№.６（PLD-49790）は、^{14}C年代が2965±20 BP、較正年代が3214-3062 cal BP（95.35%）および3010-3009 cal BP（0.10%）である。試料№.７（PLD-49791）は、^{14}C年代が3080±20 BP、較正年代が3363-3224 cal BP（95.45%）である。

今回得られた年代値について、縄文時代の暦年代と土器型式の関係および年代観は幡中（2012）、岡田（2012）、小林（2017）、縄文時代晩期末～弥生時代は荒木（2022）、岡田・金原（2022）、弥生時代後期後半～古墳時代前期は春成ほか（2011）にもとづき、検討する。

最も新しい年代値が得られた試料№.４（PLD-49788）の年代値は、弥生時代終末期～古墳時代初頭の庄内Ⅲ式期に相当する。試料№.１（PLD-49785）は、弥生時代中期中葉に相当する。試料№.５（PLD-49789）の年代値は弥生時代前期に相当し、前半期に対比される可能性がある。試料№.３（PLD-49787）、試料№.６（PLD-49790）と試料№.７（PLD-49791）の年代値は、縄文時代後期後葉

～晩期前葉に相当する。試料№２（PLD-49786）の年代値は、縄文時代後期後葉に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料のうち、試料№１は最終形成年輪を確認できない部位不明の炭化材片である。したがって、試料№１の測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

（パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤　茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・辻　康男）

引用・参考文献

荒木幸治（2022）炭素14年代を用いた弥生土器編年の検証－兵庫県と岡山県の事例から－．赤穂市教育委員会，有年考古，9，68-95.

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337-360.

幡中光輔（2012）西日本縄文時代における遺跡タイポロジー分析の実践と展開．関西縄文文化研究会編「関西縄文時代研究の新展開：松尾洋次郎さん追悼論集」：33-49，関西縄文文化研究会.

春成秀爾・小林謙一・坂本　稔・今村峯雄・尾嵜大真・藤尾慎一郎・西本豊弘（2011）古墳出現期の炭素14年代測定．国立歴史民俗博物館研究報告，163，133-176.

小林謙一（2017）縄紋時代の実年代－土器型式編年と炭素14年代－．263p，同成社.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20，日本第四紀学会.

岡田憲一（2012）関西縄文集落の一時的景観と時間的累積－墓地の分析から矢野健一氏の批判に答える－．関西縄文文化研究会編「関西縄文時代研究の新展開:松尾洋次郎さん追悼論集」：13-32，関西縄文文化研究会.

岡田憲一・金原正明（2022）中西遺跡・秋津遺跡の弥生時代前期水田遺構の変遷とその特質．奈良県立橿原考古学研究所，考古学論攷，45，23-38.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S.（2020）The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve（0-55 cal kBP）. Radiocarbon, 62（4）, 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41（cited 12 August 2020）

（３）花粉分析

１．はじめに

２区と３区において、遺跡周辺の当時の古環境を検討するために、堆積物試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて大型植物遺体分析と珪藻分析も行われている（別項参照）。

２．分析試料および方法

分析試料は、古墳時代初頭の溝2841から採取された３試料と、古墳時代中期の溝3451から採取された２試料、奈良時代の溝3428から採取された２試料、奈良時代～平安時代中期の流路3400から採取された４試料、平安時代後期の溝3185から採取された５試料、室町時代の溝3100から採取された２試料の、計18試料である（表４）。また、分析試料の採取層準と断面写真および堆積層の記載については、層序の報告に示している（層序の項参照）。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

試料（湿重量約４g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、１時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：硫酸１の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200に達するまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数え

表４　分析試料一覧

調査区	断面・セクション	遺構面	遺構名	地点	試料No.	時期	岩質
3区	溝セクション	第6面	溝3100	2地点	4	室町時代	粘土質シルト質
					5		粘土質シルト質
		第6面	溝3185	1地点	3	平安時代後期	粘土質シルト質
					5		粘土質シルト質
					7		粘土質シルト質
					9		粘土質シルト質
					12		粘土質シルト質
	調査区西壁	第7面	流路3400	7地点	1	奈良時代～平安時代中期	粘土質シルト質
					4		粘土質シルト質
					5		粘土質シルト質
					6		粘土質シルト質
		第8面	溝3428	9地点	2	奈良時代	粘土質シルト質
					3		粘土質シルト質
		第9面	溝3451	8地点	1	古墳時代中期	粘土質シルト質
					2		粘土質シルト質
2区	溝セクション	－	溝2841	6地点	1	古墳時代初頭	粘土質シルト質
					2		粘土質シルト質
					3		粘土質シルト質

た。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本（PLC.3899～3906）を作製し、写真を図４に載せた。

３．結果

18試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉41、草本花粉33、形態分類を含むシダ植物胞子３の、総計77である。これらの花粉・胞子の一覧表を表５に、分布図を図３に示した。分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率で、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図表においてハイフン（－）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科やバラ科、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、溝2841と溝3451、溝3428からは花粉化石が検出されなかった。その他の遺構からは十分な量の花粉化石が検出されており、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属やスギ属、コナラ属アカガシ亜属などが、草本花粉ではイネ科やヨモギ属などの産出が目立つ。

４．考察

古墳時代初頭の溝2841と古墳時代中期の溝3451、奈良時代の溝3428から採取された試料からは、花粉化石が検出されなかった。一般的に、花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境下で堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され、消失してしまう。したがって、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では、花粉化石が残りにくい。同一試料を用いて行われた珪藻分析の結果によると、古墳時代初頭の溝2841では、珪藻化石がわずかしか得られておらず、乾燥していたと推測されている。よって、古墳時代初頭の溝2841や古墳時代中期の溝3451、奈良時代の溝3428は、埋没時に酸化的環境に晒されていたために、花粉化石が分解・消失してしまった可能性がある。

奈良時代～平安時代中期の流路3400や平安時代後期の溝3185、室町時代の溝3100からは、十分な量の花粉化石が得られた。これらの試料から得られた樹木花粉では、マツ属複維管束亜属やスギ属、コナラ属アカガシ亜属の産出が目立つ。よって、平安時代前期と平安時代後期、室町時代の遺跡周辺の丘陵地などには、ニヨウマツ林やスギ林、カシ林などが分布していたと考えられる。なかでもマツ属複維管束亜属については、平安時代前期の流路3400で増加しているため、遺跡周辺のニヨウマツ林は平安時代前期に分布が拡大した可能性がある。

その他の樹木花粉では、河畔林要素の分類群の産出が目立つ層準があり、時期によって産出率が異なる。例えば、奈良時代～平安時代中期の流路3400では、エノキ属－ムクノキ属やトチノキ属の産出が見られ、特に№１ではエノキ属－ムクノキ属が突出する。よって、奈良時代～平安時代中期の流路3400周辺には、エノキ属－ムクノキ属（特に№１の堆積時期）やトチノキ属が分布を広げていたと考えられる。

表5-1　産出花粉胞子一覧表

学名	和名	溝3100		溝3185					流路3400				溝3428		溝3451		溝2841		
		No.4	No.5	No.3	No.5	No.7	No.9	No.12	No.1	No.4	No.5	No.6	No.2	No.3	No.1	No.2	No.1	No.2	No.3
樹木																			
Podocarpus	マキ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Abies	モミ属	2	2	1	2	4	15	2	5	6	6	4	−	−	−	−	−	−	−
Tsuga	ツガ属	2	−	11	5	11	10	7	2	7	5	6	−	−	−	−	−	−	−
Picea	トウヒ属	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	40	33	38	29	21	28	27	19	24	18	9	−	−	−	−	−	−	−
Pinus (unknown)	マツ属(不明)	11	2	6	5	6	7	7	1	1	4	3	−	−	−	−	−	−	−
Sciadopitys	コウヤマキ属	4	−	7	3	1	2	5	3	1	7	3	−	−	−	−	−	−	−
Cryptomeria	スギ属	26	38	50	30	34	47	51	47	67	51	67	−	−	−	−	−	−	−
Taxaceae－Cephalotaxaceae－Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	2	2	−	2	4	2	5	1	5	4	9	−	−	−	−	−	−	−
Salix	ヤナギ属	4	4	5	39	32	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Myrica	ヤマモモ属	1	−	−	−	−	1	1	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
Pterocarya－Juglans	サワグルミ属－クルミ属	1	1	4	1	1	2	−	1	3	1	4	−	−	−	−	−	−	−
Carpinus－Ostrya	クマシデ属－アサダ属	10	6	8	6	4	6	8	5	3	7	7	−	−	−	−	−	−	−
Betula	カバノキ属	4	1	7	2	3	2	3	5	2	2	3	−	−	−	−	−	−	−
Alnus	ハンノキ属	11	11	1	1	−	6	1	6	5	2	1	−	−	−	−	−	−	−
Fagus	ブナ属	2	1	6	−	2	1	1	3	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	10	15	8	10	11	13	5	14	4	11	14	−	−	−	−	−	−	−
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	23	21	37	40	35	28	33	34	44	55	44	−	−	−	−	−	−	−
Castanea	クリ属	8	10	3	8	6	9	14	6	6	6	8	−	−	−	−	−	−	−
Castanopsis－Pasania	シイノキ属－マテバシイ属	−	5	−	−	4	2	2	11	1	1	6	−	−	−	−	−	−	−
Ulmus－Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	2	6	2	1	−	6	3	1	2	2	4	−	−	−	−	−	−	−
Celtis－Aphananthe	エノキ属－ムクノキ属	28	31	8	14	12	6	8	34	10	10	5	−	−	−	−	−	−	−
Caesalpinia	ジャケツイバラ属	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Melia	センダン属	−	−	−	1	−	−	4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Rhus－Toxicodendron	ヌルデ属－ウルシ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Ilex	モチノキ属	−	1	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Celastraceae	ニシキギ科	1	1	−	−	−	−	2	1	10	1	1	−	−	−	−	−	−	−
Aesculus	トチノキ属	2	1	−	−	−	11	4	2	5	6	1	−	−	−	−	−	−	−
Vitis	ブドウ属	−	−	−	−	−	−	2	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Ampelopsis	ノブドウ属	−	−	−	−	3	1	4	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−
Camellia	ツバキ属	4	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Araliaceae	ウコギ科	−	2	−	−	−	−	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Cornus	ミズキ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Ericaceae	ツツジ科	−	−	−	−	1	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
Diospyros	カキノキ属	−	1	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Styrax	エゴノキ属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Oleaceae	モクセイ科	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
Ligustrum	イボタノキ属	5	19	−	1	−	−	2	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−
Fraxinus	トネリコ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Callicarpa	ムラサキシキブ属	−	−	−	−	5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Lonicera	スイカズラ属	1	−	2	2	−	1	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

表5-2　産出花粉胞子一覧表

学名	和名	溝3100		溝3185					流路3400				溝3428		溝3451		溝2841		
		No.4	No.5	No.3	No.5	No.7	No.9	No.12	No.1	No.4	No.5	No.6	No.2	No.3	No.1	No.2	No.1	No.2	No.3
草本																			
Typha	ガマ属	−	−	−	−	2	−	3	−	5	9	−	−	−	−	−	−	−	−
Alisma	サジオモダカ属	−	−	1	−	−	−	4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Sagittaria	オモダカ属	−	−	−	1	2	3	14	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−
Gramineae	イネ科	88	80	227	206	114	53	72	74	48	68	103	−	−	−	−	−	−	−
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	3	3	3	6	3	8	3	4	2	12	−	−	−	−	−	−	−
Commelina	ツユクサ属	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Monochoria	ミズアオイ属	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Moraceae	クワ科	5	3	2	2	4	−	1	1	18	1	−	−	−	−	−	−	−	−
Rumex	ギシギシ属	−	1	2	−	1	−	3	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Polygonum sect. *Persicaria*－*Echinocaulon*	サナエタデ節－ウナギツカミ節	1	1	2	1	3	−	5	−	1	2	3	−	−	−	−	−	−	−
Polygonum sect. *Reynoutria*	イタドリ節	−	2	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
Fagopyrum	ソバ属	−	2	4	4	3	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
Chenopodiaceae－Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	7	23	17	35	37	27	6	8	4	2	6	−	−	−	−	−	−	−
Caryophyllaceae	ナデシコ科	4	8	2	3	−	1	5	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−
Nelumbo	ハス属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Ranunculaceae	キンポウゲ科	−	2	1	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Brassicaceae	アブラナ科	2	−	3	4	1	4	−	4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Rosaceae	バラ科	1	−	5	3	3	3	4	8	2	2	−	−	−	−	−	−	−	−
Leguminosae	マメ科	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
Impatiens	ツリフネソウ属	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Lythrum	ミソハギ属	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Rotala	キカシグサ属	1	−	−	−	−	1	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Haloragis	アリノトウグサ属	−	−	2	−	−	−	2	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
Apiaceae	セリ科	1	2	−	5	−	1	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Hydrocotyle	チドメグサ属	−	2	2	3	2	2	1	−	−	10	21	−	−	−	−	−	−	−
Nymphoides indica	ガガブタ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−
Plantago	オオバコ属	−	1	−	−	−	−	−	−	1	4	−	−	−	−	−	−	−	−
Rubia－*Galium*	アカネ属－ヤエムグラ属	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Actinostemma－*Gynostemma*	ゴキヅル属－アマチャヅル属	−	−	−	1	−	1	7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Ambrosia－*Xanthium*	ブタクサ属－オナモミ属	−	−	−	1	−	−	−	1	1	2	−	−	−	−	−	−	−	−
Artemisia	ヨモギ属	12	29	24	24	24	20	18	14	67	28	26	−	−	−	−	−	−	−
Tubuliflorae	キク亜科	−	−	3	3	2	4	−	−	1	1	2	−	−	−	−	−	−	−
Liguliflorae	タンポポ亜科	4	4	2	−	−	1	−	−	−	2	1	−	−	−	−	−	−	−
シダ植物																			
Salvinia	サンショウモ属	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
monolete type spore	単条溝胞子	13	6	15	4	4	7	1	−	6	−	19	−	−	−	−	−	−	−
trilete type spore	三条溝胞子	9	6	11	4	3	10	9	1	1	9	10	−	−	−	−	−	−	−
Arboreal pollen	樹木花粉	206	215	206	203	201	206	209	206	210	203	203	−	−	−	−	−	−	−
Nonarboreal pollen	草本花粉	128	164	303	301	206	126	154	118	154	140	179	−	−	−	−	−	−	−
Spores	シダ植物胞子	22	13	27	8	7	17	10	1	7	9	30	−	−	−	−	−	−	−
Total Pollen ＆ Spores	花粉・胞子総数	356	392	536	512	414	349	373	325	371	352	412	−	−	−	−	−	−	−
unknown	不明	2	11	6	6	7	8	16	6	2	9	5	−	−	−	−	−	−	−

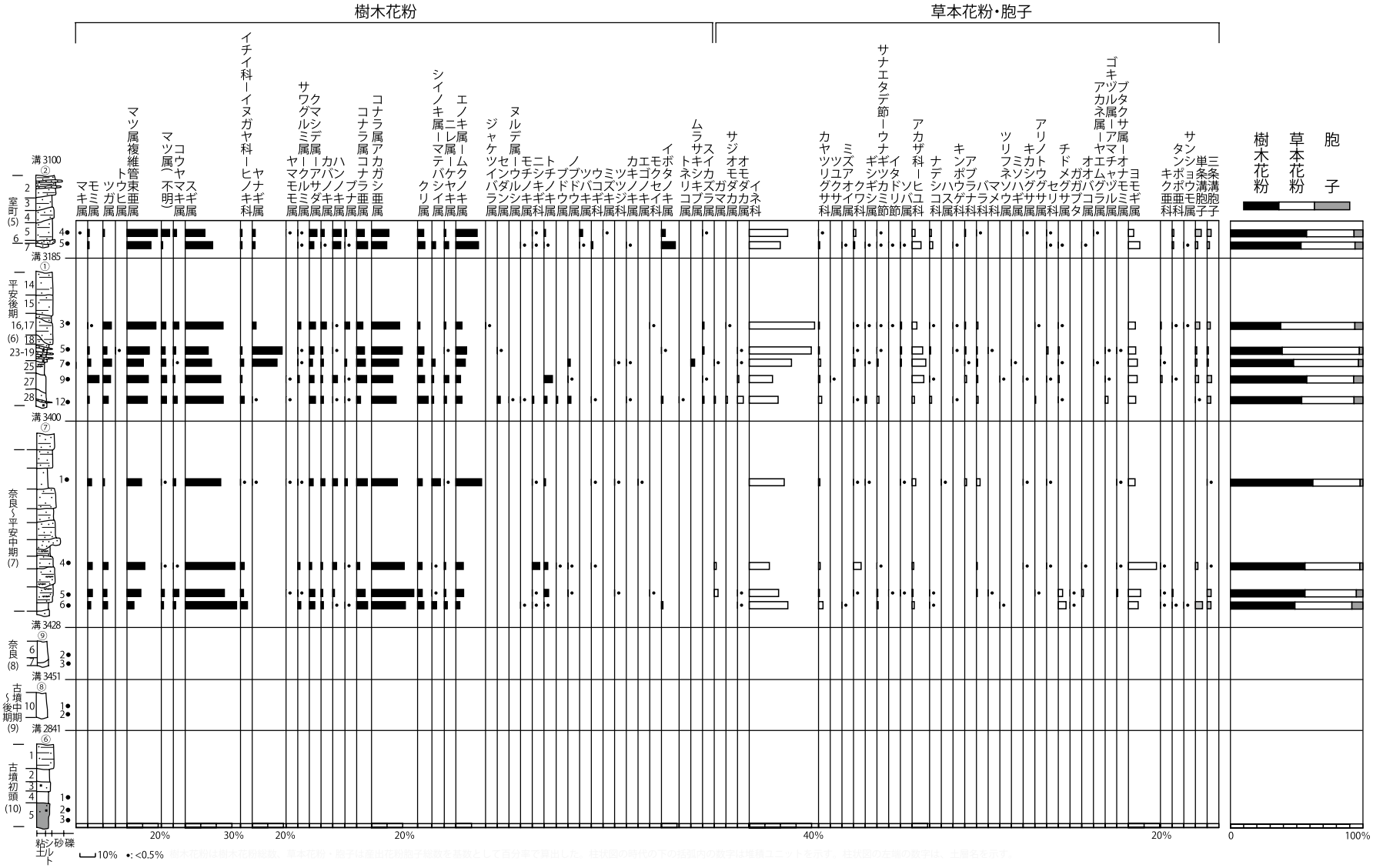
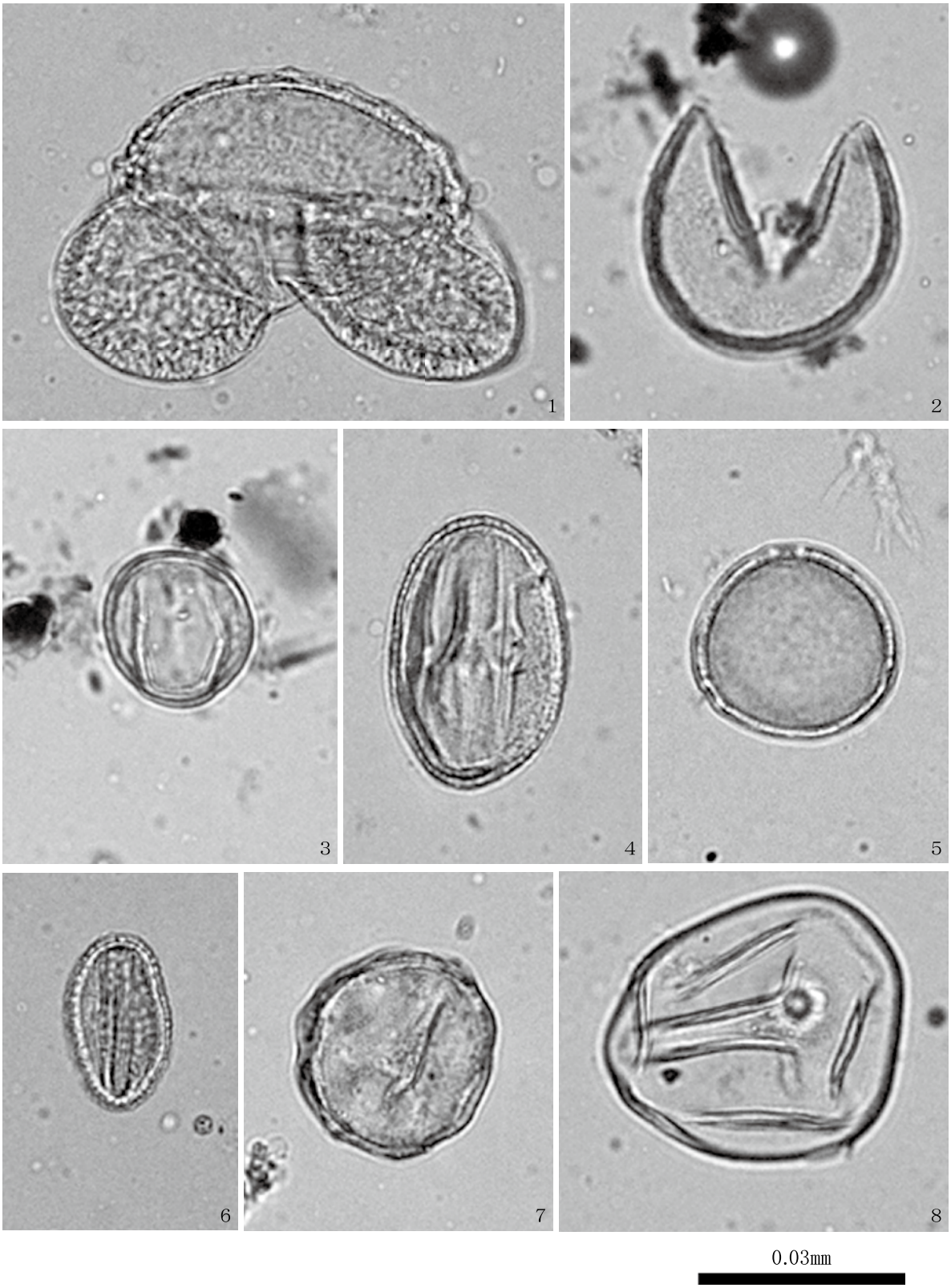

樹木花粉
草本花粉・胞子
マモミ属
キミ属
ツガ属
マツ属複維管束亜属
マツ属（不明）
コウヤマキ属
ヤマスギ属
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科
ヤナギ属
サワグルミ属－ヤマモミ属
クマシデ属－アサダ属
ハンノキ属
カノブナ属
コナラ属コナラ亜属
コナラ属アカガシ亜属
シイノキ属－マテバシイ属
クリ属
エノキ属－ニレ属－ムクノキ属
ジャケツイバラ属
セインウチ属
ヌルデ属－モミジバフウ属
ノダフジ属
ツバキ属
コウヤマキ属
ミツバウツギ属
カエデ属
モミジ属
ツノハシバミ属
ゴキヅル属
イボタノキ属
ムラサキシキブ属
サスライ属
ナンテン属
サジオモ属
オガタマ属
ダイコン属
カネ科
カヤツリグサ科
ミズユキノシタ科
アリノトウグサ科
ツリフネソウ属
フミ属
ヒメハギ属
アカザ科
ナデシコ科
キンポウゲ科
アブラナ科
ツバメオモト属
アリノトウ属
ハマサジ属
ヒメハギ属
チドメグサ属
ガガブタ属
ゴキヅル属
アカネ属－ヤエムグラ属
ブタクサ属－アカザ属
ヨモギ属
サンショウモ科
タンポポ属
三条溝胞子
単溝胞子
樹木花粉
草本花粉
胞子
室町(5)
平安後期16,17(6)23-19
奈良～平安中期(7)
奈良(8)
古墳後期中期(9)
古墳初頭(10)
溝3100
溝3185
溝3400
溝3428
溝3451
溝2841
粘土
シルト
砂
礫
10%
•: <0.5%
20%
30%
40%
0
100%

図３　花粉分布図



1．マツ属複維管束亜属（No.５ PLC.3899）
2．スギ属（No.５ PLC.3900）
3．コナラ属アカガシ亜属（No.５ PLC.3901）
4．ノブドウ属（No.７ PLC.3902）
5．エノキ属-ムクノキ属（No.５ PLC.3903）
6．ヤナギ属（No.５ PLC.3904）
7．サジオモダカ属（No.３ PLC.3905）
8．イネ科（No.５ PLC.3906）

図４　溝3185から産出した花粉化石

平安時代後期の溝3185では、エノキ属－ムクノキ属とトチノキ属が検出されており、平安時代後期の溝3185周辺にもエノキ属－ムクノキ属やトチノキ属が生育していたと考えられる。ただし、トチノキ属については№７以上の層準で産出していないため、№７以上の層準では分布が縮小した可能性がある。代わって増加するのがヤナギ属であり、№７以上の堆積時期には、平安時代後期の溝3185周辺でヤナギ属が分布を広げていたと考えられる。

さらに室町時代の溝3100では、エノキ属－ムクノキ属やイボタノキ属の産出率が高いため、室町時代の溝3100周辺にはエノキ属－ムクノキ属やイボタノキ属が分布を広げていた可能性がある。

次に草本花粉を見ると、十分な量の花粉化石が得られたいずれの試料においてもイネ科やヨモギ属の産出が目立つ。奈良時代～平安時代中期の流路3400や平安時代後期の溝3185、室町時代の溝3100周辺では、イネ科やヨモギ属が分布を広げていたと考えられる。アカザ科－ヒユ科については、平安時代後期の溝3185の№９以上の層準で産出率が微増しているため、№９の堆積時期以降に分布が拡大した可能性がある。

また、各試料では好湿性植物の分類群も得られている。例えば、ガマ属（流路3400・溝3185）やサジオモダカ属（溝3185）、オモダカ属（流路3400・溝3185）、ミズアオイ属（流路3400・溝3100）、ハス属（流路3400）、キカシグサ属（流路3400・溝3185・溝3100）、ツリフネソウ属（流路3400・溝3185）、ガガブタ（流路3400）、ゴキヅル属－アマチャヅル属（溝3185）、サンショウモ属（流路3400・溝3185・溝3100）などが挙げられ、各遺構内や周辺の湿潤な場所に分布していたと考えられる。

さらに、流路3400・溝3185・溝3100のいずれからも栽培植物のソバ属が得られた。平安時代前期や平安時代後期、室町時代には遺構周辺においてソバ栽培が行われていた可能性がある。

（森　将志）

（４）大型植物遺体

１．はじめに

２区と３区において、平安時代前期の流路と平安時代後期の溝の堆積物から取り上げられた大型植物遺体の同定を行い、当時の周辺の植生や利用植物について検討した。なお、同一試料を用いて花粉分析と珪藻分析も行われている（別項参照）。

２．試料と方法

分析試料は、奈良時代～平安時代中期とされる流路3400の７地点から採取された試料№５の堆積物１試料と、平安時代後期とされる溝3185の１地点から採取された試料№５上と試料№５下、試料№７、試料№12の堆積物４試料である。なお、分析試料の採取層準と断面写真および堆積層の記載については、放射性炭素年代測定の報告に示している（放射性炭素年代測定の項参照）。

試料の水洗は、パレオ・ラボにて、各試料200ccを最小0.5㎜目の篩を用いて行った。大型植物遺体の抽出および同定は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。イネの籾殻は、小穂軸が残っている場合に１個体とした。小穂軸以外の破片は、記号（+）で示した。同定された試料は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に保管されている。

３．結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のマツ属複維管束亜属葉の１分類群と、広葉樹のブドウ属種子とキイチゴ属核、カジノキ属核、クリ果実、サンショウ属種子、ヒサカキ属種子、カキノキ種子、ニワトコ核の８分類群、草本植物ではヘラオモダカ果実・種子とオモダカ属果実・種子、イボクサ種子、コナギ種子、スゲ属Ａ果実、スゲ属Ｂ果実・炭化果実、ヒメクグ果実、カワラスガナ果実、カヤツリグサ属果実、ホタルイ属果実、メヒシバ属有ふ果、ヒエ属有ふ果・炭化有ふ果・炭化種子（頴果）、イネ籾殻・炭化籾・炭化籾殻・炭化種子（頴果）、エノコログサ属有ふ果、オオムギ炭化有ふ果・種子（頴果）・炭化種子（頴果）、キケマン属種子、タガラシ果実、キンポウゲ属果実、ノブドウ種子、オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属果実、アサ核、カナムグラ核、カラムシ属果実、メロン仲間種子、カタバミ属種子、エノキグサ属種子、ヤナギタデ果実、サナエタデ－オオイヌタデ果実、イヌタデ果実、イシミカワ果実、ウナギツカミ果実、ギシギシ属果実・炭化果実、ノミノフスマ種子、ウシハコベ種子、ミドリハコベ種子、アカザ属種子、スベリヒユ属種子、ナス種子、ゴマ種子、シソ属果実、タカサブロウ果実、チドメグサ属果実の42分類群の、計51分類群が得られた。このほかに、科以上の詳細な同定ができなかった種実を不明Ａ炭化種実、残存状態が悪く、微細な破片であるため識別点を欠く同定不能な種実の一群を同定不能炭化種実とした。種実以外には、外肛動物のコケムシ類休眠芽が得られた（表６）。

以下に、大型植物遺体の産出傾向について、時期ごとに、遺構別に記載する。

表６　大型植物遺体（括弧内は破片数）

		地区	3区				
		遺構	溝3185				流路3400
		地点	1地点				7地点
		試料No.	5上	5下	7	12	5
		時期	平安後期				奈良～平安中期
分類群		水洗量(cc)	200				
マツ属複維管束亜属	葉						1
ブドウ属	種子						(5)
キイチゴ属	核			1			
カジノキ属	核						(1)
クリ	果実			(1)			
サンショウ属	種子		(2)				
ヒサカキ属	種子		1				
カキノキ	種子		(3)	(4)			
ニワトコ	核					(1)	
ヘラオモダカ	果実					3	1
	種子		1		1		
オモダカ属	果実				1	1	
	種子		3		1		
イボクサ	種子					6 (1)	1
コナギ	種子		2				1
スゲ属A	果実						(1)
スゲ属B	果実			2	3		(1)
	炭化果実			1			
ヒメクグ	果実					2	1 (1)
カワラスガナ	果実			3	2		5
カヤツリグサ属	果実			1	1		
ホタルイ属	果実		1			(1)	(1)
メヒシバ属	有ふ果			5			
ヒエ属	有ふ果			(1)	2 (3)	(2)	
	炭化有ふ果			5			
	炭化種子			1			
イネ	籾殻		8 (+)	55 (+++)	34 (++)	2 (+)	8 (++)
	炭化籾			1			
	炭化籾殻		30 (++)	65 (+++)		1 (+)	3 (+)
	炭化種子		1 (12)	8 (20)	(6)		
エノコログサ属	有ふ果						2 (1)
オオムギ	炭化有ふ果			(1)			
	種子		1				
	炭化種子		1 (2)	15 (10)		1	
キケマン属	種子		2 (5)	39 (30)	23 (3)	12 (2)	5 (3)
タガラシ	果実		(1)	8 (4)	8 (4)	(3)	2
キンポウゲ属	果実				2		
ノブドウ	種子					(8)	(1)
オランダイチゴ属ーヘビイチゴ属	果実		1	(1)		1 (3)	1 (2)
アサ	核			(1)			
カナムグラ	核						(5)
カラムシ属	果実					1	
メロン仲間	種子		(5)	2 (26)	2 (2)	(3)	(1)
カタバミ属	種子			1			1 (4)
エノキグサ属	種子		(4)	(2)		(2)	
ヤナギタデ	果実				1		1 (6)
サナエタデーオオイヌタデ	果実			4	5 (2)	1 (5)	
イヌタデ	果実		(5)	(3)	1	(2)	(3)
イシミカワ	果実						(6)
ウナギツカミ	果実		2 (6)	1 (3)	2	2 (8)	
ギシギシ属	果実					1 (3)	
	炭化果実			1			
ノミノフスマ	種子			5	2	9	1
ウシハコベ	種子			1	2	1	
ミドリハコベ	種子				(1)		
アカザ属	種子		1	1		(1)	
スベリヒユ属	種子		1 (3)	4	1	2	
ナス	種子		(3)	3 (5)	1 (1)	1	(1)
ゴマ	種子			(4)	(2)		
シソ属	果実			1	1	(2)	1 (7)
タカサブロウ	果実			12 (7)	4 (2)	2 (1)	
チドメグサ属	果実		2	1	2	1 (2)	3 (7)
コケムシ類	休眠芽						3
不明A	炭化種実			3			
同定不能	炭化種実		(10)	(43)			(2)

+:1-9,++:10-49,+++:50-99

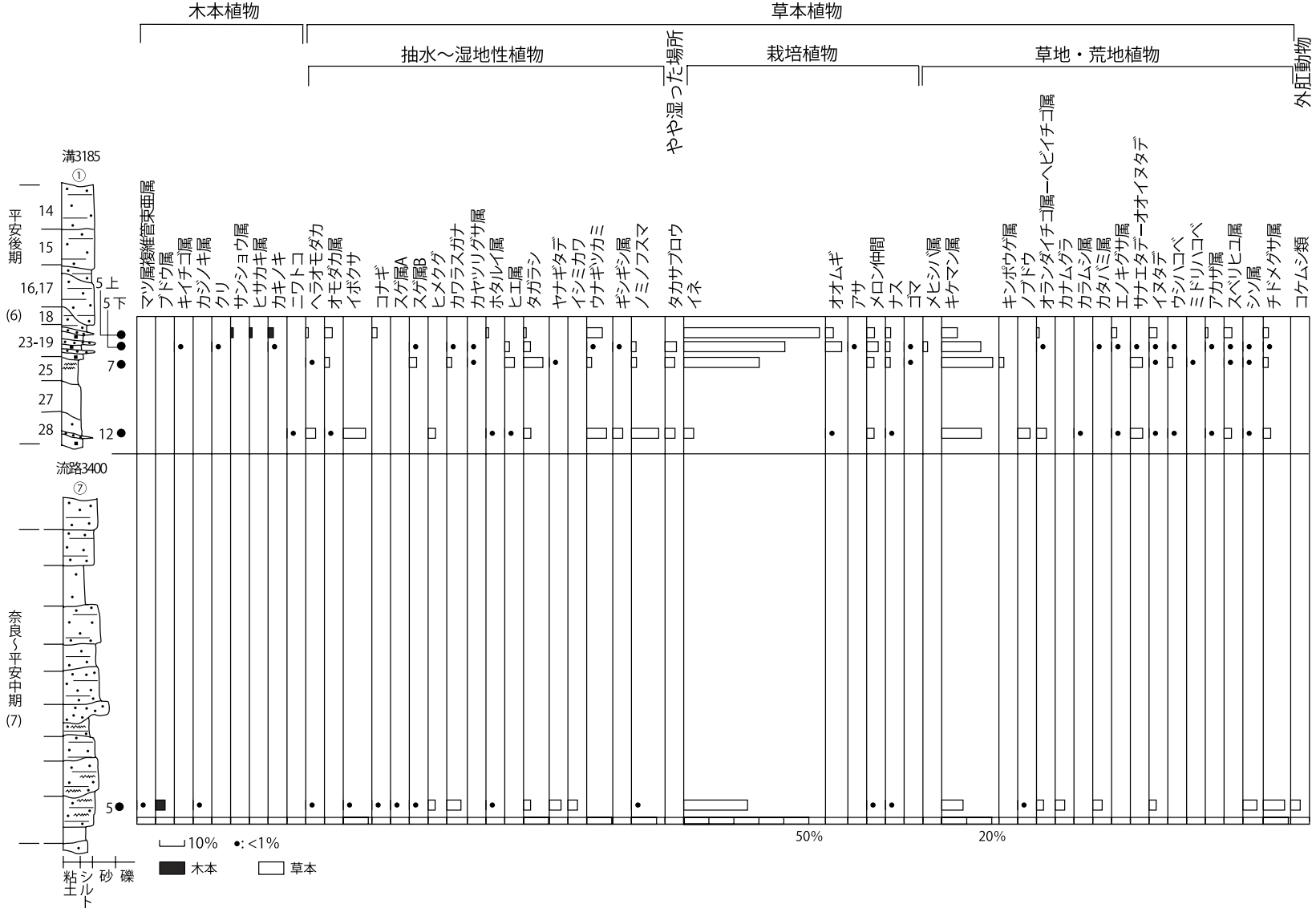


図５　大型植物遺体分布図

［奈良時代～平安時代中期］

＜流路3400＞

７地点 試料№５：イネとチドメグサ属が少量、ブドウ属とヒメクグ、カワラスガナ、エノコログサ属、キケマン属、タガラシ、オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属、カナムグラ、カタバミ属、ヤナギタデ、イヌタデ、イシミカワ、シソ属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が各１点であった。

［平安時代後期］

＜溝3185＞

１地点 試料№12：キケマン属とウナギツカミが少量、ヘラオモダカとイボクサ、ヒメクグ、ヒエ属、イネ、タガラシ、ノブドウ、オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属、メロン仲間、エノキグサ属、サナエタデ－オオイヌタデ、イヌタデ、ギシギシ属、ノミノフスマ、スベリヒユ属、シソ属、タカサブロウ、チドメグサ属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が各１点であった。

１地点 試料№７：イネがやや多く、キケマン属とタガラシが少量、スゲ属Ｂとカワラスガナ、ヒエ属、キンポウゲ属、メロン仲間、サナエタデ－オオイヌタデ、ウナギツカミ、ノミノフスマ、ウシハコベ、ナス、ゴマ、タカサブロウ、チドメグサ属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が各１点であった。

１地点 試料№５下：イネが多く、キケマン属がやや多く、オオムギとタガラシ、メロン仲間、タカサブロウが少量、カキノキとスゲ属Ｂ、カワラスガナ、メヒシバ属、ヒエ属、エノキグサ属、サナエタデ－オオイヌタデ、イヌタデ、ウナギツカミ、ノミノフスマ、スベリヒユ属、ナス、ゴマがわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が各１点であった。

１地点 試料№５上：イネがやや多く、サンショウ属とカキノキ、オモダカ属、コナギ、オオムギ、キケマン属、メロン仲間、エノキグサ属、イヌタデ、ウナギツカミ、スベリヒユ属、ナス、チドメグサ属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が各１点であった。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図６に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠し、APGⅢリストの順とした。

（1）クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　果実　ブナ科

暗褐色で、完形ならば側面観は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。底面にある殻斗着痕はざらつくが、残存していない。残存高14.0㎜、残存幅6.8㎜。

（2）カキノキ　*Diospyros kaki* Thunb.　種子　カキノキ科

黒褐色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形。基部がやや曲がって突出する。表面にはちりめん状のしわが見られる。残存高10.1㎜、残存幅4.6㎜。

（3）スゲ属Ａ　*Carex* sp. A　果実　カヤツリグサ科

灰色で、完形ならば上面観は三稜形、側面観はやや下端が窄まる倒卵形。三面はややくぼむ。表面には微細な網目状隆線がある。先端に円形の穴がある。長さ1.6㎜、残存幅0.7㎜。

（4）スゲ属Ｂ　*Carex* sp. B　果実　カヤツリグサ科

暗赤褐色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で幅が広い。表面に微細な網目状隆線がある。長さ1.4㎜、幅0.9㎜。

(5) ヒエ属　*Echinochloa* spp.　有ふ果・炭化種子（頴果）　イネ科

有ふ果は赤褐色。状態は悪いが、上面観は楕円形、側面観はいびつな楕円形。縦方向に細かい筋がある。残存長2.6㎜、残存幅1.6㎜。種子の側面観は卵形。断面は片凸レンズ形で、厚みは薄く、やや扁平である。胚は幅が広く、長さは全長の２/３程度と長い。臍は幅が広いうちわ型。長さ2.4㎜、残存幅1.5㎜。那須（2017）に示された現生種の長幅比と比較すると、栽培型のヒエよりも野生植物のタイヌビエやイヌビエに近かった。

(6) イネ　*Oryza sativa* L.　籾殻・炭化籾・炭化籾殻・炭化種子（頴果）　イネ科

籾殻は暗赤褐色で、完形ならば上面観は楕円形、側面観は長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。籾殻の大きさは、残存長2.4㎜、残存幅1.2㎜。炭化籾は、残存長3.9㎜、残存幅1.9㎜。種子は、上面観が両凸レンズ形、側面観が楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の２本の浅い溝がある。炭化種子は、長さ3.8㎜、幅1.5㎜。

(7) オオムギ　*Hordeum vulgare* L.　炭化有ふ果・種子・炭化種子（頴果）　イネ科

有ふ果は、完形ならば長楕円形で、縦方向に筋がある。残存長4.8㎜、残存幅1.7㎜。種子（頴果）は、上面観が長楕円形、側面観が楕円形。腹面中央部には上下に走る１本の溝がある。側面観で最も幅の広い部分が中央付近にある。背面の中央部下端には三角形の胚がある。長さ6.1㎜、幅3.2㎜、厚さ2.3㎜。

(8) キケマン属　*Corydalis* spp.　種子　ケマンソウ科

黒色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は腎臓状円形。表面は平滑で、強い光沢がある。長さ1.2㎜、幅1.2㎜。

(9) アサ　*Cannabis sativa* L.　核　アサ科

褐色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で、側面に稜がある。表面には脈状の模様がある。残存長1.9㎜、残存幅1.8㎜。

(10) メロン仲間　*Cucumis melo* L.　種子　ウリ科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は狭卵形で頂部が尖る。幅は狭く、やや厚みがある。表面は平滑。長さ7.2㎜、幅3.3㎜。藤下（1984）によると、メロン仲間の種子は、長さ6.0㎜以下の雑草メロン型、長さ6.1～8.0㎜のマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1㎜以上のモモルディカメロン型の、おおむね３群に分けられるとしている。今回産出したメロン仲間種子は長さ7.2㎜で、マクワウリ・シロウリ型である。

(11) ナス　*Solanum melongena* L.　種子　ナス科

赤褐色で、上面観は長楕円形、側面観は楕円形。着点は明瞭に窪む。表面には畝状突起が覆瓦状となる細かい網目状隆線がある。長さ3.0㎜、幅3.6㎜。

(12) ゴマ　*Sesamum orientale* L.　種子　ゴマ科

スケール 1,2,14:5mm, 3-13,15-18:1mm

1. クリ果実（溝3185、No.5下）、2. カキノキ種子（溝3185、No.5下）、3. スゲ属A果実（流路3400、No.5）、
4. スゲ属B果実（溝3185、No.5下）、5. ヒエ属有ふ果（溝3185、No.7）、6. ヒエ属炭化有ふ果（溝3185、No.5下）、
7. イネ籾殻（溝3185、No.7）、8. イネ炭化籾（溝3185、No.5下）、9. イネ炭化種子（溝3185、No.5下）、
10. オオムギ炭化有ふ果（溝3185、No.5下）、11. オオムギ炭化種子（溝3185、No.5下）、
12. キケマン属種子（溝3185、No.7）、13. アサ核（溝3185、No.5下）、14. メロン仲間種子（溝3185、No.5下）、
15. ナス種子（溝3185、No.5下）、16. ゴマ種子（溝3185、No.5下）、17. シソ属果実（溝3185、No.5下）、
18. 不明A炭化種実（溝3185、No.5下）

図６　出土した大型植物遺体

淡黄色で、完形ならば、上面観は扁平、側面観は狭倒卵形。表面は平滑。縁に沿って浅い溝がある。残存長3.0㎜、残存幅1.6㎜。

（13）シソ属　*Perilla* spp.　果実・炭化果実　シソ科

暗褐色で、いびつな球形。端部に着点がある。表面には、低い隆起で多角形の網目状隆線がある。長さ1.3㎜、幅1.2㎜。

（14）不明Ａ　Unknown A　炭化種実

上面観は楕円形、側面観は基部がやや尖る楕円形。表面は平滑。長さ1.3㎜、幅0.6㎜。

４．考察

奈良時代～平安時代中期の流路3400と平安時代後期の溝3185の堆積物から出土した大型植物遺体を同定した結果、草本植物を中心とした多種類の大型植物遺体が得られた。

奈良時代～平安時代中期の流路3400の７地点からは、栽培植物で水田作物のイネや、畑作物のメロン仲間やナスがみられ、流路周辺の居住域で利用され、流れ込んだり廃棄されたりした可能性が考えられる。野生の草本植物では、湿生～抽水植物のヘラオモダカやイボクサ、コナギ、スゲ属A、スゲ属B、ヒメクグ、カワラスガナ、ホタルイ属、タガラシ、ヤナギタデ、イシミカワ、ノミノフスマ、乾いた場所に生育するエノコログサ属やキケマン属、オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属、カナムグラ、カタバミ属、イヌタデ、シソ属、チドメグサ属が産出しており、これらの草本類が流路周辺に生育していたと考えられる。木本植物では、マツ属複維管束亜属とブドウ属、カジノキ属が産出しており、これらの樹木が流路周辺に生育していたと考えられる。また、林縁に生育するノブドウも得られた。

平安時代後期の溝3185の１地点の試料№12、試料№７、試料№５下、試料№５上からは、栽培植物で水田作物のイネや、畑作物のカキノキやオオムギ、アサ、メロン仲間、ナス、ゴマが得られており、溝周辺の居住域で利用された後に、種実が流れ込んだり廃棄されたりした可能性が考えられる。イネは、籾殻や炭化籾、炭化籾殻、炭化種子が産出しており、溝周辺の水田に堆積していた籾殻が流れ込んだ可能性や、居住域周辺で籾すり後に生じた籾殻が流れ込んだり廃棄されたりした可能性がある。オオムギは有ふ果と種子が得られており、近辺で利用され、何らかの理由で炭化した後に、堆積したと考えられる。野生の草本植物では、湿生～抽水植物のヘラオモダカやオモダカ属、イボクサ、コナギ、スゲ属B、ヒメクグ、カワラスガナ、カヤツリグサ属、ホタルイ属、ヒエ属、タガラシ、ヤナギタデ、ウナギツカミ、ギシギシ属、やや湿った環境の場所に生育するタカサブロウ、乾いた場所に生育するメヒシバ属やキケマン属、キンポウゲ属、オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属、カタバミ属、エノキグサ属、サナエタデ－オオイヌタデ、イヌタデ、ウシハコベ、ミドリハコベ、アカザ属、スベリヒユ属、シソ属、チドメグサ属が得られており、溝周辺にこれらの植物が生育していたと推定される。木本植物では、キイチゴ属やクリ、サンショウ属、ヒサカキ属、ニワトコが産出しており、これらの樹木が流路周辺に生育していたと考えられる。

（バンダリ スダルシャン）

引用文献

藤下典之（1984）出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法．渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学－総括報告書」：638-654，同朋舎出版.

那須浩郎（2017）縄文時代にヒエは栽培化されたのか？SEEDS CONTACT，4，27-29.

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info

（5）プラント・オパール分析

1．はじめに

２区と３区では、古環境復元を目的として、堆積物試料が採取された。以下では、試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺の当時のイネ科植物相について検討した。

2．試料と方法

分析試料は、２区の深掘南壁断面の５地点から採取された縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の４試料と、３区の調査区西壁の10地点から採取された古墳時代後期の３試料の、計７試料である（表７）。図７に試料を採取した堆積物の断面写真を示す。また、分析試料の採取層準と断面写真および堆積層の記載については、層序の報告に示している（層序の項参照）。これらの試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04㎜）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01㎜以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、図９に載せた。

表７　分析試料一覧

調査区	断面	地点	試料No.	時期	岩質
3区	調査区西壁	10地点	1	古墳後期	粘土質シルト質
			2		粘土質シルト質
			3		粘土質シルト質
2区	深堀南壁断面	5地点	1	縄文晩期後葉～弥生前期	粘土質シルト質
			2		粘土質シルト質
			3		粘土質シルト質
			4		粘土質シルト質

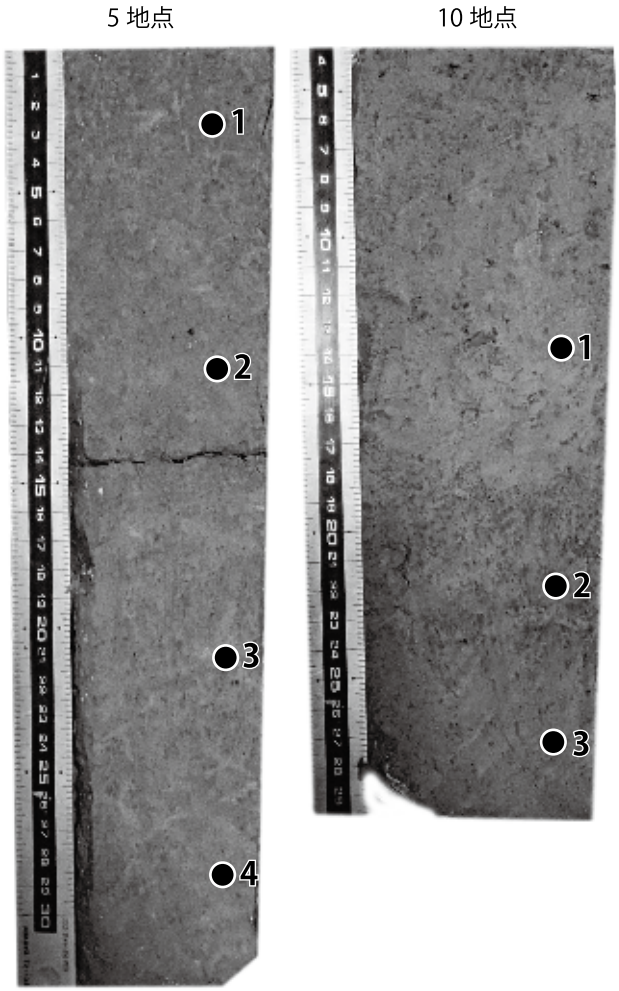


図７　植物珪酸体分析試料の採取位置

３．結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め（表８）、分布図に示した（図８）。

７試料を検鏡した結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、メダケ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の７種類の産出が確認できた。このうち、イネ機動細胞珪酸体に注目すると、５地点の４試料ではイネ機動細胞珪酸体は検出されず、10地点の３試料で4,700～7,900個/gの産出量であった。

４．考察

２区深掘南壁断面の５地点の縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の試料では、イネ機動細胞珪酸体は検出されなかった。よって、今回の分析結果から稲作等について言及はできない。

表８　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数

	イネ（個/g）	ネザサ節型（個/g）	メダケ節型（個/g）	ササ属型（個/g）	ヨシ属（個/g）	キビ族（個/g）	ウシクサ族（個/g）	不明（個/g）
10地点 №1	7,900	18,000	0	3,400	1,100	6,700	2,200	1,100
10地点 №2	4,800	28,600	3,600	2,400	1,200	11,900	6,000	13,100
10地点 №3	4,700	18,700	3,500	4,700	2,300	2,300	1,200	2,300
5地点 №1	0	11,500	0	1,200	2,300	2,300	5,800	4,600
5地点 №2	0	24,000	1,200	0	8,400	3,600	2,400	3,600
5地点 №3	0	15,400	2,400	1,200	2,400	1,200	5,900	8,300
5地点 №4	0	80,900	8,000	5,700	2,300	3,400	0	14,800

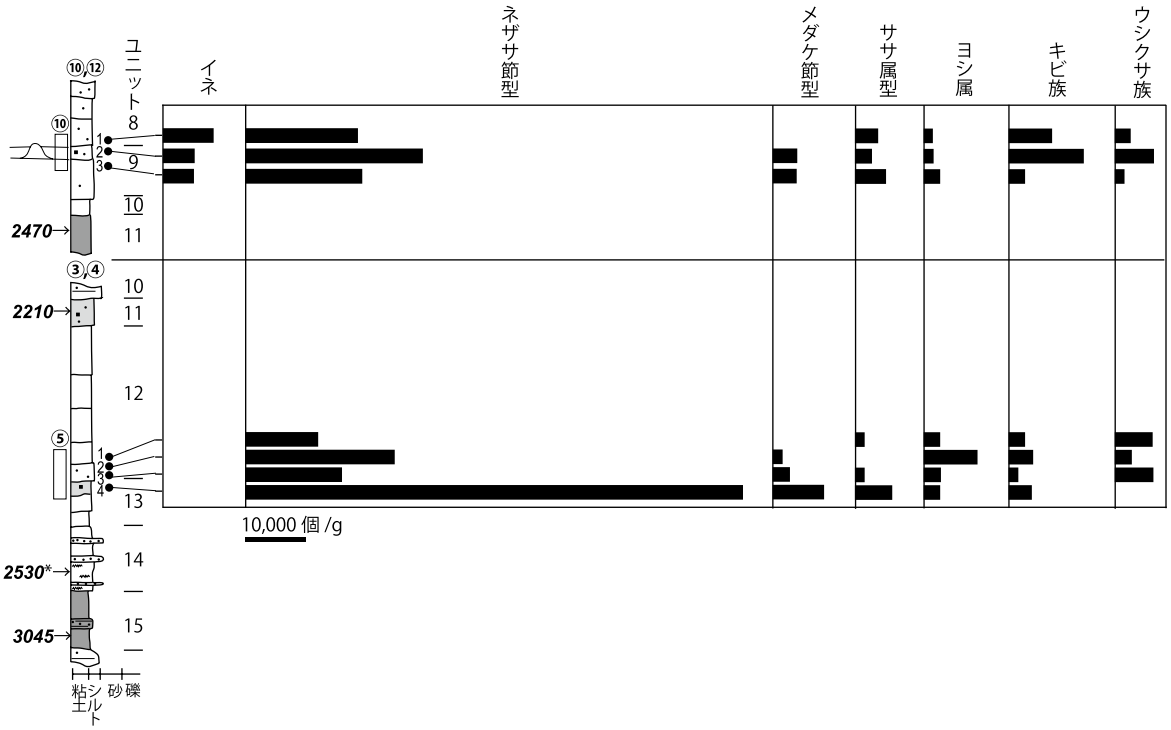
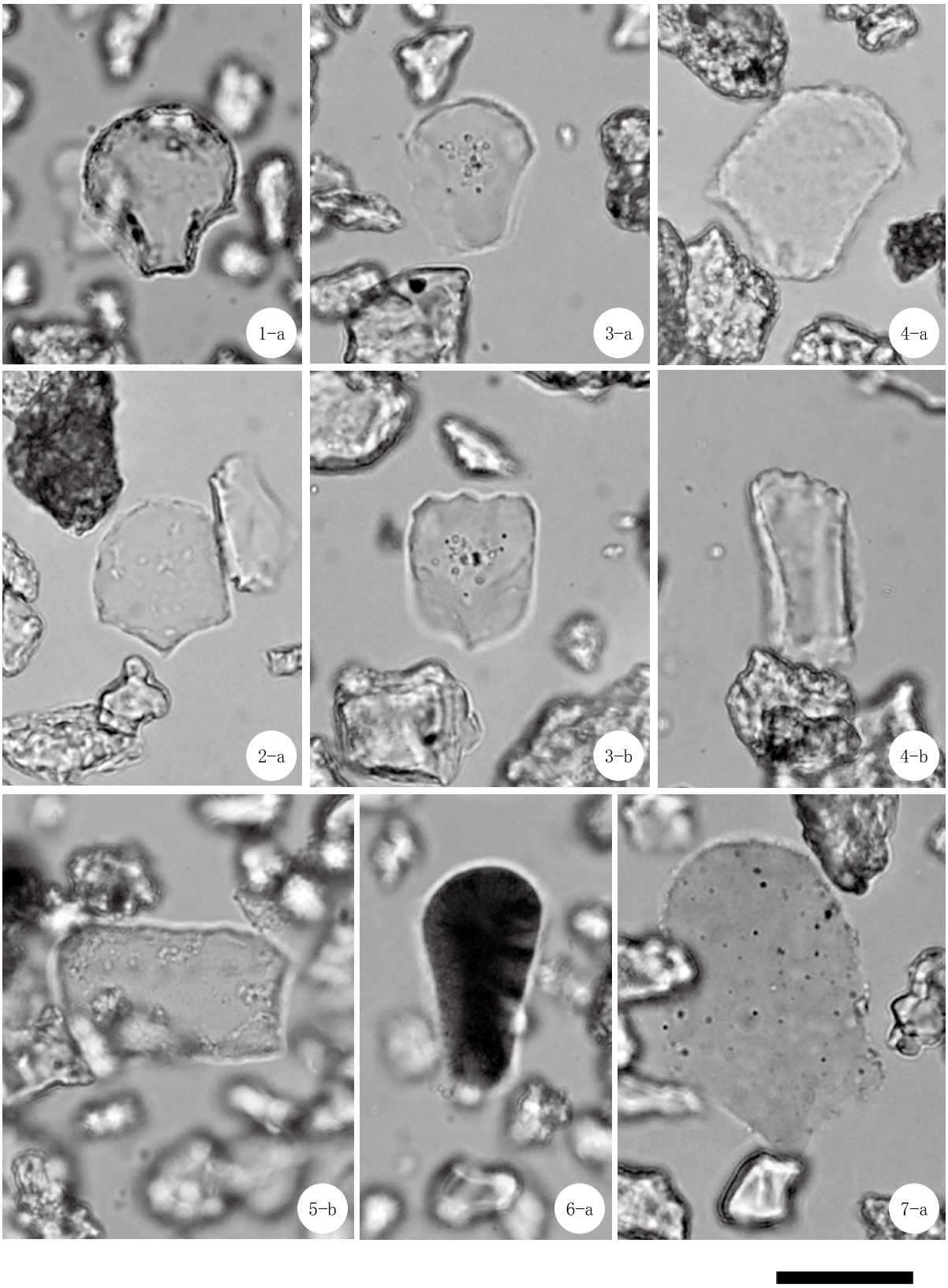


図８　植物珪酸体分布図



1. イネ機動細胞珪酸体（10地点No.3）
2. ササ属型機動細胞珪酸体（5地点No.4）
3. ネザサ節型機動細胞珪酸体（5地点No.4）
4. メダケ節型機動細胞珪酸体（5地点No.4）
5. キビ族機動細胞珪酸体（10地点No.1）
6. ウシクサ族機動細胞珪酸体（10地点No.3）
7. ヨシ属機動細胞珪酸体（5地点No.4）

a:断面　b:側面

図９　産出した植物珪酸体

最下層の№４で産出量が多いのがネザサ節型機動細胞珪酸体で、メダケ節型やササ属型の機動細胞珪酸体を伴う。№４の堆積時にはネザサ節型やメダケ節型、ササ属型といったタケ亜科が分布を広げていた可能性がある。その上位の№１～３の層準になると、タケ亜科の機動細胞珪酸体は減少しており、代わってウシクサ族機動細胞珪酸体が増加する。№１～３の堆積時にはタケ亜科の分布が減少し、代わってウシクサ族が分布を広げていたと考えられる。

その他にも、２区深掘南壁断面の4試料ではヨシ属やキビ族の機動細胞珪酸体が検出されており、試料採取地点周辺の湿潤な場所にはヨシ属が、乾燥した場所にはキビ族が生育していた可能性がある。

３区調査区西壁の10地点から採取された古墳時代後期の３試料からはイネ機動細胞珪酸体が検出された。イネ機動細胞珪酸体の産出量については、試料１g当り5,000個以上検出された地点の分布範囲と、実際の発掘調査で検出された水田址の分布がよく対応する結果が得られており（藤原, 1984)、試料１g当り5,000個が水田土壌か否かを判断する目安とされている。３区の調査区西壁から採取された３試料では、4,700～7,900個/gの産出量を示しており、水田土壌の目安に近いか上回っているため、古墳時代後期には水田が存在していた可能性がある。

その他には、ネザサ節型とメダケ節型、ササ属型、ヨシ属、キビ族、ウシクサ族などの機動細胞珪酸体が得られており、周辺にはこれらのイネ科植物が分布していた可能性がある。なお、キビ族機動細胞珪酸体については、№１と№２で産出量が比較的多い。№１と№２ではイネ機動細胞珪酸体も産出量が多いため、これらの層準にはタイヌビエなど水田雑草由来の機動細胞珪酸体が含まれている可能性がある。

（森　将志）

引用文献

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－. 考古学ジャーナル, 227, 2-7.

（６）珪藻分析

１．はじめに

２区と３区で検出された溝の堆積物について、珪藻分析を行った。なお、同一試料を用いて大型植物遺体分析と花粉分析も行われている（別項参照）。

２．試料と処理方法

分析対象は、３つの溝で採取された堆積物試料計10点である（表９）。分析試料の採取層準と断面写真および堆積層の記載については、層序の報告に示している（層序の項参照）。

表９　試料リスト

試料№	採取場所	遺構名	№	乾燥重量(g)
1	1地点	溝3185	3	0.43
2			5	0.38
3			7	0.38
4			9	0.45
5			12	0.42
6	2地点	溝3100	4	0.46
7			5	0.46
8	6地点	溝2841	1	0.45
9			2	0.39
10			3	0.13

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。(1) 乾燥させ、秤量した試料をビーカーに移し、30%過酸化水素水を加えて加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え、１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。(3) 遠心管に回収した懸濁残渣をシリンジで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

各試料のプレパラートに対し、珪藻殻300個以上を目安に同定・計数を行った。溝2841の試料８から試料10では珪藻殻が希薄で、100殻以下で計数を終えた。希釈率と検鏡面積から、試料の乾燥重量１ｇあたりの珪藻殻数を求めた。

３．結果

検出した珪藻は、29属53種60分類群に同定された。計数結果は表10のとおりである。検出した珪藻のうち、結果・考察において重要な種の写真を図12に付す。次に、各試料における産出珪藻の特徴について、溝ごとに下位から順に述べる。種の特徴の説明にあたっては、千葉・澤井（2014）による環境指標種群（表11）と、渡辺ほか（2005）による有機汚濁とpHに対する生態学的情報を用いている。

溝3185の５試料では300個以上の珪藻殻を検出し、乾燥試料１ｇあたりの珪藻殻数は7×10^5～2×10^6個と見積もられた。淡水生の珪藻が優占し、環境指標種群では淡水底生指標種（F）、陸生Ｂ群（Qb）、広布種（W）が多く見られた。水質については、試料４で好汚濁性種が優占した以外は、広適応性種が優占した。pHについては、試料５で中性種、他の４試料では好アルカリ性種が優占した。種ごとの産出状況は、試料５では、広布種（W）で汚濁に対して広適応性、pHについては中性の*Gomphonema parvulum*が優占した。試料４では、陸生Ｂ群（Qb）で好汚濁性・好アルカリ性の*Diadesmis confervacea*が優占した。試料３では、広布種（W）で広適応性・好アルカリ性の

表10-1　堆積物中の珪藻化石産出表（種群は千葉・澤井（2024）、水質情報は渡辺ほか（2005）による）

	分類群					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	*Nitzschia*	*levidensis*	U3	好汚	中性	1		1			2	1			
2	*Cocconeis*	*placentula*	F	広適	好ア	11	2	2	11	10	6	13	2		
3	*Cymbella*	*tumida*	F	好清	好ア	11	1	1	4	4	7	9			
4	*Eunotia*	*bilunaris*	F	広適	真酸	11			10	13	1	8			
5	*Eunotia*	*formica*	F	好清						2	1				
6	*Eunotia*	*intermedia*	F	好清	中性	6	1	1		10	28	4			
7	*Sellaphora*	*pupula*	F	好汚	中性	4				9	17	2			
8	*Achnanthidium*	*japonicum*	J	好清	中性	10	19	28	19	23	15	27			
9	*Cyclotella*	*meneghiniana*	L	好汚	好ア	1	6	1	13						
10	*Gomphonema*	*acuminatum*	O	広適	好ア	2			3			2			
11	*Navicula*	*elginensis*	O	広適	中性	3		1	2		6	4			
12	*Pinnularia*	*acrosphaeria*	O			6			1		1				
13	*Pinnularia*	*gibba*	O	広適	好酸	9	6	1	2	5	3	3			
14	*Stauroneis*	*phoenicenteron*	O	広適	中性	1				1		1			
15	*Neidium*	*ampliatum*	P		好酸	3	1		1	2					
16	*Pinnularia*	*schoenfelderi*	P			24	20	23	11	29	20	24			
17	*Diploneis*	*elliptica*	Q	好清	好ア							2			
18	*Amphora*	*montana*	Qa	広適	好ア	2	28	14	4		3	1			
19	*Diadesmis*	*contenta* f. *biceps*	Qa	好清	好ア	4	4	1	4	6	14	6			1
20	*Hantzschia*	*amphioxys*	Qa	広適	中性	7	1	1	2	1		1			
21	*Luticola*	*mutica*	Qa	好汚	好ア		3	2		7	2	6	2		1
22	*Orthoseira*	*roeseana*	Qa									1			
23	*Diadesmis*	*confervacea*	Qb	好汚	好ア	12	2	4	110	17	5	57			
24	*Pinnularia*	*subcapitata*	Qb	好汚	真酸	6				2	2	4			
25	*Achnanthes*	*clevei*	W	好清	中性	2	1								1
26	*Achnanthes*	*crenulata*	W	広適	好ア	1				1		1			
27	*Achnanthes*	*hungarica*	W	広適	好ア	66	78	183	27	12	9	14			
28	*Amphora*	*ovalis*	W	好清	好ア		1			1	3				
29	*Encyonema*	*silesiacum*	W	好清	中性	4		1	4	1	5	9			
30	*Frustulia*	*vulgaris*	W	広適	中性		8		2	2	6	4			
31	*Gomphonema*	*parvulum*	W	広適	中性	44	9	12	15	55	19	24	2		
32	*Gomphonema*	*pseudoaugur*	W	好汚	中性	3	3		1	2	1	2			
33	*Gyrosigma*	*scalproides*	W	広適	中性					1	1	1			
34	*Navicula*	*capitata*	W	広適	中性	3					4				
35	*Navicula*	*cryptocephala*	W	広適	中性	8	13	6	4	2	13	5			
36	*Navicula*	*cryptotenella*	W	好清	中性		1				2				
37	*Navicula*	*decussis*	W	広適	好ア							1			
38	*Neidium*	*productum*	W			4					1	1			
39	*Nitzschia*	*palea*	W	好汚	好ア	1	11	13	2	3	21	3			
40	*Pinnularia*	*braunii*	W		真酸					2					
41	*Pinnularia*	*viridis*	W	広適	中性					5	1	2			
42	*Rhopalodia*	*gibba*	W	広適	中性					3					
43	*Sellaphora*	*americana*	W							1					
44	*Stauroneis*	*anceps*	W	好清	中性				1	7	2	2			
45	*Stauroneis*	*prominula*	W							1	1				
46	*Synedra*	*ulna*	W	広適	好ア	16	1		9	10		20	1	1	
47	*Achnanthes*	spp.	U5			16	7		7	9	8	19			
48	*Aulacoseira*	spp.	U5							2	2				
49	*Cyclotella*	spp.	U5			2	11		4						
50	*Diatoma*	spp.	U5									1			
51	*Fragilaria*	spp.	U5			5		3	2	4	12	3			
52	*Gomphonema*	*biceps*	U5	好清	真ア							1			
53	*Gomphonema*	*micropus*	U5	広適	中性				1						
54	*Melosira*	spp.	U5			1						4			
55	*Navicula*	spp.	U5			7	46	22	23	23	20	25			
56	*Nitzschia*	spp.	U5			9	21	7	13	5	37	6	1		
57	*Pinnularia*	*septentrionalis*	U5	好汚	好酸					1	1				
58	*Pinnularia*	spp.	U5							1		1		1	
59	*Surirella*	spp.	U5			1	6	9	3	4	1	2			
60	*Synedra*	*rumpens* var. *familiaris*	U5	好清	好ア	3	1		1	11	2	2			

表10-２　堆積物中の珪藻化石産出表（種群は千葉・澤井（2024）、水質情報は渡辺ほか（2005）による）

分類群					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	汽水不定･不明種	U3			1	0	1	0	0	2	1	0	0	0
2	淡水底生	F			43	4	4	25	48	60	36	2	0	0
3	上流性河川	J			10	19	28	19	23	15	27	0	0	0
4	最下流性河川	L			1	6	1	13	0	0	0	0	0	0
5	沼沢湿地付着生	O			21	6	2	8	6	10	10	0	0	0
6	高層湿原	P			27	21	23	12	31	20	24	0	0	0
7	陸　域	Q			0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
8	陸生A群	Qa			13	36	18	10	14	19	15	2	0	2
9	陸生B群	Qb			18	2	4	110	19	7	61	0	0	0
10	広布種	W			152	126	215	65	109	89	89	3	1	1
11	淡水不定･不明種	U5			44	92	41	54	60	83	64	1	1	0
1	汽水生種				1	0	1	0	0	2	1	0	0	0
2	淡水生種				329	312	336	316	310	303	328	8	2	3
1	好清水性種		好清		40	29	32	33	65	79	62	0	0	2
2	広適応性種		広適		184	146	220	92	121	72	105	5	1	0
3	好汚濁性種		好汚		28	25	21	126	41	51	75	2	0	1
1	真酸性種			真酸	17	0	0	10	17	3	12	0	0	0
2	好酸性種			好酸	12	7	1	3	8	4	3	0	0	0
3	中性種			中性	96	56	51	51	122	122	89	2	0	1
4	好アルカリ性種			好ア	130	138	221	188	82	72	137	5	1	2
5	真アルカリ性種			真ア	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
合計					330	312	337	316	310	305	329	8	2	3
堆積物1g中の殻数(個)					8.E+05	2.E+06	2.E+06	1.E+06	7.E+05	9.E+05	7.E+05	4.E+04	2.E+04	8.E+04

Achnanthes hungarica が優占した。試料２は、*Achnanthes hungarica* の比率は異なるが、試料３と産出傾向が似ており、陸生Ａ群（Qa）で広適応性・好アルカリ性の *Amphora montana* が倍増している。試料１では、*Achnanthes hungarica* の産出が多いが、他の産出種は試料５に似る。

溝3100の２試料では300個以上の珪藻殻を検出し、乾燥試料１ｇあたりの珪藻殻数は7×10^5および9×10^5個と見積もられた。淡水生の珪藻が優占し、環境指標種群では淡水底生（F）、陸生Ｂ群（Qb）、上流性河川（J）、広布種（W）が多く見られた。水質については、試料７で広適応性種が優占し、試料６では広適応性種と好清水性種が同程度見られた。pHについては、試料７で好アルカリ性種、試料６で中性種が優占した。種ごとの産出状況は、試料7で、陸生Ｂ群（Qb）で好汚濁性・好アルカリ性の *Diadesmis confervacea* が優占し、次いで上流性河川（J）で好清水性・中性の *Achnanthidium japonicum*、高層湿原（P）の *Pinnularia schoenfelderi*、広布種（W）で広適応性・中性の *Gomphonema parvulum* が多く産出した。試料６では、淡水底生（F）で好清水性・中性の *Eunotia intermedia* がやや多く見られ、広布種（W）で好汚濁性・好アルカリ性の *Nitzschia palea*、高層湿原（P）の *Pinnularia schoenfelderi*、広布種（W）で広適応性・中性の *Gomphonema parvulum* が産出した。

溝2841の３試料は珪藻殻の含有量が少なく、10殻以下の検出であった。

４．考察

溝3185と溝3100からは珪藻が多く産出しており、溝内が湿潤ないし水没した状態にあったと考えられる。溝3185と溝3100において多産した *Diadesmis confervacea* と *Achnanthes hungarica* の生態について述べる。*Diadesmis confervacea* は、千葉・澤井（2004）の環境指標種群では陸生Ｂ

表11　環境指標種群と本分析で産出した種

種群名（以下、「指標種群」を略す）	環境指標となる現生種の出現環境や生態学的特徴など	本分析で産出した主要構成種・"標徴種"・不定
汽水不定・不明種　U3	汽水域に出現するが、種まで同定できなかった分類群や生態未詳な種	–
淡水底生　F	塩分が2‰以下の淡水域の底質や水草に付着する（河岸や湖岸）	*Cocconeis placentula, Cymbella tumida, Eunotia bilunaris, Eunotia formica, Eunotia intermedia, Sellaphora pupula*
上流性河川　J	河川上流に出現する	*Achnanthidium japonicum*
最下流性河川　L	最下流域の三角州に集中して出現する	*Cyclotella meneghiniana*
沼沢湿地付着生　O	水深が1.0m内外で、湿地及び植物が一面に繁茂している沼沢湿地において、付着状態で生育する	*Gomphonema acuminatum, Navicula elginensis, Pinnularia acrosphaeria, Pinnularia gibba, Stauroneis phoenicenteron*
高層湿原　P	ミズゴケなどを主とした植物群落及び，泥炭地の発達が見られる場所に出現する	*"Neidium ampliatum", "Pinnularia schoenfelderi"*
陸域　Q	ジメジメとした湿り気のある陸域に生息する	*Diploneis elliptica*
陸生A　Qa	耐乾性が強い	*Amphora montana, Diadesmis contenta* f. *biceps, Hantzschia amphioxys, Luticola mutica, Orthoseira roeseana*
陸生B　Qb	陸生A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する	*Diadesmis confervacea, Pinnularia subcapitata*
広布種　W	淡水域に生育し、生態に幅のある種	–
淡水不定・不明種　U5	淡水域域に出現するが、種まで同定できなかった分類群や生態未詳な種	–

・主要構成種：他の環境にも出現するが、そこでの群集において主要な構成要素となる種
・標徴種：高率には出現しないが、その環境の良い指標となる種
・不定：千葉・澤井（2014）に記載されているが、上記には属さない種

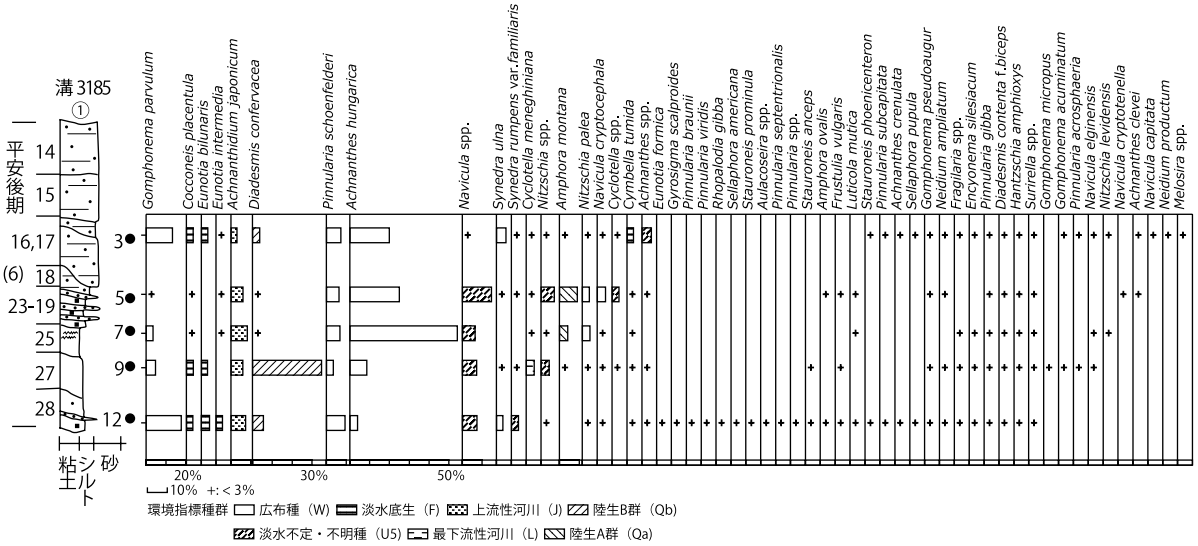


図10　溝3185の珪藻ダイアグラム

群に分類されている。陸生Ｂ群は、ジメジメした陸域に生育し耐乾性が高い陸生Ａ群（Qa）に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種とされる。渡辺ほか（2005）では、好汚濁性・好アルカリ性のほか、「しばしば浅い水域に出現し、軟水、温水を好むように思える」としている。福島・木村（2018）では、通常は相対頻度が10％を超えることはないが、水温が高い場合はこの限りではない、としている。*Achnanthes hungarica* は、千葉・澤井（2004）の環境指標種群では記載されておらず、広布種（W）に設定している。渡辺ほか（2005）では、広適応性・好アルカリ性とし、「河川・

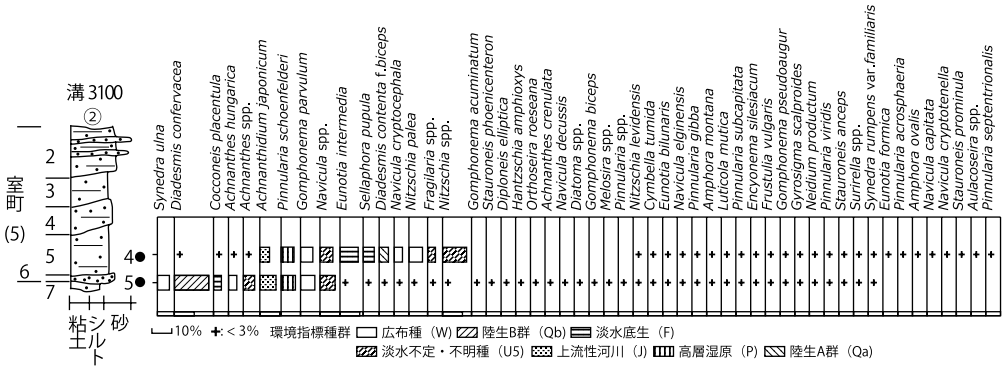


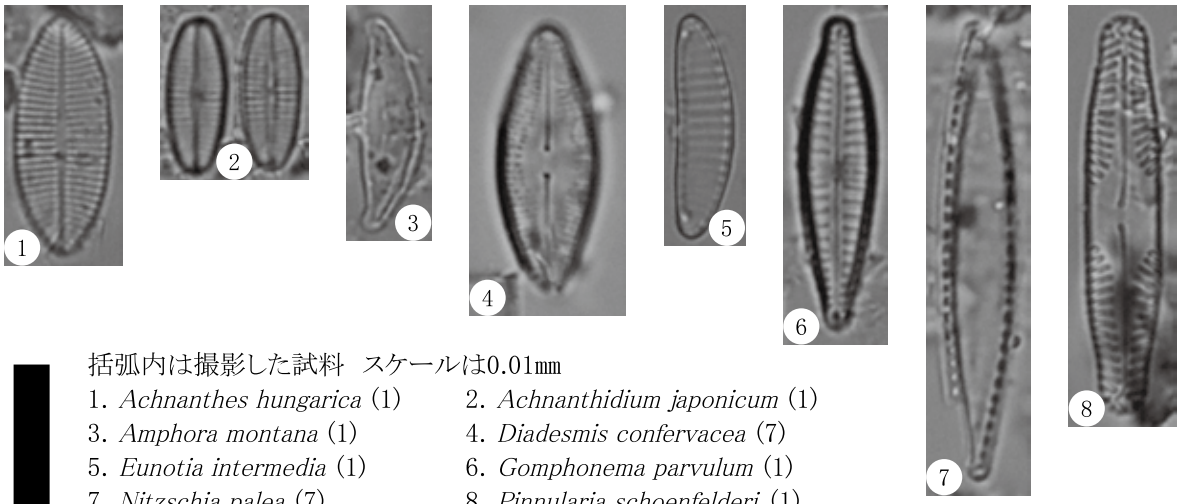
図11　溝3100の珪藻ダイアグラム

流水中に出現」と記載される。生活様式が被付着物（石礫、岩、生物体）に付着する種であり、止水域でも流水域でも生育できる珪藻である。

溝3185は、流水環境を示唆する上流河川（J）のほか、淡水底生（F）など付着生の珪藻が生育し、陸生珪藻（Qa、Qb）が流入する状況にあったと考えられる。溝埋土での層位的な珪藻化石群集の変遷についてみてみると、最下層の28層では、生態性に幅のある広布種（W）が多産する。泥層からなる28層では、層相をふまえると、珪藻化石が保存される湿性な堆積環境下にあったと推定される。27層では、陸生Ｂ群の*Diadesmis confervacea*が優占するため、ジメジメした環境が推定されるが、上述のとおり10％を超える相対頻度であり、全種での傾向含めて水質は、低水位のやや汚濁してアルカリ性の温水域であったと捉えられる。27層段階の溝底は、周囲もしくは上流域から水が集まりやすく、湿性状態が維持されていたと推定される。なお、27層では、泥の小さな偽礫が多く含まれており、堆積段階に溝周囲から人為的に擾乱された堆積物が頻繁に流入するような状態であったと推測される。

25層では、前述の*Achnanthes hungarica*が特徴的に優占し、水質は中程度の汚濁具合でpHは中性であったと考えられる。泥層からなる25層中には、植物遺体の極薄層からなる葉理が多く挟在する。上記の*Achnanthes hungarica*の生態および25層の層相をふまえると、本層の堆積時には、直下の27層に比べ溝内での流水環境が強まったと考えられる。ただし、泥層に薄層からなる植物遺体の葉理が積層する状況から、25層段階の流況は、水深が極浅く、さらに流速も非常に弱かったと推定される。なお、25層の大型植物遺体分析では、抽水～湿地性草本のタガラシが多産傾向を示す。宮脇ほか（1986）によれば、タガラシが優占するスズメノテッポウータガラシ群集は、流水によってもたらされた富栄養な泥上上に成立し、流水辺にみられることが多く、立地は多湿で０～５cmの水深の場所とされる。25層で多産傾向になる珪藻と大型植物遺体は、互いに矛盾しない産出状況を示すと考えられる。

土器が多産した23層～19層相当の層準では、直下の25層に比べて*Achnanthes hungarica*が減少するものの、依然として多産傾向にある。水質は中程度の汚濁具合でアルカリ性の水域であったと推定される。23層～19層相当層では、細粒の砂の葉理の挟在が目立つ。砂の葉理は、いくつかの単位に分離される炭なども含む、廃棄とみられる土器の密集層準の間に堆積している。上記か



括弧内は撮影した試料　スケールは0.01㎜

1. *Achnanthes hungarica* (1)　2. *Achnanthidium japonicum* (1)
3. *Amphora montana* (1)　4. *Diadesmis confervacea* (7)
5. *Eunotia intermedia* (1)　6. *Gomphonema parvulum* (1)
7. *Nitzschia palea* (7)　8. *Pinnularia schoenfelderi* (1)

図12　産出した珪藻殻

ら、23層～19層相当層では、溝内の流況について25層と大きな変化が生じていない環境下において、溝内へ多くの土器が廃棄されるようになったと考えられる。23層～19層相当層での細粒の砂の葉理については、25層よりも溝内の流況が強まった状況が推測されるが、堆積要因などは現段階で不明である。また、23層～19層相当層は、耐乾性の高い陸生Ａ類が25層よりもやや増加傾向を示す。土器の廃棄や溝内の埋没が進み、23層～19層相当層では、溝底付近に常時乾いた場所も存在するようになった可能性も推測される。

16層・17層では、*Achnanthes hungarica* が23層～19層相当層とほぼ同様の割合で産出する。よって、この段階の溝では、埋没がさらに進行するものの、溝内へは周囲もしくは上流域から水が集まり堆積環境下にあり、湿潤な状態が維持されていたと考えられる。

以上、溝3185の珪藻化石群集の特徴にもとづくと、溝内では、今回実施した分析層準のすべての層位において、閉鎖的で水が滞水することなく、流下していく状態にあったと推定される。

溝3100は、十分な珪藻が検出できたものの、河川や湖沼沼沢を指標する珪藻は多くはなく、陸生珪藻（Qa、Qb）や高層湿原（P）、淡水底生（F）が多く見られる。止水域ではないが、溝3100よりも水の交換が頻繁ではない堆積域が推定される。

珪藻の産出が僅かである溝2841は、試料が堆積した時期には乾燥していたと考えられる。

（石川　智・辻　康男）

引用文献

千葉　崇・澤井裕紀（2014）環境指標種群の再検討と更新．Diatom，30，7-30.

福島　博・木村　努（2018）珪藻Navicula図鑑．574p，内田老鶴圃.

宮脇　昭・中村幸人・金　鍾元・加藤明弘（1986）海老名市の植生:緑の実態調査と都市環境保全・創造に対する植生学的研究．132p，海老名市.

渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻　彰洋・伯耆晶子（2005）淡水珪藻生態図鑑．784p，内田老鶴圃.

付章２　出土した動物遺存体

丸山真史（東海大学人文学部）

１）概要

平安時代から近世までの遺構および整地層から動物遺存体が出土している。調査区別にみると、２区では溝2235と井戸2666、３区では溝3055、溝3100、溝3185、溝3240、流路3400、土坑3106、４区では溝4030、流路4024、水制4035、護岸4031、整地層からの出土資料である。動物遺存体は、破片数にして202点を数え、そのうち時期が特定でき、種類や部位なども同定できたものは135点である（表１・２）。これらの資料は、発掘調査中に肉眼で確認して、採集したものである。哺乳類が最も多く85点、それに次ぐ貝類48点が出土しており、これらのほか甲殻類と爬虫類が１点ずつに留まる。

動物遺存体の大部分は保存状態に恵まれず、骨や歯はアセトンで10％程度に希釈したパラロイドB-72を含浸して強化した。一部の貝類は保存状態が非常に悪く、殻質が分解して、殻皮だけが保存されているもの、殻の内部に充填された土壌が貝殻の形状を保持した土塊が出土しており、これらも同定対象とした。

表１　動物遺存体種名表

腹足綱　Gastropoda
　古腹足目　Vetigastropoda
　　サザエ科　Turbnidae
　　サザエ　*Turbo cornutus*
　盤足目　Discopoda
　　タニシ科　Viviparidae
　　オオタニシ
　　タニシ科の一種　Viviparidae gen. et sp. indet.
　新腹足目　Neogastropoda
　　アッキガイ科　Muricidae
　　アカニシ　*Rapana venosa*
斧足綱　Bivalvia
　イシガイ目　Unionoida
　　イシガイ科　Unionidae
　　イシガイ科の一種　Unionidae gen et sp. indet.
　カキ目　Ostreoida
　　イタボガキ科　Ostreidae
　　イタボガキ科の一種　Ostreidae gen. et sp. indet.
　　イタヤガイ科　Pectinidae
　　イタヤガイ　*Pecten albicans*
爬虫綱　Reptilia
　カメ目　Testudines
　　スッポン科　Trionychidae
　　スッポン　*Pelodiscus sinensis*
哺乳綱　Mammalia
　霊長目　Primates
　　ヒト科　Hominidae
　　ヒト　*Homo sapience*
　奇蹄目　Perissodactyla
　　ウマ科　Equidae
　　ウマ　*Equus caballus*
　偶蹄目　Artiodactyla
　　ウシ科　Bovidae
　　ウシ　*Bos Taurus*

２）種類別の特徴

ａ）甲殻類

フジツボ科　４区第２面整地層（室町時代後期から安土桃山時代）から１点が出土している。小型であり食用には適さず、岩礁性のアワビやサザエなどに付着していたものが剥離したものと推測される。

ｂ）貝類（図１）

サザエ　溝4030から１点が出土している。

オオタニシ　溝2235から１点、水制4035から２点、計３点が出土している。

タニシ科　いずれも貝殻の形状を保持した土塊であり、その形状から本科と同定した（図１）。溝3185Ｂ（溝3185のＡ～Ｆは78頁の図45（まとめの土器取り上げエリア図）と同一である。）から２点、溝3185Ｃ、護岸4031から１点ずつ、

図１　タニシ科の貝殻形状を保持する土塊
（流路3400第７層出土の一部）

流路3400第３層（図版26　40～43層）から６点、第４層（図版26　44～52層）から２点、第６層（図版26　58～62層）から４点、第７層（図版26　63～67層）から16点、計32点が出土している。

アカニシ　井戸2666、溝3055、溝4030、護岸4031から１点ずつ、計４点が出土している。また、溝3185からアカニシと思われる破片１点が出土している。

イタボガキ科　流路4024から１点出土している。

イタヤガイ科　溝4030から１点出土している。

イシガイ科　流路3400第７層から２点、溝4030から２点、水制4035から１点、流路4024から１点、計６点が出土している。溝4030と流路4024から出土した計３点は、殻質が分解して、殻皮のみが保存されている。

ｃ）爬虫綱

スッポン　流路3400第７層から、甲板が１点出土している。

ｄ）哺乳綱（図２～４）

ウマ　溝3185Ａから基節骨など４点、溝3185Ｂから遊離歯などが７点、溝3185Ｃから遊離歯が１点、溝3185Ｄから橈骨などが２点、溝3240から下顎骨が１点、流路3400第２層から中節骨１点、第３層から大腿骨１点、第４層から遊離歯や下顎骨などが８点、流路3400（図版22　３区下段西壁第37層）から遊離歯が１点、第７層から遊離歯や四肢骨などが36点、計62点が出土している。

溝3185Ｂから出土した№117下顎骨（左）は、植立するM2とM3の歯冠高が、それぞれ34.7㎜、45.8㎜を測り、10～13歳と推定される。同遺構から出土した遊離歯のうち、№118上顎I1（左）は咬耗の進行から６～７歳と推定され、歯冠高が計測できるもので№125下顎P2（左）は25.5㎜、№129下顎M1（左）は35.0㎜、№122下顎M2（右）は35.5㎜を測り、それぞれ10～11歳、10～11歳、12～13歳と推定される。また、№128中足骨（右）の遠位端最大幅（Bd）は45.0㎜を測り、体高125～130㎝と推定される。溝3185Ｃから出土した№131下顎M3（右）の残存高が51.2㎜を測り、９歳以下の若齢馬と推定される。溝3240から出土した№147下顎骨（左）は、全臼歯列長166.6㎜を測り、御崎馬や木曽馬といった日本在来の中型馬に相当する大きさである。また、P2は歯冠高34.8㎜を測り、６～７歳と推定される（表３－№147）。

流路3400第４層から出土した遊離歯のうち、№91上顎I3（左）の咬耗の進行から15歳と推定される。歯冠高が計測できるもので、左右の上顎遊離歯がまとまって出土したことから同一個体と考えられる№87の上顎P2（左）は47.3㎜を測り、４～５歳の若齢馬と推定される。流路3400第４層

表２　動物遺存体一覧表

計測値の単位は㎜

No.	調査区	時期	遺構名	層位/位置	小分類	部位	左右	備考
1	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎M1/M2)	右	歯冠長23.6幅25.1高35.8
2	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	上腕骨	左	
3	3区	平前	流路3400	第7層	タニシ科	殻内部土塊	－	2点
4	3区	平前	流路3400	第7層	タニシ科	殻内部土塊	－	3点
5	3区	平前	流路3400	第7層	ウシ？	脛骨	－	
6	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎臼歯)	－	
7	3区	平前	流路3400	第7層	タニシ科	殻内部土塊	－	
8	3区	平前	流路3400	第7層	タニシ科	殻内部土塊	－	
9	3区	平前	流路3400	第7層	ヒト	脛骨	左	
10	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎P2)	左	歯冠長40.8幅27.8高50.7
11	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎M2)	左	歯冠長24.2幅27.1高57.7
12	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎M3)	左	歯冠長25.9幅×残存49.1
13	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎臼歯)	左	歯冠長22.9幅23.8残存高37.0
14	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎P2)	右	歯冠長37.9幅25.7高40.1
15	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎P3)	右	歯冠長30.3幅28.0高48.1
16	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎M2)	右	歯冠長28.1幅31.0残存高47.4
17	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎M3)	右	歯冠長31.6幅25.8残存高32.8
18	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎臼歯)	右	歯冠長27.7幅27.0高62.1
19	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎I1,I2)	左	4～5歳
20	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎I1)	右	4～5歳
21	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(下顎I2？)	右？	12歳以上
22	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	中手骨/中足骨	－	
23	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	寛骨？	－	
24	3区	平前	流路3400	第7層	ウシ/ウマ	不明	－	
25	3区	平前	流路3400	第7層	ウシ/ウマ	四肢骨	－	
26	3区	平前	流路3400	第7層	イシガイ科	殻質	－	
27	3区	平前	流路3400	第7層	ウシ？	大腿骨？	－	
28	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	上腕骨	左	
29	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	大腿骨	右	
30	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	脛骨	左	
31	3区	平前	流路3400	第7層	ウシ/ウマ	上腕骨	右	
32	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	頭蓋骨	－	
33	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎臼歯)	－	
34	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎M3)	右	残存高46.1
35	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(下顎P2)	左	歯冠長32.7幅15.5高26.9
36	3区	平前	流路3400	第7層	タニシ科	殻内部土塊	－	
37	3区	平前	流路3400	第7層	タニシ科	殻内部土塊	－	
38	3区	平前	流路3400	第7層	タニシ科	殻内部土塊	－	
39	3区	平前	流路3400	Sec.北 第7層	ウシ	中足骨	右	SD33.2
40	3区	平前	流路3400	Sec.北 第7層	ウマ	脛骨	右	SD42.6
41	3区	平前	流路3400	Sec.北 第7層	ウマ？	脛骨	右	
42	3区	平前	流路3400	Sec.北 第7層	ウシ	中手骨/中足骨	右？	Bd55.5
43	3区	平前	流路3400	Sec.北 第7層	ウシ/ウマ	上腕骨？	－	
44	3区	平前	流路3400	Sec.北 第7層	ウシ/ウマ	不明	－	
45	3区	平前	流路3400	Sec.南 第7層	タニシ科	殻内部土塊	－	3点
46	3区	平前	流路3400	Sec.南 第7層	ウシ/ウマ	遊離歯(臼歯)	－	
47	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎M3)	左	歯冠長26.5幅22.2残存高48.9

計測値の単位はmm

No.	調査区	時期	遺構名	層位/位置	小分類	部位	左右	備考
48	3区	平前	流路3400	第7層	タニシ科	殻内部土塊	－	
49	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(下顎臼歯)	右	歯冠長27.4幅15.0高51.5
50	3区	平前	流路3400	第7層	タニシ科	殻内部土塊	－	
51	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎P2)	左	歯冠長34.2幅22.6高38.6
52	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎切歯)	左	
53	3区	平前	流路3400	第7層	ウシ	遊離歯(下顎後臼歯)	－	壮齢～老齢
54	3区	平前	流路3400	第7層	ウシ	中手骨	左	Bp65.1
55	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎臼歯)	右	歯冠長26.1幅26.7残存高45.8
56	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎M1？)	右	歯冠長29.6幅18.4高40.7
57	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎M3)	右	残存高45.47
58	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(下顎臼歯)	左	歯冠長29.2幅15.9高45.6
59	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(下顎M3)	左	歯冠長×幅13.2残存高56.2
60	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	脛骨	右	
61	3区	平前	流路3400	第7層	ウシ/ウマ	大腿骨	－	
62	3区	平前	流路3400	第7層	哺乳綱	四肢骨	－	
63	3区	平前	流路3400	第7層	ヒト	下顎骨	右	M2,M3歯槽
64	3区	平前	流路3400	第7層	ウシ/ウマ	四肢骨	－	
65	3区	平前	流路3400	第7層	スッポン	甲板	－	
66	3区	平前	流路3400	第7層	イシガイ科	殻質	－	
67	3区	平前	流路3400	第7層	タニシ科	殻内部土塊	－	
68	3区	平前	流路3400	第7層	ウマ	遊離歯(上顎P3)	左	歯冠長29.6幅28.1高45.5
69	3区	平前	流路3400	最下層	ウシ	中足骨	左	Bp48.9
70	3区	平前～中	流路3400	第2層	ヒト	大腿骨？	－	
71	3区	平前～中	流路3400	第2層	ウシ/ウマ	上腕骨？	－	
72	3区	平前～中	流路3400	第2層	ウマ	中節骨	－	
73	3区	平前～中	流路3400	第2層	ウシ/ウマ	不明	－	
74	3区	平前～中	流路3400	第3層	ウマ	大腿骨	左	
75	3区	平前～中	流路3400	第3層	タニシ科	殻内部土塊	－	2点
76	3区	平前～中	流路3400	第3層	ウシ	大腿骨	右	
77	3区	平前～中	流路3400	第3層	斧足綱？	殻質	－	土に殻片付着
78	3区	平前～中	流路3400	第3層	ウシ？	橈骨	左	
79	3区	平前～中	流路3400	第3層	タニシ科	殻内部土塊	－	
80	3区	平前～中	流路3400	Sec.第3層	タニシ科	殻内部土塊	－	3点
81	3区	平前～中	流路3400	Sec.南 第4層	ウシ/ウマ	不明	－	
82	3区	平前～中	流路3400	第4層	タニシ科	殻内部土塊	－	
83	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウマ？	肩甲骨	右	
84	3区	平前～中	流路3400	第4層	ヒト	大腿骨	左	
85	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウシ/ウマ	上腕骨	右	
86	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウシ/ウマ	大腿骨？	－	
87	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウマ	遊離歯(上顎左P2-M3,右P2-M1)	左右	P2歯冠高:左47.3, 右39.1
88	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウシ/ウマ	下顎骨	－	
89	3区	平前～中	流路3400	第4層	タニシ科	殻内部土塊	－	
90	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウマ	遊離歯(上顎臼歯)	左	
91	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウマ	遊離歯(上顎I3)	左	15歳程度
92	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウマ	遊離歯(犬歯)	－	オス
93	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウマ	大腿骨	－	骨頭に解体痕？

計測値の単位は㎜

No.	調査区	時期	遺構名	層位/位置	小分類	部位	左右	備考
94	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウシ/ウマ	頭蓋骨	－	破片
95	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウシ/ウマ	第2手根骨	左	
96	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウシ/ウマ	四肢骨	－	
97	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウシ/ウマ	寛骨？	－	
98	3区	平前～中	流路3400	第4層	哺乳綱	四肢骨	－	
99	3区	平前～中	流路3400	第4層	哺乳綱	不明	－	
100	3区	平前～中	流路3400	第4層	哺乳綱	不明	－	骨痕跡残存土
101	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウマ	下顎骨(P2-M3)	右	計測値:表3-No.101
102	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウシ/ウマ	四肢骨	－	
103	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウマ	橈骨	右	
104	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウシ/ウマ	不明	－	
105	3区	平前～中	流路3400	第4層	ウマ	下顎骨(P2-M3)	左	計測値:表3-No.105
106	3区	平前～中	流路3400	第5層	ウシ	踵骨	右	
107	3区	平前～中	流路3400	Sec. 第6層	タニシ科	殻内部土塊	－	4点
108	3区	平前～中	流路3400	西壁 第37層	ウマ	遊離歯(下顎P2)	左	歯冠長31.3幅14.9高37.3
109	3区	平後	溝3185	Sec.A 南断割	ウシ	中足骨	－	解体痕？
110	3区	平後	溝3185A	下層	ウマ	肩甲骨	右	
111	3区	平後	溝3185A	下層	ウマ	中手骨	－	
112	3区	平後	溝3185A	下層	ヒト	頭蓋骨	－	
113	3区	平後	溝3185A	下層	ヒト	頭蓋骨内部土塊	－	No.112内の土壌
114	3区	平後	溝3185A	下層	ウマ	基節骨	右	
115	3区	平後	溝3185A	下層	ウマ	基節骨	左	
116	3区	平後	溝3185A	下層	ウシ/ウマ	軸椎	－	
117	3区	平後	溝3185B		ウマ	下顎骨(M2,M3)	左	M2長23.2幅13.5高34.7 M3長31.3幅12.7高45.8
118	3区	平後	溝3185B	下層	ウマ	遊離歯(上顎I1)	左	6～7歳
119	3区	平後	溝3185B	下層	腹足綱/斧足綱		－	
120	3区	平後	溝3185B	下層	ウシ/ウマ	四肢骨	－	解体痕？
121	3区	平後	溝3185B	下層	ウシ	遊離歯(下顎M1)	右	歯冠長38.5幅16.0
122	3区	平後	溝3185B	下層	ウマ	遊離歯(下顎M2)	右	長22.4幅13.3高35.5
123	3区	平後	溝3185B	下層	ウマ	中足骨？	－	
124	3区	平後	溝3185B	下層	哺乳綱	不明	－	
125	3区	平後	溝3185B	下層	ウマ	遊離歯(下顎P2)	左	長31.1幅15.7高25.5
126	3区	平後	溝3185B	下層	ウシ	中手骨	右	Bp51.5
127	3区	平後	溝3185B	下層	ウシ	脛骨	右	SD37.5
128	3区	平後	溝3185B	下層	ウマ	中足骨	右	Bd45.0
129	3区	平後	溝3185B	下層	ウマ	遊離歯(下顎M1,M2)	左	M1長26.3幅16.7高35.0 M2長21.84幅15.4高×
130	3区	平後	溝3185B	下層	タニシ科	殻内部土塊	－	2点
131	3区	平後	溝3185C	下層	ウマ	遊離歯(下顎M3)	右	残存高51.2
132	3区	平後	溝3185C		哺乳綱	不明	－	
133	3区	平後	溝3185C	下層	タニシ科	殻内部土塊	－	
134	3区	平後	溝3185D	下層	ウマ	寛骨	左	
135	3区	平後	溝3185D	下層	ウシ	上腕骨	左	
136	3区	平後	溝3185D	下層	ウシ？	橈骨	左	
137	3区	平後	溝3185D	下層	ウマ	橈骨	左	
138	3区	平後	溝3185D	下層	ウシ/ウマ	橈骨	－	
139	3区	平後	溝3185D	下層	ウシ/ウマ	不明	－	

計測値の単位は㎜

№.	調査区	時期	遺構名	層位/位置	小分類	部位	左右	備考
140	3区	平後	溝3185E	下層	ウシ	第4手根骨	左	
141	3区	平後	溝3185F	下層	ウシ/ウマ	四肢骨	－	
142	3区	平後	溝3185F	下層	ウシ/ウマ	四肢骨	－	
143	3区	平後	溝3185F	下層	ウシ/ウマ	四肢骨	－	
144	3区	平後	溝3185	東Sec.北側 上層	ウシ	下顎骨(P2-M1)	左	計測値:表3-№.144
145	3区	平後	溝3185	東Sec.	アカニシ？	殻質	－	
146	3区	平後	溝3185	東Sec.北側 上層	ウシ/ウマ	上腕骨	右	
147	3区	平後	溝3240	東西方向	ウマ	下顎骨(P2-M3)	左	計測値:表3-№.147
148	2区	平後	溝2235	断割崩落部	オオタニシ	殻質	－	
149	2区	室	井戸2666	第21層	アカニシ	殻質	－	
150	4区	室後～桃	第2面整地層		フジツボ科	殻質	－	小型
151	4区	室後～桃	第2面整地層		ウシ	寛骨	右	
152	3区	室後～桃	土坑3106		ヒト	脛骨	右	
153	3区	室後～桃	溝3055	第2層	アカニシ	殻質	－	
154	3区	室後～桃	溝3055	Sec.1 第2層	ウシ	踵骨	左	GB42.9
155	3区	室後～桃	溝3055	Sec.1 第2層	ウシ	脛骨	左	鋸で切断後、折り取る
156	3区	室後～桃	溝3100	Sec.3,4間 第2層	ウシ	肩甲骨	左	
157	4区	江前	溝4030	西肩粘土層	イシガイ科	殻皮	－	
158	4区	江前	溝4030	砂礫層	イタヤガイ科	殻質	－	
159	4区	江前	溝4030	西肩粘土層	イシガイ科	殻皮	－	2個体分
160	4区	江前	溝4030	西肩粘土層	サザエ	殻質	－	
161	4区	江前	溝4030		アカニシ	殻質	－	
162	4区	江前	水制4035		オオタニシ	殻質	－	
163	4区	江前	水制4035		オオタニシ	殻質	－	
164	4区	江前	水制4035		イシガイ科	殻質	－	
165	4区	江前	護岸4031	杭上段	タニシ科	殻内部土塊	－	
166	4区	江前	護岸4031	下層	アカニシ	殻質	－	
167	4区	江	流路4024		斧足綱	殻内側土壌	－	わずかに貝内面の痕跡が残る
168	4区	江	流路4024		イシガイ科	殻皮	－	1個体分
169	4区	江	流路4024		腹足綱/斧足綱	殻皮	－	殻皮が土に付着
170	4区	江	流路4024		イタボガキ科	殻質	－	

※ 平:平安時代、室:室町時代、桃:安土桃山時代、江:江戸時代
前:前期、中:中期、後:後期

から出土した№.105下顎骨（左）は、全臼歯列長162.6㎜を、P3の残存高は50.1㎜を測り、日本在来の中型馬に相当する体格で、６～７歳と推定される（表３－№.105）。一方の№.101下顎骨（右）は全臼歯列長165.3㎜を、P4とＭ１の歯冠高は55.2㎜、56.0㎜を測り、日本在来の中型馬に相当する体格で、５～６歳と推定され（表３－№.101）、№.105と同一個体の可能性もある。また、流路3400（図版22　３区下段西壁第37層）の№.108下顎P2（左）の歯冠高は37.3㎜を測り、６～７歳と推定される。

流路3400第７層から出土した№.１上顎M1/M2（右）の歯冠高は35.8㎜を測り、９～10歳と推定される。上顎P2の№.10（左）が50.7㎜、№.14（右）が40.1㎜を測り、それぞれ３～４歳、６～７歳と推定される。また、№.35下顎P2（左）の歯冠高は26.9㎜を測り、10～11歳と推定される。そのほかの歯冠高あるいは残存高の計測値では６～８歳と推定されるものが多い。

表３　牛馬下顎臼歯の計測値

計測値の単位は㎜

	No.	計測項目	P2	P3	P4	M1	M2	M3
ウマ	No.101 ウマ下顎骨(右)	歯冠長	30.4	26.8	26.3	24.1	24.9	30.2
		歯冠幅	15.1	15.2	15.1	14.8	14.0	13.6
		歯冠高	×	残存45.97	55.17	56.04	残存56.24	×
		臼歯列長	85.1			77.6		
			165.3					
	No.105 ウマ下顎骨(左)	歯冠長	30.2	26.9	26.0	24.9	25.7	30.8
		歯冠幅	13.6	15.0	15.3	13.5	11.8	11.5
		歯冠高		残存50.1				
		臼歯列長	86.2			80.9		
			162.6					
	No.147 ウマ下顎骨(左)	歯冠長	31.1	28.8	×	24.1	25.1	31.3
		歯冠幅	14.0	16.3	16.2	15.4	13.2	13.3
		歯冠高	34.81	×	×	×	×	×
		臼歯列長	88.2			77.9		
			166.6					
ウシ	No.144 ウシ下顎骨(左)	歯冠長	18.8	22.3	19.9	26.3	×	×
		歯冠幅	10.6	12.5	14.8	16.9		

ウシ　溝3055第２層から脛骨（左）など２点、溝3100第２層から肩甲骨（左）１点、溝3185セクションＡから中足骨（左右不明）１点、溝3185Ｂから中手骨（右）などが３点、溝3185Ｄから上腕骨（左）１点、溝3185Ｅから第４手根骨（左）１点、溝3185東セクションから下顎骨（左）１点、流路3400第３層から大腿骨（右）１点、流路3400第５層から踵骨（右）１点、流路3400第７層から中足骨（右）など４点、流路3400最下層から中足骨（左）１点、４区第２面整地層から寛骨（右）が１点、計18点が出土している。

溝3055のNo.155脛骨（左）は、遠位部が鋸によって切断されている（図３－No.155）。溝3185ＢのNo.126中手骨（右）の近位端最大幅（Bp）は51.5㎜を測り、体高105～110㎝と推定される。流路3400第７層のNo.54中手骨（左）はBp65.1㎜を測り、体高125～130㎝と推定される。流路3400最下層のNo.69中足骨（左）はBp48.9㎜を測り、体高115～120㎝　　と推定される。

ヒト　土坑3106からNo.152脛骨（右）１点、溝3185Ａ下層からNo.112頭蓋骨１点、流路3400第４層からNo.84大腿骨（左）１点、流路3400第７層からNo.63下顎骨（右）、No.９脛骨（左）が１点ずつ、計５点が出土している。また、流路3400第２層（図版26　35～39層）から、No.70大腿骨と思われるものが１点出土している。

３）考察

動物遺存体は、平安時代前期から江戸時代までの遺構や遺物包含層から出土しており、出土量が多いのは平安時代である。貝類や爬虫類のスッポンは食用と考えられるが、哺乳類のウマ、ウシは最終的には食用になった可能性もあるが、使役獣としての役割が大きかったと考えられる。平安時代前期、同前期から中期、同後期、室町時代から江戸時代の４時期に区分して、出土している動物種と点数をみると以下のようになる。

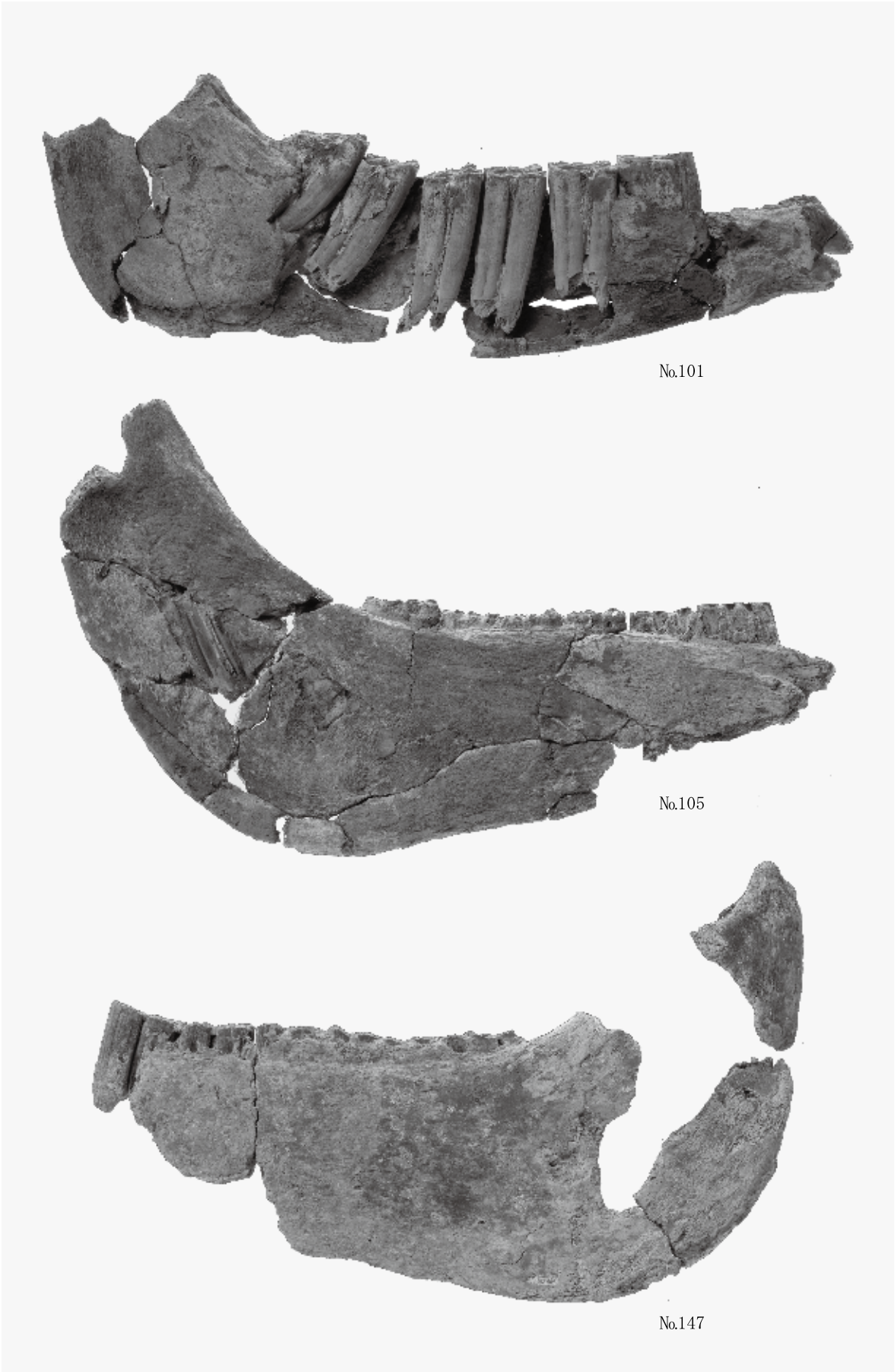


図２　出土動物遺存体　ウマ下顎骨

図３　出土動物遺存体　ウマ（No.114・128）、ウシ（その他）

図４　出土動物遺存体　ヒト

平安時代前期では、タニシ科16点、イシガイ科２点、スッポン１点、ウマ36点、ウシ５点、ヒト２点が出土している。平安時代前期から中期では、タニシ科12点、ウマ11点、ウシとヒトが２点ずつ出土している。平安時代後期では、オオタニシを含むタニシ科４点、ウマ15点、ウシ７点、ヒト１点が出土している。室町時代から江戸時代では、フジツボ科１点、サザエ１点、オオタニシを含むタニシ科３点、アカニシ４点、イシガイ科５点、イタヤガイ科１点、ウシ４点が出土している。時期別にみれば、それぞれの出土量は多くないため、以下では注目される点を指摘するに留める。

平安時代から江戸時代を通じて、淡水産のタニシ科、イシガイ科、スッポンが出土しており、内陸かつ河川沿岸という遺跡の立地環境と矛盾しない。室町時代には、海水産のアカニシが出土しており、江戸時代にはイタヤガイ科、サザエが加わる。平安京左京四条三坊二町跡では海産物が多く出土しており、14～15世紀には沿岸部と内陸部における海産物流通が活発になっていることが明らかになっている（丸山2022）。当地における海産物の消費は、交通の要所であることや、海産物の流通経路を示すものとして注目される。

一方、使役獣としての役割が大きいウマとウシは、平安時代から江戸時代まで出土しているが、平安時代はウマが圧倒的に多いのに対して、室町時代以後はウマがみられない。西日本では、古代ではウマが多く、ウシは少ない。それが、寺島良安が著した江戸時代の『和漢三才図絵』に「大抵関東馬多牛少関西牛多馬少」とあるように（和漢三才圖會刊行委員会1970）、中世以降はウシが増加する。当地においても、古代までウマの利用が活発であったが、中世以後はウシの利用に転換したことが示唆される。さらに微視的にみれば、平安時代前期から後期にかけてウシの比率が高くなることも注目され、平安時代後期から中世にかけてウシの重要性が高まったことも想定できる。また、散乱状態で出土していることに加えて、解体痕が見られる骨があり、近郊で解体し、皮革や肉などを利用したと考えられる。

ウマやウシの体高や年齢構成を西中川（1991）に倣い、推定した。平安時代前期から中期、後期のウマで、年齢構成は幼齢と推定される個体は１個体、老齢と推定される個体は２個体、それ以外は若齢か壮齢である（表２・３）。体高が推定できるものは臼歯列ではいずれも木曽馬などの中型馬に相当する（表３）。四肢骨の計測値でも体高120～125㎝と推定され、やはり中型馬に相当する。ウシは、臼歯の咬耗状態から壮齢から老齢の個体があり、体高115～130㎝におさまり日本在来の口之島牛や見島牛に相当する大きさである（表３－№144）。ウマもウシも古代の遺跡に一般的な体格、年齢構成と言えよう。

４）まとめ

平安時代から近世までの遺構および整地層から動物遺存体が出土しており、当地における通時的な動物利用を示唆する。京都市内の発掘調査では、平安京およびその周辺の遺跡で動物遺存体の出土が集中していたが、本資料は、平安時代の動物遺存体が多く含まれており、京外における平安時代の動物利用の一端をしることができる貴重な資料である。ウマが多く、ウシの利用もみられ

た。平安京内では、これらにイヌやイノシシ、シカが出土することがあるが、当資料には認められないことは特徴的である。今後の調査で、さらに資料が増加すれば、より具体的な比較が可能となり、平安時代の動物利用が明らかになることが期待できる。なお、魚類や鳥類の出土がみられないことは、サンプリングエラーの可能性もあるため、今後は食料残滓が投棄されたと考えられる遺構について水洗篩別の実施が望まれる。

参考文献

西中川駿編1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告

丸山真史2022「平安京左京四条三坊二町跡から出土した動物遺存体」『平安京左京四条三坊跡』京都平安文化財 pp.71-83

和漢三才圖會刊行委員会1970『和漢三才圖會』上　東京美術

付表１　土器類一覧表

（）は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
1	弥生土器	甕	土坑3472	33.0	(25.1)		2.5Y8/1	φ7mm以下の長石・石英・チャート	
2	弥生土器	甕	流路3400		(4.9)	9.0	2.5Y8/1	φ4mm以下の長石・石英・チャート	内面コゲ
3	弥生土器	壷	流路3400		(3.8)	9.4	7.5YR8/2	φ6mm以下の長石・石英・チャート	
4	弥生土器	甕	流路3400		(3.9)	7.6	7.5YR7/2	φ1mm以下の長石・石英・チャート	
5	弥生土器	壷	流路3400		(5.1)	9.2	2.5Y8/2	φ4mm以下の長石・石英・チャート	
6	古式土師器	壷	竪穴建物2800	9.4	(5.6)		7.5YR6/3	φ3mm以下の長石・石英・チャート多量	
7	古式土師器	鉢	竪穴建物2800	7.2	8.7	2.3	5YR7/6	φ2mm以下の長石・石英・チャート多量	
8	古式土師器	鉢	竪穴建物2800		(5.0)		7.5YR8/1	φ2mm以下の長石・石英・チャート	
9	古式土師器	甕	竪穴建物2800	14.4	(23.6)		5YR6/6	φ3mm以下の長石・石英・チャート	
10	古式土師器	甕	竪穴建物2800	17.8	(3.4)		2.5YR4/4	φ3mm以下のチャート・角閃石・雲母	生駒西麓産
11	古式土師器	甕	竪穴建物2800	18.0	(3.2)		7.5YR6/3	φ3mm以下の長石・石英・チャート	
12	古式土師器	甕	竪穴建物2800	15.6	31.1	3.2	5YR7/4～10YR8/2	φ3mm以下の長石・石英・チャート	
13	古式土師器	鉢	竪穴建物2800		(2.8)	2.8	7.5YR8/3	φ1mmの長石・石英・チャート	
14	古式土師器	有孔鉢	竪穴建物2800		(2.4)	3.0	内・外 7.5YR6/4 断 5YR7/6	φ3mm以下の長石・石英・チャート	
15	古式土師器	台付鉢	竪穴建物2800		(3.8)	6.1	7.5YR8/4	φ5mm以下の長石・石英・チャート	
16	古式土師器	高杯	竪穴建物2800	24.0	15.5	17.0	2.5YR4/4	φ5mm以下の長石・石英・チャート	
17	古式土師器	高杯	竪穴建物2800		(4.5)		7.5YR7/3	φ1mm以下の長石・石英・チャート	
18	古式土師器	高杯	竪穴建物2800		(6.7)		7.5YR7/2	φ1mm以下の長石・石英・チャート	
19	古式土師器	甕	竪穴建物2355	18.0	(5.0)		5YR3/3	φ1mm以下の長石・石英・チャート、多量の雲母	
20	古式土師器	甕	竪穴建物2355	16.0	(4.3)		5YR7/6	φ5mm以下の長石・石英・チャート	
21	古式土師器	甕	竪穴建物2355	15.6	(2.6)		5YR7/6	φ3mm以下の長石・石英・チャート	
22	古式土師器	甕	竪穴建物2355		(2.8)	4.0	10YR8/1	φ3mm以下の長石・石英・チャート	
23	古式土師器	有孔鉢	竪穴建物2355		(4.2)	2.6	7.5Y7/1～8/1	φ2mm以下の長石・石英・チャート	
24	古式土師器	壷	竪穴建物2355		(2.5)	5.2	2.5Y8/1	φ2mm以下の長石・石英・チャート	
25	古式土師器	高杯	竪穴建物2355		(4.2)	11.4	10YR8/1	φ3mm以下の長石・石英・チャート	
26	古式土師器	高杯	竪穴建物2355		(8.2)	13.0	5YR7/6	φ2mm以下の長石・石英・チャート多量	
27	古式土師器	高杯	竪穴建物2355		(6.5)		7.5YR7/4	φ2mm以下の長石・石英・チャート	
28	弥生土器	壷	溝2841	9.0	8.3		7.5YR8/2	φ4mm以下の長石・石英・チャート多量	
29	弥生土器	壷	溝2841	10.0	11.2	4.6	7.5YR8/3	φ3mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキ	
30	弥生土器	壷	溝2841	11.8	22.2	3.4	10YR7/2	φ5mm以下の長石・石英・チャート	
31	弥生土器	壷	溝2841		(7.7)		2.5Y8/1	φ4mm以下の長石・石英・チャート	
32	弥生土器	壷	溝2841	21.7	(7.3)		7.5YR7/3	φ4mm以下の長石・石英・チャート	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
33	弥生土器	壷	溝2841		(7.0)	7.0	10YR8/1	φ4mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキ	
34	弥生土器	甕	溝2841	15.0	(5.8)		7.5YR8/1	φ4mm以下の長石・石英・チャート	
35	弥生土器	甕	溝2841	14.5	(11.6)		10YR6/2	φ3mm以下の長石・石英・チャート	
36	弥生土器	甕	溝2841	11.6	(11.9)		7.5YR7/4	φ5mm以下の長石・石英・チャート	
37	弥生土器	甕	溝2841	12.2	(9.0)		7.5YR8/1	φ2mm以下の長石・石英・チャート	
38	弥生土器	甕	溝2841	17.6	(7.0)		10YR8/2	φ5mm以下の長石・石英・チャート	
39	弥生土器	甕	溝2841		(5.7)	4.2	内 7.5YR7/4 外 10YR8/2	φ3mm以下の長石・石英・チャート	
40	弥生土器	鉢	溝2841	26.2	(16.4)		5YR7/6	φ5mm以下の長石・石英・チャート	
41	弥生土器	有孔鉢	溝2841	13.6	7.7	3.7	7.5YR8/1	φ3mm以下の長石・石英・チャート	
42	弥生土器	高杯	溝2841	11.4	9.2	10.6	2.5Y8/1	φ1mm以下の雲母・長石・石英・チャート	
43	弥生土器	高杯	溝2841	16.4	(6.4)		2.5Y8/2	φ4mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキ	
44	弥生土器	高杯	溝2841		(16.0)	14.3	7.5YR8/2	φ4mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキ	
45	古式土師器	壷	落込2392		(5.5)	3.0	2.5Y8/1	φ2mm以下の長石・石英・チャート	
46	古式土師器	壷	落込2392	19.4	(4.2)		7.5YR7/3	φ4mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキ	
47	古式土師器	壷	落込2392	21.0	(4.2)		7.5YR7/3	φ2mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキ	
48	古式土師器	甕	落込2392	12.4	12.1		7.5YR8/1	φ4mm以下の長石・石英・チャート	
49	古式土師器	甕	落込2392	16.0	(2.2)		7.5YR4/3	φ1mmの石英・長石・角閃石・雲母	生駒西麓産
50	古式土師器	ミニチュア鉢	落込2392	3.3	2.5		7.5YR8/2	φ1mmの長石・石英・チャート	
51	古式土師器	高杯	落込2392		(7.7)		7.5YR7/2	φ1mm以下の長石・石英・チャート	
52	古式土師器	高杯	落込2392		(4.7)	18.0	5YR7/3	φ1mm以下の長石・石英・チャート極少量	搬入品か
53	古式土師器	甕	落込5071	15.6	30.4	5.0	5YR8/4	φ3mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキ	
54	古式土師器	壷	溝3451		(12.7)		2.5Y8/1	φ4mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキ	
55	古式土師器	高杯	土坑2778		(10.0)	14.6	2.5Y7/1	φ2mm以下の長石・石英・チャート	
56	古式土師器	甕	溝3470	17.7	(3.7)		7.5YR8/1	φ1mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキ少量	
57	須恵器	有蓋高杯	溝3055		(2.4)		内 N5/0 外 N4/0	φ1mm以下の長石	
58	須恵器	有蓋高杯	溝3055	11.2	9.0	9.2	内・外 N6/0 断 N4/0	φ3mm以下の長石・石英	
59	灰釉陶器	壷	土坑3412		(16.8)	6.8	2.5Y8/1	φ1mm以下の長石	
60	須恵器	壷	溝3428		(16.2)	16.6	10YR8/1	φ2mm以下の長石・黒色粒	
61	土師器	皿	土坑3386	12.4	1.5		7.5YR7/3	クサリレキ多量	
62	土師器	皿	土坑3386	12.6	2.0		10YR8/2	精良	
63	黒色土器	椀	土坑3386	13.6	(5.5)		2.5YR6/6 外面下半 N3/0～N5/0	1mm以下の長石・石英・クサリレキ	A類
64	黒色土器	甕	土坑3386	21.8	(10.6)		体部上半 N3/0 下半 10YR6/3～4/3	精良	A類

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
65	土師器	皿	溝5058	9.4	1.2		7.5YR7/4	1mm以下の長石・石英・クサリレキ少量	
66	土師器	皿	溝5058	9.6	1.5		2.5Y8/1	2mm以下の長石少量	
67	土師器	皿	溝5058	9.8	1.6		2.5Y8/1	クサリレキ少量	
68	土師器	皿	溝5058	9.8	1.5		10YR6/1	クサリレキ少量	
69	土師器	皿	溝5058	10.4	1.6		10YR7/1	精良	
70	土師器	皿	溝5058	10.6	2.0		7.5YR8/3	クサリレキ多量	
71	土師器	台付皿	溝5058		(3.4)	11.2	10YR8/2	クサリレキ少量	
72	黒色土器	椀	溝5058	14.6	(4.4)		N2/0		B類
73	須恵器	鉢	溝5058		(2.5)	5.8	N5/0	φ2mm以下の長石・石英	
74	土師器	皿	流路3400	12.4	1.5		7.5YR8/1	クサリレキ	内面ハケ目
75	土師器	皿	流路3400	12.5	1.5		10YR8/2	クサリレキ	内面ハケ目
76	土師器	皿	流路3400	13.4	(2.3)		10YR7/3	石英・クサリレキ	
77	土師器	皿	流路3400	14.3	2.1		10YR7/3	雲母・クサリレキ	
78	土師器	皿	流路3400	14.9	2.2		10YR7/2	雲母・クサリレキ	内面ハケ目
79	土師器	皿	流路3400	10.3	1.3		7.5YR7/2	クサリレキ少量	
80	土師器	皿	流路3400	12.5	1.1		7.5YR8/2		
81	土師器	杯A	流路3400	14.5	2.5		7.5YR7/4	石英・クサリレキ	
82	土師器	皿	流路3400	9.5～10.2	1.9		7.5YR8/2		
83	土師器	皿	流路3400	11.0	1.3		10YR8/1	石英・チャート	
84	土師器	皿	流路3400	11.0	1.3		2.5Y8/1	石英・チャート	
85	土師器	皿	流路3400	11.0	1.5		10YR8/2	石英	
86	土師器	杯B	流路3400		(4.5)	6.0	10YR7/2	クサリレキ・チャート	
87	黒色土器	椀	流路3400	14.7～15.0	5.0	8.6	内 N1.5/0 外 10YR6/1～6/3	雲母・φ1mm以下の石英・チャート	A類
88	黒色土器	椀	流路3400	14.7	5.1	6.4	内 N1.5/0 外 7.5YR5/3～5/1	雲母・φ1mm以下のチャート	A類
89	黒色土器	椀	流路3400	15.3	5.4	7.2	内 N1.5/0 外 7.5YR8/4	クサリレキ・φ1mm以下のチャート	A類
90	黒色土器	椀	流路3400	15.9	4.8	6.2	N1.5/0	雲母	B類
91	須恵器	杯蓋	流路3400	14.0	(1.5)		5Y7/1		転用硯か
92	須恵器	杯蓋	流路3400	15.6	(1.3)		N6/0	φ1mm以下の長石少量	
93	須恵器	杯A	流路3400	11.5	4.4		内 N5/0 外 N7/0	φ2mm以下の長石・黒色粒	
94	須恵器	杯A	流路3400	12.4	3.2		7.5Y6/1	φ0.5mm以下の長石・黒色粒	
95	須恵器	杯A	流路3400	12.7	3.5		5Y7/1	黒色粒少量	
96	須恵器	杯A	流路3400	15.6	4.2		5Y7/1	黒色粒少量	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
97	須恵器	杯B	流路3400	15.2	4.3	12.0	内 N7/0 外 N6/0～5/0	φ2mm以下の長石・石英	
98	須恵器	杯B	流路3400	16.0	4.0	9.0	内 N6/1 外 N5/0	φ3mm以下の石英・チャート	
99	須恵器	椀	流路3400	13.0	4.6	5.7	内・外 N5/0 断 7.5YR4/2	φ2mm以下の長石・石英	
100	須恵器	椀	流路3400	14.6	4.6	5.9	内 2.5Y6/3 外 2.5Y6/1～4/1 断 2.5Y7/1	φ1mm以下の長石・石英	
101	須恵器	壷	流路3400	4.0	10.6	4.0	内・外 N5/0 断 N7/0	φ1mm以下の長石・石英	
102	須恵器	壷	流路3400	7.0	16.5	6.0～6.5	5PB7/1	φ1mm以下の長石・石英・黒色粒	
103	須恵器	壷	流路3400		(4.5)	4.2	N6/0	黒色粒	
104	須恵器	壷	流路3400		(10.0)	9.0	内 7.5Y6/1 外 2.5Y6/2	φ2mm以下の石英・チャート・黒色粒	
105	須恵器	平瓶	流路3400		(8.5)		内 N4/0 外 N6/0		
106	須恵器	平瓶	流路3400		(8.9)	8.0	内 N5/0 断 10YR4/2	φ1mm以下の長石・石英・黒色粒	
107	須恵器	壷	流路3400	20.0	(5.7)		内・外 N4/0～3/0 断 2.5Y6/1	φ5mm以下の長石・石英	ヘラ記号
108	緑釉陶器	椀	流路3400		(2.6)	8.0	胎 7.5Y7/1 釉 7.5Y6/2		
109	緑釉陶器	椀	流路3400	14.8	5.0		内 5Y4/2 外 5Y4/1　断 5Y5/1	黒色粒	
110	緑釉陶器	椀	流路3400		(2.9)	6.7	釉 2.5Y5/2		
111	灰釉陶器	椀	流路3400	13.8	(4.2)		胎 5Y7/1 釉 5Y6/2		
112	灰釉陶器	壷	流路3400		(11.5)	4.2	内・断 N8/0 外 N7/0～2.5GY5/1	φ5mm以下の長石・黒色粒	
113	土師器	皿	溝2235	8.8	1.6		7.5YR7/3	雲母・赤色粒	
114	土師器	皿	溝2235	8.8	1.5		10YR8/2	長石少量	
115	土師器	皿	溝2235	9.0	1.1		7.5YR7/3	雲母・赤色粒	
116	土師器	皿	溝2235	9.0	1.6		10YR8/2	長石少量・粒子細かい	
117	土師器	皿	溝2235	9.0	1.9		7.5YR7/3	雲母少量・赤色粒	
118	土師器	皿	溝2235	9.0	1.4		10YR7/3	雲母・赤色粒	
119	土師器	皿	溝2235	9.2	1.6		10YR8/2	粒子細かい	
120	土師器	皿	溝2235	9.4	1.5		10YR7/3	雲母・赤色粒	
121	土師器	皿	溝2235	9.6	1.2		10YR8/3	φ1mm以下の長石・雲母少量	
122	土師器	皿	溝2235	12.2	2.8		5YR7/6	雲母少量・赤色粒多量	
123	土師器	皿	溝2235	12.6	2.2		2.5Y8/1	やや粗い、長石・石英・チャート多量・雲母	
124	土師器	皿	溝2235	12.8	2.4		7.5YR7/4	雲母・赤色粒少量	
125	土師器	皿	溝2235	12.8	2.3		7.5YR8/2	雲母少量・赤色粒・φ1mm以下の長石・石英	
126	土師器	皿	溝2235	12.8	2.8		2.5Y8/3	雲母少量・白色砂粒	
127	土師器	皿	溝2235	13.0	2.5		10YR8/2	赤色粒	
128	土師器	皿	溝2235	13.0	2.4		7.5YR7/3	雲母・赤色粒	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
129	土師器	皿	溝2235	13.2	2.7		7.5YR8/4	赤色粒少量	
130	土師器	皿	溝2235	13.4	2.5		10YR8/3	雲母・赤色粒	
131	土師器	皿	溝2235	13.5	2.7		7.5YR7/4	雲母・赤色粒多量	
132	土師器	皿	溝2235	13.8	2.5		10YR7/4	粒子密	
133	土師器	皿	溝2235	13.8	2.6		7.5YR7/3	雲母・赤色粒・φ1mm以下の長石・石英	
134	土師器	皿	溝2235	13.9	2.6		7.5YR8/4	雲母・赤色粒	
135	土師器	皿	溝2235	14.2	2.5		2.5Y8/2	赤色粒極少量	
136	土師器	皿	溝2235	14.2	2.9		10YR7/4	雲母・赤色粒	
137	土師器	皿	溝2235	14.2	2.3		7.5YR7/4	赤色粒多量	
138	土師器	皿	溝2235	14.3	2.7		7.5YR7/4	赤色粒多量	
139	土師器	皿	溝2235	14.4	2.5		10YR7/4	雲母・赤色粒	
140	土師器	皿	溝2235	14.6	2.1		7.5YR7/4	赤色粒少量	
141	土師器	皿	溝2235	14.7	2.5		10YR8/4	雲母少量	
142	土師器	皿	溝2235	18.6	1.7		7.5YR7/6	雲母・赤色粒少量	
143	土師器	皿	溝2235	19.8	2.8		10YR7/2	φ1mm以下の長石・雲母	
144	土師器	甕	溝2235	26.0	(9.3)		内 5YR8/3 外 5YR7/6	赤色粒・長石・チャート	
145	土師器	羽釜	溝2235	23.0	(5.5)		10YR7/3	φ1mm前後の石英・長石・雲母少量	
146	瓦器	椀	溝2235	13.0	4.5	4.2	N5/0		樟葉
147	瓦器	椀	溝2235	13.6	4.9	4.8	内 N6/0　外 N5/0 断 N8/0	φ0.5mm以下の砂粒	樟葉
148	瓦器	椀	溝2235	13.7	4.7	4.8	内・外 N4/0 断 N8/0	φ0.5～1.5mmの砂粒	樟葉
149	瓦器	椀	溝2235	13.8	4.6	4.4	内 N5/0　外 N6/0 断 N8/0	φ0.5mmの砂粒	樟葉
150	瓦器	椀	溝2235	13.9～14.5	5.0	5.2	N5/0		樟葉
151	瓦器	椀	溝2235	14.6	4.7	6.2	内・外 N5/0 断 N8/0		樟葉　二次焼成か
152	瓦器	椀	溝2235	13.0	4.6	4.8	N5/0		樟葉
153	瓦器	椀	溝2235	13.8	4.8	4.8	N5/0		樟葉
154	瓦器	椀	溝2235	13.8	4.5	6.6	N5/0		樟葉
155	瓦器	椀	溝2235	13.9	4.7	5.4	内・外 N5/0 断 N8/0	φ0.5～1mmの砂粒	樟葉
156	瓦器	椀	溝2235	14.0	4.7	4.0～4.5	N5/0		樟葉
157	瓦器	椀	溝2235	14.2	4.8	4.9	内・外 N5/0 断 N8/0	φ1mmの砂粒	樟葉
158	瓦器	椀	溝2235	14.6	4.6	5.6	内 N6/1　外 N5/0 断 N8/0	φ0.5mmの砂粒	樟葉
159	瓦器	椀	溝2235	14.7	5.2	4.9	内・外 N5/0 断 2.5YR8/2		樟葉
160	瓦器	椀	溝2235	15.2	4.7	4.8	N5/0		樟葉

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
161	瓦器	椀	溝2235	14.0	5.0	5.6	N5/0		大和
162	瓦器	椀	溝2235	14.2	4.8	5.7	5YR8/2		大和
163	瓦器	椀	溝2235	14.3	5.1	6.4	2.5Y8/1	φ0.5～1mmの砂粒	大和
164	瓦器	椀	溝2235	14.4	5.5	4.6	N4/0		大和
165	瓦器	椀	溝2235	14.0	4.8	5.3	N5/0		大和
166	瓦器	椀	溝2235	14.2	5.0	4.6	N5/0		折衷
167	瓦器	椀	溝2235	13.8	4.9	4.8	N6/0		和泉
168	瓦器	皿	溝2235	9.0	1.7		N5/0		
169	瓦器	皿	溝2235	10.0	1.7		N5/0		
170	瓦器	皿	溝2235	9.6	1.5		N5/0		
171	土師器	皿	溝3185下層	8.2	1.3		2.5Y7/3	雲母少量	
172	土師器	皿	溝3185下層	8.8	1.3		5YR8/4	赤色粒少量	
173	土師器	皿	溝3185下層	8.8	1.4		2.5Y7/3	雲母・赤色粒	
174	土師器	皿	溝3185下層	8.9	1.4		2.5Y6/6	赤色粒少量・雲母	
175	土師器	皿	溝3185下層	8.9	1.4		10YR5/1	雲母	
176	土師器	皿	溝3185下層	9.0	1.4		10YR7/2	雲母・赤色粒	
177	土師器	皿	溝3185下層	9.0	1.4		7.5YR8/3	赤色粒少量・雲母	
178	土師器	皿	溝3185下層	9.0	1.4		10YR7/2	赤色粒少量	
179	土師器	皿	溝3185下層	9.0	1.5		2.5Y7/2	雲母・赤色粒	
180	土師器	皿	溝3185下層	9.1	1.5		2.5Y7/2	雲母・赤色粒	
181	土師器	皿	溝3185下層	9.2	1.2		10YR8/2	赤色粒	
182	土師器	皿	溝3185下層	9.2	1.2		2.5Y7/2	雲母・長石・チャート	
183	土師器	皿	溝3185下層	9.2	1.3		2.5Y7/2	雲母・長石少量	
184	土師器	皿	溝3185下層	9.3	1.5		7.5YR7/4	赤色粒	
185	土師器	皿	溝3185下層	9.3	1.3		2.5Y7/2	赤色粒少量・雲母	
186	土師器	皿	溝3185下層	9.6	1.4		10YR7/2	赤色粒少量・雲母	
187	土師器	皿	溝3185下層	10.3	1.5		2.5Y7/2	雲母・赤色粒	
188	土師器	皿	溝3185下層	10.4	1.5		2.5Y7/2	赤色粒少量・雲母	
189	土師器	皿	溝3185下層	8.5	1.5		7.5YR7/4	雲母	
190	土師器	皿	溝3185下層	8.6	1.5		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
191	土師器	皿	溝3185下層	8.7	1.8		10YR8/3	雲母・赤色粒少量	
192	土師器	皿	溝3185下層	8.8	1.6		2.5Y7/2	赤色粒少量・雲母	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
193	土師器	皿	溝3185下層	8.8	1.5		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
194	土師器	皿	溝3185下層	8.8	1.7		2.5Y7/1	雲母多量	
195	土師器	皿	溝3185下層	8.8	1.7		10YR7/1～7/2	雲母少量	
196	土師器	皿	溝3185下層	8.9	1.5		2.5Y7/3	赤色粒少量	
197	土師器	皿	溝3185下層	8.9	1.5		2.5Y8/2	赤色粒多量	
198	土師器	皿	溝3185下層	8.9	1.7		10YR8/2	雲母少量	粘土板結合痕
199	土師器	皿	溝3185下層	9.0	1.7		2.5Y7/2	赤色粒少量・雲母	
200	土師器	皿	溝3185下層	9.0	1.5		10YR8/2	雲母・赤色粒少量	
201	土師器	皿	溝3185下層	9.0	1.8		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	灯明
202	土師器	皿	溝3185下層	9.0	1.5		10YR7/3	雲母・長石・チャート	
203	土師器	皿	溝3185下層	9.3	1.3		10YR7/4	赤色粒少量	
204	土師器	皿	溝3185下層	9.3	1.5		7.5YR7/4	雲母少量	
205	土師器	皿	溝3185下層	9.3	1.6		10YR6/2	雲母	
206	土師器	皿	溝3185下層	9.4	1.6		2.5Y7/1	赤色粒少量・雲母	底部外面粘土板結合痕
207	土師器	皿	溝3185下層	9.4	1.9		10YR7/3	雲母・赤色粒	
208	土師器	皿	溝3185下層	9.4	1.5		7.5YR7/3	雲母	
209	土師器	皿	溝3185下層	9.4	2.0		10YR8/2	雲母・チャート	内面一定方向のハケ
210	土師器	皿	溝3185下層	9.7	1.7		10YR7/3～7/2	赤色粒少量・雲母	
211	土師器	皿	溝3185下層	10.2	1.8		10YR7/2	雲母・赤色粒	
212	土師器	皿	溝3185下層	8.9	1.7		2.5Y7/1	赤色粒少量・雲母	
213	土師器	皿	溝3185下層	9.2	1.7		2.5Y7/3	雲母・赤色粒	
214	土師器	皿	溝3185下層	10.1	1.6		10YR7/2	赤色粒	
215	土師器	皿	溝3185下層	13.1	2.1		10YR7/3	雲母・赤色粒	
216	土師器	皿	溝3185下層	13.1	2.5		2.5Y7/2	赤色粒少量	
217	土師器	皿	溝3185下層	13.4	2.5		10YR8/2	雲母少量	
218	土師器	皿	溝3185下層	13.8	2.3		7.5YR8/3	赤色粒	
219	土師器	皿	溝3185下層	13.9	2.6		7.5YR6/2	赤色粒少量・長石	
220	土師器	皿	溝3185下層	13.9	2.3		10YR7/4	長石少量	
221	土師器	皿	溝3185下層	13.9	2.8		10YR8/3	密	
222	土師器	皿	溝3185下層	14.2	2.2		10YR7/3	赤色粒少量	
223	土師器	皿	溝3185下層	14.2	2.7		2.5Y7/2	雲母	内面やや粗いハケ
224	土師器	皿	溝3185下層	14.4	2.7		7.5YR8/4	赤色粒・雲母少量	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
225	土師器	皿	溝3185下層	14.5	2.3		7.5YR7/3	雲母	
226	土師器	皿	溝3185下層	14.5	2.5		7.5YR7/3	赤色粒少量	
227	土師器	皿	溝3185下層	14.5	2.7		10YR7/3	チャート少量	灯明
228	土師器	皿	溝3185下層	14.5	2.5		7.5YR7/4	雲母多量	灯明
229	土師器	皿	溝3185下層	14.5	2.3		10YR7/3	長石少量	灯明
230	土師器	皿	溝3185上層	14.7	2.5		7.5YR8/3	赤色粒・雲母	
231	土師器	皿	溝3185下層	14.8	2.8		10YR8/2	長石少量	
232	土師器	皿	溝3185下層	15.0	2.7		10YR8/3	雲母少量	
233	土師器	皿	溝3185下層	13.6	2.9		10YR8/3	赤色粒少量・雲母・長石	
234	土師器	皿	溝3185下層	13.7	2.7		10YR8/2	雲母・赤色粒	
235	土師器	皿	溝3185下層	13.8	2.9		2.5Y8/3	雲母少量	
236	土師器	皿	溝3185下層	13.8	2.7		内 7.5YR6/2 外 10YR4/1	雲母	灯明
237	土師器	皿	溝3185下層	14.0	2.9		7.5YR7/4	赤色粒少量・雲母	
238	土師器	皿	溝3185下層	14.0	2.8		10YR7/2	雲母	
239	土師器	皿	溝3185下層	14.0	2.7		10YR7/3	雲母・赤色粒	
240	土師器	皿	溝3185下層	14.1	2.9		2.5Y7/3	密	
241	土師器	皿	溝3185下層	14.1	2.9		7.5YR8/3	長石・石英	
242	土師器	皿	溝3185下層	14.3	2.7		10YR8/2	長石・チャート	
243	土師器	皿	溝3185下層	14.3	2.5		10YR8/3	φ1mm以下のチャート少量	
244	土師器	皿	溝3185下層	14.5	2.8		7.5YR7/2	雲母・赤色粒	
245	土師器	皿	溝3185下層	14.7	3.1		10YR7/3	赤色粒・雲母	灯明
246	土師器	皿	溝3185下層	14.9	2.5		10YR8/2	密	
247	土師器	皿	溝3185下層	15.2	2.8		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
248	土師器	皿	溝3185下層	14.1	2.7		10YR8/3	赤色粒少量・雲母	
249	土師器	杯	溝3185下層	15.5	4.0		5YR6/6	φ2mm以下の長石・石英	
250	土師器	台付皿	溝3185下層	8.4	3.1	5.2	7.5YR7/4	赤色粒少量	
251	土師器	台付皿	溝3185下層		(2.9)	5.2	2.5Y7/2		
252	土師器	台付皿	溝3185下層		(3.9)	5.8	10YR7/3	赤色粒	
253	土師器	台付皿	溝3185下層		(2.8)	8.6	7.5YR7/3	雲母・赤色粒	
254	白色土器	高杯	溝3185下層		(3.5)		2.5Y8/1		
255	瓦器	椀	溝3185下層	13.9	4.8	5.6	N3/0		樟葉
256	瓦器	椀	溝3185下層	13.8	5.3	5.3	N4/0		樟葉

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
257	瓦器	椀	溝3185下層	13.8	5.0	5.5	N3/0～4/0		樟葉
258	瓦器	椀	溝3185下層	14.0	5.2	5.6	N3/0		樟葉
259	瓦器	椀	溝3185下層	13.8	5.0	5.2	N3/0		樟葉
260	瓦器	椀	溝3185下層	14.0	5.1	5.1	N4/0		樟葉
261	瓦器	椀	溝3185下層	14.5	5.6	4.6	N3/0		樟葉
262	瓦器	椀	溝3185下層	14.0	5.4	5.2	N3/0		樟葉
263	瓦器	椀	溝3185下層	14.1	4.9	5.0	N4/0		樟葉
264	瓦器	椀	溝3185下層	14.4	5.2	5.5	N4/0		樟葉
265	瓦器	椀	溝3185下層	14.7	5.2	5.1	N4/0 口縁部 2.5Y8/1		樟葉
266	瓦器	椀	溝3185下層	14.8	4.8	5.4	N4/0		樟葉
267	瓦器	椀	溝3185下層	13.6	5.1	5.4	N4/0		大和
268	瓦器	椀	溝3185下層	13.8	4.5	5.3	N5/0		大和
269	瓦器	椀	溝3185下層	14.1	5.2	5.6	N3/0		大和
270	瓦器	椀	溝3185下層	14.8	5.2	5.7	N4/0		大和
271	瓦器	椀	溝3185下層	14.6	5.6	5.7	N4/0		大和
272	瓦器	椀	溝3185下層	14.8	5.5	5.4	N4/0		大和
273	瓦器	椀	溝3185下層	14.6	5.2	5.2	N4/0 口縁部 N8/0		大和
274	瓦器	椀	溝3185下層	15.2	5.2	5.0	N4/0		大和
275	瓦器	椀	溝3185下層	14.6	4.9	6.1	N4/0		大和
276	瓦器	椀	溝3185下層	13.9	5.5	4.4	N4/0		折衷
277	瓦器	椀	溝3185下層	13.6	5.0	5.0	N4/0～5/0		折衷
278	瓦器	椀	溝3185下層	14.3	5.1	5.2	N3/0		折衷
279	瓦器	椀	溝3185下層	15.0	5.1	6.1	N3/0～4/0		折衷
280	瓦器	椀	溝3185下層	14.2	4.7	5.2	N3/0		折衷
281	瓦器	椀	溝3185下層	13.7～ 14.8	4.9	5.1	N4/0		折衷
282	瓦器	椀	溝3185下層	14.0	5.0	4.8	N4/0		不明
283	瓦器	椀	溝3185下層	14.0	5.2	5.1	N4/0		和泉
284	瓦器	皿	溝3185下層	9.0	1.6		N4/0		
285	瓦器	皿	溝3185下層	9.4	1.9		N3/0		
286	瓦器	皿	溝3185下層	9.5	1.8		N3/0		
287	輸入白磁	椀	溝3185下層	16.8	6.1	6.4	胎 5Y7/1 釉 7.5Y7/1		
288	土師器	皿	溝3185上層	8.3	1.5		7.5YR7/6	雲母・赤色粒少量	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
289	土師器	皿	溝3185上層	8.3	1.3		5YR7/6	赤色粒	
290	土師器	皿	溝3185上層	8.4	1.4		5YR7/6	赤色粒	
291	土師器	皿	溝3185上層	8.4	1.3		5YR7/6	赤色粒	
292	土師器	皿	溝3185上層	8.5	1.4		5YR7/6	赤色粒	
293	土師器	皿	溝3185上層	8.5	1.5		5YR7/6	赤色粒	
294	土師器	皿	溝3185上層	8.5	1.3		7.5YR8/4	赤色粒	
295	土師器	皿	溝3185上層	8.6	1.1		5YR7/6	赤色粒	
296	土師器	皿	溝3185上層	8.7	1.3		10YR7/2	雲母少量・赤色粒	
297	土師器	皿	溝3185上層	8.7	1.4		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
298	土師器	皿	溝3185上層	8.8	1.0		5YR7/6	赤色粒多量	
299	土師器	皿	溝3185上層	8.8	1.4		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
300	土師器	皿	溝3185上層	9.0	1.4		10YR8/3	赤色粒	
301	土師器	皿	溝3185上層	9.0	1.5		7.5YR7/3	雲母・赤色粒	
302	土師器	皿	溝3185上層	9.0	1.5		7.5YR8/2	雲母・赤色粒	
303	土師器	皿	溝3185上層	9.0	1.4		2.5Y7/2	雲母・赤色粒	
304	土師器	皿	溝3185上層	9.1	1.5		2.5Y7/2	雲母・赤色粒	
305	土師器	皿	溝3185上層	9.2	1.5		2.5Y8/2	雲母・赤色粒	底部外面粘土板結合痕
306	土師器	皿	溝3185上層	9.2	1.6		10YR8/2	雲母	底部外面粘土板結合痕
307	土師器	皿	溝3185上層	9.2	1.3		7.5YR8/4	雲母・赤色粒	
308	土師器	皿	溝3185上層	9.2～8.7	1.5		5YR7/4	赤色粒	
309	土師器	皿	溝3185上層	9.2	1.5		2.5Y8/2	雲母・赤色粒	
310	土師器	皿	溝3185上層	9.2	1.8		2.5Y8/3	赤色粒少量・雲母	
311	土師器	皿	溝3185上層	9.2	1.7		7.5YR8/4	雲母・赤色粒	
312	土師器	皿	溝3185上層	9.4	1.5		7.5YR7/4	赤色粒	
313	土師器	皿	溝3185上層	9.4	1.4		7.5YR8/4	雲母・赤色粒・長石	
314	土師器	皿	溝3185上層	9.4	1.5		7.5YR8/2	赤色粒少量・長石・チャート	
315	土師器	皿	溝3185上層	9.4	1.4		10YR8/1	雲母・赤色粒	
316	土師器	皿	溝3185上層	9.4	1.7		5YR8/2	雲母	
317	土師器	皿	溝3185上層	9.6	1.6		2.5Y8/2	雲母・赤色粒	
318	土師器	皿	溝3185上層	8.4～8.8	1.8		5YR7/4	雲母・赤色粒	
319	土師器	皿	溝3185上層	8.7	1.7		7.5YR8/3	赤色粒少量・雲母・長石	
320	土師器	皿	溝3185上層	8.8	1.7		10YR8/3		

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
321	土師器	皿	溝3185上層	8.8	1.5		2.5Y7/2	雲母・赤色粒	
322	土師器	皿	溝3185上層	8.8	1.6		2.5Y8/2	雲母少量	
323	土師器	皿	溝3185上層	8.9～9.3	2.0		10YR8/2	雲母・赤色粒	
324	土師器	皿	溝3185上層	8.9	1.7		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
325	土師器	皿	溝3185上層	8.9	1.6		2.5Y8/2	雲母・赤色粒	灯明
326	土師器	皿	溝3185上層	9.0	1.8		7.5YR8/2	赤色粒少量	
327	土師器	皿	溝3185上層	9.0	1.7		10YR7/2	雲母・赤色粒	
328	土師器	皿	溝3185上層	9.0	1.7		5YR7/4	雲母・赤色粒	
329	土師器	皿	溝3185上層	9.1	1.9		7.5YR8/3	赤色粒多量・雲母	
330	土師器	皿	溝3185上層	9.2	1.7		10YR7/3	雲母少量	
331	土師器	皿	溝3185上層	9.2	1.9		7.5YR7/6	雲母・赤色粒少量	
332	土師器	皿	溝3185上層	9.7	1.6		2.5Y8/2	雲母・赤色粒	
333	土師器	皿	溝3185上層	9.3	1.7		2.5Y8/2	雲母・赤色粒	
334	土師器	皿	溝3185上層	9.3	1.8		10YR7/3	雲母・赤色粒少量	
335	土師器	皿	溝3185上層	13.4	2.6		10YR7/3	雲母・赤色粒少量	
336	土師器	皿	溝3185上層	13.6	2.5		10YR7/3	赤色粒少量	
337	土師器	皿	溝3185上層	13.6	2.5		10YR7/1～7/3	赤色粒少量	
338	土師器	皿	溝3185上層	13.6	2.3		7.5YR7/3	雲母・赤色粒	
339	土師器	皿	溝3185上層	13.6	2.6		7.5YR7/3	赤色粒少量・雲母	
340	土師器	皿	溝3185上層	13.8	2.3		7.5YR8/4	赤色粒・雲母	
341	土師器	皿	溝3185上層	13.9～14.5	2.5		10YR8/2	雲母少量	
342	土師器	皿	溝3185上層	13.9	2.5		7.5YR7/4	赤色粒少量	
343	土師器	皿	溝3185上層	13.9	2.7		2.5Y8/1	赤色粒少量	
344	土師器	皿	溝3185上層	14.0	2.0		5YR8/3	雲母少量	
345	土師器	皿	溝3185上層	14.0	2.6		10YR8/2	雲母少量	
346	土師器	皿	溝3185上層	14.1	2.5		10YR8/2	雲母少量	
347	土師器	皿	溝3185上層	14.1	2.3		5YR7/4	赤色粒・雲母	
348	土師器	皿	溝3185上層	14.1	2.5		10YR8/2	チャート	
349	土師器	皿	溝3185上層	14.2	2.7		7.5YR8/2	雲母	
350	土師器	皿	溝3185上層	14.4	2.6		10YR8/3	雲母・赤色粒	
351	土師器	皿	溝3185上層	14.4	2.5		2.5Y8/2～7/2	雲母	
352	土師器	皿	溝3185上層	14.5	2.4		2.5Y8/2	赤色粒少量・雲母	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
353	土師器	皿	溝3185上層	14.5	2.8		7.5YR8/3	赤色粒少量・雲母	
354	土師器	皿	溝3185上層	14.6	2.4		2.5Y8/2	雲母少量	
355	土師器	皿	溝3185上層	14.7	2.6		10YR8/2	赤色粒・雲母少量	
356	土師器	皿	溝3185上層	14.8	2.5		2.5Y7/2	雲母・長石・石英	
357	土師器	皿	溝3185上層	14.9	2.5		7.5YR8/4	赤色粒少量・雲母	
358	土師器	皿	溝3185上層	14.9	2.5		10YR7/3	長石・石英	
359	土師器	皿	溝3185上層	13.6	2.8		10YR7/3	φ3mmの長石・チャート	
360	土師器	皿	溝3185上層	13.7～14.7	2.8		7.5YR8/3	雲母少量・赤色粒	
361	土師器	皿	溝3185上層	14.0	2.7		10YR8/2	雲母・赤色粒	
362	土師器	皿	溝3185上層	14.1	3.1		10YR7/2	雲母	
363	土師器	皿	溝3185上層	14.1	2.7		2.5Y8/2	φ1mm以下の長石	
364	土師器	皿	溝3185上層	14.2	2.7		10YR8/2～8/3	赤色粒少量	
365	土師器	皿	溝3185上層	14.2	2.9		2.5Y7/2	赤色粒少量・雲母	
366	土師器	皿	溝3185上層	14.2	2.9		10YR8/2	赤色粒・チャート少量	
367	土師器	皿	溝3185上層	14.3	3.1		10YR7/3	赤色粒少量	
368	土師器	皿	溝3185上層	14.3	2.8		2.5Y8/1	赤色粒少量・雲母	
369	土師器	皿	溝3185上層	14.3	2.8		7.5YR7/3	赤色粒・雲母	
370	土師器	皿	溝3185上層	14.4	2.5		10YR8/2	赤色粒少量・雲母	
371	土師器	皿	溝3185上層	14.5	2.8		10YR8/3	赤色粒	
372	土師器	皿	溝3185上層	14.8	3.2		10YR8/2	雲母・赤色粒	
373	土師器	皿	溝3185上層	14.8	3.0		7.5YR8/3～8/4	赤色粒少量・雲母	
374	土師器	皿	溝3185上層	14.9	3.0		10YR8/2	雲母・赤色粒	
375	土師器	皿	溝3185上層	15.0	2.7		2.5Y7/2	赤色粒少量・雲母	
376	土師器	皿	溝3185上層	15.4	2.9		2.5Y8/2	赤色粒少量	
377	土師器	皿	溝3185上層	14.4	3.0		10YR7/4	雲母・赤色粒	
378	土師器	皿	溝3185上層	14.4	3.3		10YR7/2	赤色粒少量・雲母	
379	土師器	皿	溝3185上層	14.8	3.1		10YR7/3	赤色粒少量・雲母・長石・チャート	
380	土師器	皿	溝3185上層	14.8	3.8		7.5YR7/4	赤色粒極少量	
381	土師器	皿	溝3185上層	8.4	1.2		5YR8/4	赤色粒・長石	底部糸切り、ヘラ記号
382	土師器	台付皿	溝3185上層	9.0	2.7	4.8	10YR8/2	赤色粒少量	
383	土師器	台付皿	溝3185上層	8.0	2.7	4.9	10YR7/3	雲母・赤色粒	
384	土師器	台付皿	溝3185上層	9.0	3.3	5.2	10YR8/2	雲母・赤色粒	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
385	土師器	台付皿	溝3185上層	9.2	4.1	7.0	10YR7/4	雲母・赤色粒	
386	土師器	台付皿	溝3185上層	12.0	4.0	7.0	10YR7/3	赤色粒	
387	土師器	台付皿	溝3185上層		(2.9)	5.0	2.5Y7/2	雲母・赤色粒少量	
388	瓦器	椀	溝3185上層	13.9	5.2	5.7	N3/0		楠葉
389	瓦器	椀	溝3185上層	13.6	4.8	5.0	N3/0 一部N8/0		楠葉
390	瓦器	椀	溝3185上層	13.8	4.5	5.5	N4/0		楠葉
391	瓦器	椀	溝3185上層	13.9	5.1	5.4	N4/0		楠葉
392	瓦器	椀	溝3185上層	14.0	5.0	5.0	N3/0		楠葉
393	瓦器	椀	溝3185上層	14.8	5.1	5.8	N3/0		楠葉
394	瓦器	椀	溝3185上層	14.0	5.1	5.0	N3/0 一部 10YR7/2		楠葉
395	瓦器	椀	溝3185上層	14.0	5.3	5.5	N4/0		楠葉
396	瓦器	椀	溝3185上層	14.0～ 15.0	5.5	5.5	N5/0 断 2.5Y8/1		楠葉
397	瓦器	椀	溝3185上層	14.0	5.2	4.9	N3/0 一部 N7/0		楠葉
398	瓦器	椀	溝3185上層	14.1	4.9	5.5	N3/0		楠葉
399	瓦器	椀	溝3185上層	14.0	5.5	5.6	N4/0		楠葉
400	瓦器	椀	溝3185上層	14.3	5.5	5.4	N5/0		楠葉
401	瓦器	椀	溝3185上層	14.3	5.2	4.9	N3/0		楠葉
402	瓦器	椀	溝3185上層	14.4	6.1	6.2	N4/0		楠葉
403	瓦器	椀	溝3185上層	14.6	5.7	5.1	N5/0～4/0		楠葉
404	瓦器	椀	溝3185上層	14.6	5.0	5.4	N5/0～4/0		楠葉
405	瓦器	椀	溝3185上層	14.6	5.2	5.3	N3/0		楠葉
406	瓦器	椀	溝3185上層	14.7	5.3	5.8	N5/0～4/0		楠葉
407	瓦器	椀	溝3185上層	14.9	5.3	5.6	N3/0		楠葉
408	瓦器	椀	溝3185上層	13.6	4.3	6.1	N3/0		大和
409	瓦器	椀	溝3185上層	14.0	4.6	5.3	N5/0～4/0		大和
410	瓦器	椀	溝3185上層	13.4	5.0	5.2	N4/0		大和
411	瓦器	椀	溝3185上層	13.7	4.8	5.0	N4/0		大和
412	瓦器	椀	溝3185上層	14.0	4.9	4.9	N4/0		大和
413	瓦器	椀	溝3185上層	14.3	4.7	5.4	N4/0 一部 10YR8/1～8/2		大和
414	瓦器	椀	溝3185上層	13.8	5.3	6.8	N4/0		大和
415	瓦器	椀	溝3185上層	14.0	5.2	5.7	N4/0		大和
416	瓦器	椀	溝3185上層	14.2	5.0	4.9	N5/0		大和

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
417	瓦器	椀	溝3185上層	14.4	5.0	5.6	N4/0 一部 N8/0		大和
418	瓦器	椀	溝3185上層	14.3	5.1	4.8	N3/0		大和
419	瓦器	椀	溝3185上層	14.5	5.3	5.5	N3/0		大和
420	瓦器	椀	溝3185上層	14.6	5.1	5.8	N4/0 断 N8/0		大和
421	瓦器	椀	溝3185上層	14.4	5.3	5.0	N3/0		大和
422	瓦器	椀	溝3185上層	14.6	5.6	4.9	N4/0		大和
423	瓦器	椀	溝3185上層	14.6	4.9	5.7	N4/0		大和
424	瓦器	椀	溝3185上層	14.2	5.1	5.1	N3/0		折衷
425	瓦器	椀	溝3185上層	13.8	5.1	5.2	N4/0		折衷
426	瓦器	椀	溝3185上層	13.6	4.8	5.0	N3/0		折衷
427	瓦器	椀	溝3185上層	13.8	5.3	5.6	N4/0		折衷
428	瓦器	椀	溝3185上層	14.8	5.0	5.6	N3/0		折衷
429	瓦器	椀	溝3185上層	14.6	4.9	5.4	N4/0		折衷
430	瓦器	椀	溝3185上層	15.2	5.6	6.3	N3/0		折衷
431	瓦器	椀	溝3185上層	14.8	4.9	5.5	N4/0		折衷
432	瓦器	椀	溝3185上層	14.4	5.0	4.7	2.5Y8/1～N5/0		和泉
433	瓦器	椀	溝3185上層	14.8	5.0	4.5	N5/0		和泉
434	瓦器	椀	溝3185上層	15.0	5.2	4.7	N3/0		和泉
435	瓦器	椀	溝3185上層	14.8	5.5	5.1	N4/0		和泉
436	瓦器	椀	溝3185上層	15.0	4.8	4.5	N5/0		和泉
437	瓦器	椀	溝3185上層	15.4	5.1	4.5	N4/0		和泉
438	瓦器	椀	溝3185上層	15.6	5.5	5.5	N4/0		和泉
439	瓦器	椀	溝3185上層	14.4	5.2	4.7	N5/0～4/0 一部 N8/0		和泉
440	瓦器	椀	溝3185上層	15.1	5.5	4.1	2.5Y7/1～N4/0		和泉
441	瓦器	椀	溝3185上層	14.8	4.8	4.6	N5/0		和泉
442	瓦器	椀	溝3185上層	14.8	5.0	4.9	N4/0		和泉
443	瓦器	椀	溝3185上層	13.8	5.2	4.8	内・口縁部 N3/0 外 10YR8/2		讃岐か
444	瓦器	小椀	溝3185上層	8.0	2.4	3.8	N4/0		
445	瓦器	皿	溝3185上層	9.8	2.0		N3/0		
446	瓦器	皿	溝3185上層	9.0	2.0		N3/0		
447	瓦器	皿	溝3185上層	9.1	1.9		N4/0		
448	瓦器	皿	溝3185上層	9.4	1.9		N3/0		

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
449	瓦器	皿	溝3185上層	9.2	1.8		内・断面 N8/0 外 N3/0		
450	瓦器	皿	溝3185上層	9.6	2.3		N3/0		
451	瓦器	皿	溝3185上層	9.0	1.7		N4/0～3/0		
452	瓦器	皿	溝3185上層	9.9	1.6		N4/0		
453	瓦器	皿	溝3185上層	9.8	2.0		5YR8/2		胎土443(讃岐か)に類似
454	瓦器	皿	溝3185上層	10.0	2.1		N4/0		
455	輸入白磁	椀	溝3185上層	10.8	3.2	3.2	胎 2.5Y8/3 釉 2.5Y7/3		
456	輸入白磁	椀	溝3185上層	18.8	(5.9)		胎 2.5Y8/3 釉 2.5Y7/2		
457	輸入白磁	壷	溝3185上層	9.0	(3.7)		胎 N8/0 釉 10YR7/1		
458	輸入白磁	壷	溝3185上層		(7.0)	7.4	胎 2.5Y8/1 釉 2.5Y7/1		墨書
459	土師器	甕	溝3185上層	26.6	(8.0)		10YR4/2	φ1mmの長石・チャート	
460	土師器	羽釜	溝3185上層	22.5	(14.9)		7.5YR6/3	φ2mmの長石・チャート	
461	土師器	羽釜	溝3185上層	26.0	(27.0)		内 7.5YR8/2	長石・チャート	
462	山茶碗	皿	溝3185上層	10.0	2.7	4.9	N6/0	φ1mmの長石・石英	
463	須恵器	鉢	溝3185上層	20.0	6.2	8.3	5YR6/1		
464	須恵器	壷	溝3185上層		(11.8)	14.6	10YR7/1		
465	須恵器	甕	溝3185上層	30.6	(17.2)		N6/0	石英・長石	
466	須恵器	甕	溝3185上層	30.4	(27.5)		N5/0		
467	土師器	皿	溝3240	8.2	1.6		5YR7/4	雲母・赤色粒	
468	土師器	皿	溝3240	8.3	1.6		7.5YR8/4	雲母・赤色粒	
469	土師器	皿	溝3240	8.3	1.8		2.5Y8/1	長石・石英	
470	土師器	皿	溝3240	8.5	1.4		7.5YR8/3	雲母・赤色粒少量	
471	土師器	皿	溝3240	8.6	1.3		7.5YR8/4	雲母・赤色粒少量	
472	土師器	皿	溝3240	8.6	1.2		7.5YR8/4	赤色粒	
473	土師器	皿	溝3240	8.6	1.2		10YR7/3	雲母・赤色粒少量	
474	土師器	皿	溝3240	8.6	1.6		10YR7/3	雲母・赤色粒	
475	土師器	皿	溝3240	8.6	1.4		7.5YR7/4 ～10YR8/2	赤色粒多量・雲母	
476	土師器	皿	溝3240	8.8	1.3		7.5YR7/3	赤色粒多量・雲母	
477	土師器	皿	溝3240	9.0	1.6		10YR7/2	雲母・赤色粒	
478	土師器	皿	溝3240	9.2	1.3		10YR8/3	赤色粒	
479	土師器	皿	溝3240	9.2～8.8	1.5		10YR7/3	雲母少量	
480	土師器	皿	溝3240	9.2～9.7	1.6		7.5YR7/4	赤色粒少量・雲母	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
481	土師器	皿	溝3240	13.4	2.8		10YR8/2	赤色粒少量・雲母	
482	土師器	皿	溝3240	13.4	2.5		7.5YR8/4	雲母少量・赤色粒	
483	土師器	皿	溝3240	13.4	2.6		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
484	土師器	皿	溝3240	13.4～14.0	2.7		2.5Y7/2	雲母・赤色粒少量	
485	土師器	皿	溝3240	13.6	2.7		7.5YR7/4	雲母少量	
486	土師器	皿	溝3240	13.6	2.5		10YR7/3	雲母・赤色粒少量	
487	土師器	皿	溝3240	14.2	2.7		7.5YR7/3	雲母	
488	土師器	皿	溝3240	14.4	2.4		10YR8/2～2.5Y8/1	雲母少量	
489	土師器	皿	溝3240	8.8	2.3		10YR8/2	雲母少量・赤色粒	
490	瓦器	椀	溝3240	14.0	4.7	5.3	N4/0		楠葉
491	瓦器	椀	溝3240	13.3	4.6	5.3	内・外 N4/0 断 N8/0		楠葉
492	瓦器	椀	溝3240	13.5	4.7	4.6	N5/0		楠葉
493	瓦器	椀	溝3240	14.2	5.3	4.9	N5/0		楠葉
494	瓦器	椀	溝3240	13.8	4.5	6.2	内 N5/0　外 N4/0 断 N8/0		楠葉
495	瓦器	椀	溝3240	13.9	4.8	5.4	内 N4/0　外 N5/0 断 N8/0	φ0.5～1mmの砂粒	楠葉
496	瓦器	椀	溝3240	14.4	4.7	5.7	N4/0		楠葉
497	瓦器	椀	溝3240	14.0	4.7	4.7	内・外 N4/0 断 N8/0		楠葉
498	瓦器	椀	溝3240	14.7	5.3	5.9	内・外 N5/0	φ0.5～1mmの砂粒	楠葉
499	瓦器	椀	溝3240	14.8	5.2	4.6	N3/0		楠葉
500	瓦器	椀	溝3240	14.5	4.8	5.7	内・外 N5/0 断 N8/0		折衷
501	焼締陶器	甕	溝3240	35.0	(31.5)		内 7.5YR6/3 外 5YR4/3 釉 7.5Y6/3		常滑産
502	土師器	皿	土坑3182	8.5	1.4		7.5YR7/3	雲母多量・赤色粒	
503	土師器	皿	土坑3182	8.6	1.5		10YR7/3	雲母・赤色粒少量	
504	土師器	皿	土坑3182	8.6	1.3		7.5YR7/2	雲母・赤色粒少量	
505	土師器	皿	土坑3182	9.2	1.3		10YR7/2	雲母・長石	
506	土師器	皿	土坑3182	9.2	1.6		10YR7/4	雲母・赤色粒	
507	土師器	皿	土坑3182	9.4	1.7		10YR7/2	雲母少量・赤色粒少量	
508	土師器	皿	土坑3182	14.1	2.3		7.5YR8/2	φ1mm以下の長石少量	
509	瓦器	椀	土坑3182	13.4	4.7	5.2	N4/0		楠葉
510	瓦器	椀	土坑3182	14.0	4.5	5.2	内 N5/0　外 N3/0 断 N8/0		楠葉
511	瓦器	椀	土坑3182	14.2	4.9	5.2	N4/0		楠葉
512	瓦器	椀	土坑3182	14.2	4.9	5.6	内 N5/0　外 N4/0 断 N8/0	φ0.5～1mmの石英	楠葉

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
513	瓦器	椀	土坑3182	14.3～15.0	5.1	6.2	N4/0		樟葉
514	瓦器	椀	土坑3182	14.2	5.1	6.2	N4/0～5YR7/2		樟葉
515	瓦器	椀	土坑3182	14.5	5.0	4.8	内・外 N5/0 断 N8/0		樟葉
516	瓦器	椀	土坑3182	14.6	5.4	5.9	内 N3/0 外 N2/0 断 N8/0		樟葉
517	瓦器	椀	土坑3182	14.6	5.1	5.4	N4/0		樟葉
518	瓦器	椀	土坑3182	14.7	5.4	4.8	N3/0		樟葉
519	瓦器	椀	土坑3182	14.8	4.8	5.7	N4/0		樟葉
520	瓦器	椀	土坑3182	15.0	5.1	5.4	N4/0～8/0		樟葉
521	瓦器	椀	土坑3182	14.4	5.0	6.0	内 N4/0 外 N2/0 断 N8/0		折衷
522	瓦器	椀	土坑3182	15.5	4.7	4.8	内 N5/0 外 N4/0 断 2.5GY8/1		和泉
523	瓦質土器	羽釜	土坑3182	17.0	(10.5)		N3/0	φ1mm以下の長石	
524	瓦質土器	三足羽釜	土坑3182	16.2	(22.2)		N5/0 断 N8/0	φ1mm以下の長石少量	
525	土師器	皿	井戸3058	7.8	1.3		7.5YR7/3	雲母・赤色粒	
526	土師器	皿	井戸3058	8.4	1.2		7.5YR7/3	赤色粒	
527	土師器	皿	井戸3058	8.6～9.0	1.6		7.5YR7/3	雲母・長石	
528	土師器	皿	井戸3058	8.7	1.3		7.5YR7/4	赤色粒	
529	土師器	皿	井戸3058	12.9	2.5		7.5YR7/6	赤色粒多量	
530	土師器	皿	井戸3058	13.6	2.5		7.5YR7/6	雲母・赤色粒多量	
531	須恵器	鉢	井戸3058	27.0	12.0	9.2	口縁 N5/0 体部 N6/0	φ2mm以下の石英・長石	
532	瓦器	椀	井戸3058	13.2	4.3	4.7	N4/0		折衷
533	土師器	皿	土坑3392	8.8	1.5		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
534	土師器	皿	土坑3392	8.8	1.7		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
535	土師器	皿	土坑3392	9.0	1.8		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
536	土師器	皿	土坑3392	9.1	1.6		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
537	土師器	皿	土坑3392	9.2	1.8		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
538	土師器	皿	土坑3392	9.4	1.6		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
539	土師器	皿	土坑3392	9.4	1.7		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
540	土師器	皿	土坑3392	14.2	2.7		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
541	土師器	皿	土坑3392	14.4	3.1		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
542	土師器	壷	土坑3392	4.5	9.9	4.2	7.5YR6/2	雲母・赤色粒	
543	土師器	皿	土坑3147	8.3	1.3		5YR8/4	φ0.5mm以下の長石・石英	
544	土師器	皿	土坑3147	8.4	11.5		7.5YR8/3	赤色粒少量・雲母	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
545	土師器	皿	土坑3147	8.4	1.3		7.5YR8/3	粒子細かい	
546	土師器	皿	土坑3147	8.5	1.3		7.5YR8/2	粒子細かい	
547	土師器	皿	土坑3147	8.4	1.5		7.5YR8/3	φ0.5～2mmの長石・雲母	
548	土師器	皿	土坑3147	8.5	1.3		7.5YR8/1	φ0.5mmの長石・石英・雲母	
549	土師器	皿	土坑3147	8.6	1.6		7.5YR8/1	φ1～2mmの長石	
550	土師器	皿	土坑3147	8.6	1.4		7.5YR8/1	赤色粒少量	
551	土師器	皿	土坑3147	8.7	1.4		10YR7/2	赤色粒少量・雲母	
552	土師器	皿	土坑3147	8.8	1.6		10YR7/4	赤色粒・雲母	
553	土師器	皿	土坑3147	8.8	1.6		5YR7/4	φ0.5～1mmの長石・石英	
554	土師器	皿	土坑3147	8.8	1.4		7.5YR8/2	φ0.5mmの長石少量	
555	土師器	皿	土坑3147	8.9	1.4		10YR8/3	粒子細かい	
556	土師器	皿	土坑3147	8.9	1.5		7.5YR7/6	雲母・赤色粒	
557	土師器	皿	土坑3147	9.0	1.4		7.5YR8/3	φ1～2mmの長石・石英	
558	土師器	皿	土坑3147	9.0	1.5		10YR7/3	雲母・φ1mm以下の長石	
559	土師器	皿	土坑3147	9.0	1.5		7.5YR7/1	φ0.5～1mmの長石・石英	
560	土師器	皿	土坑3147	9.0	1.5		5YR8/2	φ0.5～3mmの長石・石英	
561	土師器	皿	土坑3147	9.0	1.7		10YR8/2	雲母・赤色粒少量	
562	土師器	皿	土坑3147	9.2	1.5		10YR8/1	φ0.5mm以下の長石・石英	
563	土師器	皿	土坑3147	9.2	1.7		10YR7/3	雲母・赤色粒	
564	土師器	皿	土坑3147	9.3	1.3		2.5Y8/2	φ1mm以下の長石・チャート	
565	土師器	皿	土坑3147	9.3	1.2		10YR8/2	雲母	
566	土師器	皿	土坑3147	9.4	1.5		10YR7/4	赤色粒・雲母	
567	土師器	皿	土坑3147	9.4	1.1		5YR7/6	赤色粒多量・雲母	
568	土師器	皿	土坑3147	9.5	1.3		10YR8/2	赤色粒少量	
569	土師器	皿	土坑3147	9.6	1.7		7.5YR7/4	赤色粒・雲母	
570	土師器	皿	土坑3147	9.6	1.6		7.5YR7/6	雲母・赤色粒	
571	土師器	皿	土坑3147	10.2	1.7		7.5YR8/2	雲母・赤色粒	
572	土師器	皿	土坑3147	12.6	2.2		7.5YR8/3	φ1～3mmの花崗岩	
573	土師器	皿	土坑3147	12.6	2.7		10YR8/3	赤色粒極少量	
574	土師器	皿	土坑3147	13.0	2.1		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
575	土師器	皿	土坑3147	13.2	2.2		2.5Y8/2～7.5YR8/2	長石・チャート	
576	土師器	皿	土坑3147	13.2	3.1		10YR7/3	雲母・赤色粒	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
577	土師器	皿	土坑3147	13.3	3.2		10YR8/1	φ2～5mmの花崗岩・赤色粒	
578	土師器	皿	土坑3147	13.4	2.4		10YR8/2	赤色粒	
579	土師器	皿	土坑3147	13.6	2.2		7.5YR8/3	赤色粒多量	
580	土師器	皿	土坑3147	13.6	2.1		7.5YR8/3	φ1mmの長石・石英	
581	土師器	皿	土坑3147	13.8	3.0		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
582	土師器	皿	土坑3147	13.9	2.7		7.5YR8/3	φ1mmの長石少量	
583	土師器	皿	土坑3147	14.0	2.5		7.5Y8/3	φ1mm以下の長石・石英・赤色粒	
584	土師器	皿	土坑3147	14.0	2.4		7.5YR8/3	雲母少量	
585	土師器	皿	土坑3147	14.0	3.0		7.5YR8/4	赤色粒	
586	土師器	皿	土坑3147	14.4	2.5		10YR8/2	粒子細かい	
587	土師器	皿	土坑3147	14.8	2.3		10YR8/3	赤色粒・雲母少量	
588	瓦器	椀	土坑3147	14.0	4.5	5.8	N4/0		樟葉
589	瓦器	椀	土坑3147	13.9	4.0	5.0	N5/0		樟葉
590	瓦器	椀	土坑3147	14.0	5.2	4.6	内・外 N5/0 断 N8/0		樟葉
591	瓦器	椀	土坑3147	14.4	5.1	5.0	内 N5/0 外 N6/0 断 N8/0		樟葉
592	瓦器	椀	土坑3147	14.2	4.8	5.7	N4/0		樟葉
593	瓦器	椀	土坑3147	14.3	4.6	5.1	N5/0～4/0		樟葉
594	瓦器	椀	土坑3147	14.5	5.0	5.1	N4/0		樟葉
595	瓦器	椀	土坑3147	14.6	5.2	5.2	内・外 N5/0 断 N8/0		樟葉
596	瓦器	椀	土坑3147	15.0	5.5	6.4	内 N5/0 外 N4/0 断 N8/0		樟葉
597	瓦器	椀	土坑3147	15.0	5.2	5.6	内 N4/0 外 N5/0 断 N8/0		樟葉
598	瓦器	椀	土坑3147	15.0	5.3	4.6	内・外 N5/0 断 N8/0		樟葉
599	瓦器	椀	土坑3147	13.4	4.1	5.2	N6/0～8/0		大和
600	瓦器	椀	土坑3147	15.2	5.2	6.3	N6/0		大和
601	瓦器	椀	土坑3147	14.2	5.1	5.6	N4/0		大和
602	瓦器	椀	土坑3147	14.4	4.8	5.2	N5/0		大和
603	瓦器	椀	土坑3147	15.0	4.7	6.2	内・外 N5/0 断 N8/0	φ0.5mmの砂粒	和泉
604	瓦器	皿	土坑3147	9.2	1.7		N4/0		
605	瓦器	皿	土坑3147	9.4	1.7		N4/0		
606	須恵器	杯	土坑3147	16.6	4.7	6.2	N8/0～5/0	チャート・長石	
607	土師器	皿	柱列3233	9.0	1.2		2.5Y8/1～8/2	雲母・赤色粒少量	
608	土師器	皿	柱列3233	9.0	1.3		10YR6/2	雲母多量・赤色粒	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
609	土師器	皿	柱列3233	9.0	1.1		7.5YR8/3	チャート・長石	
610	土師器	皿	柱列3233	9.2	1.7		10YR7/3	雲母・赤色粒	
611	土師器	皿	柱列3233	9.6	1.7		7.5YR7/4	赤色粒多量	
612	土師器	皿	柱列3233	10.0	1.5		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
613	土師器	皿	柱列3233	13.5	2.8		7.5YR7/3	雲母少量	
614	土師器	皿	柱列3233	14.4	3.0		2.5Y8/2	φ1mm以下の長石・赤色粒	
615	土師器	台付皿	柱列3233		(3.1)	9.8	2.5Y7/2	雲母・φ2mm以下の石英・長石	
616	土師器	鍋	柱列3233	18.0	(8.8)		7.5YR8/4	雲母・赤色粒少量・石英・長石	
617	土師器	皿	土坑3056	11.0	(2.3)		2.5Y8/2	雲母少量	
618	土師器	皿	土坑3056	14.0	2.0		2.5Y8/2	雲母少量・赤色粒極少量・φ1mm以下の長石	
619	土師器	皿	溝5057	9.0	(1.4)		2.5Y8/2	赤色粒	
620	土師器	皿	溝5057	6.9	1.9		10YR8/2	赤色粒	
621	土師器	皿	溝5057	9.8	(1.8)		10YR8/2	赤色粒少量	
622	土師器	皿	溝5057	11.0	(2.3)		10YR7/1	赤色粒少量	
623	土師器	皿	溝5057	11.0	2.6		7.5YR8/2	赤色粒	
624	瓦器	椀	溝5057	10.4～9.8	3.3	3.2～2.7	N5/0		
625	土師器	皿	井戸5028	11.0	(1.8)		2.5Y7/1	雲母・長石少量	
626	土師器	皿	井戸5028	12.0	2.0		7.5YR8/3	赤色粒	
627	土師器	皿	井戸5028	15.0	(2.3)		10YR8/3	赤色粒	
628	土師器	皿	溝4047	7.4	1.1		10YR7/3	赤色粒少量	
629	土師器	皿	溝4047	7.8	1.6		10YR7/3	赤色粒	
630	土師器	皿	溝4047	13.8	2.9		10YR7/2	雲母・赤色粒少量	
631	土師器	羽釜	溝5050	20.4	(12.8)	17.8	断 10YR8/2	長石・チャート	
632	土師器	皿	井戸2666	7.0	1.3		5YR6/4	雲母・赤色粒	
633	土師器	皿	井戸2666	7.2	1.1		5YR6/4	雲母・赤色粒多量	
634	土師器	皿	井戸2666	12.6	2.3		2.5Y7/2	雲母極少量	
635	土師器	皿	井戸2666	13.6	2.2		10YR8/3	雲母少量	
636	土師器	皿	井戸2666	15.4	2.5		10YR8/3	φ1mm以下のチャート少量	
637	瓦器	羽釜	井戸2666		(9.8)		N4/0	φ1mm以下の長石・チャート	
638	土師器	皿	5区 第4面整地層	6.4～7.0	1.6		7.5YR7/4	雲母・赤色粒少量	
639	土師器	皿	5区 第4面整地層	6.6	1.5		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
640	土師器	皿	5区 第4面整地層	6.6	1.6		5YR7/4	雲母・赤色粒少量	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
641	土師器	皿	5区 第4面 整地層	7.0～6.5	1.6		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
642	土師器	皿	5区 第4面 整地層	8.3～8.8	1.8		5YR7/4	雲母・赤色粒少量	
643	土師器	皿	5区 第4面 整地層	8.4	1.8		10YR7/2	赤色粒少量	灯明
644	土師器	皿	5区 第4面 整地層	8.4	1.7		5YR7/3	雲母・赤色粒多量	灯明
645	土師器	皿	5区 第4面 整地層	8.8	1.5		10YR8/2	雲母・赤色粒	灯明
646	土師器	皿	5区 第4面 整地層	9.4	1.5		7.5YR8/4	赤色粒	
647	土師器	皿	5区 第4面 整地層	9.6	2.2		10YR7/3	赤色粒多量	
648	土師器	皿	5区 第4面 整地層	12.8	2.9		7.5YR7/4	雲母・赤色粒少量	
649	土師器	皿	5区 第4面 整地層	12.8	2.5		7.5YR7/6	雲母・赤色粒	
650	土師器	皿	5区 第4面 整地層	13.0	2.6		5YR7/6	雲母・赤色粒	
651	土師器	皿	5区 第4面 整地層	13.4	3.1		2.5YR7/4	雲母・赤色粒	
652	土師器	皿	5区 第4面 整地層	13.6	2.4		7.5YR7/6	雲母・赤色粒	
653	土師器	皿	5区 第4面 整地層	13.8	2.9		5YR7/6	雲母・赤色粒	
654	瓦器	火皿か	5区 第4面 整地層		厚さ1.4		N5/0		
655	輸入青磁	椀	5区 第4面 整地層	13.0	(5.5)		胎 10Y8/1 釉 5GY7/1		
656	輸入青磁	椀	5区 第4面 整地層		(3.3)	4.9	胎 5Y7/1 釉 7.5GY6/0		
657	輸入青磁	椀	5区 第4面 整地層	14.2	(5.1)		胎 10Y8/2 釉 10Y5/2		
658	輸入青磁	椀	5区 第4面 整地層		(4.6)	4.4	胎 10Y8/2 釉 7.5Y5/2		
659	輸入青磁	椀	5区 第4面 整地層		(3.3)		胎 5Y7/1 釉 2.5GY6/1		
660	輸入白磁	皿	5区 第4面 整地層		(1.8)		胎 10Y8/1 釉 5Y8/1		
661	土師器	皿	土坑3375	7.0	1.6		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
662	土師器	皿	土坑3375	7.0	1.6		7.5YR7/4	雲母・赤色粒多量	
663	土師器	皿	土坑3375	6.9	1.5		7.5YR7/4	雲母・赤色粒多量	
664	土師器	皿	土坑3375	7.3	1.6		7.5YR8/2	雲母・赤色粒多量	
665	土師器	皿	土坑3375	8.0	1.6		5YR7/4	雲母・赤色粒多量	
666	土師器	皿	土坑3375	8.4	2.0		7.5YR7/4	赤色粒多量	
667	土師器	皿	土坑3375	6.4	1.7		7.5YR7/4	雲母・赤色粒多量	内面粗いハケ
668	土師器	皿	土坑3375	6.6	1.4		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
669	土師器	皿	土坑3375	7.2	1.4		7.5YR7/4	雲母・赤色粒多量	内面粗いハケ
670	土師器	皿	土坑3375	10.2	2.0		5YR7/4	雲母・赤色粒多量	
671	土師器	皿	土坑3375	10.6	2.2		5YR7/4	雲母・赤色粒多量	
672	土師器	皿	土坑3375	10.6	2.2		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
673	土師器	皿	土坑3375	14.4	3.0		7.5YR7/4	赤色粒少量	
674	土師器	皿	土坑3375	14.7	2.9		7.5YR7/4	雲母・赤色粒少量	
675	土師器	皿	土坑3375	15.4	2.2		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
676	土師器	皿	土坑3375	17.4	2.2		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
677	土師器	皿	溝3100	6.5～6.9	(1.4)		7.5YR7/3	雲母・赤色粒	
678	土師器	皿	溝3100	6.4～7.0	1.5		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
679	土師器	皿	溝3100	6.6	1.7		5YR7/4	雲母・赤色粒	
680	土師器	皿	溝3100	6.7	1.6		7.5YR8/4	赤色粒少量	
681	土師器	皿	溝3100	6.9	1.5		10YR7/1	雲母・赤色粒	
682	土師器	皿	溝3100	7.0	1.5		10YR7/3	雲母・赤色粒	
683	土師器	皿	溝3100	7.2	1.5		2.5Y8/1	雲母・赤色粒	
684	土師器	皿	溝3100	7.2	1.5		10YR7/2	雲母・赤色粒	
685	土師器	皿	溝3100	7.2	1.6		10YR7/3	雲母・赤色粒	
686	土師器	皿	溝3100	7.1	1.6		7.5YR8/3	雲母・赤色粒	
687	土師器	皿	溝3100	7.2	1.4		2.5Y7/2	雲母少量	
688	土師器	皿	溝3100	7.2	(1.8)		7.5YR7/3	赤色粒少量	
689	土師器	皿	溝3100	7.4	1.7		2.5Y8/1	雲母・赤色粒	内面ハケ目
690	土師器	皿	溝3100	7.6	1.9		5YR6/6	雲母・赤色粒	
691	土師器	皿	溝3100	7.8	1.8		7.5YR7/3	雲母・赤色粒	
692	土師器	皿	溝3100	6.8	1.7		2.5Y7/2	赤色粒	
693	土師器	皿	溝3100	6.8	1.5		10YR7/3	雲母・赤色粒	穿孔あり
694	土師器	皿	溝3100	7.3	1.7		10YR8/3		京域主流形
695	土師器	皿	溝3100	7.4	1.7		7.5YR7/4	赤色粒	
696	土師器	皿	溝3100	7.4	1.7		10YR8/3	赤色粒	
697	土師器	皿	溝3100	7.4	1.7		7.5YR7/4	赤色粒少量	
698	土師器	皿	溝3100	7.6	1.7		7.5YR8/4	赤色粒	
699	土師器	皿	溝3100	7.6	1.8		7.5YR8/4	赤色粒	
700	土師器	皿	溝3100	7.7	1.8		7.5YR8/3	赤色粒	
701	土師器	皿	溝3100	8.6	1.7		7.5YR7/4	雲母・赤色粒多量	内面ハケ目
702	土師器	皿	溝3100	10.4	1.7		2.5YR7/2	雲母・赤色粒	
703	土師器	皿	溝3100	10.4	2.1		5YR7/4	雲母・赤色粒	内面ハケ目
704	土師器	皿	溝3100	10.8	1.9		7.5YR8/2	雲母・赤色粒	内面ハケ目

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
705	土師器	皿	溝3100	10.8	2.2		10YR7/3	雲母・赤色粒	
706	土師器	皿	溝3100	10.8	2.3		7.5YR8/3	雲母・赤色粒	内面ハケ目
707	土師器	皿	溝3100	11.6	2.1		10YR8/2～8/3	チャート	京域主流形
708	土師器	皿	溝3100	11.7	2.3		10YR8/2	チャート・長石	京域主流形
709	土師器	皿	溝3100	14.0	2.6		10YR8/2		京域主流形
710	土師器	皿	溝3100	14.2	2.6		7.5YR8/3	赤色粒	
711	土師器	皿	溝3100	14.5	2.5		2.5Y7/2	雲母・赤色粒	
712	土師器	皿	溝3100	14.6	3.0		10YR8/2	雲母・赤色粒少量	内面ハケ目
713	土師器	皿	溝3100	14.8	2.7		7.5YR7/4～2.5Y7/1	雲母・赤色粒	内面ハケ目後ナデ、外面ハケ目
714	土師器	皿	溝3100	14.8	2.8		7.5YR7/3	雲母・赤色粒多量	内面ハケ目後ナデ、外面ハケ目
715	土師器	皿	溝3100	15.0	2.5		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	底部外面ハケ目
716	土師器	羽釜	溝3100	24.6	(19.0)		内 2.5Y7/2 外 2.5Y7/1	φ3mm以下のチャート	
717	瓦器	羽釜	溝3100	22.4	13.5		N4/0		
718	瓦器	羽釜	溝3100	37.4	(27.5)		内・外 5Y8/1 断 N8/0		
719	焼締陶器	擂鉢	溝3100	28.0	10.0	14.8	5YR4/4	φ7mm以下の長石・石英・チャート	備前　8条1単位
720	施釉陶器	天目椀	溝3100	10.8	6.0	4.0	胎 2.5Y8/1		瀬戸・美濃
721	施釉陶器	天目椀	溝3100	11.6	6.9	3.2	胎 2.5Y8/1		瀬戸・美濃
722	施釉陶器	花瓶	溝3100		(16.7)	6.6	胎 2.5Y8/1 釉 10YR2/3		瀬戸・美濃
723	輸入白磁	椀	溝3100	9.2	4.7	2.6	胎 2.5Y8/2 釉 2.5Y8/1		墨書
724	輸入白磁	皿	溝3100	9.6	3.0	4.0	胎 10YR8/1 釉 2.5Y8/1		墨書
725	輸入白磁	皿	溝3100	9.5	2.1	4.0	胎・釉 2.5Y8/1		
726	輸入青磁	椀	溝3100	14.2	(5.5)		胎 N7/0 釉 5GY6/0		
727	輸入青磁	皿	溝3100	10.8	3.3	3.8	露胎部 10YR7/2 断 N8/0 釉 5GY6/0		
728	輸入青磁	皿	溝3100	10.4	3.2	5.0	露胎部 10YR7/2 釉 5GY6/0		
729	土師器	皿	溝5027	5.7	1.2		2.5Y7/2	φ1mm以下の長石少量	京域主流形
730	土師器	皿	溝5027	5.8～6.1	1.3		2.5Y7/2	φ1mm以下の長石少量	京域主流形
731	土師器	皿	溝5027	5.9	1.3		2.5Y7/2	雲母少量・長石	京域主流形
732	土師器	皿	溝5027	5.9	1.2		10YR7/3	雲母少量	
733	土師器	皿	溝5027	6.1	1.2		2.5Y7/3	雲母	京域主流形
734	土師器	皿	溝5027	6.6	1.5		7.5YR6/3	雲母多量	内面粗いハケ目
735	土師器	皿	溝5027	6.8	1.7		2.5Y7/3	雲母・赤色粒少量	
736	土師器	皿	溝5027	7.2	1.5		2.5Y7/2	雲母・赤色粒少量	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
737	土師器	皿	溝5027	7.7	1.2		10YR7/2	長石	
738	土師器	皿	溝5027	7.7	2.4		7.5YR6/3	雲母多量・赤色粒	内面粗いハケ目
739	土師器	皿	溝5027	7.7	1.7		10YR7/2	雲母少量	
740	土師器	皿	溝5027	7.7	1.7		10YR6/2	雲母	灯明
741	土師器	皿	溝5027	7.9	1.9		10YR7/3	雲母・赤色粒	灯明
742	土師器	皿	溝5027	7.9	1.9		7.5YR6/3	雲母多量・赤色粒	内面粗いハケ目
743	土師器	皿	溝5027	8.0	1.7		5YR6/3	雲母・赤色粒	内面ハケ目
744	土師器	皿	溝5027	8.0	1.6		10YR6/3	雲母・赤色粒少量	内面粗いハケ目
745	土師器	皿	溝5027	8.1	1.6		7.5YR7/3	雲母・赤色粒	灯明
746	土師器	皿	溝5027	8.3	1.8		10YR7/1	雲母少量・赤色粒	
747	土師器	皿	溝5027	8.4	2.1		2.5Y7/2	雲母・赤色粒少量	
748	土師器	皿	溝5027	8.8	1.4		7.5YR7/3	雲母・赤色粒	
749	土師器	皿	溝5027	9.0	1.9		5YR7/6	赤色粒多量	
750	土師器	皿	溝5027	9.3	2.2		5YR8/4	赤色粒多量	灯明
751	土師器	皿	溝5027	9.6	2.7		2.5Y7/1	雲母少量・赤色粒	
752	土師器	皿	溝5027	10.2	2.7		10YR5/1	雲母・赤色粒	
753	土師器	皿	溝5027	10.6	2.7		2.5Y7/1	雲母・長石	内面底部粗いハケ目
754	土師器	皿	溝5027	11.4	2.2		10YR5/2～2.5Y4/1	長石	灯明 内面底部粗いハケ目
755	土師器	皿	溝5027	12.4	1.9		2.5Y7/3		京域主流形
756	土師器	皿	溝5027	13.6	(2.3)		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
757	土師器	皿	溝5027	15.0	2.3		7.5YR7/4	雲母・赤色粒・長石	
758	土師器	台付皿	溝5027		(1.4)	4.2	10YR7/2	長石少量	
759	土師器	鍋	溝5027	(18.6)	(4.0)		2.5Y8/2	φ2mm以下の長石・石英	
760	土師器	鍋	溝5027	17.4	(6.5)		2.5Y8/2		
761	土師器	羽釜	溝5027	16.6	(12.3)		2.5Y8/2		孔は2個1体、焼成前穿孔
762	土師器	焙烙	溝5027	35.0	(11.3)		2.5Y8/2		
763	瓦器	擂鉢	溝5027		(8.6)	9.6	10YR8/1		10条1単位　7単位で一周
764	瓦器	羽釜	溝5027	22.2	(13.3)		断 N8/0 外 N5/0		
765	瓦器	香炉	溝5027	8.6	(4.9)	6.8	10YR7/3		内面赤色顔料を塗っているか
766	瓦器	香炉	溝5027		(2.7)	7.0	断 10YR6/1		
767	施釉陶器	天目椀	溝5027	12.0	(5.3)		胎 2.5Y8/2 釉 10YR4/2		瀬戸・美濃系
768	施釉陶器	花瓶か	溝5027		(10.4)	11.4	内 10YR7/4 釉 N3/0		瀬戸・美濃系

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
769	輸入白磁	皿	溝5027	11.0	(2.1)		胎 7.5Y8/1 釉 N8/0		
770	輸入青磁	皿	溝5027	8.0	1.6	4.5	断 7.5Y6/1 釉 10Y6/2		
771	輸入青花	椀	溝5027	12.0	5.3	4.3	胎 N8/0		
772	焼締陶器	擂鉢	溝5025		(19.0)		5YR7/6	φ0.8mm以下の石英・長石	信楽、5条1単位
773	焼締陶器	擂鉢	溝5025	27.2	(12.5)		10YR4/2	φ2mm以下の長石・チャート少量	備前、8条1単位
774	土師器	皿	溝5026	6.8	1.6		10YR7/2	赤色粒	
775	土師器	皿	溝5026	6.9	1.5		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
776	土師器	皿	溝5026	9.8	2.4		10YR7/3	雲母・赤色粒	
777	土師器	皿	溝5026	13.0	2.0		10YR7/2	雲母・赤色粒少量	内面ハケ目
778	土師器	皿	溝5026	14.0	2.1		10YR7/2	雲母・赤色粒	内面ハケ目
779	土師器	皿	溝5026	14.0	2.7		7.5YR7/3	雲母・赤色粒少量	
780	瓦器	花瓶か	溝5026	胴最大径 6.0	(3.2)		N4/0 内 N8/0		
781	瓦器	羽釜	溝5026	23.0	(13.0)		断・内 2.5Y8/2 外 N6/0		
782	輸入白磁	椀	溝5026	12.0	(3.0)		胎 2.5Y8/1		
783	輸入青磁	椀	溝5026		(3.3)	4.2	胎 2.5Y7/1 釉 2.5GY6/1		
784	土師器	皿	5区 第3面 整地層	14.8	3.2		10YR7/3	赤色粒	
785	瓦器	不明	5区 第3面 整地層	長辺 (8.7)	短辺 (6.5)		断 10YR8/3 外 N4/0	チャート・赤色粒	
786	焼締陶器	擂鉢	5区 第3面 整地層		(7.8)		内 N6/0 外 5YR5/3		備前、6条1単位
787	焼締陶器	擂鉢	5区 第3面 整地層	27.4	12.5	12.0	2.5YR6/6	φ8mm以下の石英	信楽、5条1単位
788	輸入青磁	皿	5区 第3面 整地層	10.8	3.0	4.4	10YR6/1 釉 7.5YR5/2		
789	土師器	皿	溝3055	6.0～6.4	1.3		7.5YR7/4	雲母・赤色粒	
790	土師器	皿	溝3055	6.6	1.5		7.5YR7/6	雲母・赤色粒	
791	土師器	皿	溝3055	7.0	1.4		7.5YR6/3	雲母多量・赤色粒	
792	土師器	皿	溝3055	7.0	1.3		10YR6/3	雲母多量	
793	土師器	皿	溝3055	7.4	1.5		10YR7/3	雲母・赤色粒	内面ハケ目
794	土師器	皿	溝3055	8.4	1.1		7.5YR7/3	雲母・赤色粒	
795	土師器	皿	溝3055	8.6	1.5		10YR7/3	雲母・赤色粒	
796	土師器	皿	溝3055	12.6	2.7		10YR7/3	雲母多量・赤色粒	
797	土師器	皿	溝3055	13.0	2.1		5YR7/4	雲母・赤色粒	
798	土師器	皿	溝3055	13.7	3.1		10YR7/4	雲母・赤色粒	
799	土師器	皿	溝3055	14.2	(2.2)		10YR7/2		京域主流形
800	焼締陶器	鉢	溝3055	28.2	5.7	21.8	内 5YR4/2 外 5YR7/3～7/4	φ2mm以下の長石・石英	備前

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
801	輸入白磁	皿	溝3055	8.4	2.7	3.8	胎 2.5Y8/2 釉 7.5Y8/1		
802	施釉陶器	皿	溝3055	12.0	3.6	4.0	胎 2.5Y6/4 釉 5Y6/1		肥前系
803	施釉陶器	皿	溝3055	22.2	5.2	7.8	胎 7.5YR6/4 釉 10Y7/1		肥前系、灰釉
804	施釉陶器	椀	溝3055	12.4	5.8	4.4	胎 2.5Y4/2 釉 5Y5/1		肥前系、灰釉
805	施釉陶器	皿	溝3055	11.2	2.4	4.4	胎 2.5Y8/3 釉 2.5Y7/4		江戸、灰釉
806	瓦器	羽釜	土坑3385	28.4	(16.5)		7.5YR8/1		
807	瓦器	羽釜	土坑3385	41.4	(17.5)		2.5Y8/1		
808	土師器	皿	溝4030	5.2	1.3		10YR7/2		
809	土師器	皿	溝4030	5.8	1.4		7.5YR6/4	雲母多量・赤色粒	
810	土師器	皿	溝4030	7.6	2.0		7.5YR6/4	雲母・赤色粒	
811	土師器	皿	溝4030	11.2	(2.0)		7.5YR7/3		灯明
812	土師器	皿	溝4030	9.4	1.8		10YR7/3		灯明
813	土師器	皿	溝4030	9.9	2.0		10YR7/2		
814	土師器	皿	溝4030	10.8	1.9		7.5YR7/3		
815	土師器	皿	溝4030	10.9	2.1		10YR7/2		
816	土師器	皿	溝4030	9.3	2.2		10YR7/3		
817	土師器	皿	溝4030	11.3	(2.3)		7.5YR7/3	雲母・赤色粒	灯明
818	土師器	折縁皿	溝4030	5.8	2.6		7.5YR8/2	φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒	
819	土師器	つぼつぼ	溝4030	2.4	2.4		2.5Y8/2	φ2mm以下の長石・石英・チャート・雲母	
820	土師器	つぼつぼ	溝4030	2.0	2.5		2.5Y7/2	φ1mm以下の長石・石英・チャート	
821	土師器	塩壷	溝4030	5.8	8.9		7.5YR7/4	φ2mm以下の長石・石英・チャート	
822	土師器	焙烙	溝4030	32.9	(7.8)		10YR8/2	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母	
823	焼締陶器	擂鉢	溝4030	32.0	16.7	15.2	2.5Y5/3	φ6mm以下の長石・石英・チャート	信楽
824	焼締陶器	擂鉢	溝4030	35.8	16.0	13.8	7.5YR4/1	φ3mm以下の長石・石英・チャート	丹波
825	焼締陶器	鉢	溝4030	17.2	(3.4)		外 7.5YR4/2 内 2.5Y5/1	φ0.5mm以下の長石	備前
826	焼締陶器	小壷	溝4030	6.4	(7.1)		胎 10YR7/2 釉 2.5Y4/6	φ1.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒	備前
827	焼締陶器	花入	溝4030		(7.3)	5.2	2.5Y4/2	φ1mm以下の長石・チャート	備前
828	焼締陶器	徳利	溝4030		(12.0)		2.5YR5/4	φ1mm以下の長石・黒色粒	備前
829	焼締陶器	皿	溝4030	(14.2)	(2.3)		表面 7.5YR4/3 釉 5Y4/2	φ0.5mm以下の長石	丹波
830	焼締陶器	水差	溝4030	12.3	7.1	15.4	5YR3/2	φ1.5mm以下の長石・石英・黒色粒	丹波
831	瓦器	擂鉢	溝4030		(5.3)	8.8	2.5Y7/1	φ3mm以下の長石・石英・チャート・雲母	大和産
832	瓦器	深鉢	溝4030		(25.2)	31.9	内 10YR6/1 外 10YR6/3	φ2mm以下の長石・石英・チャート	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
833	施釉陶器	皿	溝4030	11.8	2.6	6.2	胎 2.5Y8/1 釉 7.5Y7/3	φ0.5mm以下の長石	瀬戸、灰釉
834	施釉陶器	折縁皿	溝4030	11.3	2.1	5.1	胎 10YR8/2 釉 2.5Y6/4	φ0.5mm以下の長石・灰色粒	瀬戸、灰釉
835	施釉陶器	折縁皿	溝4030	10.3	2.2	6.0	胎 2.5Y5/2 釉 5Y7/4	φ0.5mm以下の長石	瀬戸、灰釉
836	施釉陶器	皿	溝4030	11.7	2.3	6.2	胎 N7/0 釉 2.5Y8/2	φ0.5mm以下の長石	美濃、長石釉
837	施釉陶器	皿	溝4030	13.3	2.9	7.4	胎 2.5Y8/2 釉 5GY8/1	φ1mm以下の赤色粒	美濃、長石釉
838	施釉陶器	皿	溝4030	11.7	2.6	7.1	胎 2.5Y8/1 釉 2.5Y8/2	φ0.5mm以下のチャート	美濃、長石釉 鉄絵
839	施釉陶器	菊皿	溝4030	13.0	2.5	7.5	胎 薄い淡黄 釉 薄い灰白	φ1mm以下の石英・チャート	美濃、長石釉
840	施釉陶器	菊皿	溝4030	11.3	2.4	5.8	胎 2.5Y5/2 釉 7.5YR3/2		美濃、鉄釉
841	施釉陶器	小杯	溝4030	7.6	2.8	4.6	胎 5Y8/1 釉 透明	φ0.5mm以下のチャート	美濃、長石釉
842	施釉陶器	天目椀	溝4030		(1.5)	4.0	胎 2.5Y8/1 釉 N2/0	φ0.5mm以下のチャート	美濃、鉄釉 文字(白)
843	施釉陶器	輪花皿	溝4030	15.5	4.7	7.8	胎 7.5Y6/3 釉 7.5Y8/2	φ0.5mm以下の石英・チャート	美濃、灰釉
844	施釉陶器	小杯	溝4030	6.8	3.2	3.3	胎 5Y7/1 釉 7.5Y5/3	φ0.5mm以下の石英	肥前系、透明釉 灯明
845	施釉陶器	小杯	溝4030	6.6	4.4	2.7	胎 5Y7/2 釉 5Y7/2	φ1.5mm以下の長石	肥前系、透明
846	施釉陶器	椀	溝4030	10.2	5.7	4.2	胎 10YR7/2 釉 2.5GY7/1	φ0.5mm以下の長石・チャート・黒色粒	肥前系、灰釉
847	施釉陶器	椀	溝4030	10.4	6.5	4.4	胎 2.5Y8/2 釉 10Y7/1	φ0.5mm以下の長石・チャート	肥前系、灰釉
848	施釉陶器	椀	溝4030	9.6	5.9	3.8	胎 2.5Y8/2 釉 5Y4/3	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	肥前系、灰釉
849	施釉陶器	椀	溝4030	11.0	7.9	4.5	胎 N7/0 釉 5Y7/1	φ0.5mm以下の長石	肥前系、透明釉
850	施釉陶器	椀	溝4030	10.0	4.6	4.7	胎 2.5Y8/1 釉 10YR8/2	φ0.5mm以下の赤色粒	肥前系、長石釉
851	施釉陶器	皿	溝4030	10.7	3.3	4.2	胎 5Y7/1 釉 10YR7/2	φ0.5mm以下の長石・チャート	肥前系
852	施釉陶器	皿	溝4030	10.8	3.4	3.8	胎 5Y6/3 釉 5Y8/1	φ2.5mm以下の長石・チャート	肥前系、灰釉
853	施釉陶器	皿	溝4030	14.6	3.1	3.8	胎 7.5YR7/2 釉 2.5Y7/4	φ2.5mm以下の長石・チャート	肥前系、透明釉 墨書
854	施釉陶器	鉢	溝4030	13.1	3.8	4.2	胎 10YR7/3 釉 2.5Y7/1	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	肥前系、灰釉 絵唐津
855	施釉陶器	鉢	溝4030	12.7	3.9	4.0	胎 2.5Y7/3 釉 2.5Y6/2	φ0.5mm以下の長石	肥前系
856	施釉陶器	皿	溝4030	10.4	2.8	4.2	胎 10YR6/3 釉 5Y4/1	φ0.5mm以下の長石	肥前系、灰釉、底部スス、胎土目
857	施釉陶器	皿	溝4030	9.4	4.1	4.3	胎 2.5Y8/2 釉 5Y6/2	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	肥前系、灰釉
858	施釉陶器	皿	溝4030	11.6	3.1	5.5	胎 2.5Y7/1 釉 10GY8/1	φ0.5mm以下の長石・チャート	肥前系、長石釉 胎土目
859	施釉陶器	皿	溝4030	11.6	3.2	4.5	胎 2.5Y7/1 釉 2.5Y7/1	φ0.5mm以下の長石・チャート	肥前系、灰釉 胎土目
860	施釉陶器	皿	溝4030	11.2	3.7	4.6	胎 N7/0 釉 5Y7/2	φ0.5mm以下の長石・チャート	肥前系、灰釉、砂目
861	施釉陶器	皿	溝4030	14.2	4.0	4.6	胎 N7/0 釉 5Y6/1	φ0.5mm以下の長石	肥前系、灰釉、砂目
862	施釉陶器	皿	溝4030	15.0	(3.4)		胎 N8/0 釉 5Y7/2		肥前系、灰釉
863	施釉陶器	輪花皿	溝4030	11.4	2.9	4.7	胎 2.5Y7/1 釉 5Y6/2	φ1mm以下の長石	肥前系、灰釉 墨書
864	施釉陶器	輪花皿	溝4030	19.5	3.2	4.2	胎 2.5Y7/2 釉 5Y5/2	φ1mm以下の長石・黒色粒	肥前系、灰釉 胎土目

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
865	施釉陶器	輪花皿	溝4030	11.4	3.9	5.2	胎 2.5Y8/2 釉 5Y8/1	φ1.5mm以下の赤色粒	肥前系、長石釉 胎土目
866	施釉陶器	鉢	溝4030	13.3	3.6	4.3	胎 5YR4/3 釉 7.5Y6/3	φ1mm以下の長石・石英	肥前系、灰釉、胎土目 絵唐津
867	施釉陶器	鉢	溝4030	13.4	4.5	4.9	胎 10YR8/4 釉 10YR7/2	φ0.5mm以下の石英・チャート	肥前系、灰釉、胎土目 絵唐津
868	施釉陶器	徳利	溝4030		(12.0)		胎 N6/0 釉 N9/0	φ0.5mm以下の長石・灰色粒	肥前系、藁灰釉 胎土目
869	施釉陶器	大鉢	溝4030	22.4	15.0	9.5	胎 2.5Y7/3 釉 2.5Y7/2	φ1mm以下の長石・チャート	肥前系、長石釉 胎土目
870	輸入白磁	小杯	溝4030	6.9	3.1	2.6	胎 N8/0 釉 透明		
871	輸入青花	皿	溝4030	9.2	2.7	3.8	胎 5Y8/1 釉 7.5GY8/1		漆付着
872	土師器	皿	水制4035	10.2	1.9		10YR7/3	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	
873	土師器	皿	水制4035	10.6	(2.0)		10YR6/4	φ1mm以下の赤色粒	灯明
874	土師器	塩壷	水制4035	5.5	8.4	5.8	5YR6/6	φ3mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒	
875	施釉陶器	折縁皿	水制4035	10.5	2.0	5.4	胎 2.5Y8/2 釉 2.5Y6/3	φ0.5mm以下のチャート・赤色粒	瀬戸、灰釉
876	施釉陶器	菊皿	水制4035	13.2	3.5	7.2	胎 2.5Y8/1 釉 2.5Y8/1	φ0.5mm以下の赤色粒	美濃、長石釉
877	施釉陶器	皿	水制4035	13.6	3.7	6.2	胎 2.5Y8/2 釉 7.5Y5/3 N9/0 7.5YR4/2	φ1mm以下の長石・チャート	美濃、灰釉、鉄絵
878	施釉陶器	小壷	水制4035		(3.1)		胎 2.5Y8/2 釉 7.5Y5/3	φ0.5mm以下のチャート	美濃、灰釉 総織部振り出し
879	施釉陶器	天目椀	水制4035	11.2	5.6	3.8	胎 5Y8/1 釉 10YR3/4	φ0.5mm以下のチャート	美濃、鉄釉
880	施釉陶器	天目椀	水制4035	11.2	7.3	4.2	胎 5Y8/1 釉 7.5YR4/3	φ0.5mm以下の長石	美濃、鉄釉
881	施釉陶器	皿	水制4035	10.6	3.3	3.9	胎 7.5YR7/6 釉 2.5Y8/1～8/2	φ0.5mm以下の長石	肥前系、墨書
882	施釉陶器	皿	水制4035	13.8	4.4	5.0	胎 2.5Y6/2 釉 5Y6/2	φ4mm以下の長石	肥前系
883	施釉陶器	皿	水制4035	13.5	4.5	4.3	胎 N8/0 釉 薄い明緑灰		肥前系、藁灰釉、砂目
884	施釉陶器	皿	水制4035	13.7	3.8	4.7	胎 7.5YR6/4 釉 5Y7/1	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	肥前系、灰釉、砂目 墨書
885	施釉陶器	鉢	水制4035		(2.9)	5.6	胎 10YR7/2 釉 5Y6/2	φ1mm以下の長石・チャート・黒色粒	肥前系、灰釉 絵唐津
886	施釉陶器	鉢	水制4035	10.6	3.7	3.4	胎 2.5Y6/2 釉 5Y6/2	φ2.5mm以下の長石	肥前系、灰釉、胎土目
887	施釉陶器	輪花皿	水制4035	12.0	3.9	4.4	胎 7.5YR7/3 釉 5Y7/1	φ1mm以下の長石・チャート	肥前系、透明釉 胎土目
888	施釉陶器	皿	水制4035	14.4	3.6	4.6	胎 N8/0 釉 薄い明緑灰		肥前系、透明釉 鉄絵
889	施釉陶器	大皿	水制4035		(5.3)	7.5	胎 10Y6/1 釉 10Y7/1	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	肥前系、藁灰釉
890	施釉陶器	椀	水制4035	11.9	6.9	4.8	胎 10YR6/4 釉 10YR6/4	φ2mm以下の長石	肥前系、透明釉
891	施釉陶器	天目椀	水制4035	10.4	5.8	3.9	胎 N2/0 釉 5Y3/2～3/1	φ0.5mm以下の長石	肥前系、鉄釉
892	施釉陶器	擂鉢	水制4035	28.8	12.1	10.0	胎 7.5YR6/4 釉 2.5Y4/2	φ1mm以下の長石・黒色粒	肥前系、透明釉
893	焼締陶器	壷	水制4035		(5.4)	8.0	内 2.5Y4/1 外 5YR4/2	φ1mm以下の長石・石英・チャート	備前、ヘラ記号
894	焼締陶器	鉢	水制4035	29.4	6.3	26.0	内 2.5Y5/2 外 2.5YR4/2	φ4.5mm以下の長石・石英・チャート	丹波
895	焼締陶器	擂鉢	水制4035		(10.0)	14.0	5YR5/2	φ3mm以下の長石・石英・チャート	丹波

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
896	輸入青花	椀	水制4035		(4.7)	4.0	胎 N9/0 釉 薄い明緑灰		
897	土師器	皿	護岸4031	5.4	1.0		2.5Y8/2	φ3mm以下の長石・雲母	灯明
898	土師器	皿	護岸4031	6.3	1.5		10YR8/3	φ0.5mm以下の長石・石英・雲母	
899	土師器	皿	護岸4031	10.4	2.0		10YR6/3	φ0.5mm以下の長石・雲母・赤色粒	
900	土師器	つぼつぼ	護岸4031	2.2	2.5		2.5Y7/2	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	
901	土師器	つぼつぼ	護岸4031	2.0	2.3		2.5Y8/2	φ0.5mm以下の石英・雲母	墨書
902	施釉陶器	皿	護岸4031	11.8	3.3	4.1	胎 10YR7/6 釉 5Y6/2	φ4mm以下の長石	肥前系、灰釉、砂目
903	施釉陶器	皿	護岸4031	12.6	3.6	4.5	胎 7.5YR7/6 釉 5Y6/2	φ1.5mm以下の長石	肥前系、灰釉、砂目
904	施釉陶器	皿	護岸4031	12.6	3.5	4.6	胎 2.5Y7/2 釉 5Y6/2	φ3mm以下の長石	肥前系、灰釉、砂目 墨書
905	施釉陶器	椀	護岸4031	12.8	7.3	4.8	胎 2.5Y7/2 釉 5Y6/2		肥前系、灰釉
906	焼締陶器	壷	護岸4031	5.8	(6.0)		胎 N6/0 外 7.5YR5/2	φ0.5mm以下の長石・チャート	備前
907	焼締陶器	壷	護岸4031	17.6	(11.8)		胎 5Y7/1 釉 5Y6/4	φ1mm以下の長石・石英	丹波
908	輸入白磁	輪花皿	護岸4031	11.0	(2.3)		胎 N9/0 釉 N8/0		
909	輸入青花	皿	護岸4031	13.0	3.0	7.4	胎 N9/0 釉 薄い明緑灰		
910	瓦器	浅鉢	土坑4011	35.6	11.0	28.8	N3/0		
911	焼締陶器	擂鉢	土坑4011	27.8	13.9	13.5～ 13.8	2.5YR6/6	φ2.5mm以下の長石・石英・チャート	備前
912	輸入青花	椀	土坑4011		(3.0)				
913	瓦器	深鉢	土坑4012		(27.5)	33.0	N5/0		
914	瓦器	深鉢	土坑5005	34.4	22.2	24.8	N4/0		
915	土師器	皿	流路4024	10.1	1.9		2.5Y8/2 N3/0	φ1.5mm以下の長石・石英・雲母	
916	土師器	皿	流路4024	10.2	2.1		10YR7/2	φ1mm以下の石英・チャート	灯明
917	土師器	皿	流路4024	10.8	1.8		7.5YR7/4	φ2mm以下の石英・チャート	
918	土師器	皿	流路4024	11.8	2.2		10YR7/3		灯明
919	土師器	烙焙	流路4024	27.9	(4.7)		10YR7/4	φ1.5mm以下の長石・石英・チャート	
920	土師器	烙焙	流路4024	30.0	7.7		7.5YR7/4	φ2mm以下の長石・石英・チャート	
921	瓦器	香炉	流路4024	12.9	8.0		N5/0	φ5mm以下の長石・石英・チャート・雲母	
922	焼締陶器	擂鉢	流路4024		(7.5)		内 5YR5/4 外 5YR6/6	φ1.5mm以下の長石・石英・チャート	丹波
923	焼締陶器	擂鉢	流路4024		(8.0)	15.7	7.5YR6/4	φ5mm以下の長石・石英・チャート	丹波
924	焼締陶器	擂鉢	流路4024	34.6	(11.6)		2.5YR6/6	φ5.5mm以下の長石・石英・チャート	丹波
925	施釉陶器	壷	流路4024		(7.5)	5.7	胎 5YR4/2 釉 2.5Y4/3		備前、鉄釉
926	施釉陶器	鉢	流路4024	9.2	(2.7)		胎 2.5Y8/1 釉 5Y4/4		丹波、灰釉
927	施釉陶器	鉢	流路4024	11.2	(5.0)		胎 7.5YR7/4 釉 5Y5/3	φ2mm以下の長石・石英・チャート	丹波、灰釉

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
928	施釉陶器	小椀	流路4024	5.8	2.3	3.4	胎 2.5Y8/2 釉 5Y7/2	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	美濃、灰釉
929	施釉陶器	小椀	流路4024	8.4	2.4	3.9	胎 2.5Y8/2 釉 5Y8/1	φ1mm以下のチャート・黒色粒	美濃、灰釉
930	施釉陶器	皿	流路4024	10.8	2.8	6.2	胎 2.5Y8/2 釉 2.5Y8/1	φ0.5mm以下の長石・チャート・雲母・黒色粒	美濃、長石釉、鉄絵
931	施釉陶器	天目椀	流路4024	10.5	6.9	4.0	胎 10YR8/2 釉 5YR1.7/1		美濃、鉄釉
932	施釉陶器	鉢	流路4024	8.7	3.4	4.0	胎 5Y8/1 釉 2.5Y6/2	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	肥前系、灰釉、砂目
933	施釉陶器	鉢	流路4024		(4.5)	4.8	胎 10YR7/4 釉 2.5Y8/1	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母	肥前系、灰釉 絵唐津
934	施釉陶器	椀	流路4024	5.9	5.4	3.4	胎 2.5Y8/1 釉 5Y7/1	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	肥前系、灰釉
935	施釉陶器	椀	流路4024	10.5	7.6	4.7	胎 2.5Y8/1 釉 2.5Y7/2	φ0.5mm以下の長石・チャート・雲母	肥前系、灰釉
936	施釉陶器	椀	流路4024	10.4	(6.1)		胎 N9/0 釉 5Y8/1	φ1.5mm以下の長石・チャート	肥前系、透明釉
937	施釉陶器	椀	流路4024	10.8	7.0	4.9	胎 N8/0 釉 7.5Y7/1	φ3mm以下の長石・石英・チャート	肥前系、灰釉
938	施釉陶器	皿	流路4024	11.7	3.4	4.7	胎 10YR8/2 釉 5Y5/2		肥前系、灰釉、胎土目
939	施釉陶器	皿	流路4024	11.8	3.2	5.0	胎 2.5Y8/1 釉 10YR7/1		肥前系、灰釉、砂目
940	施釉陶器	皿	流路4024	12.1	3.2	4.2	胎 7.5YR7/2 釉 2.5Y7/1		肥前系、灰釉、砂目
941	施釉陶器	皿	流路4024	12.4	4.0	4.7	胎 5YR7/4 釉 5Y7/1	φ2mm以下の長石・石英	肥前系、灰釉、砂目 墨書
942	施釉陶器	皿	流路4024	12.6	3.6	4.8	胎 2.5Y8/2 釉 2.5Y7/2	φ1mm以下の長石・石英・チャート	肥前系、灰釉、砂目
943	施釉陶器	皿	流路4024	16.1	4.0	5.0	胎 N8/0 釉 7.5Y7/1		肥前系、灰釉、鉄絵
944	施釉陶器	大鉢	流路4024	21.1	(9.9)		胎 10YR8/3 釉 10YR6/2	φ0.5mm以下の長石・チャート	肥前系、灰釉
945	白磁	椀	流路4024		(3.3)	4.6	胎 N9/0 釉 10GY8/1		肥前系
946	染付	菊皿	流路4024	14.5	2.1	6.0	胎 N9/0 釉 10GY8/1		肥前系
947	輸入青磁	椀	流路4024	14.6	(4.3)		胎 N9/0 釉 10GY7/1		
948	土師器	皿	護岸3200	5.5	1.1		10YR7/2		
949	土師器	皿	護岸3200	5.6	1.0		7.5YR7/4	赤色粒	
950	土師器	皿	護岸3200	6.9	1.5		10YR7/2	赤色粒	
951	土師器	皿	護岸3200	10.3	2.1		7.5YR7/3	赤色粒	灯明
952	土師器	皿	護岸3200	10.9	2.1		7.5YR8/4	赤色粒多	灯明
953	焼締陶器	鉢	護岸3200	14.6	7.2	13.2	2.5YR6/4	長石・チャート	
954	施釉陶器	皿	護岸3200	12.7	3.6	4.2	胎 10YR6/1 釉 7.5Y4/2		肥前系、灰釉、砂目
955	施釉陶器	皿	護岸3200	14.6	3.8	5.4	胎 N7/0 釉 7.5Y7/1		肥前系、灰釉、砂目
956	染付	椀	護岸3200	10.2	7.7	5.0	胎 2.5Y8/1 釉 7.5GY7/0		
957	焼締陶器	擂鉢	地業5002		(9.6)		2.5YR4/4	φ2mm以下の長石・石英	備前、9条1単位
958	土師器	皿	護岸3001	5.1～5.7	1.2		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	灯明
959	土師器	皿	護岸3001	5.1	1.0		7.5YR7/4	赤色粒	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
960	土師器	皿	護岸3001	8.8	1.9		7.5YR8/3	赤色粒	灯明
961	土師器	皿	護岸3001	9.8	2.1		5YR7/6	赤色粒	
962	土師器	皿	護岸3001	10.9	2.6		5YR7/6	赤色粒	
963	土師器	皿	護岸3001	11.0	1.9		7.5YR7/4	赤色粒	
964	土師器	つぼつぼ	護岸3001	2.3	2.2		10YR8/2		
965	土師器	つぼつぼ	護岸3001	2.6	2.6		2.5Y8/2		
966	土師器	焙焙	護岸3001	30.2	(6.5)		10YR6/3		
967	施釉陶器	鉢	護岸3001	11.8	4.2	4.8	胎 2.5Y7/2 釉 2.5Y6/2		肥前系、灰釉
968	施釉陶器	皿	護岸3001	13.8	3.2	4.6	胎 2.5Y7/2 釉 2.5Y6/2		肥前系、灰釉、砂目
969	施釉陶器	小皿	護岸3001	6.2	1.4	3.1	胎 10YR8/3 釉 10YR7/6		京・信楽系
970	施釉陶器	椀	護岸3001	10.4	7.1	4.8	外 10YR7/3 断 2.5Y8/1 釉・内 2.5Y3/1 釉・外 5Y7/1		肥前系、内 鉄釉 外 藁灰釉
971	施釉陶器	仏飯器	護岸3001	5.6	4.2	4.3	胎 2.5Y8/3 釉 2.5Y7/4		京・信楽系
972	施釉陶器	壷	護岸3001	10.8	9.5	10.4	胎 5YR5/3 釉 5YR3/1		丹波、鉄釉
973	土師質土器	風炉	護岸4001	22.4	(7.8)		10YR6/4	φ2.5mm以下の長石・雲母	
974	施釉陶器	椀	護岸4001	11.4	5.1	3.7	胎 10YR6/1 釉 2.5Y3/2 7.5Y8/1		肥前系、刷毛目
975	施釉陶器	皿	護岸4001	14.0	3.6	4.8	胎 10YR7/4 釉 2.5Y6/2	φ3.5mm以下の長石・石英	肥前系、灰釉、砂目 墨書
976	施釉陶器	灯明皿	護岸4001	11.3	2.4	4.9	胎 5Y7/1 釉 5Y7/2	φ0.5mm以下の長石	京・信楽系
977	染付	椀	護岸4001	9.1	(4.7)		胎 N9/0 釉 2.5GY8/1		肥前系
978	染付	椀	護岸4001	9.5	7.0	4.4	胎 7.5Y8/1 釉 10Y7/1		肥前系
979	染付	椀	護岸4001	9.7	5.2	3.7	胎 N9/0 釉 5GY8/1		肥前系 こんにゃく印判
980	磁器	壷	護岸4001	13.4	(11.4)		胎 N9/0 釉 10YR3/3	φ6mm以下の長石・石英	

付表２　瓦類一覧表

№.	種類	遺構名	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	時期・同笵・同文等
瓦1	軒丸瓦	流路3400	重圏文　三重圏線内側に「右」の鏡字。第1圏線径:4.1cm、第2圏線:径8.3cm、第3圏線:径13cm	瓦当部裏面縦ナデ。縁部は強い横ナデ。側面下半横ナデ。丸瓦部凸面縦ケズリ。	奈良時代　難波宮式6015型式。『長岡京古瓦集成』向日市埋蔵文化財調査報告書第20集、「18　平安京右京七条一坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
瓦2	軒丸瓦	土坑3056	右巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接し界線をなす。	瓦当部裏面縦ナデ。縁部は強い横ナデ。側面横ナデ。丸瓦部凸面縦ナデ、凹面布目。	平安時代後期　播磨産 同笵計2点。
瓦3	軒丸瓦	土坑3056	右巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接し界線をなす。外区に珠文27個。	瓦当部裏面横ナデ。側面下半横ナデ。丸瓦部凸面縦ナデ、凹面布目のち糸切。	平安時代後期　播磨産 同笵計9点。
瓦4	軒丸瓦	溝2235	右巻三巴文　巴の尾は接し界線をなす。外区に珠文。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形 丸瓦部凸面・凹面縦ナデ。	平安時代後期　播磨産
瓦5	軒丸瓦	溝3240	右巻三巴文　巴の頭は離れる。外区に珠文。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形　瓦当部裏面横ナデ。側面下半横ナデ。	平安時代後期　播磨産
瓦6	軒丸瓦	水制4035	蓮華文	瓦当部裏面摩滅により調整不明。 側面下半横ナデ。	平安時代後期　播磨産
瓦7	軒丸瓦	水制4035	右巻巴文　外区密に珠文	丸瓦部凸面縦ナデ。凹面布目のち糸切。	平安時代後期
瓦8	軒丸瓦	溝4030	単弁蓮華文　覗きの弁（単弁蓮華文の下に単弁蓮華文が重なるもの。）	一本造り技法。瓦当部裏面布の絞った痕か。丸瓦部凸面縦ナデ。	平安時代後期
瓦9	軒丸瓦	3区下段掘下	単弁蓮華文　覗きの弁	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形 丸瓦部凸面縦ナデ。	平安時代後期　産地不明
瓦10	軒丸瓦	溝5026	単弁蓮華文　覗きの弁	丸瓦部凸面縄タタキ、凹面布目。	平安時代後期　山城産
瓦11	軒丸瓦	土坑3056	右巻三巴文　巴の頭・尾はともに接し、尾は界線をなす。外区に珠文27個。	瓦当部裏面不定方向ナデ。側面下半横ナデ。丸瓦部凸面縄タタキ。	平安時代後期　山城産 同笵計2点。
瓦12	軒丸瓦	溝3240	右巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接し界線をなす。外区に珠文。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形 瓦当部裏面縦ナデ。	平安時代後期　山城産
瓦13	軒丸瓦	土坑3056	右巻三巴文　巴の頭・尾ともに離れる。	瓦当部裏面横ナデ。側面下半横ナデ。丸瓦部凸面縄タタキ、凹面布目のち縦ナデ。	平安時代後期～鎌倉時代 山城産
瓦14	軒丸瓦	溝5057	左巻（三）巴文　巴の頭は離れ、尾は接し界線をなす。外区に珠文。	瓦当部裏面横ナデ。側面下半横ナデ。丸瓦部凸面縦ナデ、凹面布目。	室町時代
瓦15	軒丸瓦	5区第4面整地層	右巻三巴文　巴の頭は離れる。外区に珠文。	瓦当部裏面横ナデ。	室町時代
瓦16	軒丸瓦	5区第4面整地層	左巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接し界線をなす。外区に珠文。	瓦当部裏面横ナデ。側面下半横ナデ。丸瓦部凸面縦ナデ、凹面コビキA。	室町時代
瓦17	軒丸瓦	井戸5028掘形	左巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接し界線をなす。外区に珠文。	瓦当部裏面横ナデ。縁部は強い横ナデ。側面下半横ナデ。丸瓦部凸面縦ナデ。	室町時代 瓦16と同笵だが珠文の数が増加する。 『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-16 瓦4・5と同笵。
瓦18	軒丸瓦	溝5025	左巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接し界線をなす。外区に珠文。	瓦当部裏面下半横ナデ。側面下半横ナデ。	
瓦19	軒丸瓦	2区重機掘削	左巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接し界線をなす。外区に珠文。	瓦当部裏面不定方向ナデ。平滑に仕上げる。側面下半横ナデ。	
瓦20	軒丸瓦	礫敷5047	左巻（三）巴文　外区に珠文。	瓦当部裏面下半横ナデ。	室町時代
瓦21	軒丸瓦	溝5025	左巻三巴文　巴の尾は互いに離れる。外区に珠文。	瓦当部裏面横ナデ。丸瓦部凸面縦ナデ。	安土桃山時代
瓦22	軒丸瓦	溝5025	左巻（三）巴文　外区に珠文・圏線。	瓦当部裏面横ナデ。	安土桃山時代
瓦23	軒丸瓦	溝5025	右巻三巴文　巴の頭は離れる。外区に珠文・圏線。	瓦当部裏面不定方向ナデ。側面下半横ナデ。	安土桃山時代
瓦24	軒丸瓦	溝5026	右巻（三）巴文　外区に珠文・圏線。	瓦当部裏面横ナデ。側面下半横ナデ。	安土桃山時代
瓦25	軒丸瓦	溝5026	左巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接しない。外区に珠文24個・圏線。	瓦当部裏面横ナデ。側面下半横ナデ。丸瓦部凸面縦ナデ。	安土桃山時代
瓦26	軒丸瓦	溝5026	左巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接し界線をなす。外区に珠文。	瓦当部裏面横ナデ。丸瓦部凸面縦ナデ。	安土桃山時代
瓦27	軒丸瓦	溝5026	右巻（三）巴文　巴の頭は離れる。外区に珠文・圏線。	瓦当部裏面横ナデ。側面下半横ナデ。	安土桃山時代

No.	種類	遺構名	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	時期・同笵・同文等
瓦28	軒丸瓦	溝5027	右巻(三)巴文　巴の尾は接しない。外区に珠文。	瓦当部裏面横ナデ。側面下半横ナデ。	安土桃山時代
瓦29	軒丸瓦	溝5027	右巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接し界線をなす。外区に珠文。	瓦当部裏面不定方向ナデ。 縁部は強い横ナデ。側面下半横ナデ。	安土桃山時代
瓦30	軒丸瓦	水制4035	右巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接し界線をなす。外区に珠文。	瓦当部裏面不定方向ナデ。 縁部は強い横ナデ。側面下半横ナデ。丸瓦部凸面縦ナデ、凹面コビキB。	江戸時代
瓦31	軒丸瓦	水制4035	右巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接しない。外区に珠文。	瓦当部裏面不定方向ナデ。 縁部は強い横ナデ。	江戸時代
瓦32	軒丸瓦	5区第2面整地層	右巻(三)巴文　巴の尾は接し界線をなす。外区に珠文・圏線。	瓦当部裏面横ナデ。	江戸時代
瓦33	軒丸瓦	落込3050	右巻(三)巴文　外区に珠文。	瓦当部裏面不定方向ナデ。 縁部は強い横ナデ。側面下半横ナデ。	江戸時代
瓦34	軒丸瓦	5区第2面整地層	右巻(三)巴文　外区に珠文。	瓦当部周縁内側面取り。丸瓦部凸面縦ナデ。	江戸時代
瓦35	軒丸瓦	溝5019	右巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接し界線をなす。外区に珠文。	瓦当部裏面横ナデ。 縁部は強い横ナデ。側面下半横ナデ。	江戸時代
瓦36	軒丸瓦	溝4030	右巻三巴文　外区に珠文。	瓦当部裏面不定方向ナデ。 丸瓦部凸面縦ナデ。	江戸時代
瓦37	軒丸瓦	溝4030	右巻(三)巴文　外区に珠文。	瓦当部裏面不定方向ナデ。 縁部は強い横ナデ。側面下半横ナデ。	江戸時代
瓦38	軒丸瓦	溝4030	右巻三巴文　巴の尾は離れる。外区に珠文。	瓦当部裏面不定方向ナデ。 縁部は強い横ナデ。側面下半横ナデ。	江戸時代
瓦39	軒丸瓦	5区第2面整地層	右巻(三)巴文　巴の尾は接し界線をなす。外区に珠文。	瓦当部裏面不定方向ナデ。 縁部は強い横ナデ。側面下半横ナデ。	江戸時代
瓦40	軒丸瓦	護岸4001	右巻(三)巴文　巴の尾は接しない。外区に珠文。	丸瓦部凸面縦ナデ。凹面横ナデ、コビキB。	江戸時代
瓦41	軒丸瓦	5区第1面整地層	右巻(三)巴文　巴の尾は互いに離れる。外区に珠文。	瓦当部裏面縁部に強い横ナデ。	江戸時代
瓦42	軒丸瓦	5区第1面整地層	左巻(三)巴文　巴の尾は互いに離れる。外区に珠文。	瓦当部裏面横ナデ。 丸瓦部凸面縦ナデ、凹面屈曲部横ナデ。	江戸時代
瓦43	軒丸瓦	5区第2面整地層	右巻三巴文	瓦当部裏面不定方向ナデ。 縁部は強い横ナデ。	江戸時代
瓦44	軒丸瓦	護岸3473	三つ葉葵文　外区に圏線。	瓦当部裏面不定方向ナデ。 縁部は強い横ナデ。側面下半横ナデ。	江戸時代
瓦45	軒丸瓦	水制4035	右巻(三)巴文　巴の尾は接し界線をなす。外区に珠文。	丸瓦部凸面縦ナデ。 凹面布目のち横ナデ、縦ナデ。	江戸時代
瓦46	軒丸瓦	水制4035	右巻三巴文　巴の頭は離れ、尾は接しない。外区に珠文。	瓦当部裏面不定方向ナデ。縁部は強い横ナデ。丸瓦部凸面縦ナデ、凹面布目、吊紐痕有り。	江戸時代
瓦47	鳥衾瓦	3区下段第1面検出	右巻三巴文　界線。外区に珠文。	丸瓦部凸面縦ナデ。	江戸時代
瓦48	軒平瓦	土坑3056	陰刻剣頭文　垂直に配置、8個。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面縄タタキ、裏面横ナデ。平瓦部凹面布目、凸面縄タタキ。	平安時代後期 同笵計2点。
瓦49	軒平瓦	土坑3056	陰刻剣頭文　垂直に配置、7個。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。	平安時代後期
瓦50	軒平瓦	土坑3056	陰刻剣頭文　垂直に配置、7個。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面縄タタキ、裏面横ナデ。平瓦部凹面布目のち横ナデ、凸面縄タタキ。釘穴有り。	平安時代後期
瓦51	軒平瓦	土坑3056	陰刻剣頭文　垂直に配置、7個。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面横ナデ、裏面縄タタキ。平瓦部凹面布目、凸面縄タタキ。ヘラ記号有り。	平安時代後期
瓦52	軒平瓦	土坑3056	陰刻剣頭文　垂直に配置。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面布目	平安時代後期
瓦53	軒平瓦	土坑3056	陰刻剣頭文　垂直に配置、7個。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面布目、凸面横ナデ。 ヘラ記号有り。	平安時代後期 同笵計2点。
瓦54	軒平瓦	土坑3056	陰刻剣頭文　垂直に配置、6.5個。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面縄タタキ、裏面横ナデ。平瓦部凹面布目のち横ナデ、凸面縄タタキ。	平安時代後期 同笵計5点。

№.	種類	遺構名	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	時期・同笵・同文等
瓦55	軒平瓦	土坑3056	陰刻剣頭文　垂直に配置。	段顎　折り曲げ成形。 平瓦部凹面布目、凸面縄タタキ。	平安時代後期
瓦56	軒平瓦	土坑3056	陰刻剣頭文　垂直に配置、7個。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面布目、凸面縄タタキ。	平安時代後期
瓦57	軒平瓦	溝5058	陰刻剣頭文　垂直に配置。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面横ナデ。 平瓦部凹面横ナデ、凸面縦ナデ。 ヘラ記号有り。	平安時代後期
瓦58	軒平瓦	溝5058	陰刻剣頭文	段顎　折り曲げ成形。 瓦当顎部凸面横ナデ。平瓦部凹面横ナデ。	平安時代後期
瓦59	軒平瓦	溝5026	陰刻剣頭文　垂直に配置。	段顎　瓦当上端部面取り。 顎部凸面・裏面横ナデ。	平安時代後期
瓦60	軒平瓦	溝5025	陰刻剣頭文　垂直に配置。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面縄タタキ、裏面横ナデ。平瓦部凹面布目、凸面縄タタキ。	平安時代後期
瓦61	軒平瓦	溝5027	陰刻剣頭文　垂直に配置。	段顎　折り曲げ成形。 瓦当上端部面取り。顎部凸面・裏面横ナデ。	平安時代後期
瓦62	軒平瓦	土坑3056	陰刻剣頭文　垂直に配置。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面布目のち縦ナデ、凸面横ナデ。	平安時代後期
瓦63	軒平瓦	溝3100	雁巴文	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面横ナデ、裏面横ナデ、右端布目。平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。	平安時代後期 『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017－16　瓦504と同笵。 同笵計2点。
瓦64	軒平瓦	溝3185	外行唐草文　中心飾り下向きC字。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面縄タタキ、裏面横ナデ。平瓦部凹面布目、凸面縄タタキのち横ナデ。ヘラ記号有り。	平安時代後期 鳥羽離宮KH1型式
瓦65	軒平瓦	溝5027	唐草文	直線顎　平瓦部凹面布目、凸面縄タタキ。	平安時代後期　丹波産
瓦66	軒平瓦	溝5058	唐草文	直線顎　平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。	平安時代後期　丹波産
瓦67	軒平瓦	護岸3200	外行唐草文　中心飾り上向きC字。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面横ナデ。 平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。	平安時代後期　播磨産
瓦68	軒平瓦	5区第3面整地層	外行唐草文　外区に界線。	段顎　折り曲げ成形。凹型台の圧痕残る。 瓦当上端部面取り。顎部凸面・裏面横ナデ。 平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。	室町時代 『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-16 瓦17と同笵。
瓦69	軒平瓦	井戸5028	外行唐草文　外区に界線。	段顎　折り曲げ成形。凹型台の圧痕残る。 瓦当上端部面取り。顎部凸面横ナデ、裏面縦ナデ。平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。	室町時代
瓦70	軒平瓦	あげ土	連珠文　外区に界線。	段顎　全体的に摩滅により調整不明。	室町時代
瓦71	軒平瓦	溝5050	外行唐草文　外区に界線。	段顎　折り曲げ成形。凹型台の圧痕残る。 瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凸面縦ナデ。	室町時代 『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017-16　瓦517と同笵。
瓦72	軒平瓦	溝5027	外行3転唐草文　中心飾り上向きC字。	段顎　瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。 平瓦部凹面横ナデ、凸面縦ナデ。	室町時代
瓦73	軒平瓦	5区第4面整地層	外行唐草文　外区に界線。	段顎　瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。 平瓦部凹面布目。	室町時代 『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-16 瓦15と同笵。
瓦74	軒平瓦	ピット5045	唐草文	段顎　瓦当上端部面取り。 平瓦部凹面・凸面縦ナデ。	室町時代
瓦75	軒平瓦	溝5025	外行唐草文	段顎　折り曲げ成形。凹型台の圧痕残る。 瓦当周縁内側面取り。顎部凸面・裏面横ナデ。 平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。	室町時代
瓦76	軒平瓦	護岸3001	外行3転唐草文　中心飾り下向き3葉文。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面摩滅著しく調整不明、凸面横ナデ。	室町時代

No.	種類	遺構名	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	時期・同笵・同文等
瓦77	軒平瓦	3区第2面 整地層	外行3転唐草文　中心飾り不明。	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。屈曲部強い横ナデ。平瓦部凹面横ナデ。	室町時代
瓦78	軒平瓦	5区第2面 整地層	外行唐草文　中心飾り上向き3葉文。	段顎　瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。	室町時代 『寺町旧域(妙満寺跡・本能寺跡)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-18　瓦138と同文。
瓦79	軒平瓦	5区第2面 整地層	外行2転唐草文　中心飾り上向き3葉文。 半裁花文か。	段顎　瓦当上端部面取り。 顎部凸面・裏面横ナデ、屈曲部強い横ナデ。	室町時代
瓦80	軒平瓦	溝4030	外行唐草文	段顎　瓦当上端部面取り。 顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面横ナデ。	室町時代
瓦81	軒平瓦	5区 北壁整形	外行唐草文	段顎　折り曲げ成形。凹型台の圧痕残る。 平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。	室町時代
瓦82	軒平瓦	5区第4面 整地層	唐草文	段顎　瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。 平瓦部凸面縦ナデ。	室町時代
瓦83	軒平瓦	溝5026	唐草文	段顎　瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。 平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。	室町時代
瓦84	軒平瓦	溝5026	唐草文　中心飾り	段顎　折り曲げ成形。凹型台の圧痕残る。 平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。	室町時代
瓦85	軒平瓦	礫敷5047	唐草文　中心飾り4葉を十字に配す。	段顎　折り曲げ成形。凹型台の圧痕残る。 平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。	室町時代
瓦86	軒平瓦	ピット5041	外行唐草文　中心飾り宝珠文。	段顎　瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。 平瓦部凹面横ナデ、凸面縦ナデ。	室町時代
瓦87	軒平瓦	ピット2257	外行唐草文　中心飾り宝珠文。	段顎　瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。平 瓦部凹面布目のち横ナデ。凸面横ナデ。	室町時代
瓦88	軒平瓦	礫敷5047	連珠文　外区に界線。	段顎　瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。	室町時代
瓦89	軒平瓦	5区第3面 整地層	幾何学文	段顎　瓦当上端部面取り。顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面・凸面横ナデ。	室町時代
瓦90	軒平瓦	溝5027	外行2転唐草文　中心飾り上向き3葉文。	段顎　瓦当上端部面取り。顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面・凸面横ナデ。	室町時代
瓦91	軒平瓦	溝5027	外行2転唐草文 中心飾り上向き3葉文か。	段顎　瓦当上端部面取り。顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面縦ナデ、凸面横ナデ。	安土桃山時代
瓦92	軒平瓦	溝4030	外行唐草文　中心飾り上向き3葉文。	段顎　瓦当上端部面取り。顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面縦ナデ、凸面横ナデ。	安土桃山時代
瓦93	軒平瓦	水制4035	外行唐草文　中心飾り上向き3葉文。	段顎　瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。 平瓦部凹面縦ナデ、凸面横ナデ。	安土桃山時代 『器瓦録想　其の二　伏見城』15　伏見区桃山筑前台町34-1(森川邸)　瓦13
瓦94	軒平瓦	5区第2面 整地層	外行唐草文　中心飾り上向き5葉文。	段顎　瓦当上端部面取り。 平瓦部凹面縦ナデ、凸面横ナデ。	安土桃山時代 『寺町旧域(妙満寺跡・本能寺跡)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-18　瓦138と同文か。
瓦95	軒平瓦	溝5010	外行唐草文 中心飾り上向き5葉文に珠文。	段顎　瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。	安土桃山時代
瓦96	軒平瓦	溝5027	外行唐草文　中心飾り2葉文。	段顎　顎貼付成形。瓦当上端部面取り。 顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面縦ナデ、凸面横ナデ。	安土桃山時代 『大坂城址Ⅲ』NH21B型式。ただし大坂城出土のものは金箔瓦。 同笵計2点。
瓦97	軒平瓦	溝5027	外行唐草文	段顎　瓦当上端部面取り。 顎部凸面・裏面横ナデ。	安土桃山時代
瓦98	軒平瓦	5区第2面 整地層	唐草文	段顎　瓦当顎部凸面横ナデ。	安土桃山時代
瓦99	軒平瓦	3区 護岸断割	外行唐草文	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面縦ナデ、凸面屈曲部付近横ナデ、縦ナデ。	江戸時代
瓦100	軒平瓦	護岸4001	外行唐草文	段顎　瓦当上端部面取り。顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面・凸面横ナデ。	江戸時代

№.	種類	遺構名	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	時期・同笵・同文等
瓦101	軒平瓦	溝4030	外行唐草文　中心飾り花文。	段顎　瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面横ナデ、凸面屈曲部横ナデ、縦ナデ。	江戸時代
瓦102	軒平瓦	溝4030	外行2転唐草文　中心飾り花文。	段顎　瓦当上端部面取り。顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面縦ナデ、凸面横ナデ。	江戸時代
瓦103	軒平瓦	水制4035	外行2転唐草文　中心飾り橘文。	段顎　瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。 平瓦部凹面・凸面横ナデ。	江戸時代
瓦104	軒平瓦	流路4024	外行2転唐草文　中心飾り橘文。	段顎　瓦当上端部面取り。 顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面縦ナデ。	江戸時代
瓦105	軒平瓦	水制4035	外行2転唐草文　中心飾り橘文。	段顎　瓦当上端部面取り。顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凸面横ナデ、凹面縦ナデ。	江戸時代 同笵瓦あり。
瓦106	軒平瓦	土坑4036	外行3転唐草文	段顎　瓦当上端部面取り。顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面ミガキ、凸面横ナデ。	江戸時代
瓦107	軒桟瓦	護岸3001	外行唐草文	段顎　折り曲げ成形。瓦当顎部凸面・裏面横ナデ。平瓦部凹面縦ナデ、凸面横ナデ。	江戸時代
瓦108	丸瓦	土坑3056		丸瓦凸面横ナデ、凹面布目のち糸切り、 端部面取り。	平安時代後期
瓦109	丸瓦	水制4035		丸瓦凸面縦ナデ、凹面布目。吊縄痕有り。 刻印有り(瓦114と同じ)。端部面取り。	江戸時代
瓦110	平瓦	土坑3056		平瓦凸面縄タタキ、凹面横ナデ。端部面取り。	平安時代後期
瓦111	平瓦	溝5026		凸面格子状タタキ。	室町時代
瓦112	輪違瓦	溝4030		凸面横ナデ、凹面縄タタキ。端部面取り。	江戸時代
瓦113	平瓦	水制4035	刻印:凹の三角形内に凸の横線		江戸時代 同種全2点
瓦114	丸瓦	水制4035	刻印:木瓜文		江戸時代 同種全3点
瓦115	平瓦	水制4035	刻印:円形の圏線		江戸時代 同種全2点
瓦116	平瓦	水制4035	刻印:丸に十		江戸時代 同種全6点
瓦117	平瓦	水制4035	刻印:凹の四角内に凸の菱		江戸時代 同種全2点
瓦118	平瓦	護岸4001	刻印:菱に蔦か		江戸時代 同種全1点
瓦119	道具瓦	護岸4001	刻印:円形の圏線の周りに七つの列点。 八曜か		江戸時代 同種全1点

付表３　木製品一覧表

（）は残存値、単位はcm

No.	器種	遺構名	口径	器高	底径	長	幅	厚	備考
木1	漆器蓋	溝3100	13.9	4.0	5.5				
木2	漆器椀	溝4030	13.3	9.0	6.2				
木3	漆器椀	溝3055	14.8	6.1	7.0				
木4	漆器椀	溝3055	－	(7.3)	7.4				
木5	漆器椀	溝4030	－	(7.8)	6.8				丸に右三巴
木6	漆器椀	溝4030	－	(7.0)	5.2				丸に右三巴
木7	漆器椀	水制4035	10.9	6.0	5.0				
木8	漆器椀	溝4030	13	8.6	6.7				丸に右三巴
木9	漆器椀	溝4030	12.5	6.8	6.1				
木10	漆器椀	溝3100	－	(5.4)	6.7				
木11	漆器浅椀	溝4030	10	3.1	4.7				
木12	漆器浅椀	溝3100	13.9	(3.4)	6.8				
木13	杯	溝4030	－	(4.0)	2.4				
木14	皿	流路3400				(5.2)	(21.4)	1.0	
木15	箸	溝3055				18.3	0.7	0.5	
木16	箸	溝3055				18.9	0.7	0.7	
木17	箸	溝3055				18.9	0.6	0.5	
木18	箸	溝3100				(18.6)	0.6	0.5	
木19	箸	溝4030				21.8	0.7	0.5	
木20	箸	溝3055				23.0	0.9	0.5	
木21	箸	溝3055				(24.5)	0.8	0.6	
木22	箸	溝3055				25.1	0.8	0.7	
木23	箸	溝4030				25.1	0.9	0.7	
木24	箸	流路4024				26.1	1.0	0.5	
木25	箸	流路4024				25.8	1.8	0.7	
木26	火付け木	溝4030				9.5	0.7	0.9	
木27	火付け木	溝4030				(12.5)	2.6	0.2	
木28	火付け木	溝4030				13.2	2.2	0.2	
木29	火付け木	溝4030				16.2	1.5	1.2	
木30	棒状木製品	溝4030				12.1	4.0	3.1	
木31	有頭木製品	溝3055				20.3	1.6	1.5	
木32	鞘	溝3055				18.1	2.1	1.5	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	遺構名	口径	器高	底径	長	幅	厚	備考
木33	柄	溝3185				14.8	2.8	0.7	
木34	紡輪	溝3185				8.6	8.1	0.9	
木35	板状木製品	溝3185				4.6	(18.5)	0.7	
木36	栓	溝3055				3.8	2.3	1.8	
木37	不明	溝3055				(5.7)	3.8	4.0	
木38	不明	溝3055				(5.4)	3.8	3.7	
木39	下駄	溝3185				15.1	10.6	3.3	連歯下駄
木40	下駄	溝3185				(24.1)	(5.2)	2.9	連歯下駄
木41	下駄	溝2646				20.9	8.7	(3.0)	差歯下駄
木42	下駄	溝3055				21.1	(9.5)	3.2	連歯下駄
木43	下駄	溝3055				20.5	11.3	4.4	連歯下駄
木44	下駄	水制4035				20.7	8.5	(3.7)	差歯下駄
木45	下駄	溝2646				11.3	(11.6)	1.5	差歯下駄の歯
木46	折敷	溝3055				(14.2)	16.6	1.0	
木47	折敷	溝3055				14.8	15.8	0.7	線刻、木釘あり
木48	折敷	溝3055				31.9	(13.0)	0.4	周囲に漆が塗られる
木49	折敷	溝4030				27.8	(6.0)	0.5	木釘あり
木50	折敷	溝4047				(35.7)	7.9	0.9	綴紐2箇所
木51	折敷か	溝3055				73.0	25.1	1.5	木釘、綴紐あり
木52	曲物	護岸4031				径28.5	高さ7.1	－	木釘、綴紐あり
木53	曲物	溝3100				径20.0	高さ (13.0)	－	綴紐あり
木54	曲物	溝4047				10.8	10.5	1.0	底板、側面に釘穴、柄杓か
木55	曲物	水制4035				11.1	11.1	0.5	底板、側面に釘穴、柄杓か
木56	曲物	流路4024				(13.0)	13.4	0.6	底板、木釘あり、柄杓か
木57	柄杓	水制4035				(36.1)	2.7	1.3	柄
木58	柄杓	溝4030				(30.1)	3.1	1.0	柄
木59	柄杓	流路4024				(33.2)	2.9	1.9	柄
木60	柄杓	流路4024				(26.5)	2.1	1.0	柄
木61	柄杓	溝4030				(41.5)	2.7	1.3	柄
木62	杓子か	溝3055				37.9	(10.2)	0.8	
木63	箆	溝3185				(6.7)	1.9	0.3	
木64	箆	溝3100				19.6	3.0	0.4	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	遺構名	口径	器高	底径	長	幅	厚	備考
木65	箆	溝3055				16.7	3.3	0.7	
木66	舟形	流路4024				(16.0)	5.8	3.6	
木67	舟形	溝3185				(39.7)	11.6	3.6	
木68	玩具	溝3185				5.3	5.1	4.8	毬杖の毬か
木69	玩具	溝3185				5.0	5.1	4.5	毬杖の毬か
木70	人形頭	溝4030				9.5	3.5	(4.0)	
木71	工具か	溝3055				15.2	2.5	1.1	
木72	不明	溝3185				11.8	1.7	1.1	
木73	不明	溝3185				12.0	3.4	1.2	
木74	不明	溝3100				3.9	(12.0)	1.4	付着物あり。漆か
木75	不明	溝3055				(19.0)	3.4	2.0	紐の圧痕あり
木76	不明	溝4030				11.4	3.2	3.0	
木77	不明	溝4030				16.0	2.8	1.2	
木78	不明	井戸2666				23.4	1.8	1.3	
木79	不明	流路4024				19.4	3.5	0.6	
木80	不明	溝3055				13.6	15.5	1.1	
木81	不明	井戸5028				15.6	7.9	2.2	
木82	不明	流路4024				(16.3)	(4.1)	0.9	
木83	不明	水制4035				(16.4)	(2.1)	0.3	
木84	櫓	水制4035				84.7	9.2	3.6	
木85	杭	溝4030				(52.5)	11.9	10.0	
木86	杭	溝4030				(42.9)	(8.9)	7.8	六角形
木87	卒塔婆	溝3185				52.8	1.9	0.4	墨書
木88	卒塔婆	溝3055				(67.1)	8.3	0.4	墨書
木89	卒塔婆	溝3055				72.5	10.2	1.2	墨書
木90	卒塔婆	溝3055				(59.8)	7.9	0.7	墨書
木91	卒塔婆	溝3055				(20.8)	8.7	0.7	墨書
木92	卒塔婆	溝3055				(24.7)	(6.3)	0.4	墨書
木93	卒塔婆	溝3055				(18.9)	7.1	0.9	墨書
木94	卒塔婆	溝3055				(18.2)	(7.4)	0.7	墨書
木95	木簡	溝3055				(16.0)	8.1	0.8	墨書
木96	卒塔婆	溝3055				(15.2)	(7.4)	1.1	墨書

( )は残存値、単位はcm

№.	器種	遺構名	口径	器高	底径	長	幅	厚	備考
木97	卒塔婆	溝3055				(56.1)	7.7	0.6	
木98	卒塔婆	溝3055				68.8	7.7	0.7	
木99	卒塔婆	溝2646				12.7	7.8	0.8	
木100	転読札	溝3055				23.3	6.1	0.5	墨書
木101	祈祷札	溝3055				18.0	2.5	0.4	墨書
木102	荷札	水制4035				16.8	2.8	0.3	墨書
木103	木簡	溝4030				(8.6)	2.1	0.9	墨書
木104	船材	水制4035				533.0	44.6	6.7・4.5	
木105	船材	水制4035				(198.9)	27.5	6.8	
木106	船材	水制4035				(238.4)	(18.6)	5.5	
木107	船材	水制4035				(191.4)	(39.5)	5.7	
木108	船材	水制4035				(120.6)	13.0	4.8	
木109	船材	水制4035				154.6	16.7	5.8	
木110	船材	水制4035				(181.9)	(19.9)	6.5	
木111	船材	水制4035				(116.4)	(16.4)	6.1	
木112	船材	水制4035				46.0	11.9	4.6	
木113	船材	水制4035				62.3	12.1	4.3	
木114	船材	水制4035				(84.3)	(18.0)	(7.2)	
木115	部材	流路4024				(43.0)	10.2	3.3	

付表４　金属製品一覧表

（）は残存値、単位はcm

No.	種類	器種	遺構名	長	幅	厚	重量(g)	備考
金1	銅合金製品	八双金具	5区第2面整地層	23.7	8.7	3.2	190.4	角度135°
金2	銅合金製品	八双金具	5区第2面整地層	23.0	9.4	3.2	191.1	角度130°
金3	鉄製品	小刀	溝4030	22.1	1.0	0.5	34.8	
金4	鉄製品・銅製品	小刀	溝4030	(21.1)	1.4	0.6	38.1	
金5	鉄製品・銅製品	小刀	溝4030	23.2	1.5	0.5	44.2	
金6	銅製品	小刀	溝4030	(11.1)	1.1	0.5	26.6	
金7	銅製品	小刀	水制4035	(10.4)	1.0	0.5	24.1	柄
金8	銅製品	小刀	護岸4001	(10.1)	1.5	0.6	24.9	柄
金9	銅製品	小刀	落込3050	(9.7)	1.2	0.4	15.8	柄
金10	鉄製品	小刀	水制4035	(20.5)	1.4	0.3	16.7	
金11	鉄製品	小刀	水制4035	(11.5)	1.7	0.5	14.9	目釘残る
金12	鉄製品	短刀	4区第2面整地層	(30.3)	1.9	0.6	42.5	
金13	鉄製品	短刀	溝3185	(30.6)	2.8	0.6	102.6	
金14	真鍮	煙管 雁首	流路4024	7.8	1.6	3.4	14.9	羅宇残存、火皿に植物片
金15	銅製品	煙管 雁首	水制4035	7.7	1.4	3.4	9.7	羅宇残存
金16	真鍮	煙管 雁首	溝4030	8.7	1.7	3.4	16.5	
金17	銅製品	煙管 雁首	水制4035	(7.7)	(2.1)	1.0	7.6	線刻あり
金18	真鍮	煙管 吸口	溝4030	4.8	0.9	0.7	2.1	
金19	真鍮	煙管 吸口	溝4030	(6.6)	1.0	1.1	3.8	
金20	真鍮	煙管 吸口	溝4030	8.2	1.1	0.9	5.5	線刻あり
金21	真鍮	煙管 吸口	水制4035	9.7	0.6	0.6	5.9	羅宇残存
金22	銅製品	簪	4区撹乱	11.9	1.0	0.2	3.7	
金23	銅製品	簪	護岸4001	(9.2)	(2.2)	2.0	4.1	
金24	鉛	錘	護岸3001	(1.2)	1.2	1.2	8.6	
金25	鉛	錘	護岸3001	1.5	1.2	1.2	8.7	
金26	鉛	錘	護岸3001	(1.9)	1.6	1.6	21.0	
金27	鉛	錘	護岸3001	2.4	1.8	1.8	38.3	
金28	鉛	錘	3区表採	3.0	2.2	0.9	45.4	
金29	銅製品	鈴	溝4030	(3.2)	3.0	3.0	17.1	
金30	銅製品	蓋	護岸3001	径10.2	高さ(2.1)	－	37.2	
金31	鉄製品	鏃・雁股	流路3400	(16.1)	(5.3)	1.0	36.8	
金32	鉄製品	槍先	溝3100	(17.2)	1.1	1.1	30.0	

( )は残存値、単位はcm

No.	種類	器種	遺構名	長	幅	厚	重量(g)	備考
金33	鉄製品	鍋か	溝4030	(4.0)	(7.6)	−	26.8	
金34	鉄製品	羽釜	溝5025	(1.9)	(8.8)	−	45.1	
金35	鉄製品	鍋か	溝5021	(8.1)	(7.0)	−	64.8	
金36	鉄製品	火箸	護岸4031	17.1	3.2	4.0	9.3	
金37	銅製品	火箸	護岸4001	11.3	13.8	0.4	22.0	
金38	鉄製品	十能	溝5027	(23.8)	(17.2)	4.2	963.0	
金39	鉄製品	不明	流路3400	5.8	5.0	2.5	149.9	
金40	鉄製品	鉄斧	流路3400	7.2	(4.0)	1.5	72.4	袋状鉄斧
金41	鉄製品	釘	流路3400	(19.7)	2.6	1.0	151.1	
金42	鉄製品	釘	流路3400	17.0	2.8	1.0	175.3	
金43	鉄製品	釘	流路3400	14.6	1.7	0.7	36.6	
金44	鉄製品	釘	流路3400	(7.9)	0.8	0.5	8.0	
金45	鉄製品	釘	水制4035	(11.5)	(3.5)	1.6	20.8	
金46	鉄製品	釘	流路4024	14.0	1.2	1.4	36.7	
金47	鉄製品	釘	溝4030	(8.9)	1.9	0.6	16.6	
金48	銅製品	肘壷か	護岸3001	4.7	1.5	1.6	17.3	
金49	銅製品	鋲	護岸3200	3.9	0.9	0.9	1.0	
金50	鉄製品	鋌	4区第2面整地層	12.3	27.9	1.8	984.5	
金51	鉄製品	鋌	護岸3001	4.5	4.1	1.1	74.4	
金52	鉄製品	鉄挺か	土坑3392	18.5	2.6	1.0	93.0	叩いて鍛えた
金53	鉄製品	椀形滓	溝3100	12.5	11.4	5.1	665.0	
金54	鉄製品	鎌	護岸4001	(12.9)	(20.0)	2.8	−	
金55	鉄製品	鎌	溝4030	10.6	(17.7)	0.5	72.8	
金56	鉄製品	鎌	溝4030	(12.2)	(17.0)	3.0	53.1	
金57	鉄製品	鎌	溝4030	15.3	20.4	3.5	82.2	
金58	鉄製品	鎌	水制4035	13.6	(16.4)	0.5	57.0	
金59	鉄製品	環	水制3410	(17.9)	6.9	3.8	619.0	係留環
金60	鉄製品	錨	水制3410	81.1	41.6	−		四爪鉄錨

付表５　銭貨一覧表

（）は残存値、単位はcm

No.	種類	遺構名	縦	横	厚	重量(g)	初鋳年	備考
銭1	和同開珎	流路3400	2.47	2.48	0.12	2.35	708	
銭2	和同開珎	流路3400	2.50	2.50	0.16	2.73	708	
銭3	神功開寳	流路3400	2.48	2.51	0.17	3.86	765	
銭4	神功開寳	流路3400	2.49	2.49	0.15	3.09	765	
銭5	長年大寳	流路3400	1.96	1.99	0.15	1.87	848	
銭6	長年大寳	流路3400	1.94	1.95	0.17	1.88	848	
銭7	長年大寳	流路3400	1.95	1.95	0.15	1.71	848	
銭8	貞観永寳	流路3400	1.92	1.90	0.18	2.24	870	
銭9	貞観永寳	流路3400	1.97	1.96	0.14	2.07	870	
銭10	寛永通寳(古)	護岸3001	2.44	2.44	0.14	3.70	1636	
銭11	寛永通寳(新)	護岸3001	2.56	2.57	0.18	3.43	1668	背:文
銭12	寛永通寳(新)	護岸3001	2.29	2.29	0.12	2.05	1668	
銭13	寳永通寳	護岸3200	3.79	3.78	0.17	9.76	1708	背:永久世用「珍」刻印
銭14	文久永寳(草文)	井戸3057	2.68	2.70	0.12	3.37	1863	背:波　四文銭
銭15	雁首銭	護岸3001	1.88	1.96	0.25	2.93	―	
銭16	慶長一分判金	水制4035	1.73	1.03	0.16	4.45	1601	
銭17	開元通寳	護岸4031	2.39	2.38	0.11	2.73	621	
銭18	至道元寳(草)	流路4024	2.38	2.39	0.11	2.02	995	
銭19	景徳元寳	護岸4001	2.37	2.37	0.12	2.57	1004	
銭20	祥符通寳	3区あげ土	2.48	2.49	0.13	3.27	1009	
銭21	祥符通寳	溝4030	2.18	2.19	0.09	1.62	1009	模鋳銭か
銭22	祥符元寳	水制4035	2.48	2.46	0.12	2.94	1009	
銭23	天禧通寳	水制4035	2.49	2.48	0.13	2.37	1017	
銭24	天聖元寳(真)	落込3050	(2.39)	(2.0)	0.12	1.08	1023	
銭25	天聖元寳(篆)	溝4030	(2.44)	2.48	0.14	2.69	1023	
銭26	景祐元寳(篆)	水制4035	2.45	2.44	0.13	2.37	1034	
銭27	皇宋通寳(真)	溝4030	2.45	2.45	0.12	3.73	1038	
銭28	皇宋通寳(篆)	5区第2面整地層	2.25	2.25	0.10	1.70	1038	
銭29	嘉祐通寳(篆)	4区第2面整地層	2.45	2.45	0.12	3.27	1056	
銭30	治平元寳(篆)	水制4035	2.37	2.38	0.11	2.99	1064	
銭31	熙寧元寳(真)	5区第3面整地層	2.34	2.34	0.15	3.59	1068	
銭32	元豊通寳(行)	溝4030	2.35	2.36	0.09	2.56	1078	

( )は残存値、単位はcm

№.	種類	遺構名	縦	横	厚	重量(g)	初鋳年	備考
銭33	元豊通寶(篆)	3区あげ土	2.46	2.47	0.12	2.53	1078	
銭34	元祐通寶(行)	水制4035	2.39	2.40	0.11	2.57	1086	
銭35	元祐通寶(篆)	護岸4031	2.36	2.36	0.12	2.77	1086	
銭36	紹聖元寶(行)	溝4030	2.42	2.42	0.11	3.38	1094	
銭37	紹聖元寶(篆)	流路4024	2.34	2.39	0.11	2.98	1094	
銭38	聖宋元寶(行)	3区表採	2.43	2.42	0.09	3.06	1101	
銭39	聖宋元寶(篆)	4区第2面整地層	2.43	2.36	0.15	2.59	1101	
銭40	大観通寶	5区第2面整地層	2.41	2.38	0.14	1.95	1107	
銭41	政和通寶(分楷)	5区第3面整地層	2.46	2.48	0.15	3.65	1111	
銭42	政和通寶(篆)	5区第2面整地層	2.42	2.42	0.13	2.25	1111	
銭43	淳熙元寶(真)	3区上段検出中	2.50	(2.50)	0.13	1.44	1174	
銭44	嘉泰通寶	3区あげ土	2.49	2.46	0.13	3.34	1201	
銭45	洪武通寶	5区第2面整地層	2.32	2.33	0.19	3.82	1368	
銭46	永樂通寶	5区第3面整地層	2.51	2.51	0.17	3.88	1408	
銭47	世高通寶	溝4030	2.33	2.33	0.13	3.28	1461	

付表６　石製品一覧表

（）は残存値、単位はcm

No.	器形	遺構名	長	幅	厚	重量(g)	石材	備考
石1	打製石鏃	流路3400	3.5	1.1	0.5	2.0	サヌカイト	
石2	打製石鏃	竪穴2800	3.8	2.3	0.4	2.6	サヌカイト	
石3	磨製石刀か	流路3400	(8.6)	2.8	0.8	30.5	粘板岩	
石4	砥石	流路3400	(3.4)	(3.4)	1.2	22.8	砂岩	
石5	砥石	流路4024	(4.5)	3.8	1.3	25.5	泥岩	
石6	砥石	水制4035	(8.0)	3.1	1.0	42.5	泥岩	
石7	砥石	5区第4面整地層	(7.0)	3.2	0.6	28.5	泥岩	
石8	砥石	溝5026	7.0	3.0	1.4	46.5	泥岩	
石9	砥石	流路4024	(6.6)	(5.7)	(1.0)	50.5	泥岩	
石10	砥石	溝4030	(6.5)	4.4	1.9	82.0	泥岩	
石11	砥石	水制4035	(10.5)	3.4	1.0	81.0	泥岩	
石12	砥石	流路4024	(15.7)	(4.5)	2.7	285.5	泥岩	
石13	砥石	流路4024	(13.8)	(4.3)	2.2	228.0	頁岩	
石14	砥石	土坑3056	(15.2)	4.6	1.3	170.9	粘板岩	
石15	砥石	土坑3036	(12.8)	7.0	3.5	592.5	頁岩	
石16	砥石	土坑3147	(30.1)	(10.7)	9.6	3.5kg	砂岩	
石17	砥石	流路3400	(12.7)	(8.8)	8.6	1.0kg	砂岩	一部被熱
石18	石鍋	溝2646	(5.2)	(10.8)		140.5	滑石	
石19	石鍋	井戸3058	6.8	13.1	2.6	274.0	滑石	温石転用、外面スス
石20	石鍋	溝3185	6.0	(11.8)	2.4	236.0	滑石	温石転用、外面スス
石21	石鍋	3区検出中	3.3	7.4	3.0	84.5	滑石	温石転用
石22	石鍋	溝3185	5.4	4.3	2.3	70.3	滑石	温石転用
石23	碁石	地業3006	2.1	2.1	0.5	3.6	粘板岩	
石24	硯	流路4024	12.5	5.2	1.5	111.0	粘板岩	
石25	硯	溝4030	12.3	4.2	1.1	74.0	頁岩	
石26	硯	護岸3001	12.2	6.3	1.7	218.1	粘板岩	
石27	硯	流路4024	(8.3)	(10.5)	(2.4)	230.5	粘板岩	一部被熱
石28	五輪塔	4区第3面整地層	20.4	13.1	13.2	4.0kg	花崗岩	空風輪
石29	五輪塔	3区重機掘削	21.6	14.8	14.8		花崗岩	空風輪
石30	五輪塔	柱穴4041	11.7	20.6	11.7	7.0kg	花崗岩	火輪
石31	五輪塔	3区重機掘削	17.6	22.3	22.2	11.1kg	花崗岩	水輪
石32	五輪塔	溝3100	21.4	24.1	24.1	1.6kg	花崗岩	水輪

( )は残存値、単位はcm

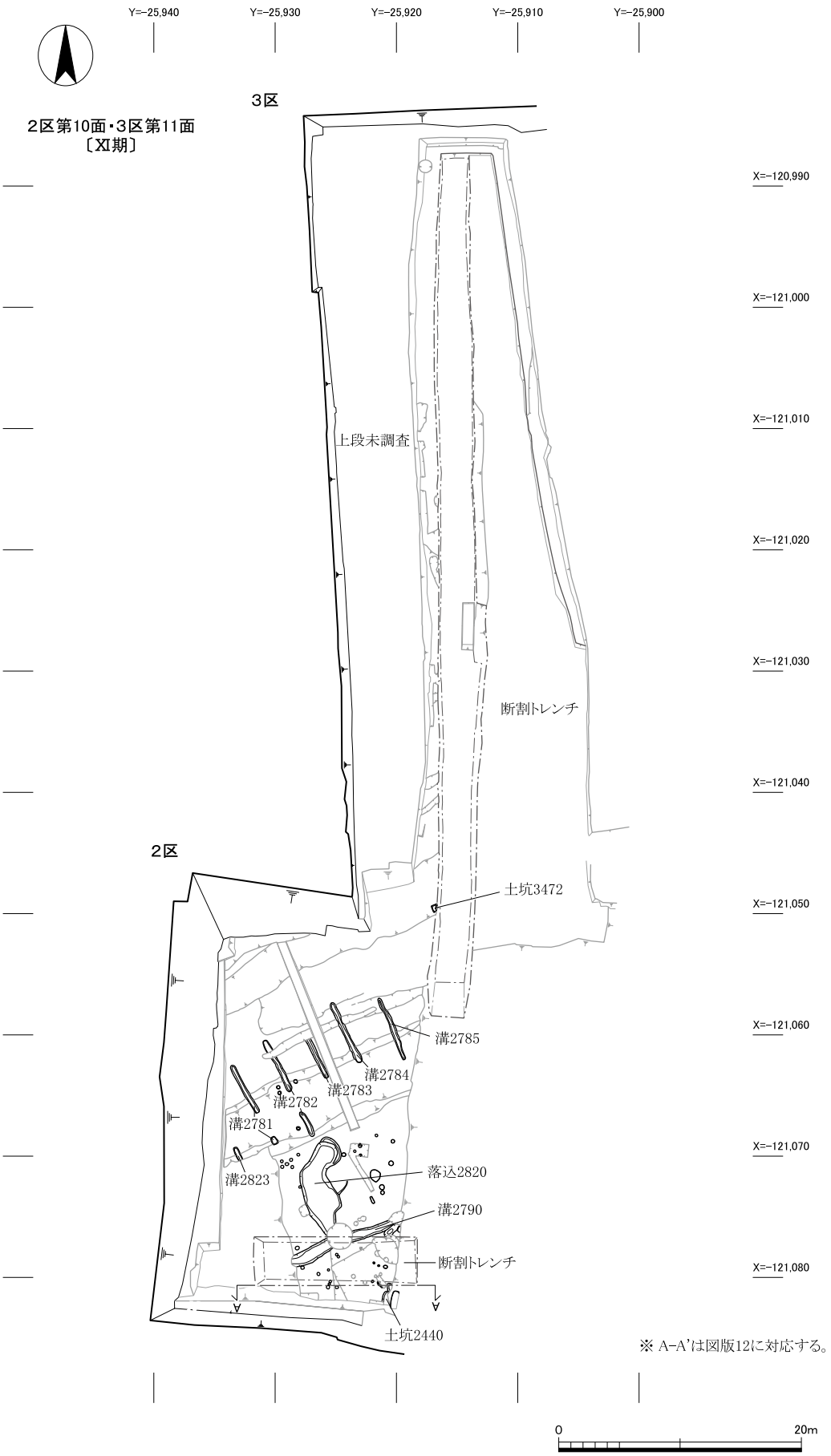
No.	器形	遺構名	長	幅	厚	重量(g)	石材	備考
石33	五輪塔	護岸3200	23.5	27.3	27.3	24.0kg	花崗岩	水輪
石34	五輪塔	護岸3200	21.8	21.9	16.3	17.0kg	花崗岩	地輪
石35	五輪塔	4区第2面整地層	24.4	12.4	12.4	3.0kg	花崗岩	一石五輪塔
石36	五輪塔	堀2123	(33.7)	12.1	12.1	6.0kg	花崗岩	一石五輪塔
石37	石仏	溝4030	36.0	30.2	11.2	20.0kg	花崗岩	被熱、方形彫込　半肉彫　二尊立像
石38	石仏	溝4030	31.6	23.0	10.2	14.8kg	花崗岩	被熱、方形彫込　半肉彫　一尊立像
石39	礎石	護岸3001	30.4	(25.1)	13.0	13.0kg	花崗岩	軸受穴
石40	搗き臼	護岸3001	(41.7)	(22.6)	高さ (20.8)		花崗岩	
石41	搗き臼	護岸3001	(44.6)	(29.7)	高さ (23.0)		花崗岩	
石42	搗き臼	溝4030	57.7	53.2	高さ 37.7		花崗岩	
石43	粉挽き臼	井戸2666	(18.8)	(26.5)	高さ 12.3		花崗岩	
石44	茶臼	護岸4001	22.3	26.0	高さ 12.4	9.0kg	砂岩	

付表７　土製品一覧表

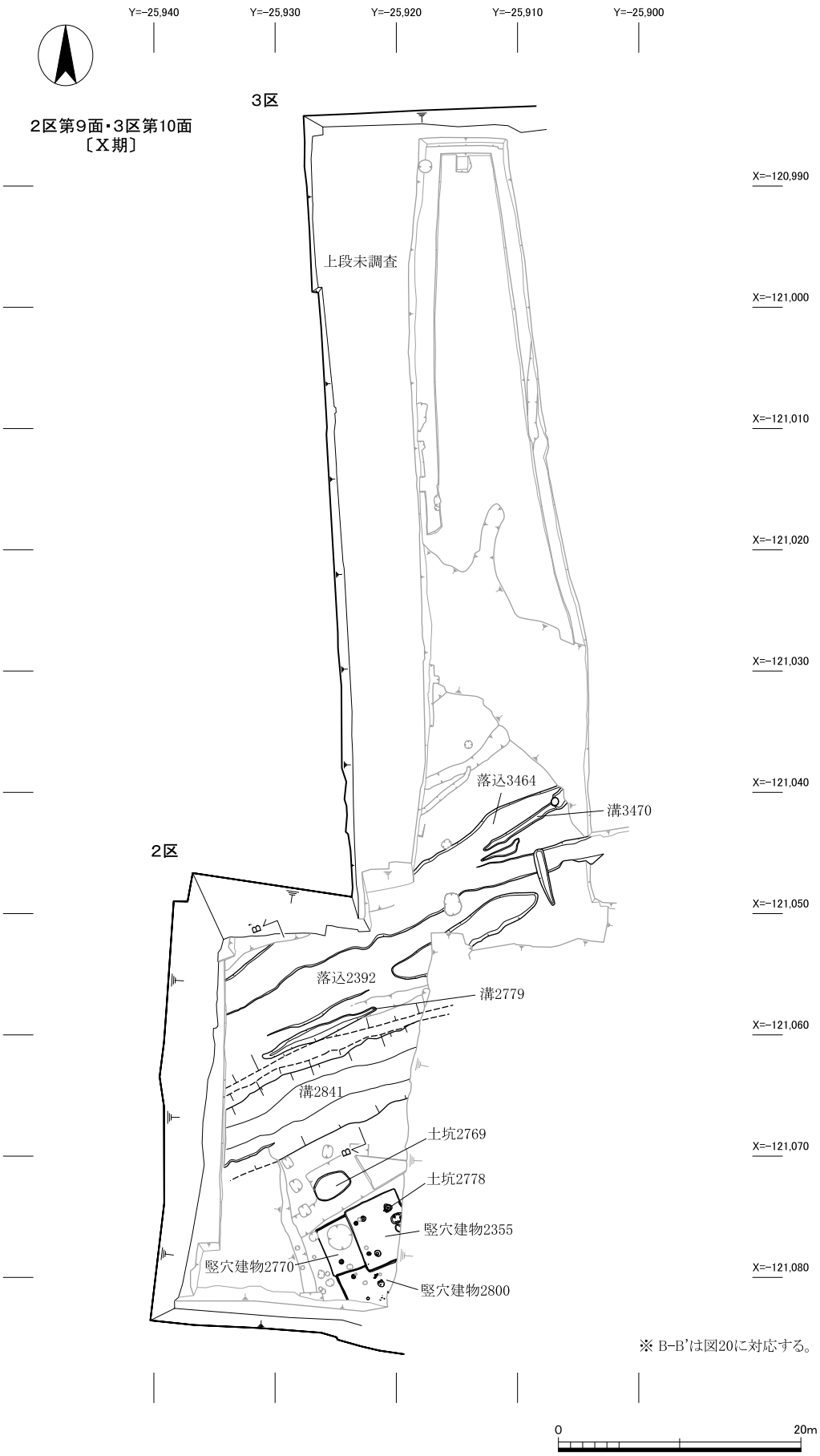
( )は残存値、単位はcm

No.	器種	遺構名	縦	横	厚	色調	胎土	備考
土1	土錘	流路3400	4.4	2.2	2.3	10YR5/2	φ1mm以下の長石・石英	有溝
土2	土錘	溝3055	2.7	0.8	0.8	5YR6/4	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒	
土3	土錘	溝3185	(2.8)	0.8	0.7	10YR8/3	φ0.5mm以下の長石・石英・赤色粒	
土4	土錘	3区第6面整地層	(4.1)	1.0	1.0	5YR6/4	φ1mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒	
土5	土錘	2区第6面検出中	5.2	1.3	1.3	10YR8/3	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	
土6	土錘	5区第3面整地層	2.0	1.6	1.5	2.5YR6/3	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	
土7	土錘	4区第3面整地層	4.7	5.2	5.4	7.5YR7/3	φ4mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒	
土8	土錘	5区第2面整地層	4.3	3.6	3.0	5YR7/4	φ1.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒	
土9	土錘	溝4050	2.2	1.5	1.5	5YR7/4	φ1mm以下の長石・石英・赤色粒	
土10	土錘	5区第3面整地層	4.8	5.2	5.0	7.5YR6/4	φ1mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒	
土11	円盤状土製品	土坑3056	2.2	2.3	0.4	10YR7/2	φ0.5mm以下の長石・石英	
土12	円盤状土製品	土坑3056	2.0	2.1	0.4	7.5YR7/2	φ0.5mm以下の長石・石英	
土13	円面硯	流路3400	－	－	器高 (4.4)	N6/0	φ0.5mm以下の長石・黒色粒	須恵器
土14	ミニチュア摺皿	溝5027	口径5.7	－	器高1.8	7.5YR7/2	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	
土15	土人形	護岸3200	(3.3)	(5.8)	2.9	7.5YR8/2	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート	鳩か
土16	ミニチュア羽釜	溝4030	口径7.0	－	器高3.6	10YR7/2	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒	
土17	有孔塼	土坑2569	－	15.4	4.4	5Y8/1	φ7mm以下の長石・石英・チャート	

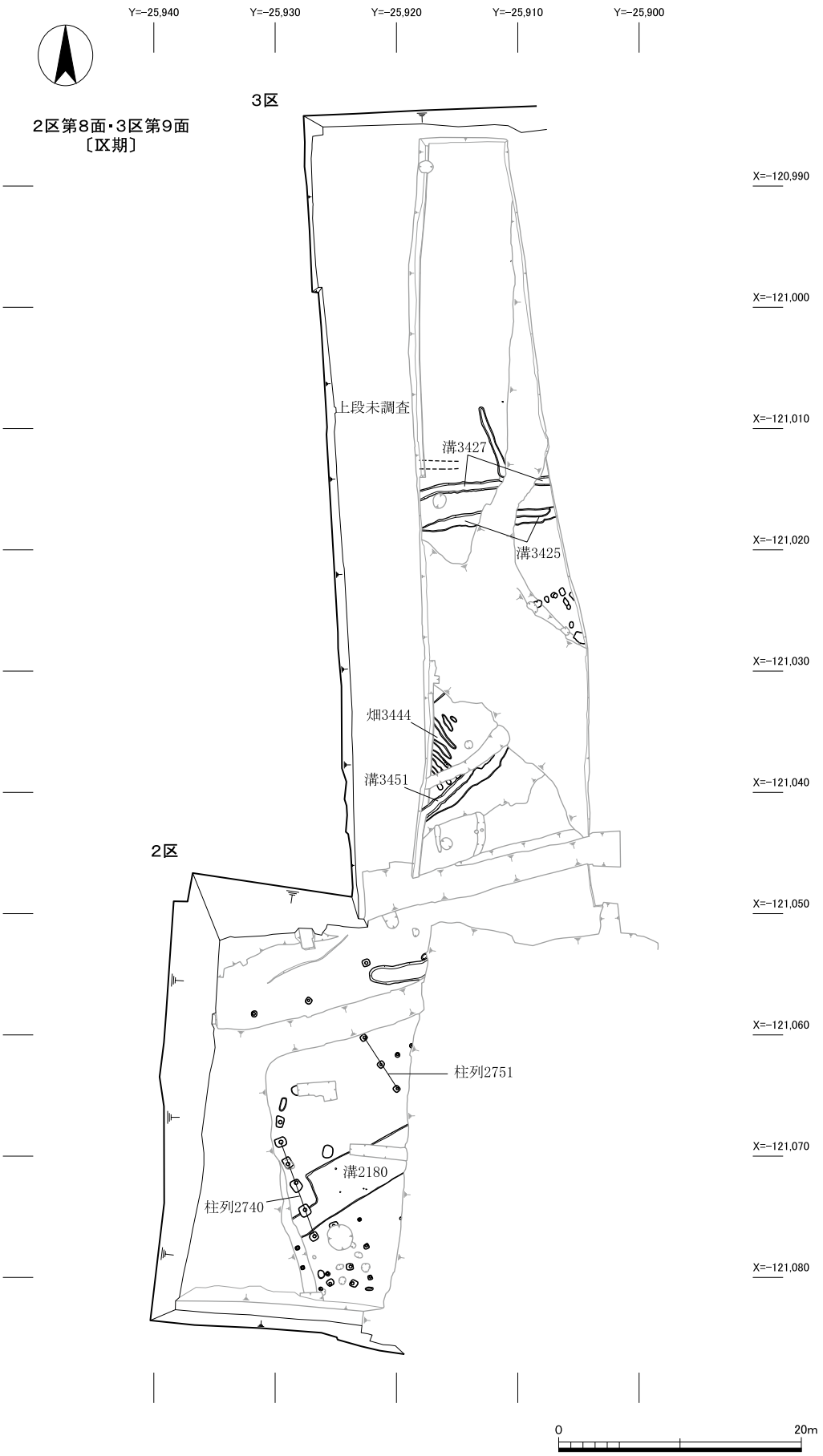
図　　版



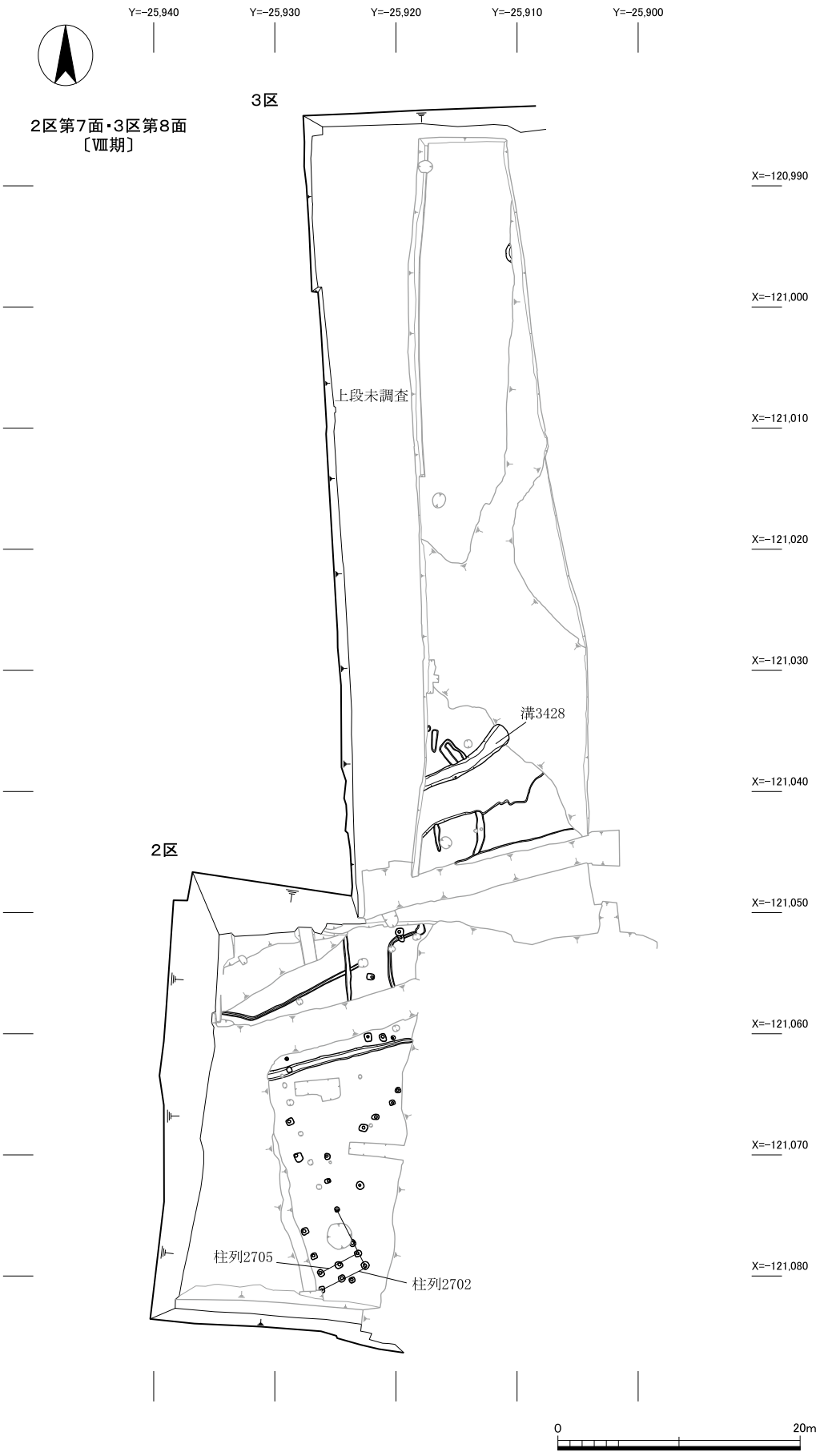
２区第10面・３区第11面〔XI期〕平面図（１：500）



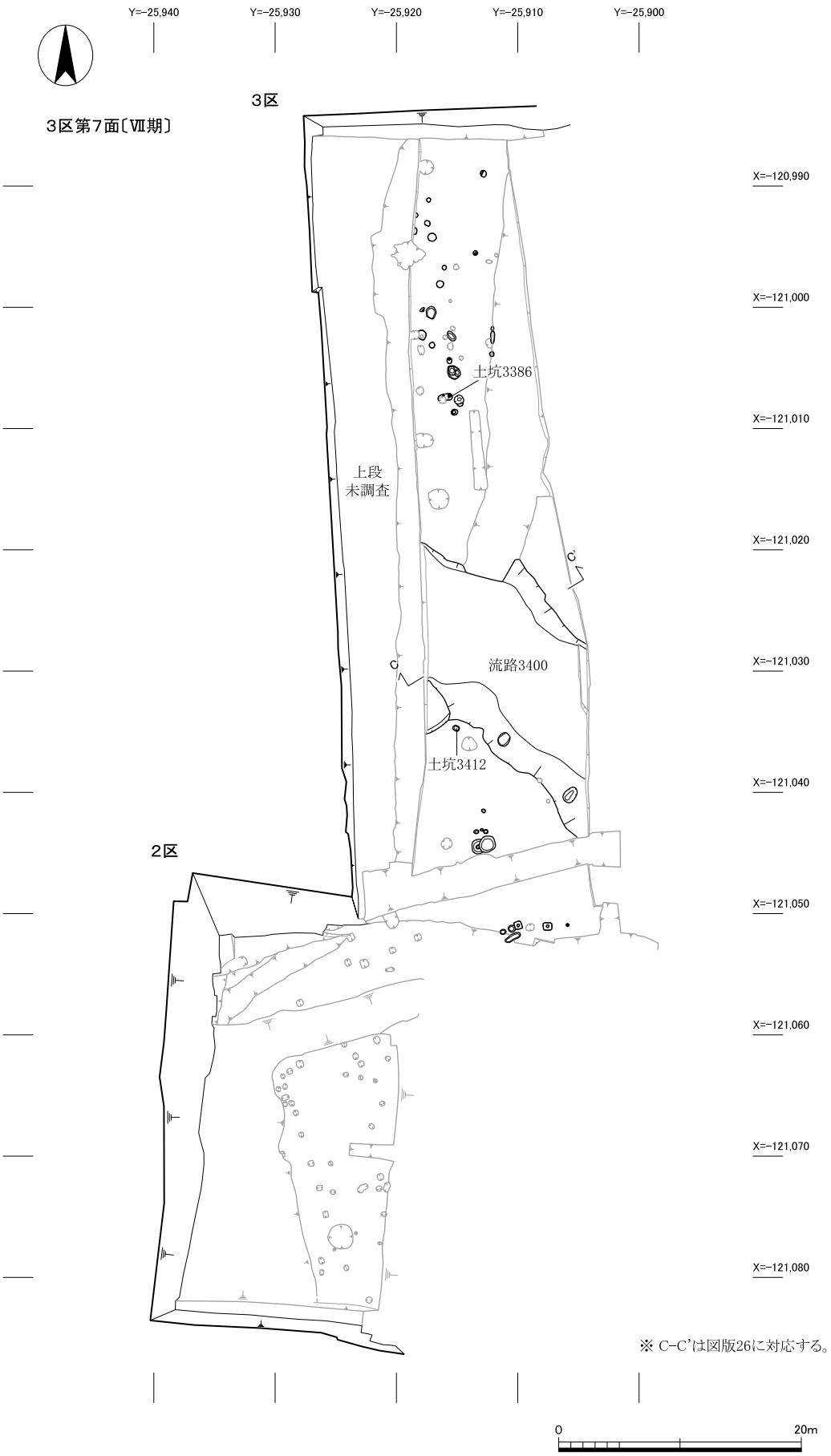
２区第９面・３区第10面〔Ｘ期〕平面図（１：500）



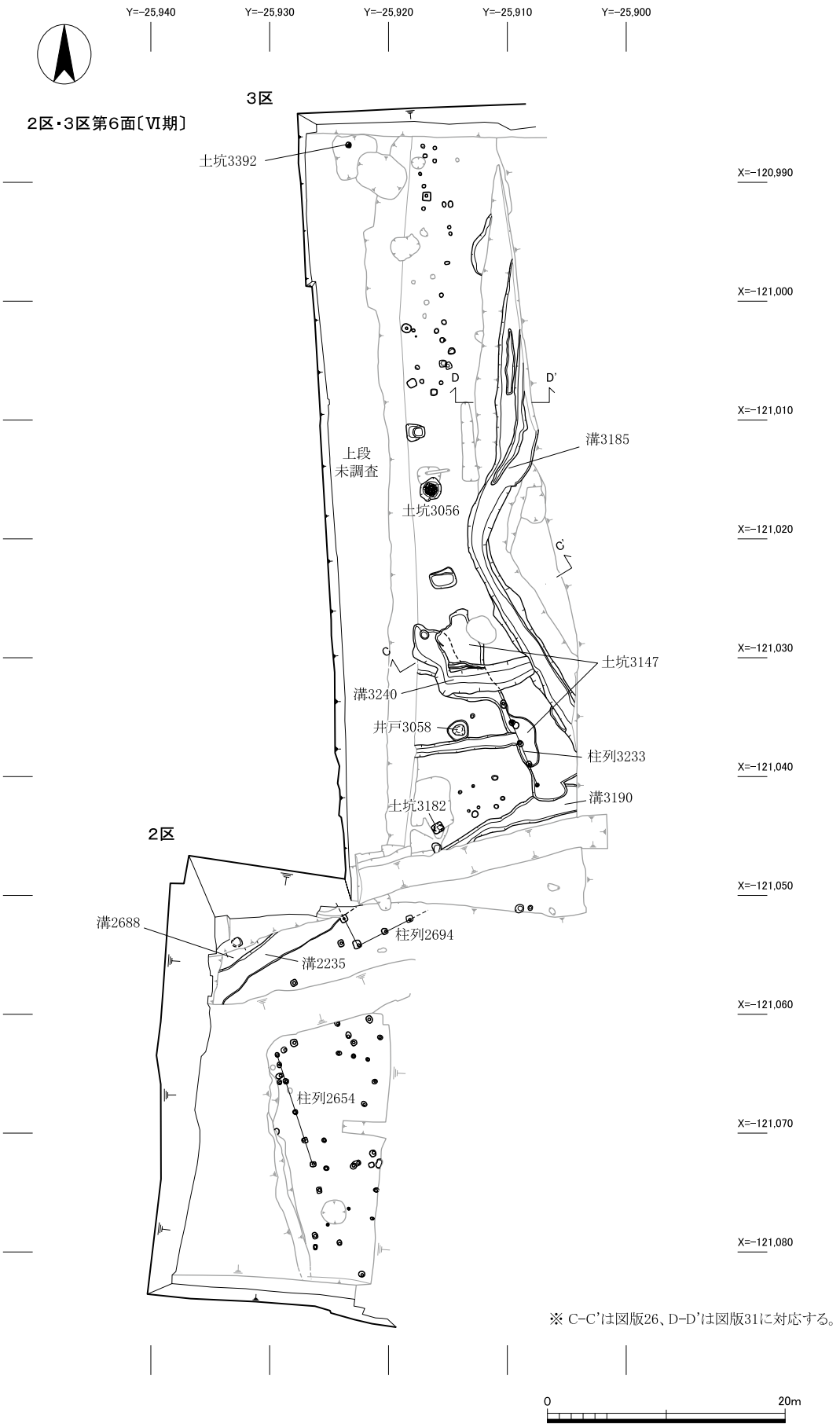
2区第8面・3区第9面〔Ⅸ期〕平面図（1：500）



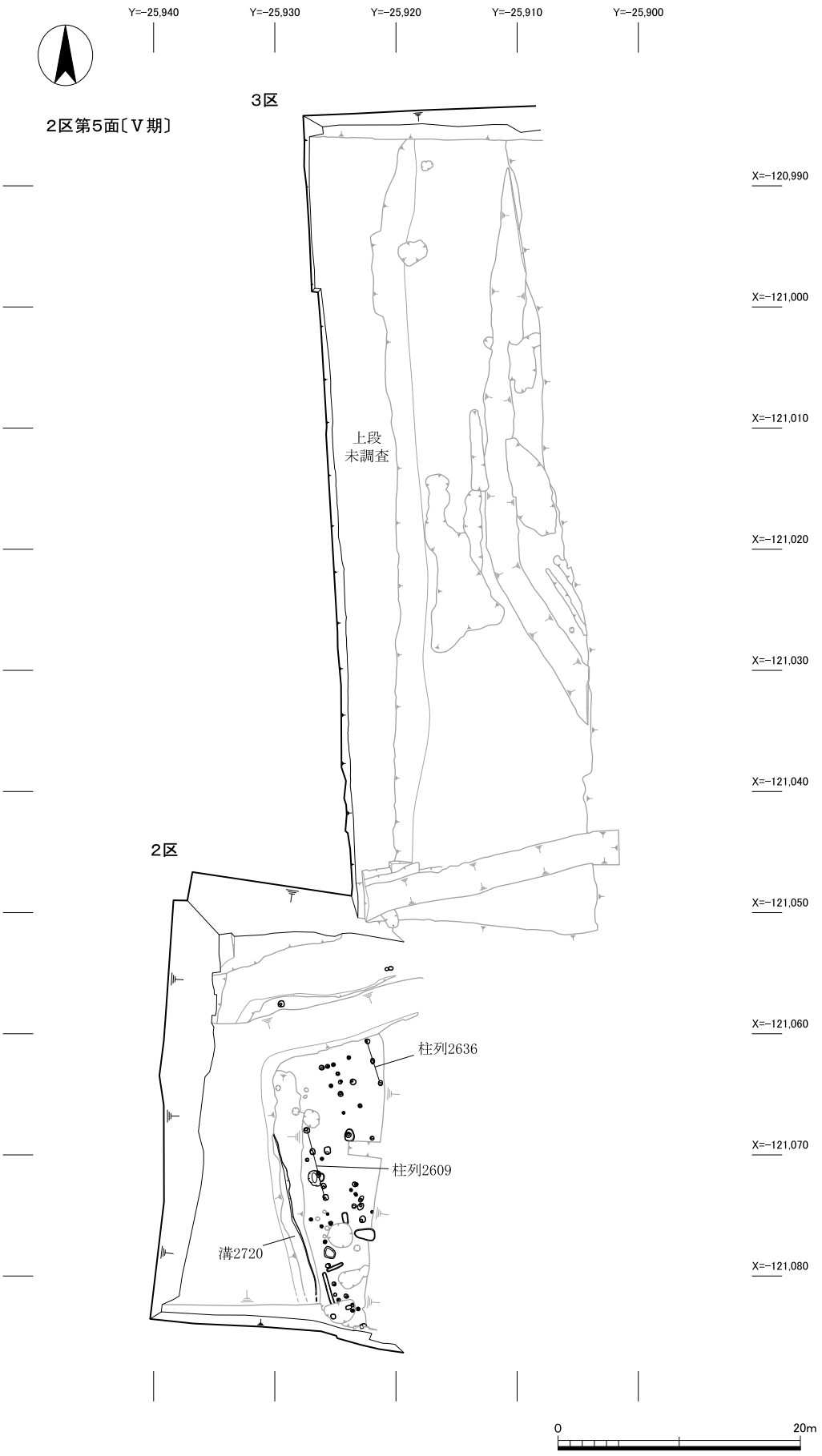
2区第7面・3区第8面〔Ⅷ期〕平面図（1：500）



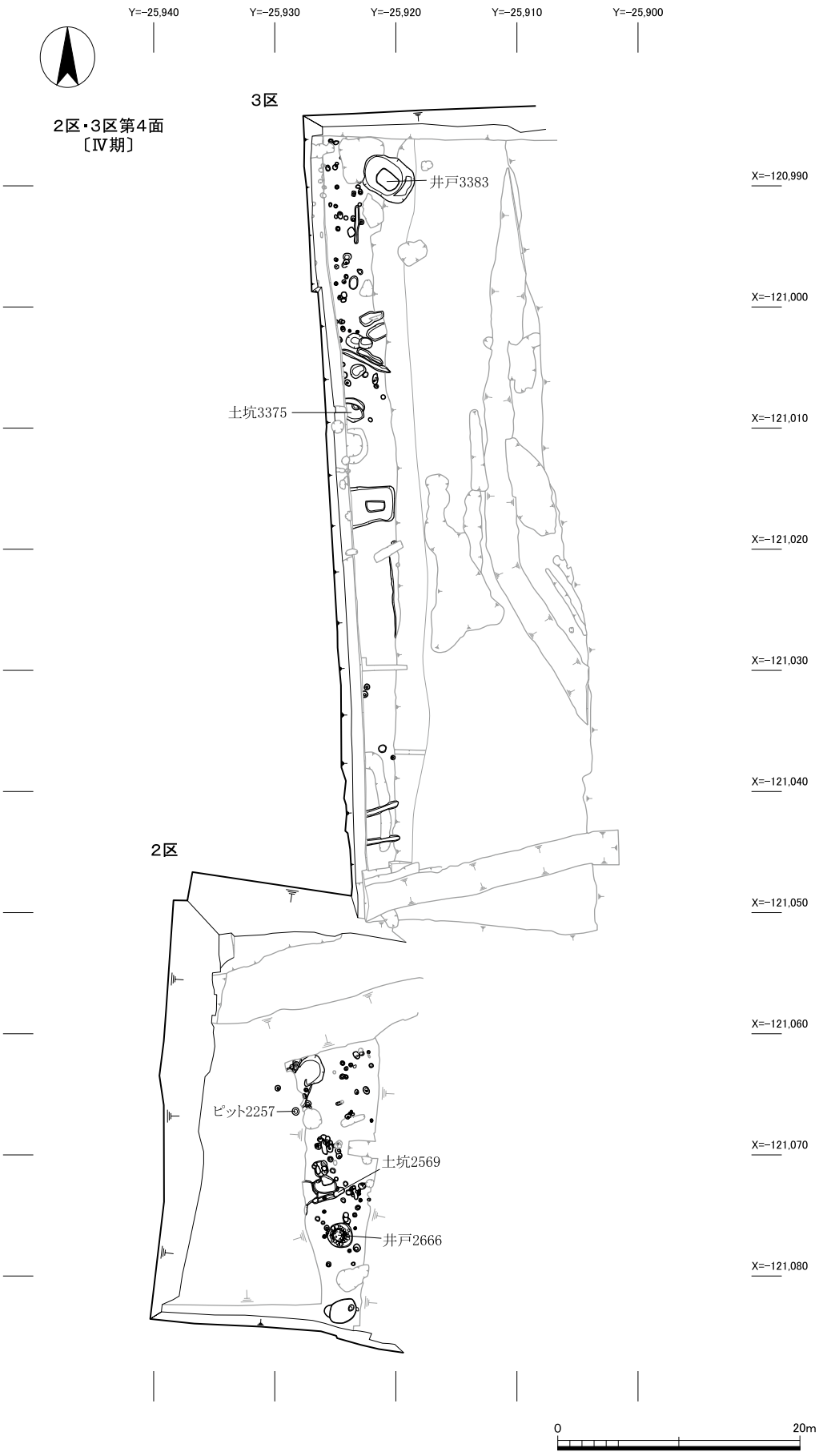
3区第7面〔Ⅶ期〕平面図（1：500）



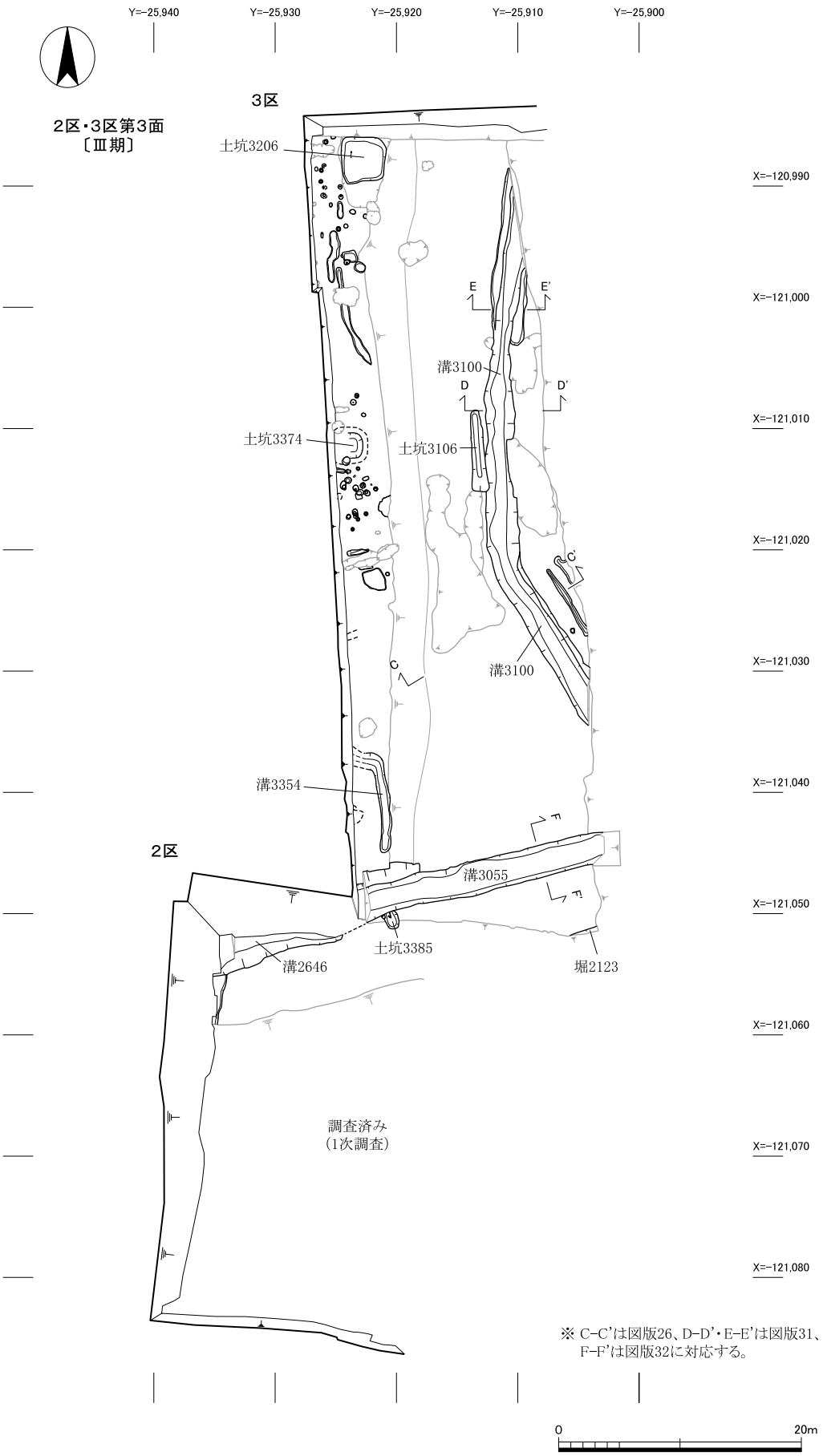
２区・３区第６面〔Ⅵ期〕平面図（１：500）



2区第5面〔Ⅴ期〕平面図（1：500）

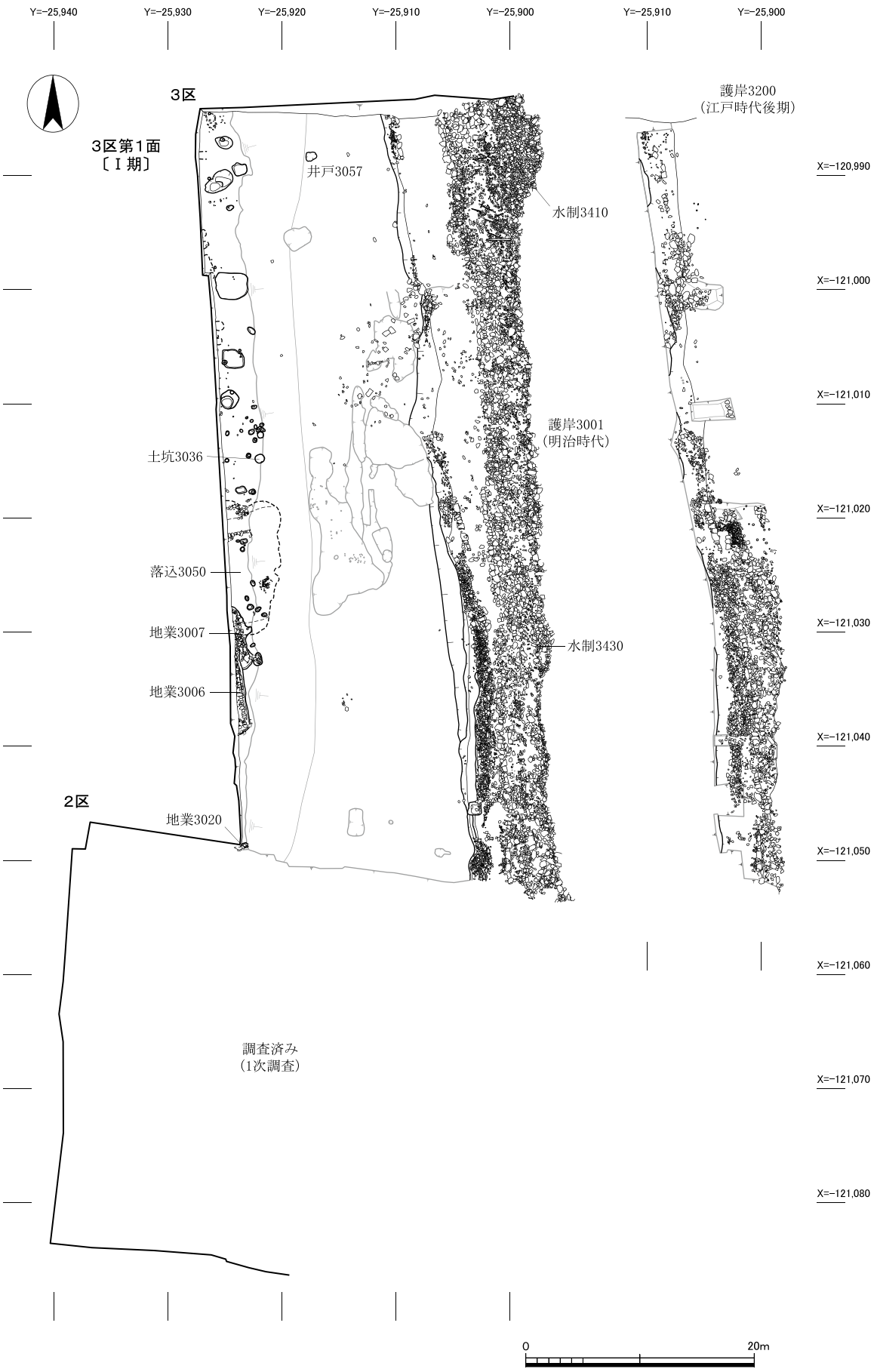


２区・３区第４面〔Ⅳ期〕平面図（１：500）



2区・3区第3面〔Ⅲ期〕平面図（1：500）

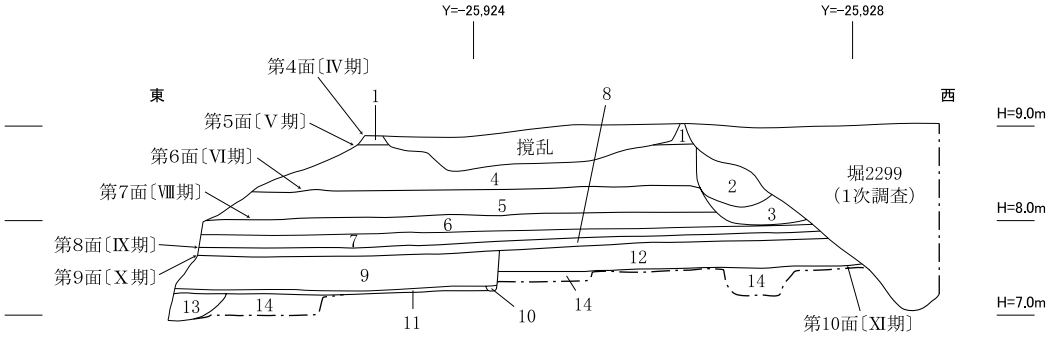
3区第2面〔Ⅱ期〕平面図（1：500）



３区第１面〔Ⅰ期〕平面図（１：500）

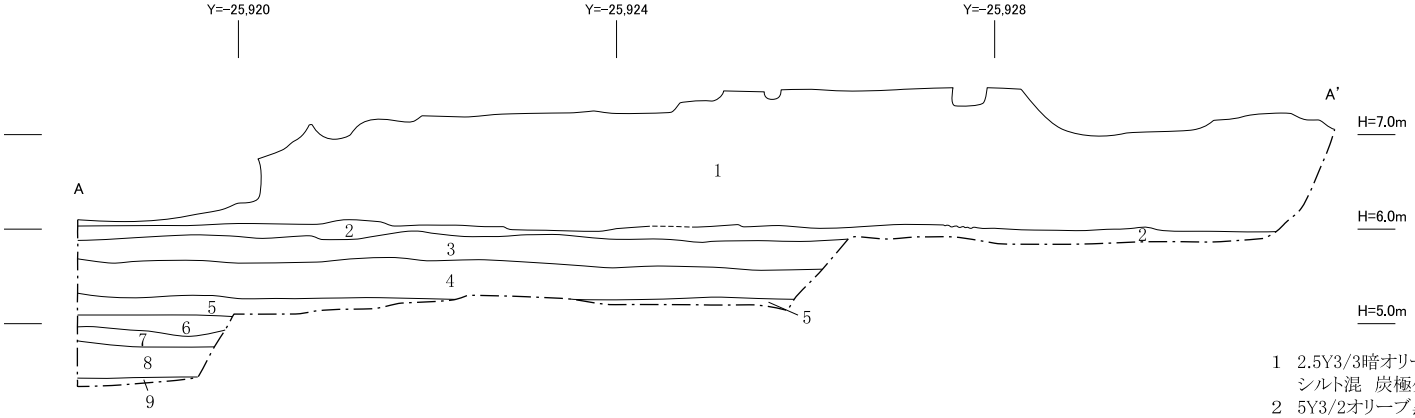
2区南壁・断割トレンチ南壁断面図（1：80）

2区南壁



1 2.5Y5/3黄褐色シルト～極細砂 土器片含
2 2.5Y5/4黄褐色シルト～極細砂 ─ 溝2720
3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト ─
4 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
5 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
6 10YR4/4褐色シルト ─ 土壌化層
7 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
8 2.5Y4/2暗灰黄色シルト ─ 土壌化層
9 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘質 ─ 竪穴建物2800
10 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
11 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 粘質 ─
12 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
13 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土 ─ 土坑2440
14 2.5Y5/2黄褐色シルト 粘質

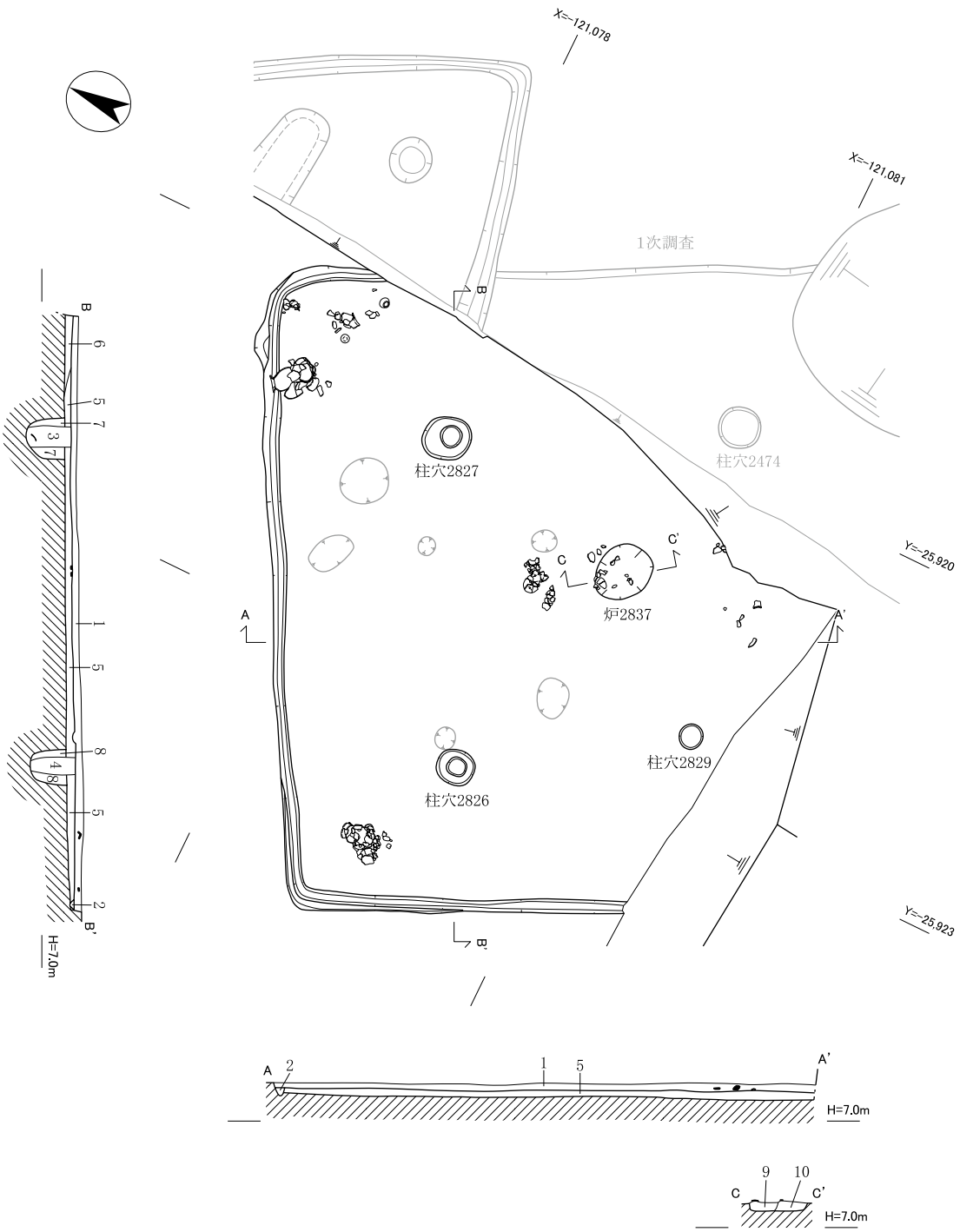
断割トレンチ南壁



※ A–A'は図版1に対応する。

1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色～4/3暗灰黄色粘土
シルト混 炭極少量含
2 5Y3/2オリーブ黒色粘土
3 5Y4/2灰オリーブ色粘土 ─ 土壌化層
4 7.5Y4/1灰色粘土 薄い炭化物互層状に中量混
5 7.5Y3/1オリーブ黒色粘土 ─ 土壌化層
6 2.5Y5/1黄灰色粘土 ─
7 7.5Y4/1灰色粘土
8 10Y5/1灰色シルト
9 7.5Y4/1灰色細砂 粗砂混

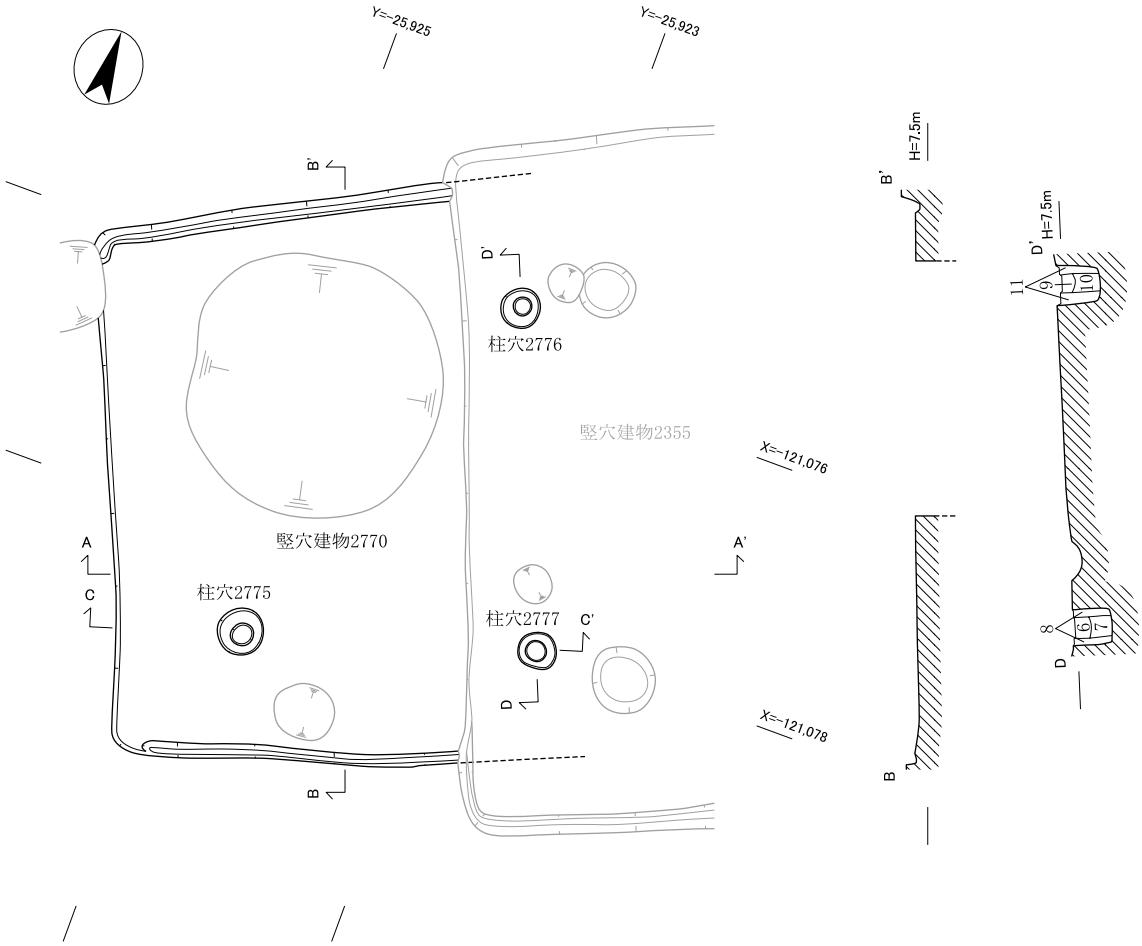
0 4m

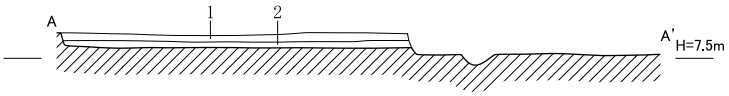


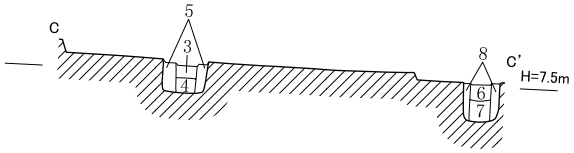
1 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 炭・土器片微量含
2 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト ―― 壁溝
3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 炭少量含 土器片微量含 ―― 柱穴2827柱痕
4 2.5Y4/1黄灰色シルト 炭少量含 ―― 柱穴2826柱痕
5 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 炭・土器片微量含 ―― 貼床
6 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト ―― 貼床
7 2.5Y3/2黒褐色シルト ―― 柱穴2827掘形
8 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 炭微量含 ―― 柱穴2826掘形
9 2.5Y3/2黒褐色シルト 炭含 焼土微量含 ―― 炉2837
10 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 焼土含 ―― 炉2837

0 3m

竪穴建物2800実測図（1：60）







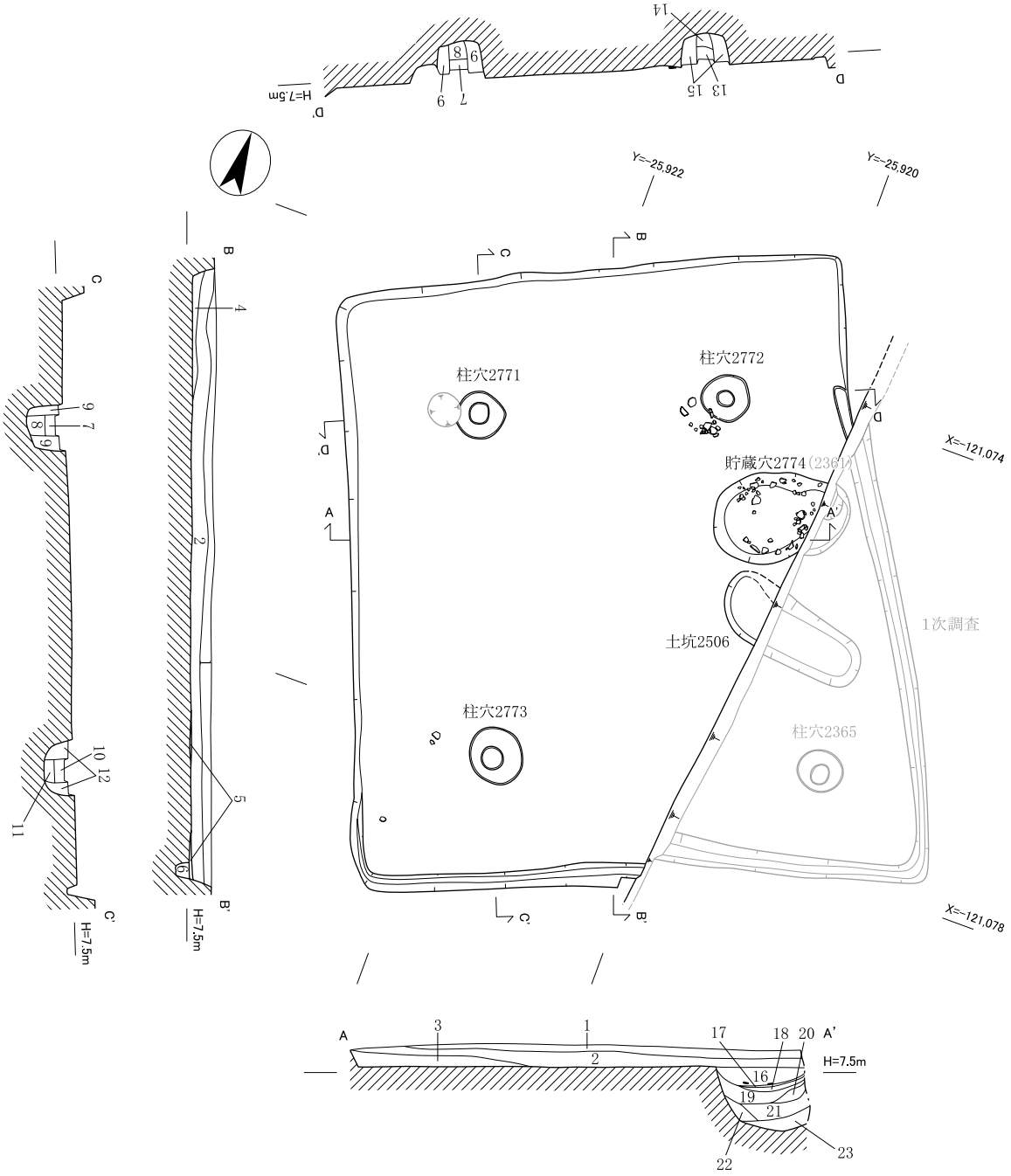
1 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
2 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
3 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
4 2.5Y4/2暗灰黄色粘土
5 2.5Y4/2～4/3オリーブ褐色シルト
柱穴2775

6 2.5Y3/3～4/3オリーブ褐色シルト
7 2.5Y4/4オリーブ褐色粘土
8 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
柱穴2777

9 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
10 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
11 2.5Y4/2～4/3暗灰黄色シルト
柱穴2776

0 3m

竪穴建物2770実測図（1：60）



1 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
3 2.5Y5/2暗灰黄色粘土
4 2.5Y4/1黄灰色粘土
5 7.5YR4/3褐色シルト ―― 貼床
6 2.5Y5/2暗灰黄色シルト ―― 壁溝
7 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
8 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 粘質
9 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
やや粘質 土器片少量含 ―― 柱穴2771
10 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
11 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
12 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 粘質 炭少量含 ―― 柱穴2773

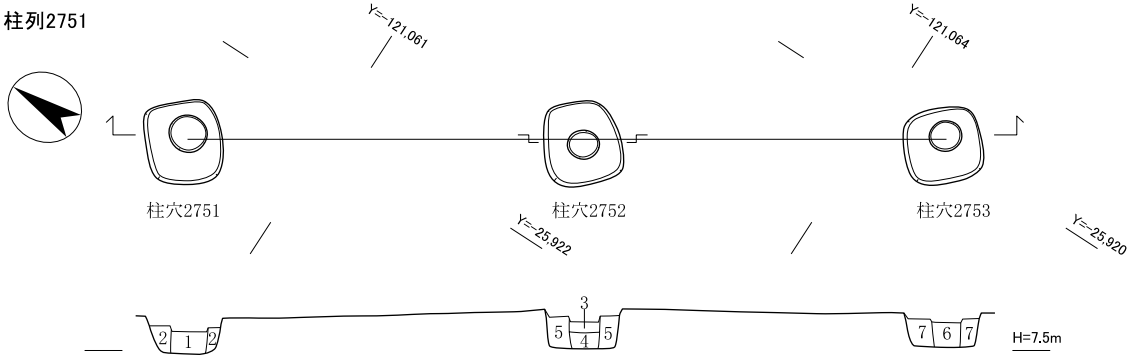
13 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
14 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘質
15 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 炭微量含 ―― 柱穴2772
16 10YR3/3暗褐色粘土
17 10YR1.7/1黒色炭層
18 2.5Y3/2黒褐色シルト 炭少量含
19 2.5Y5/1黄灰色粘土
20 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 明黄褐色シルト混
21 2.5Y4/2暗灰黄色シルト やや粘質
炭・土器片少量含
22 2.5Y4/1黄灰色粘土 炭微量含
23 2.5Y5/3黄灰色シルト やや粘質 ―― 貯蔵穴2774

0 3m

竪穴建物2355実測図（1：60）

柱列2740・2751実測図（1：50）

柱列2751

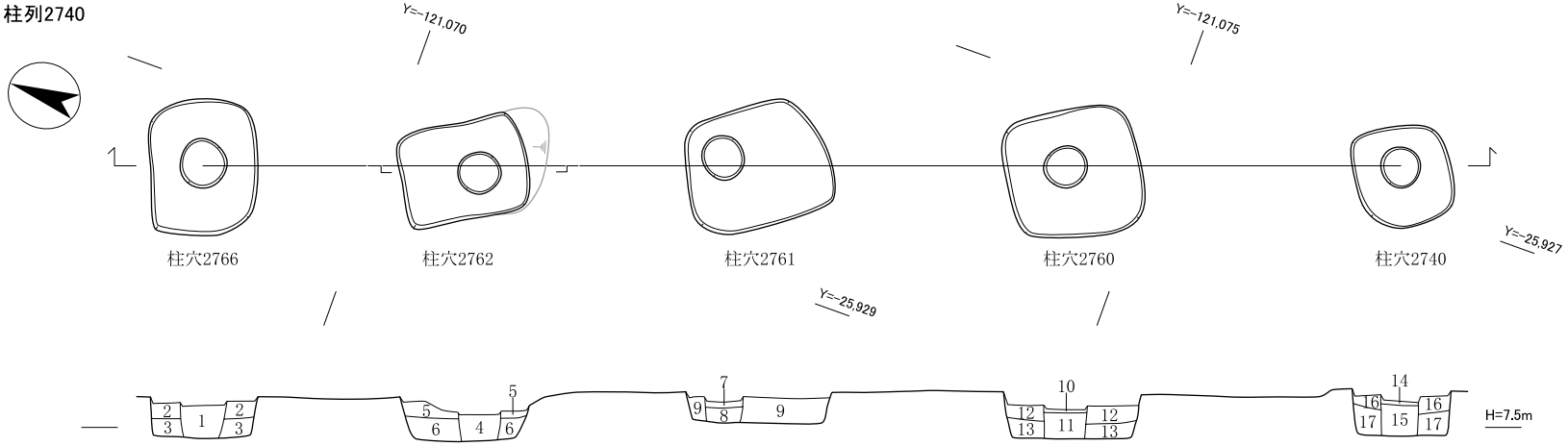


1　2.5Y4/2暗灰黄色シルト　やや粘質
2　2.5Y5/2暗灰黄色シルト
柱穴2751

3　2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
7.5YR3/1黒褐色極細砂混
4　2.5Y4/2暗灰黄色シルト　やや粘質
5　2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
柱穴2752

6　2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト　やや粘質
7　2.5Y4/2暗灰黄色シルト
柱穴2753

柱列2740



1　2.5Y4/2暗灰黄色シルト　粘質
2　2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
3　2.5Y4/1黄灰色シルト　やや粘質
柱穴2766

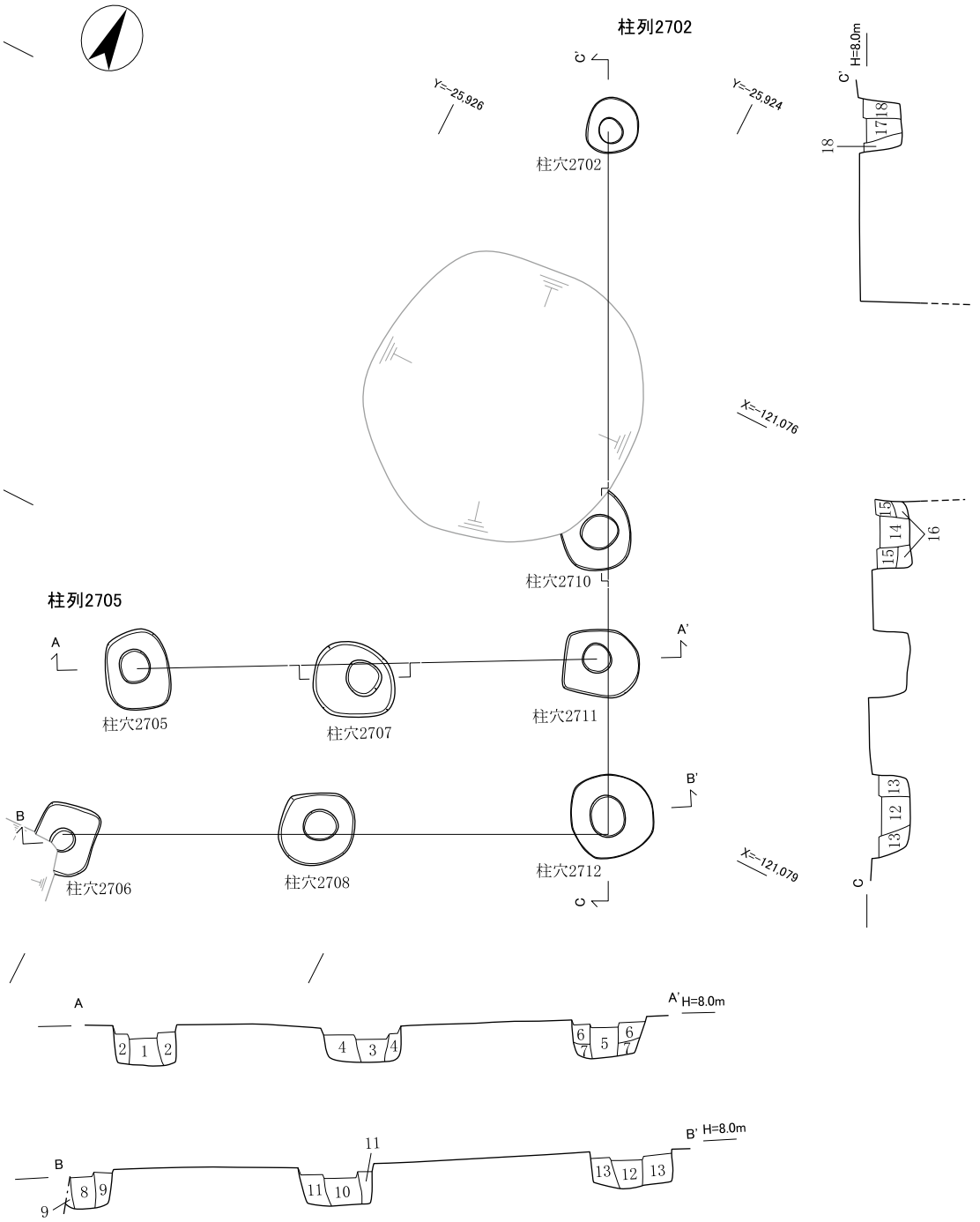
4　2.5Y5/2暗灰黄色シルト　粘質
5　2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
6　2.5Y4/1黄灰色シルト　やや粘質
柱穴2762

7　2.5Y5/2暗灰黄色シルト
8　2.5Y4/2暗灰黄色シルト　粘質
9　2.5Y4/3オリーブ褐色シルト　やや粘質
柱穴2761

10　2.5Y5/2暗灰黄色シルト　粘質
11　2.5Y5/1黄灰色シルト　粘質
12　2.5Y5/3黄褐色シルト
13　2.5Y4/1黄灰色シルト　やや粘質
柱穴2760

14　2.5Y5/1黄灰色シルト
15　2.5Y5/2暗灰黄色シルト　粘質
16　2.5Y4/2暗灰黄色シルト
17　2.5Y4/2暗灰黄色シルト　やや粘質
柱穴2740

0　2m



柱列2705

1 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
3 10YR4/4褐色シルト
4 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
5 2.5Y5/3黄褐色シルト
6 2.5Y4/3暗灰黄色シルト
7 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト

柱穴2705
柱穴2707
柱穴2711

柱列2702

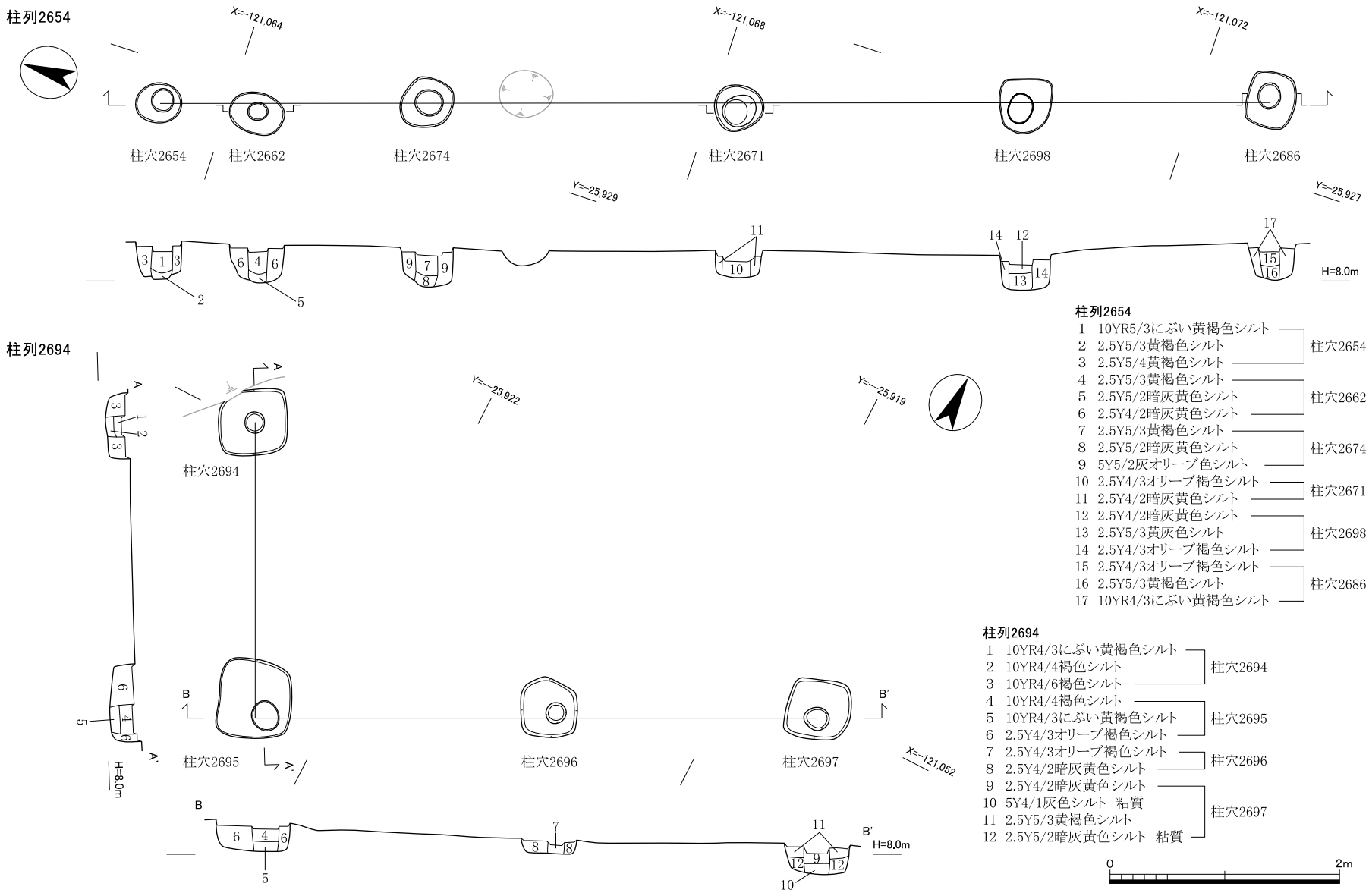
8 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 土器片含
9 2.5Y5/4黄褐色シルト
10 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
11 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
12 10YR4/4褐色シルト
13 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
14 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
15 10YR4/4褐色シルト
16 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
17 10YR4/4褐色シルト
18 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト

柱穴2706
柱穴2708
柱穴2712
柱穴2710
柱穴2702

0 2m

柱列2702・2705実測図（1：50）

柱列2694・2654実測図（1：50）



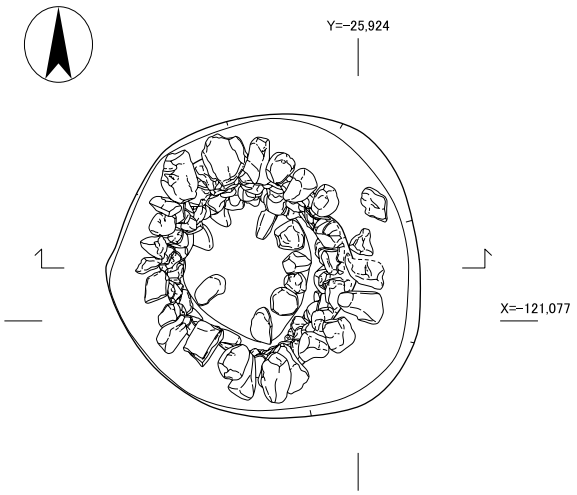
柱列2654

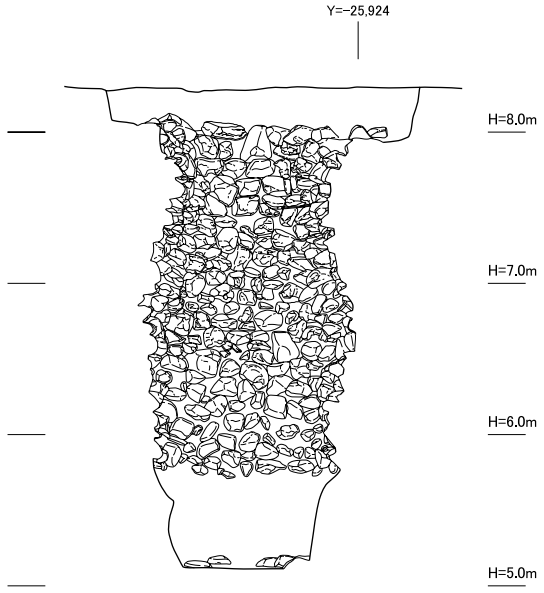
1	10YR5/3にぶい黄褐色シルト	柱穴2654
2	2.5Y5/3黄褐色シルト	
3	2.5Y5/4黄褐色シルト	
4	2.5Y5/3黄褐色シルト	柱穴2662
5	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	
6	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	
7	2.5Y5/3黄褐色シルト	柱穴2674
8	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	
9	5Y5/2灰オリーブ色シルト	
10	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	柱穴2671
11	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	
12	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	柱穴2698
13	2.5Y5/3黄灰色シルト	
14	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	
15	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	柱穴2686
16	2.5Y5/3黄褐色シルト	
17	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	

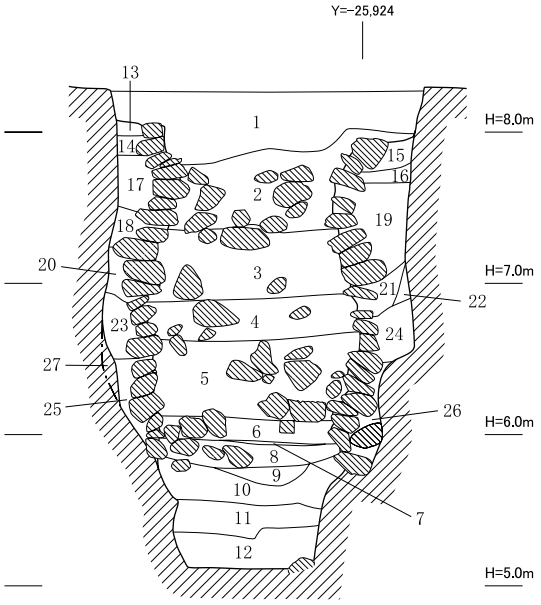
柱列2694

1	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	柱穴2694
2	10YR4/4褐色シルト	
3	10YR4/6褐色シルト	
4	10YR4/4褐色シルト	柱穴2695
5	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	
6	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	
7	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	柱穴2696
8	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	
9	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	柱穴2697
10	5Y4/1灰色シルト　粘質	
11	2.5Y5/3黄褐色シルト	
12	2.5Y5/2暗灰黄色シルト　粘質	

0　2m







1 2.5Y5/4黄褐色シルト 炭・土器片含
2 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 土器片含
3 2.5Y4/1黄灰色シルト～粘土
4 2.5Y5/1黄灰色シルト～粘土
5 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土 土器片微量含
6 5Y2/1黒色シルト 粘質 炭微量含
埋土

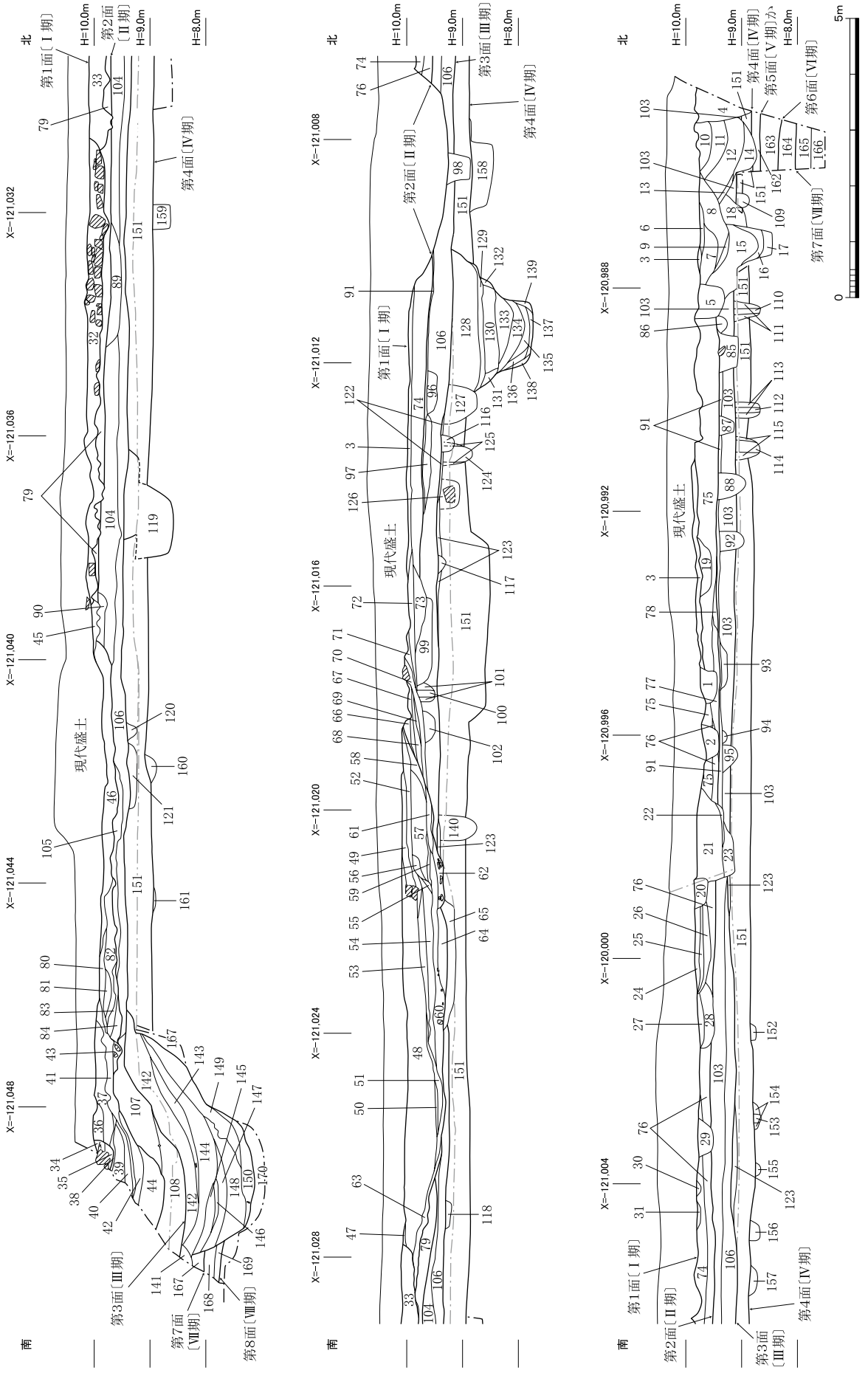
7 5Y2/2オリーブ黒色シルト 粗砂混
8 5Y3/1オリーブ黒色シルト 粘質 藁片微量含
9 7.5Y3/2オリーブ黒色シルト 粘質
10 5Y4/1灰色シルト
11 (砂礫層 φ1cm以下礫)
12 7.5Y2/2オリーブ黒色シルト
井戸使用堆積層か

13 10YR3/4暗褐色シルト
14 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
掘形埋土

15 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
16 2.5Y5/2暗灰黄色粘土
17 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
18 7.5Y4/1灰色粘土
19 7.5Y4/1灰色粘土
10YR4/3にぶい黄褐色シルト一部混
20 5Y4/1灰色粘土
21 5Y4/2灰オリーブ色粘土
22 2.5Y4/6オリーブ褐色粘土 細砂少量混
23 7.5Y4/1灰色粘土
24 5Y4/3灰オリーブ色粘土
25 10Y3/2オリーブ黒色シルト 粘質
26 10Y3/1オリーブ黒色シルト 粘質
掘形埋土

27 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト
基盤層

井戸2666実測図（1：50）

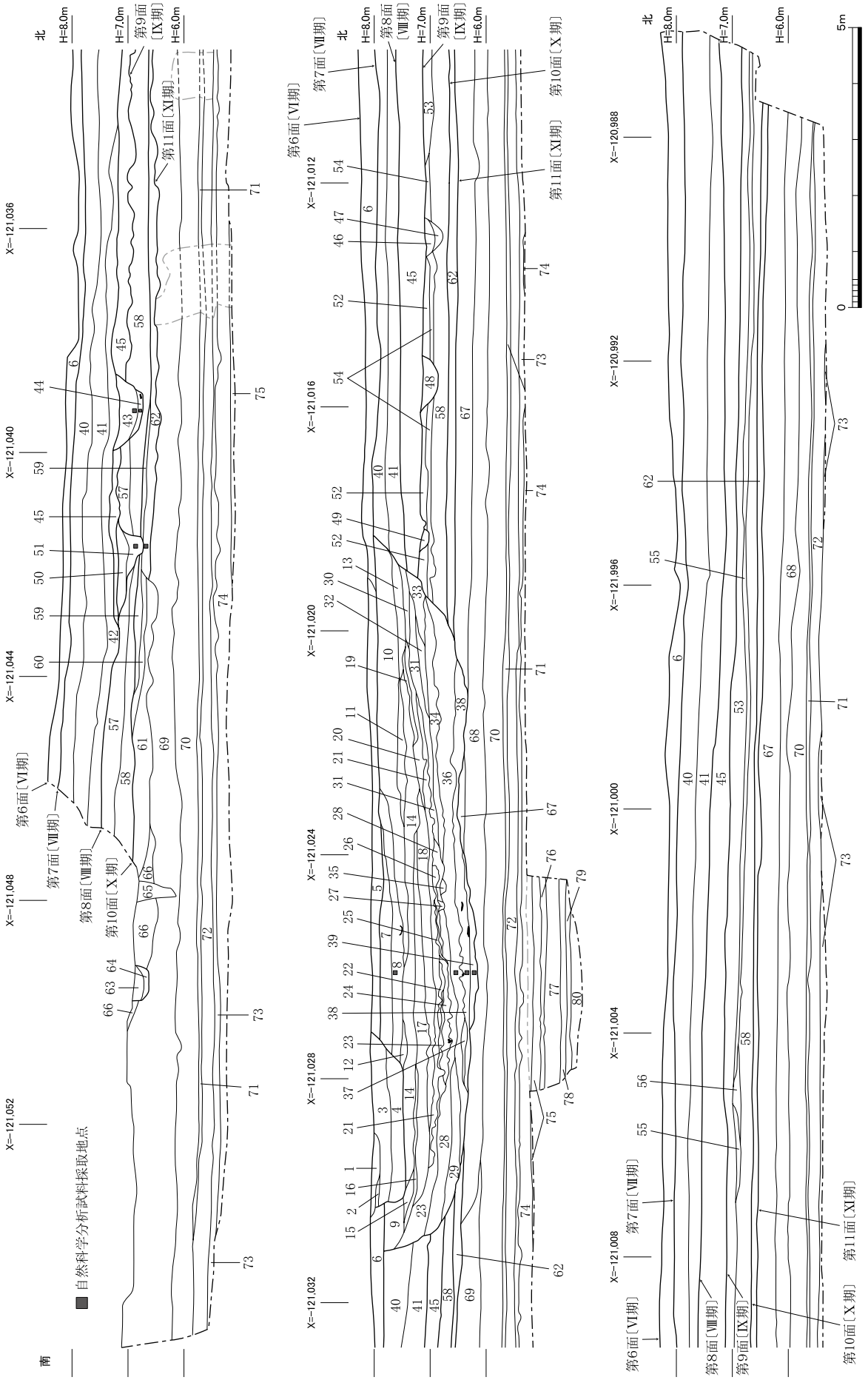


3区上段西壁断面図1（1：100）

3区上段西壁断面図2（土色）

1 10YR4/3にぶい黄褐色極細砂 やや粘質
2 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト やや粘質
3 10YR4/4褐色細砂 φ1～3cm礫多量混
4 2.5Y4/2暗灰黄色シルト やや粘質
底面砂礫混 土器片含
5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 土器片含
6 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
7 10YR4/4褐色シルト
8 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 炭含
10 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
11 10YR4/4褐色細砂
12 10YR4/6褐色シルト やや粘質
13 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂
14 2.5Y3/2黒褐色シルト やや粘質
15 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト やや粘質
16 2.5Y4/2暗灰黄色シルト やや粘質
17 2.5Y4/2暗灰黄色シルト やや粘質
18 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
19 10YR4/2灰黄褐色極細砂 φ2cm礫少量混
20 10YR5/1褐灰色細砂
21 2.5Y5/2暗灰黄色シルト やや粘質
22 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘質
23 2.5Y4/2暗灰黄色シルト やや粘質
24 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 炭・焼土少量含
25 10YR4/2灰黄褐色シルト やや粘質 炭・焼土多量含
26 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
27 2.5Y4/2暗灰黄色極細砂 やや粘質
28 2.5Y4/3オリーブ褐色極細砂 やや粘質
29 10YR4/3にぶい黄褐色シルト やや粘質
30 10YR4/2灰黄褐色シルト やや粘質
炭多量含 焼土含
31 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 炭・瓦片含
32 10YR5/3にぶい黄褐色極細砂 φ2～6cm礫多量混 ┐地業3006
33 10YR3/3暗褐色極細砂 φ4cm礫混 φ1～2cm礫多量混 ┐地業3007
34 10YR5/3にぶい黄褐色シルト ┐地業3020
35 10YR5/4にぶい黄褐色細砂
36 10YR6/4にぶい黄燈色極細砂
37 10YR6/6明黄褐色細砂 砂混
下部φ3～5cm・上部φ0.5～2cm礫多量混
38 2.5Y5/3黄褐色細砂
39 2.5Y5/3黄褐色砂礫 φ1cm礫混
40 7.5YR2/3極暗褐色粗砂 砂混 φ1cm礫混
41 2.5Y5/2暗灰黄色シルト やや粘質
42 7.5YR3/3暗褐色粗砂 砂混
暗灰黄色シルトブロック・φ1～2cm礫多量混
43 2.5Y4/4オリーブ褐色極細砂 砂礫ブロック混
44 2.5Y4/2暗灰黄色シルト やや粘質
木片含 ラミナ有
45 10YR4/4褐色シルト やや粘質
φ3～6cm礫混 φ2cm礫多量混
46 10YR5/3にぶい黄褐色砂礫 φ1～3cm礫混
47 7.5YR4/4褐色細砂 ┐落込3050
48 10YR3/3暗褐色極細砂 φ1～4cm礫多量混
49 2.5Y4/3オリーブ褐色極細砂 やや粘質
50 2.5Y5/2暗灰黄色シルト やや粘質
51 10YR3/1黒褐色シルト 粘質
52 2.5Y4/2暗灰黄色極細砂 やや粘質
53 10YR2/2黒褐色シルト 粘質 木片含
54 10YR2/2黒褐色シルト やや粘質 木片含
55 2.5Y4/2暗灰黄色シルト やや粘質
56 2.5Y4/3オリーブ褐色砂とシルトの互層
57 7.5YR4/6褐色砂礫 上面鉄分沈着
φ1～2cm礫多量混 φ5cm礫少量混
58 10YR4/3にぶい黄褐色細砂
59 5Y3/1オリーブ黒色シルト 粘質
60 10YR2/2黒褐色極細砂 粘質
下面φ1～4cm礫多量混 木片・種実含
61 2.5Y3/2黒褐色細砂 φ2cm以下礫多量混
62 2.5Y3/2黒褐色細砂 粘質 φ5～8cm礫混
63 7.5YR4/3褐色極細砂 やや粘質
64 5Y4/1灰色粘土 ┘
65 7.5Y4/1灰色シルト 粘質
66 2.5Y3/2黒褐色シルト やや粘質
67 10YR5/3にぶい黄褐色シルト
68 2.5Y5/3黄褐色シルト やや粘質
69 2.5Y5/4黄褐色シルト
70 2.5Y5/2暗灰黄色シルト
71 2.5Y5/3黄褐色シルト やや粘質
72 2.5Y5/3黄褐色シルト
73 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
74 2.5Y4/2暗灰黄色シルト やや粘質
75 2.5Y4/2暗灰黄色シルト やや粘質
にぶい黄褐色粘土ブロック混
76 10YR5/3にぶい黄褐色シルト
77 2.5Y5/3黄褐色シルト やや粘質
78 2.5Y5/3黄褐色極細砂 やや粘質
79 10YR4/4褐色シルト やや粘質 ラミナ有
80 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 粘質
81 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粗砂
82 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト やや粘質
83 10YR4/4褐色粗砂
84 10YR4/3にぶい黄褐色極細砂
85 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
86 2.5Y5/3黄褐色細砂 土器片含
87 10YR4/3にぶい黄褐色細砂
88 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 炭・土器片少量含
89 2.5Y6/2灰黄色シルト やや粘質
90 10YR5/4にぶい黄褐色シルト やや粘質
91 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 φ2cm礫多量混
92 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 粘質
93 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘質
94 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
95 2.5Y5/3黄褐色シルト やや粘質 炭含
96 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト やや粘質
97 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 炭・土器片少量含
98 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト やや粘質
99 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト やや粘質
100 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
101 10YR5/4にぶい黄褐色シルト やや粘質
102 10YR5/6黄褐色シルト
103 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
104 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
105 10YR3/4暗褐色シルト やや粘質
106 2.5Y4/2暗灰黄色シルト やや粘質
107 2.5Y4/3オリーブ褐色極細砂 ラミナ有
108 10YR4/4褐色極細砂 ラミナ有
109 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 土器片少量含
110 2.5Y3/2黒褐色細砂
111 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 炭・土器片含
112 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
113 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
114 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂
115 2.5Y4/2暗灰黄色細砂 土器片少量含
116 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト やや粘質
117 10YR4/4褐色シルト
118 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
119 2.5Y5/3黄褐色シルト やや粘質(溝3354)
120 10YR4/3にぶい黄褐色シルト やや粘質
121 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 粘質
122 2.5Y4/3オリーブ褐色極細砂
123 2.5Y4/3オリーブ褐色極細砂 φ5cm礫混
124 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂 炭・土器片含
125 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂
126 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 炭含
127 2.5Y4/2暗灰黄色細砂 土器片含
128 2.5Y6/2灰黄色細砂 ┐土坑3374
灰色シルトブロック少量混 炭・土器片含
129 10YR7/4にぶい黄燈色シルト 粘質
灰色シルトブロック少量混
130 10Y6/1灰色シルト やや粘質
浅黄色細砂ブロック少量混 土器片少量含
131 2.5Y6/1黄灰色細砂 やや粘質
炭・土器片少量含
132 10Y6/1灰色細砂 やや粘質
灰白色粘土ブロック混 炭少量含
133 10Y5/1灰色細砂 φ1cm礫少量混
土器片少量含
134 7.5Y5/1灰色細砂 やや粘質
灰色細砂ブロック混 土器片少量含
135 5Y5/1灰色細砂 やや粘質
136 10Y5/1灰色細砂 ┐土坑3374
137 10Y6/1灰色粘土 炭多量含
138 10Y6/1灰色細砂
139 7.5Y5/1灰色粘土 ┘
140 2.5Y4/2暗灰黄色細砂 炭含
141 2.5Y4/1黄灰色シルト主体で砂との互層
ビビアナイト混
142 2.5Y4/1黄灰色シルト やや粘質 ┐溝3055
木片含 底部ラミナ有
143 2.5Y4/2暗灰黄色シルト やや粘質 木片含
144 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘質
ビビアナイト混 木片・種実含 底部ラミナ有
145 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘質
146 5Y4/1灰色シルト 粘質
ビビアナイト混 木片多量含
147 2.5Y4/1黄灰色粘土 ビビアナイト混 木片含
148 5Y4/2灰オリーブ色シルト 粘質
ビビアナイト混 木片含 下部ラミナ有
149 7.5Y4/1灰色粘土
150 7.5Y4/2灰オリーブ色粘土 ┘
151 2.5Y5/4黄褐色シルト～極細砂 土器片含
152 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
153 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 炭含
154 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
155 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 炭少量含
156 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 炭少量含
157 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
158 10YR4/2灰黄褐色細砂 炭・土器片含(土坑3375)
159 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 土器片少量含
160 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂 炭・土器片少量含
161 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂 炭・土器片少量含
162 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 礫混 土器片含
163 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘質 礫・土器片含
164 2.5Y6/3にぶい黄色極細砂 シルト混 炭少量含
165 2.5Y6/4にぶい黄色極細砂 シルト混 炭少量含
166 5Y3/2オリーブ黒色粘土
167 5Y4/2灰オリーブ色シルト
168 5Y5/2灰オリーブ色シルト 粘質
169 5Y4/2灰オリーブ色シルト やや粘質
170 7.5Y3/2オリーブ黒色粘土

図版21 遺構



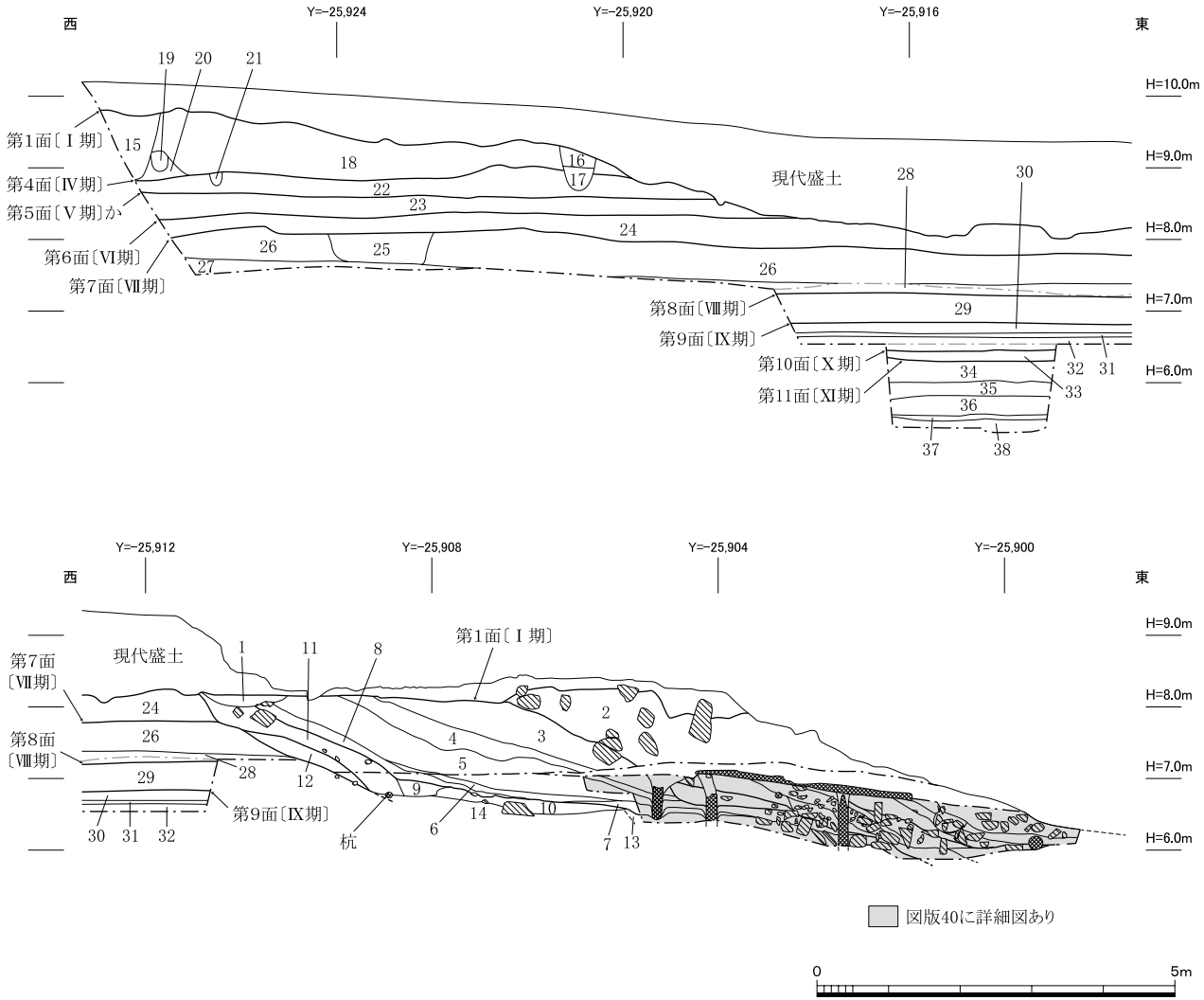
3区下段西壁断面図1（1：100）

3区下段西壁断面図2（土色）

1 2.5Y5/3暗灰黄色極細砂 シルト混
2 2.5Y6/3にぶい黄色シルト 極細砂混 ┐ 溝3240
3 2.5Y5/4黄褐色極細砂 シルト混 ┤
4 2.5Y5/1黄灰色シルト 極細砂混 ┘
5 10YR5/4にぶい黄褐色極細砂 シルト混 鉄分暈状班結含
6 2.5Y6/3にぶい黄色極細砂 シルト混 炭少量含 鉄分管状班結含
7 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘土混 瓦器片含 ┐ 流路3400
8 10YR5/1褐灰色粘土 シルト混 瓦器含 ┤
9 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 極細砂混 鉄分暈状班結含 ┤
10 10YR4/6褐色シルト 極細砂混 鉄分管状班結含 ┤
11 7.5YR4/4褐色細砂～極細砂 鉄分沈着 マンガン含 ┤
12 10YR4/4褐色シルト 極細砂混 鉄分管状班結含 ┤
13 10YR4/3にぶい黄褐色極細砂 細砂混 鉄分暈状班結含 ┤
14 10YR4/4褐色シルト 極細砂混 鉄分管状班結含 ┤
15 2.5Y4/3～4/4オリーブ褐色極細砂 シルト混 鉄分沈着 ┤
16 2.5Y 5/1黄灰色粘土 シルト混 ┤
17 2.5Y4/1～5/1黄灰色極細砂 ┤
18 2.5Y3/1～4/1黄灰色極細砂～シルト 細砂混 ┤
19 10YR4/3にぶい黄褐色極細砂 シルト混 炭多量含 ┤
20 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 極細砂混 ラミナ発達 ┤
21 10YR4/1褐灰色極細砂 細砂混 凹部ラミナ状の堆積有 全体にラミナ発達 ┤
22 10YR3/1黒褐色極細砂 細砂混 炭含 ラミナ有 ┤
23 2.5Y4/1黄灰色中砂 細砂混 ┤
24 2.5Y4/1黄灰色極細砂 シルト混 φ1～2㎝シルトブロック固粒状に含 ┤
25 10YR3/3暗褐色粘土 シルト混 ┤
26 10YR4/2灰黄褐色極細砂 シルト混 ラミナ有 ┤
27 10YR3/2黒褐色細砂～中砂 踏込有 ┤
28 2.5Y4/1黄灰色シルト 細砂混 ビビアナイト生成 ┤
29 2.5Y5/1黄灰色シルト 粘土混 植物遺体含 ビビアナイト生成 ┤
炭酸カルシウム生成顕著 ┤
30 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘土混 鉄分沈着 炭含 ┤
31 2.5Y4/3オリーブ褐色極細砂 細砂混 鉄分沈着 ┤
32 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘土混 鉄分沈着 ┤
33 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘土混 鉄分沈着 炭含 ┤
34 2.5Y4/1黄灰色シルト 極細砂混 炭含 ┤
35 10YR3/2黒褐色シルト 極細砂混 植物遺体含 ビビアナイト生成 ┤
36 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘土混 炭酸カルシウム生成 炭・種実・タニシ貝殻含 ┤
37 2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細砂 シルト混 炭酸カルシウム生成 ┤
38 2.5Y3/2黒褐色シルト 極細砂混 植物遺体含 ビビアナイト生成 ┤
39 2.5Y3/2黒褐色粘土 シルト混 植物遺体含 ┤
下部炭酸カルシウム生成・ビビアナイト生成 ┘
40 2.5Y6/4にぶい黄色極細砂 シルト混 炭少量含 鉄分管状班結含
41 2.5Y5/2暗灰黄色極細砂 シルト混 鉄分沈着 暈状班結含
42 5Y4/2灰オリーブ色シルト 極細砂混 鉄分暈状班結含
43 2.5Y3/2黒褐色シルト 極細砂混 上位鉄分沈着 ┐ 溝3428
44 2.5Y3/1黒褐色粘土 シルト混 ┘
45 10Y4/1灰色シルト 極細砂混 鉄分沈着 植物遺体一部少量含
46 10YR3/2黒褐色シルト 粘土混 上位鉄分沈着
47 10YR3/1黒褐色粘土 シルト混
48 10YR3/2黒褐色粘土 シルト混(溝3427)
49 2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細砂 シルト混(溝3425)
50 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト ┐ 溝3451
51 5Y3/1オリーブ黒色粘土 シルト混 ┘
52 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 極細砂混
53 7.5Y4/1灰色シルト 極細砂混 鉄分沈着
54 5Y4/1灰色粘土 シルト混 上位鉄分管状に沈着
55 10Y3/1オリーブ黒色粘土 シルト混 炭少量含 植物遺体葉理状に含
56 7.5Y4/1灰色粘土 シルト混 上位鉄分沈着
57 5Y4/1灰色シルト 極細砂混 鉄分暈状班結含
58 10Y3/1オリーブ黒色粘土 シルト混 上位鉄分沈着 植物遺体葉理状に含
59 10Y4/1灰色極細砂～シルト
60 2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細砂～粘土 炭少量含
61 7.5Y4/1灰色 一部2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト 粘土混 炭含
62 7.5Y4/1灰色シルト 粘土混 炭少量含
63 5Y6/3オリーブ黄色シルト 粘土混 ┐ 土坑3472
64 5Y5/2灰オリーブ色シルト 土器多量含 ┘
65 10Y3/1オリーブ黒色粘土
66 7.5Y4/1灰色粘土 炭少量含
67 10Y2/1黒色粘土 シルト混
68 10Y4/1灰色粘土 シルト混
69 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘土混 炭少量含 鉄分暈状班結含
70 10Y3/1オリーブ黒色シルト 粘土混
71 10Y4/1灰色粘土 シルト混 植物遺体固粒・葉理状に含
72 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土 シルト混 部分的に植物遺体葉理状に含
73 10Y4/1灰色シルト 粘土混 植物遺体固粒・葉理状に含
74 10YR3/1黒褐色粘土 シルト混 植物遺体葉理状に含
75 10YR3/1黒褐色粘土
76 10YR3/1黒褐色粘土 植物遺体葉理状に含
77 10YR4/1褐灰色粘土 炭少量含
78 10YR3/1黒褐色粘土 炭少量含
79 10YR2/2黒褐色粘土 植物遺体葉理状に少量含
80 10YR3/1黒褐色粘土

図版23 遺構

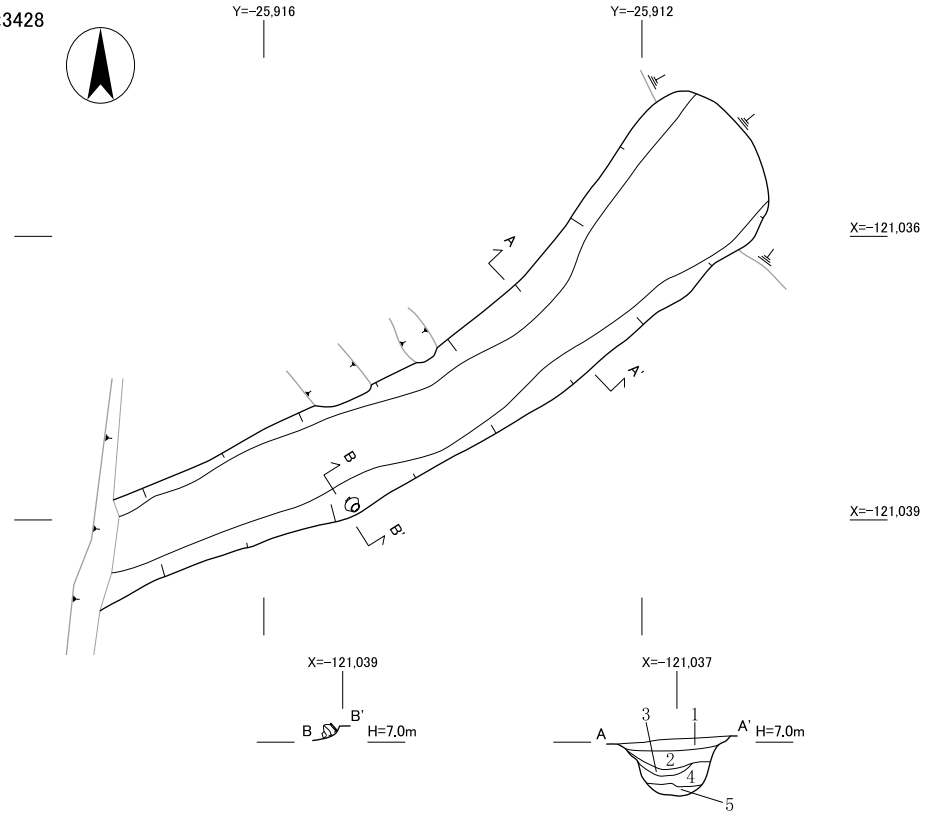
3区北壁断面図（1：100）



1 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～極細砂 底面砂礫混 土器片含
2 2.5Y7/2灰黄色細砂 φ5～20cm礫多量混 ―― 護岸3001
3 10YR8/1灰白色礫 φ0.2～0.5cm礫・2～5cm円礫混
4 10YR6/1褐灰色細砂 φ0.2～1cm礫混
5 10YR6/6明黄褐色粗砂 φ2～5cm礫混
6 2.5Y4/2暗灰黄色極細砂
7 10YR6/4にぶい黄橙色粗砂
8 2.5Y8/2灰白色細砂
9 2.5Y4/4オリーブ褐色細砂
10 5Y4/2灰オリーブ色細砂
11 2.5Y7/3浅黄色細砂 φ5～10cm礫多量混
12 2.5Y8/2灰白色細砂 ―― 護岸3473
13 10YR6/4にぶい黄橙色粗砂 φ2～5cm円礫混
14 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫
15 2.5Y4/2暗灰黄色シルト やや粘質 底面砂礫混 土器片含
16 10YR7/3にぶい黄燈色シルト～極細砂
17 10YR6/4にぶい黄燈色シルト～極細砂 土器片含
18 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～極細砂 やや粘質 底面砂礫混 土器片含
19 10YR5/1褐灰色極細砂 土器片含
20 2.5Y5/4黄褐色シルト～極細砂 土器片含
21 2.5Y6/1黄灰色シルト～極細砂
22 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 礫混 土器片含
23 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘質 礫・土器片含
24 2.5Y6/3にぶい黄色極細砂 シルト混 炭少量含 鉄分管状班結含
25 2.5Y6/2灰黄色シルト～極細砂 土器片含
26 2.5Y6/4にぶい黄色極細砂 シルト混 炭少量含 鉄分管状班結含
27 5Y3/2オリーブ黒色粘土
28 2.5Y5/2暗灰黄色極細砂 シルト混 鉄分沈着 暈状班結含
29 10Y4/1灰色シルト 極細砂混 鉄分沈着 植物遺体一部少量含
30 7.5Y4/1灰色シルト 極細砂混 鉄分沈着
31 10Y3/1オリーブ黒色粘土 シルト混 炭少量含 植物遺体葉理状に含
32 10Y3/1オリーブ黒色粘土 シルト混 上位鉄分沈着 植物遺体葉理状に含
33 7.5Y4/1灰色シルト 粘土混 炭少量含
34 10Y2/1黒色粘土 シルト混
35 10Y4/1灰色粘土 シルト混
36 10Y3/1オリーブ黒色シルト 粘土混
37 10Y4/1灰色粘土 シルト混 植物遺体固粒・葉理状に含
38 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土 シルト混 部分的に植物遺体葉理状に含

河川堆積層
護岸3200

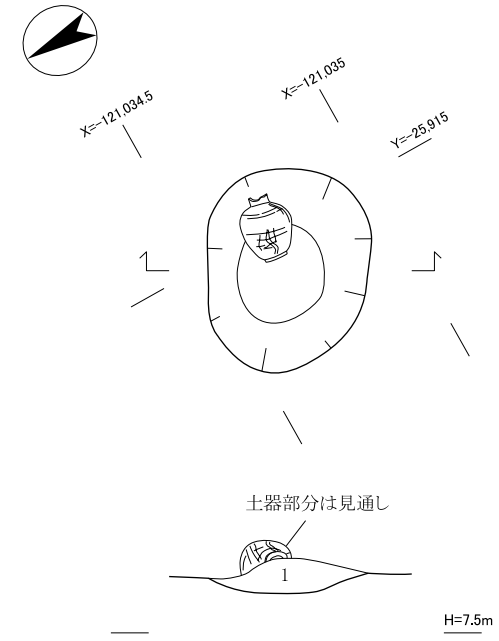
溝3428



1　2.5Y3/2黒褐色シルト
2　5Y3/1オリーブ黒色～4/1灰色シルト　2.5Y4/2暗灰黄色シルトブロック混　炭・木片含
3　5Y3/1オリーブ黒色粘土　炭含
4　5Y4/1灰色粘土　7.5Y5/1灰色粘土ブロック混　土器片ごく少量含
5　7.5Y5/1灰色粘土

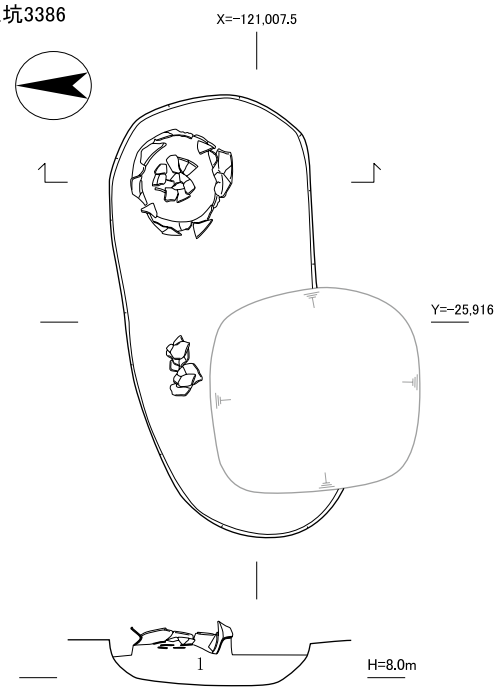
0　2m

土坑3412



1　2.5Y4/3オリーブ褐色シルト

土坑3386

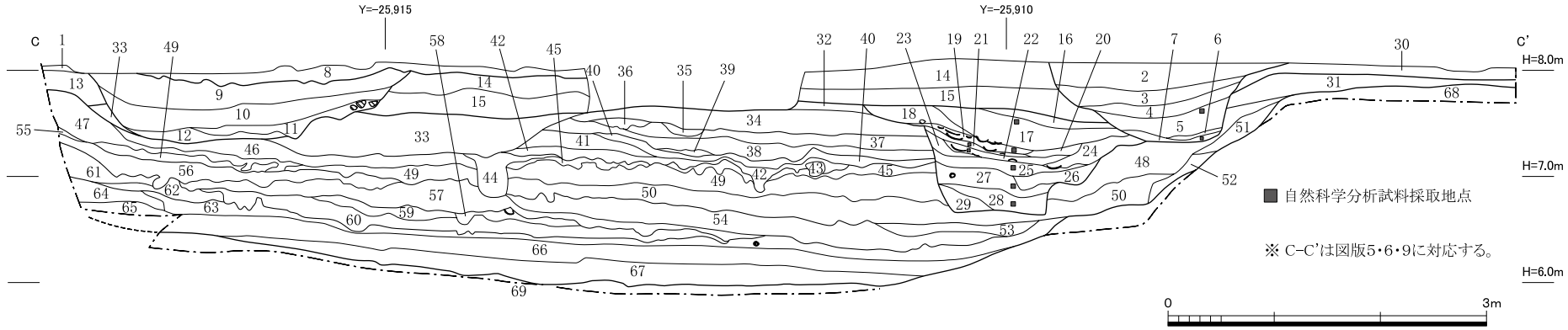


1　10YR5/3～4/3にぶい黄褐色粘土質シルト

0　1m

溝3428、土坑3412・3386実測図（1：80、1：20）

土坑3147、溝3100・3185・3240、流路3400断面図（1：60）



1 2.5Y5/3暗灰黄色極細砂 シルト混
2 2.5Y5/3暗灰黄色シルト 炭含
3 2.5Y5/2暗灰黄色極細砂 シルト混
4 2.5Y5/1黄灰色極細砂 シルト混
5 5Y4/1灰色シルト
6 2.5Y5/4黄褐色極細砂
7 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
（溝3100）

8 2.5Y6/3にぶい黄色極細砂 シルト混
粘土ブロック部分的に混 φ0.5～4cm礫少量含
（土坑3147）

9 2.5Y5/2暗灰黄色細砂 φ1cm以下礫極少量混
炭・土器片含
10 2.5Y4/1黄灰色粘土 シルト混 φ2cm礫極少量混
炭・土器含
11 2.5Y4/2暗灰黄色極細砂 シルト・砂混 炭含
12 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘土混
（溝3240）

13 2.5Y6/3にぶい黄色極細砂 シルト混
炭少量・鉄分管状班結含
14 2.5Y5/2暗灰黄色極細砂 細砂混
15 2.5Y5/3黄褐色極細砂 細砂混 鉄分多量混
16 5Y4/1灰色シルト 極細砂混
5Y4/3暗オリーブ色極細砂葉理状に夾雑
17 5Y4/1灰色極細砂 シルト混
下層との層界に土器多量含 ビビアナイト生成
18 2.5Y5/2暗灰黄色極細砂 φ2～5cm礫少量混
19 2.5Y4/1黄灰色極細砂
2.5Y3/3黄褐色細砂が2層入る
（上層）

20 5Y3/1オリーブ黒色極細砂 細砂混
21 2.5Y4/1黄灰色極細砂
22 2.5Y3/1黒褐色シルト 粘土混 炭・灰含
23 5Y4/1灰色シルト 極細砂混
24 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘土混
（下層）
（溝3185）

25 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト 極細砂混
26 5Y3/2オリーブ黒色シルト 極細砂混
27 5Y3/1オリーブ黒色極細砂 粘土混
28 5Y4/1灰色極細砂 粘土混 炭少量含
29 5Y3/2オリーブ黒色粘土 シルト混 炭少量含
（下層）
（溝3185）

30 2.5Y7/4浅黄色極細砂 炭・土器片含
31 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 極細砂混
32 2.5Y4/2暗灰黄色細砂 極細砂混
33 5Y4/2灰オリーブ色極細砂 シルト混(崩落)
34 2.5Y5/3黄褐色極細砂 細砂混 管状班結含
（第1層）

35 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂～中砂 粗砂混
36 2.5Y5/2暗灰黄色細砂～中砂 粗砂混
37 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘土混
38 2.5Y5/1黄灰色極細砂 シルト混
39 2.5Y6/3にぶい黄色シルト 極細砂混
（第2層）

40 2.5Y4/1黄灰色粘土 シルト混
41 2.5Y5/1黄灰色シルト 極細砂混
42 2.5Y5/1黄灰色極細砂
43 10YR5/4にぶい黄褐色中砂 極細砂混
（第3層）

44 2.5Y5/1黄灰色極細砂 シルト混 種実多量含
45 2.5Y4/1黄灰色～10YR5/4にぶい黄褐色
中砂～細砂 極細砂混
46 2.5Y4/1黄灰色極細砂 シルト混
47 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 極細砂混
鉄分量状班結含
48 7.5Y4/1灰色極細砂 シルト混
49 2.5Y4/1黄灰色シルト 極細砂混
50 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘土混
51 2.5Y6/2灰黄色～10YR5/4にぶい黄褐色シルト
極細砂混
52 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘土混
（第4層）
（流路3400）

53 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 極細砂混
54 2.5Y5/2暗灰黄色粘土 シルト混
55 2.5Y4/3～4/4オリーブ褐色極細砂 シルト混
鉄分沈着
56 2.5Y5/1黄灰色粘土 シルト混
57 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘土混
（第5層）

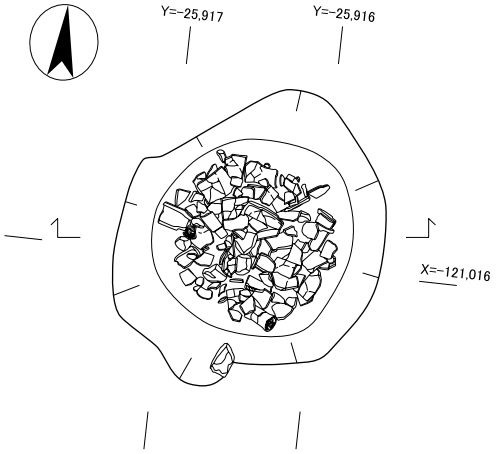
58 2.5Y5/2暗灰黄色～2.5Y4/3オリーブ褐色中砂
粗砂混 φ2cm偽礫少量混
59 2.5Y5/1黄灰色中砂 シルト葉層状に混
60 2.5Y5/1黄灰色中砂 細砂混 ラミナ有
61 2.5Y4/1黄灰色中砂 細砂混 ラミナ有
62 2.5Y4/1黄灰色粘土 シルト混
植物遺体葉層状に含
（第6層）

63 2.5Y4/1黄灰色粘土 シルト混
植物遺体固粒状に含
64 2.5Y4/1黄灰色シルト 極細砂混
ビビアナイト生成
65 2.5Y5/1黄灰色シルト 粘土混 植物遺体含
ビビアナイト生成 炭酸カルシウム生成顕著
66 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 粘土混
ビビアナイト生成
67 5Y3/2オリーブ黒色シルト 極細砂混
（第7層）
（流路3400）

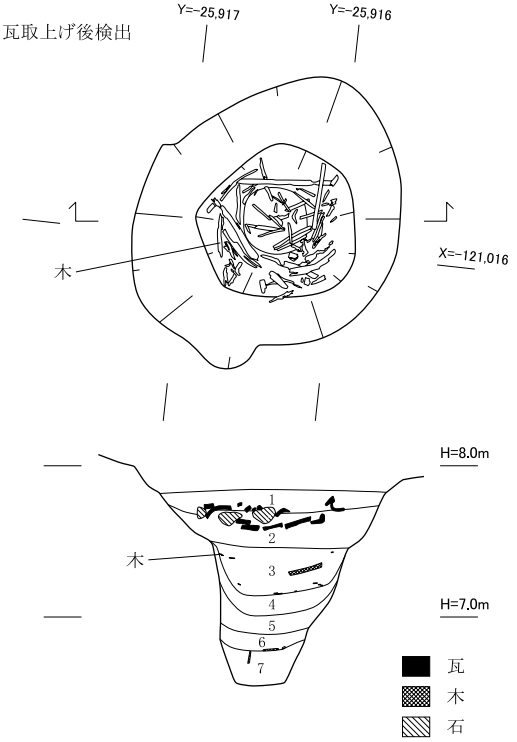
68 2.5Y5/3黄褐色極細砂 シルト混
69 7.5Y3/1～10Y3/1オリーブ黒色粘土 シルト混
（基盤層）

※ 流路3400の第1層～第7層は遺物取り上げ層位

土坑3056

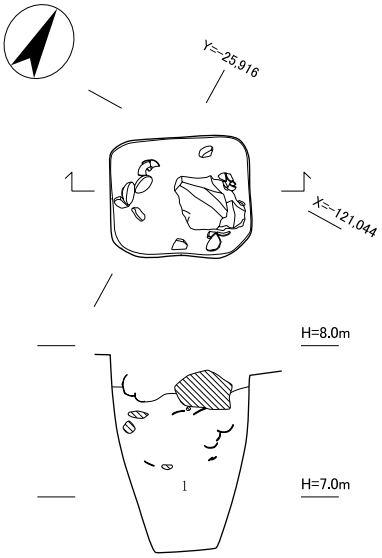


瓦取上げ後検出



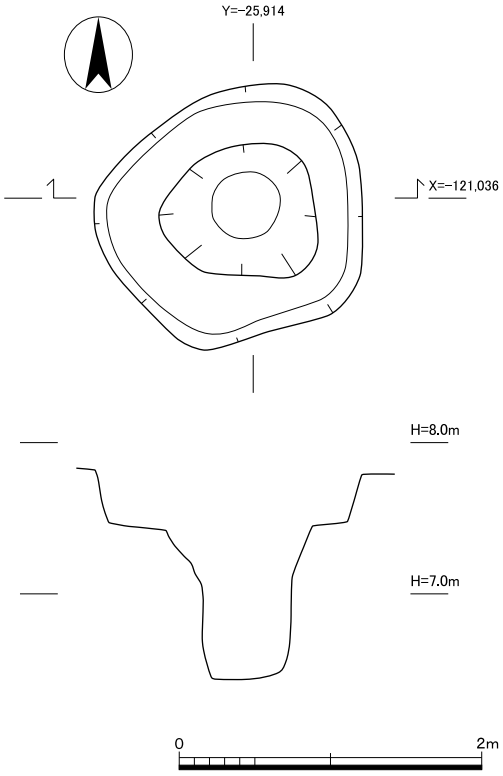
1　10Y4/1灰色シルト　粘土質
2　7.5Y4/1灰色シルト　粘土質
3　10Y4/1灰色粘土　シルト質
4　10Y4/1灰色粘土　シルト質
5　N4/0灰色粘土
6　2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　シルト質　φ5cm以下礫少量混
7　7.5Y4/1灰色シルト　粘土質　φ5cm以下礫少量混

土坑3182



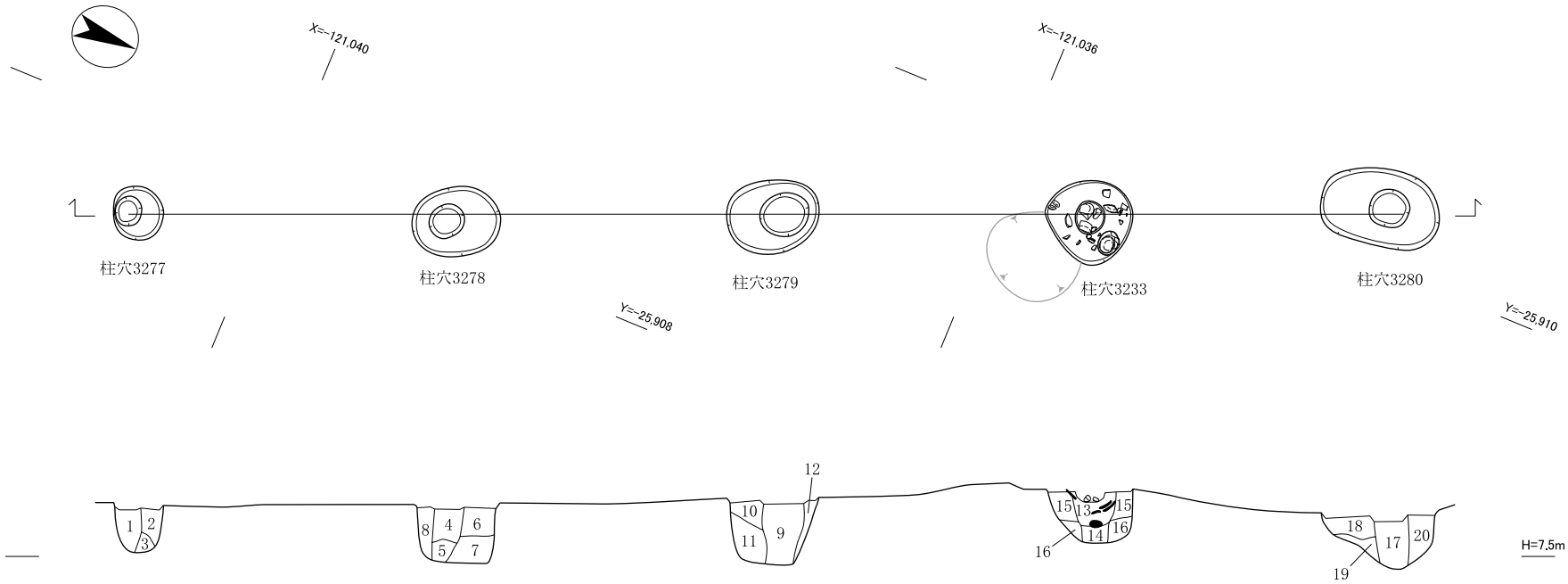
1　10YR4/1褐灰色シルト

井戸3058



土坑3056・3182、井戸3058実測図（1：50）

柱列3233実測図（1：40）



1 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘質 炭微量含
2 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘質 炭微量含
3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘質
柱穴3277

4 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘質 炭微量含
5 10YR4/1褐灰色シルト 粘質 炭微量含
6 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘質 炭微量含
7 10YR5/2～4/2灰黄褐色シルト 粘質
8 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘質 炭微量含
柱穴3278

9 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘質 炭微量含
10 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘質 炭微量含
11 10YR5/2～4/2灰黄褐色シルト 粘質
12 10YR5/2～4/2灰黄褐色シルト 粘質
柱穴3279

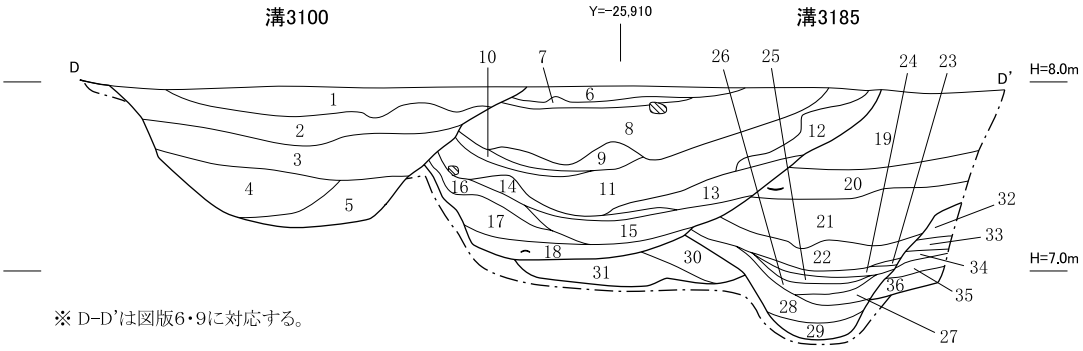
13 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘質 炭・土器片含
14 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘質
15 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘質 炭含
16 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘質
柱穴3233

17 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘質 炭ブロック含
18 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘質 炭微量含
19 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘質
20 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘質
柱穴3280

0 3m

溝3185土器出土状況図１（１：100）

溝3185土器出土状況図２（１：100）



※ D-D'は図版6・9に対応する。

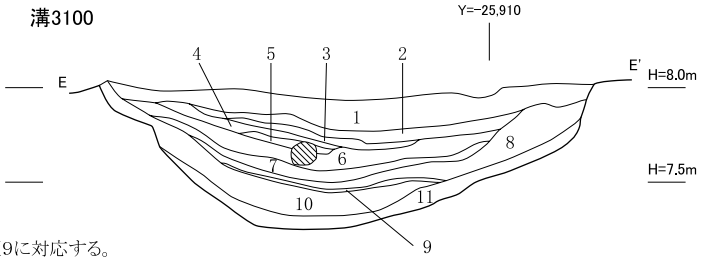
1 10YR5/3にぶい黄褐色極細砂 細砂混
φ5cm以下礫少量混 土器片含
2 10YR6/2灰黄褐色極細砂 細砂混 炭・土器片少量含
3 10YR5/2灰黄褐色極細砂 細砂混 φ8cm以下礫少量混
4 2.5Y5/2暗灰黄色極細砂 シルト混 炭極少量含
5 2.5Y4/2暗灰黄色極細砂 細砂混 φ2～3mm粗砂少量混
6 10YR6/4にぶい黄橙色極細砂 φ3cm以下礫少量混
炭・土器片少量含
7 10YR6/3にぶい黄橙色極細砂 細砂混 φ5cm礫少量混
8 10YR5/3にぶい黄褐色細砂 極細砂混
9 10YR7/2にぶい黄橙色礫 細砂～小礫混 φ4cm以下礫
10 7.5YR5/6明褐色細砂 細礫混
11 10YR6/2灰黄褐色極細砂 φ5cm以下礫混
12 10YR6/3にぶい黄橙色細砂 極細砂混
13 2.5Y6/1黄灰色細砂 極細砂混 炭・土器片少量含
14 2.5Y4/1黄灰色粘土 シルト混 炭・灰葉理状に夾雑
15 5Y4/1灰色シルト 粘土混 ラミナ有
16 2.5Y3/1黒褐色シルト 粘土混 炭含
17 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 極細砂混 φ1～3cm灰色
シルトブロック混 炭・灰葉理状に夾雑 上部土器多量含
18 2.5Y4/1黄灰色極細砂 シルト混 炭・灰葉理状に含
下部土器多量含

溝3100

溝3185

19 10YR5/3にぶい黄褐色極細砂 細砂混 炭極少量含
20 2.5Y5/2暗灰黄色細砂 極細砂混
21 2.5Y5/1黄灰色極細砂 シルト混 ビビアナイト生成
炭極少量含
22 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘土混 ビビアナイト生成
23 2.5Y3/1黒褐色シルト
24 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘土混
25 2.5Y3/2黒褐色シルト 粘土混
26 2.5Y4/1黄灰色粘土 シルト混
27 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 極細砂混
右方炭酸カルシウム生成 土器片少量含
28 2.5Y5/1黄灰色粘土 シルト混
中央炭酸カルシウム生成
29 2.5Y4/1黄灰色粘土 ビビアナイト生成
30 5Y4/1灰色細砂 極細砂混
31 5Y4/2灰オリーブ色極細砂 細砂混
ビビアナイト生成 炭極少量含
32 2.5Y5/2暗灰黄色極細砂 細砂混
33 2.5Y3/2黒褐色シルト
34 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘土混
35 2.5Y4/1黄灰色シルト
36 2.5Y3/1黒褐色シルト

溝3185

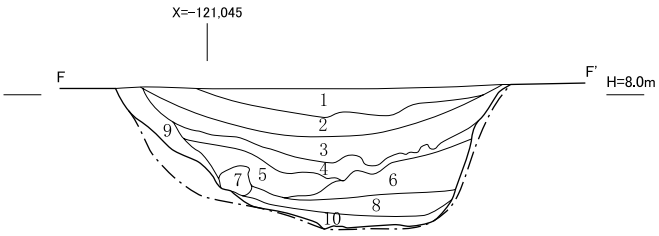


※ E-E'は図版9に対応する。

1 2.5Y5/4黄褐色シルト 炭含
2 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 土器片含
3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
4 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
5 2.5Y4/3黄褐色極細砂
6 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 極細砂少量混 土器片含
7 2.5Y5/3黄褐色極細砂
8 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
9 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 砂混
10 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 土器片含
11 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 炭含

溝3100・3185断面図（1：40）

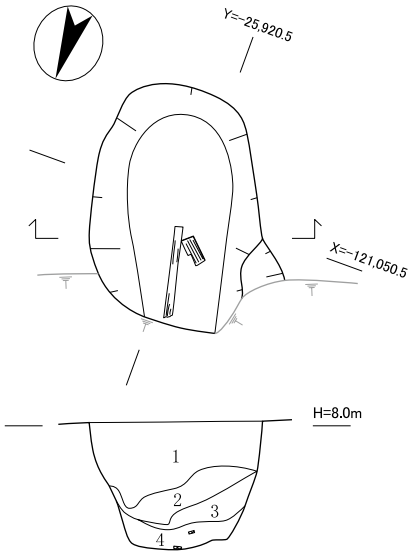
溝3055



※ F-F'は図版9に対応する。

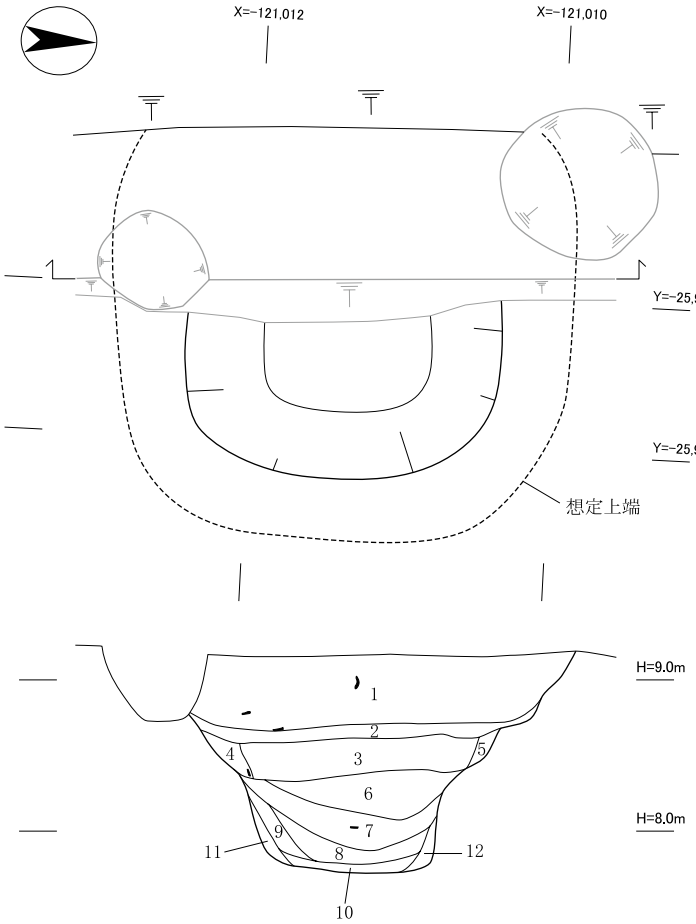
1 2.5Y5/2暗灰黄色シルト
2 2.5Y4/2～5/2暗灰黄色シルト φ3cm以下礫極少量混 炭少量含
3 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘質 炭少量含
4 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘質 10YR5/4にぶい黄褐色極細砂混
5 5Y4/1灰色粘土 シルト質
6 7.5Y4/1灰色粘土 シルト質
7 7.5Y4/1灰色粘土 シルト質
8 5Y4/1灰色粘土 シルト質 5Y4/2灰オリーブ色シルト層状に少量混
9 5Y5/2灰オリーブ色シルト
10 10Y4/1～5/1灰色粘土 シルト質

土坑3385



1 7.5Y4/1灰色～4/2灰オリーブ色シルト
φ2cm以下礫極少量混
2 5Y4/1灰色シルト 木質混
3 7.5Y4/1灰色シルト 粘質
4 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト 粘質 木片含

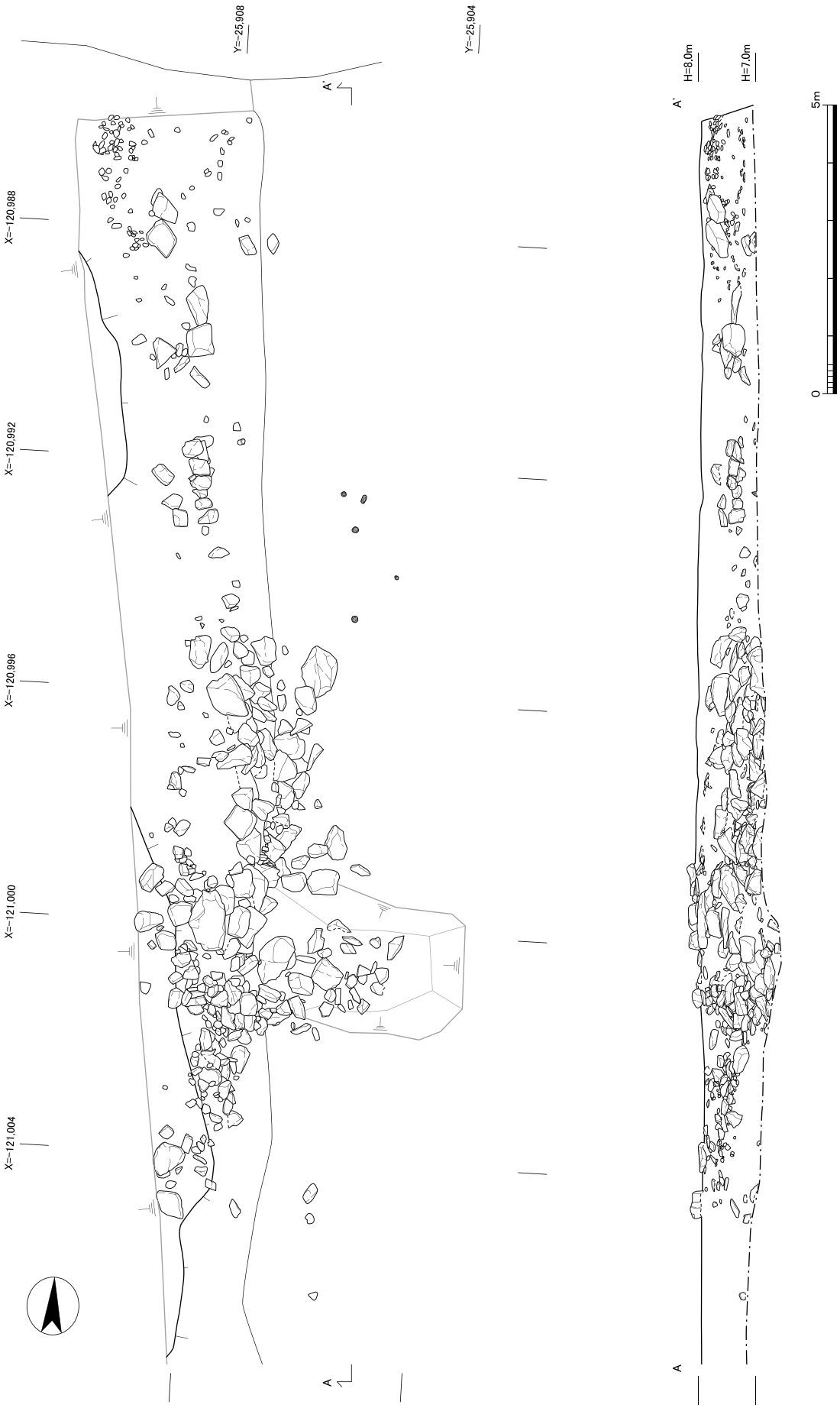
土坑3374



1 2.5Y6/2灰黄色細砂
10Y6/1灰色シルトブロック少量混 炭・土器片含
2 10YR7/4にぶい黄燈色シルト 粘質
10Y6/1灰色シルトブロック少量混
3 10Y6/1灰色シルト やや粘質
2.5Y7/4浅黄色細砂ブロック少量混 土器片少量含
4 2.5Y6/1黄灰色細砂 やや粘質
炭・土器片少量含
5 10Y6/1灰色細砂 やや粘質
7.5Y7/2灰白色粘土ブロック混 炭少量含
6 10Y5/1灰色細砂 φ1cm礫少量混
土器片少量含
7 7.5Y5/1灰色細砂 やや粘質
5Y5/1灰色細砂ブロック混 土器片少量含
8 5Y5/1灰色細砂 やや粘質
9 10Y5/1灰色細砂
10 10Y6/1灰色粘土 炭多量含
11 10Y6/1灰色細砂
12 7.5Y5/1灰色粘土

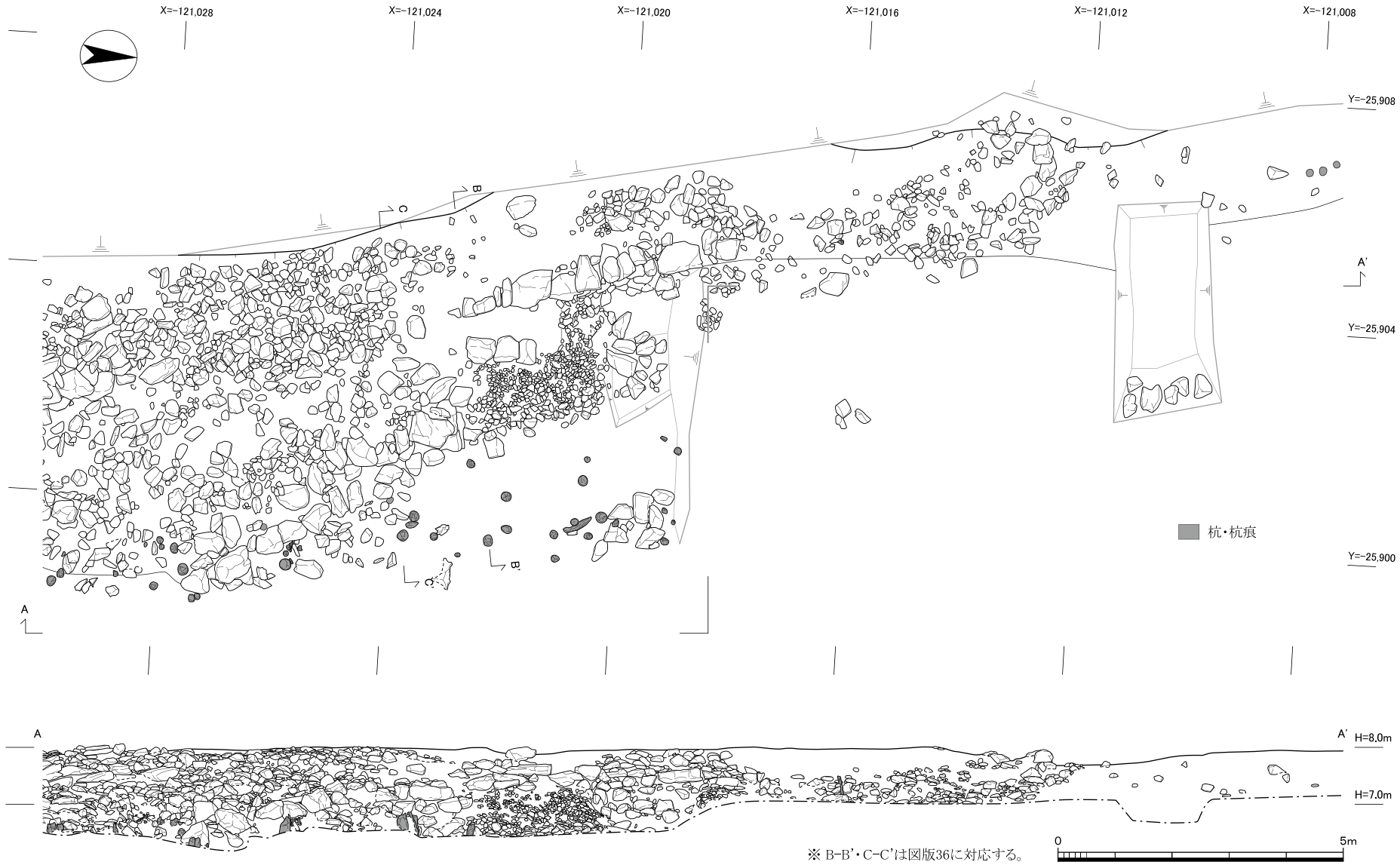
0 2m

溝3055断面図、土坑3374・3385実測図（1：50）



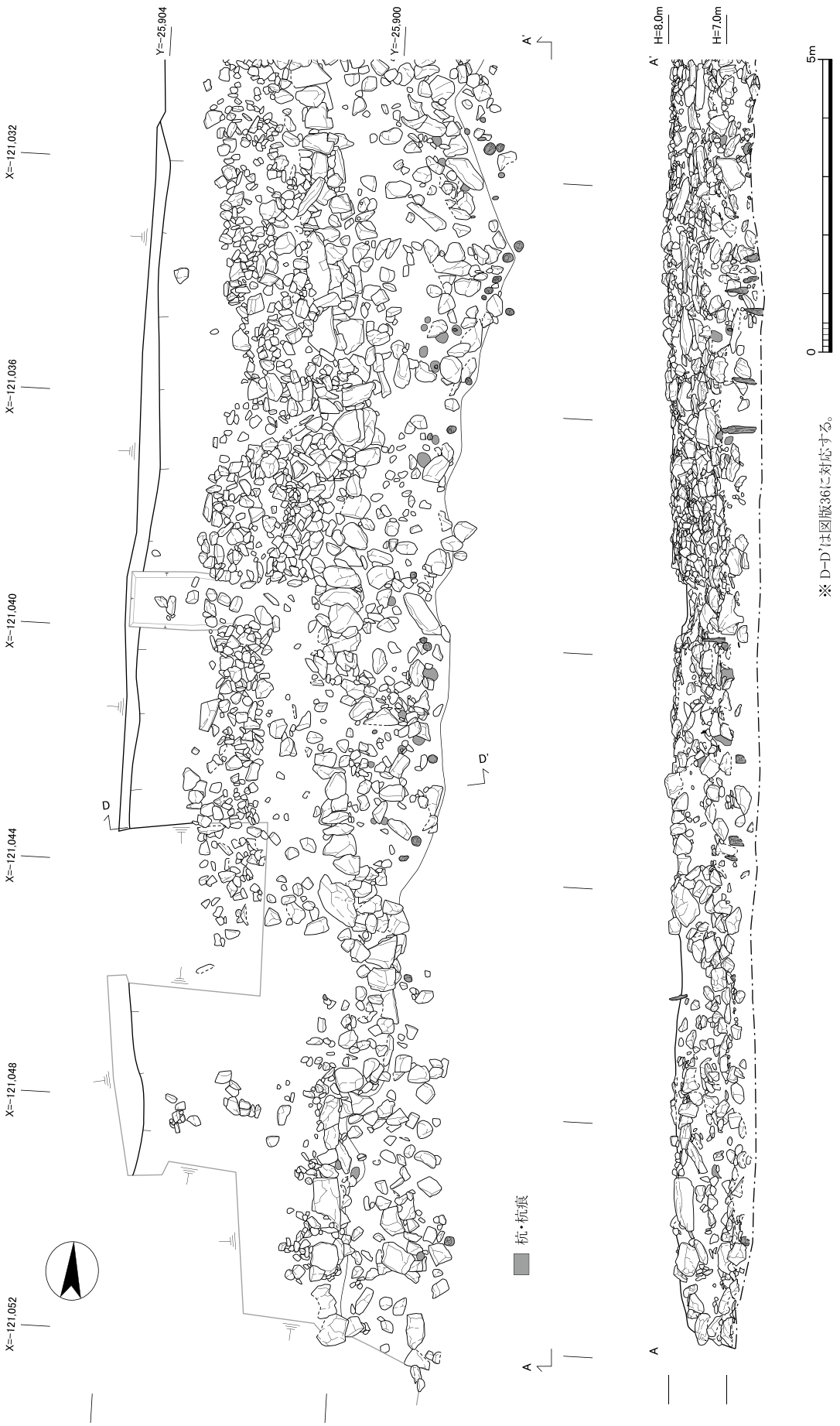
護岸3200実測図１（１：100）

図版34 遺構

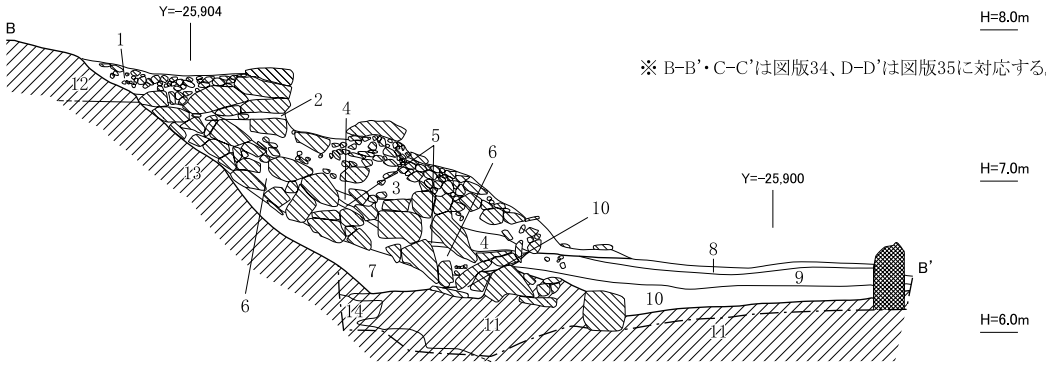


※ B-B'・C-C'は図版36に対応する。

護岸3200実測図２（１：100）



護岸3200実測図３（１：100）



※ B-B'・C-C'は図版34、D-D'は図版35に対応する。

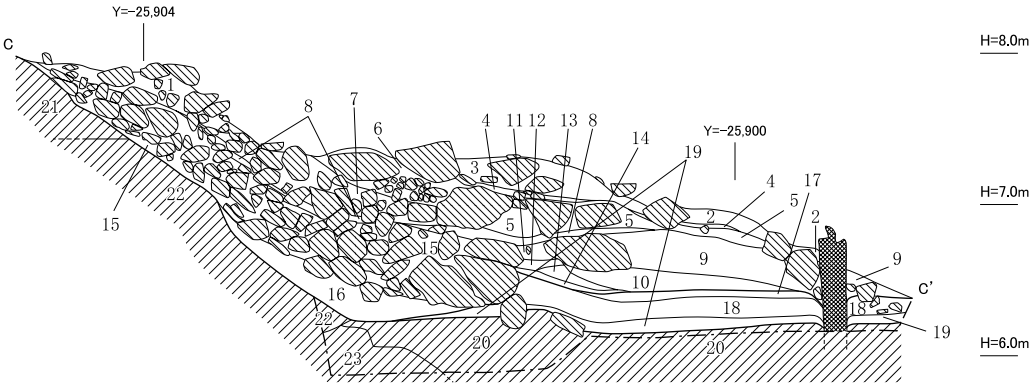
1 2.5Y6/2黄灰色細砂 下部φ1cm円礫混 上部6～8cm円礫混
2 2.5Y6/3にぶい黄褐色粘土
3 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂 φ7～12cm角礫多量混
4 2.5Y6/4にぶい黄褐色微砂 シルト混 φ1～2cm礫混
5 2.5Y6/3にぶい黄褐色粘土
6 2.5Y6/3にぶい黄褐色微砂
7 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土
5GY5/1オリーブ灰色ブロック少量混 炭・土器片・瓦片含

護岸3200構築土

8 2.5Y6/1黄灰色シルト
9 2.5Y6/2黄灰色細砂 φ2～10cm礫混
10 2.5Y5/1黄灰色シルト
11 7.5YR4/4褐色粗砂 φ2～4cm礫混
鉄分沈着(13・14を洗掘)

桂川河川堆積

12 2.5Y5/2暗灰黄色シルト
13 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土
14 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土



1 2.5Y6/2黄灰色細砂 下部φ1cm円礫混
上部6～8cm円礫混
2 2.5Y6/2黄灰色細砂 下部φ1cm円礫混
上部6～8cm円礫混(1の崩落土)
3 2.5Y5/3黄褐色粗砂 φ0.5～5cm礫多量混
4 2.5Y6/3にぶい黄褐色粘土
5 2.5Y6/4にぶい黄褐色微砂 シルト混 φ1～2cm礫混
6 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂 φ7～12cm角礫多量混
7 2.5Y6/4にぶい黄褐色微砂 シルト混 φ1～2cm礫混
8 2.5Y6/3にぶい黄褐色粘土
9 2.5Y6/3にぶい黄色細砂 φ1～4cm礫混
10 2.5Y6/3にぶい黄色細砂 φ1～4cm礫多量混
11 2.5Y6/3にぶい黄色細砂 シルト混
12 2.5Y6/3にぶい黄色シルト

護岸3200構築土

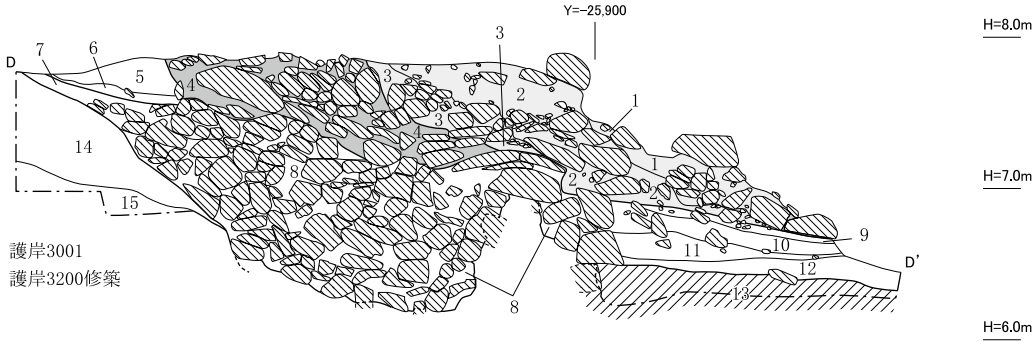
13 2.5Y6/3にぶい黄色細砂 φ0.5cm礫混
14 2.5Y6/2灰黄色シルト
15 2.5Y6/3にぶい黄褐色微砂
16 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土
5GY5/1オリーブ灰色ブロック少量混 炭・土器片・瓦片含

護岸3200構築土

17 2.5Y6/1黄灰色シルト
18 2.5Y6/2黄灰色細砂 φ2～10cm礫混
19 2.5Y5/1黄灰色シルト
20 7.5YR4/4褐色粗砂 φ2～4cm礫混
鉄分沈着(22・23を洗掘)

桂川河川堆積

21 2.5Y5/2暗灰黄色シルト
22 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土
23 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土



1 2.5Y5/1黄灰色シルト
2 10YR5/3にぶい黄褐色細砂
φ1～6cm円礫多量混
3 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂

護岸3001構築土

4 10YR5/4にぶい黄褐色シルト

護岸3200修築

5 7.5YR6/8橙色シルト
(10YR7/2にぶい黄橙色粘土との互層)
6 10YR6/2灰黄褐色粘土
(10YR7/2にぶい黄橙色シルトとの互層)

護岸3200構築土

7 2.5Y6/4にぶい黄褐色微砂 シルト混 φ1～2cm礫混
8 2.5Y6/3にぶい黄褐色微砂

護岸3200構築土

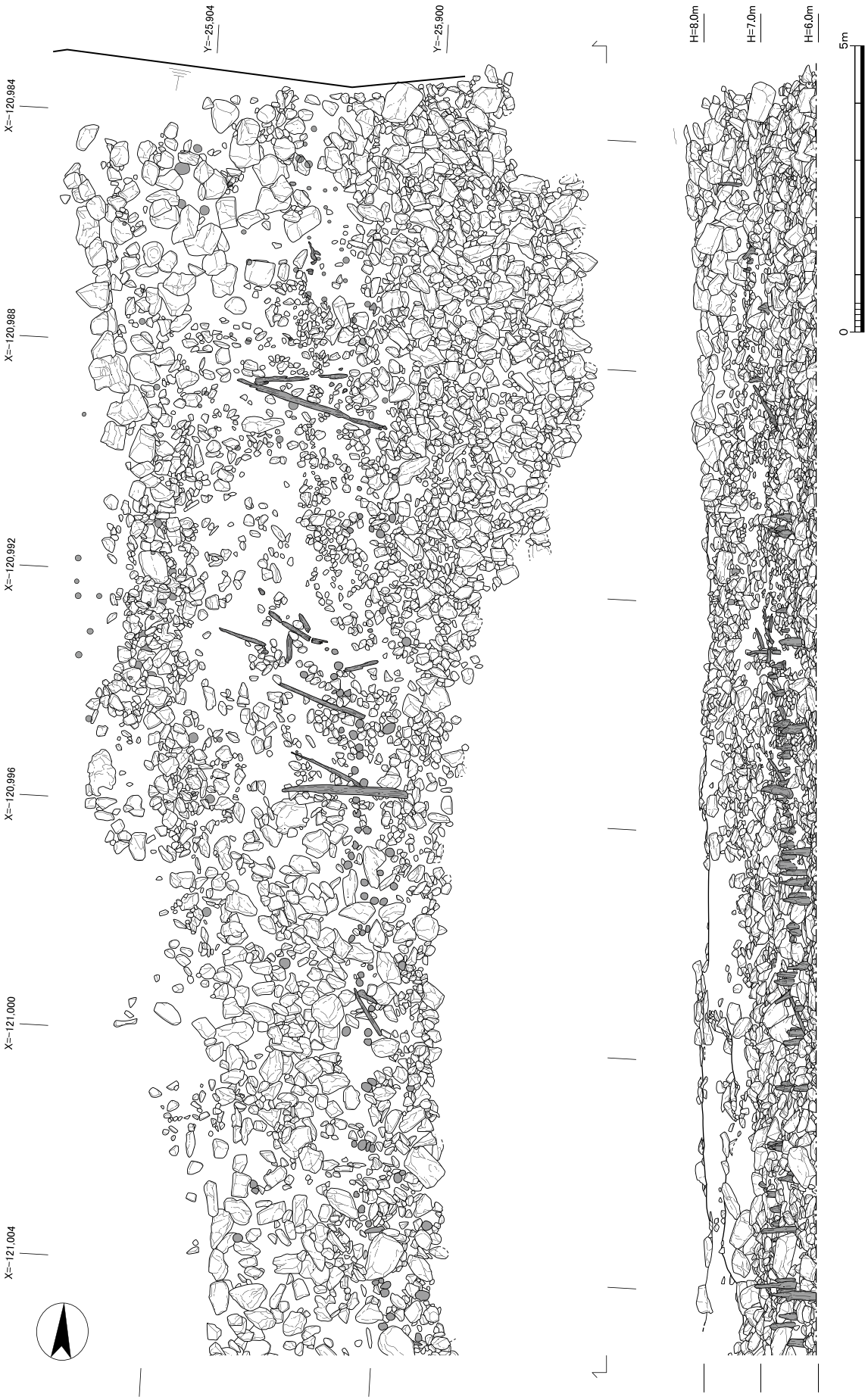
9 2.5Y6/1黄灰色シルト
10 2.5Y6/2黄灰色細砂 φ2～10cm礫混
11 2.5Y5/1黄灰色シルト
12 2.5Y5/1黄灰色シルト
13 7.5YR4/4褐色粗砂 φ2～4cm礫混 鉄分沈着(15を洗掘)

桂川河川堆積

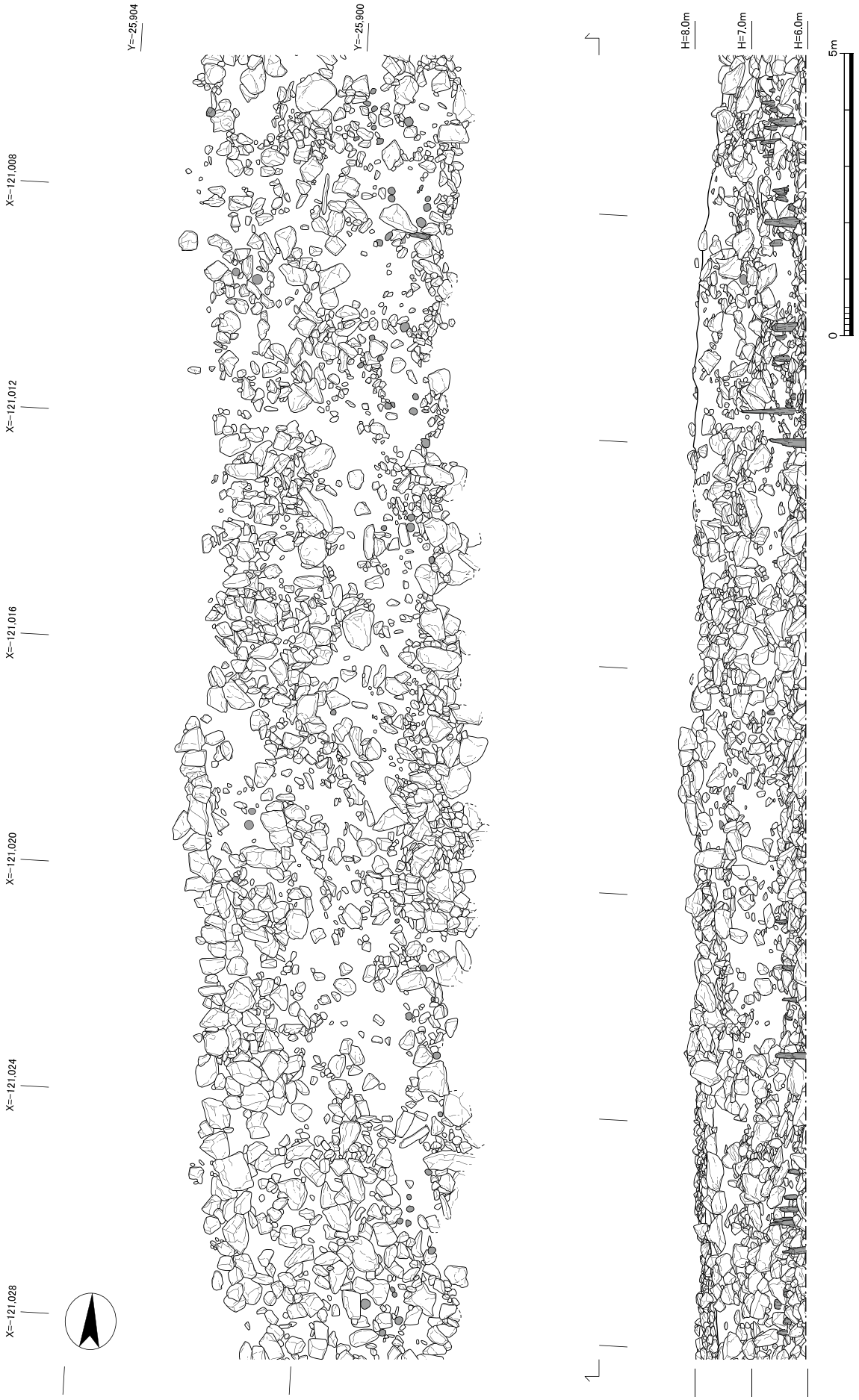
14 (溝3055埋土)
15 (流路3400埋土)

0 2m

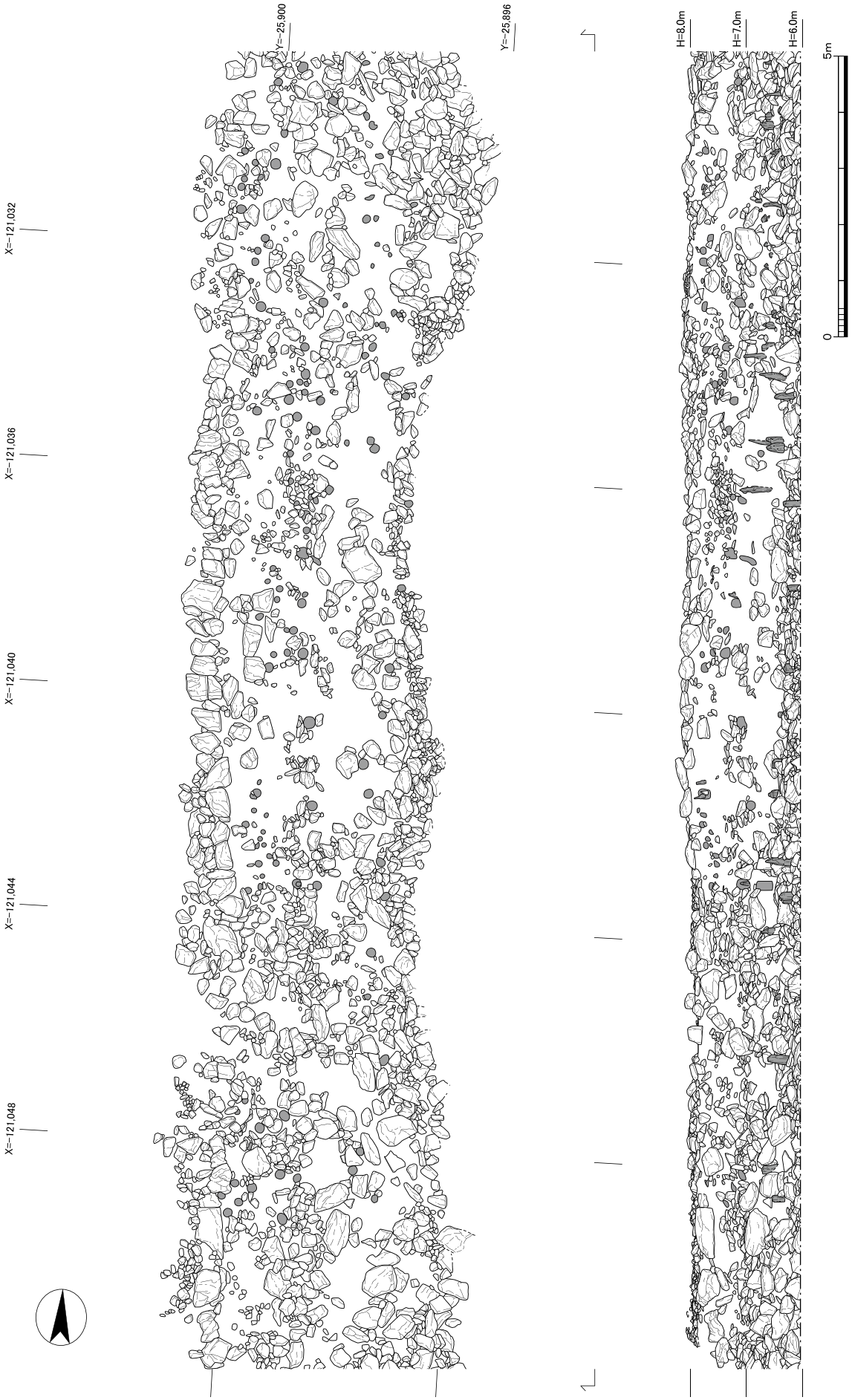
3区護岸断割断面図（1：50）



護岸3001実測図１（１：100）



護岸3001実測図２（１：100）



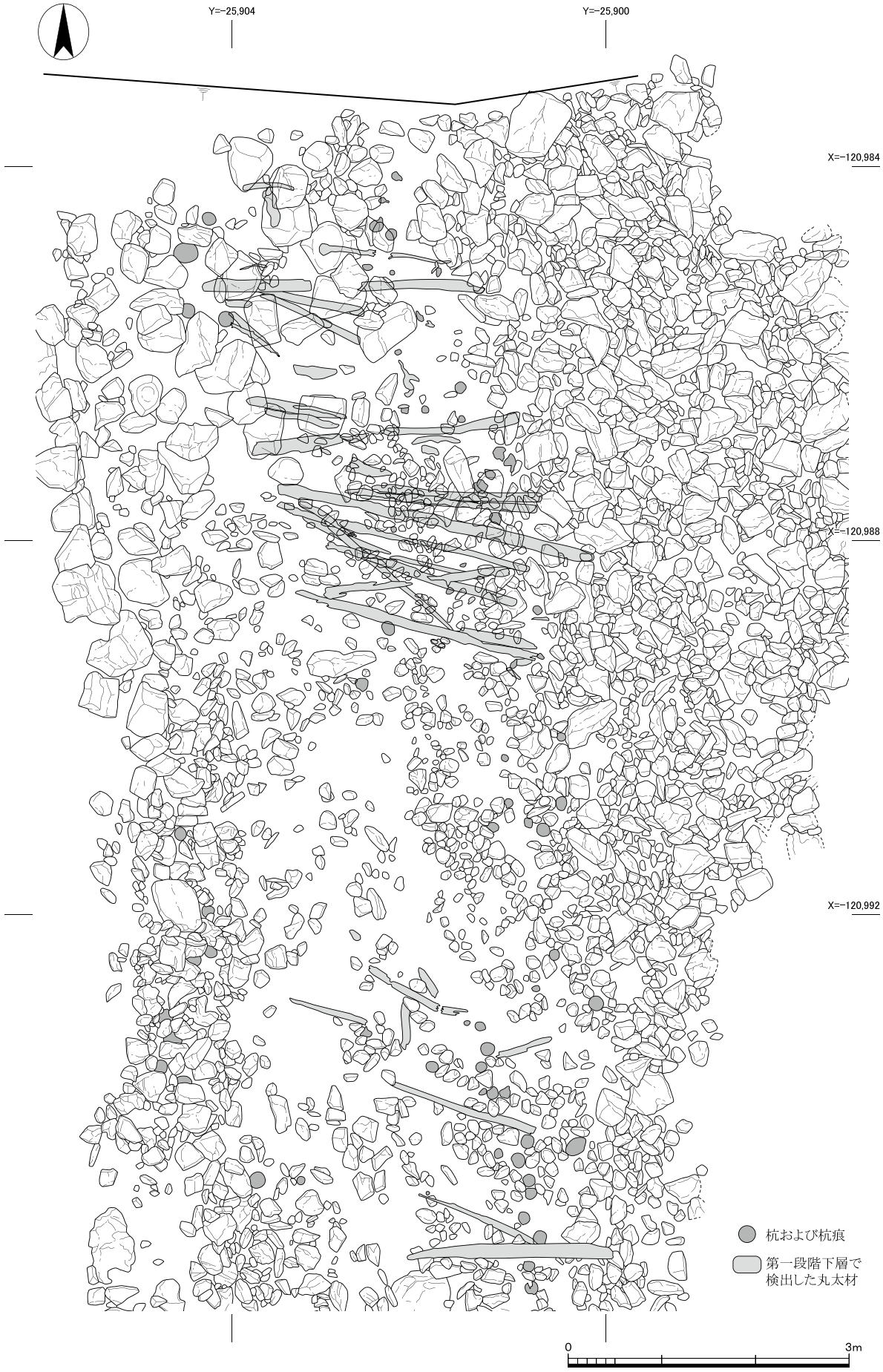
護岸3001実測図３（１：100）

1 10YR6/1褐灰色細砂 φ0.1～2cm礫混（杭痕）
2 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂 φ0.1～1cm円礫・φ10～20cm石混 ― 水制3410構築土
3 10YR7/2にぶい黄橙色 シルトと極細砂の互層 ラミナ ― 桂川河川堆積（澱み部分）
4 10YR5/1褐灰色シルト
5 10YR7/1灰白色粗砂 φ0.3～2cm円礫混（桂川河川堆積）
6 2.5Y5/1黄灰色極細砂
7 10YR7/2にぶい黄橙色シルト ― 竹蛇篭内部流入土
8 10YR5/1灰黄色シルト
9 7.5YR8/1灰色礫 φ0.2～1cm円礫 上面にφ0.5～2cm円礫堆積 ― 桂川河川堆積
10 2.5Y7/1灰色礫 φ0.5～1.5cm円礫・φ10～20cm石混 鉄分沈着 ― 水制3410構築土
11 10YR6/1褐灰色細砂 φ0.2～0.5cm礫少量混
12 2.5Y5/1黄灰色極細砂 φ0.5～2cm円礫・φ15～25cm角礫混 ― 水制3410構築土
13 2.5Y6/2灰黄色細砂 φ0.2～1cm円礫多量混
14 5Y7/1灰白色シルト
15 2.5Y7/2灰黄色中微砂（護岸3200構築土）
16 5Y6/1灰色細砂 0.2～1.5cm円礫多量混 ― 桂川河川堆積
17 7.5Y5/1灰色細砂
18 10YR8/1灰白色礫 φ0.2～0.5cm礫・2～5cm円礫混
19 10YR6/1褐灰色細砂 φ0.2～1cm礫混
20 10YR6/6明黄褐色粗砂 φ2～5cm礫混
21 10YR6/4にぶい黄橙色粗砂
22 10YR6/4にぶい黄橙色粗砂 φ2～5cm円礫混

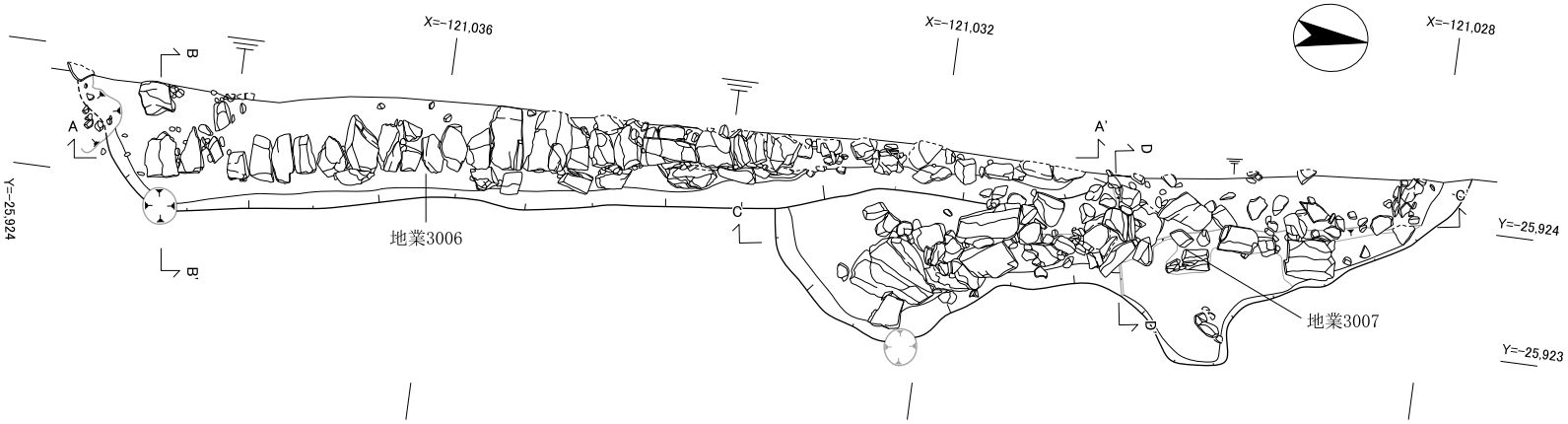
0 3m

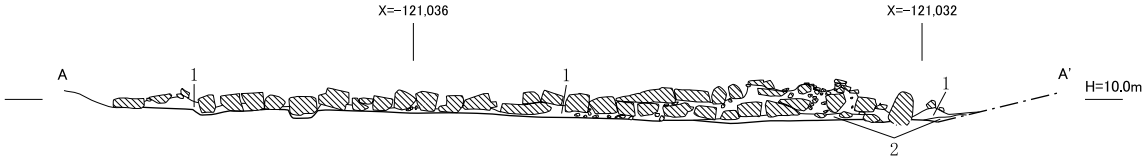
水制3410第1段階平面図・断割断面図（1：60）

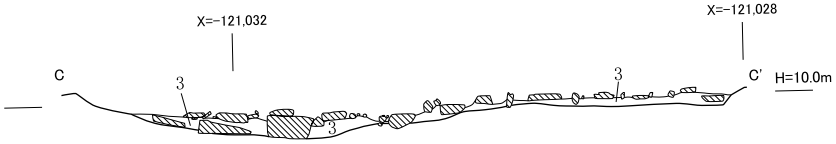
水制3410第２段階平面図（１：60）

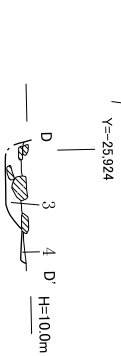


水制3410第３段階平面図（１：60）





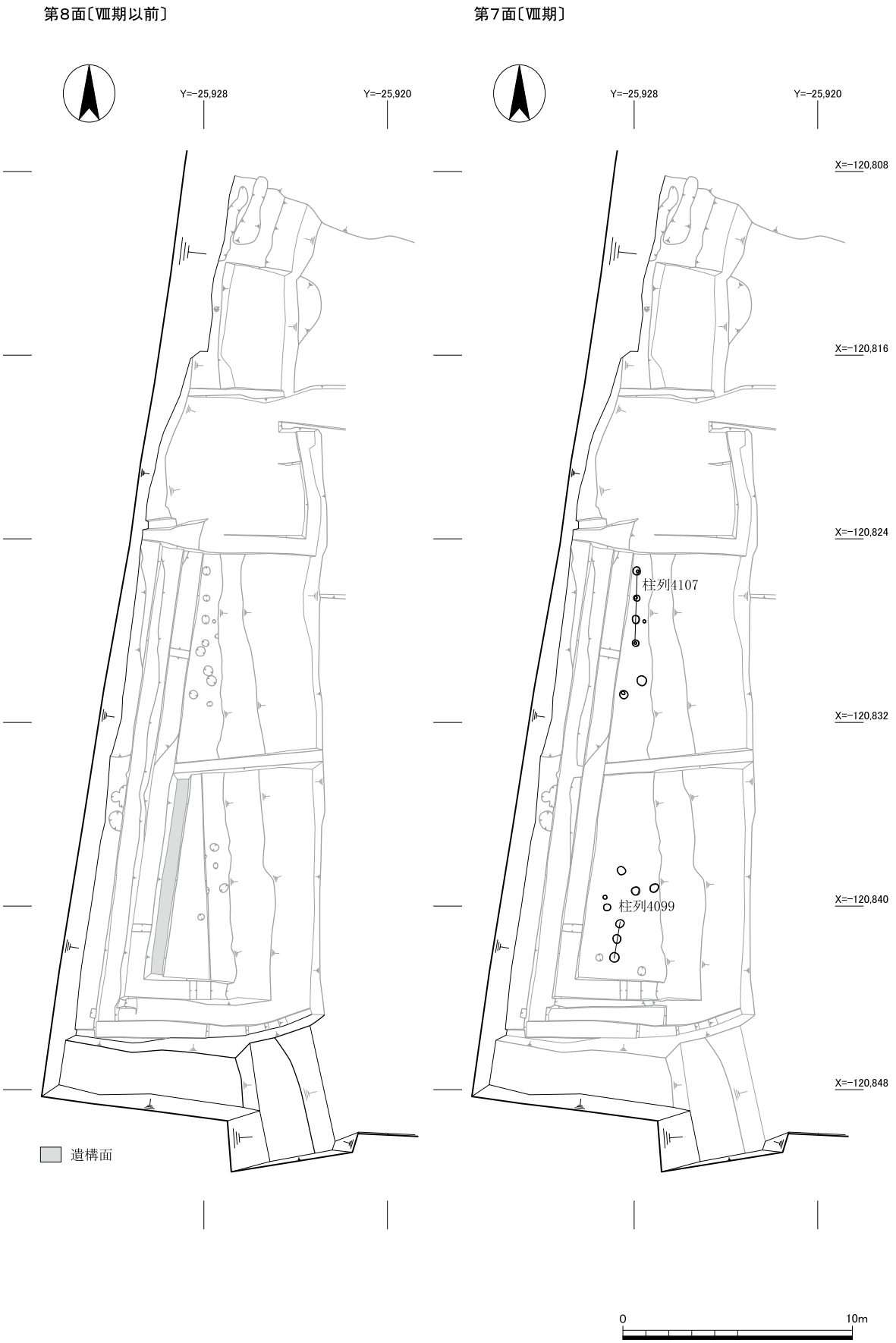




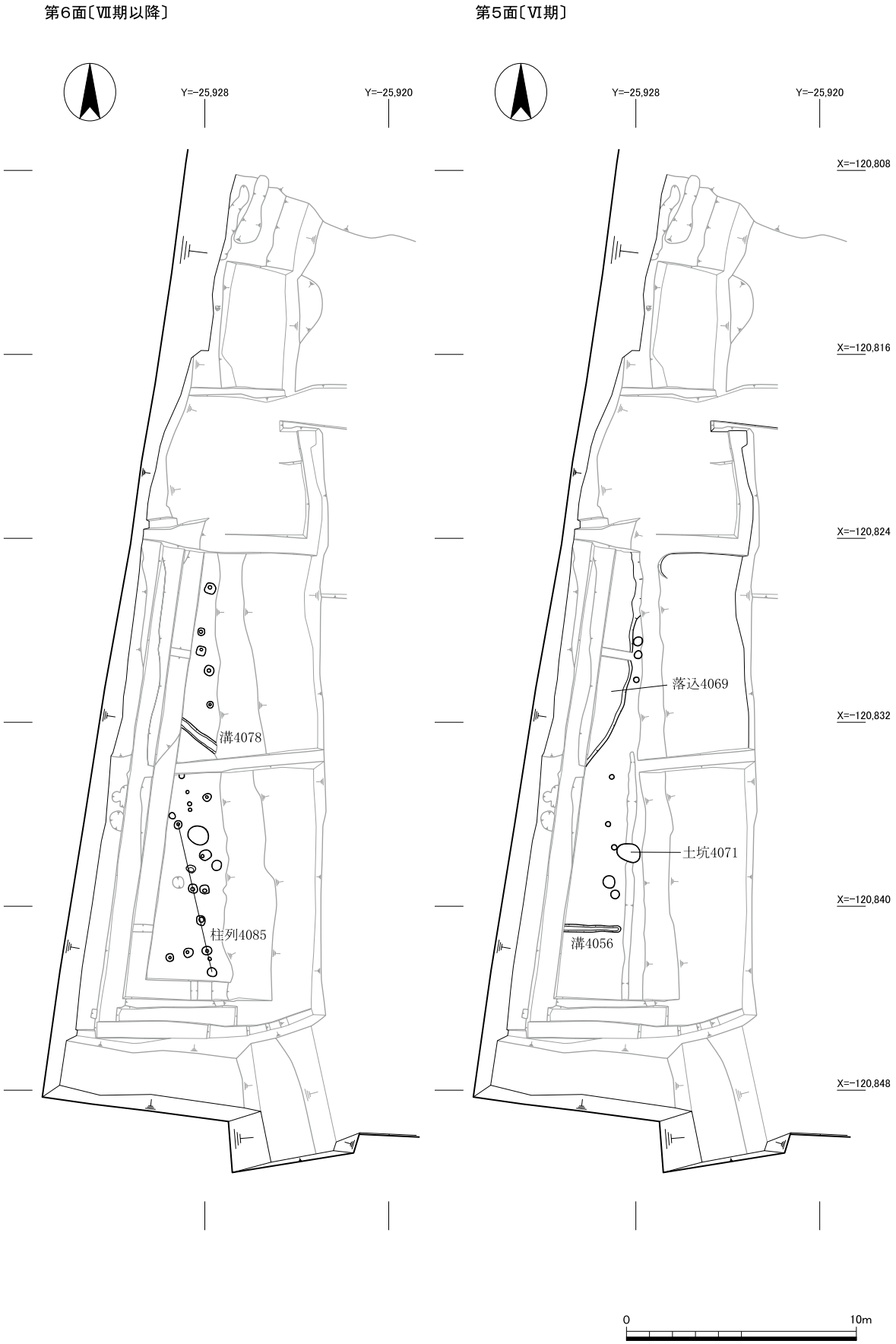
1　10YR5/4にぶい黄褐色細砂　φ3～10cm礫多量含　固く締まる
2　10YR4/4褐色シルト　細砂少量混
3　10YR5/4にぶい黄褐色細砂　φ3～10cm礫多量含　固く締まる
4　10YR5/2黄褐色細砂

0　3m

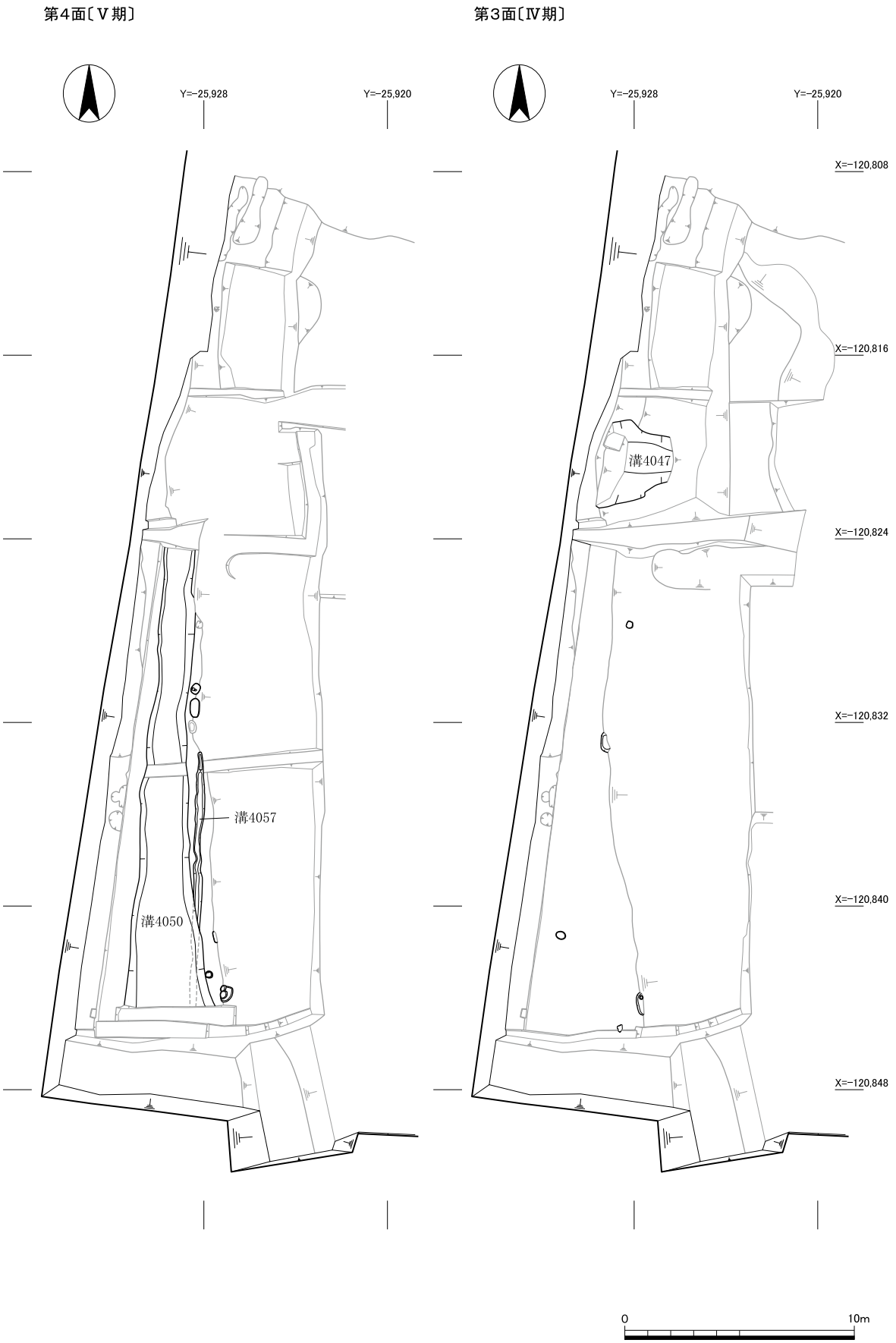
地業3006・3007実測図（1：60）



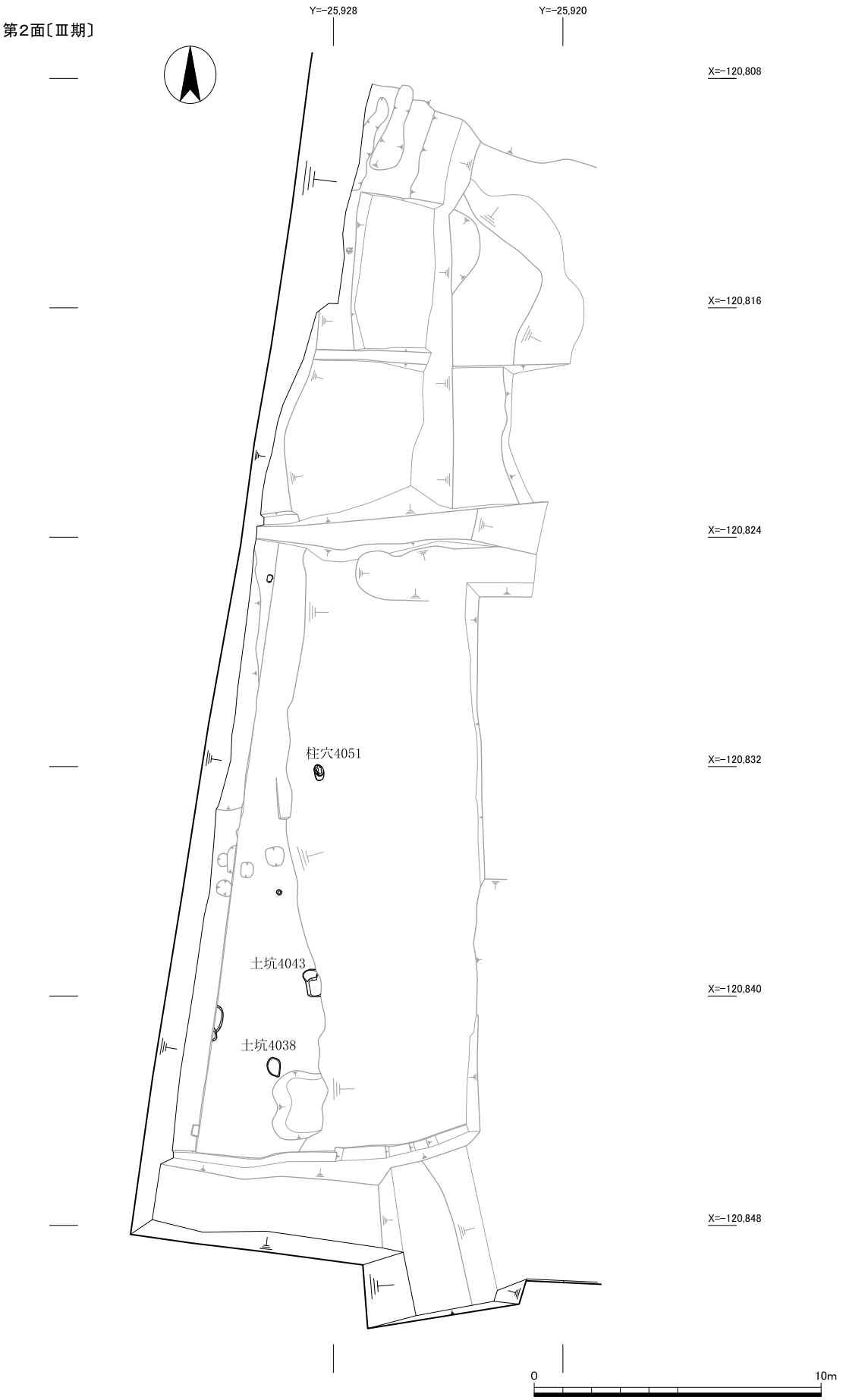
4区第8面〔Ⅷ期以前〕・第7面〔Ⅷ期〕平面図（1：250）



4区第6面〔Ⅶ期以降〕・第5面〔Ⅵ期〕平面図（1：250）



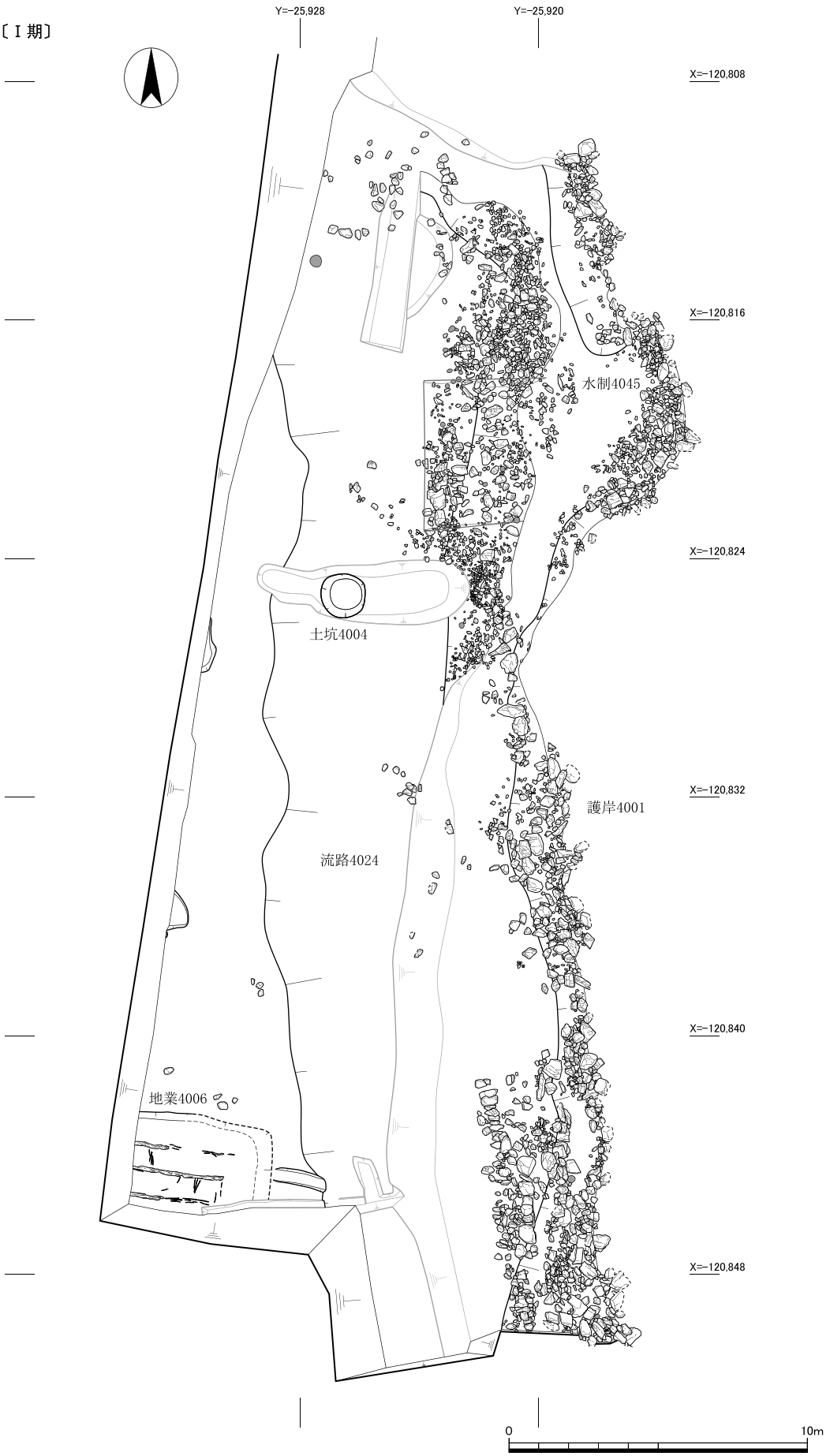
4区第4面〔Ⅴ期〕・第3面〔Ⅳ期〕平面図（1：250）



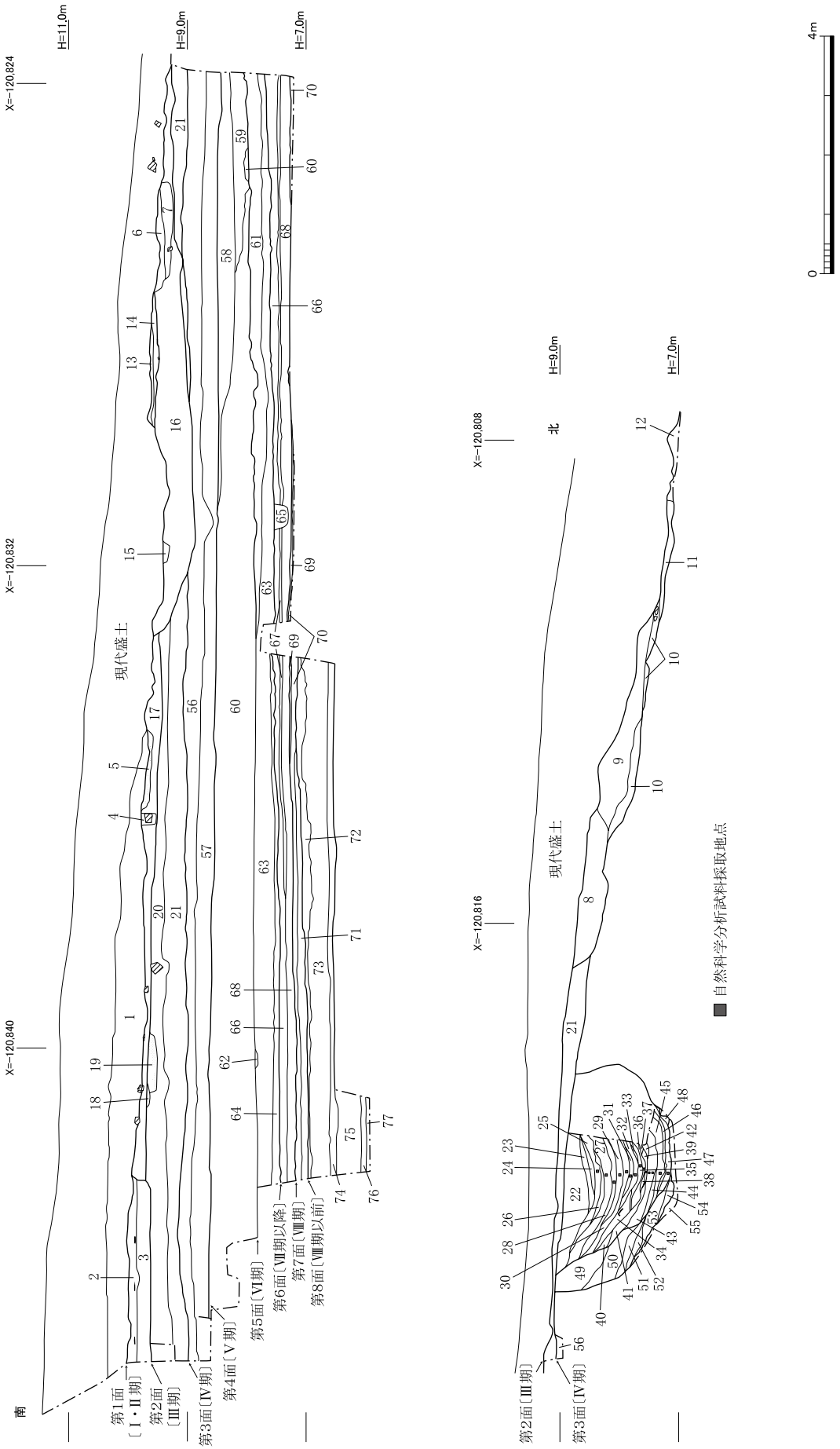
4区第2面〔Ⅲ期〕平面図（1：200）

4区第1面〔Ⅱ期〕平面図（1：200）

第1面〔Ⅰ期〕



4区第1面〔Ⅰ期〕平面図（1：200）



4区西壁断面図1（1：100）

4区西壁断面図２（土色）

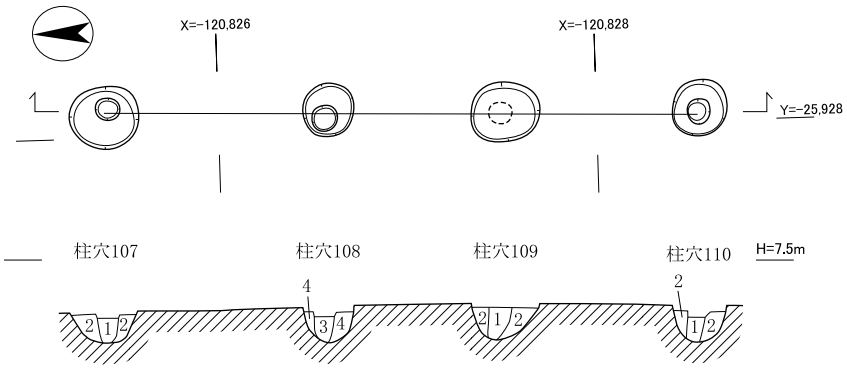
西壁

1 10YR5/4にぶい黄褐色細砂～中砂と10YR5/1灰黄褐色シルトの互層（現代堆積）
2 10YR7/4にぶい黄橙色粗砂～極粗砂　粗朶含む ┐ 地業4006
3 10YR3/1黒褐色粘質シルト　粗砂・炭含む ┘
4 2.5Y5/3黄褐色シルト　焼土ブロック・炭多量
5 2.5Y5/3黄褐色小礫混シルト　粗砂～極粗砂ブロック多量
6 10YR5/2灰黄褐色シルト～細砂　炭少量
7 10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂　炭・炭化材多量、φ1～10cmの礫少量
8 10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂　炭・土器片多量 ┐
9 10YR5/6黄褐色粗砂～極粗砂　φ1～5cmの礫多量 │
10 10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂　φ10～15cmの礫・炭多量、瓦混 │ 流路4024
11 2.5Y4/2暗灰黄色シルト　粗砂～極粗砂・小礫混 │
12 2.5Y5/2暗灰黄色シルト　固くしまる ┘
13 10YR5/2にぶい黄褐色極細砂～細砂　鉄分多量 ┐ Ⅰ期整地
14 10YR5/2にぶい黄褐色極細砂～細砂　炭・焼土多量 ┘
15 10YR6/4にぶい黄橙色細砂に10YR4/1褐灰色シルト小ブロック多量
16 10YR6/4にぶい黄橙色細砂～中砂に10YR4/1褐灰色シルトブロック混（土坑4036）
17 10YR5/2灰黄褐色シルト～細砂　炭・焼土・粗砂含む（第1面整地）
18 10YR5/3にぶい黄褐色シルト～極細砂　瓦片・φ5～30cmの礫多量
19 10YR5/3にぶい黄褐色シルト～極細砂　粗砂～極粗砂ブロック多量
20 10YR4/2灰黄褐色シルト～極細砂　炭・焼土多量、φ1～3cmの礫混 ┐ 第2面整地
21 10YR4/1褐灰色シルト　炭・φ1～5cmの礫少量 ┘
22 10YR5/2灰黄褐色シルト～極細砂　小礫混、炭少量 ┐
23 10YR5/1褐灰色砂礫　極粗砂～小礫　φ1～3cmの礫混 │
24 10YR4/1褐灰色シルトと細砂の互層　ラミナあり │
25 10YR3/1黒褐色粘質シルト～極細砂　炭・ブロック土多量 │
26 10YR5/4にぶい黄褐色中砂～粗砂　炭少量 │
27 10YR5/4にぶい黄褐色中砂と10YR5/1褐灰色シルトの互層　ラミナあり │
28 10YR4/1褐灰色粘質シルト　植物多量 │
29 10YR4/1褐灰色シルトと10YR5/3にぶい黄褐色細砂の互層　ラミナあり、植物少量 │
30 10YR3/1黒褐色粘質シルト　細砂層薄くはさむ、植物多量 │
31 24層と同　植物より多い │
32 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト　植物少量 │
33 2.5Y4/2暗灰黄色細砂　植物極めて多量 │
34 10YR3/1黒褐色粘質シルト　細砂小ブロック混 │
35 2.5Y3/1黒褐色粘質シルトと2.5Y5/4黄褐色細砂の互層　炭化しない木多量 │ 溝4047新
36 29層と同　植物（葦？）多層になる │
37 10YR3/1黒褐色極細砂　小礫混 │
38 10YR3/2黒褐色極細砂～細砂　植物少量、ラミナあり │
39 5Y2/1黒色粘質シルト　植物多量 │
40 2.5Y5/1暗灰黄色シルト │
41 2.5Y5/2暗灰黄色極細砂　シルトブロック混 │
42 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト　小礫混、植物少量 │
43 2.5Y3/1黒褐色粘質シルトと2.5Y5/2暗灰黄色極細砂～細砂の互層　植物層・ラミナあり │
44 37層と同　植物少量 │
45 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト　植物少量 │
46 2.5Y4/2暗灰黄色細砂　ラミナあり │
47 5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト　リン分含む、ラミナあり │
48 5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト　ふみこみか ┘
49 2.5Y4/1黄灰色シルト～極細砂　固くしまる ┐
50 10YR4/1褐灰色シルト～極細砂　炭少量、ブロック土多量 │
51 2.5Y3/1黒褐色シルト～極細砂　ブロック土多量 │
52 2.5Y5/3黄褐色細砂～中砂と2.5Y3/1黒褐色シルトの互層　ラミナあり │ 溝4047古
53 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト　炭多量 │
54 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト ┘
55 10YR3/1黒褐色粘質シルト（基盤層）
56 10YR4/1褐灰色シルト～極細砂　炭少量 ┐ 第3面整地
57 10YR3/1黒褐色シルト　炭少量 ┘
58 10YR4/2灰黄褐色シルト～極細砂 ┐
59 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～極細砂 │ 第4面整地
60 2.5Y3/2黒褐色シルト～極細砂 ┘
61 10YR4/2灰黄褐色シルト　鉄分多量（落込4069）
62 5Y4/1灰色粘質シルト（溝4056）
63 2.5Y5/1黄灰色シルト～極細砂 ┐ 第5面基盤層
64 10YR5/1褐灰色シルト ┘
65 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト（溝4078）
66 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細砂 ┐
67 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト～極細砂　鉄分多量 │ 第6面基盤層
68 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～極細砂 ┘
69 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～極細砂　鉄分多量 ┐
70 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂 │ 第7面基盤層
71 10YR4/1褐灰色シルト ┘
72 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～極細砂　鉄分多量 ┐ 第8面基盤層
73 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト ┘
74 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト　炭化植物多量、ラミナあり
75 7.5Y4/1灰色粘質シルト　炭化植物層あり
76 2.5Y3/1黒褐色粘土～シルト　炭多量、土壌化
77 2.5Y4/1黄灰色粘土～シルト

図版51 遺構

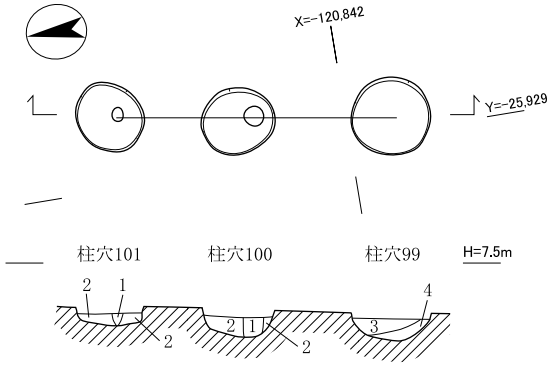
柱列4107・4085・4099実測図（1：40）

柱列4107



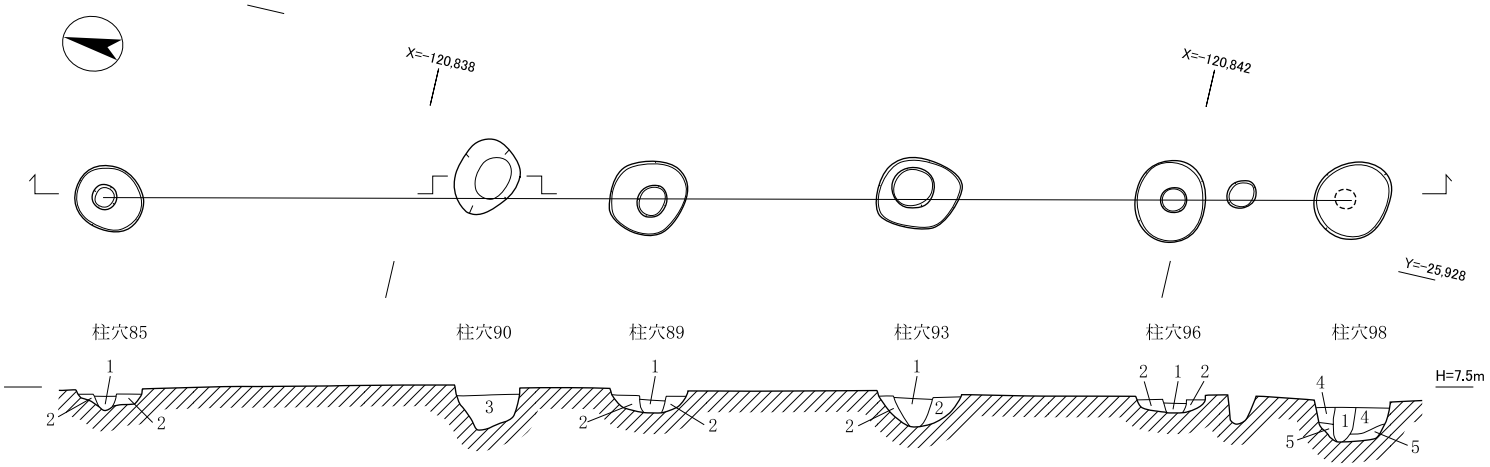
1　2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト～極細砂　鉄分多量
2　2.5Y4/1黄灰色シルト～極細砂　鉄分多量
3　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト
4　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂　鉄分多量

柱列4099



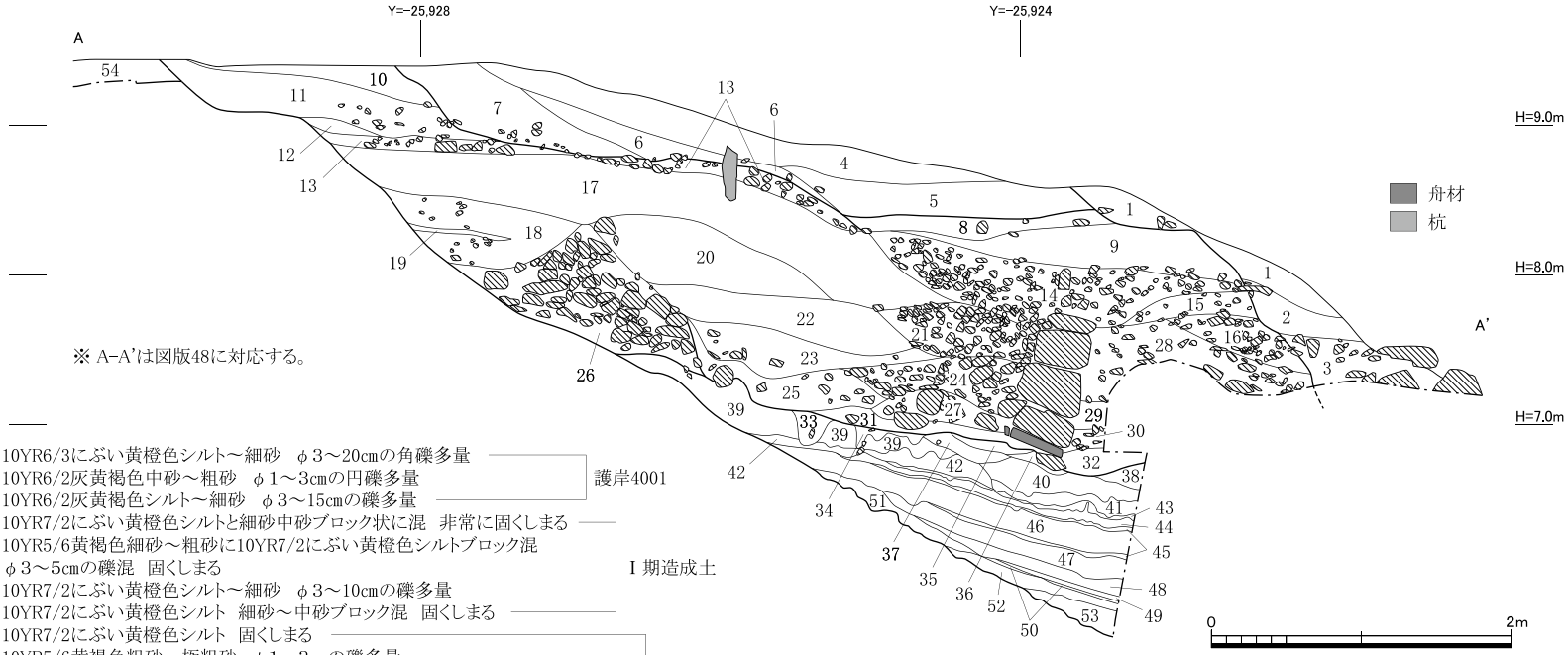
1　2.54/1黄灰色粘質シルト
2　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂　鉄分多量
3　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト
4　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂

柱列4085



1　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト
2　2.5Y4/1黄灰色粘質シルトに2.5Y4/2暗灰黄色極細砂ブロック多量混
3　2.5Y4/1黄灰色シルト
4　2.5Y3/1黒褐色粘質シルトに2.5Y4/2暗灰黄色極細砂ブロック混
5　5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト

0　2m



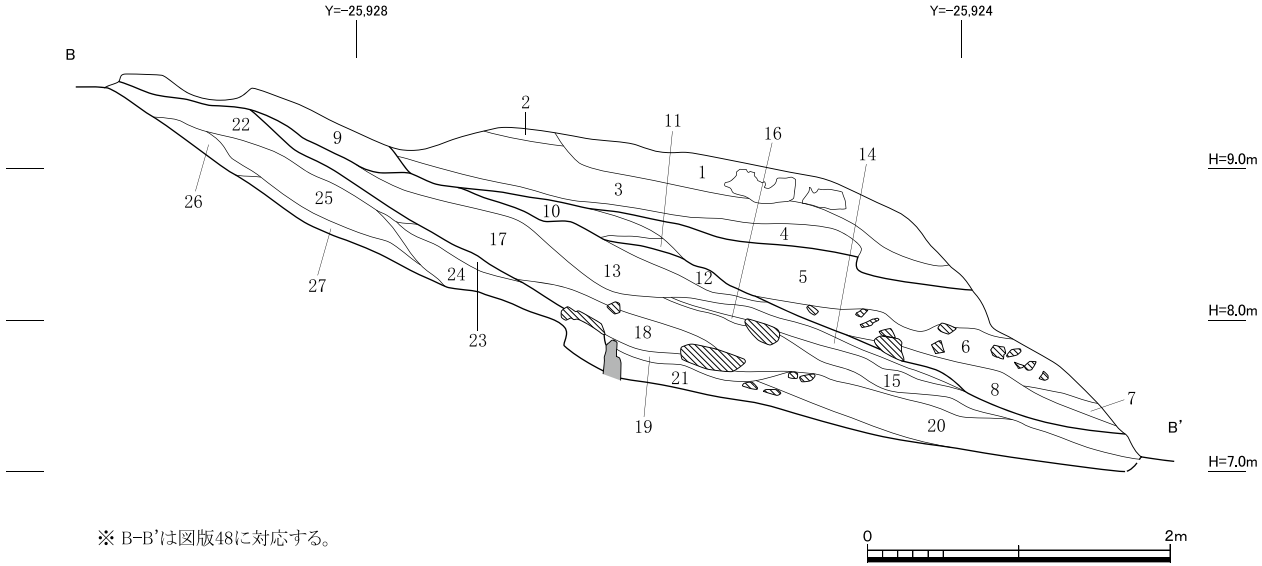
1 10YR6/3にぶい黄橙色シルト～細砂　φ3～20cmの角礫多量
2 10YR6/2灰黄褐色中砂～粗砂　φ1～3cmの円礫多量
3 10YR6/2灰黄褐色シルト～細砂　φ3～15cmの礫多量
4 10YR7/2にぶい黄橙色シルトと細砂中砂ブロック状に混　非常に固くしまる
5 10YR5/6黄褐色細砂～粗砂に10YR7/2にぶい黄橙色シルトブロック混
φ3～5cmの礫混　固くしまる
6 10YR7/2にぶい黄橙色シルト～細砂　φ3～10cmの礫多量
7 10YR7/2にぶい黄橙色シルト　細砂～中砂ブロック混　固くしまる
8 10YR7/2にぶい黄橙色シルト　固くしまる
9 10YR5/6黄褐色粗砂～極粗砂　φ1～3cmの礫多量
10 10YR6/3にぶい黄橙色シルト粗砂～極粗砂混　固くしまる
11 10YR6/3にぶい黄橙色シルト～細砂　φ3～5cmの円礫多量
12 10YR7/2にぶい黄橙色シルト　非常に固くしまる
13 10YR7/2にぶい黄橙色シルト　φ3～15cmの礫多量　非常に固くしまる
14 10YR5/2灰黄褐色シルト～細砂　φ3～8cmの円礫詰まる
15 10YR5/6黄褐色粗砂～極粗砂　φ1～3cmの礫多量
16 10YR6/3にぶい黄橙色中砂～粗砂　φ3～8cmの円礫詰まる
17 10YR8/2灰白色シルトブロックと10YR6/3にぶい黄橙色細砂中砂ブロック混
18 10YR5/6黄褐色粗砂～極粗砂　φ1～4cmの円礫多量
19 10YR4/2灰黄褐色シルト
20 10YR5/3にぶい黄褐色中砂～極粗砂に10YR7/2にぶい黄橙色シルトブロック多量
21 10YR5/3にぶい黄褐色細砂　φ5～10cmの礫詰まる
22 10YR5/3にぶい黄褐色中砂～粗砂　φ1～3cmの礫多量
23 10YR5/1褐灰色極細砂に10YR4/6褐色細砂中砂ブロック混
24 10YR6/2灰黄褐色細砂中砂　φ5～20cmの礫詰まる
25 10YR5/2灰黄褐色細砂に10YR3/3暗褐色粗砂～極粗砂ブロック多量
26 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂　φ10～30cmの円礫詰まる
27 10YR5/2灰黄褐色極細砂　φ10～30cmの礫混
28 10YR6/2灰黄褐色シルト　φ5～10cmの角礫詰まる
29 10YR4/2灰黄褐色細砂　粗砂～極粗砂ブロック混　φ5～8cmの礫混
30 10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂　やや粘質
31 10YR4/1褐灰色粘質細砂　粗砂ブロック混
32 10YR4/1褐灰色粘質シルト　φ5～20cmの円礫多量
33 10YR3/1黒褐色粘質シルト～細砂　φ3～10cmの礫混　グライ化
34 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト　粗砂～極粗砂ブロック混
35 2.5Y4/1黄灰色極細砂　細砂ブロック混
36 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト　細砂ブロック混
37 10YR4/1褐灰色シルト～極細砂　粗砂～小礫混
38 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト～極細砂　粗砂～極粗砂・リン分多量
39 10YR4/1褐灰色極細砂　粘質
40 2.5Y4/1黄灰色極細砂に5Y2/1黒色粘土ブロック多量、φ1cm以下の礫少量
41 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト極細砂　ブロック少量
42 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト極細砂　ブロック多量
43 10YR6/2灰黄褐色粘質シルト
44 5Y4/1灰色極細砂
45 5Y5/1灰色細砂
46 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂　炭化物・リン分多量
47 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト～極細砂
48 10YR4/1褐灰色シルトに2.5Y5/2暗灰黄色極細砂混
49 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト
50 10YR6/2灰黄褐色粘質シルト
51 2.5Y4/1黄灰色粘質シルトに2.5Y5/2暗灰黄色極細砂ブロック多量
52 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂
53 2.5Y2/1黒色粘質シルト
54 10YR6/3にぶい黄橙色シルト～細砂（第1面整地）

護岸4001
Ⅰ期造成土
水制4035
溝4030

X=−120,824セクション断面図（1：50）

図版54 遺構

X=－120,834セクション断面図（1：50）



※ B-B'は図版48に対応する。

1 5YR5/8明赤褐色細砂～粗砂　φ1～4cmの礫多量、
10YR8/2灰白色シルト大ブロック混　非常に固くしまる
2 7.5YR6/8橙色細砂～粗砂　固くしまる
3 5YR5/8明赤褐色細砂～粗砂　φ1～4cmの礫多量、
10YR8/2灰白色シルトブロック混　非常に固くしまる
4 10YR7/2にぶい黄橙色シルトと10YR6/3にぶい黄橙色極粗砂の互層（自然堆積）
5 10YR6/3にぶい黄橙色細砂に10YR4/2灰黄褐色シルトブロック多量
+10YR5/4にぶい黄褐色極粗砂ブロック混
6 10YR5/2灰黄褐色細砂～中砂粘質にφ10～30cmの角礫多量詰まる
7 10YR8/2灰白色極粗砂
8 10YR5/2灰黄褐色細砂にφ10～60cmの角礫多量詰まる
9 10YR5/3にぶい黄褐色シルト～細砂　φ1～3cmの礫・炭少量混
10 10YR6/3にぶい黄橙色細砂と10YR5/2灰黄褐色シルトが斑に混じる
11 10YR7/2にぶい黄橙色シルト　固くしまる

Ⅰ期造成土

Ⅰ期造成土

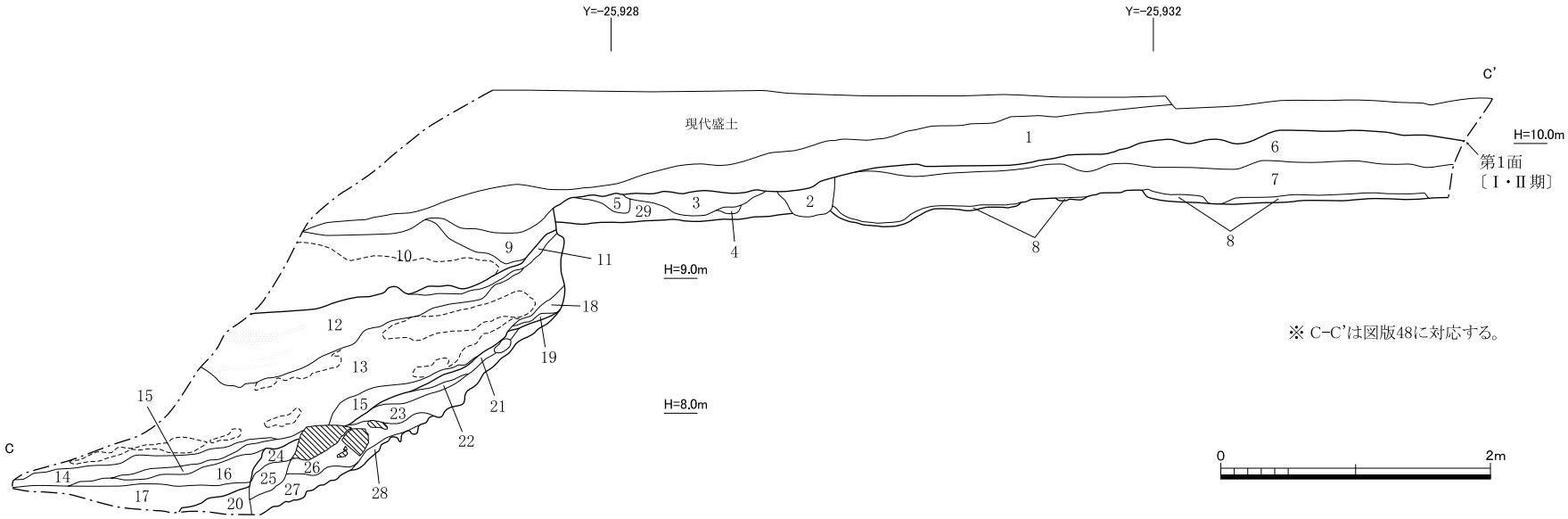
12 10YR5/1褐灰色粘質シルト
13 10YR8/4浅黄橙色細砂～中砂と10YR5/1褐灰色粘質シルト、
10YR8/2灰白色粗砂の互層
14 10YR5/1褐灰色粘質シルトと10YR8/4浅黄橙色細砂の互層
15 10YR8/2灰白色中砂～粗砂
16 7.5YR5/6明褐色粗砂～極細砂
17 2.5Y4/2暗灰黄色シルトと2.5Y6/2灰黄色極細砂・10YR8/4淡黄橙色細砂の互層
18 2.5Y4/2暗灰黄色極細砂に10YR6/6明黄褐色中砂層挟む
19 10YR6/4にぶい黄橙色粗砂～極粗砂
20 2.5YR5/6明褐色極粗砂　φ1～5cmの円礫詰まる
21 10YR8/3浅黄橙色細砂～粗砂

流路4024

22 10YR6/3にぶい黄橙色シルト　極粗砂～小礫混
23 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～細砂　ブロック土混
24 2.5Y4/1黄灰色シルト～細砂　小礫・炭混
25 10YR6/4にぶい黄橙色シルト～細砂　粗砂ブロック、小礫多量混
26 10YR6/2灰黄褐色シルト　極粗砂～小礫少量混
27 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに2.5Y5/2暗灰黄色細砂ブロック混

護岸4031

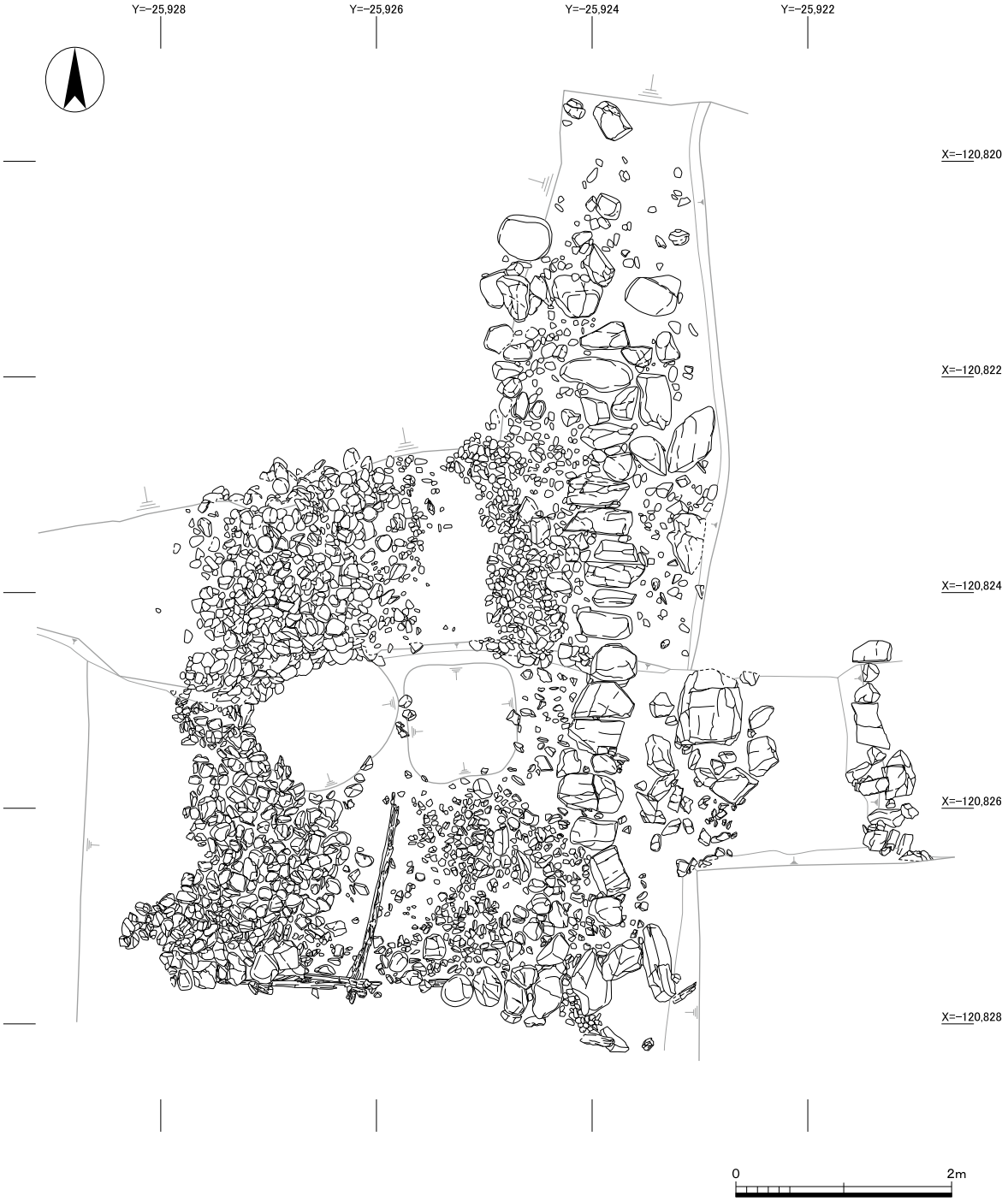
4区南壁断面図（1：50）



※ C-C'は図版48に対応する。

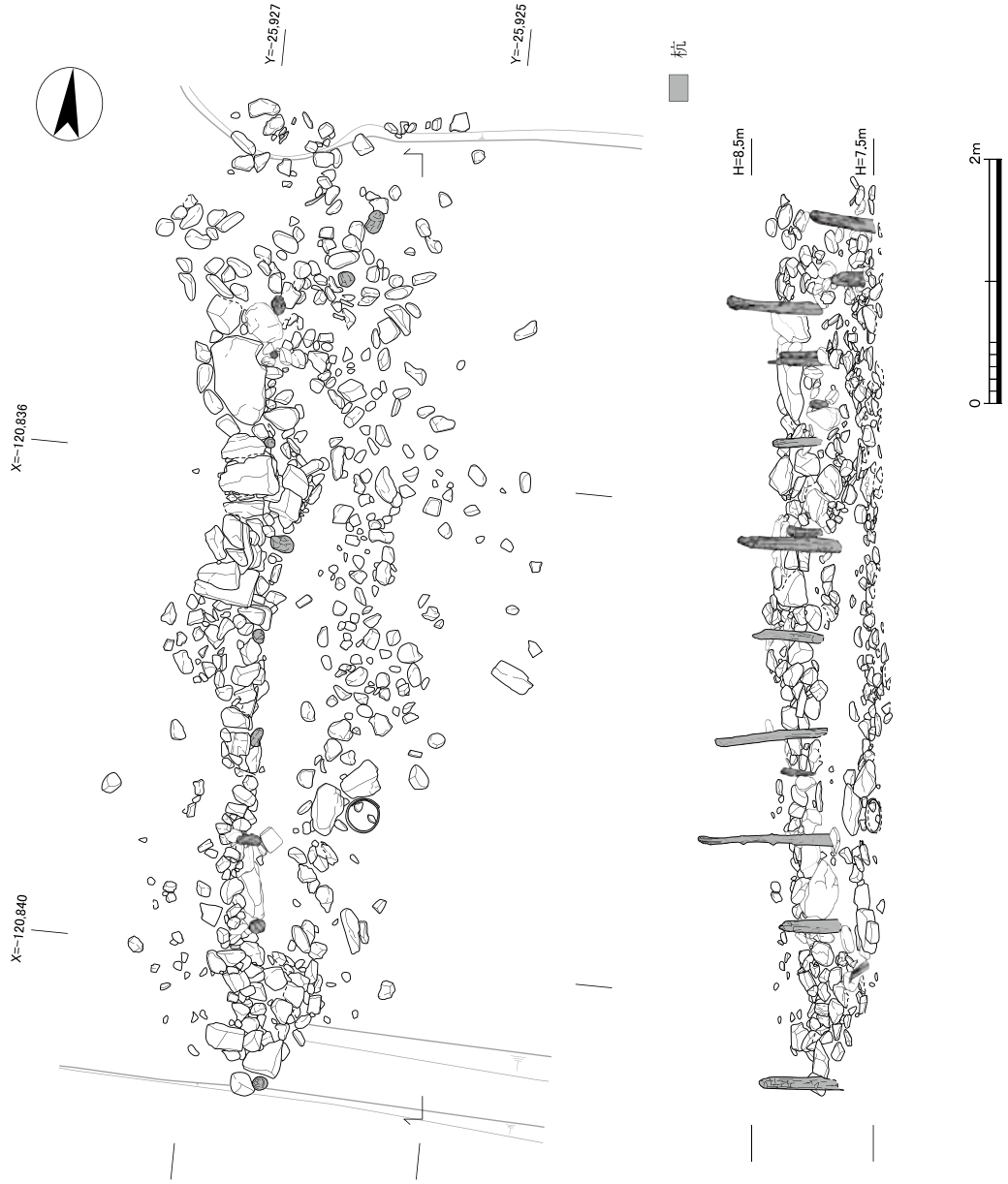
1　10YR5/4にぶい黄褐色細砂～中砂と10YR5/1褐灰色シルトの互層（現代河川堆積）
2　10YR5/3にぶい黄褐色極細砂～中砂　φ1～3cmの礫混
3　10YR7/3にぶい黄橙色粗砂～極粗砂　φ1～3cmの礫混（砂層）
4　10YR5/2灰黄褐色シルトと10YR6/3にぶい黄橙色細砂ブロック混　φ1～3cmの礫混
5　10YR5/2灰黄褐色シルトと10YR6/3にぶい黄橙色細砂ブロック混　φ1～3cmの礫多量
（2～5：河川堆積）
6　10YR7/4にぶい黄橙色粗砂～極粗砂　粗朶含む
7　10YR3/1黒褐色粘質シルト　粗砂・炭含
8　10YR4/2灰黄褐色細砂～中砂　炭混
（6～8：地業4006）
9　2.5Y5/2暗灰黄色細砂と10YR6/4にぶい黄橙色粗砂～小礫の互層　φ1～5cmの礫含む（河川堆積）
10　10YR7/4にぶい黄橙色粗砂　小礫（砂礫層）　上部の一部に細砂層溜まる（Ⅰ期造成土）
11　10YR1.7/1黒色シルト　炭多量
12　5Y3/1オリーブ黒色粗砂混シルト～細砂に10YR6/4にぶい黄橙色細砂～中砂層はさむ
13　10YR7/4にぶい黄橙色細砂～中砂に10YR5/2灰黄褐色シルト～極粗砂ブロック混
14　10YR4/2灰黄褐色細砂
15　10YR4/1褐灰色シルトと細砂の互層
16　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト　φ1～3cmの礫含む
17　10YR5/4にぶい黄褐色粗砂～小礫
18　2.5Y4/1黄灰色シルト～細砂　小礫含む
19　2.5Y6/3にぶい黄色細砂　ラミナあり
（11～19：流路4024）
20　2.5Y4/1黄灰色極粗砂　粘質（護岸4031崩落土）
21　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂　炭・焼土少量
22　5Y4/1灰色粘質シルト～極細砂
23　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂　小礫含む
24　2.5Y4/1黄灰色粘質シルトに2.5Y7/4浅黄色シルトブロック混　φ1～3cmの礫含む
25　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト　φ1～3cmの礫含む
26　25層と同+φ15～60cmの礫含む
27　2.5Y4/1黄灰色シルト～粗砂　φ1～3cmの礫多量
（21～27：護岸4031）
28　2.5Y5/2暗灰黄色細砂　ラミナあり（溝4030か）
29　10YR4/2灰黄褐色シルト～極細砂　小礫・φ1～3cmの礫少量、固くしまる（第1面整地）

水制4035最下層船材出土状況実測図（1：60）



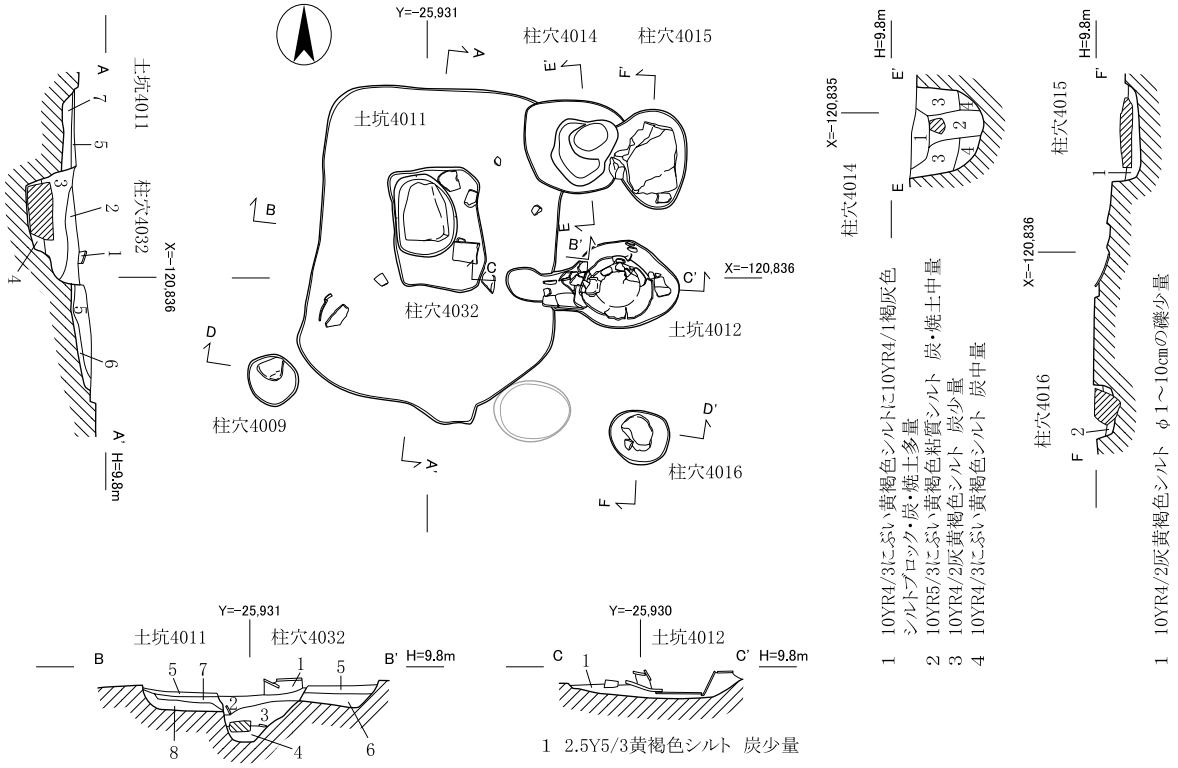
水制4035石積最下段実測図（1：60）

水制4035石積実測図（1：60）



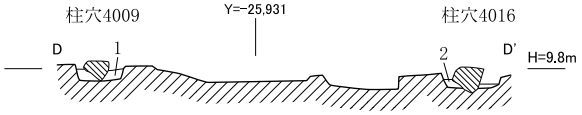
護岸4031杭列実測図（1：60）

土坑4011・4012、柱穴4009・4014・4015・4016・4032



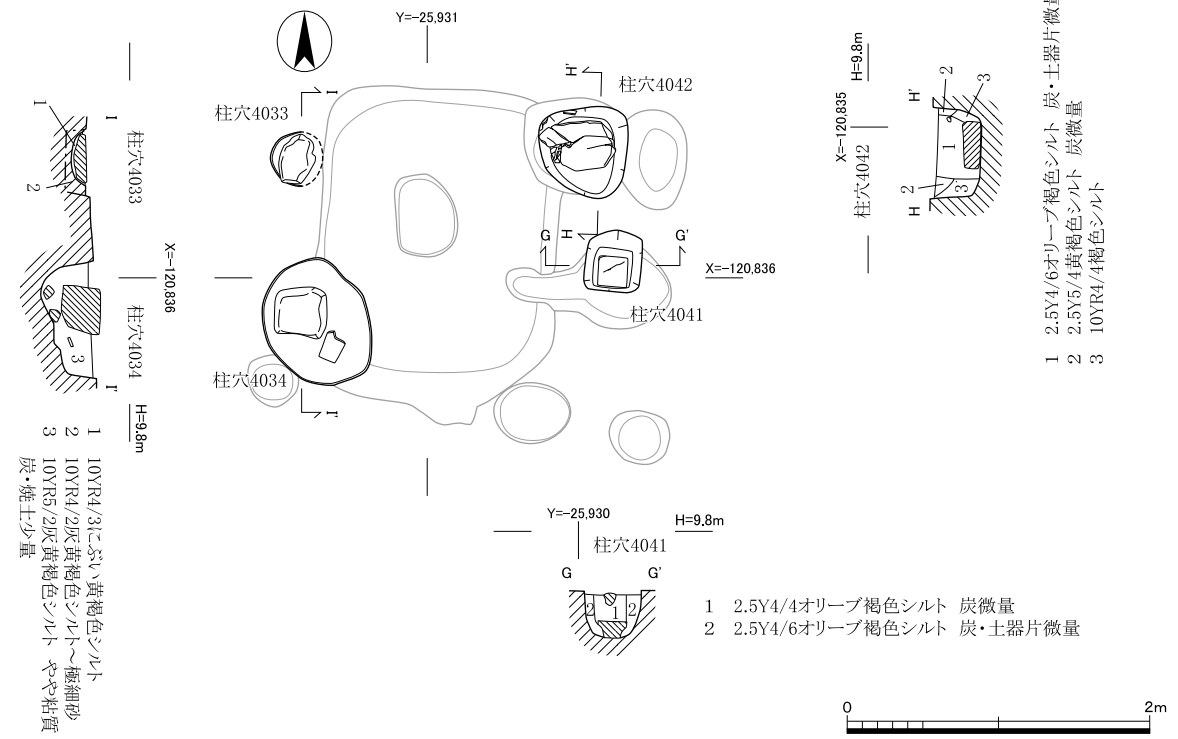
A-A' B-B'

1 10YR5/6黄褐色シルト 炭・焼土少量
2 10YR4/2灰黄褐色シルト 炭・焼土少量
3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
φ1～3cmの礫少量、炭・焼土中量
4 10YR5/2灰黄褐色シルト 炭・焼土少量
5 10YR4/1褐灰色シルト 瓦・炭・焼土混
6 10YR5/2灰黄褐色シルト 炭少量
7 10YR4/1褐灰色シルトに10YR5/6黄褐色細砂ブロック混
8 10YR4/3にぶい黄褐色シルト



1 10YR4/2灰黄褐色シルト φ～1cmの礫少量
2 10YR4/2灰黄褐色シルト 炭・焼土少量

柱穴4033・4034・4041・4042

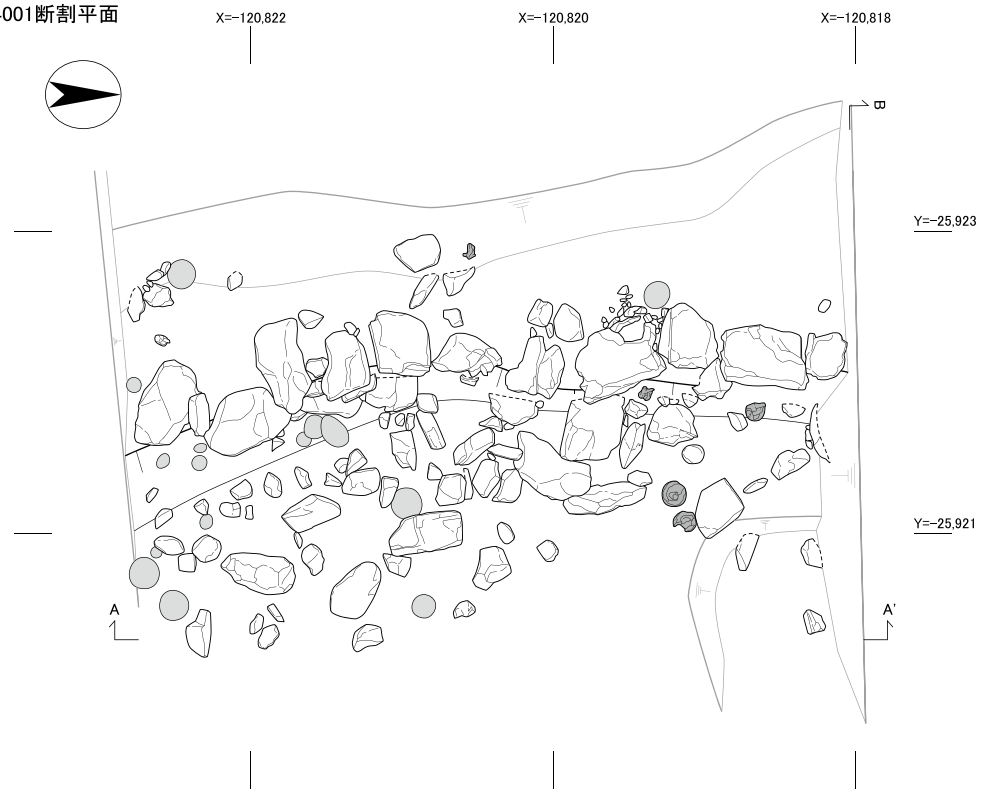


土坑4011・4012、柱穴4009・4014～4016・4032～4034・4041・4042実測図（1：50）

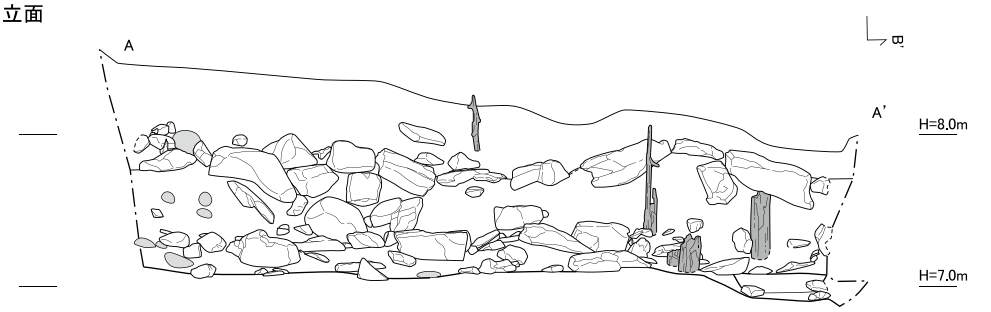
護岸4001・水制4045実測図（1：100）

護岸4001実測図（1：100）

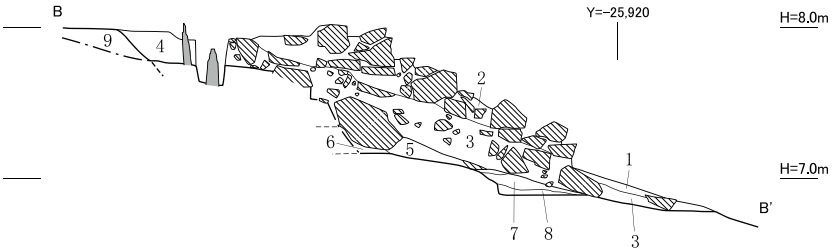
護岸4001断割平面



立面



護岸4001断割1断面



1　10YR5/3にぶい黄褐色細砂～粗砂　φ1～5cmの礫多量
2　10YR6/3にぶい黄橙色シルト
3　10YR4/2灰黄褐色細砂～極細砂　φ1～5cmの礫混
4　10YR5/3にぶい黄褐色シルト～細砂φ1～2cmの礫多量　固く締まる
5　7.5YR4/4褐色砂礫　φ0.5～2cmの礫詰まる
6　2.5Y5/3黄褐色シルト
7　2.5Y8/2灰白色細砂に2.5Y4/1黄灰色粘質シルトブロック混
8　7.5YR4/4褐色中砂～粗砂に10YR4/1褐灰色粘質シルトブロック混
9　2.5Y6/4にぶい黄色中砂～極粗砂　φ1～4cmの礫混(流路4024堆積層)

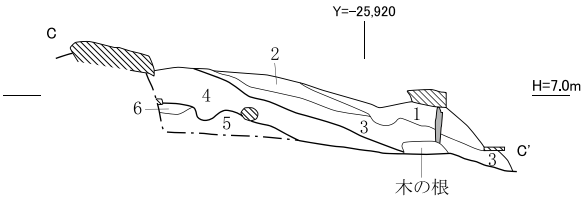
護岸4001
構築土

杭
杭跡

0　2m

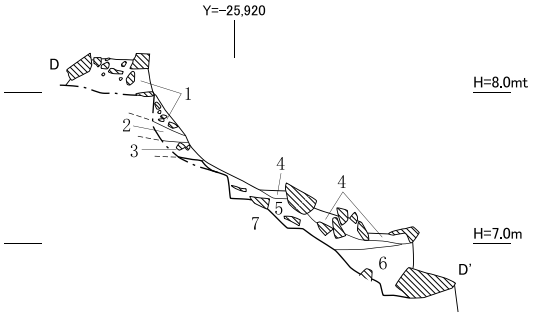
護岸4001断割1実測図（1：50）

護岸4001断割2断面



1　10YR4/2灰黄褐色粗砂～極粗砂
2　5YR4/3にぶい赤褐色砂礫　φ2～4cmの円礫多量
3　10YR5/2灰黄褐色細砂～極細砂
自然堆積層
4　10YR5/1褐灰色細砂に7.5YR5/6明褐色極粗砂ブロック・φ3～10cmの礫混(構築土)
5　10YR4/1褐灰色粘質シルト
6　10YR4/4褐色粗砂～極粗砂
自然堆積か

護岸4001断割3断面

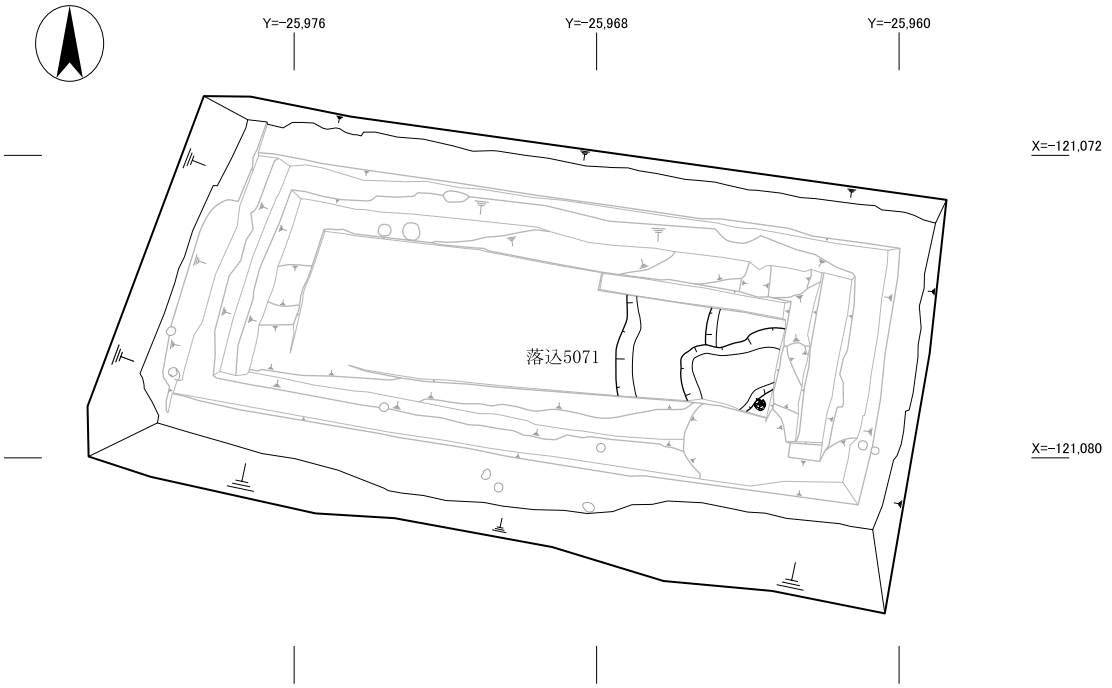


1　10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂　φ3～10cmの円礫多量
2　10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂　φ1～3cmの礫混
3　10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂　φ1～10cmの円礫多量
構築土
4　10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂　φ20～400cmの板石多量(崩落土か)
5　10YR5/2灰黄褐色極粗砂～小礫(自然堆積か)
6　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　φ1～5cmの礫多量(崩落土か)
7　10YR5/1褐灰色シルト～細砂に10YR5/1褐灰色粘質シルトブロック・φ20～100cmの板石多量(構築土)

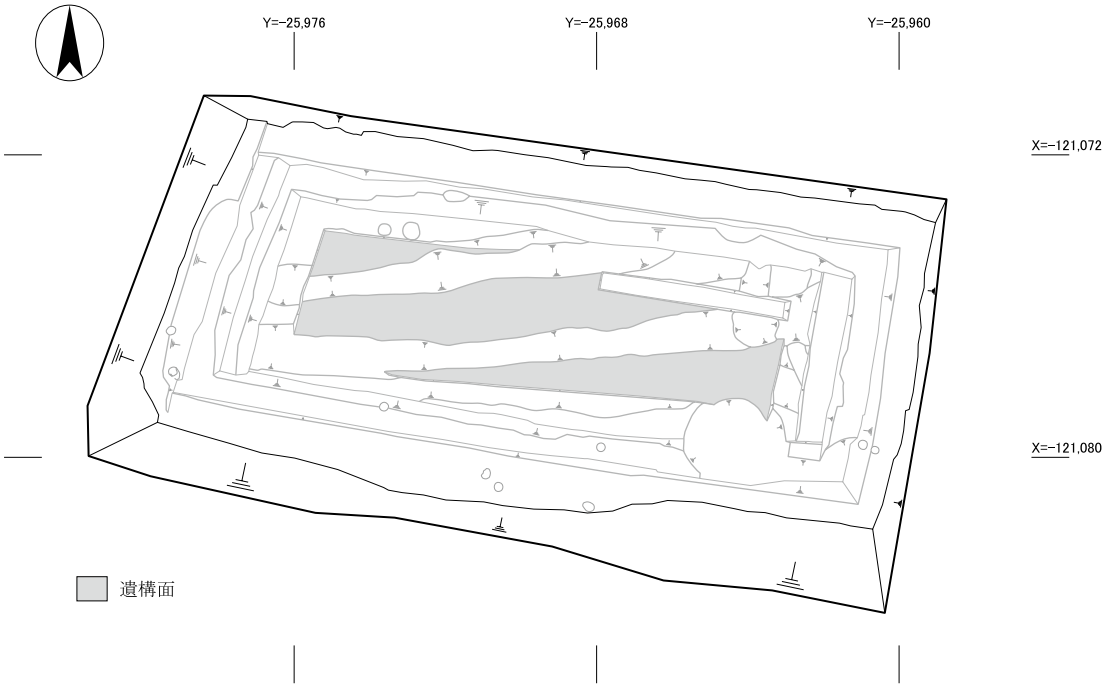
※ C-C'・D-D'は図版62に対応する。

護岸4001断割２・３断面図（１：50）

第10面〔Ⅹ期〕

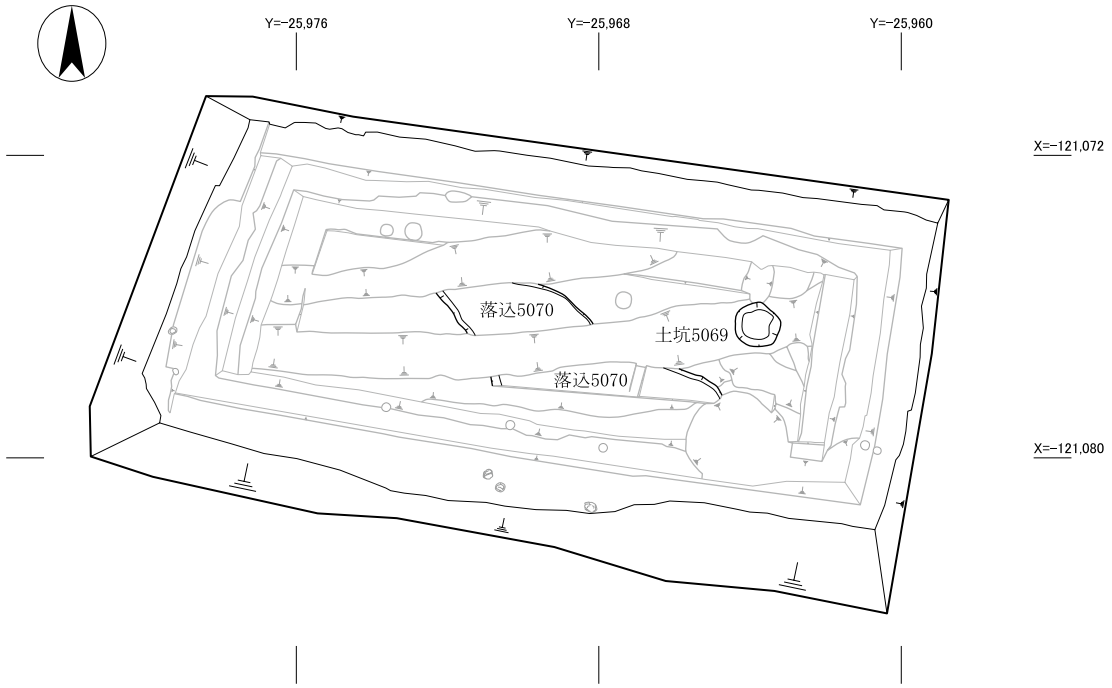


第9面〔Ⅸ期〕

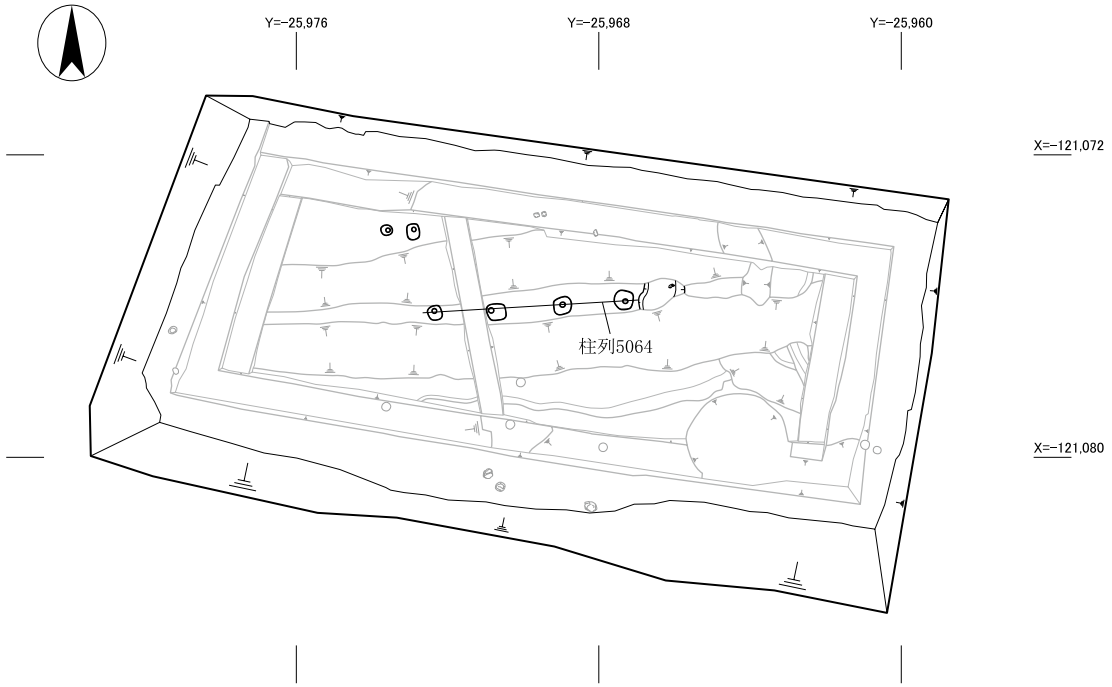


5区第10面〔Ⅹ期〕・第9面〔Ⅸ期〕平面図（1：200）

第8面〔Ⅷ期〕

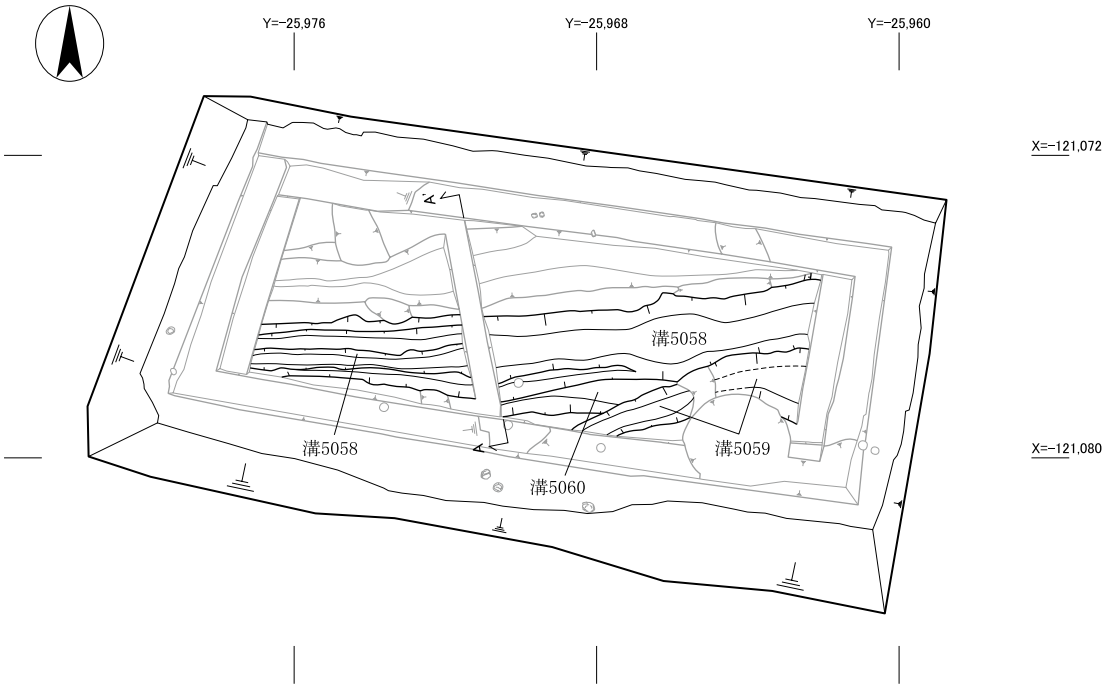


第7面〔Ⅶ期〕

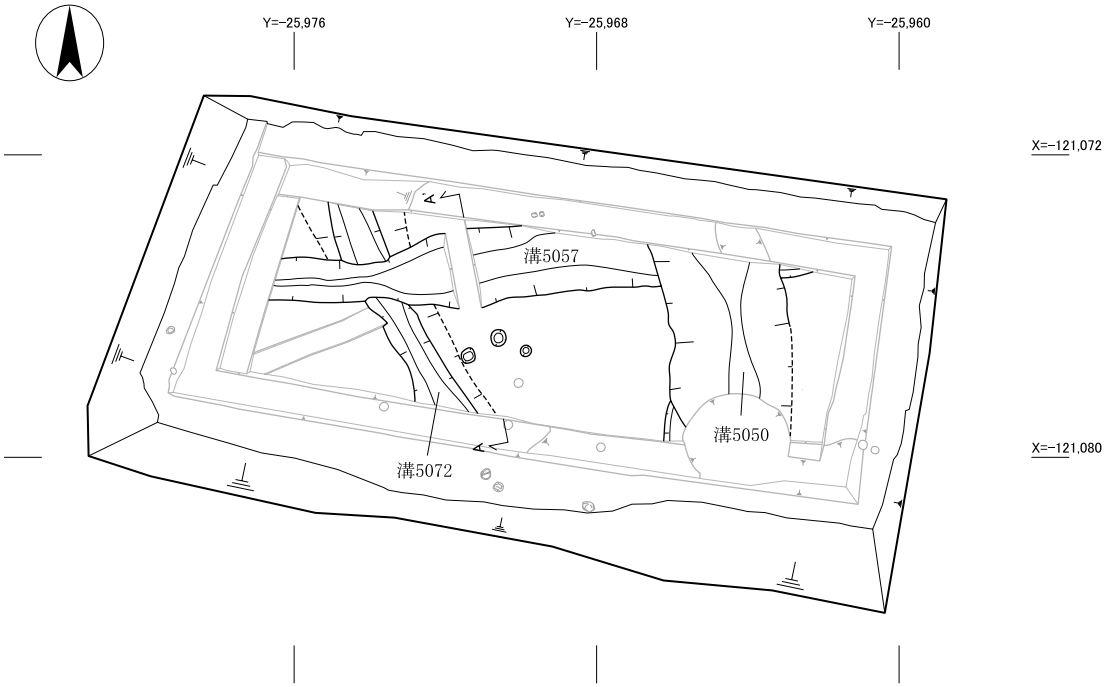


5区第8面〔Ⅷ期〕・第7面〔Ⅶ期〕平面図（1：200）

第6面〔Ⅵ期〕



第5面〔Ⅴ期〕

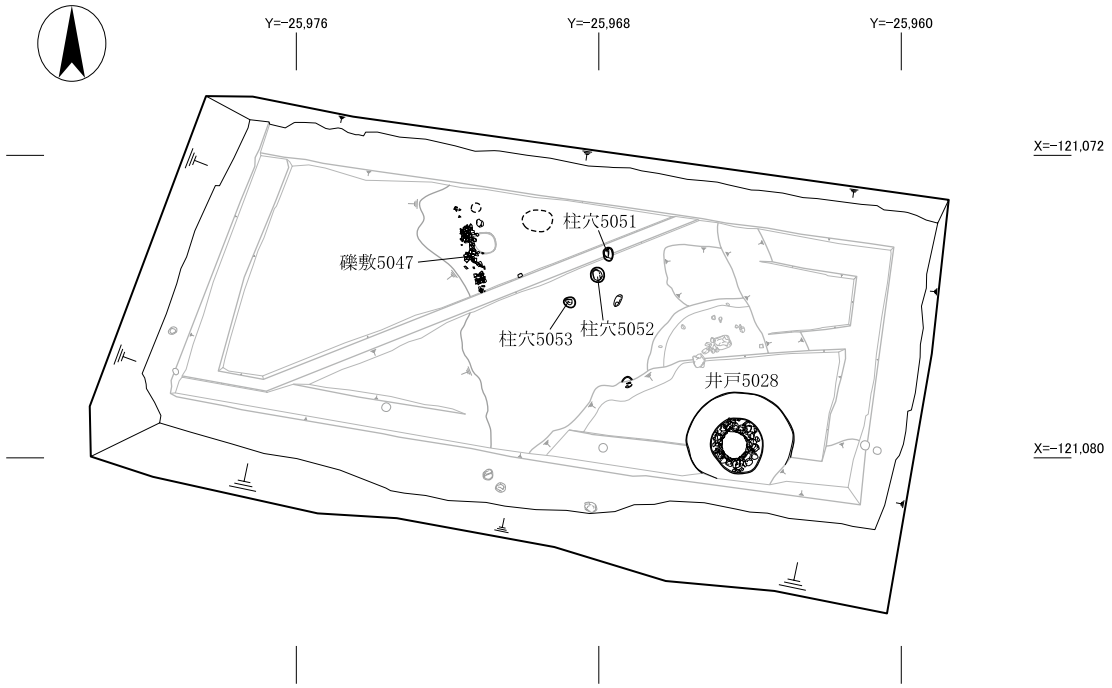


※ A-A'は図31に対応する。

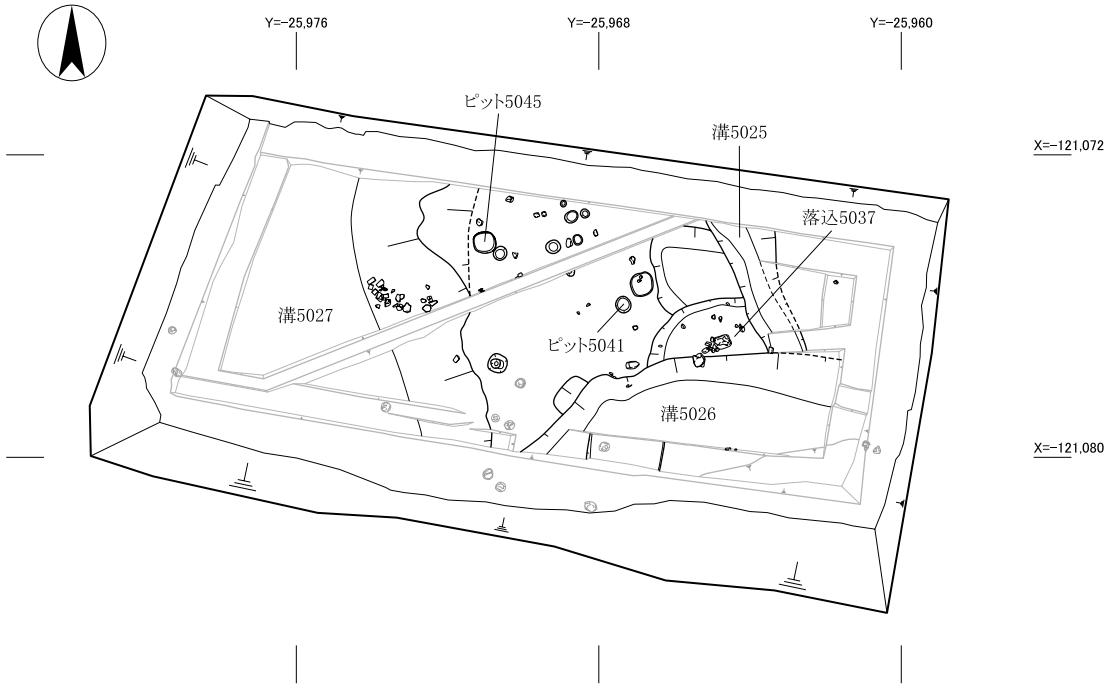
0 10m

5区第6面〔Ⅵ期〕・第5面〔Ⅴ期〕平面図（1：200）

第4面〔Ⅳ期〕

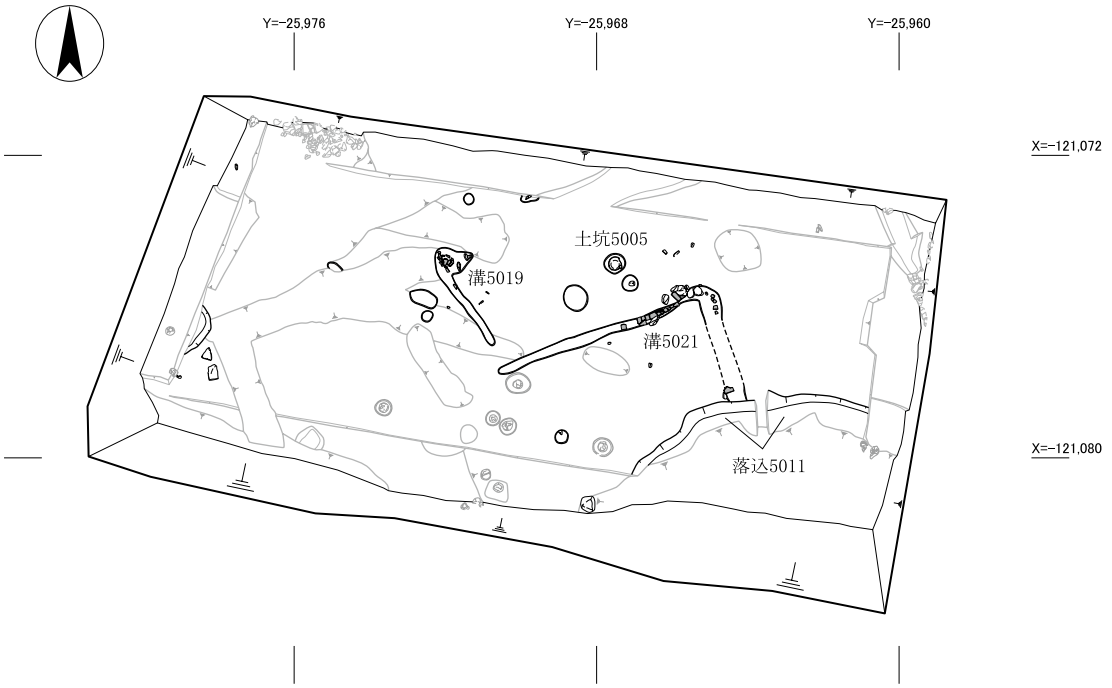


第3面〔Ⅲ期〕

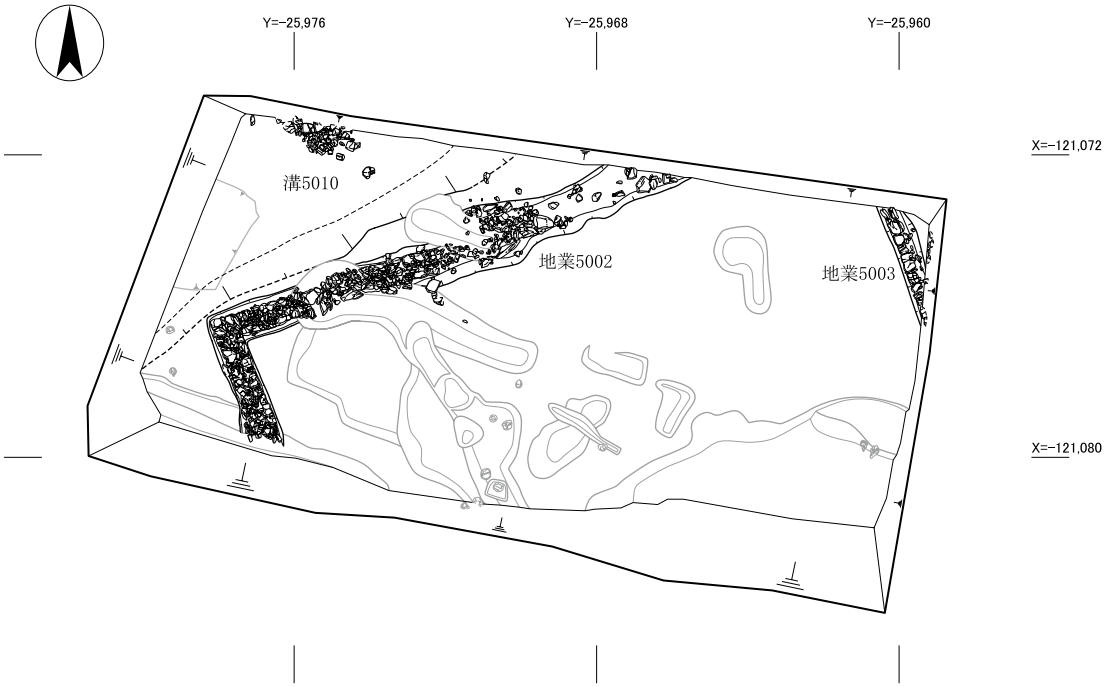


5区第4面〔Ⅳ期〕・第3面〔Ⅲ期〕平面図（1：200）

第2面〔Ⅱ期〕

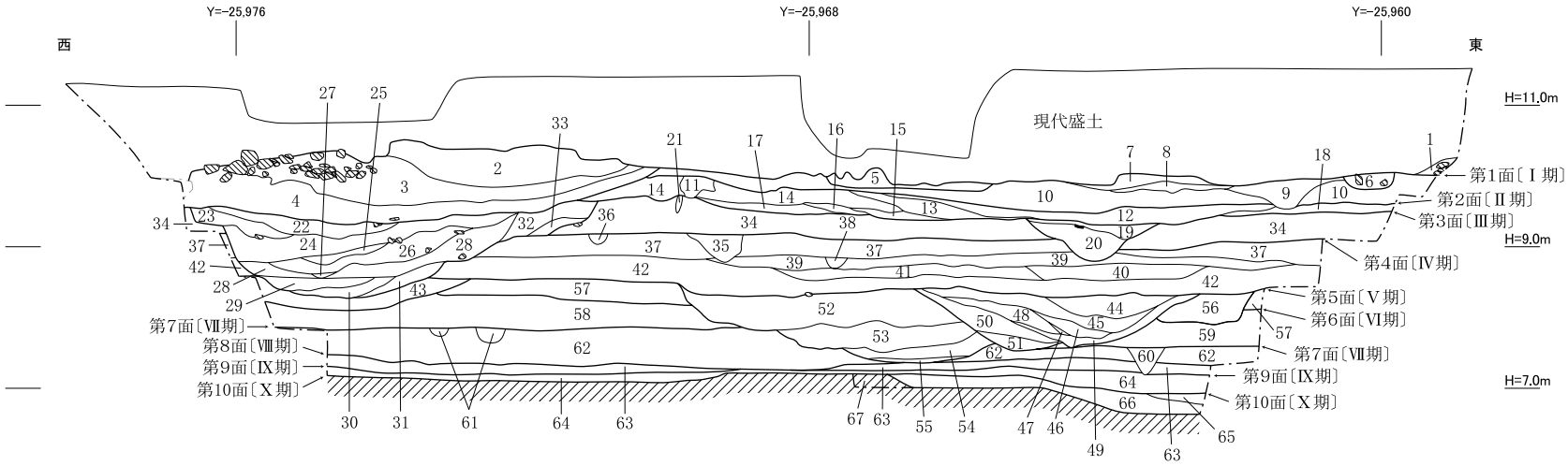


第1面〔Ⅰ期〕



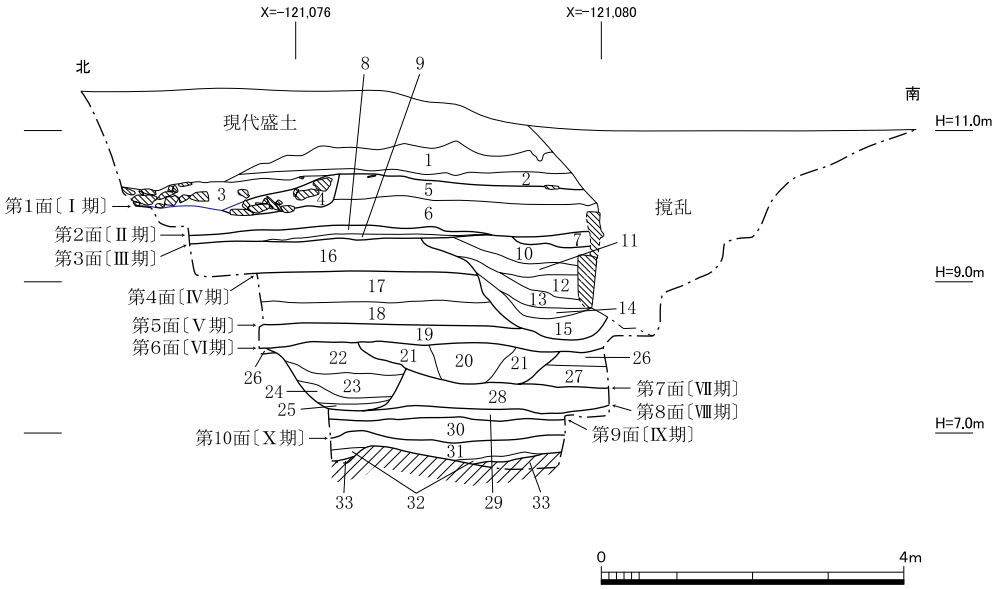
5区第2面〔Ⅱ期〕・第1面〔Ⅰ期〕平面図（1：200）

5区北壁断面図（1：100）



1 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細砂
φ20～40㎝の角礫多量混(現代撹乱)
2 2.5Y5/2暗灰黄色極細～細砂 粘土ブロック多量混
3 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂～極粗砂
小礫・φ5～40㎝の角礫多量混
4 2.5Y5/3黄褐色極細砂～細砂
溝5010
5 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト(地業5002)
6 2.5Y4/2暗灰黄色極細砂 φ10～40㎝の角礫多量混(地業5003)
7 2.5Y5/3黄褐色極細砂～細砂 極粗砂・小礫混
8 2.5Y5/3黄褐色中砂～粗砂 小礫混
9 2.5Y5/3黄褐色細砂 粘土ブロック混
10 2.5Y5/3黄褐色極細砂～細砂
第1面整地
11 10YR6/2灰黄褐色粗砂～極粗砂
12 2.5Y5/2暗灰黄色極細～細砂 小礫少量
13 2.5Y5/4黄褐色シルト～細砂 粗砂～極粗砂ブロック多量混
14 2.5Y6/3にぶい黄色シルト～極細砂
15 2.5Y5/3黄褐色シルト 粗砂～極粗砂ブロック混 炭少量混
16 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト～極細砂 粗砂～極粗砂微量混
17 2.5Y5/3黄褐色粘質シルト 極粗砂～小礫少量混
18 2.5Y5/3黄褐色極細砂～細砂に2.5Y6/2灰黄色
粘質極細砂ブロック混
第2面整地
19 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～極細砂 粗砂～極粗砂混
最上層細砂 ラミナあり
20 2.5Y5/2暗灰黄色小礫混じり粗砂～極粗砂
溝5025
21 10YR6/2灰黄褐色粗砂～極粗砂
22 2.5Y5/2暗灰黄色極細砂 ラミナあり
23 2.5Y4/1黄灰色粘質シルトと2.5Y5/3黄褐色細砂の互層
ラミナあり 粗砂～極粗砂少量混
溝5027新
24 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂 炭・小礫微量混
25 2.5Y4/2暗灰黄色中砂～極粗砂
26 5Y4/1灰色粘質シルト 粗砂～小礫微量混
27 2.5Y4/1黄灰色極細砂 小礫少量混
28 5Y4/1灰色粘質シルト 炭・粗砂微量混
29 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細砂 φ3～5㎝の礫微量混
30 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂
粗砂～極粗砂ブロック多量混
31 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細砂 粗砂～極粗砂少量混
溝5027新
32 2.5Y5/1黄灰色シルトに粗砂～極粗砂ブロック多量混
33 2.5Y4/2暗灰黄色細砂～中砂 粗砂～極粗砂混
溝5027古
34 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト～極細砂 φ1～3㎝の礫混
炭・粘土少量混 土器片含(第3面整地)
35 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト～極細砂に2.5Y7/2灰黄色シルトの
小ブロック・土器片・炭多量混
36 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細砂 細砂ブロック・土器片混
37 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細砂 粗砂・炭少量混 固くしまる
38 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粗砂～極粗砂多量混
39 2.5Y4/1黄灰色シルト～極細砂 粗砂～小礫微量混
40 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粗砂～極粗砂少量混
41 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～極細砂 粗砂～極粗砂ブロック多量混
42 5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト φ1～5㎝の礫少量混
第4面整地
43 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～極細砂 粗砂～極粗砂 炭化物層あり(溝5072)
44 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂 粗砂～極粗砂多量
炭混
45 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト～極細砂
粗砂～極粗砂中量 炭少量混
46 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂～極粗砂にシルトブロック中量混
溝5050新
47 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト
48 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂～極粗砂 小礫混
49 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂 粗砂微量混
溝5050新
50 2.5Y5/1黄灰色シルト～極細砂 粗砂～極粗砂微量混
51 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト 粗砂微量混
溝5050古
52 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂
粗砂～極粗砂少量 φ1～10㎝の礫微量混
53 2.5Y5/1黄灰色粘質シルトと10Y4/4褐色シルトブロック混
粗砂～極粗砂ブロック少量混
54 2.5Y5/1黄灰色粘質シルトと10Y4/4褐色シルトブロック少量混
55 2.5Y5/1黄灰色粘質シルト ラミナあり
溝5057
56 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細砂 粗砂ブロック混
57 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細砂 小礫微量 炭・土器片混(第5面整地)
58 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細砂(第6面基盤層)
59 10YR4/2灰黄褐色シルト～極細砂(第6面基盤層)
60 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト
61 2.5Y5/3黄褐色シルト
62 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 固くしまる(第7面基盤層)
63 2.5Y3/1黒褐色シルト やや粘質 土壌化(第8面基盤層)
64 2.5Y4/1黄灰色シルト 土器片混(第9面基盤層)
65 5Y4/1灰色粘質シルト 土器片混
66 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト 炭層入る ラミナあり
落込5071
67 2.5Y4/1黄灰色粘質粘土～シルト 炭混(無遺物層)

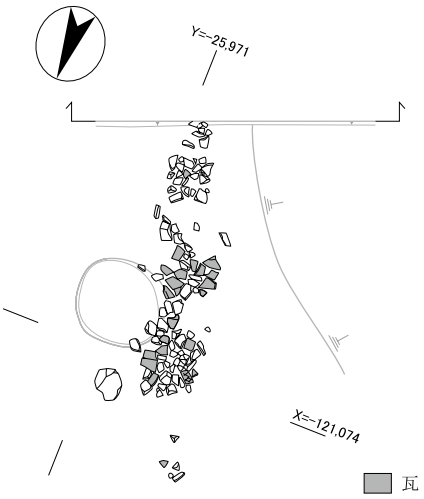
0 4m

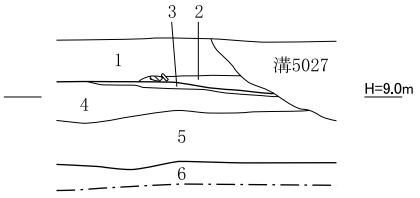


1 2.5Y4/3オリーブ褐色極細砂 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～極細砂混 ラミナあり
2 2.5Y4/4オリーブ褐色極細砂
（1・2：現代堆積）
3 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細砂 φ20～40cmの角礫多量混(現代撹乱)
4 2.5Y4/2暗灰黄色極細砂 φ10～40cmの角礫多量混(地業5003)
5 2.5Y5/3黄褐色極細砂～細砂 極粗砂・小礫混
6 2.5Y5/3黄褐色極細砂～細砂
（5・6：第1面整地）
7 2.5Y5/1黄灰色シルトに2.5Y5/3細砂～中砂ブロック多量混(落込5011)
8 2.5Y5/3黄褐色極細砂～細砂に2.5Y6/2灰黄色粘質極細砂ブロック混
9 2.5Y5/1黄灰色粘質シルト～極細砂
（8・9：第2面整地）
10 2.5Y4/1黄灰色シルト～極細砂 粗砂～極粗砂混、炭少量混
11 2.5Y4/1黄灰色シルト～極細砂 粗砂～極粗砂少量混 φ5～7cmの礫混
12 2.5Y4/1黄灰色シルト～極細砂 粗砂～極粗砂多量混 φ1～3cmの礫多量混
13 5Y4/1灰色粘質シルト～極細砂 粗砂～極粗砂少量混
14 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂～極粗砂
15 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～極細砂 粗砂少量、土器片多量混 固くしまる
（10～15：溝5026）
16 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト～極細砂 φ1～3cmの礫混 炭・粘土少量混 土器片含
（16：第3面整地）
17 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細砂 粗砂・炭少量混 固くしまる
18 5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト φ1～5cmの礫少量混
（17・18：第4面整地）
19 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細砂 小礫微量 炭・土器片混(第5面整地)
20 2.5Y4/2暗灰黄色極細砂 粗砂～極粗砂・鉄分多量混
21 2.5Y4/2暗灰黄色極細砂に2.5Y6/2灰黄色シルトブロック混
（20・21：溝5059）
22 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 鉄分多量混 固くしまる
23 2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト～極細砂
24 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト
25 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト
（22～25：溝5058）
26 10YR4/2灰黄褐色シルト～極細砂
27 2.5Y5/3黄褐色シルト 固くしまる
（26・27：第6面基盤層）
28 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 固くしまる(第7面基盤層)
29 2.5Y3/1黒褐色シルト やや粘質 土壌化(第8面基盤層)
30 2.5Y4/1黄灰色シルト 土器片混(第9面基盤層)
31 5Y4/1灰色粘質シルト 土器片混
32 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト 炭層入る ラミナあり
（31・32：落込5071）
33 2.5Y4/1黄灰色粘質粘土～シルト 炭混(無遺物層)

5区東壁断面図（1：100）

礫敷5047

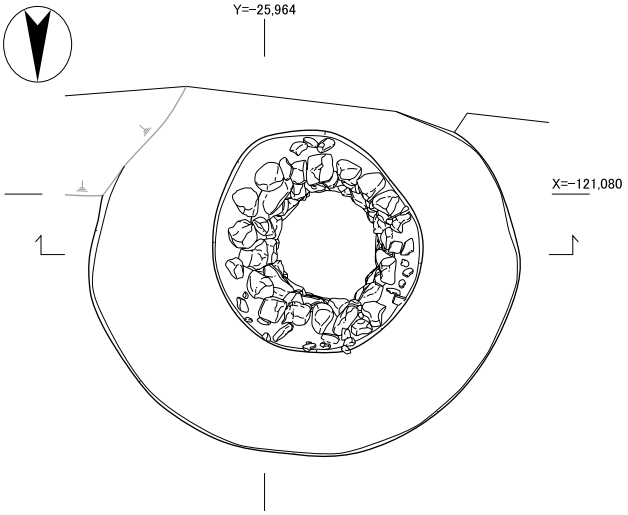


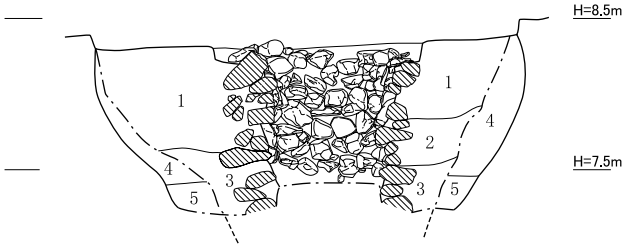


1　2.5YR4/1黄灰色粘質シルト～極細砂
　粗砂～極粗砂多量　炭少量、固くしまる
2　2.5YR4/1黄灰色粘質シルト～極細砂
　粗砂～極粗砂多量　炭少量、
　φ1～3cmの礫混、固くしまる
3　2.5Y6/2灰黄色粗砂～極粗砂
4　2.5Y3/1黒褐色粘質シルト～極細砂
　極粗砂混、φ5～10cmの礫少量(第4面基盤層)
5　7.5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト～極細砂
　極細砂～小礫微量混
6　5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト
　φ1～3cmの礫・土器片少量

第3面整地

井戸5028

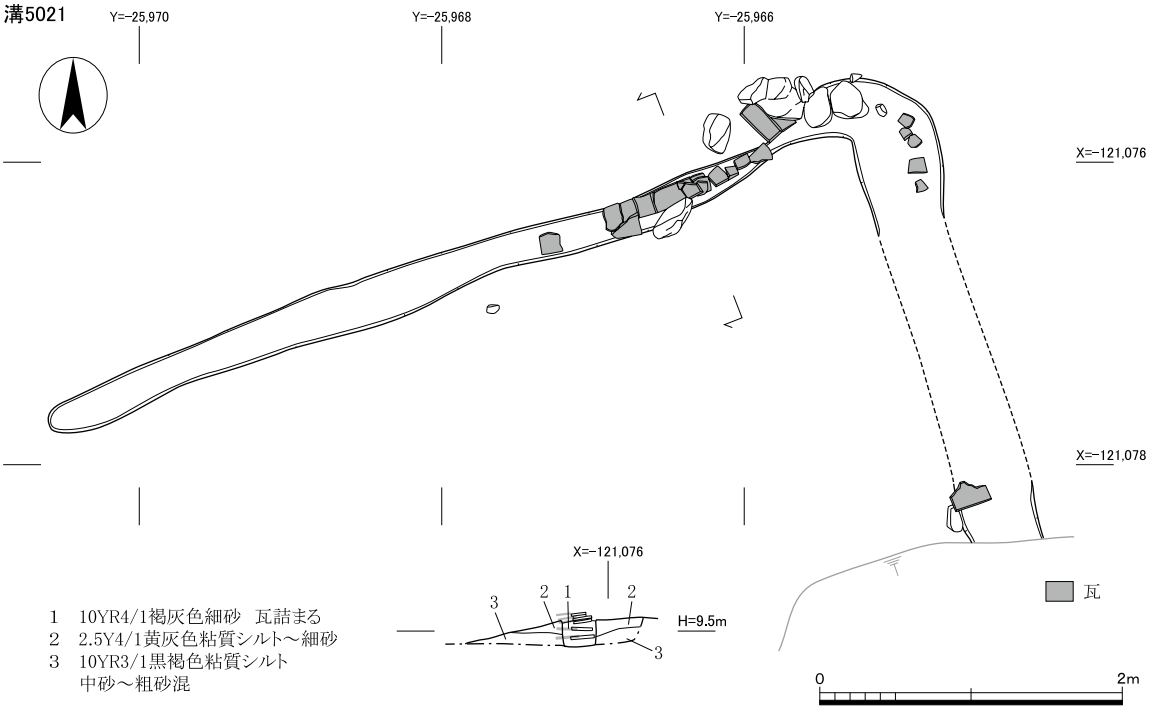




1　2.5YR4/1黄灰色粘質シルト　粗砂～極粗砂混
　φ1～3cmの礫・土器片多量
2　5Y4/1灰色粘質シルトに
　2.5Y3/1黒褐色粘質粘土ブロック混、粗砂少量混
3　5Y4/1灰色粘質シルト
4　7.5Y4/1灰色粘質シルト
5　7.5Y2/1黒色粘質シルト(土壌化層)

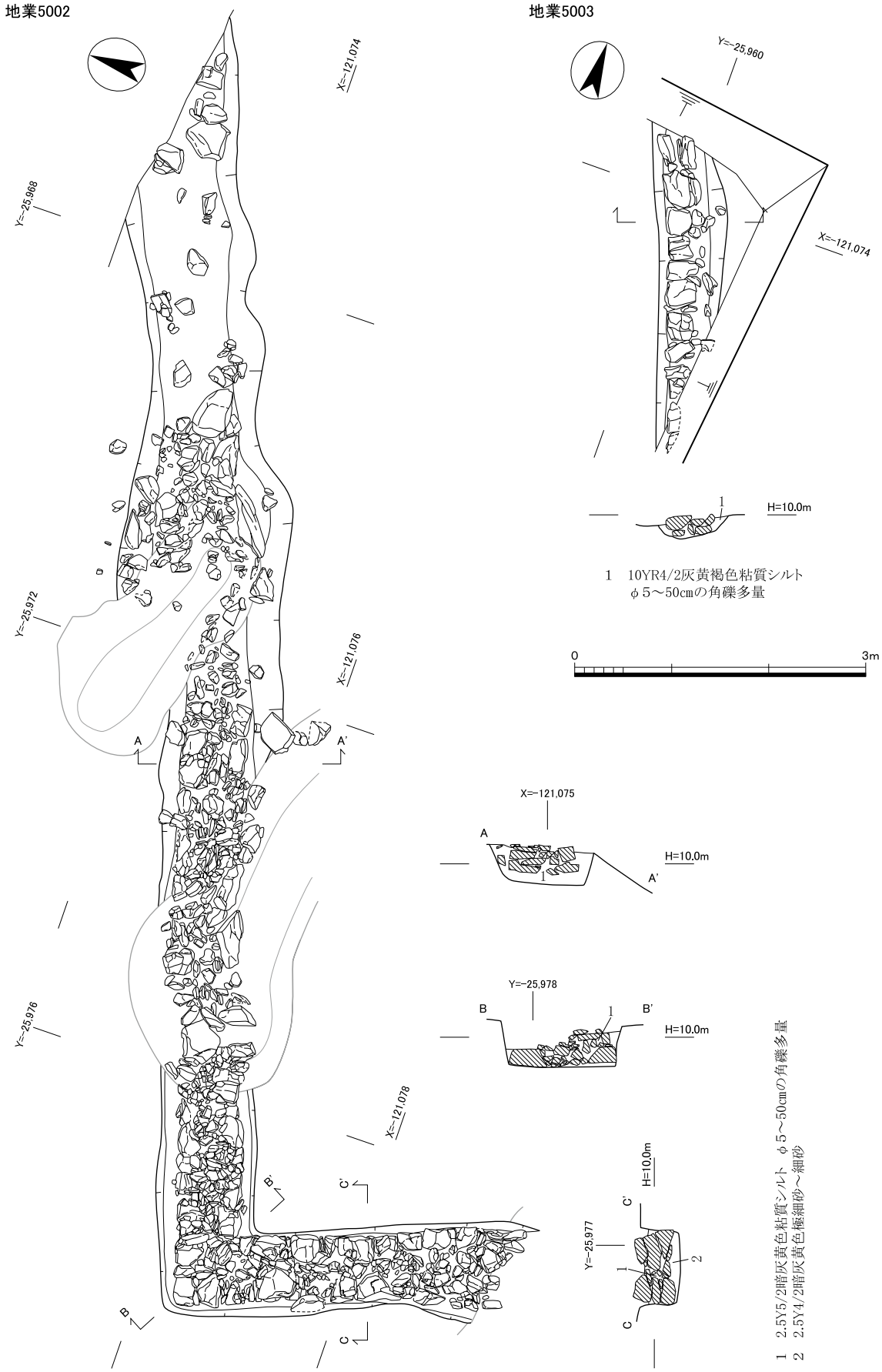
掘形埋土

溝5021



1　10YR4/1褐灰色細砂　瓦詰まる
2　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～細砂
3　10YR3/1黒褐色粘質シルト
　中砂～粗砂混

礫敷5047、井戸5028、溝5021実測図（1：50）



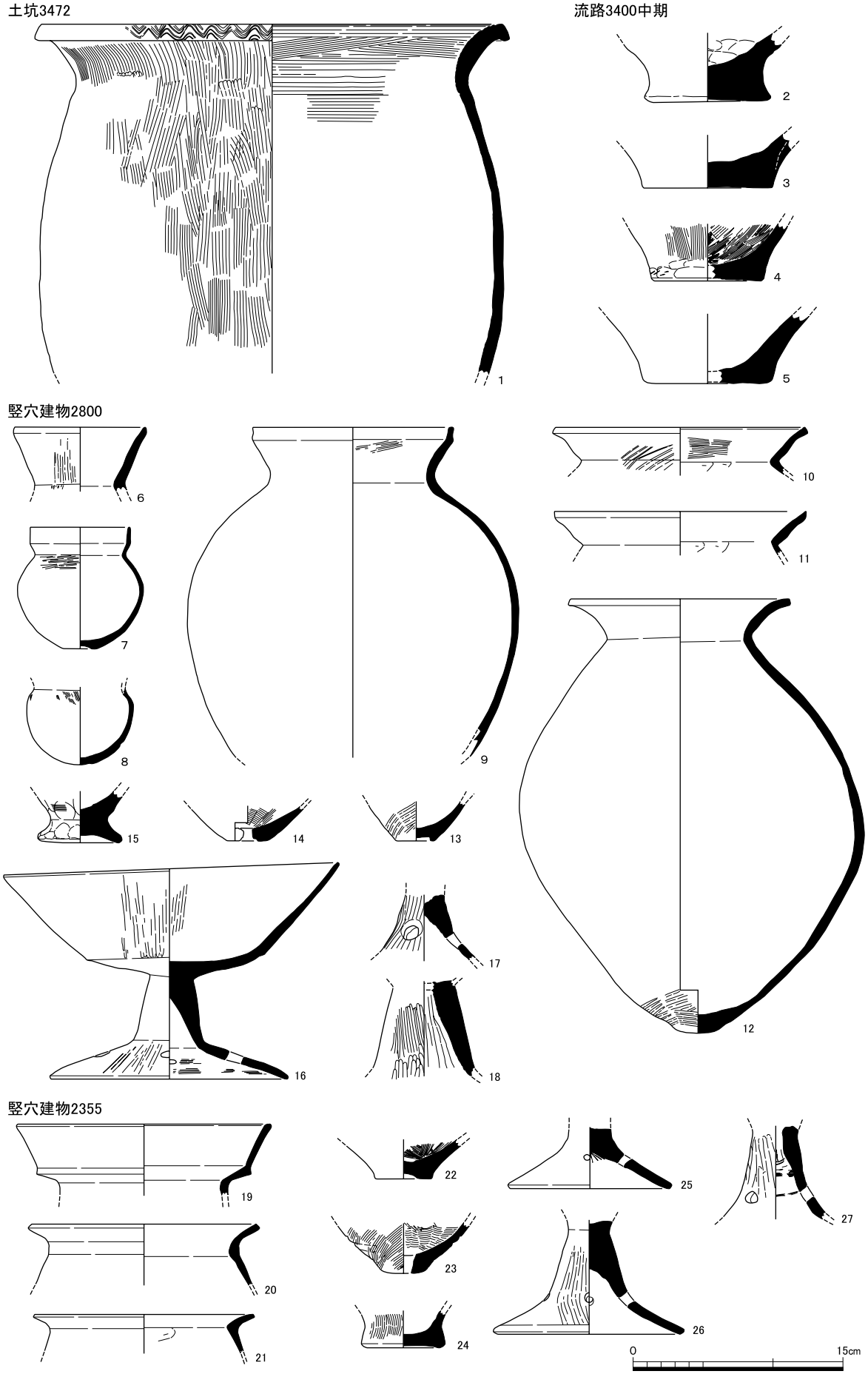
地業5002・5003実測図（1：60）

土坑3472

流路3400中期

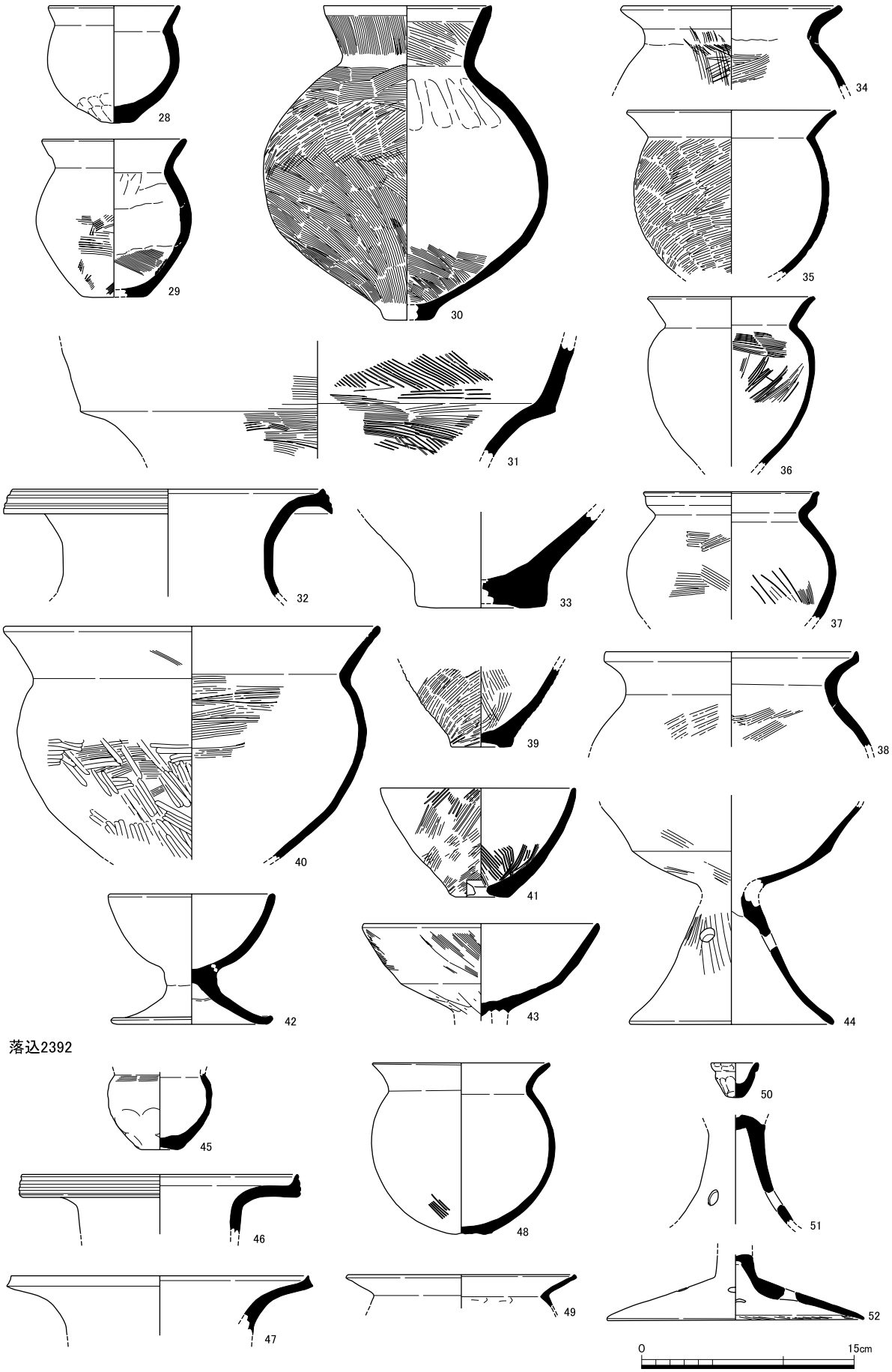
竪穴建物2800

竪穴建物2355



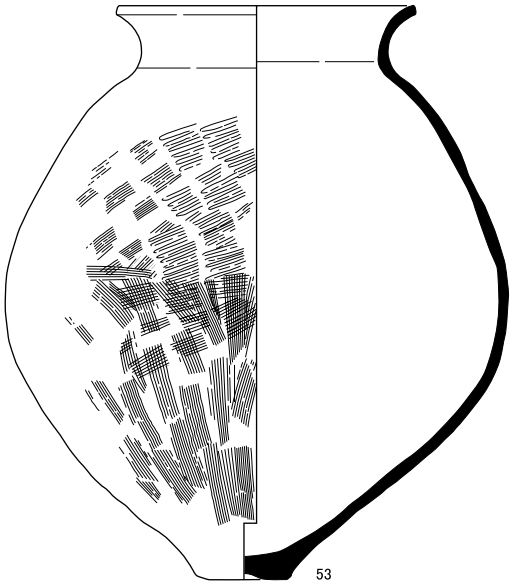
土器実測図１（１：４）

溝2841

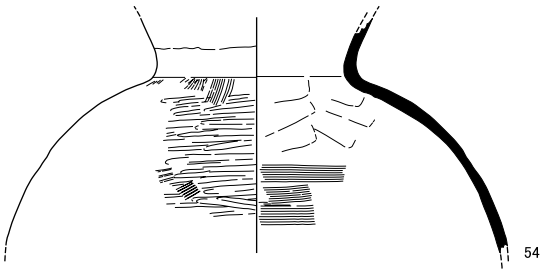


土器実測図２（１：４）

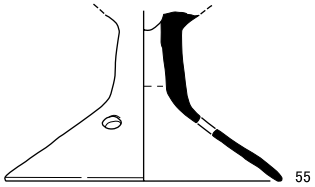
落込5071



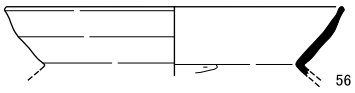
溝3451



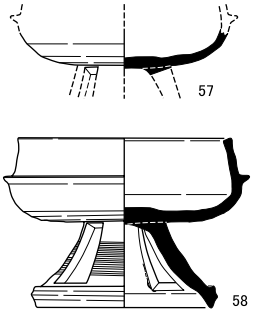
土坑2778



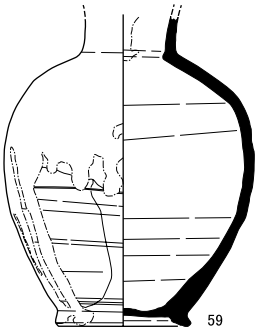
溝3470



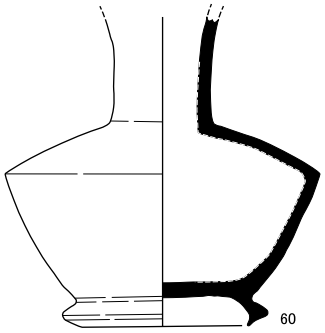
溝3055



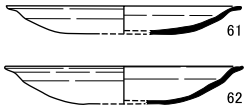
土坑3412

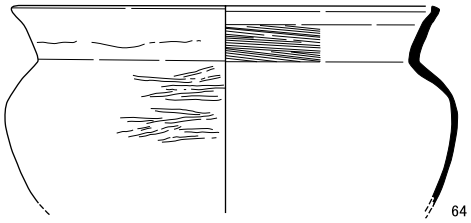


溝3428

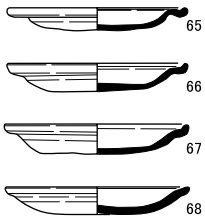


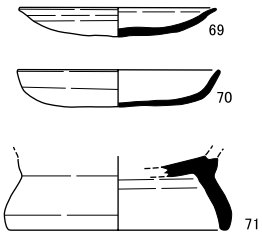
土坑3386

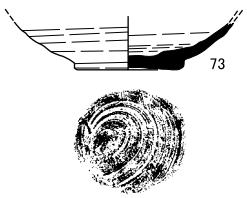


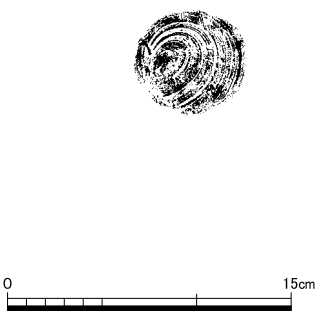


溝5058



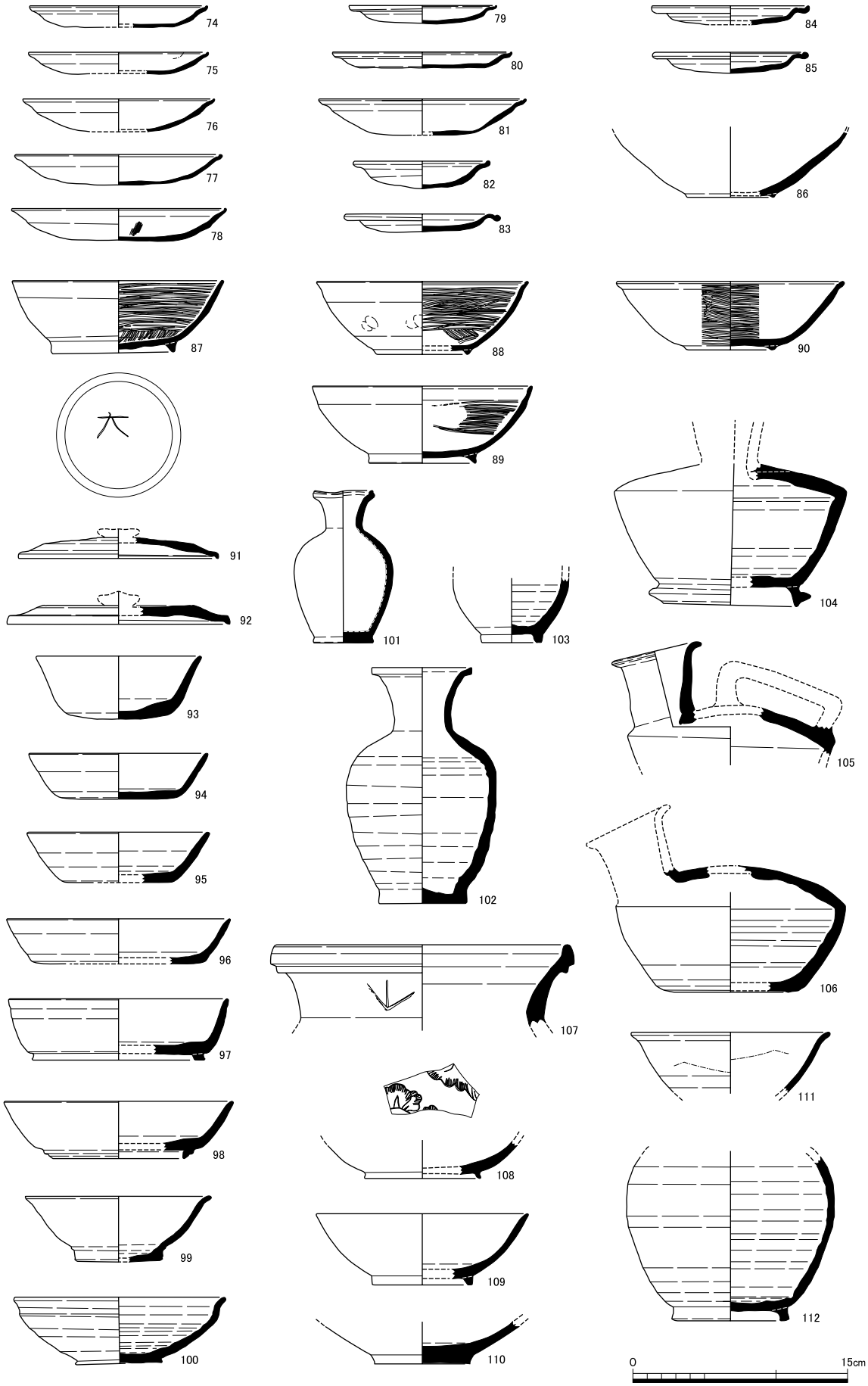






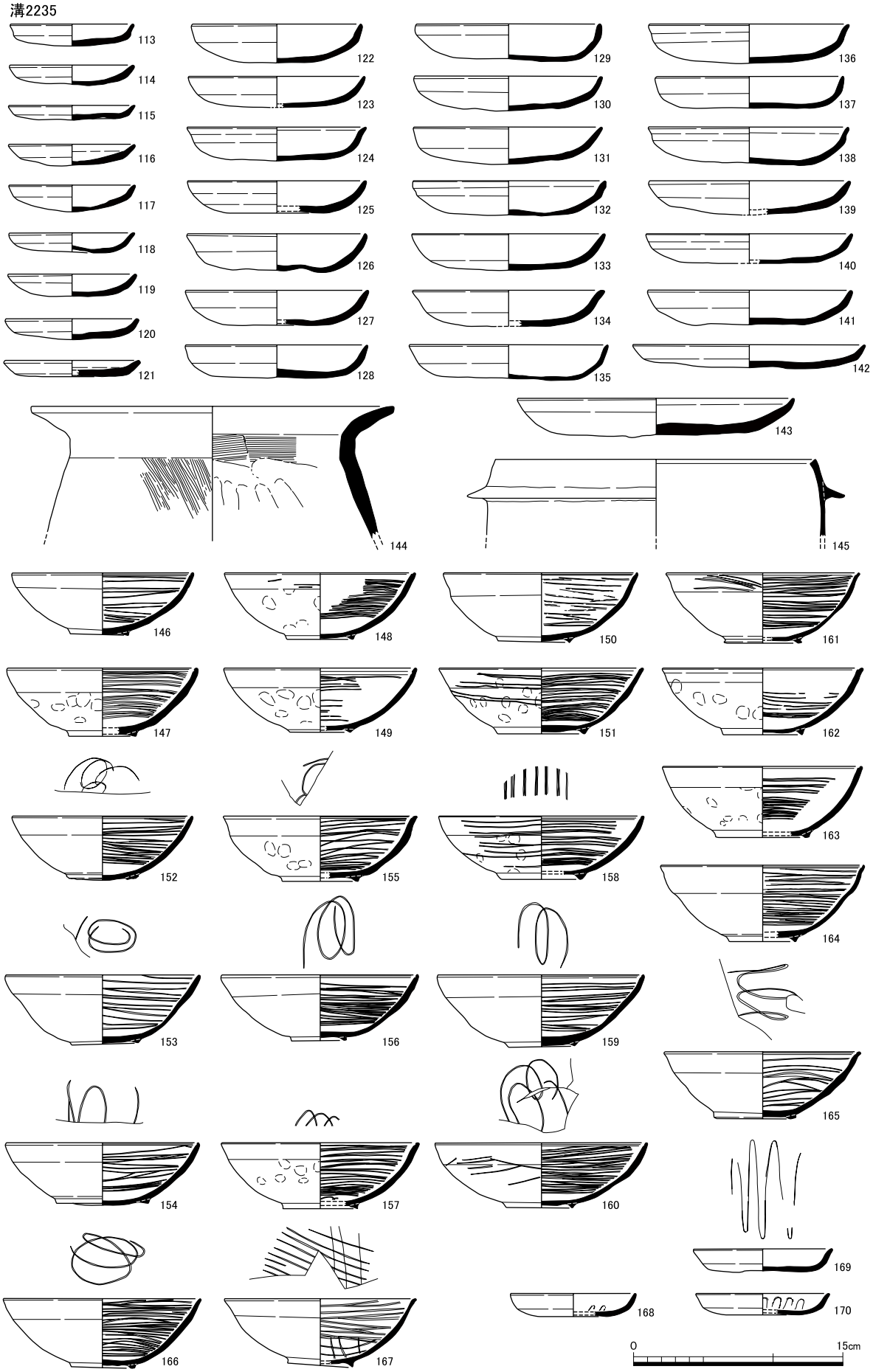
土器実測図３（１：４）

流路3400



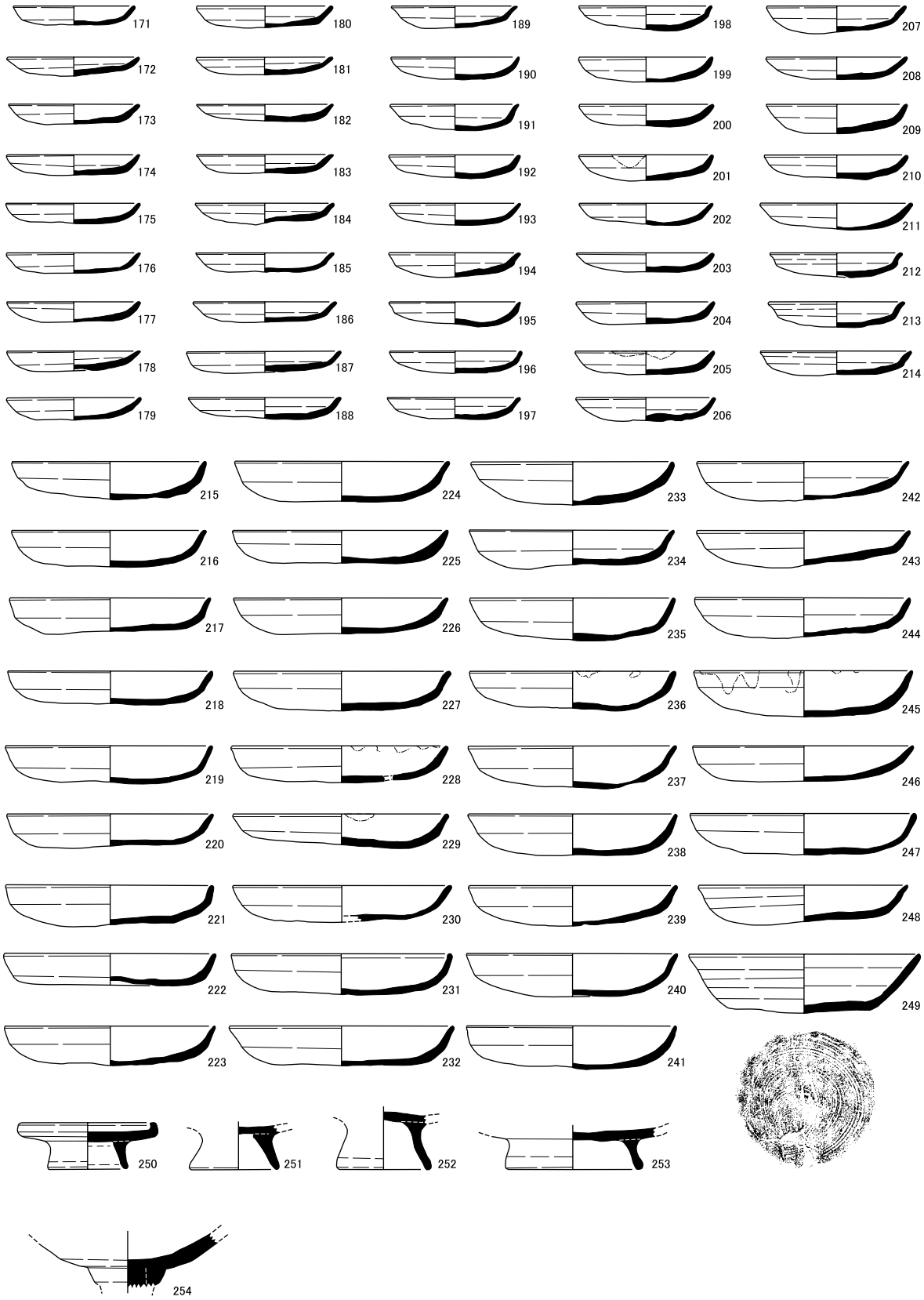
土器実測図４（１：４）

溝2235



土器実測図５（１：４）

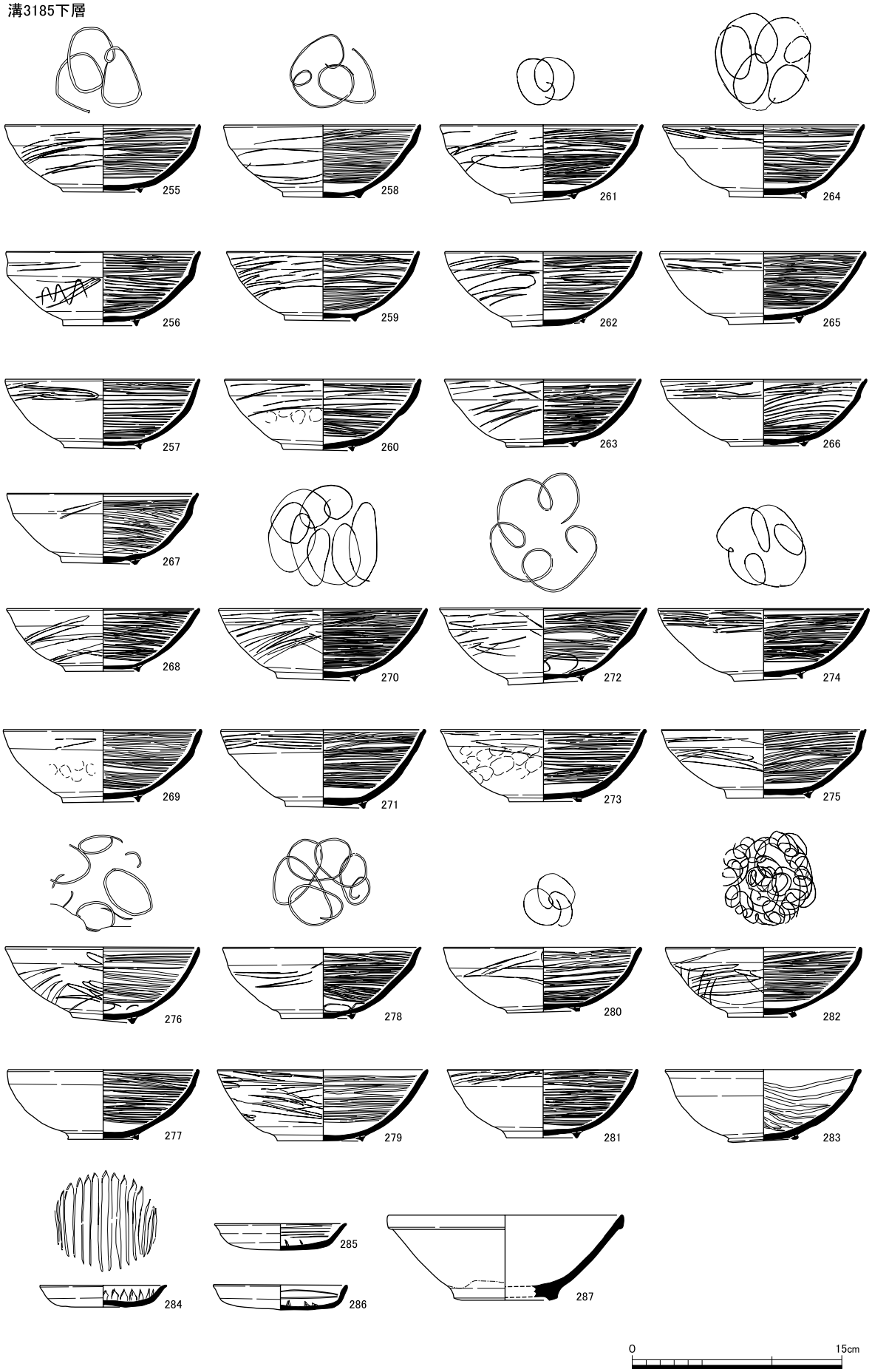
溝3185下層



0 15cm

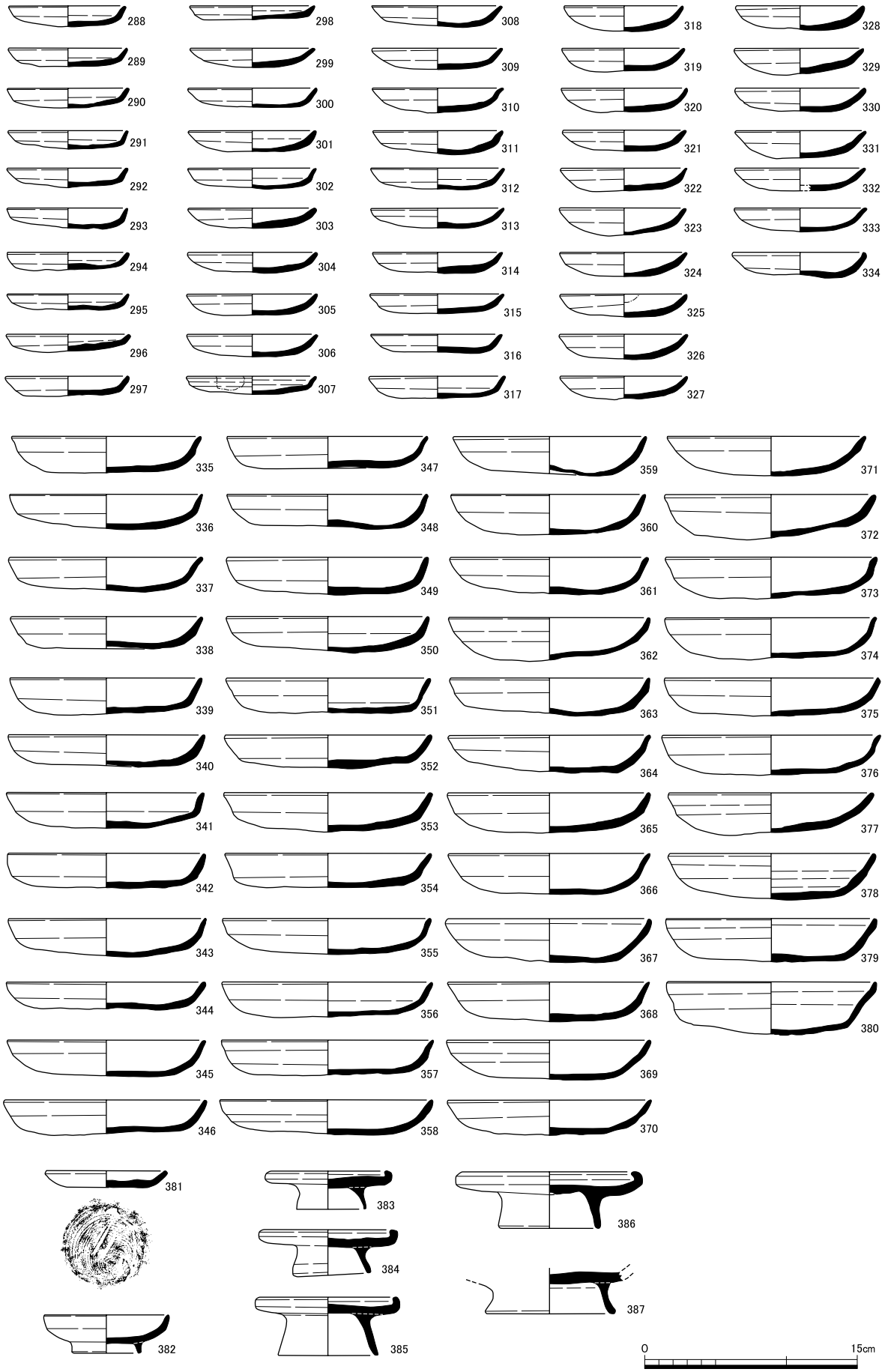
土器実測図６（１：４）

溝3185下層



土器実測図７（１：４）

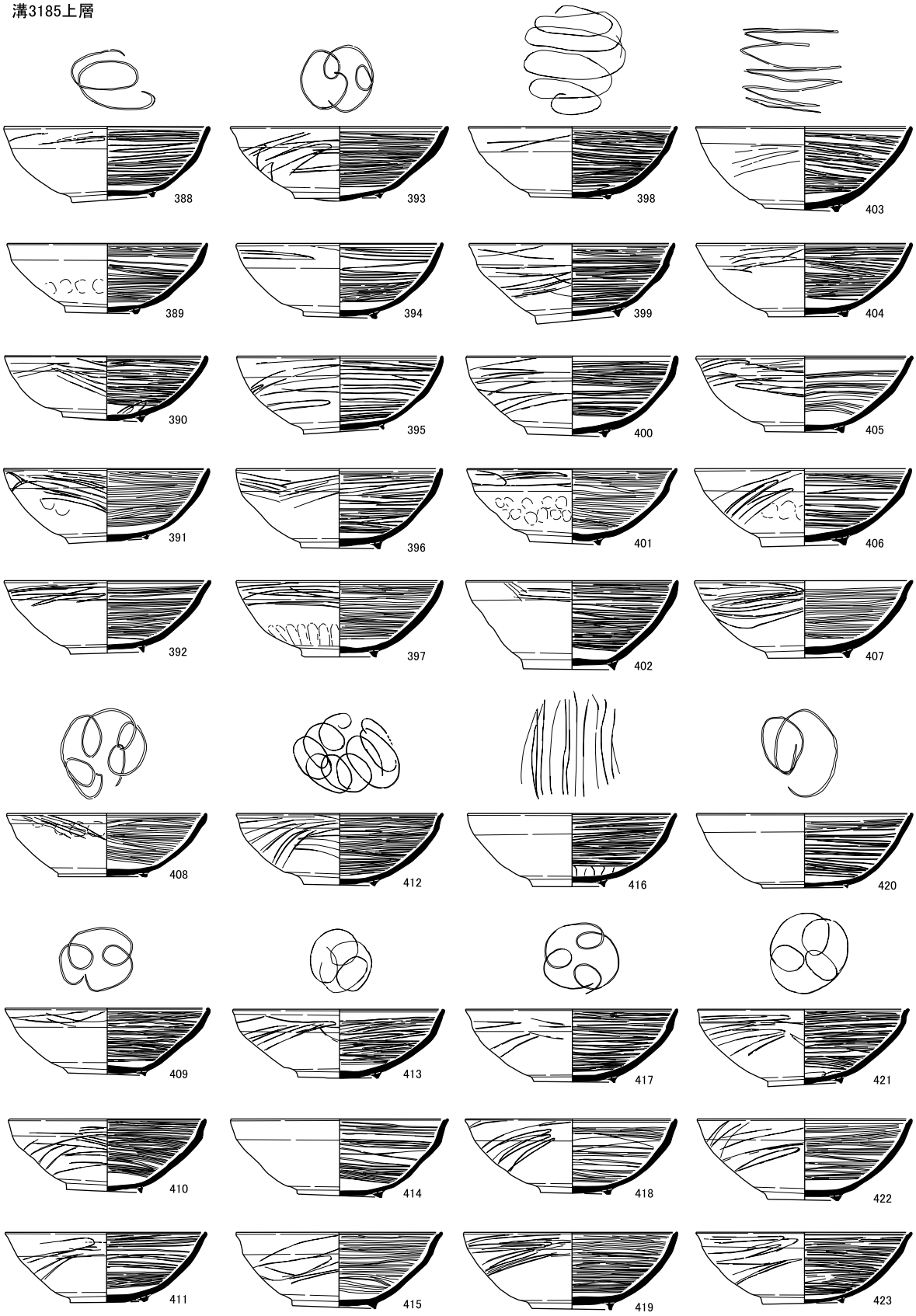
溝3185上層



土器実測図８（１：４）

図版82　遺物

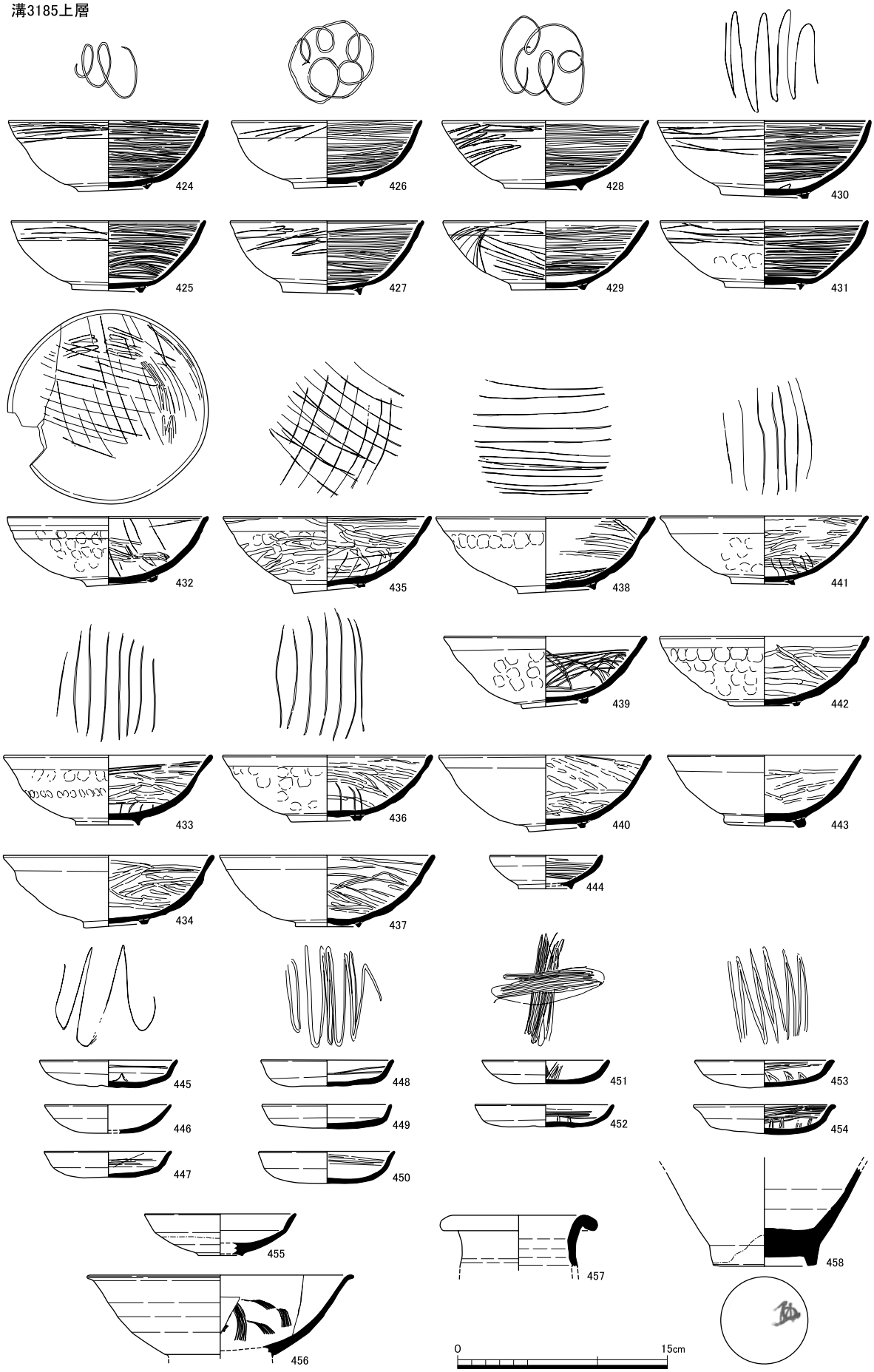
溝3185上層



0　15cm

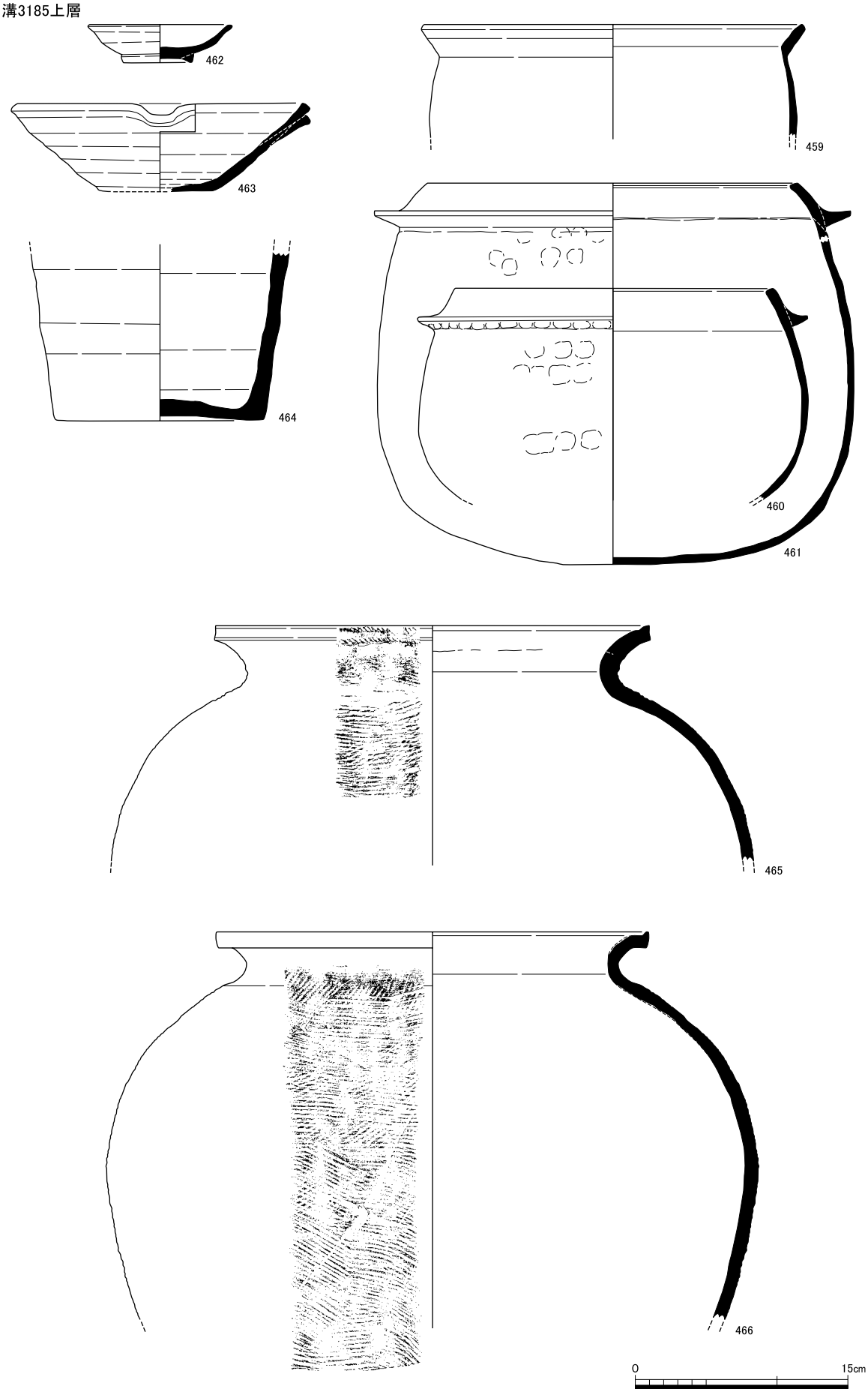
土器実測図９（１：４）

溝3185上層



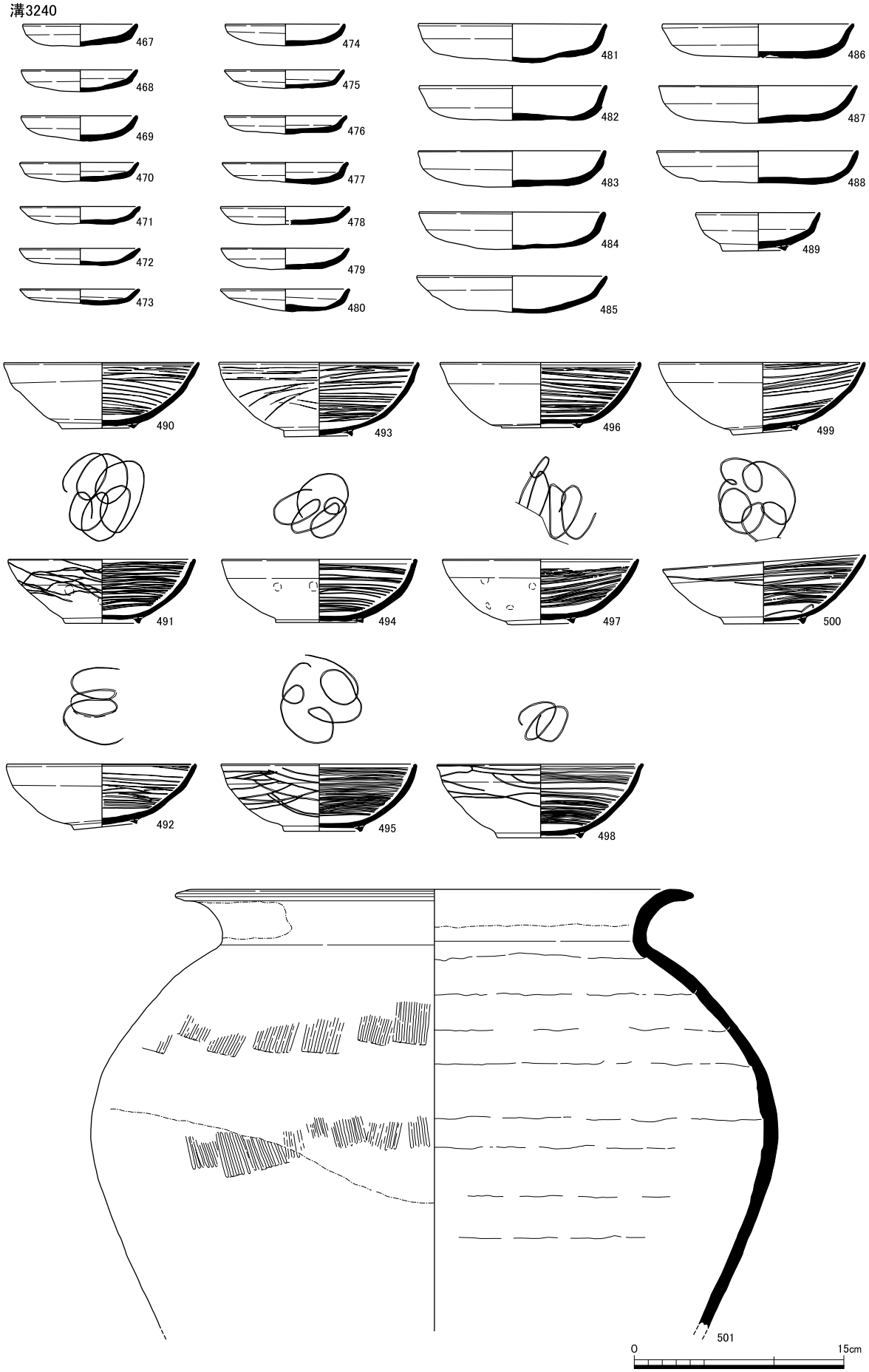
土器実測図10（1：4）

溝3185上層

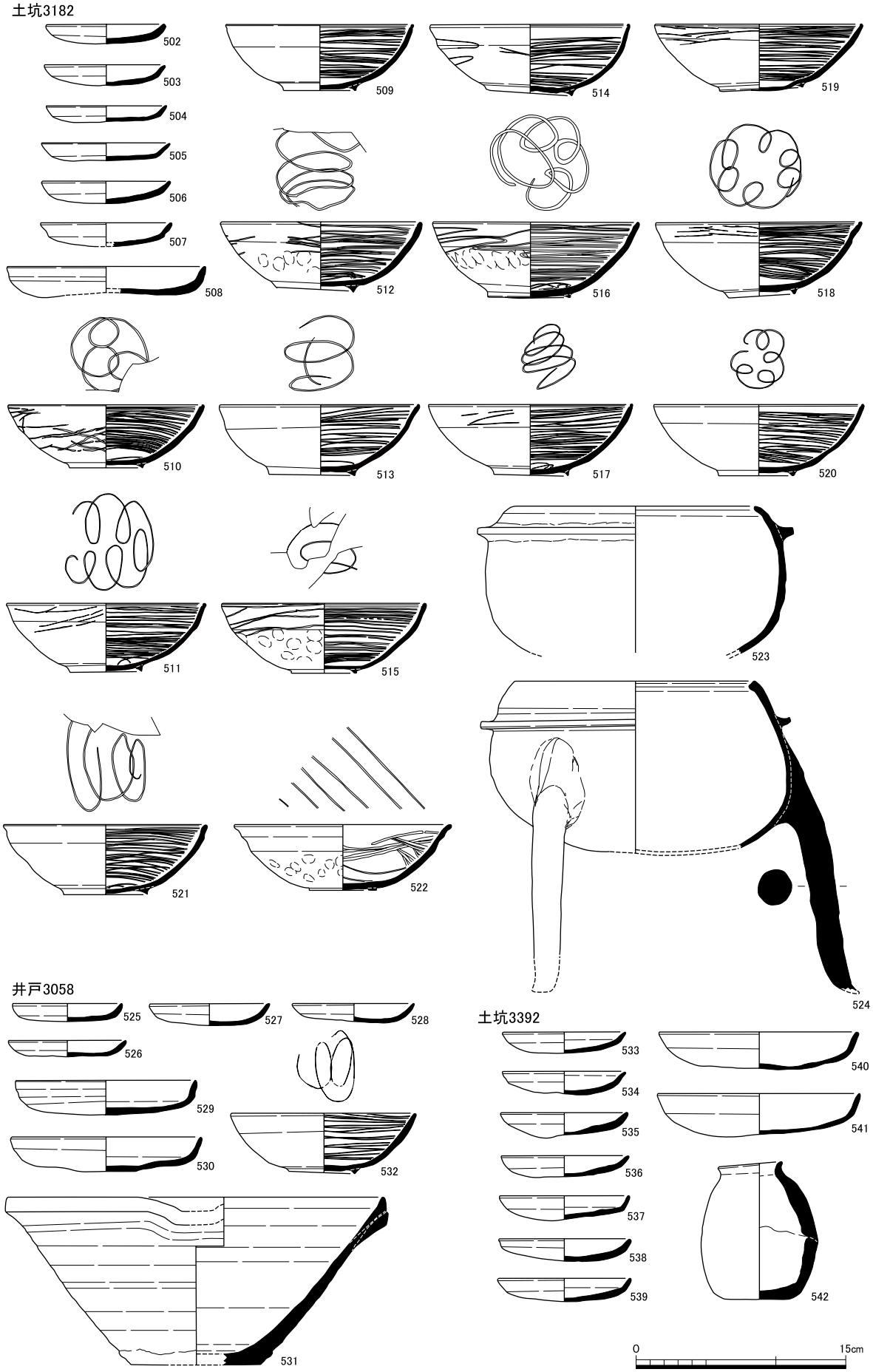


土器実測図11（1：4）

溝3240

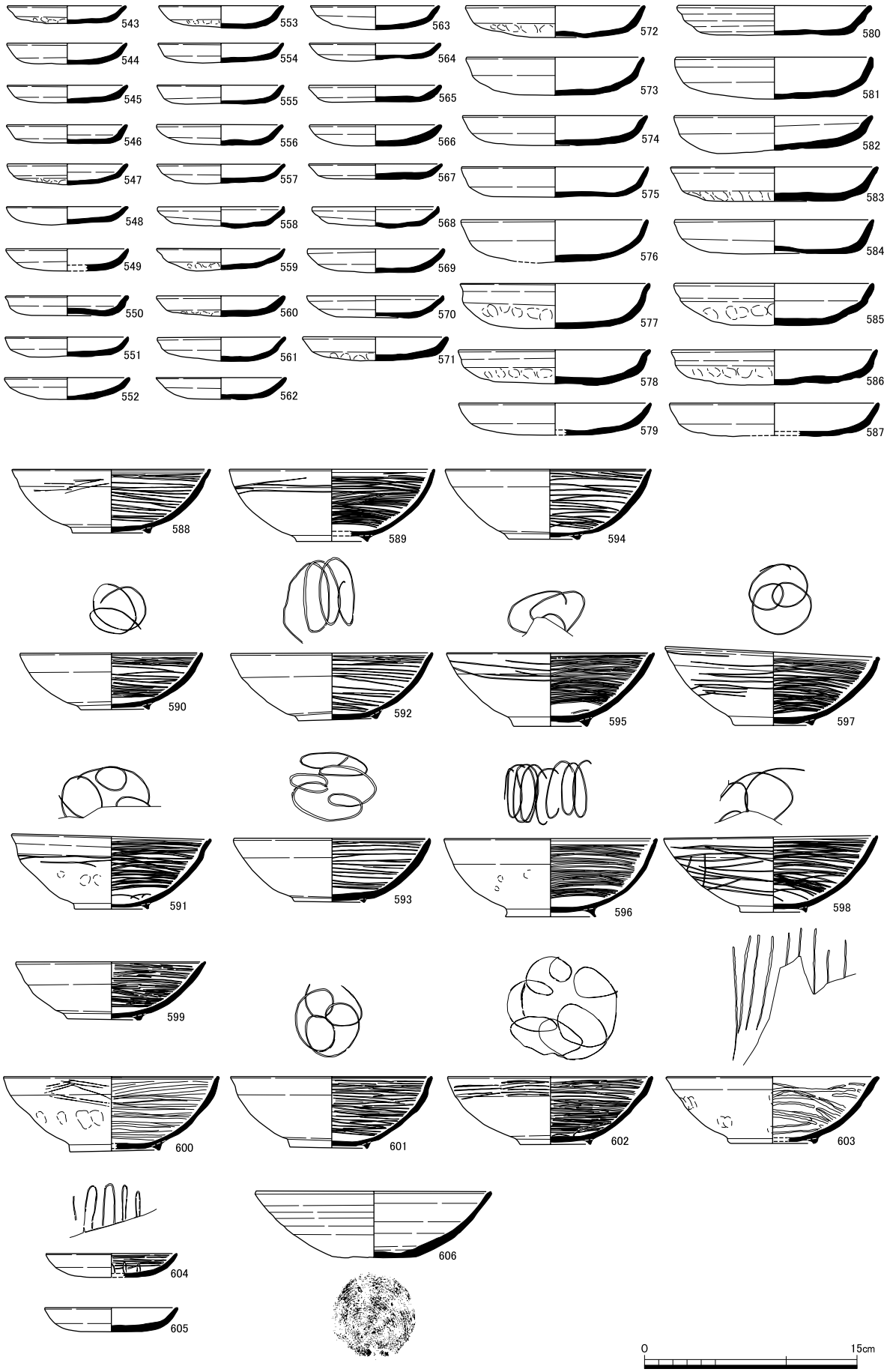


土器実測図12（1：4）

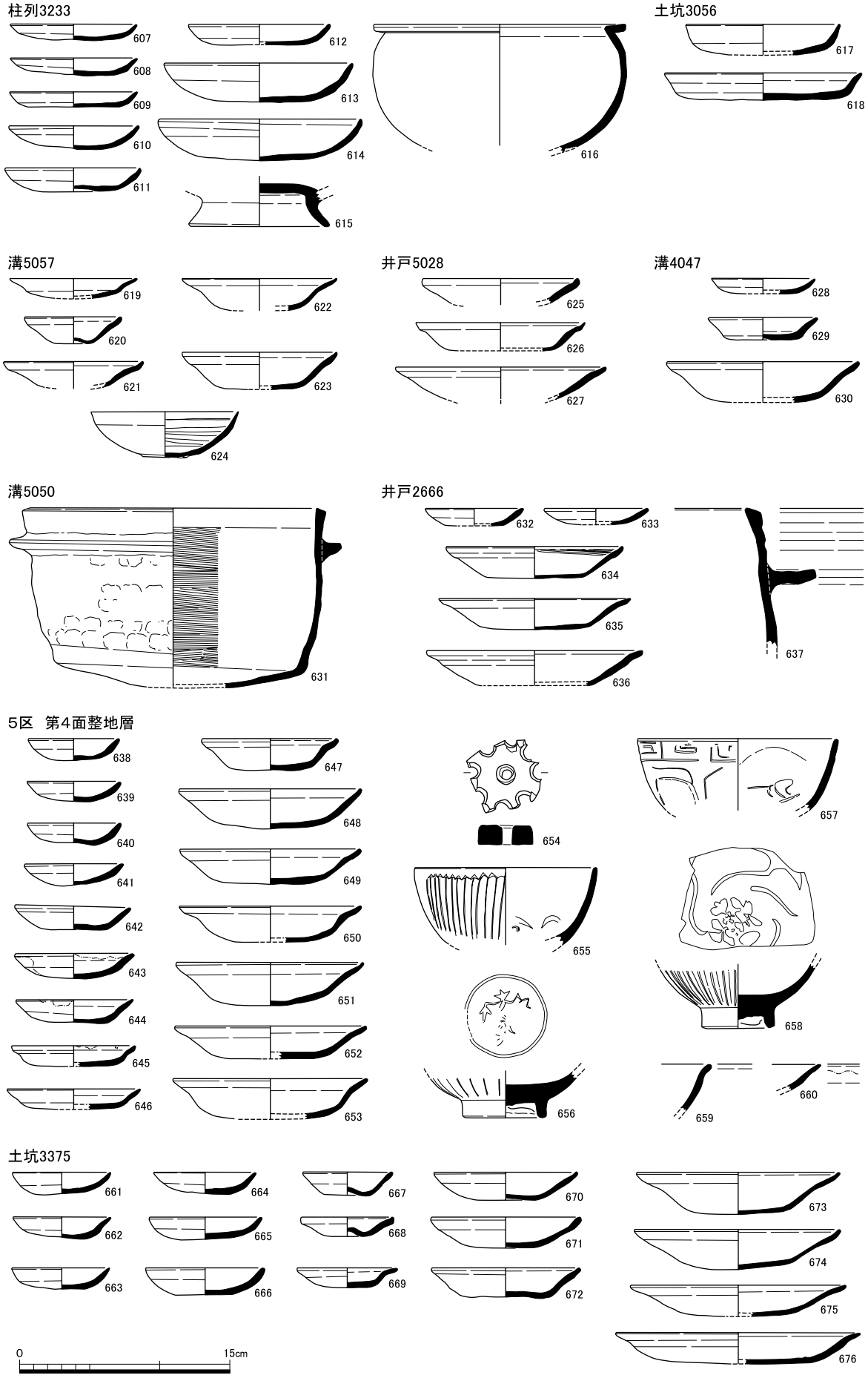

土坑3182
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
井戸3058
525
526
527
528
529
530
531
532
土坑3392
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
0
15cm

土器実測図13（1：4）

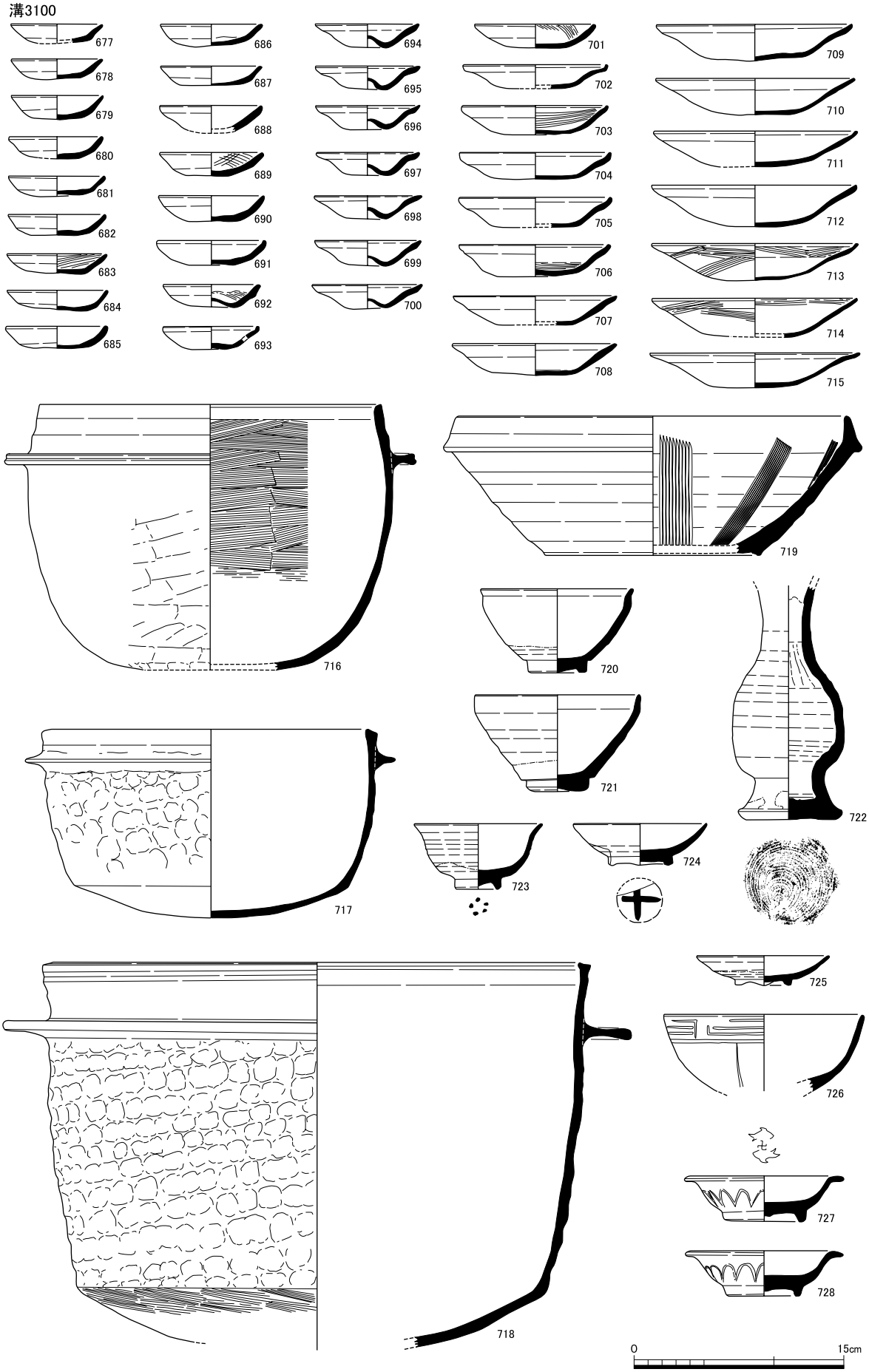
土坑3147



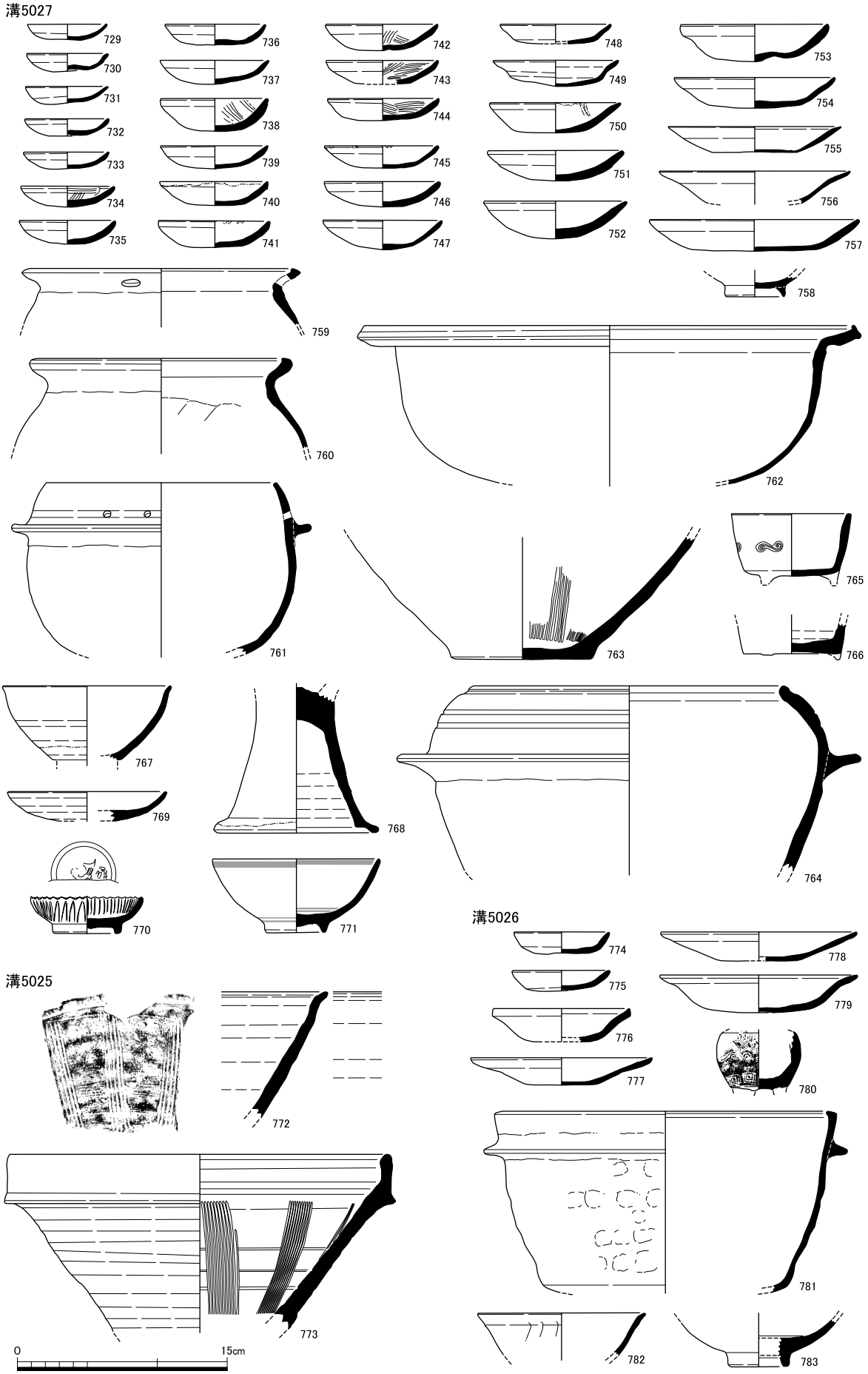
土器実測図14（1：4）


柱列3233
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
土坑3056
617
618
溝5057
619
620
621
622
623
624
井戸5028
625
626
627
溝4047
628
629
630
溝5050
631
井戸2666
632
633
634
635
636
637
5区　第4面整地層
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
土坑3375
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
0
15cm

土器実測図15（1：4）

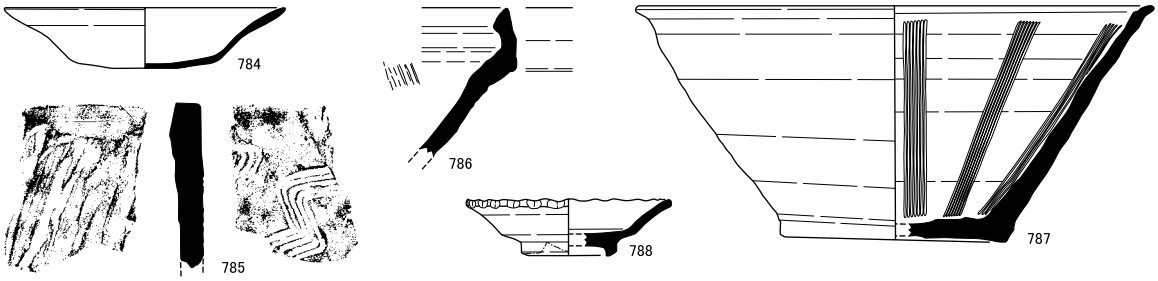

溝3100
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
0
15cm

土器実測図16（1：4）

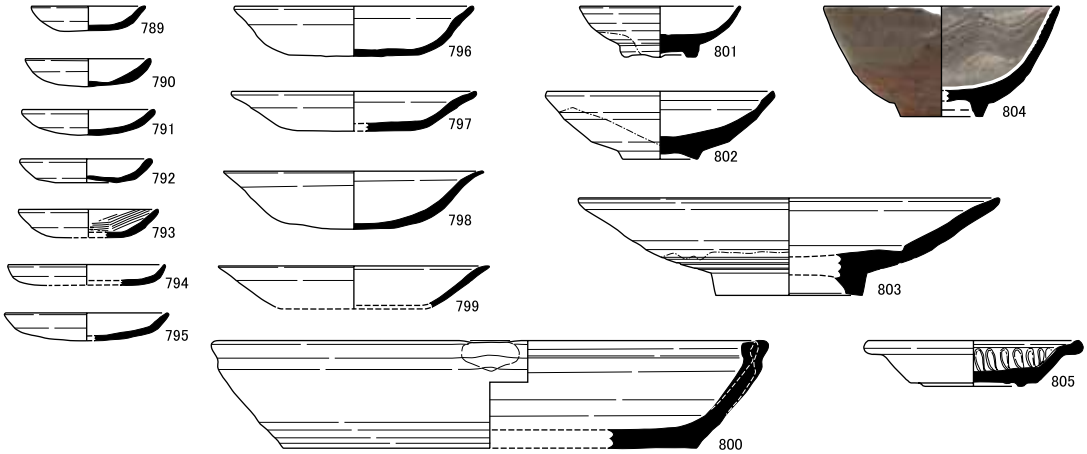

溝5027
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
溝5026
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
溝5025
772
773
0
15cm

土器実測図17（1：4）

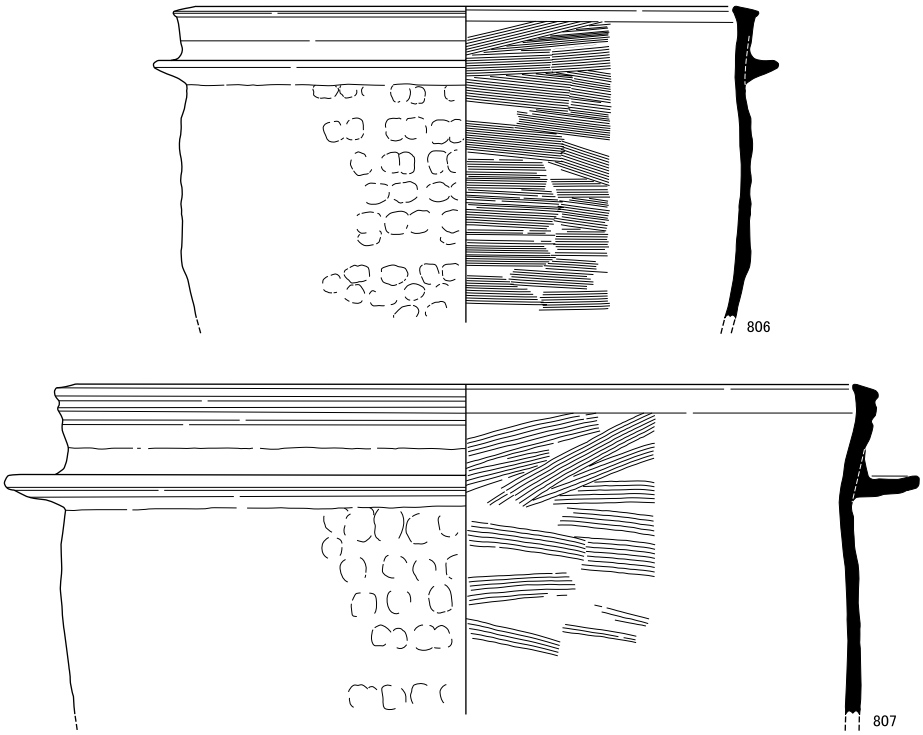
5区 第3面整地層



溝3055



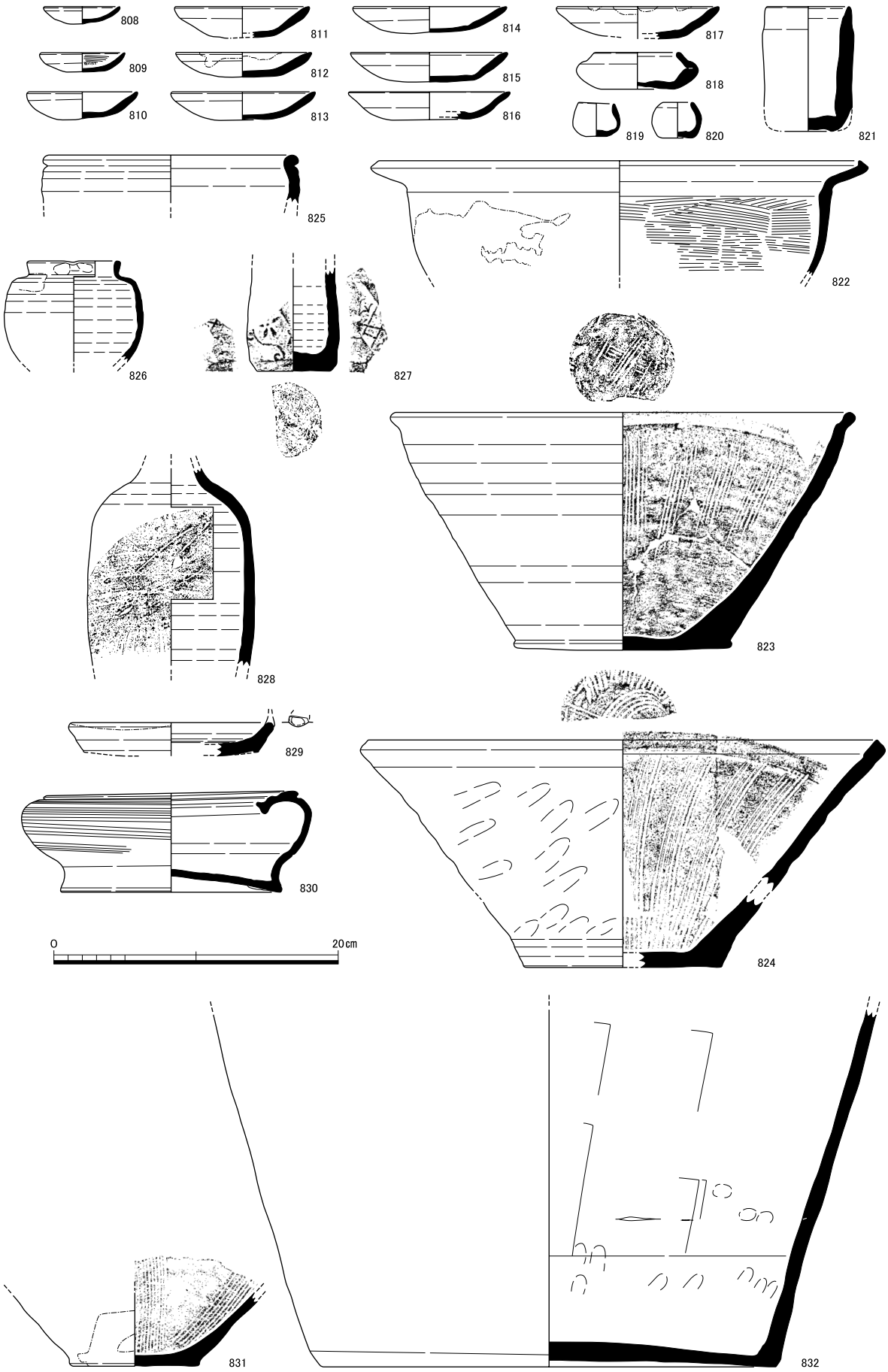
土坑3385



0 15cm

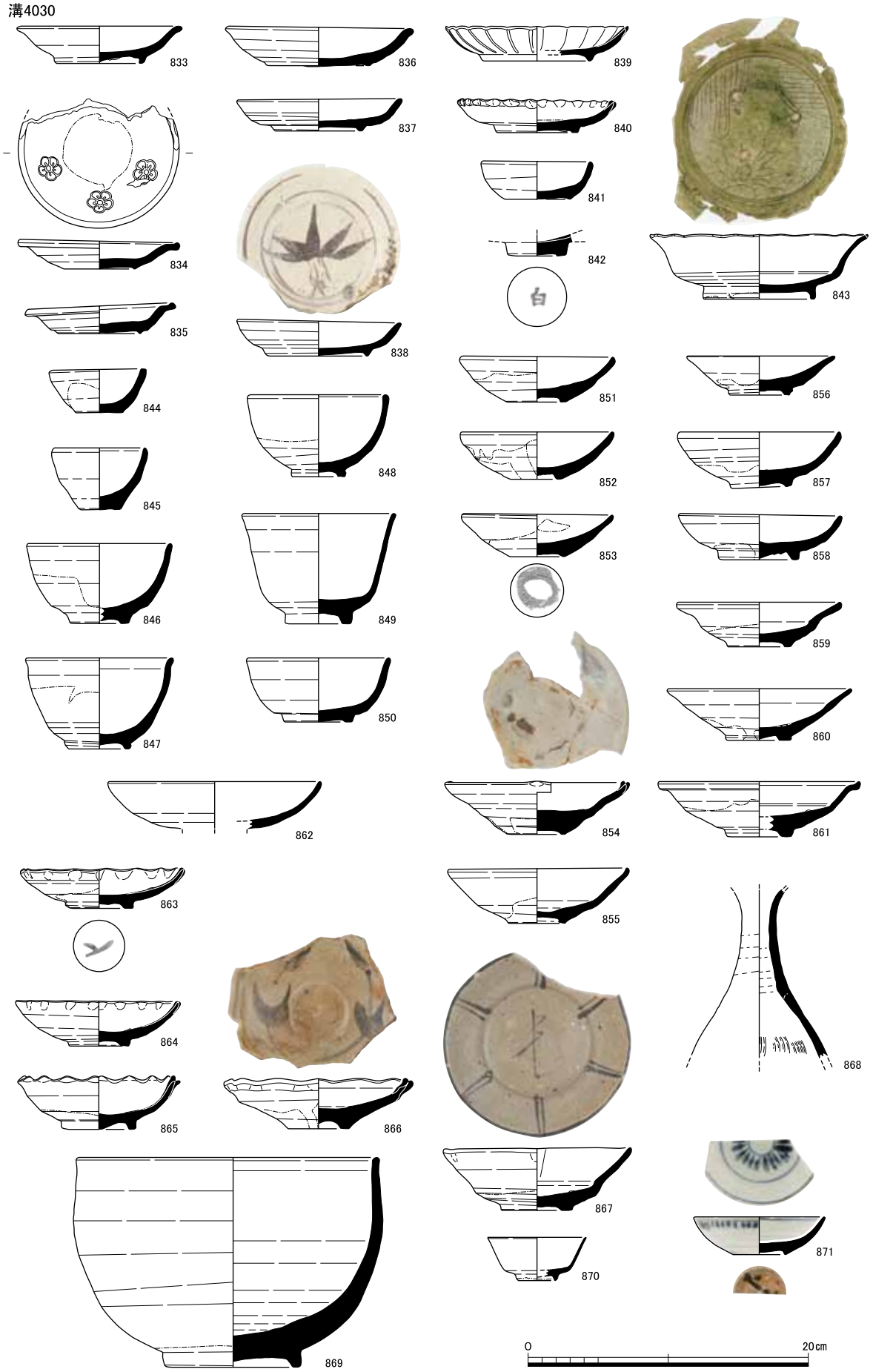
土器実測図18（1：4）

溝4030



土器実測図19（1：4）

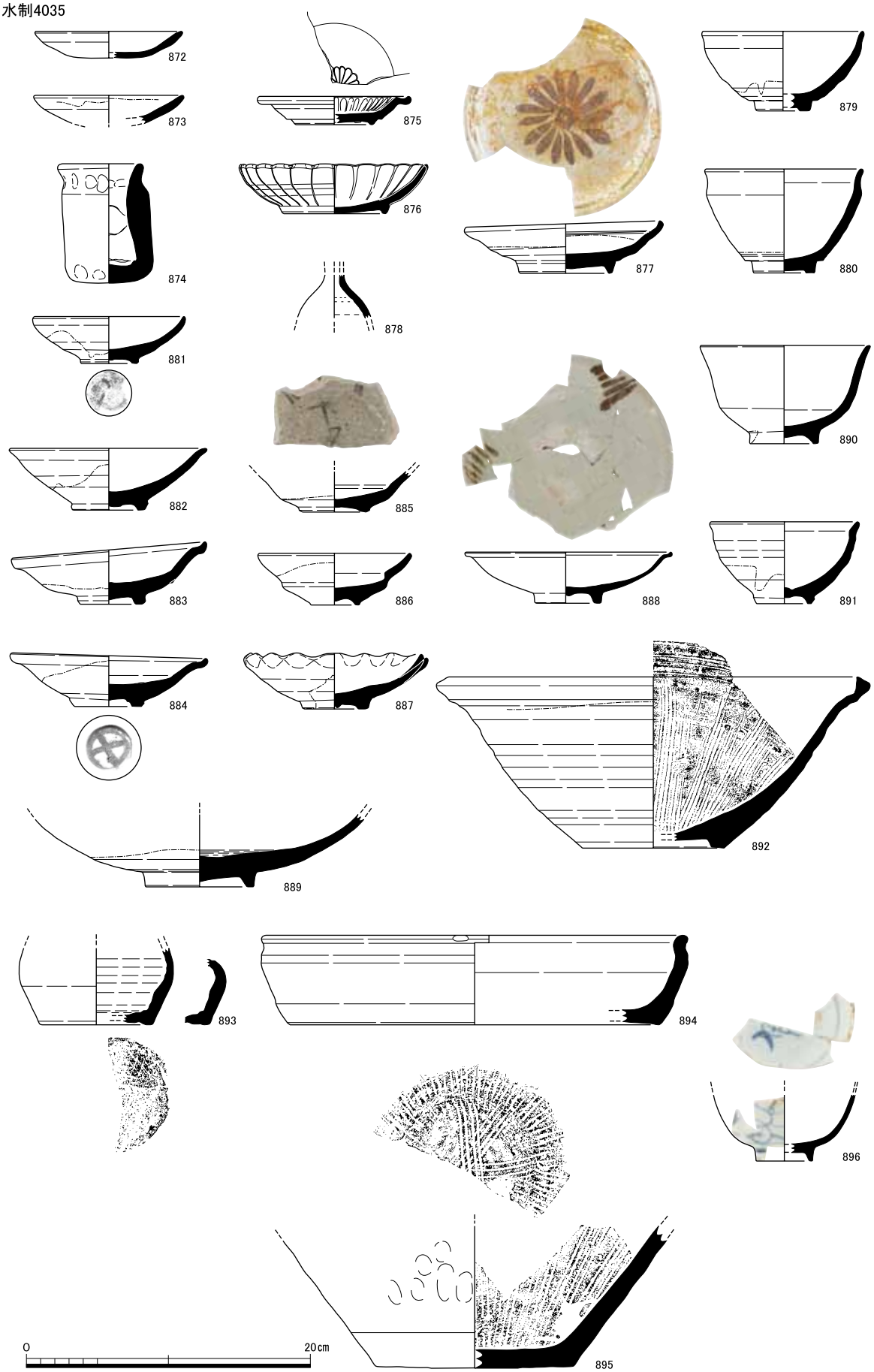
溝4030



土器実測図20（1：4）

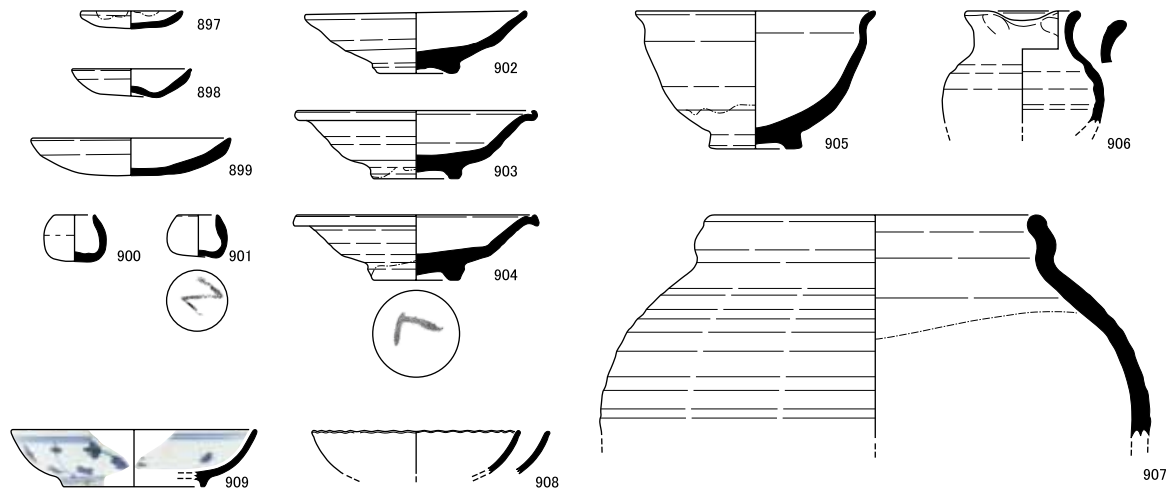
図版94 遺物

水制4035

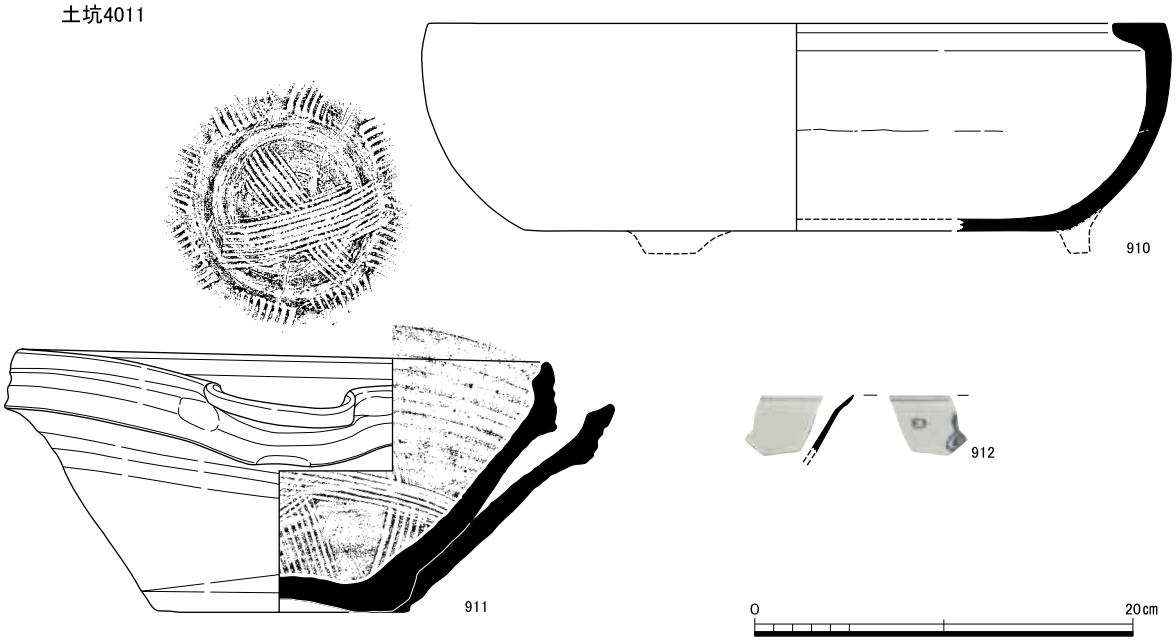


土器実測図21（1：4）

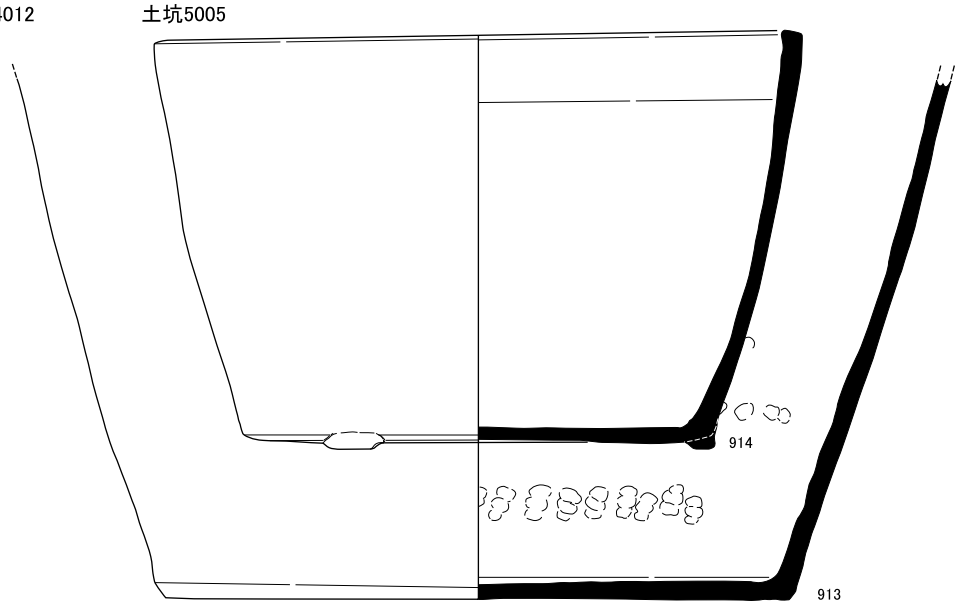
護岸4031



土坑4011

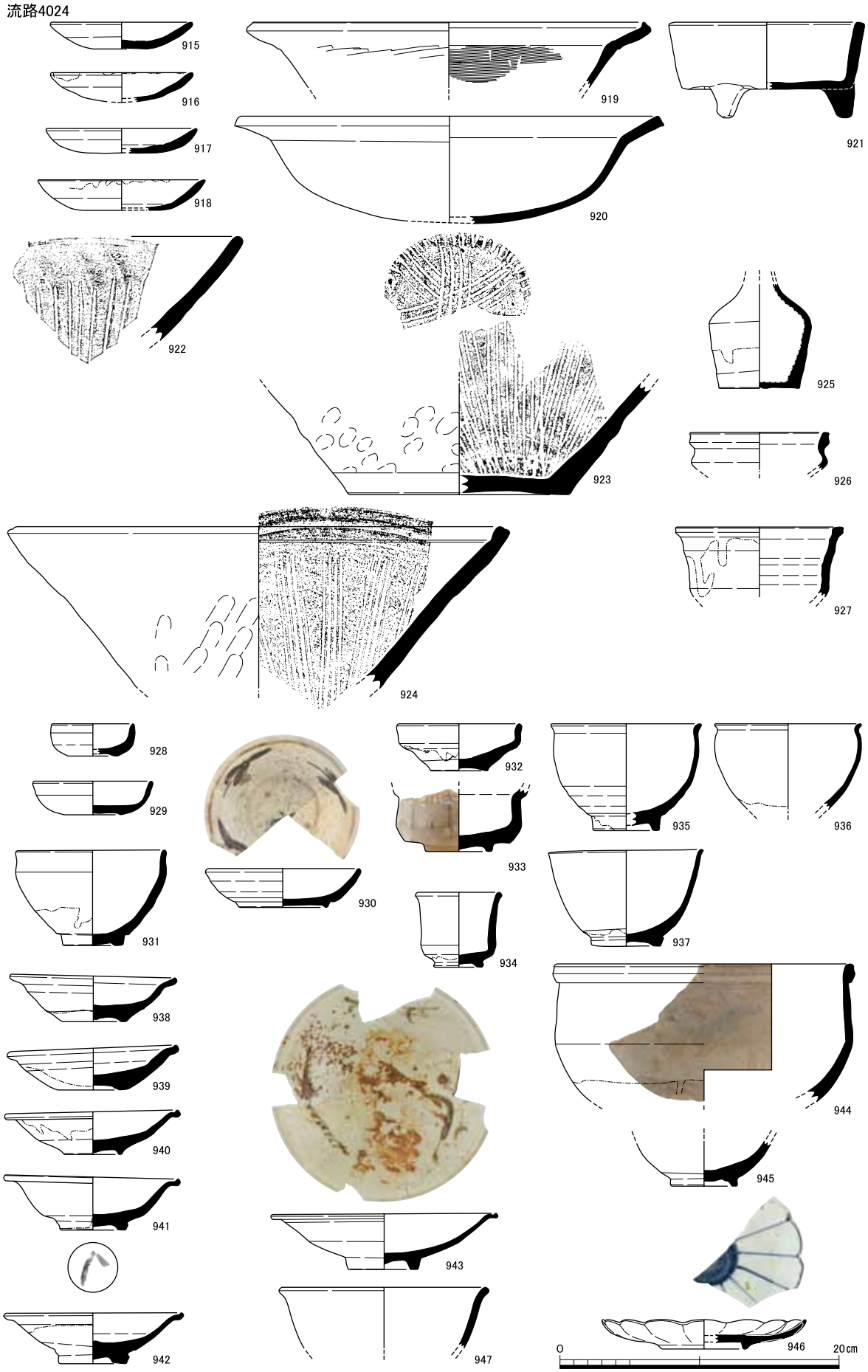


土坑4012　　土坑5005



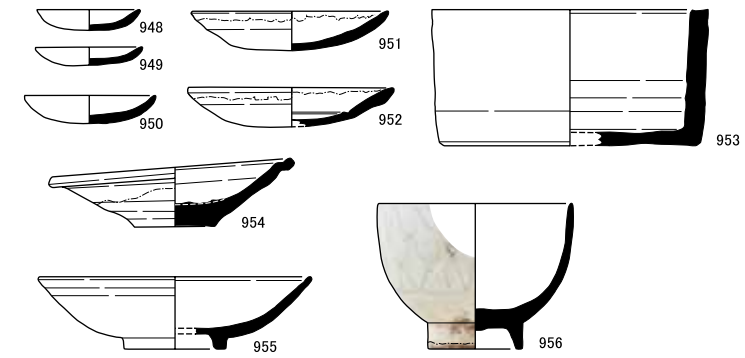
土器実測図22（1：4）

流路4024

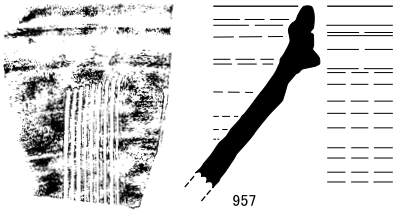


土器実測図23（1：4）

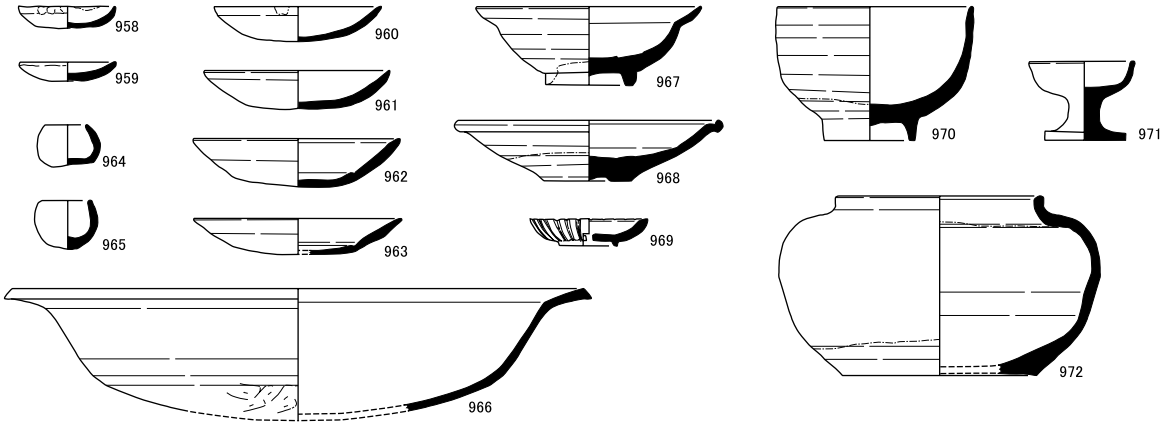
護岸3200



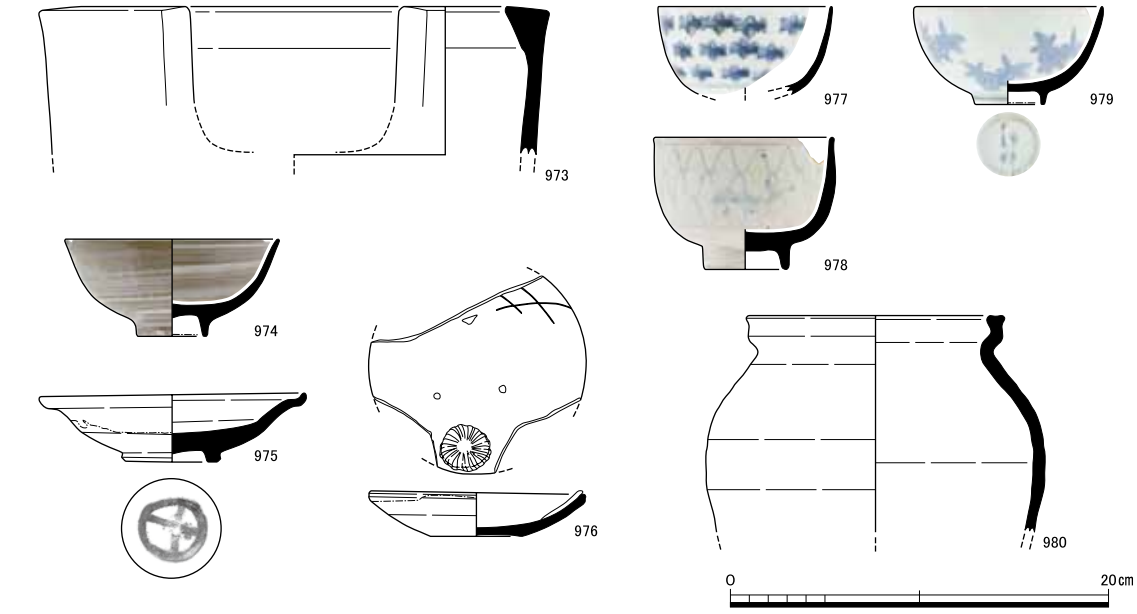
地業5002



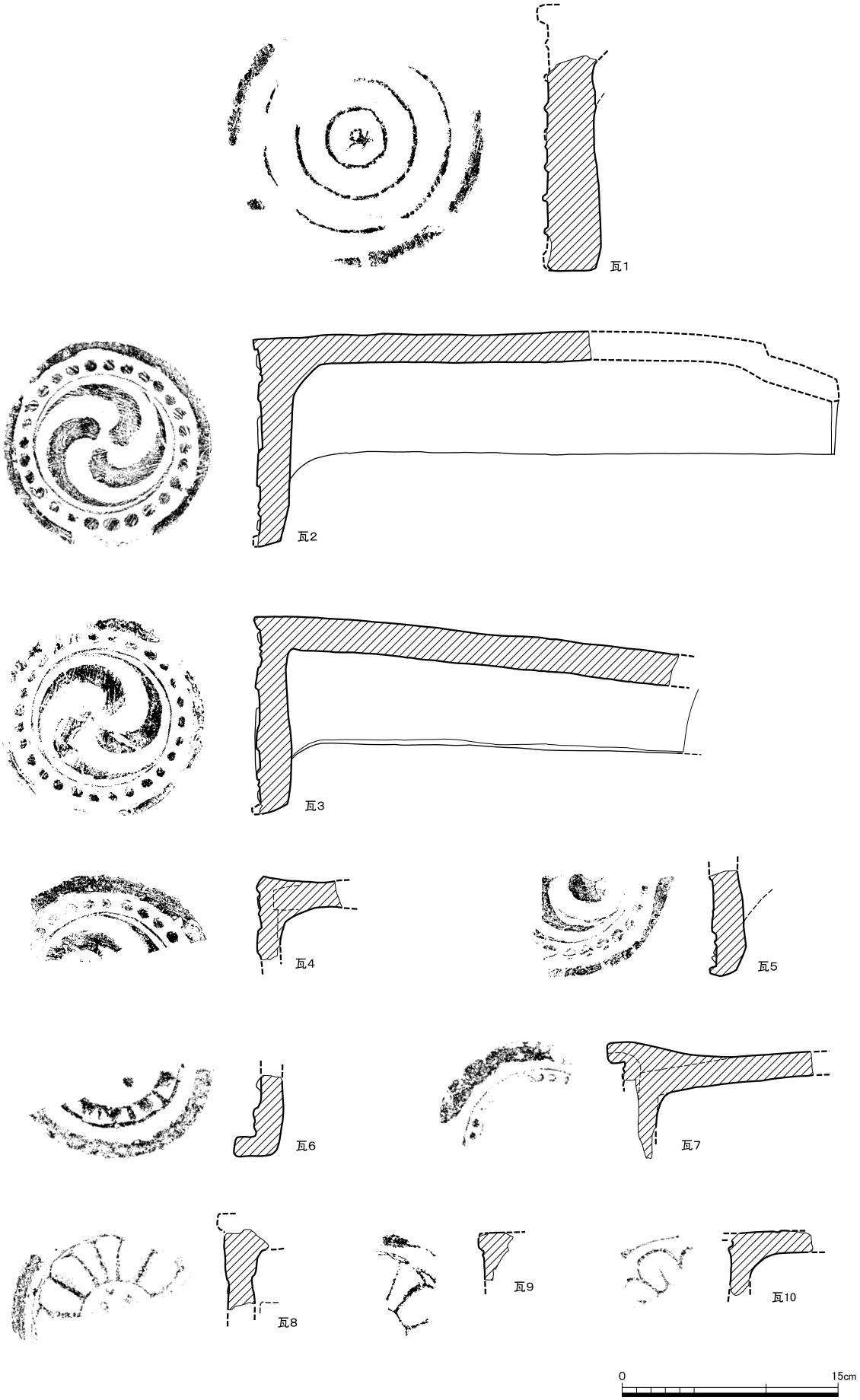
護岸3001



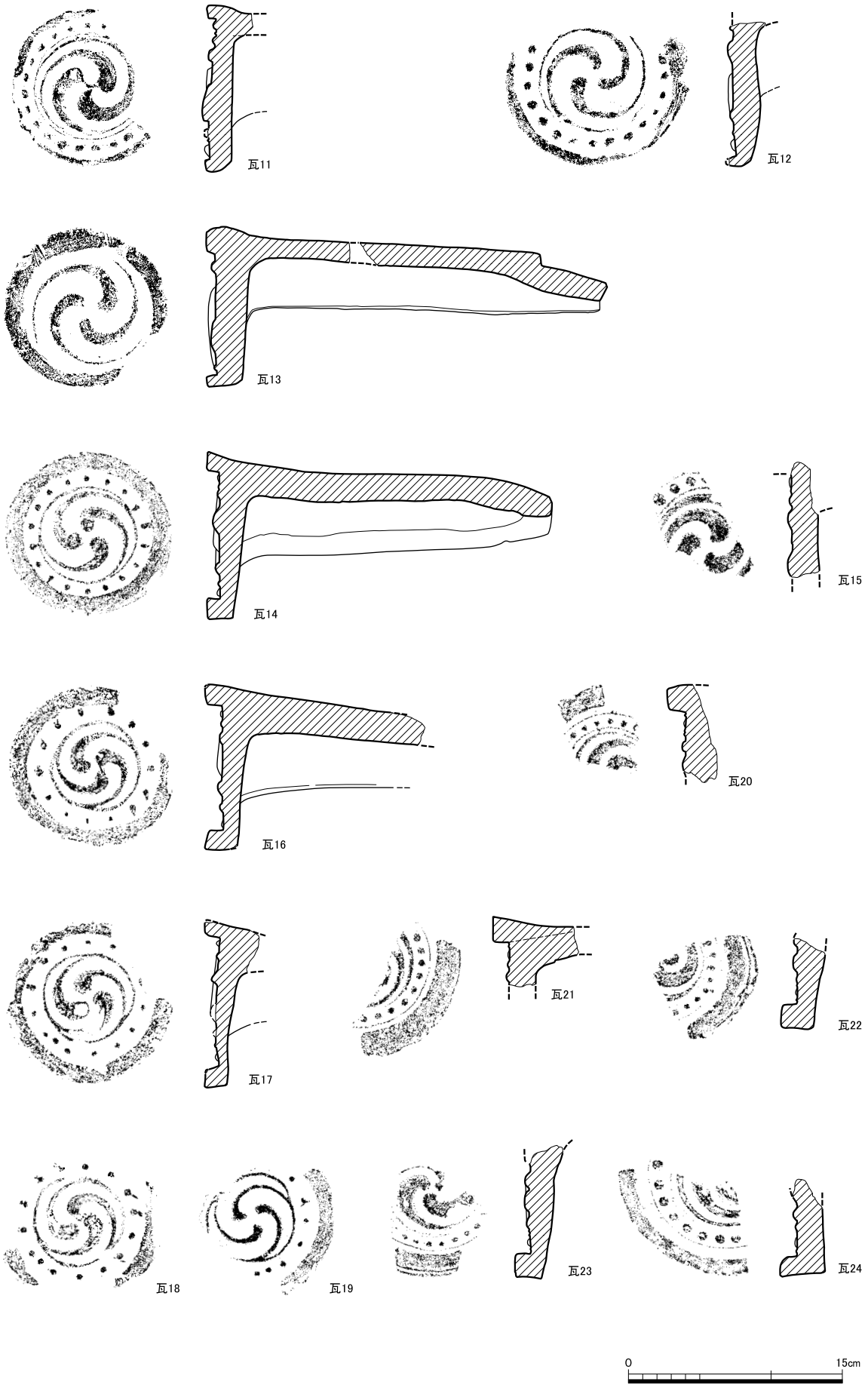
護岸4001



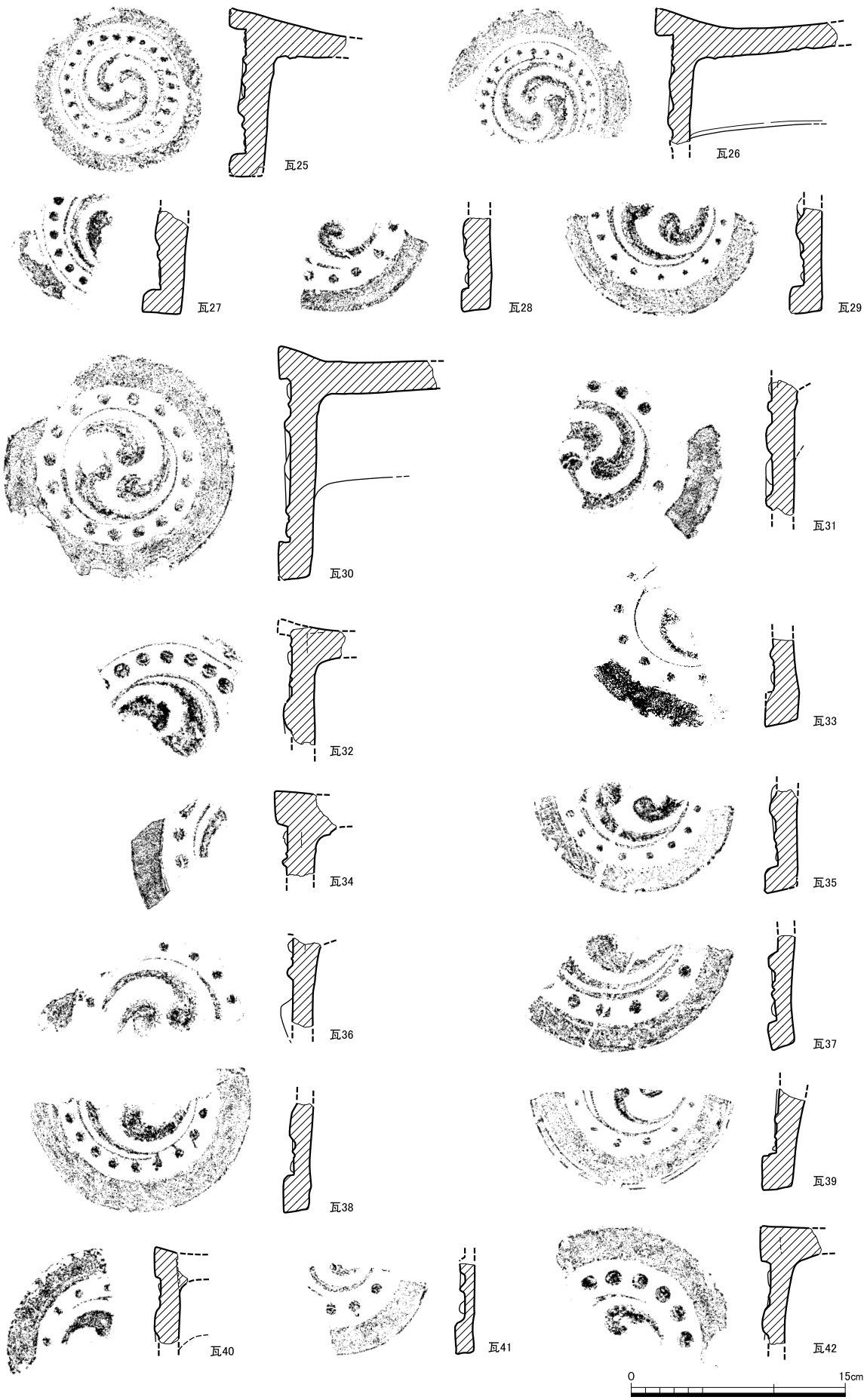
土器実測図24（1：4）



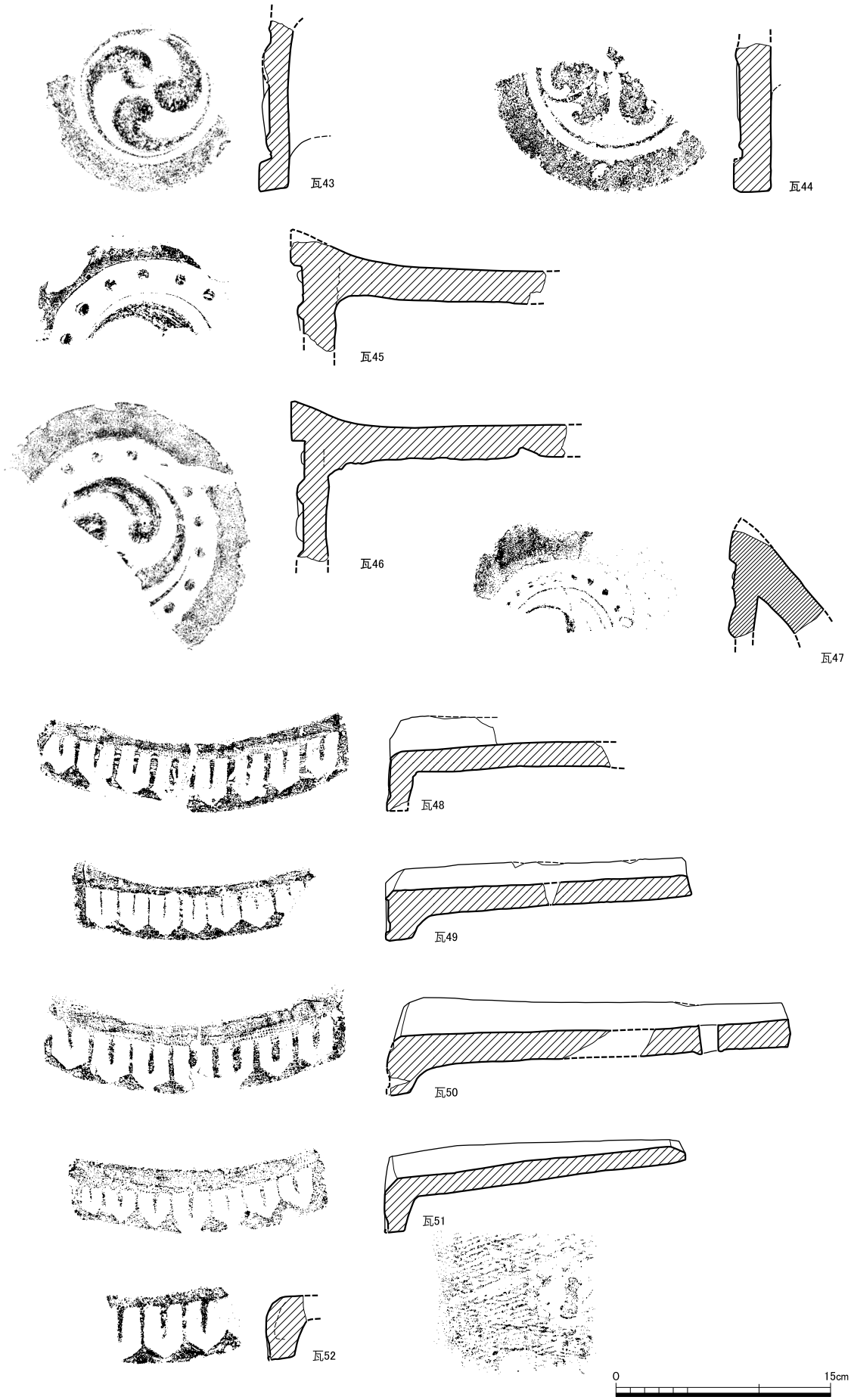
瓦類拓影及び実測図１（１：４）



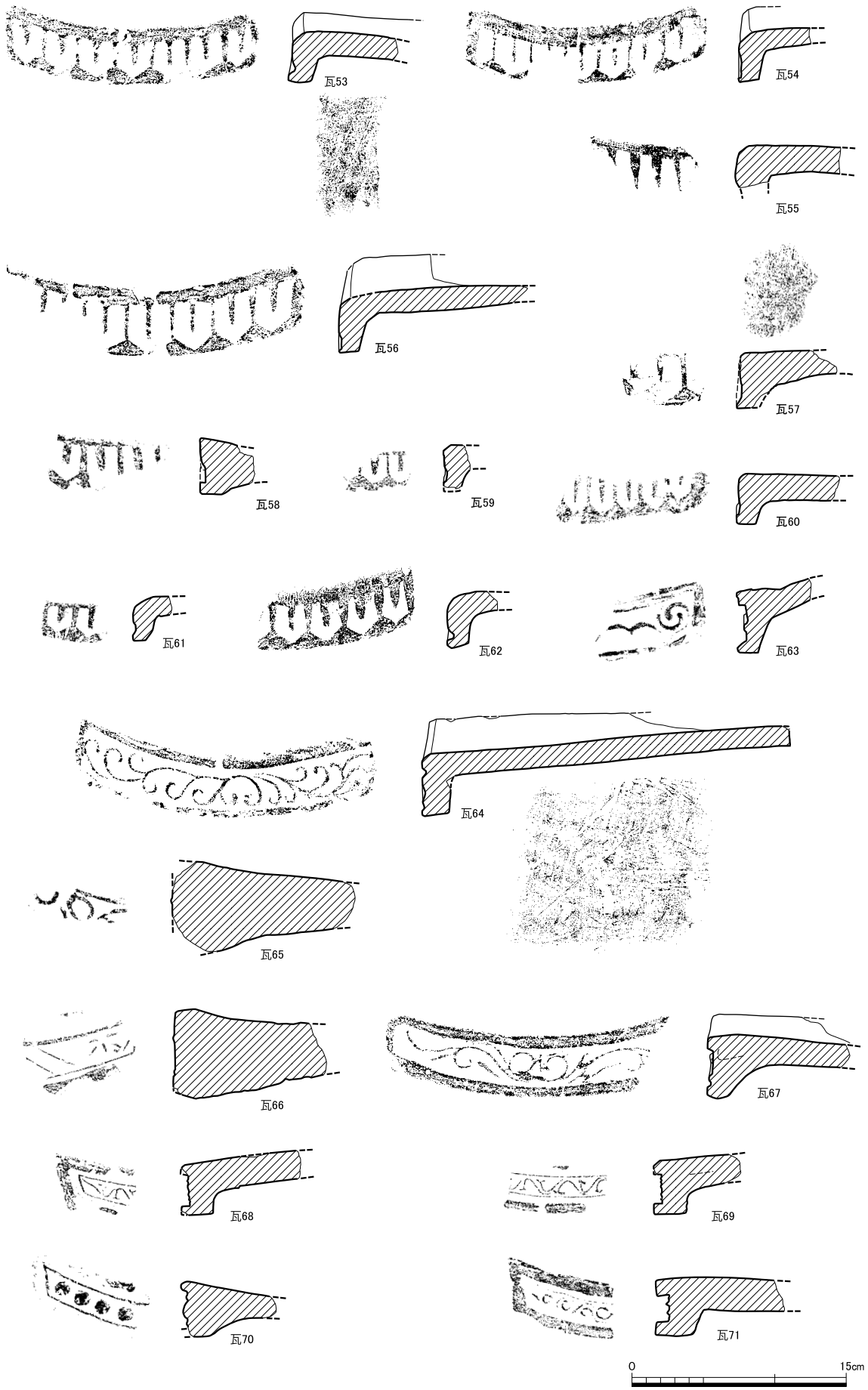
瓦類拓影及び実測図２（１：４）



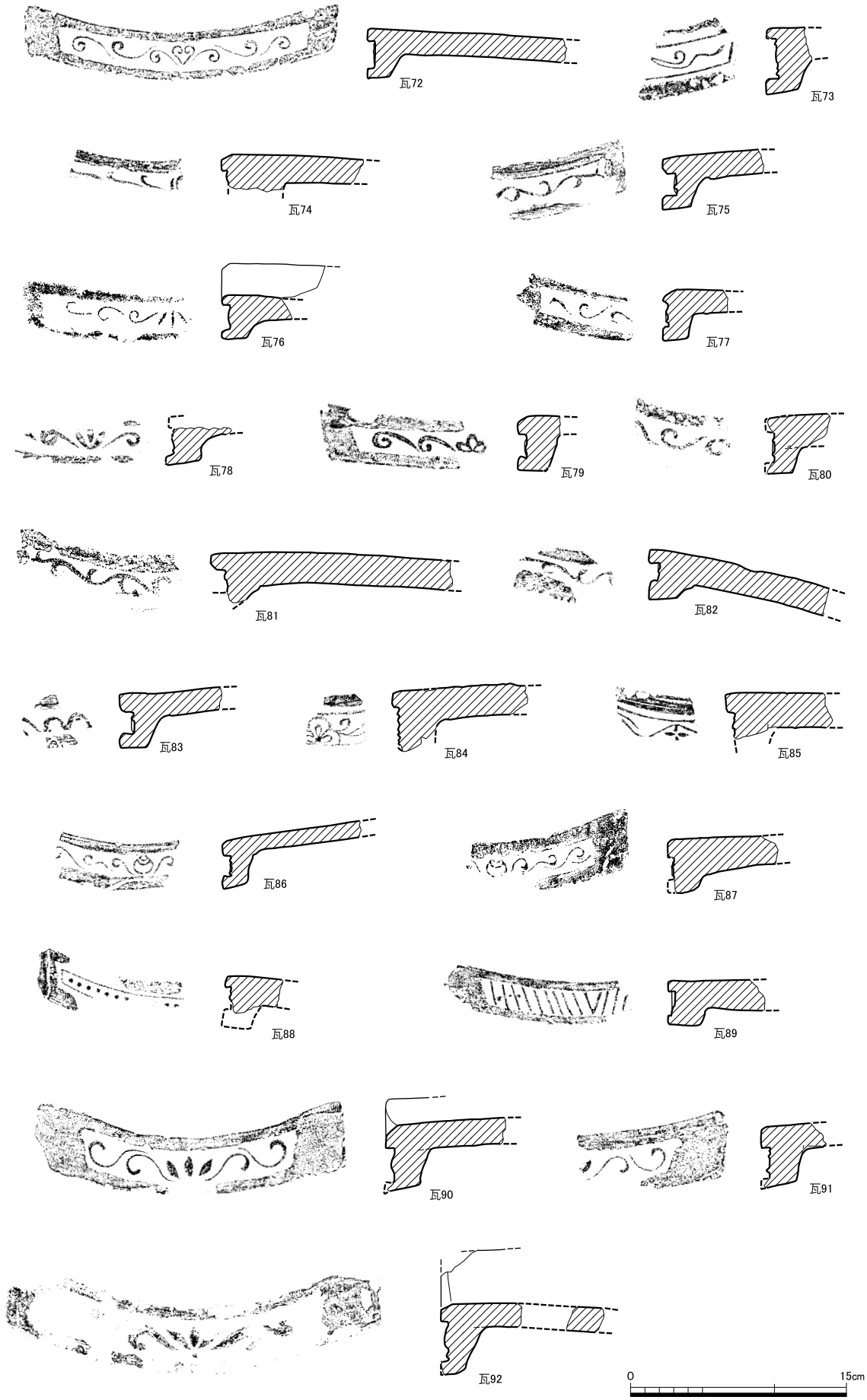
瓦類拓影及び実測図３（１：４）



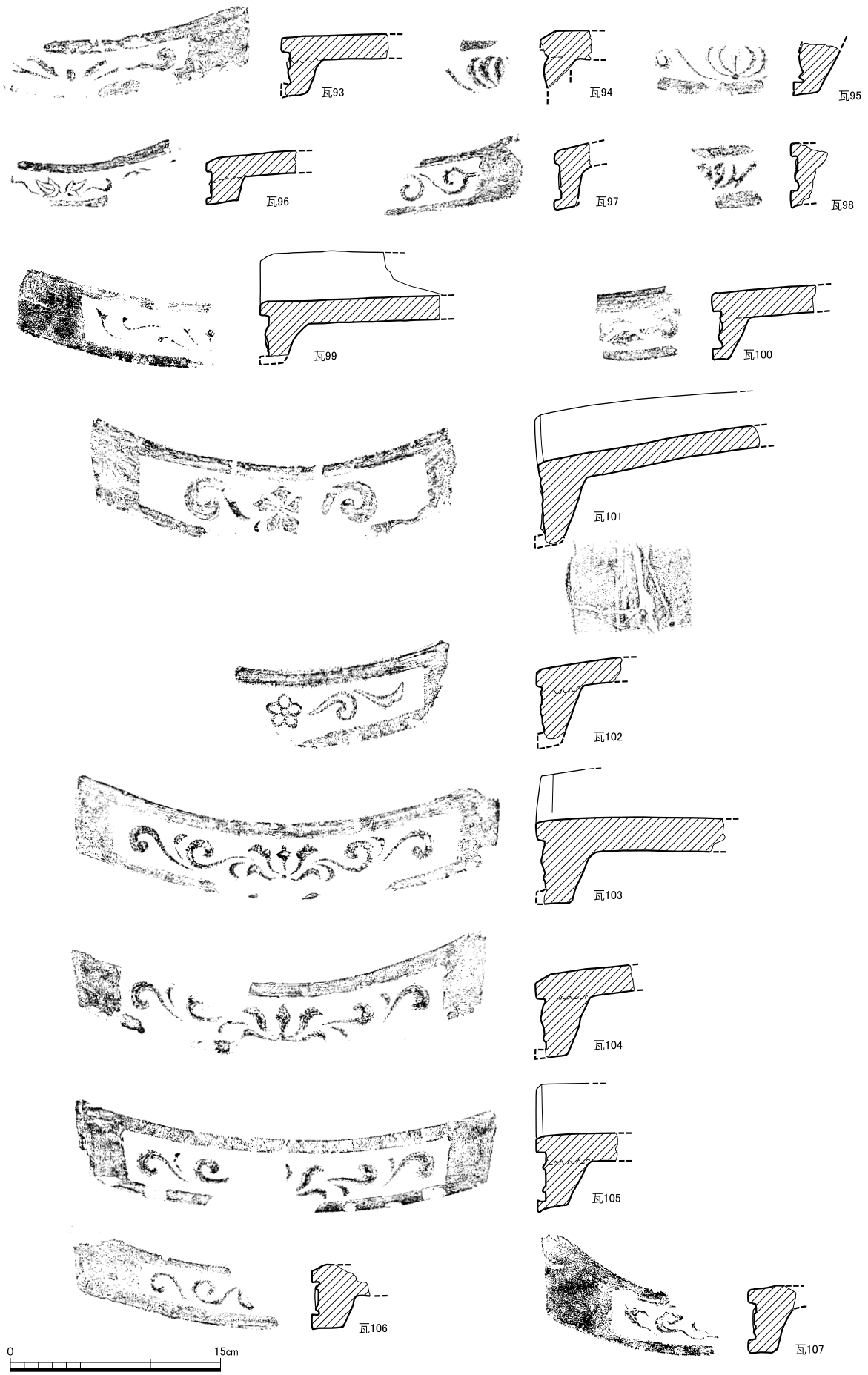
瓦類拓影及び実測図４（１：４）



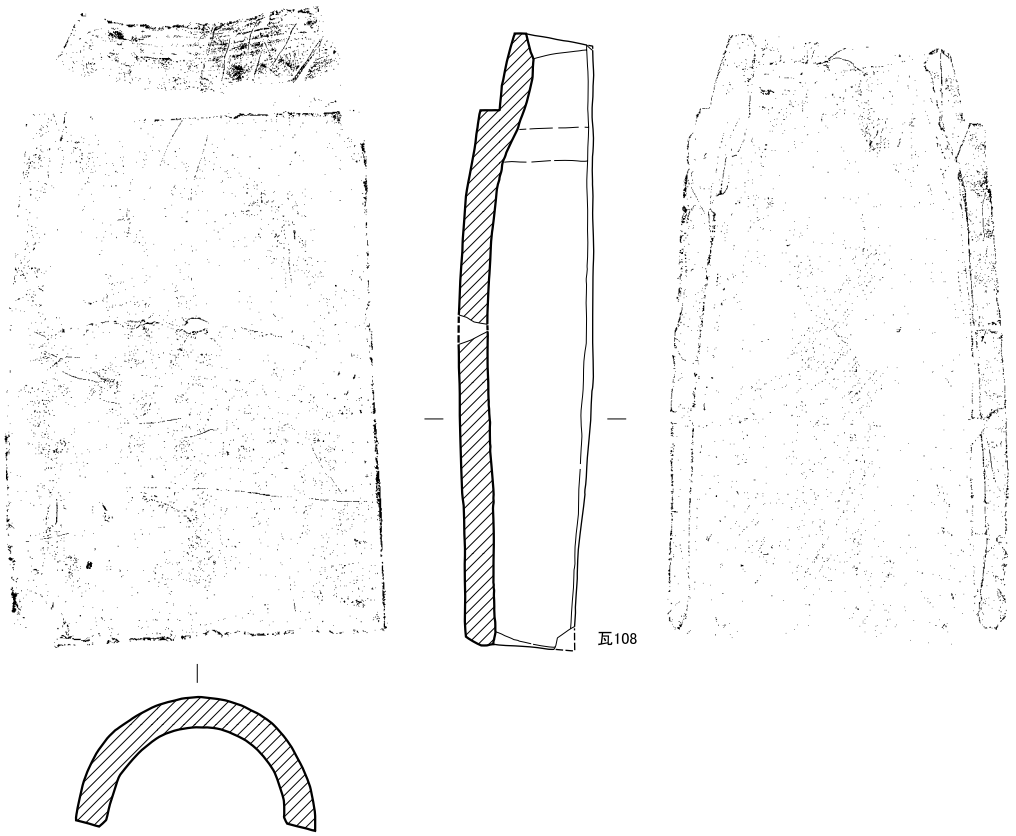
瓦類拓影及び実測図５（１：４）

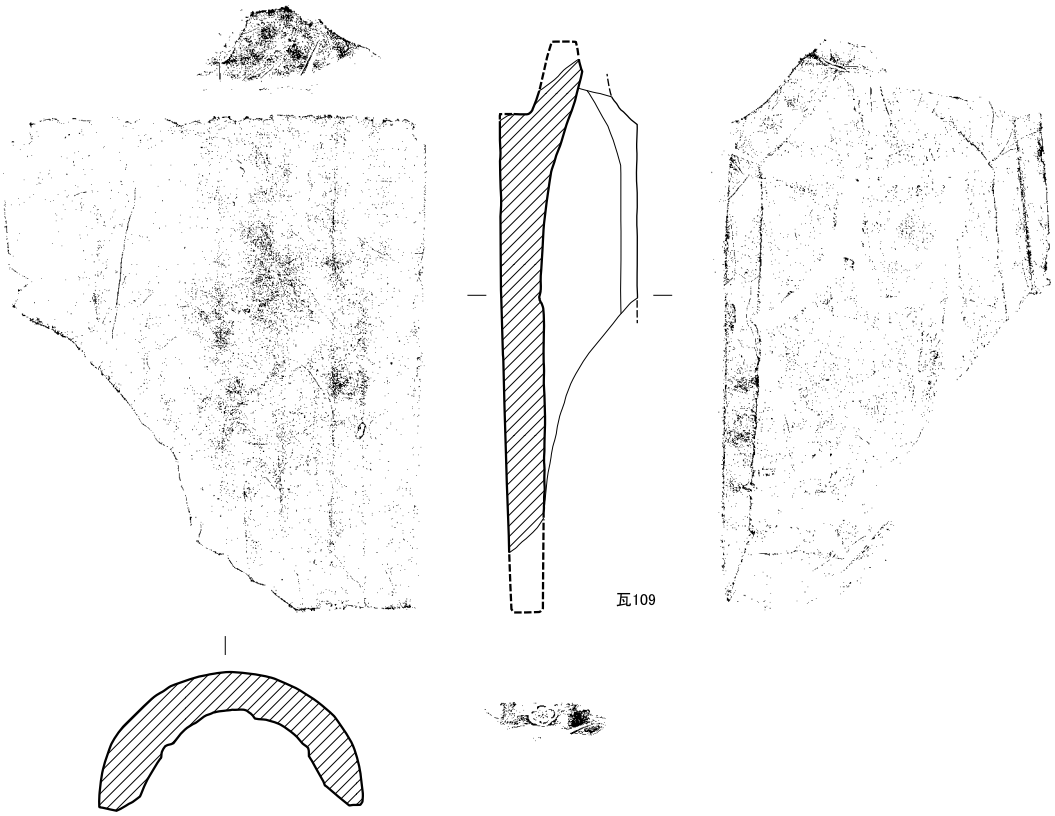


瓦類拓影及び実測図６（１：４）



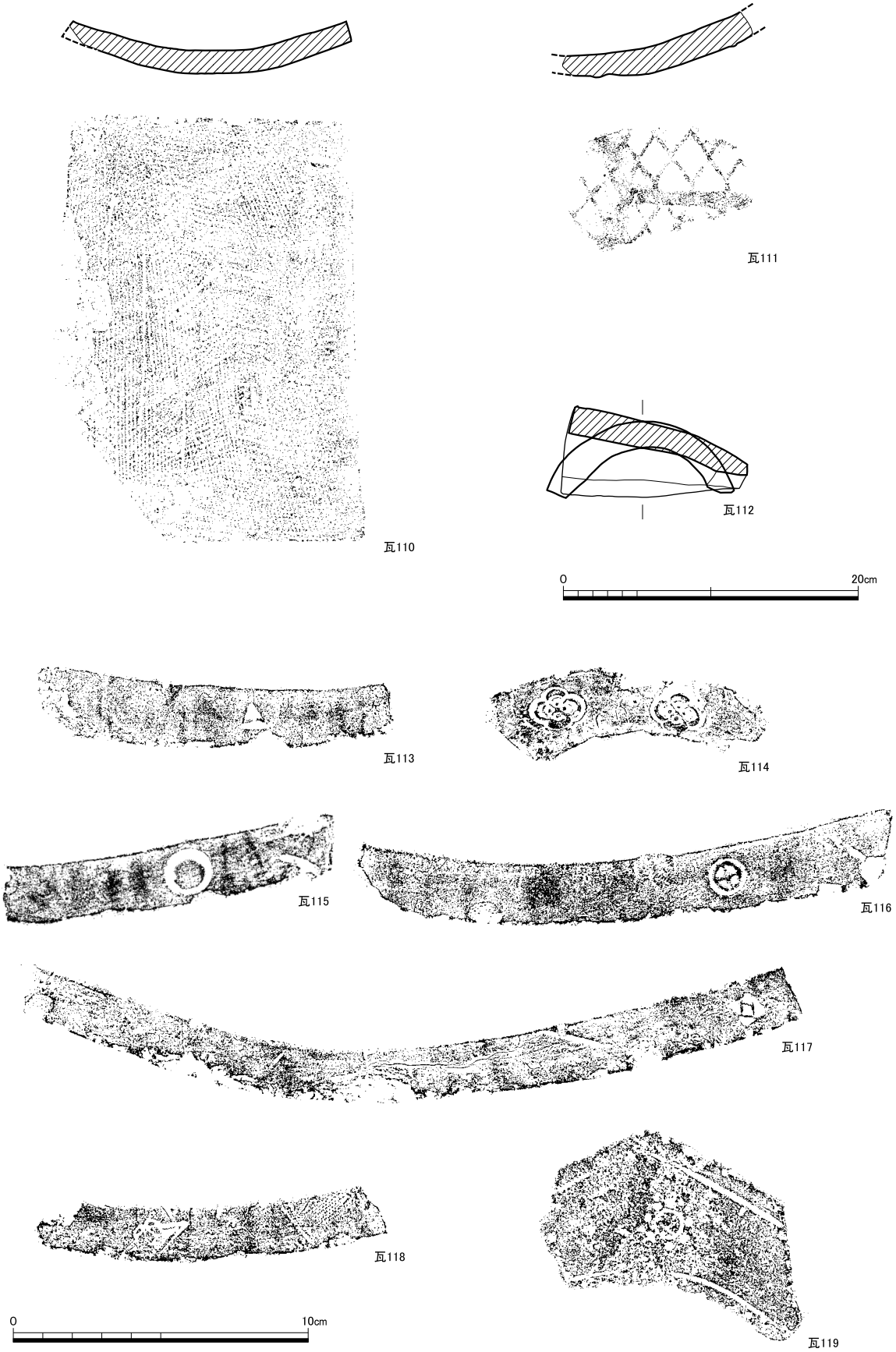
瓦類拓影及び実測図７（１：４）



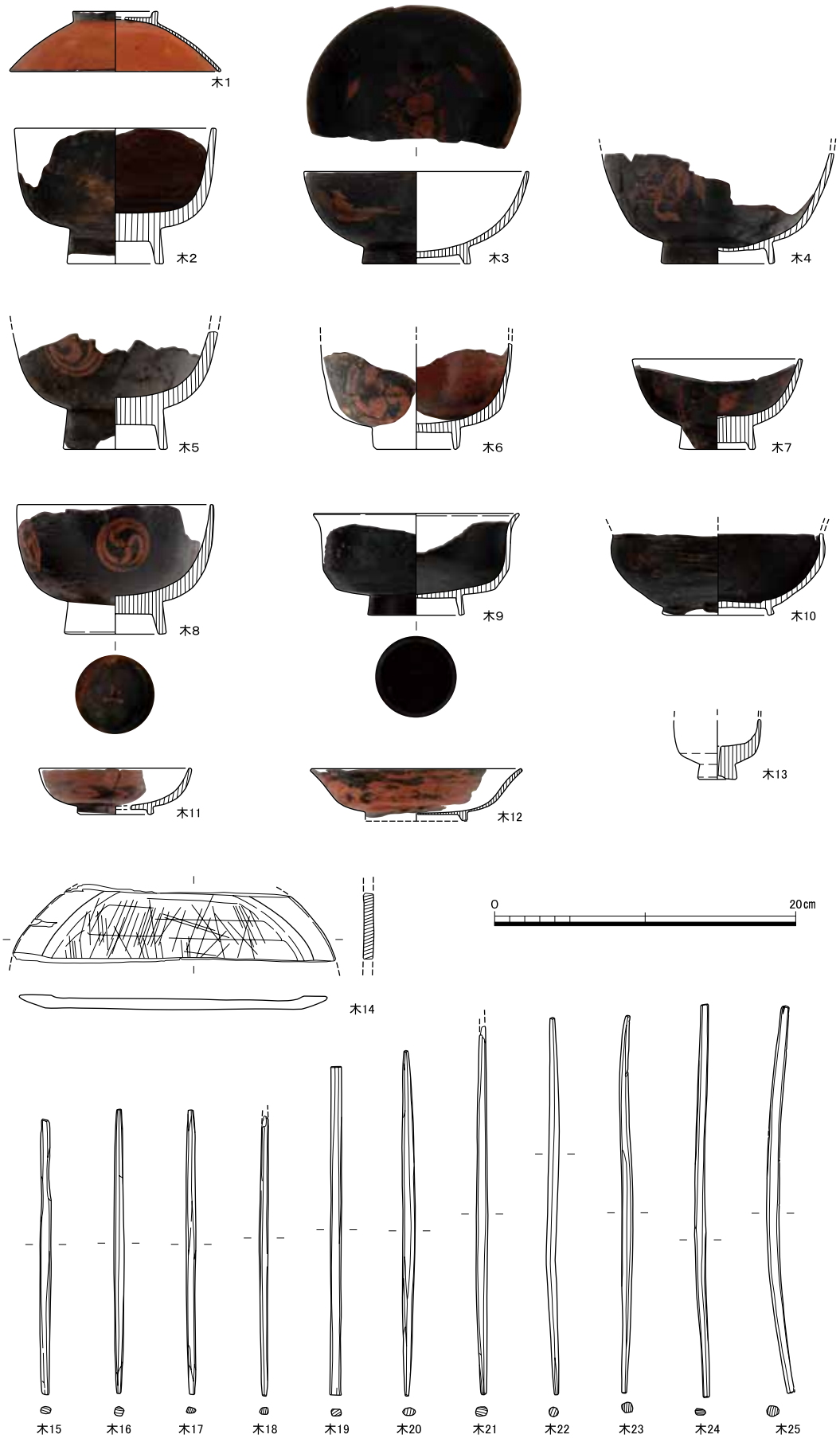


0 20cm

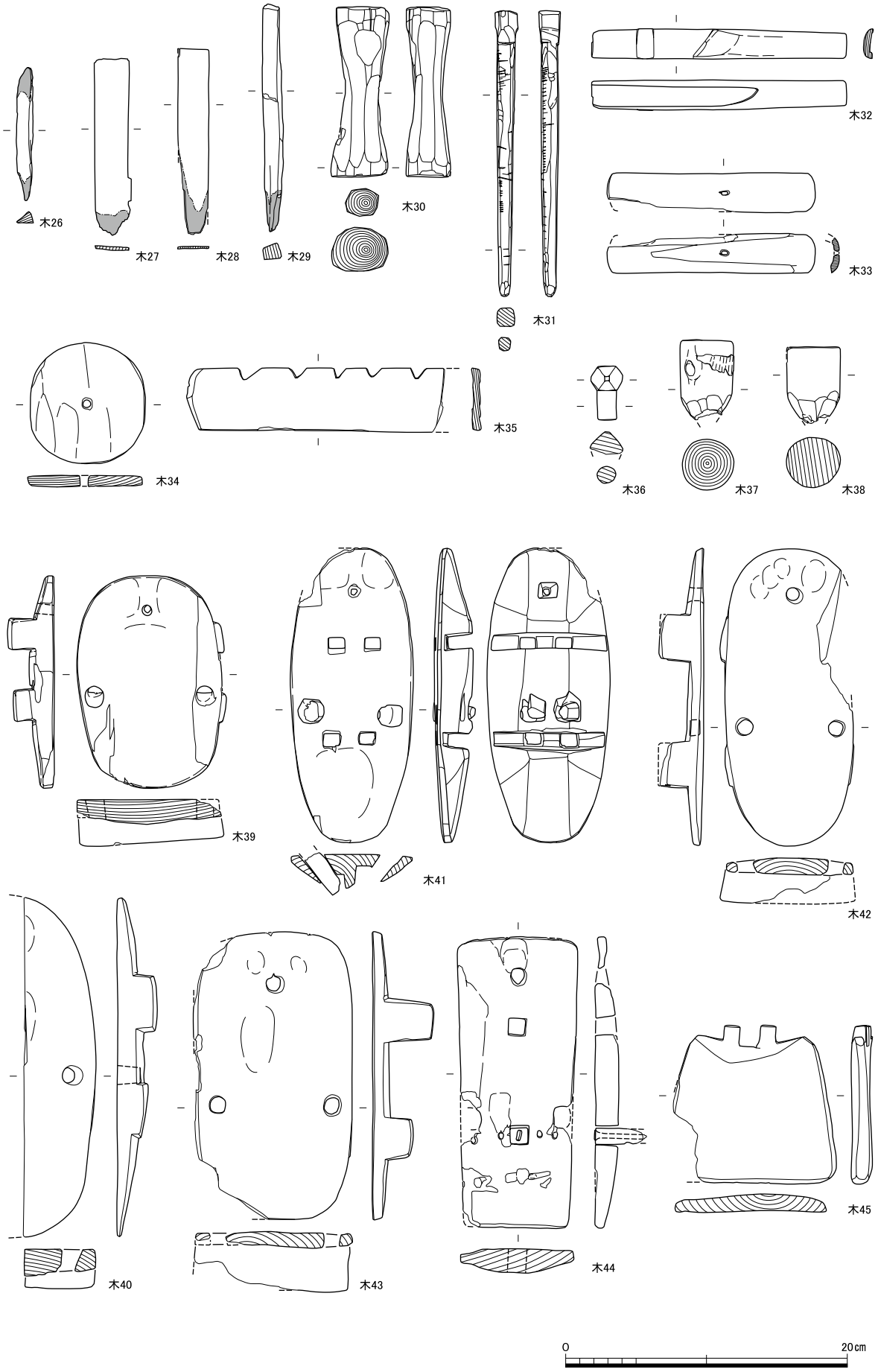
瓦類拓影及び実測図８（１：５）



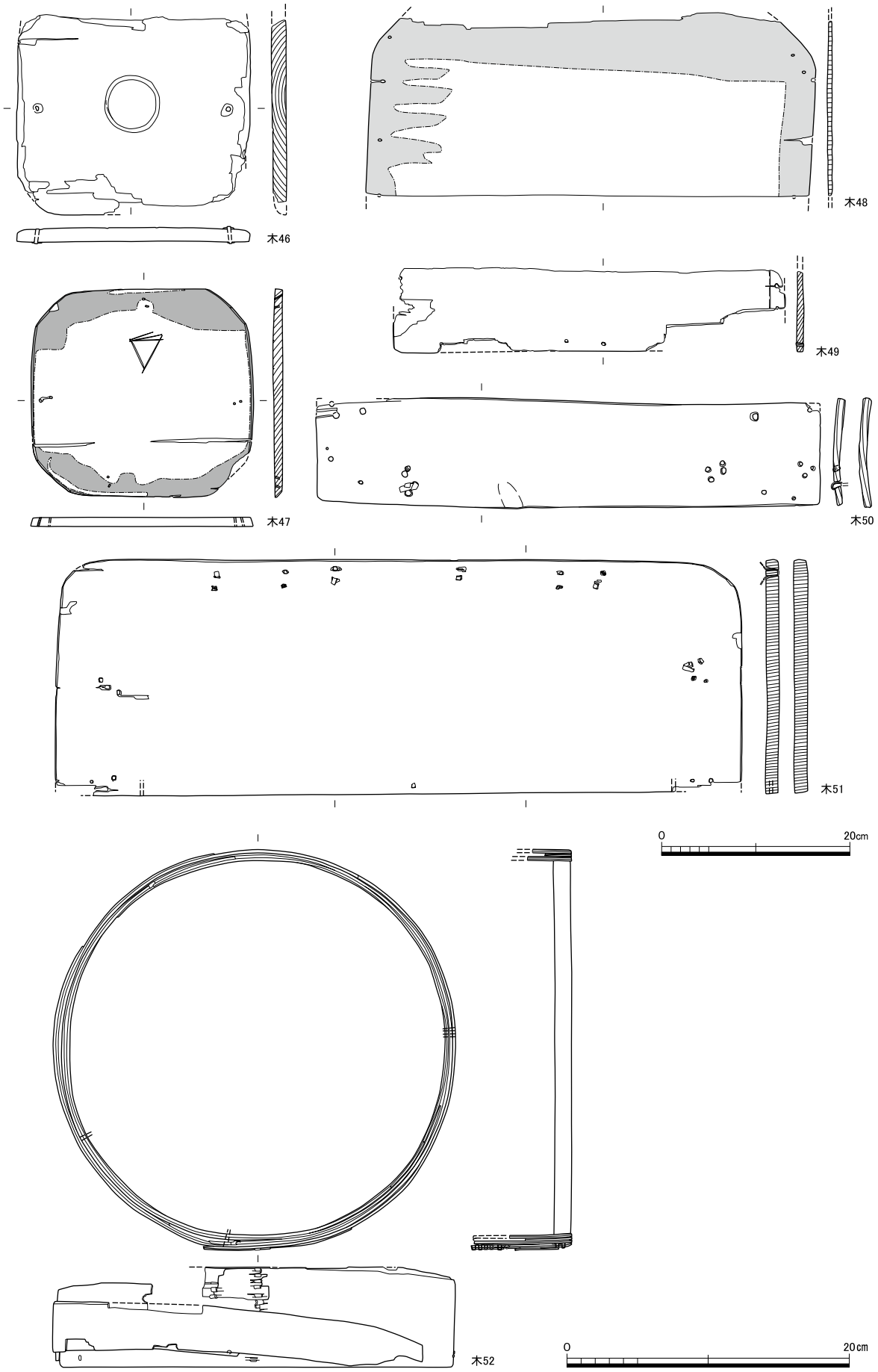
瓦類拓影及び実測図９（１：４）、瓦刻印拓影（１：２）


木1
木2
木3
木4
木5
木6
木7
木8
木9
木10
木11
木12
木13
木14
0
20cm
木15
木16
木17
木18
木19
木20
木21
木22
木23
木24
木25

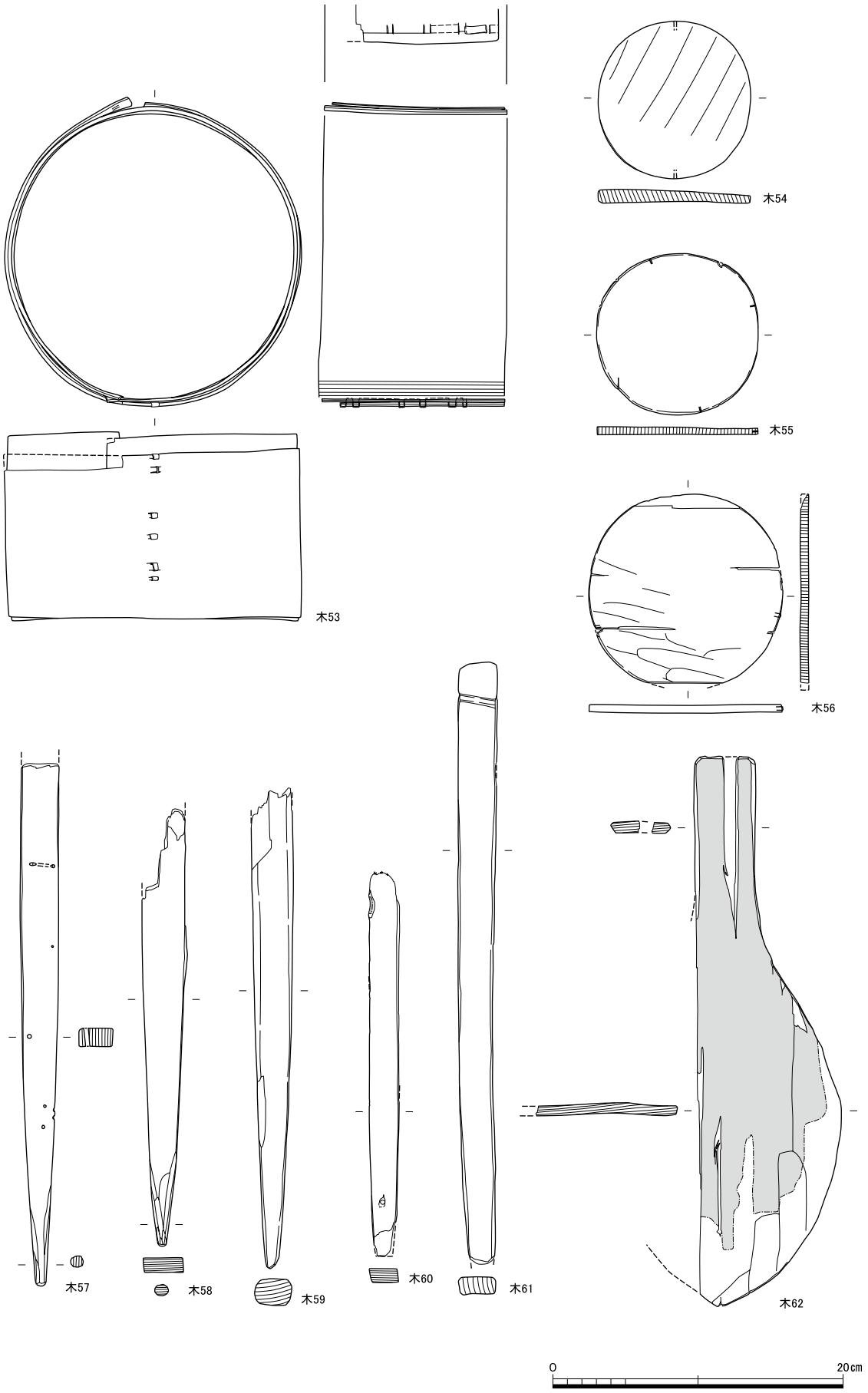
木製品実測図１（１：４）


木26
木27
木28
木29
木30
木31
木32
木33
木34
木35
木36
木37
木38
木39
木40
木41
木42
木43
木44
木45
0
20cm

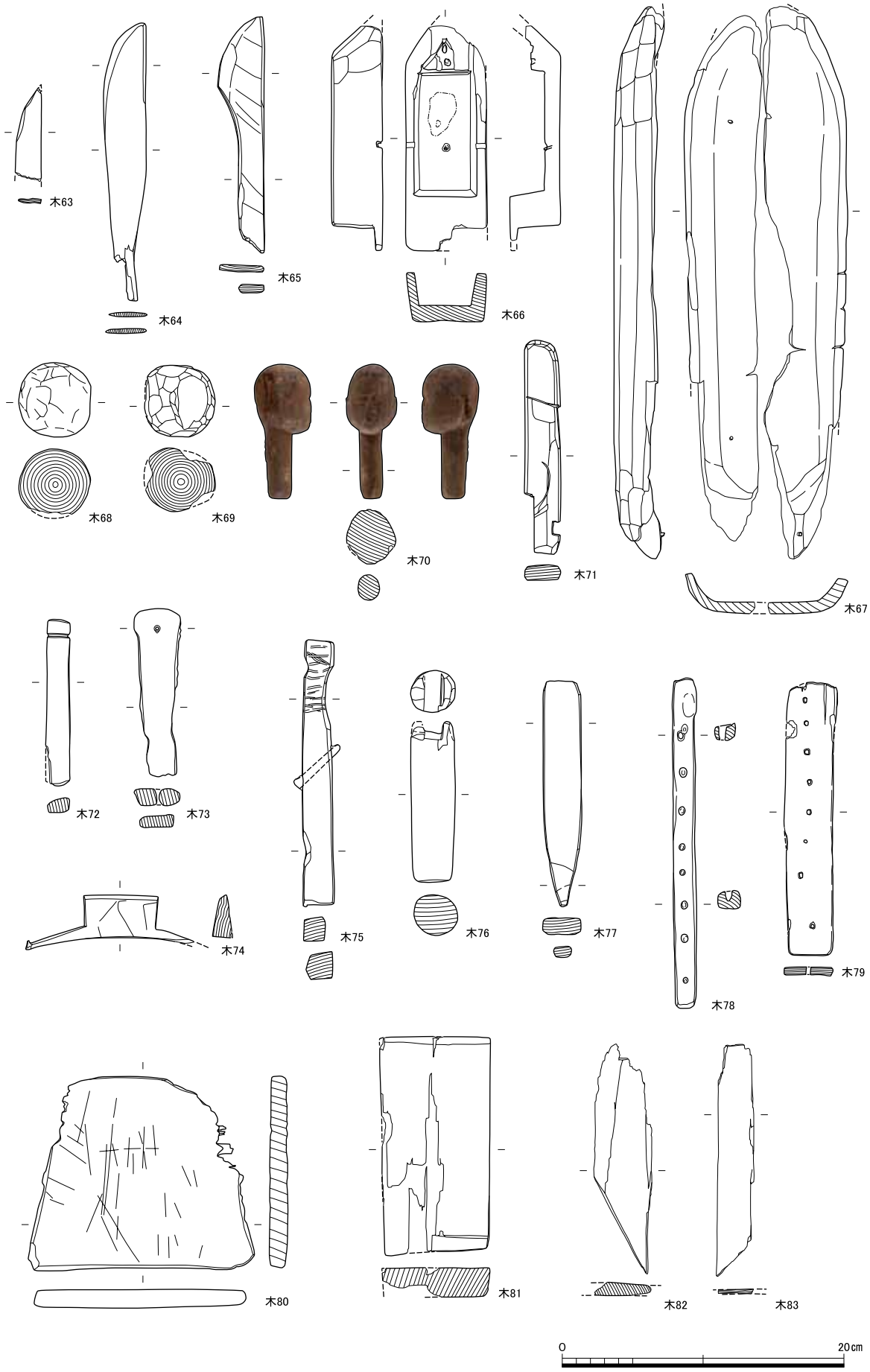
木製品実測図２（１：４）



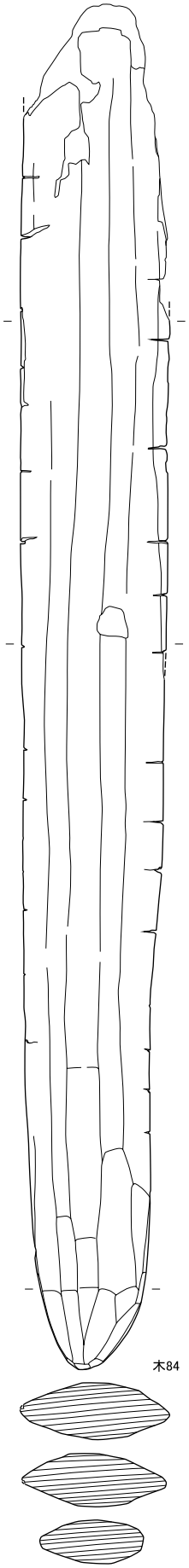
木製品実測図３（１：４、木51のみ１：６）

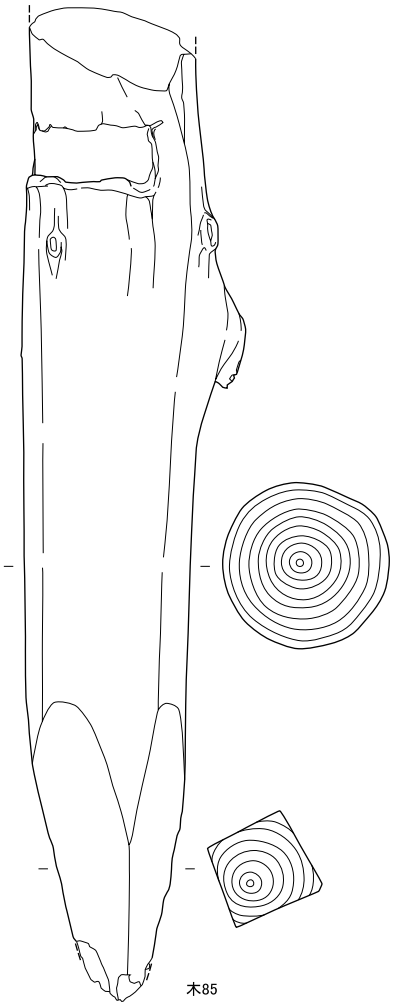


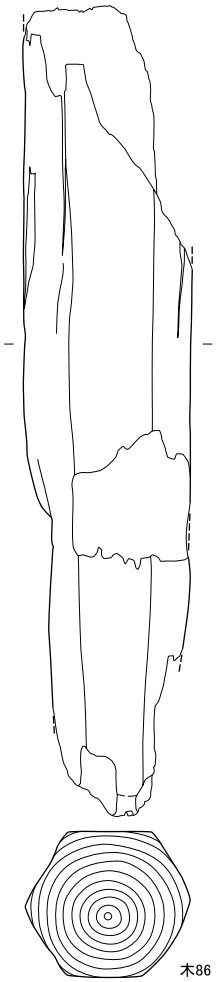
木製品実測図４（１：４）


木63
木64
木65
木66
木67
木68
木69
木70
木71
木72
木73
木74
木75
木76
木77
木78
木79
木80
木81
木82
木83
0
20cm

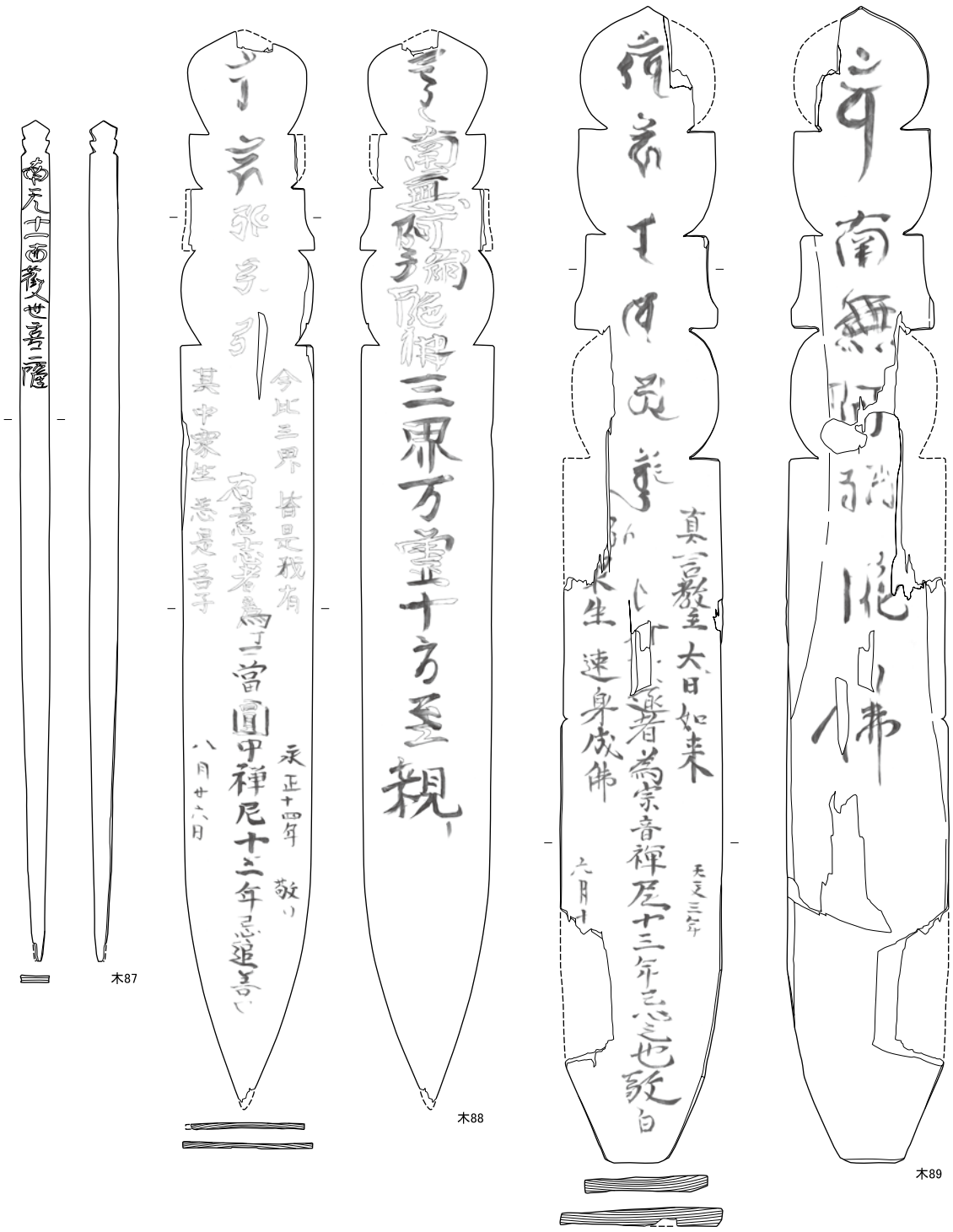
木製品実測図５（１：４）



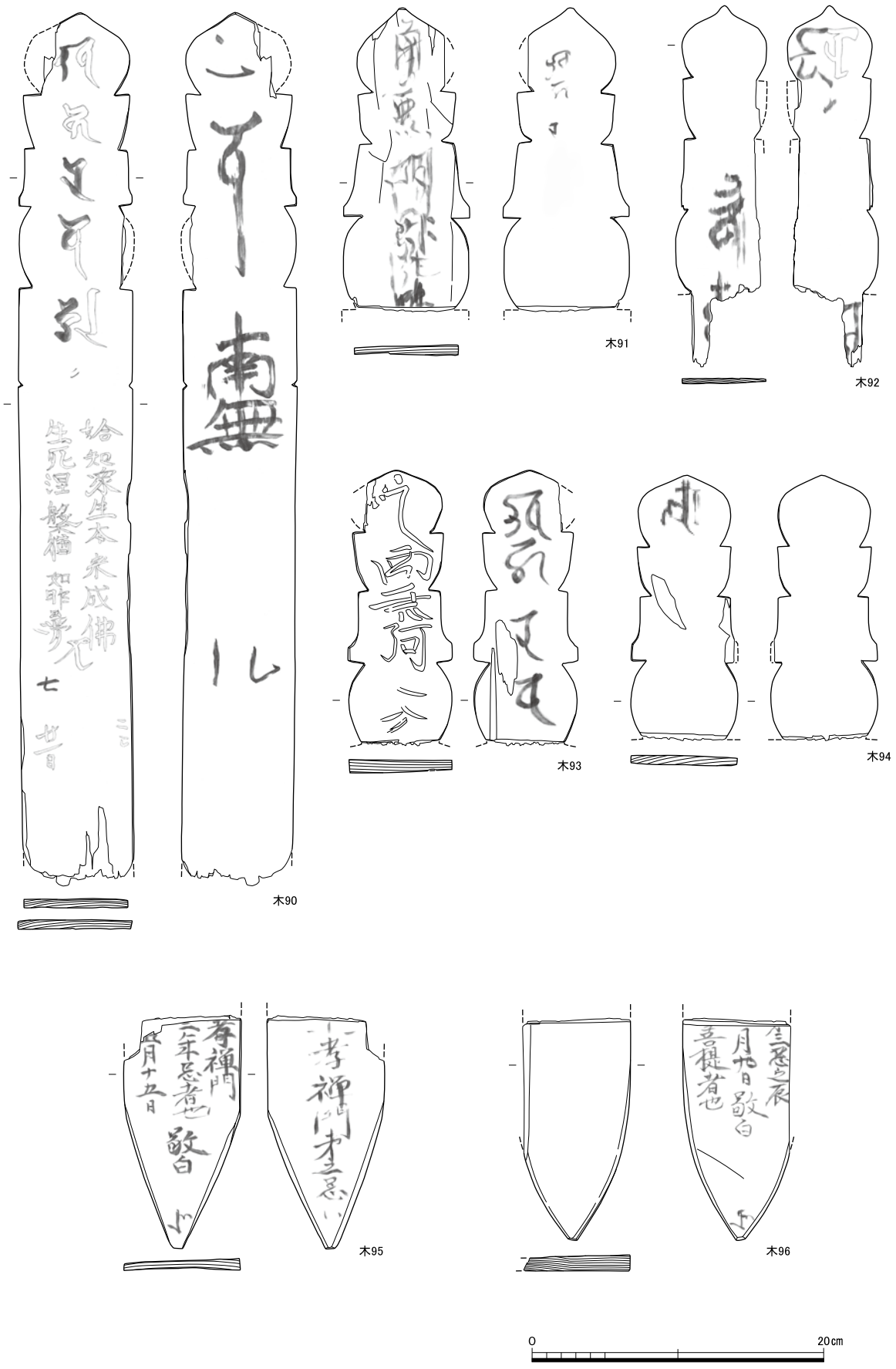




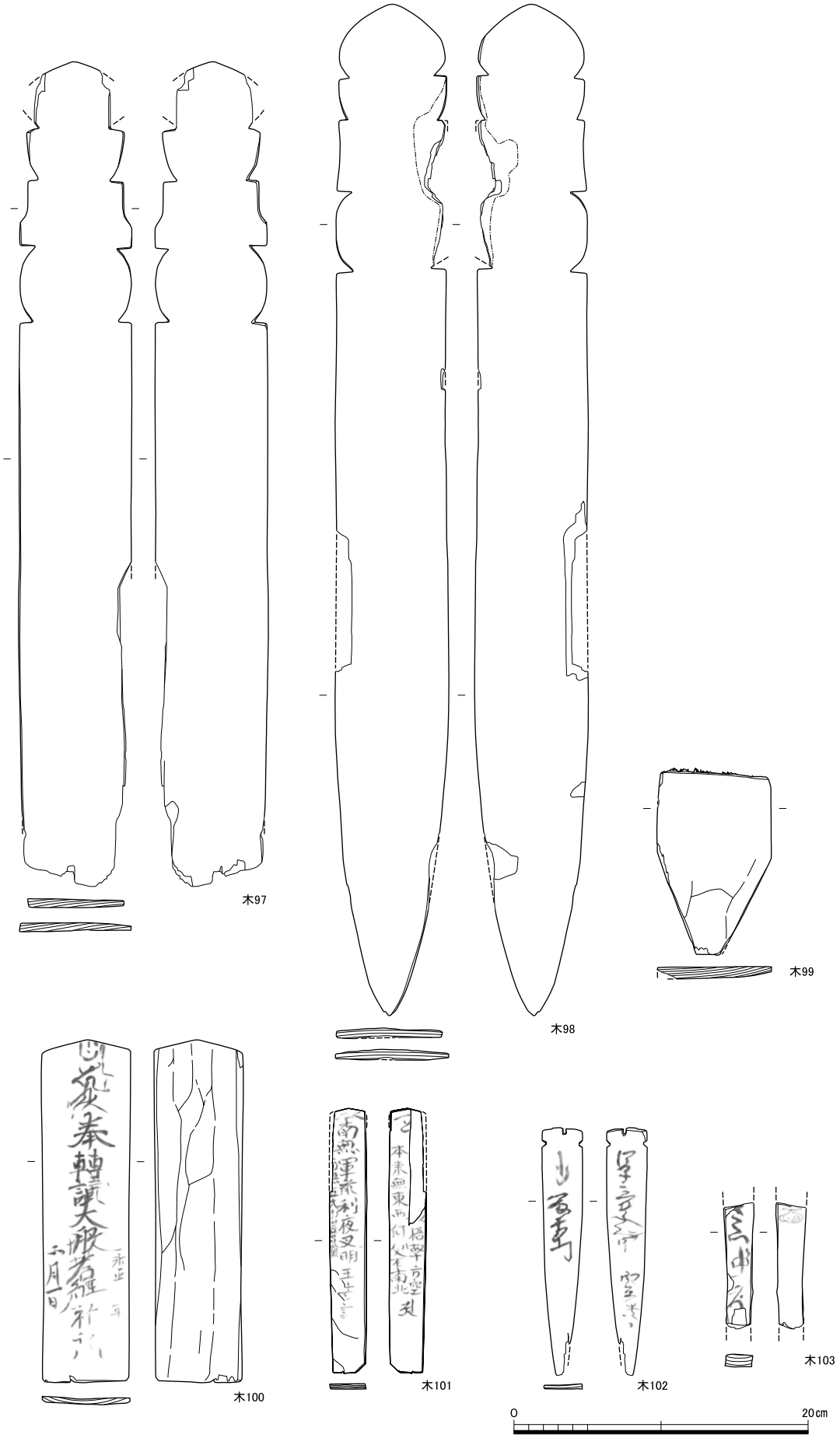
木製品実測図６（１：４）



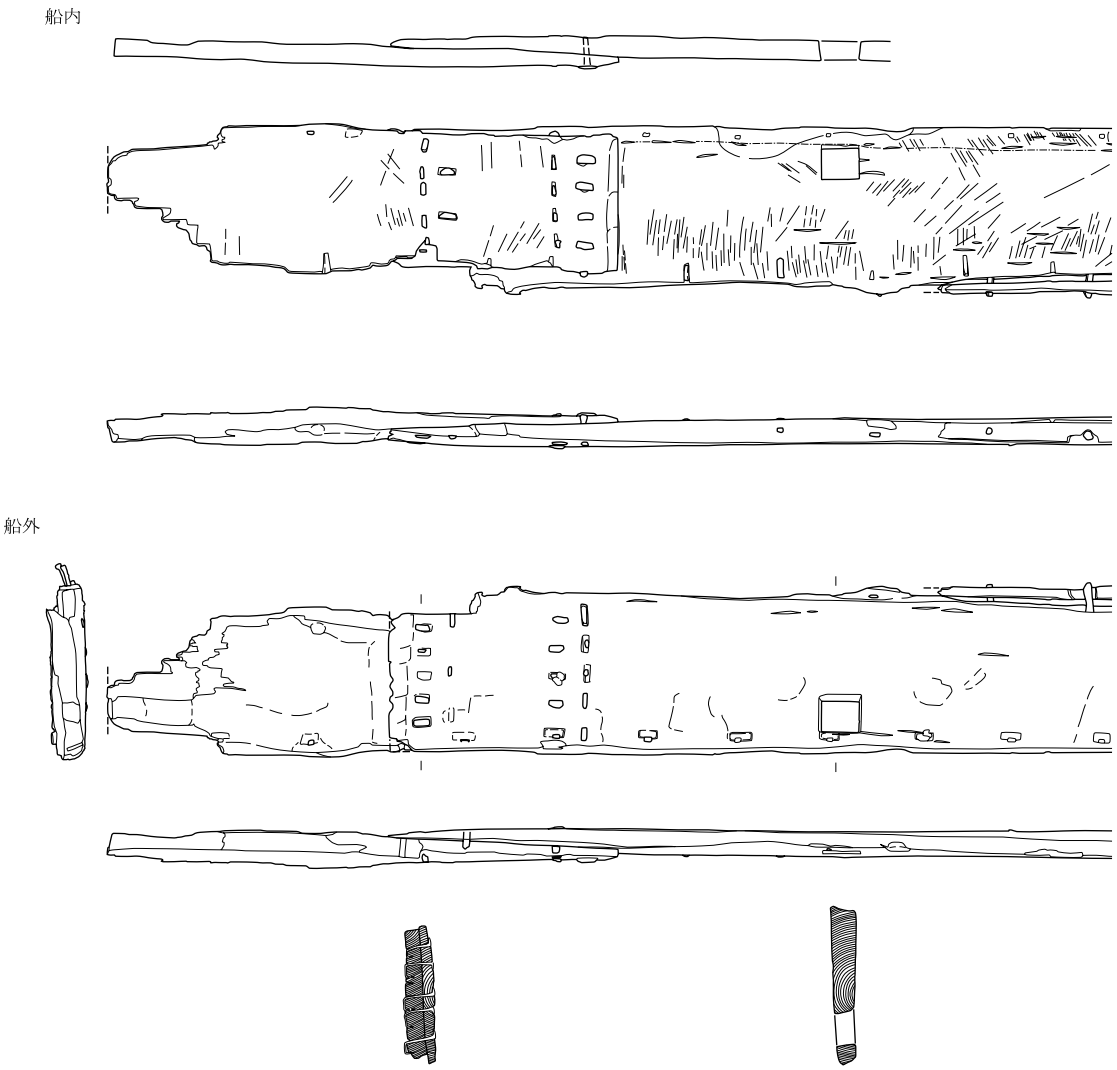
木製品（卒塔婆）実測図１（１：４）

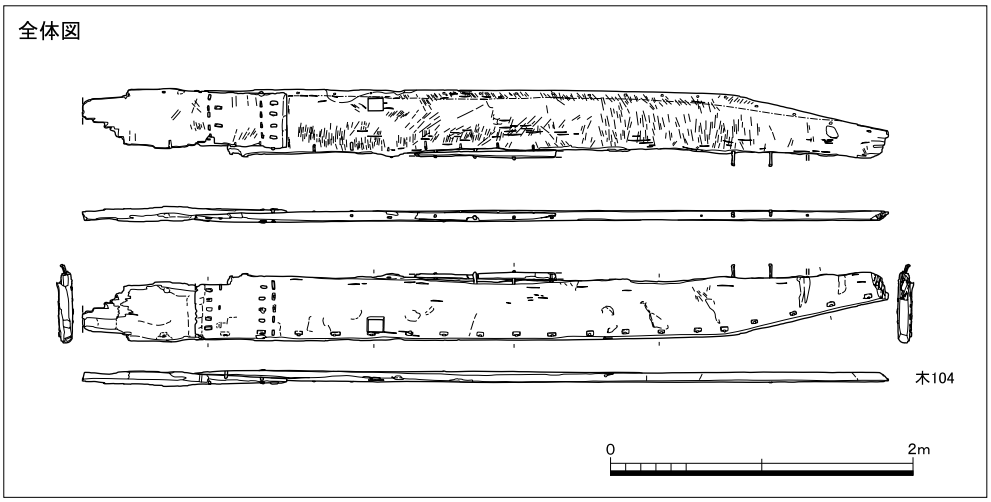


木製品（卒塔婆）実測図２（１：４）

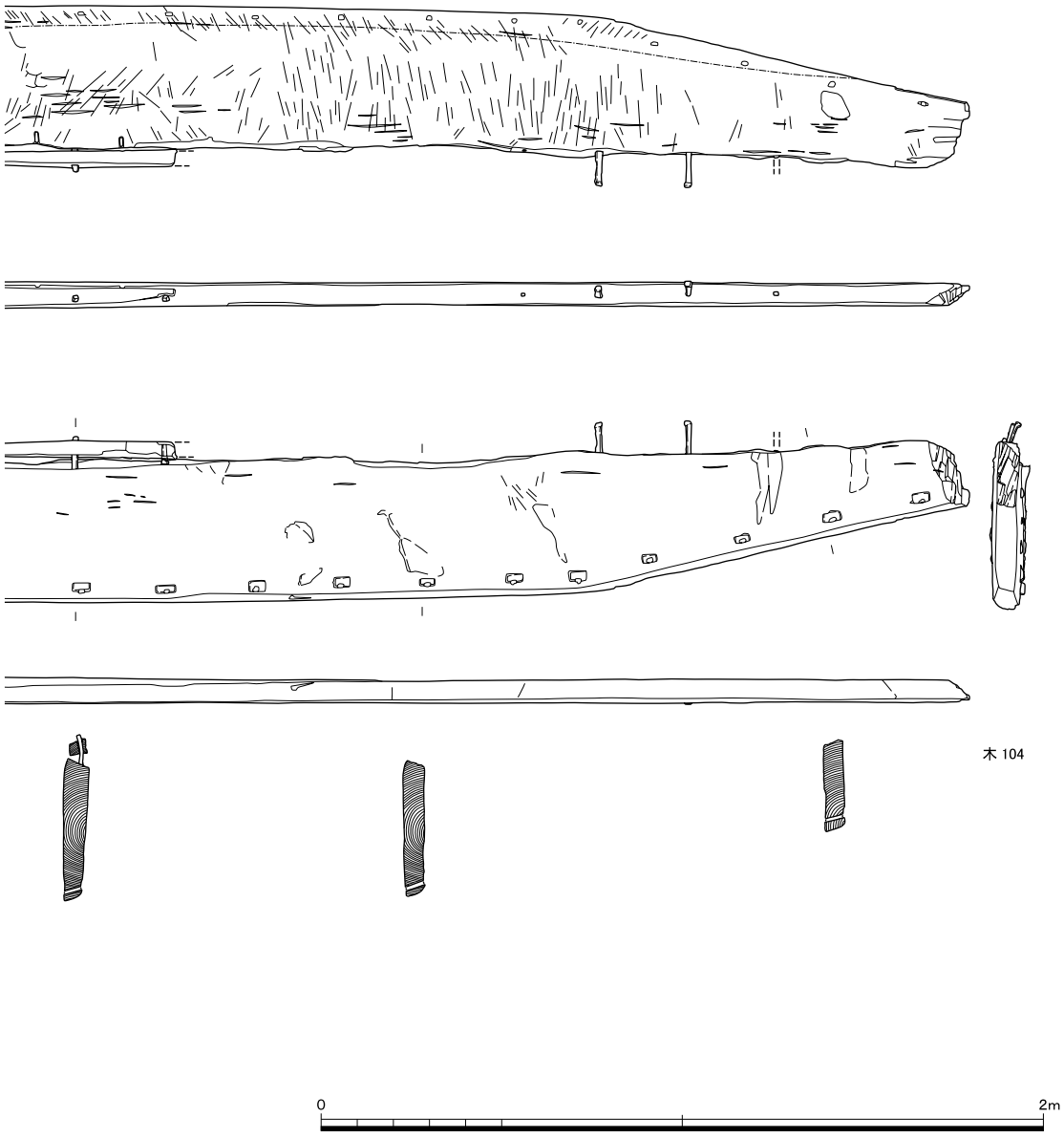


木製品（卒塔婆）実測図３（１：４）

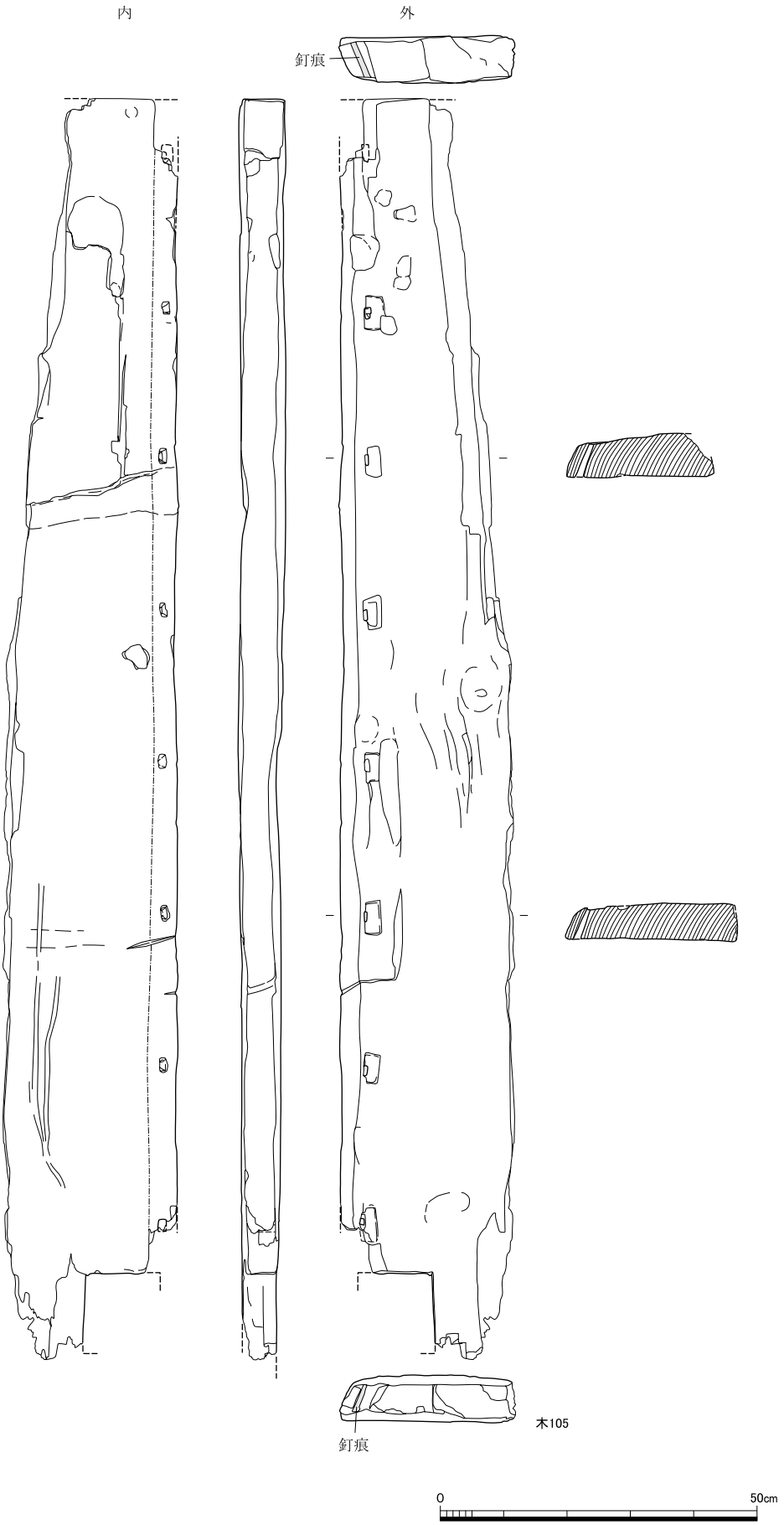




木製品（船材）実測図１－１（１：20）

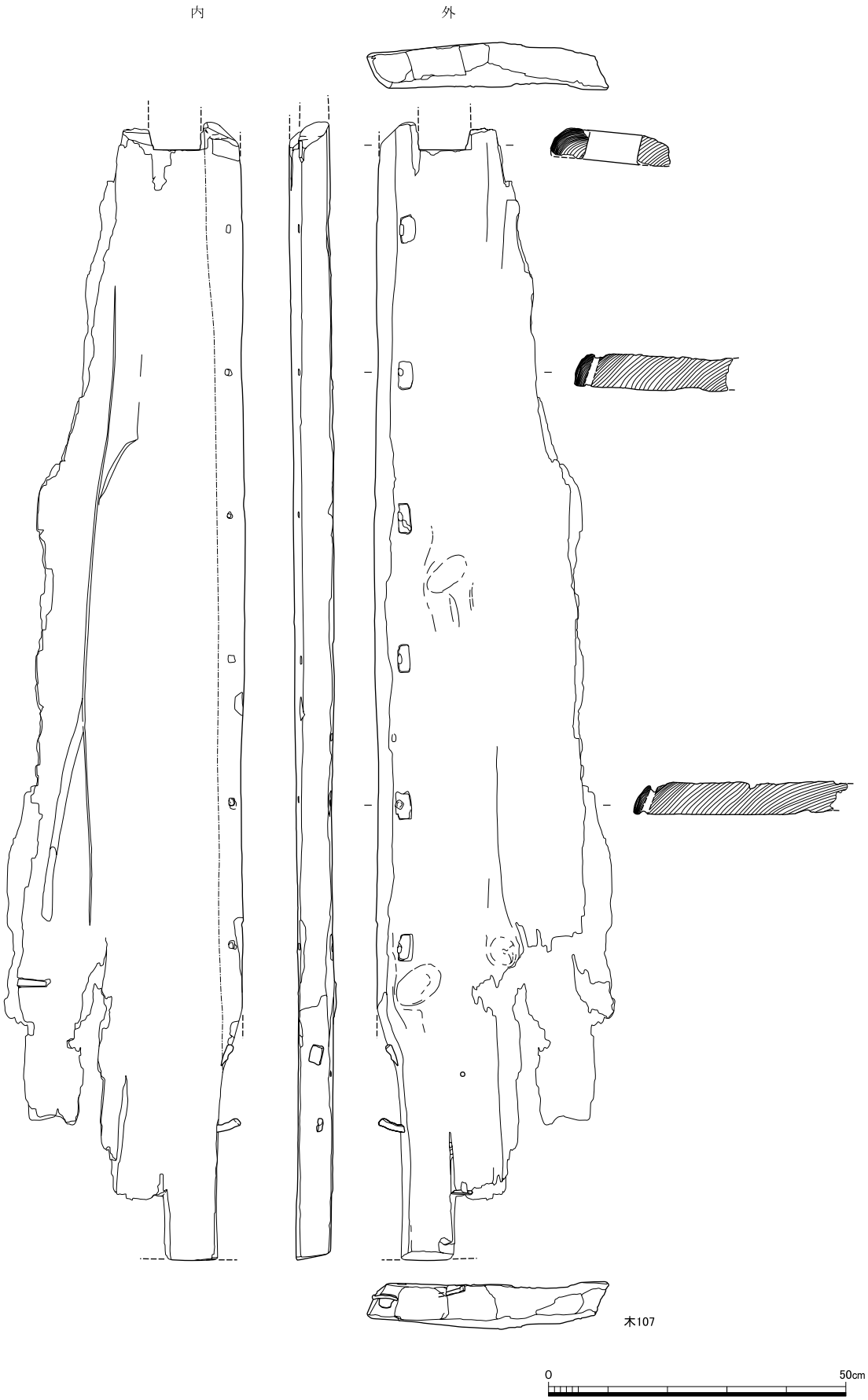


木製品（船材）実測図１－２（１：20）

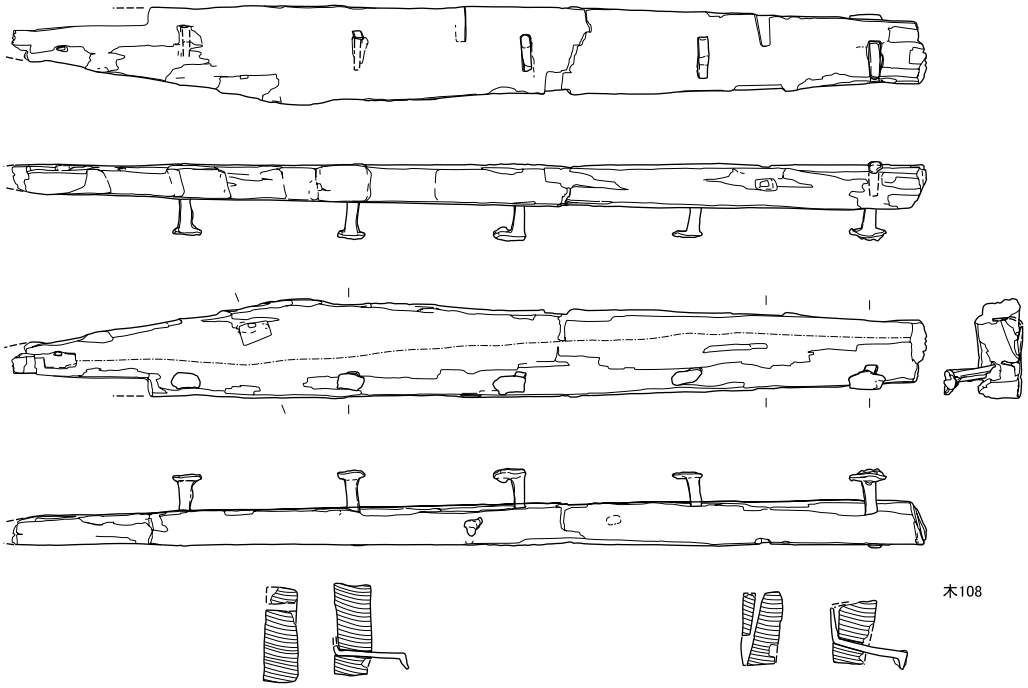


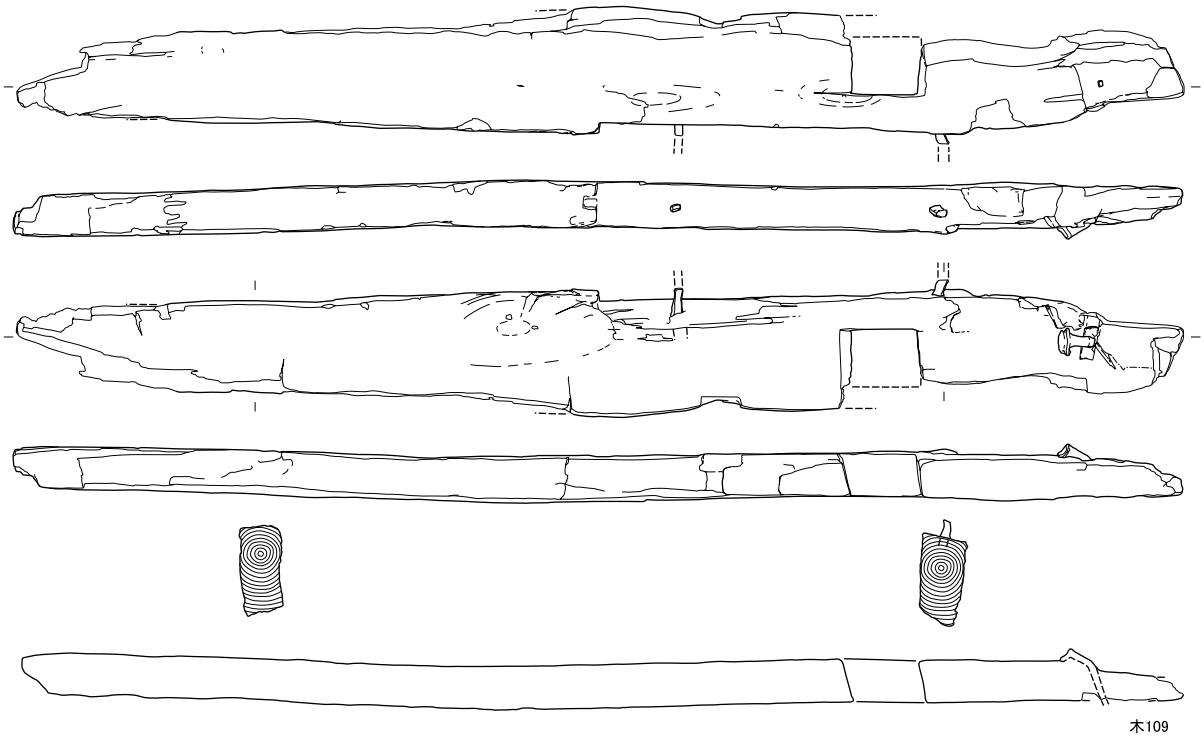
木製品（船材）実測図２（１：10）

木製品（船材）実測図３（１：10）

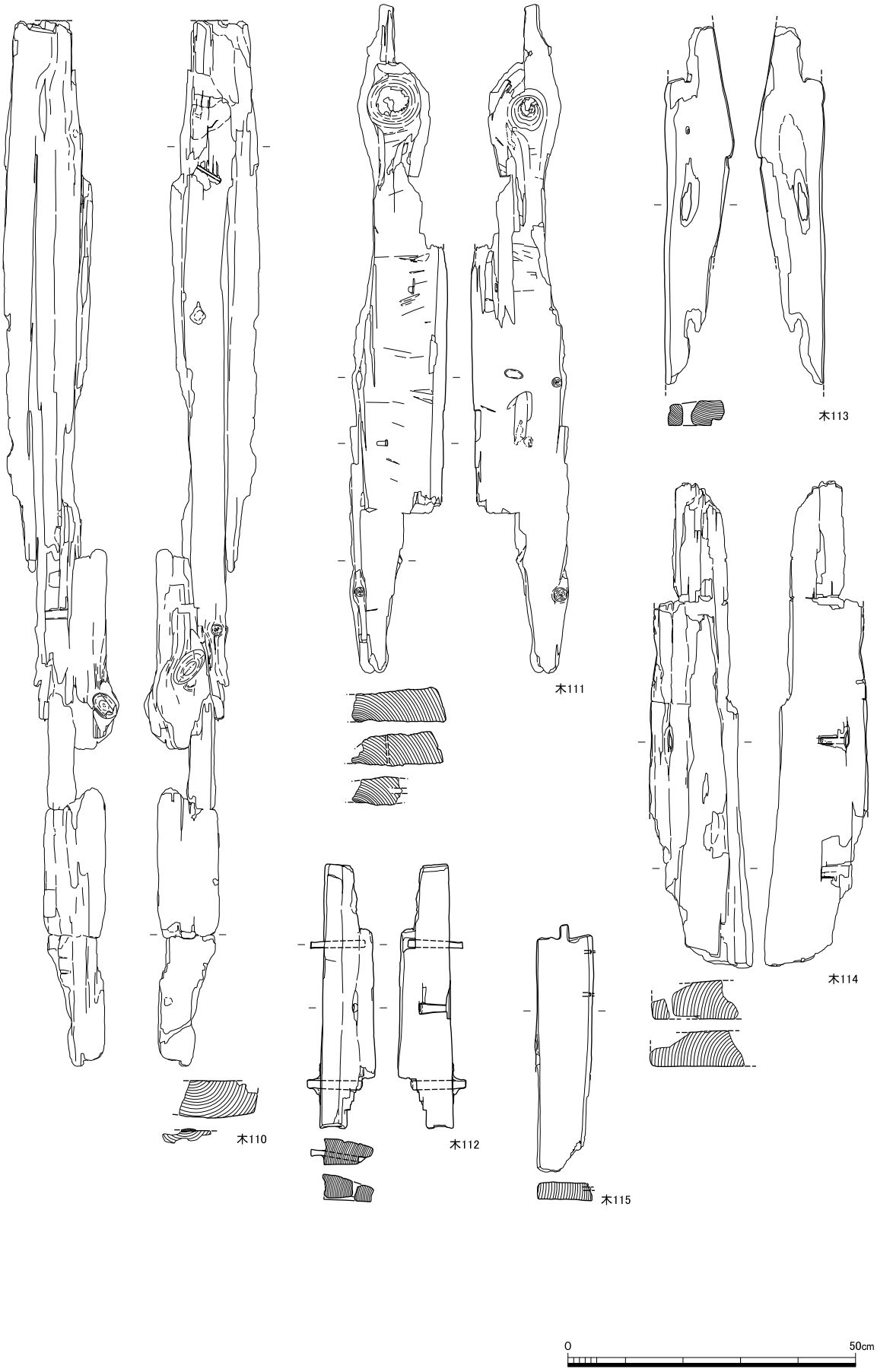


木製品（船材）実測図４（１：10）

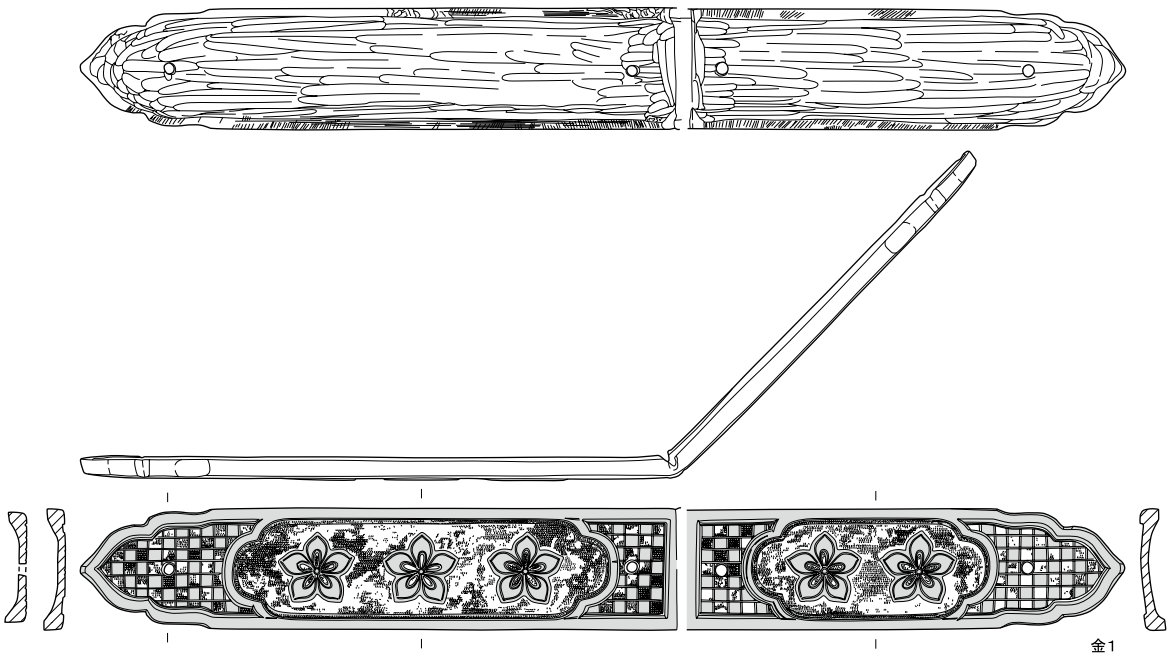


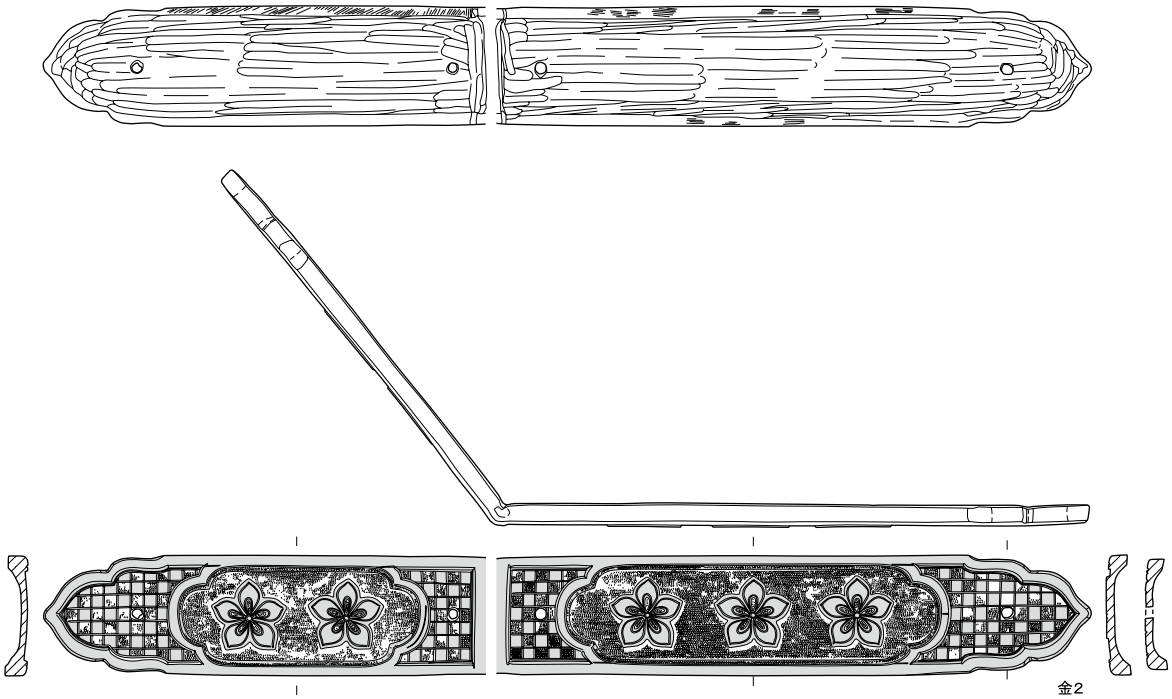


木製品（船材）実測図５（１：10）

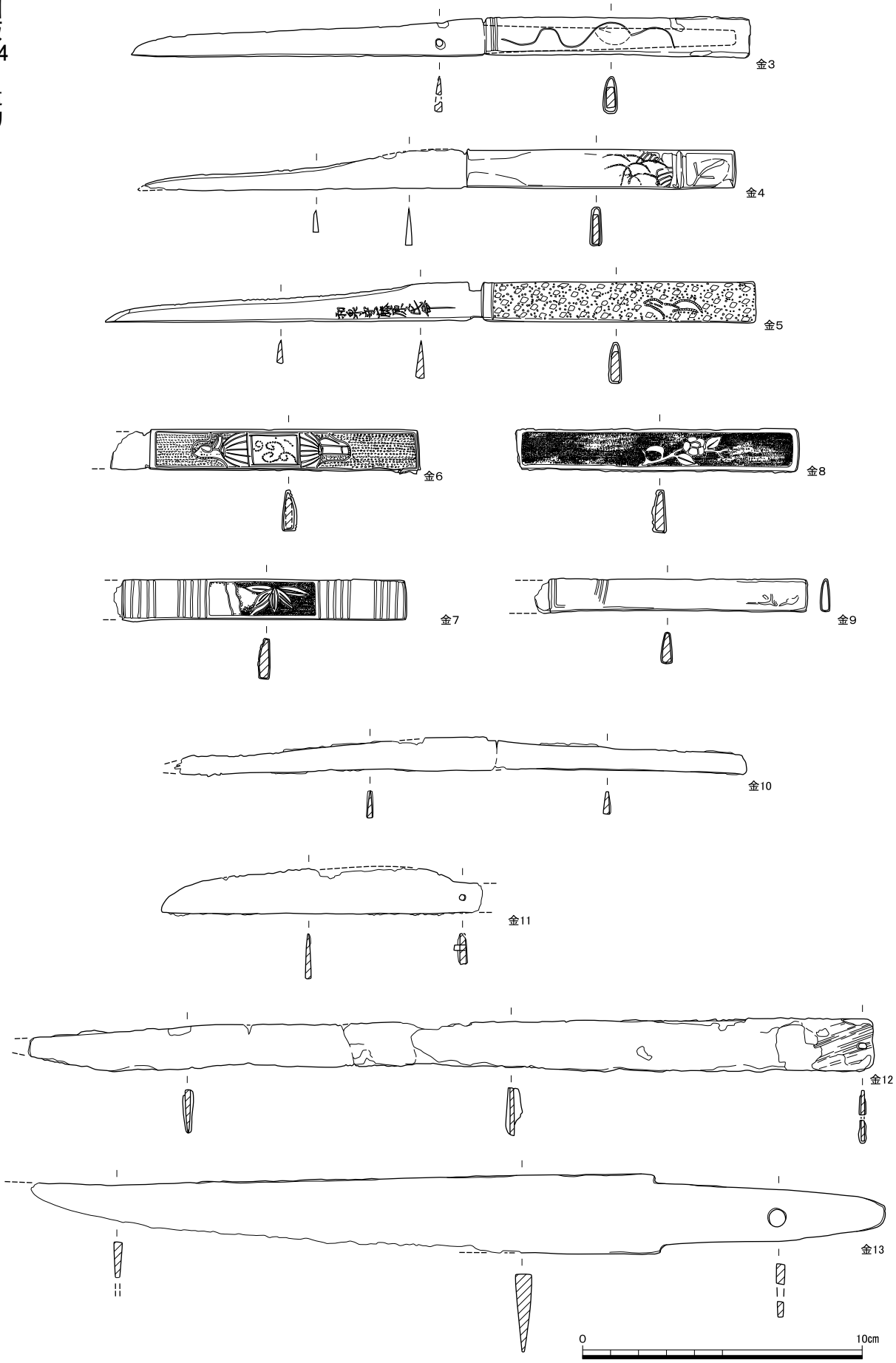


木製品（船材）実測図６（１：10）

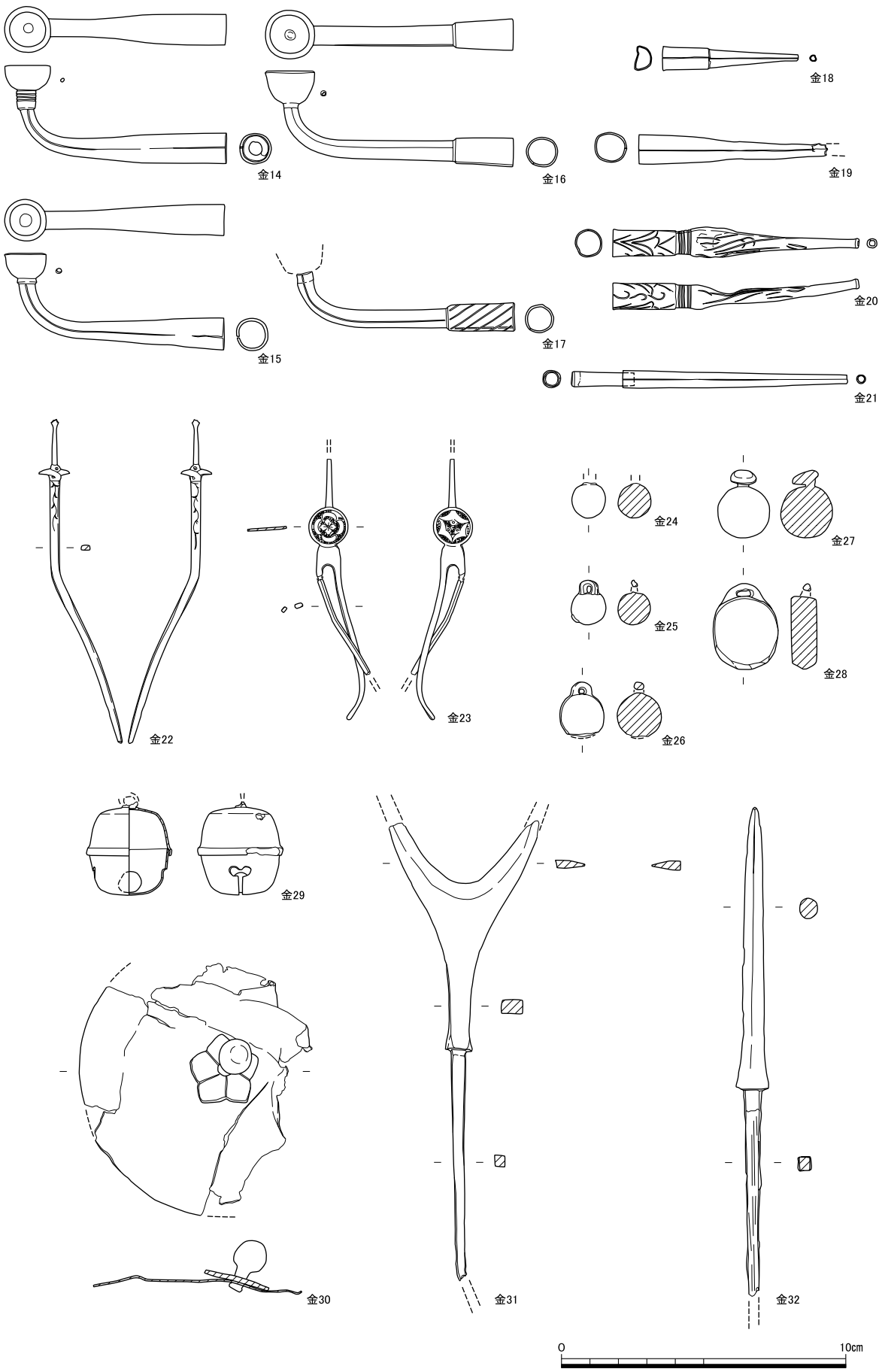




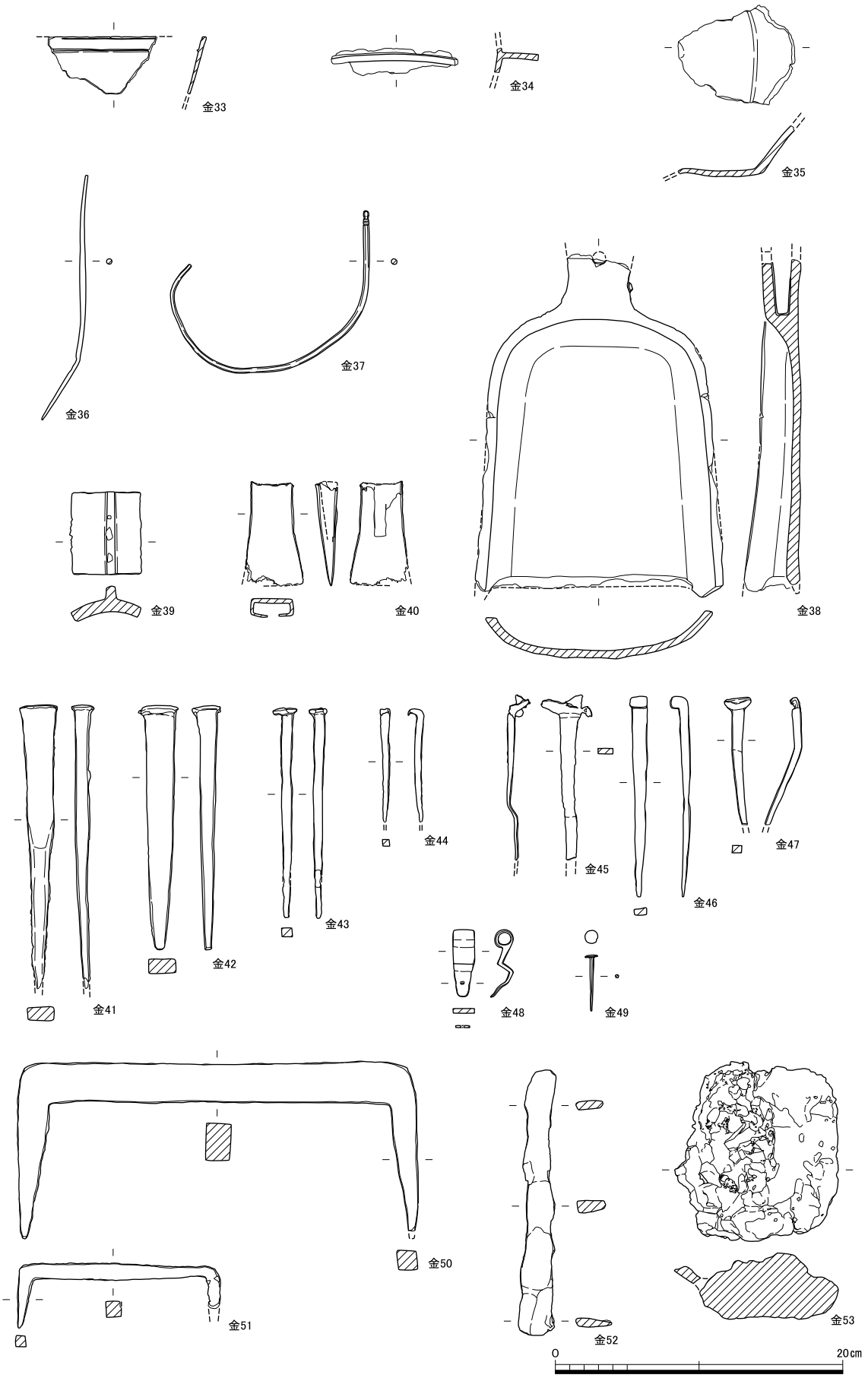
金属製品実測図１（１：２）



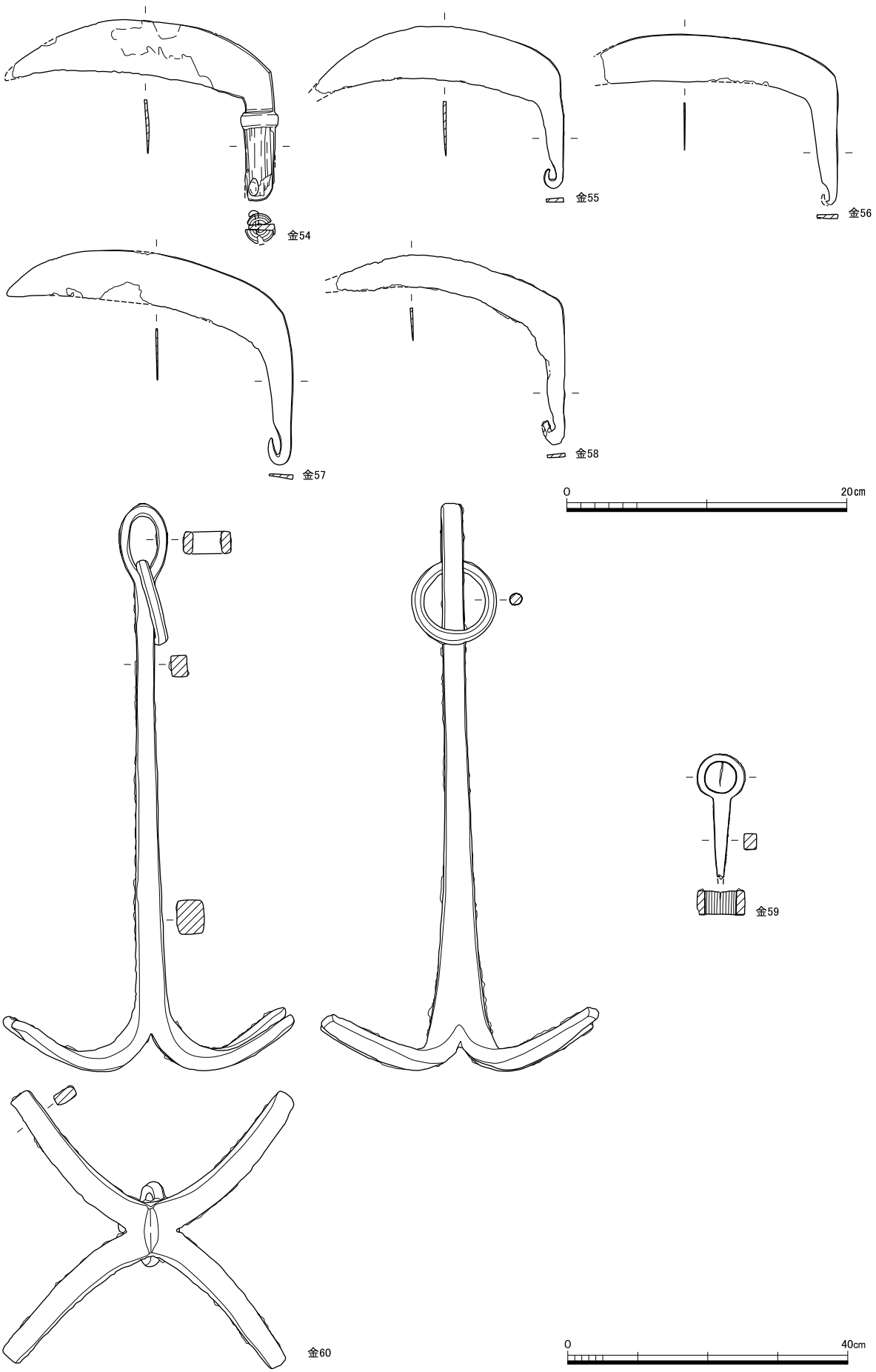
金属製品実測図２（１：２）


金14
金15
金16
金17
金18
金19
金20
金21
金22
金23
金24
金25
金26
金27
金28
金29
金30
金31
金32
0
10cm

金属製品実測図３（１：２）

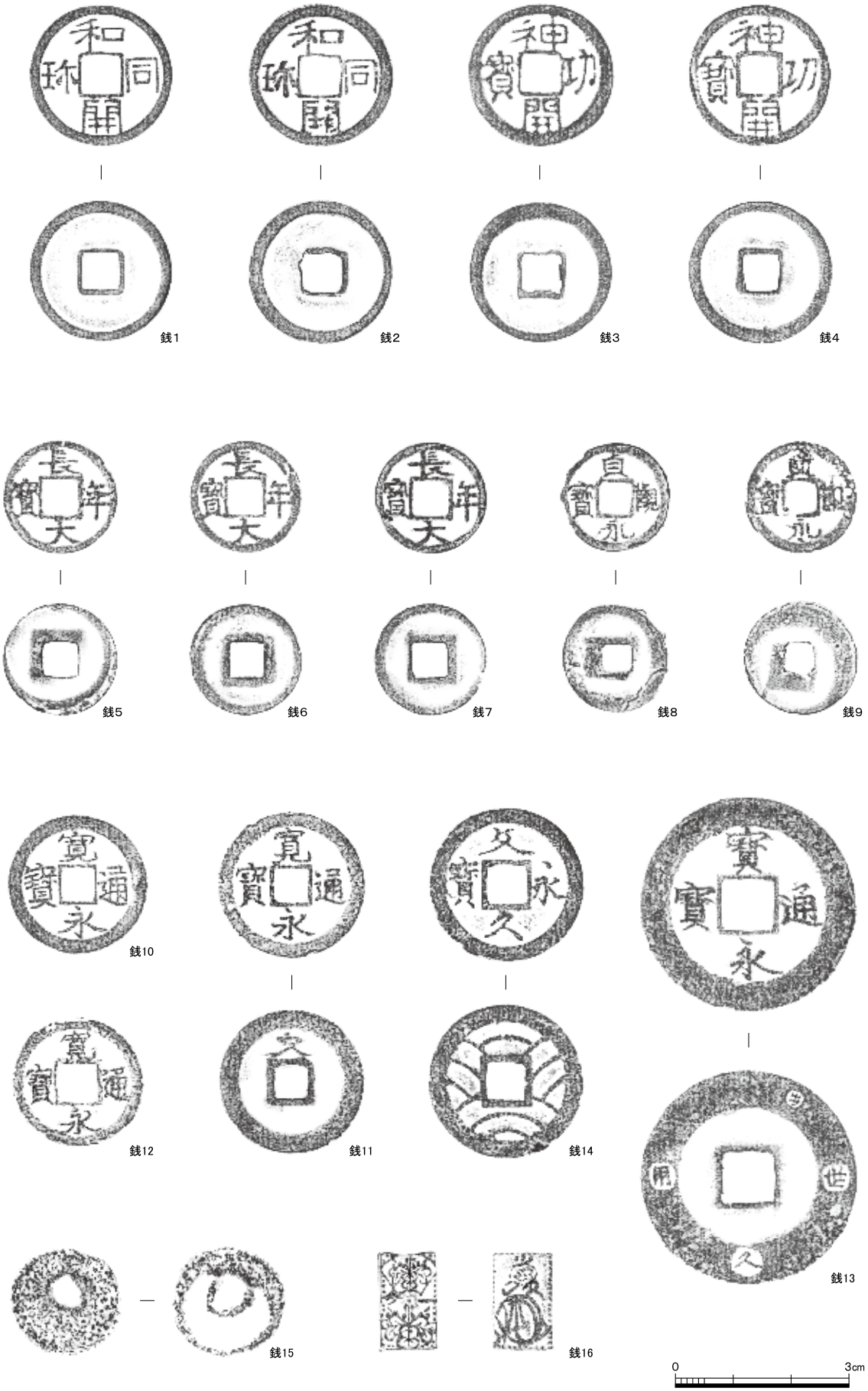

金33
金34
金35
金36
金37
金38
金39
金40
金41
金42
金43
金44
金45
金46
金47
金48
金49
金50
金51
金52
金53
0
20cm

金属製品実測図４（１：４）

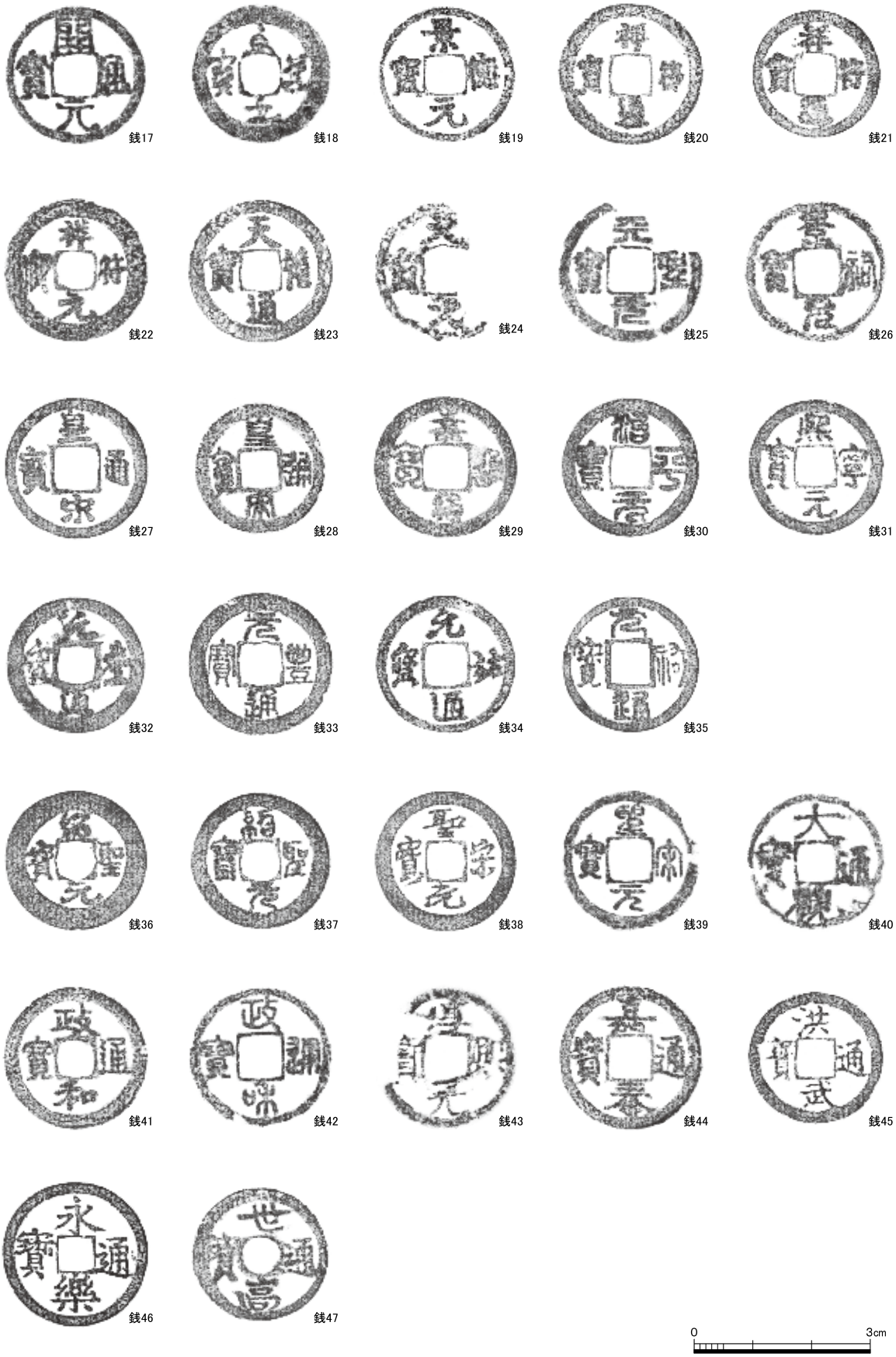


金属製品実測図５（１：４、金59・60のみ１：８）

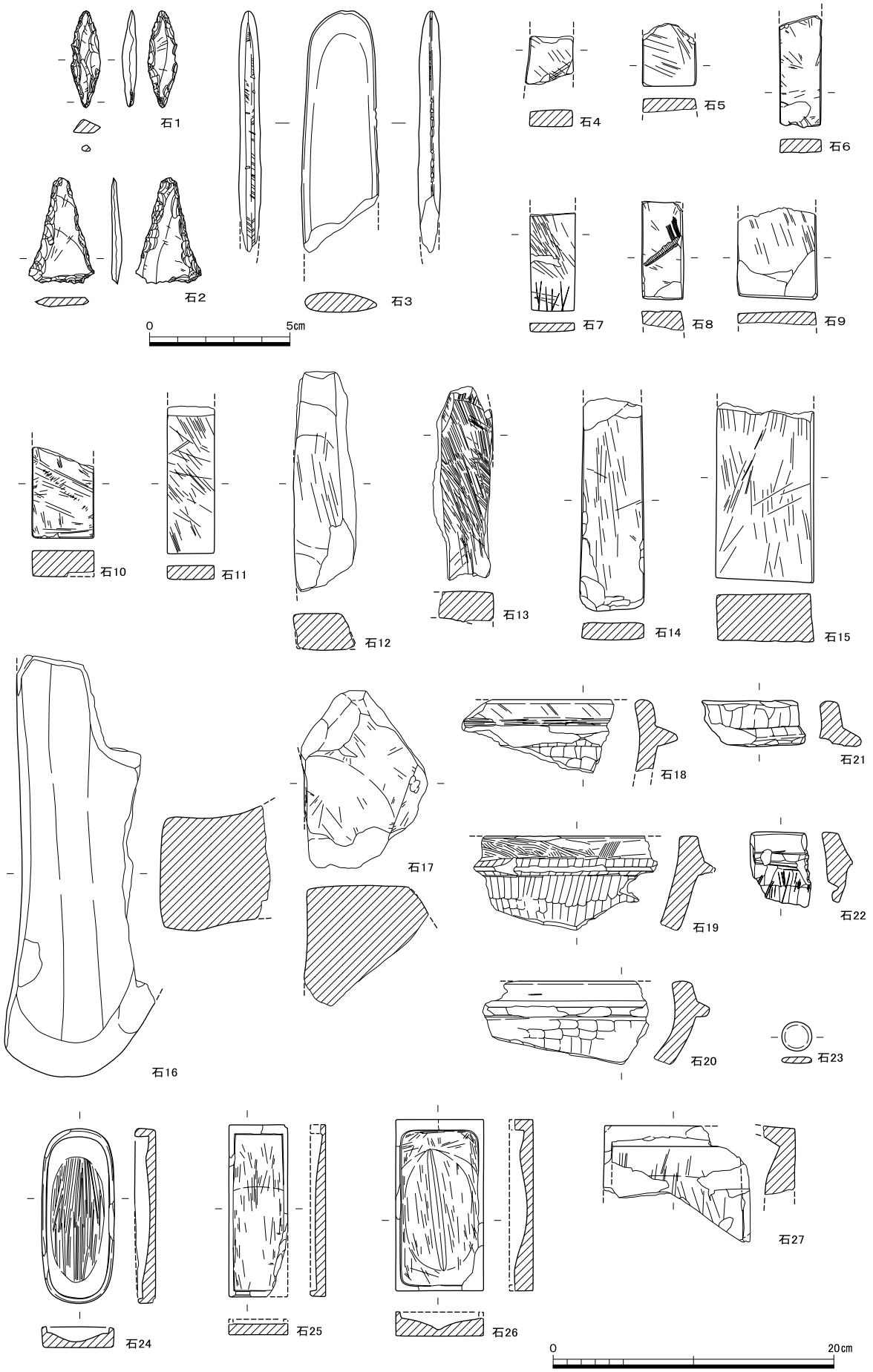
図版128　遺物



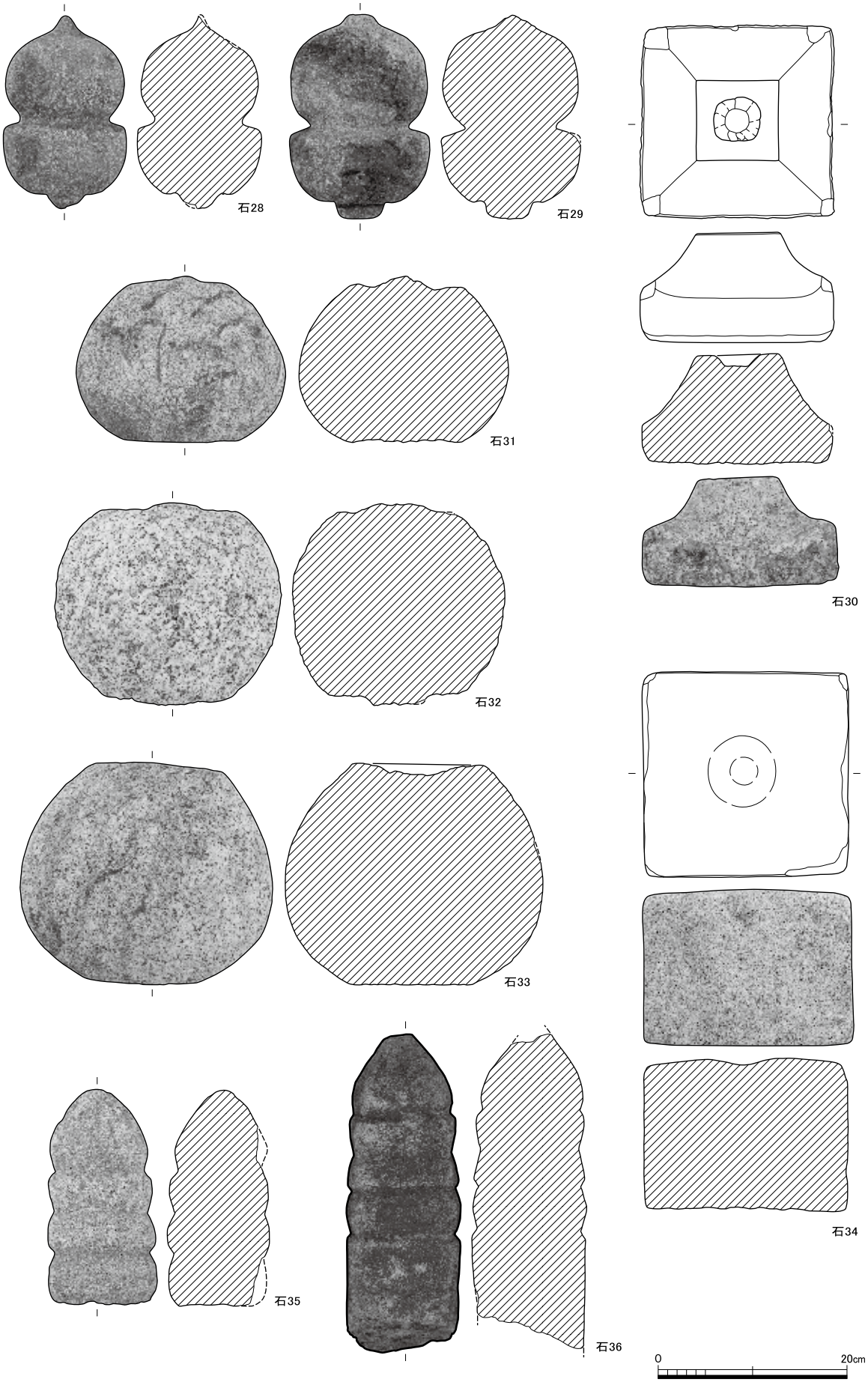
銭貨拓影１（１：１）


錢17
錢18
錢19
錢20
錢21
錢22
錢23
錢24
錢25
錢26
錢27
錢28
錢29
錢30
錢31
錢32
錢33
錢34
錢35
錢36
錢37
錢38
錢39
錢40
錢41
錢42
錢43
錢44
錢45
錢46
錢47
0
3cm

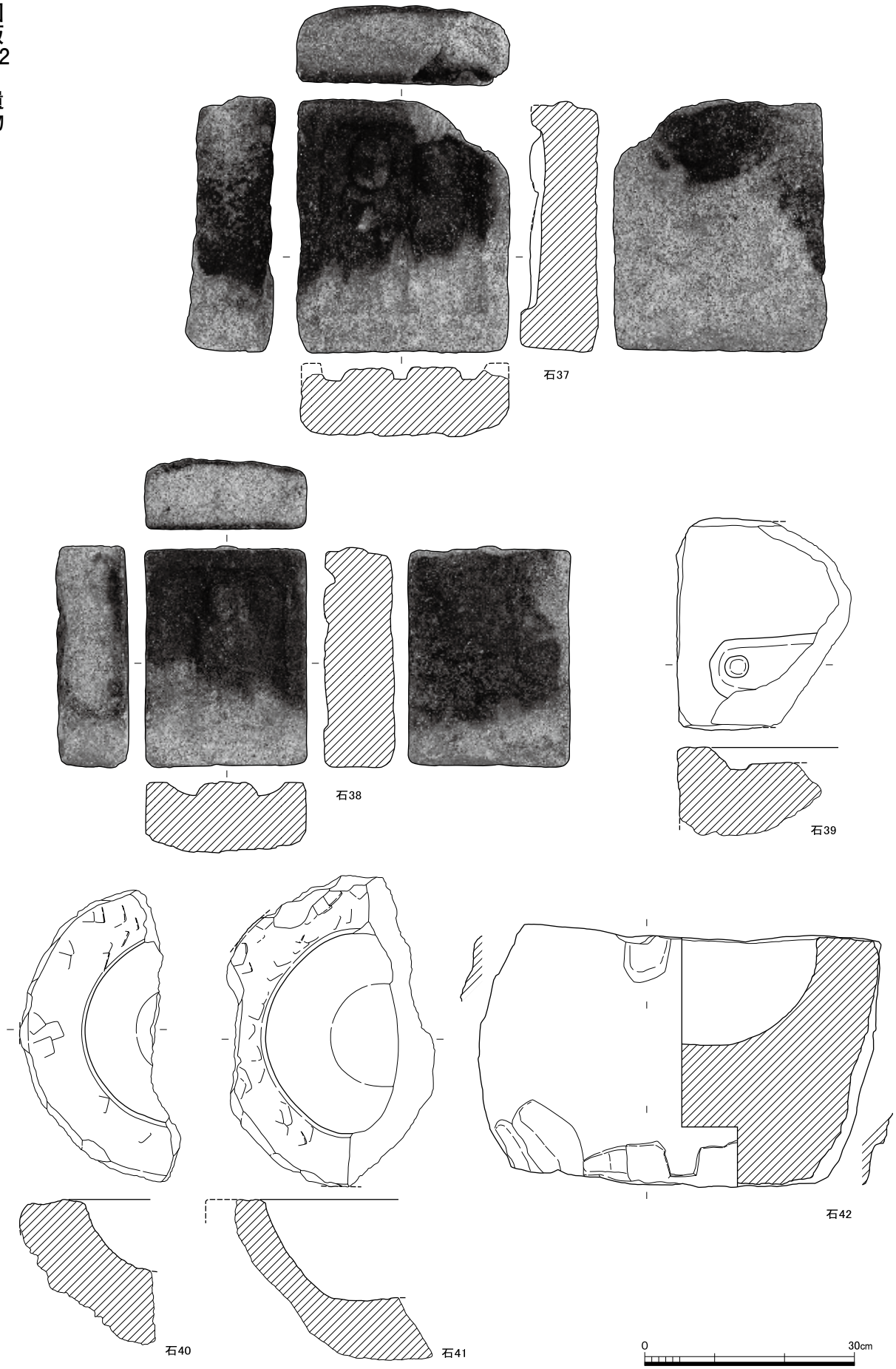
錢貨拓影２（１：１）



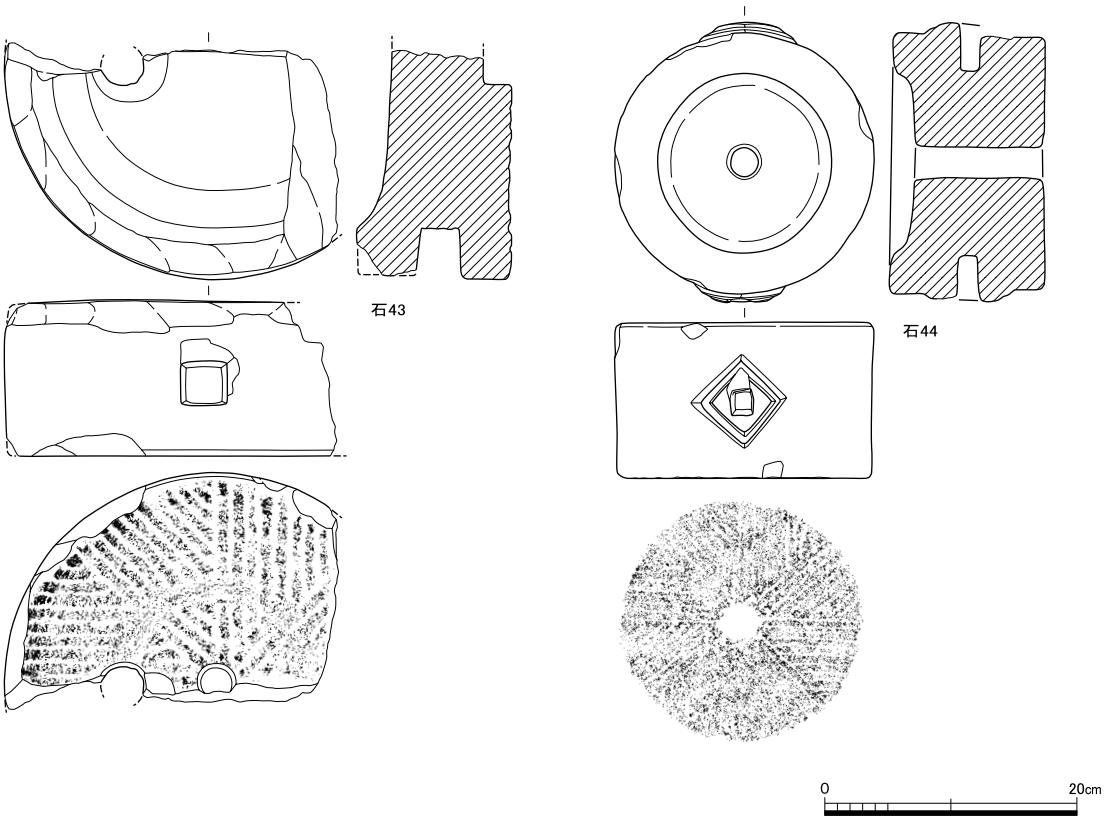
石製品実測図１（１：４、石１～３のみ１：２）

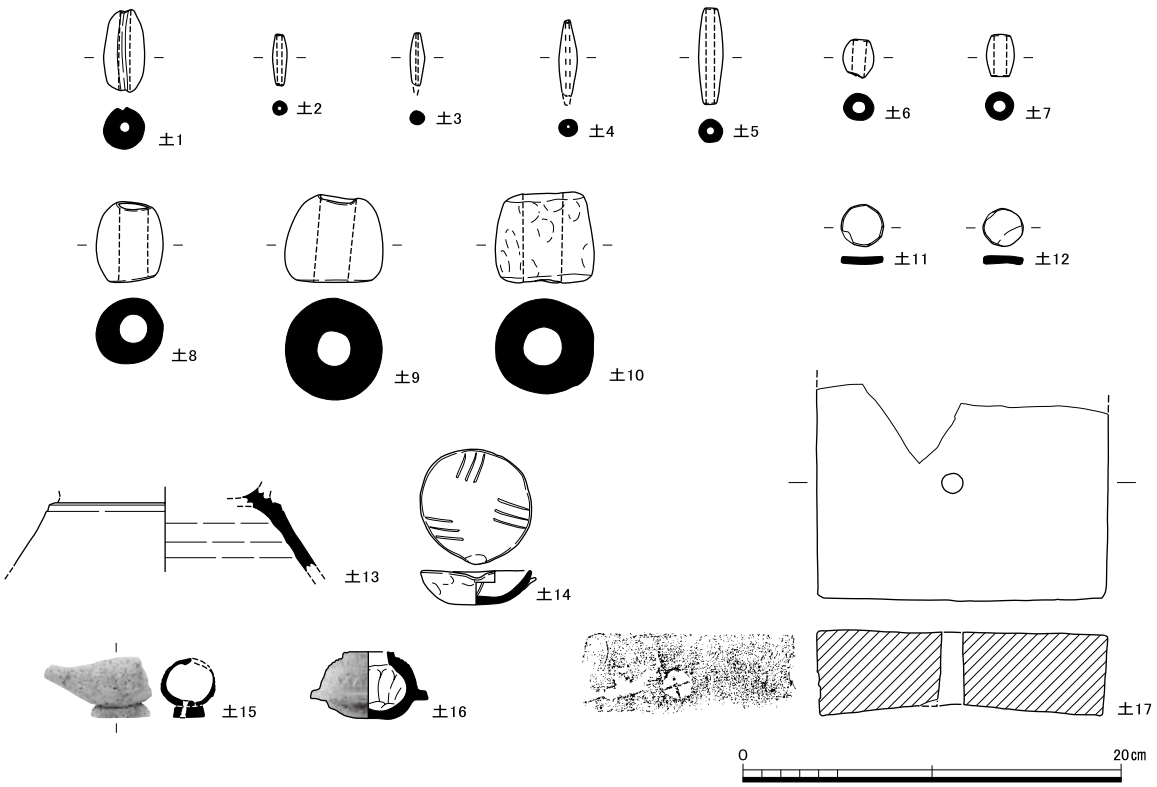


石製品実測図２（１：６）



石製品実測図３（１：８）

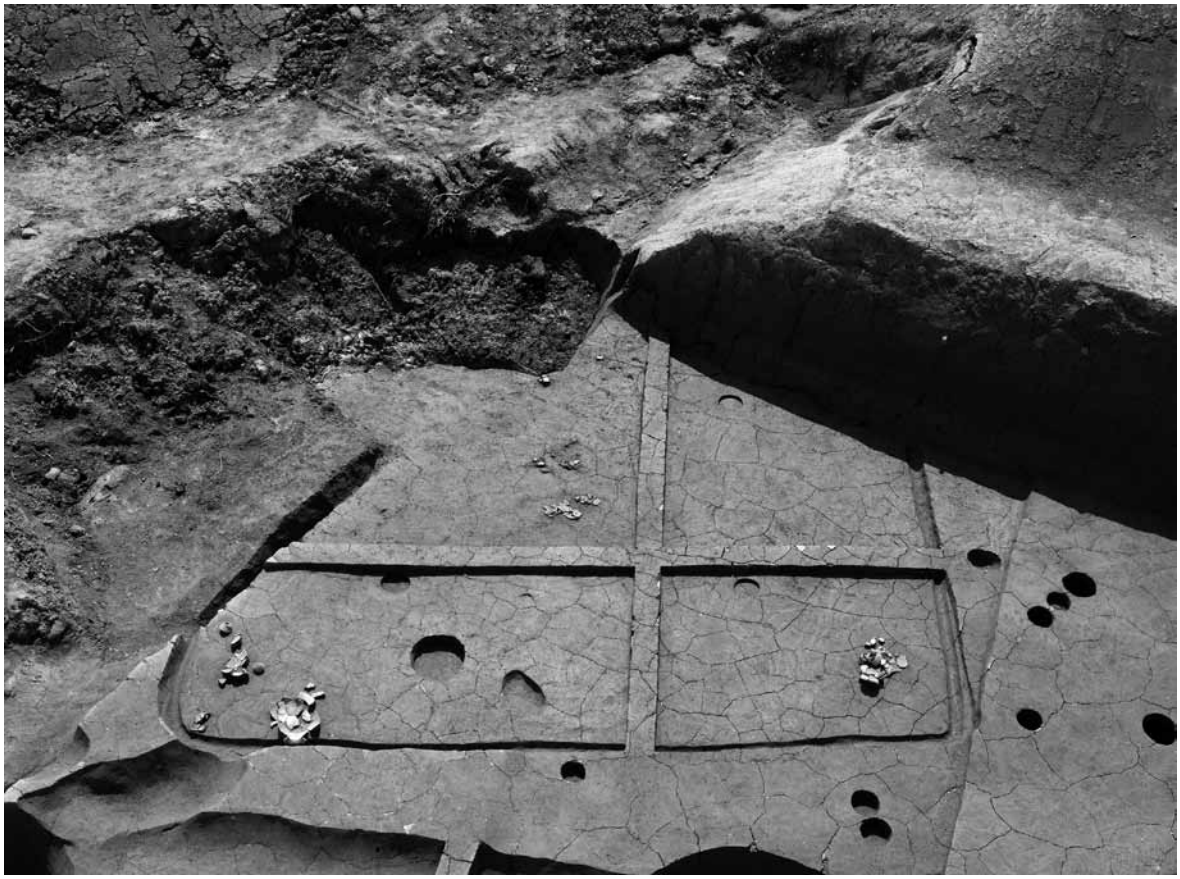




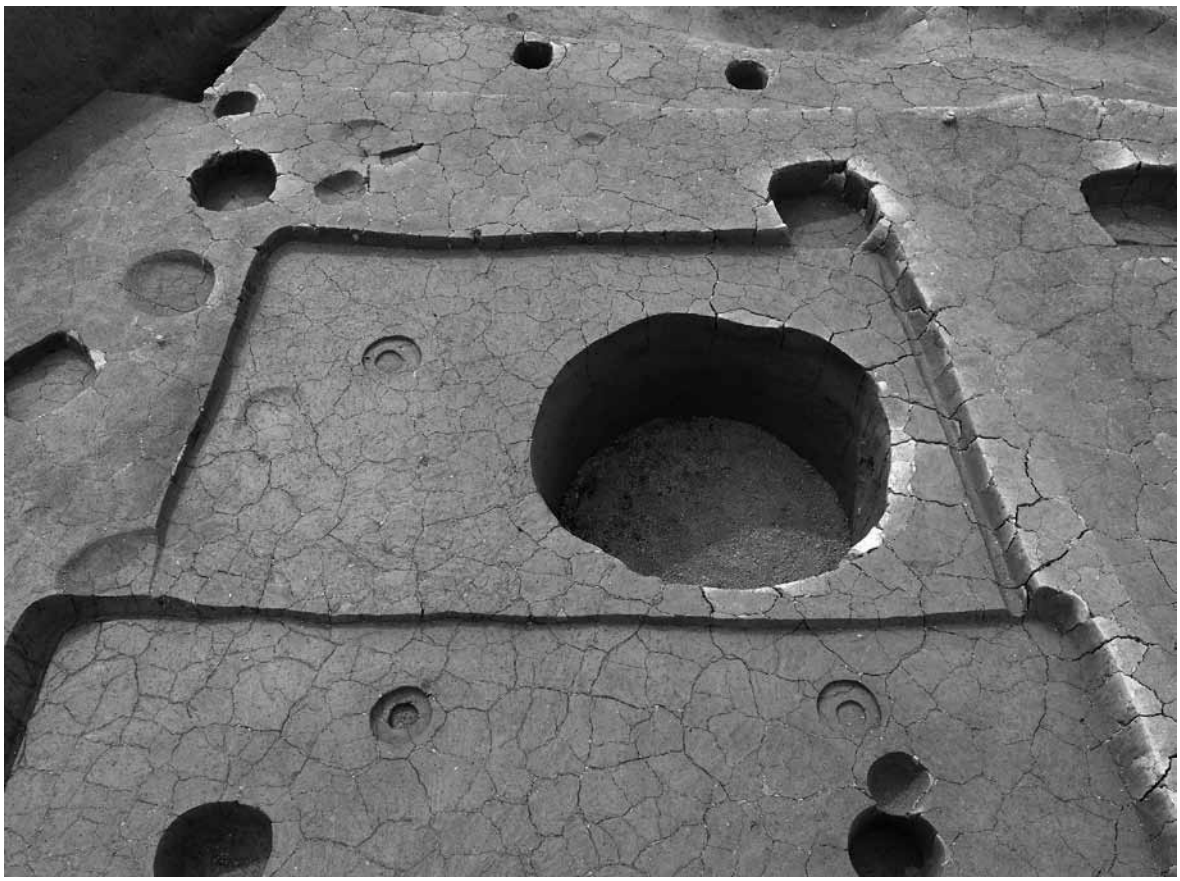
石製品実測図４（１：６）、土製品実測図（１：４）

1　２区第10面〔Ⅺ期〕全景（北から）

2　２区第９面〔Ⅹ期〕全景（北から）



1　竪穴建物2800（北西から）



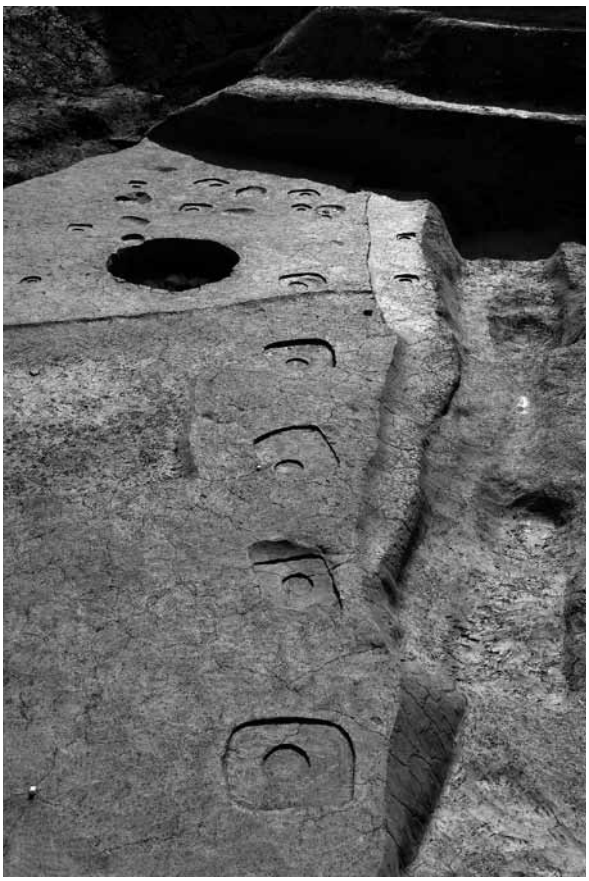
2　竪穴建物2770（北東から）

1　竪穴建物2355（北西から）

2　落込2392（3464）・溝2841（南西から）

1　２区第８面〔Ⅸ期〕全景（北から）

2　柱列2751（北西から）



3　柱列2740（北西から）

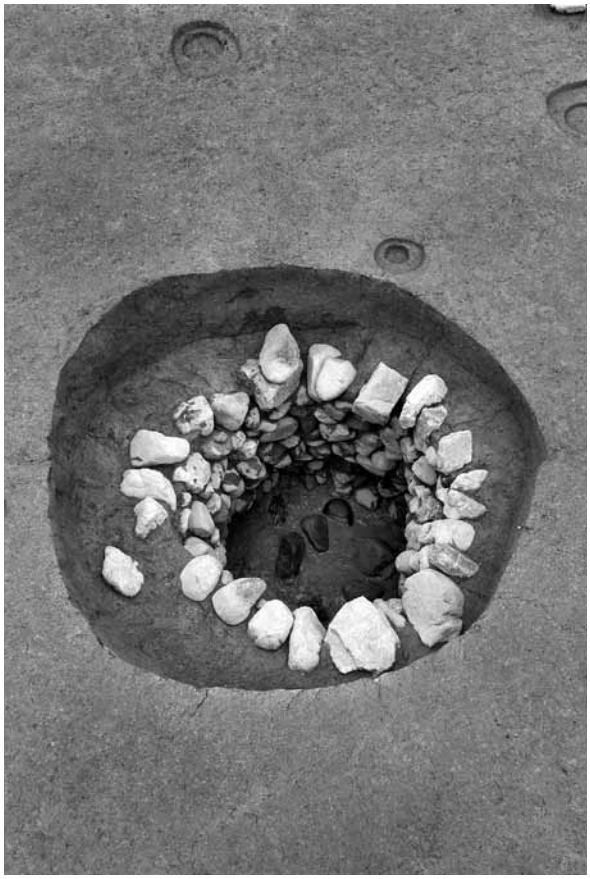
1　２区第７面〔Ⅷ期〕全景（北から）

2　柱列2705・2702（北西から）

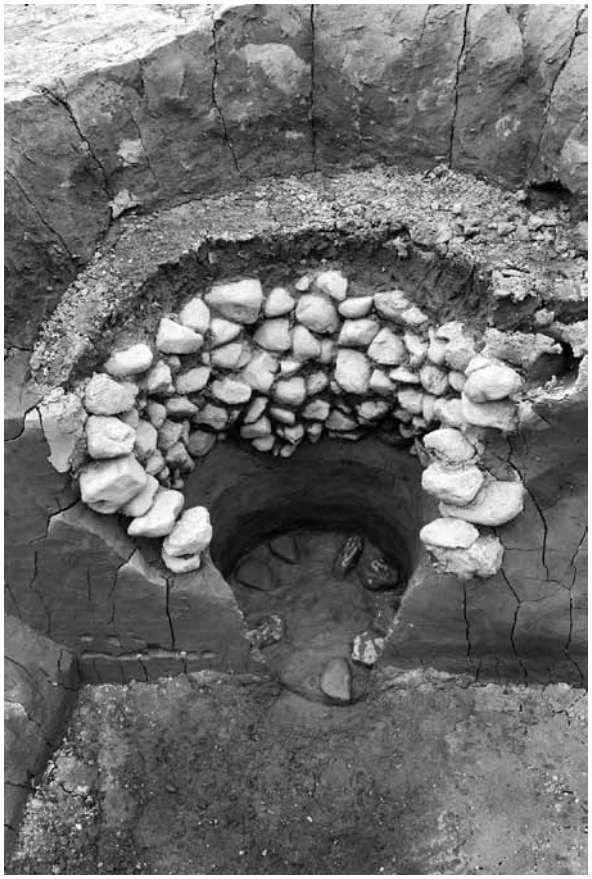
1　２区第６面〔Ⅵ期〕全景（北から）

2　２区第５面〔Ⅴ期〕全景（北から）

1　２区第４面〔Ⅳ期〕全景（北から）



2　井戸2666（北から）

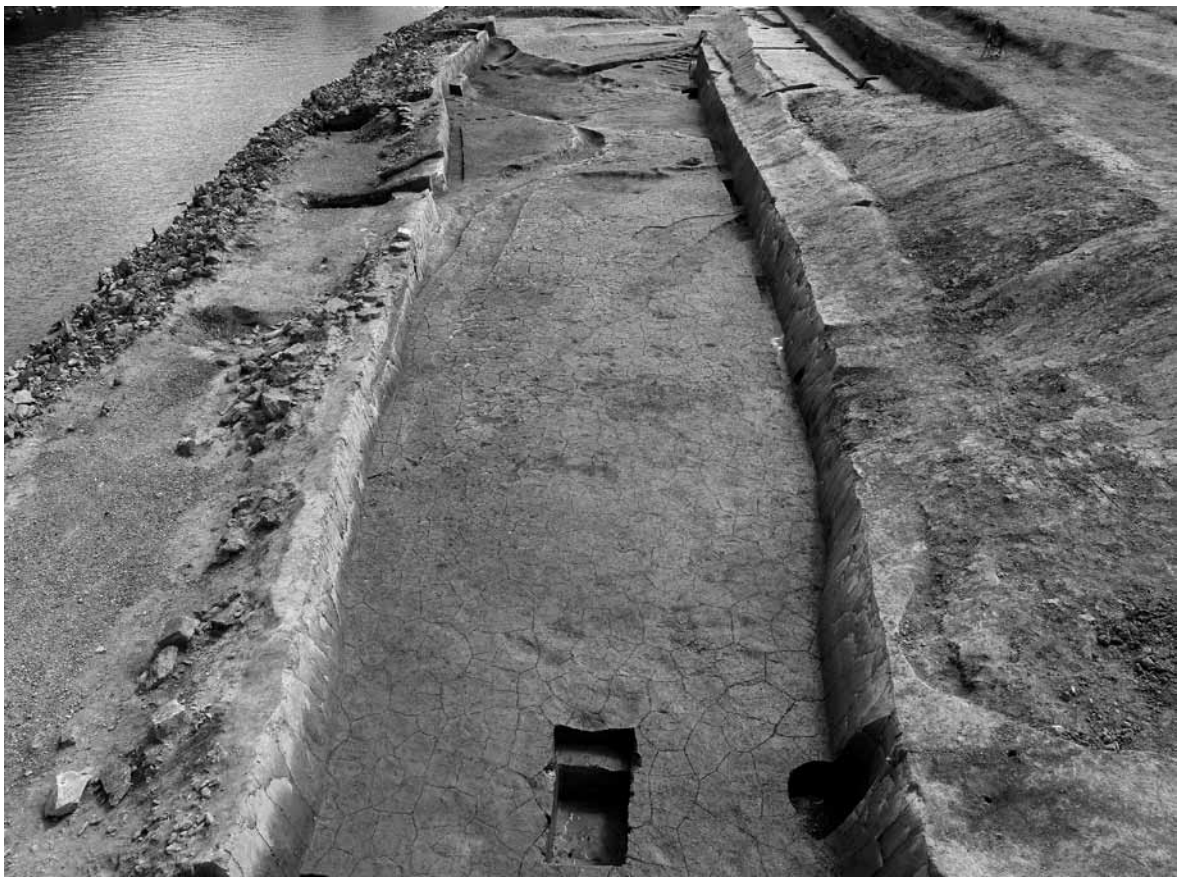


3　井戸2666下層半裁状況（南から）

1　３区下段第11面〔XI期〕全景（北から）

2　土坑3472（東から）

1　３区下段第10面〔Ⅹ期〕全景（北から）

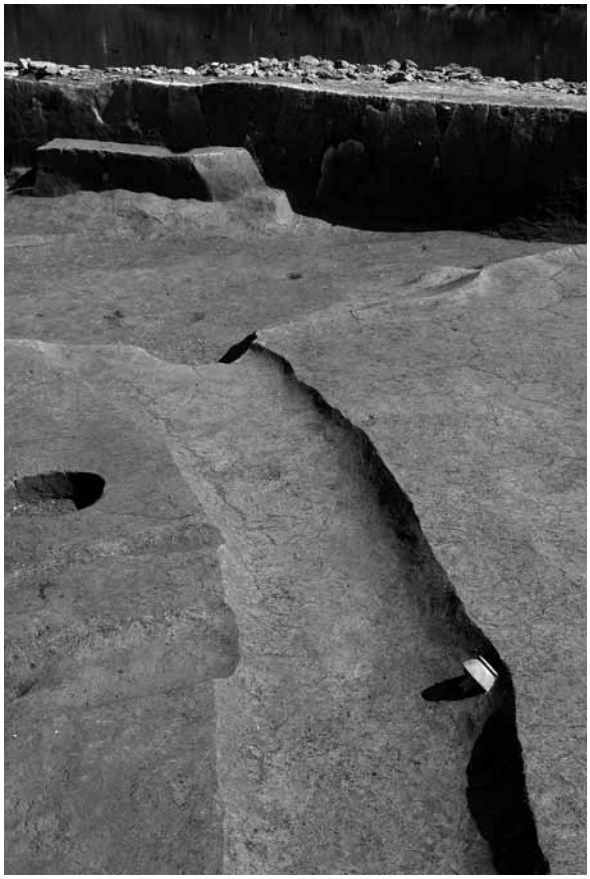


2　３区下段第９面〔Ⅸ期〕全景（北から）

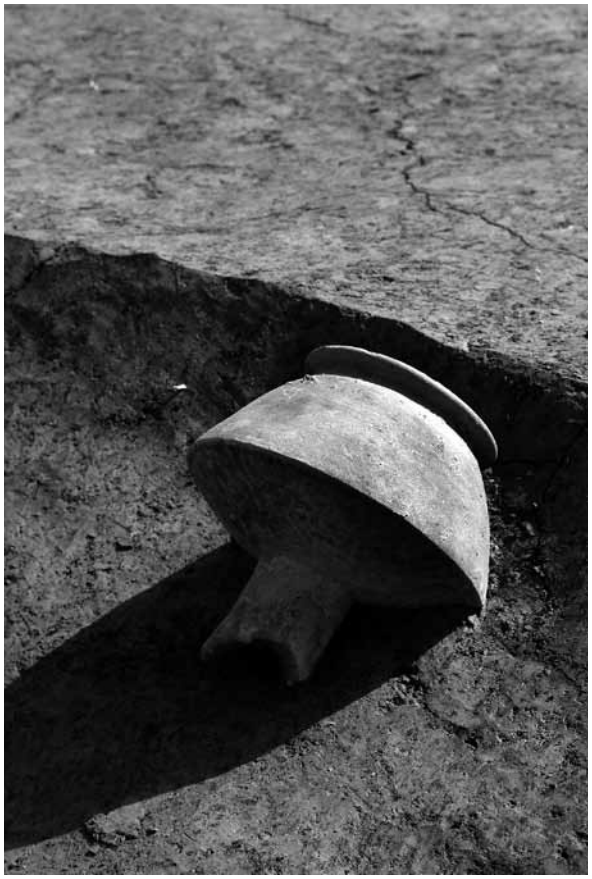
1　畑3444（北から）

2　溝3451土器出土状況（南西から）

1　３区下段第８面〔Ⅷ期〕全景（北から）



2　溝3428（南西から）



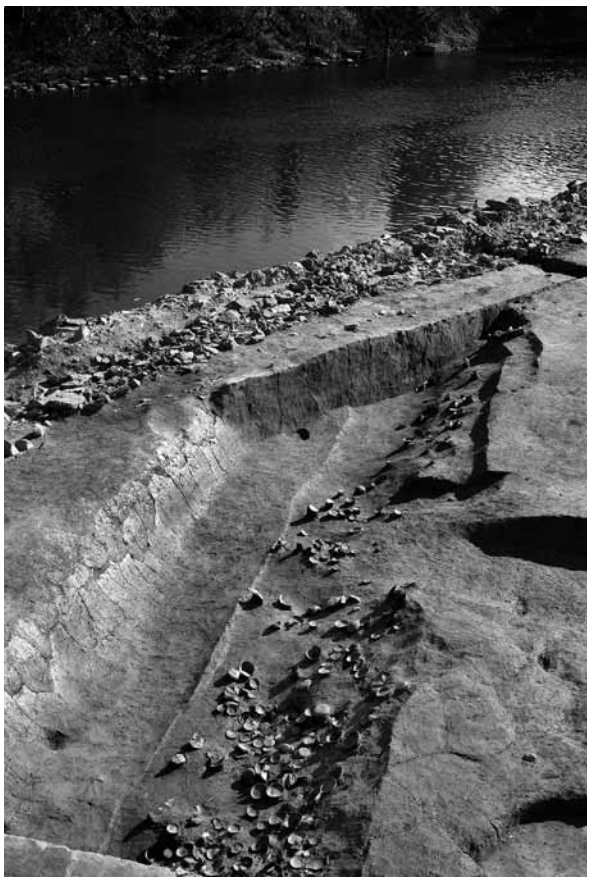
3　溝3428土器出土状況（南西から）

1　３区下段第７面〔Ⅶ期〕全景（北から）

2　流路3400重圏文軒丸瓦出土状況（北から）

3　土坑3386土器出土状況（東から）

1　３区下段第６面〔Ⅵ期〕全景（北から）

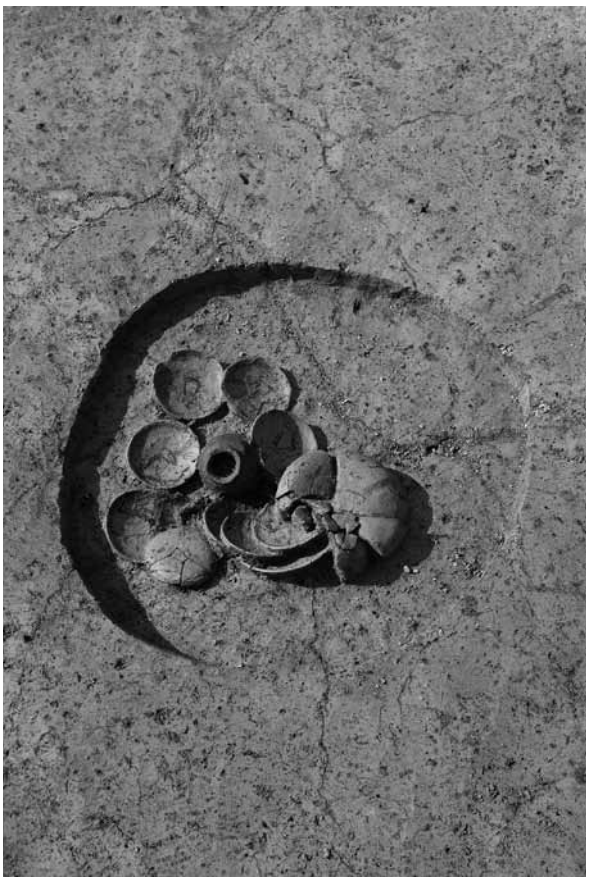


2　溝3185土器出土状況（北西から）

3　溝3240土器出土状況（東から）

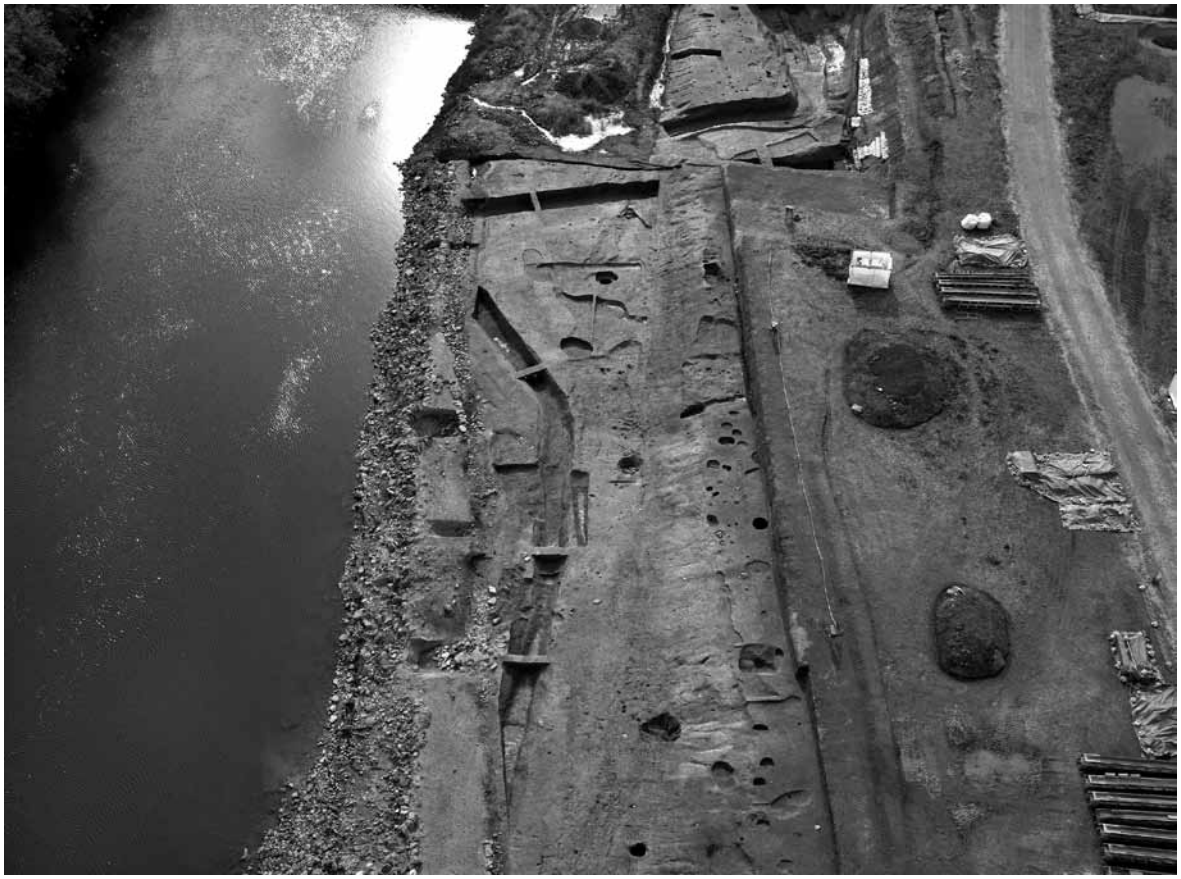
1　土坑3056瓦出土状況（北から）

2　土坑3056瓦出土状況（詳細）（北から）



3　土坑3392土器出土状況（北から）

1　３区上段第４面〔Ⅳ期〕全景（北東から）

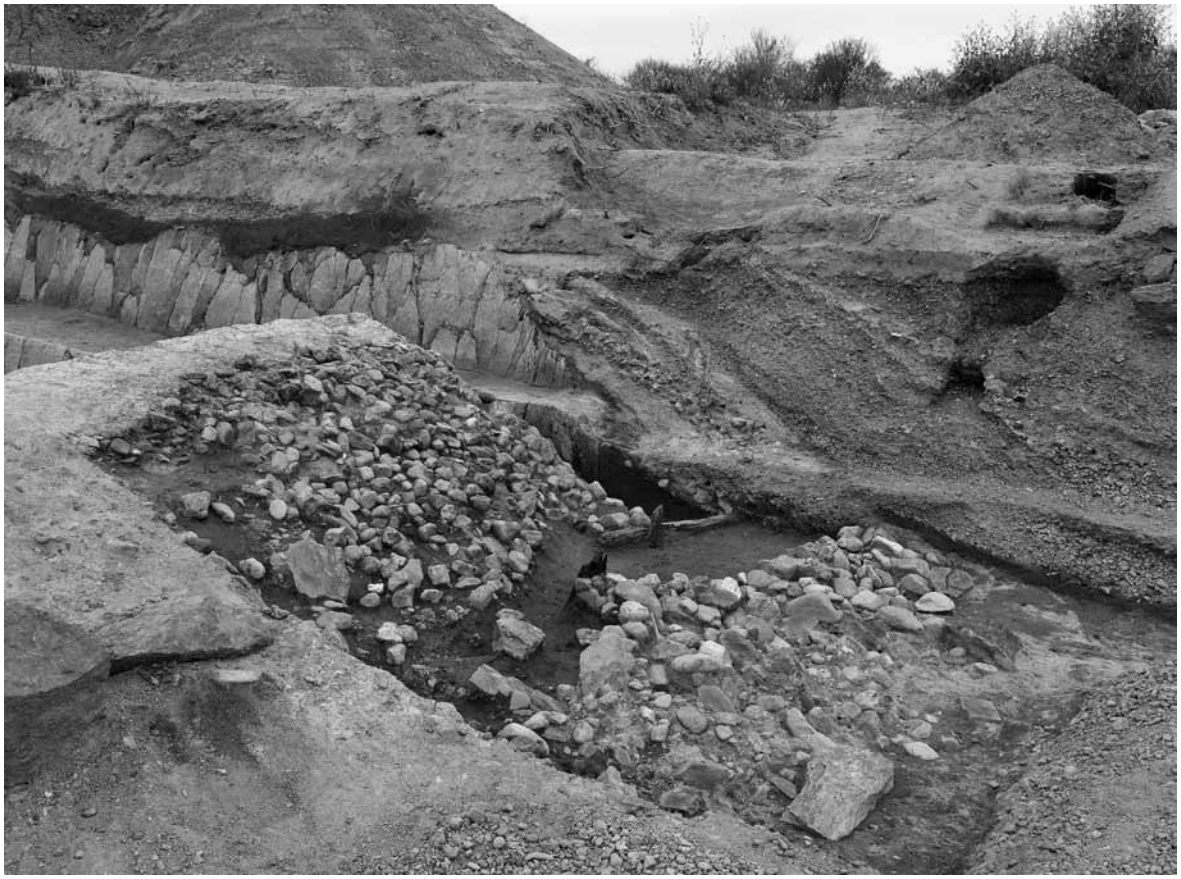


2　３区下段第６面〔Ⅰ～Ⅲ期〕全景（北から）

1　３区上段第３面〔Ⅲ期〕全景（北東から）

2　溝3055（2646）と堀2123（左側）（南西から）

1　３区上段第２面〔Ⅱ期〕全景（北東から）



2　護岸3473（南東から）

1　３区上段第１面〔Ⅰ期〕全景（北東から）

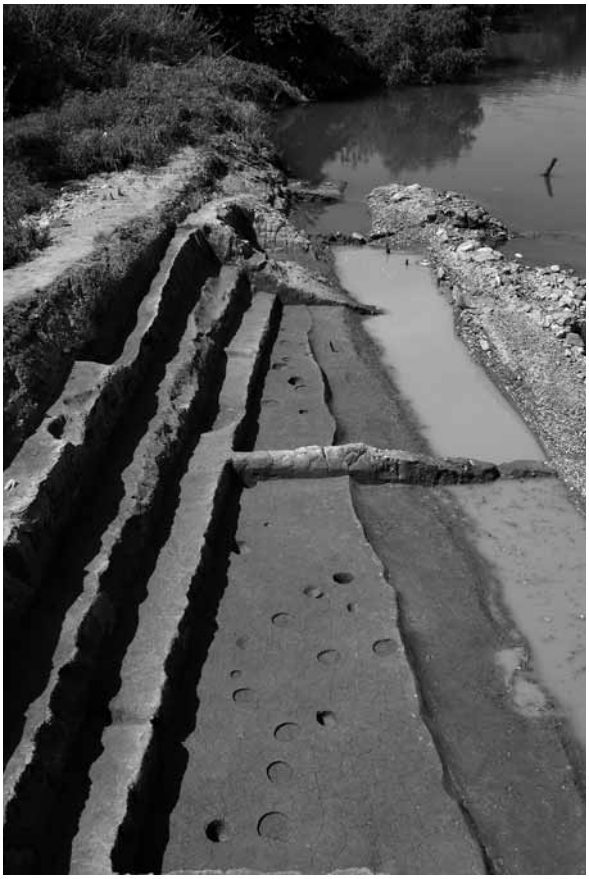
2　護岸3200（南東から）

1　水制3410竹蛇籠検出状況（北東から）

2　水制3410錨出土状況（北から）

3　地業3006・3007（北東から）

1　４区第８面〔Ⅷ期以前〕全景（北から）



2　４区第７面〔Ⅷ期〕全景（南から）

3　４区第６面〔Ⅶ期以降〕全景（北から）

4　柱列4085（南南東から）

1　４区第５面〔Ⅵ期〕全景（北東から）

2　４区第４面〔Ⅴ期〕全景（北東から）

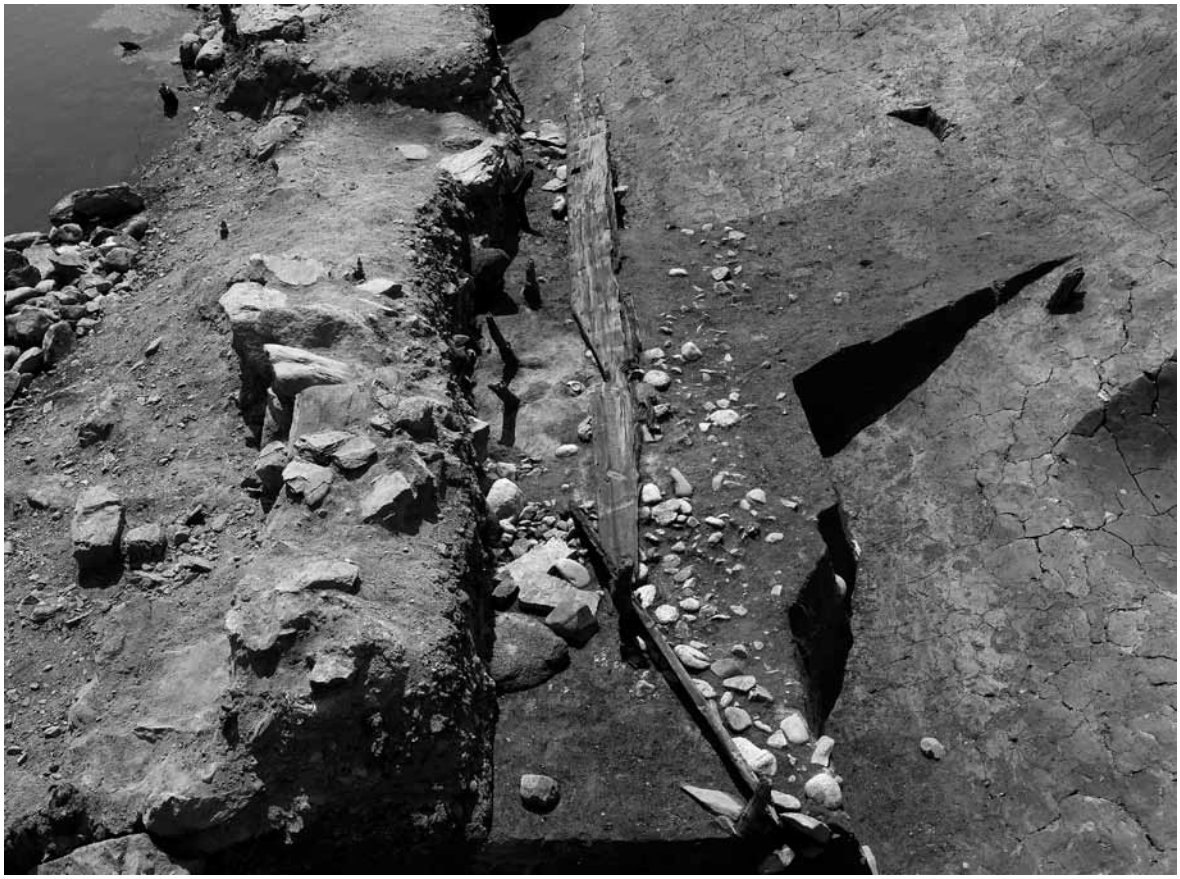
1　４区第３面〔Ⅳ期〕溝4047（北から）

2　４区第２面〔Ⅲ期〕全景（北から）

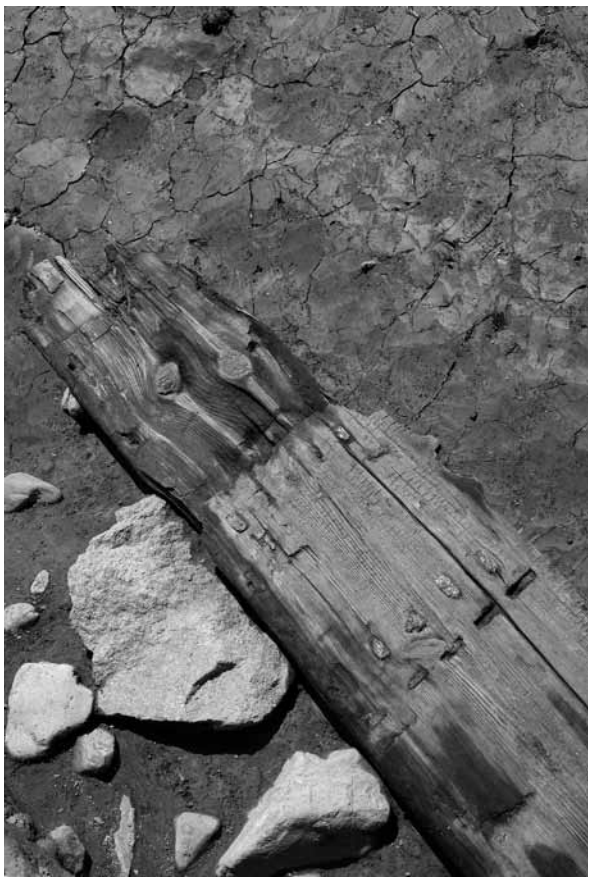
3　４区第１面〔Ⅱ期〕全景（東南東から）

1　水制4035、溝4030断面（南から）

2　水制4035最下部（南東から）

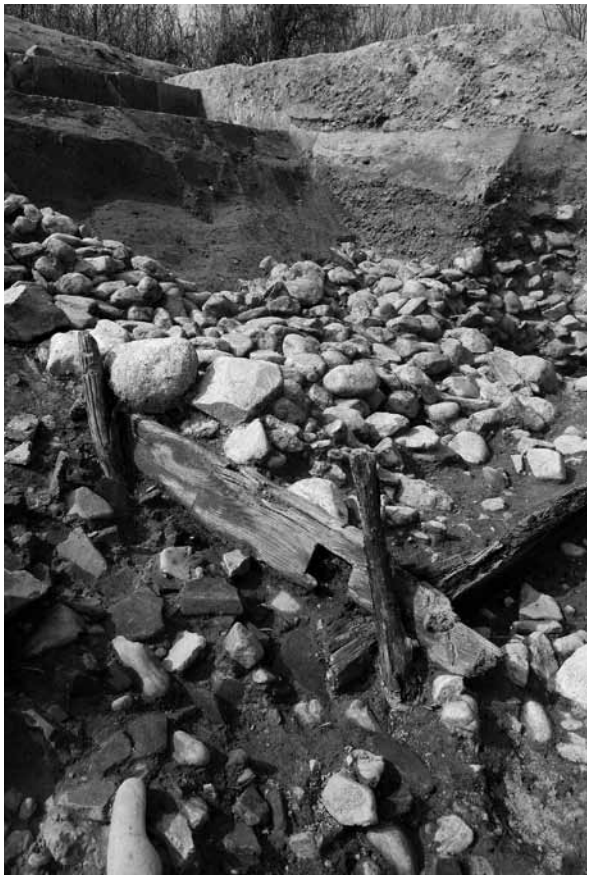


1　水制4035船材出土状況（北から）



2　水制4035船材細部（北東から）

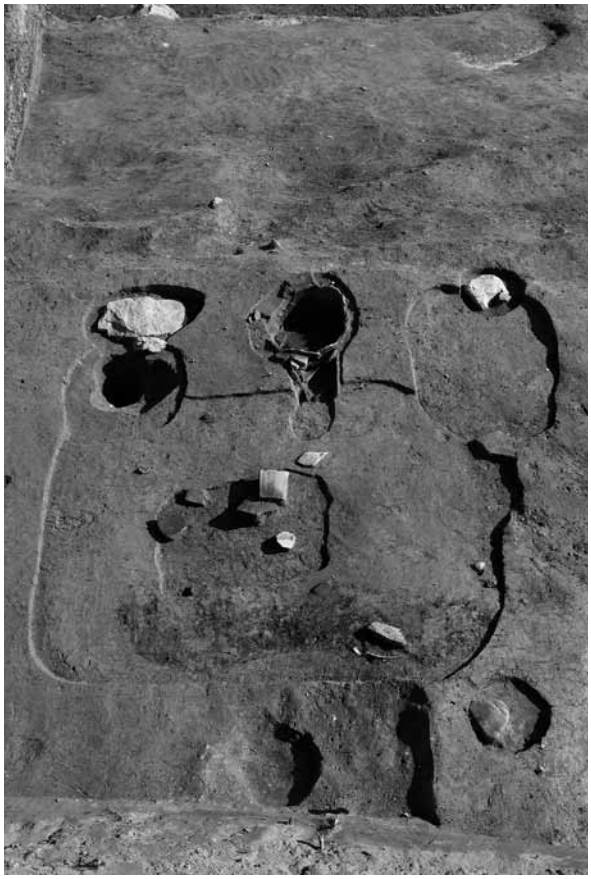
3　水制4035船材と石積石材（北から）



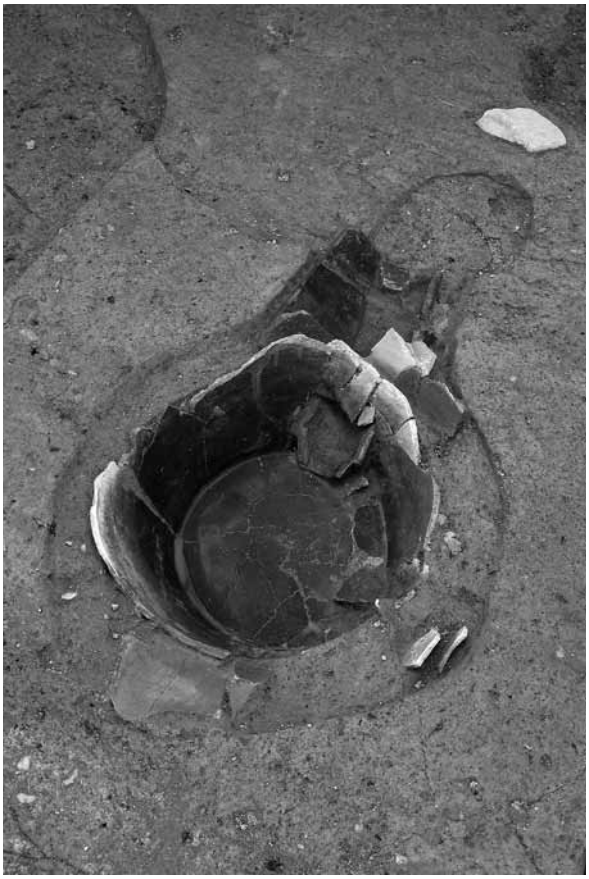
1　水制4035上段船材転用状況（南東から）

2　水制4035瓦・礫敷き検出状況（南東から）

3　護岸4031（北東から）



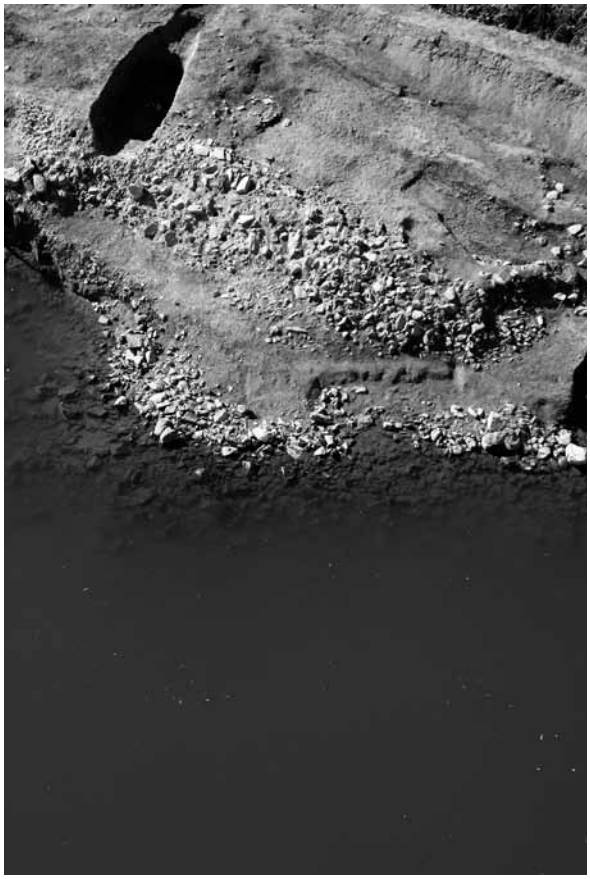
1　土坑4011・4012、柱穴群（西から）



2　土坑4012（北東から）

3　４区第１面〔Ⅰ期〕全景（北から）

1　護岸4001南半全景（北から）

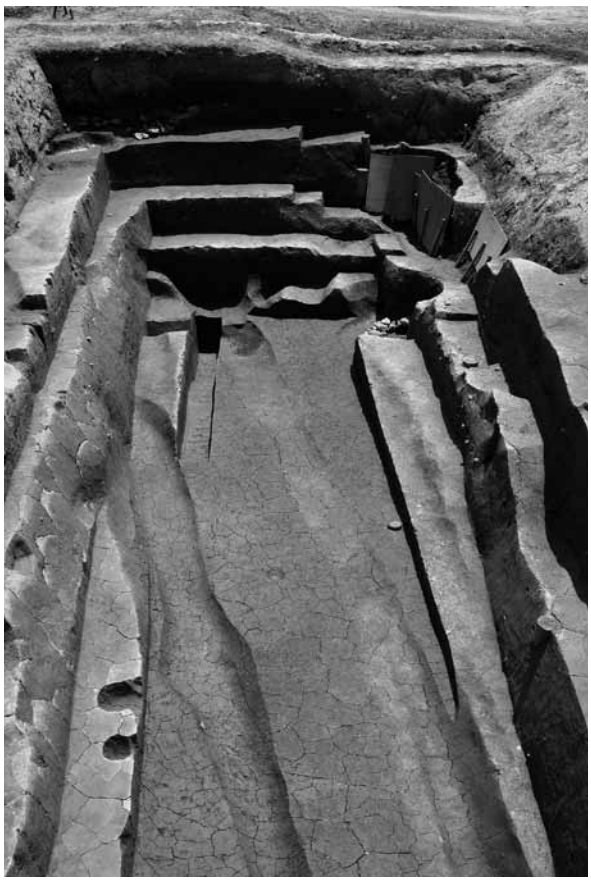


2　護岸4001北半、水制4045（北東から）

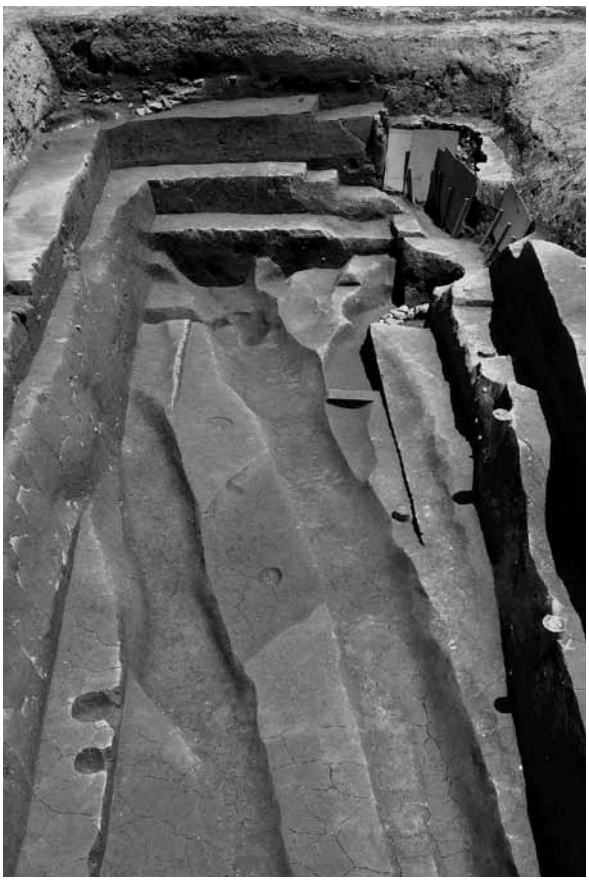
3　護岸4001断割（東から）

1　５区第10面全景（西から）

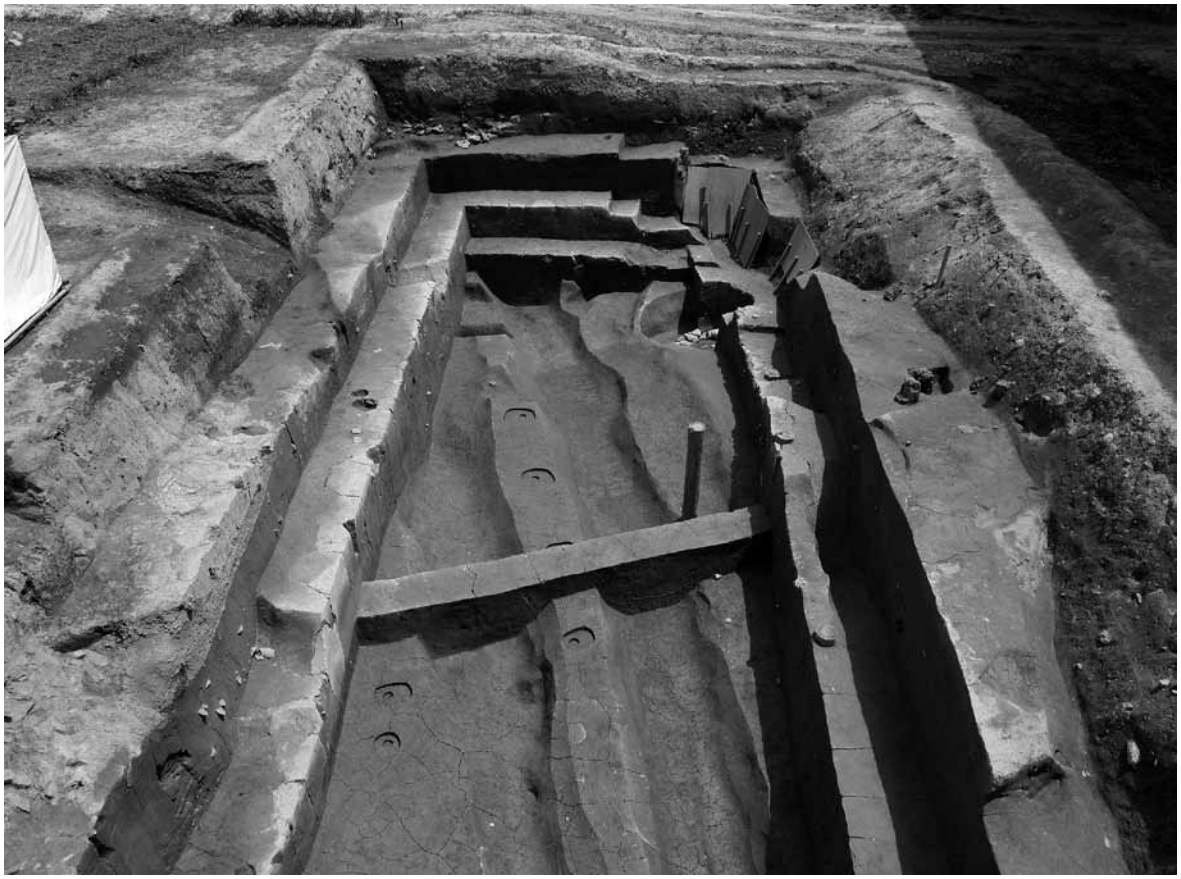
2　落込5071土器出土状況（北西から）



3　５区第９面全景（西から）



4　５区第８面全景（西から）



1　５区第７面全景（西から）

2　５区第６面全景（北東から）

1　５区第５面全景（西から）

2　５区第４面全景（西から）

3　井戸5028（北西から）

1　５区第３面全景（西から）

2　溝5027瓦出土状況（北西から）

3　５区第２面整地層八双金具出土状況（北東から）

4　５区第２面全景（西から）

1　５区第１面全景（南から）

2　地業5002・5003（南西から）

3　地業5002断面１（南西から）

4　地業5002断面２（南東から）


7


28


12


29


30


16


35


1


37

土器類 1


41


58


42


59


48


60


53


66


70

土器類２


78


83


87


100


101


102


104


120


138


143


159


169

土器類３


249


384


386


462


463


460


482


489


499


529


532


540


542

土器類 4


545


562


577


582


589


592


601


602


606


666


667


669


670


676

土器類５


678


681


683


692


693

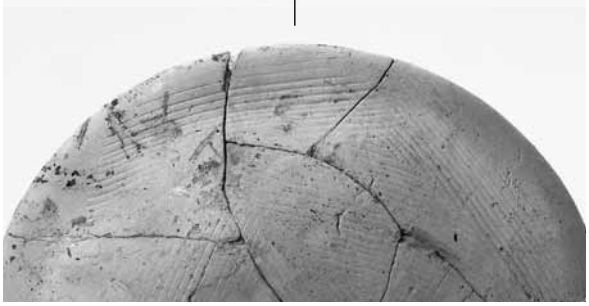

694


701


711


706


713




708

土器類6


721


722


725


727


728


733


744


747


752


768


770


771

土器類７


830


834


835


837


840


841


844


848


852


853


858


869

土器類８


876


883


884


892


911


925


937


939


920


914

土器類９


瓦1


瓦2


瓦8


瓦11


瓦14


瓦30


瓦44


瓦46

瓦類1


瓦48


瓦79


瓦64


瓦89


瓦72


瓦102


瓦101

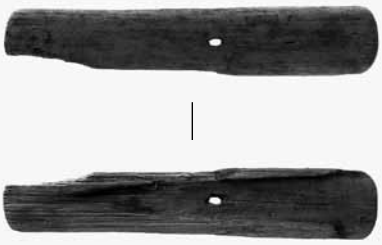

瓦103

瓦類２


木14


木35


木32


木33


木46


木47


木57 木58 木59 木60


木62

木製品 1

木66

木67

木84

木製品２

木88

木89

木製品３


木87


木90


木91


木92


木93


木95


木96


木94

木製品 4


木97


木98


木100


木101


木103


木99


木102

木製品5


金6


金8


金7


金9


金10


金13


金14


金15


金16


金17


金21


金20

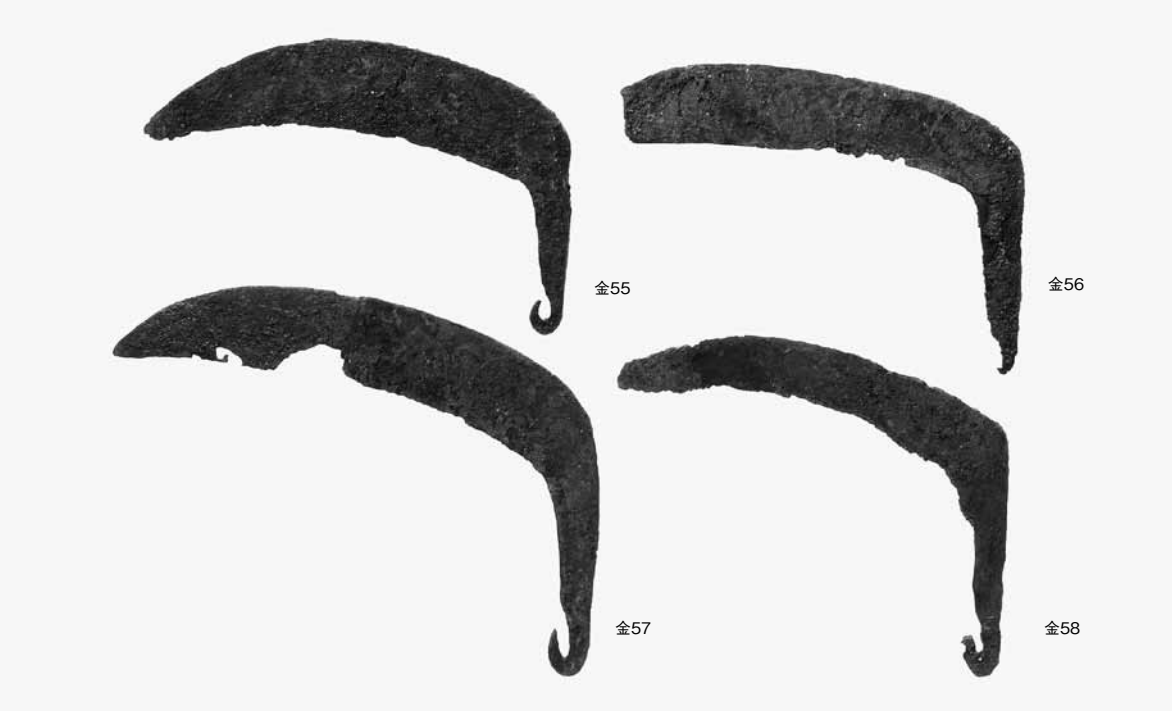

金19


金18

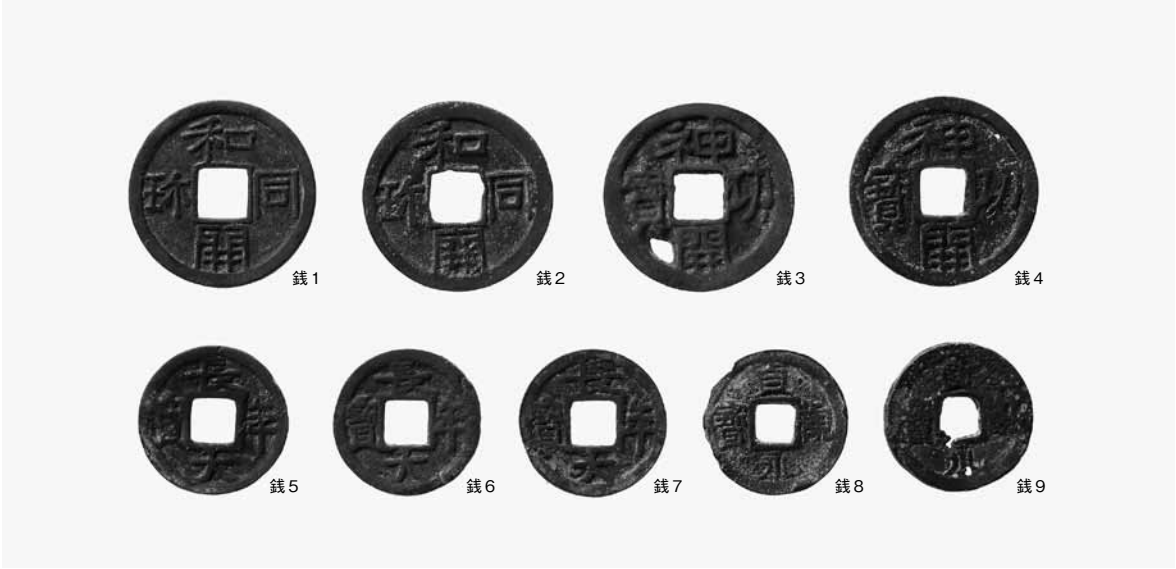
金属製品1

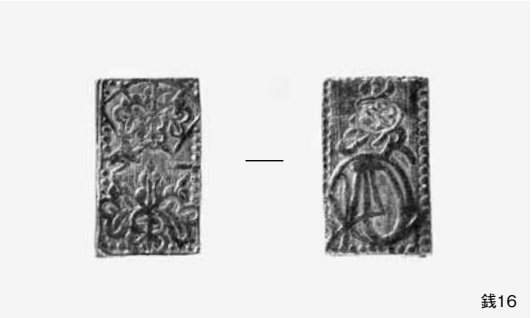
金属製品２

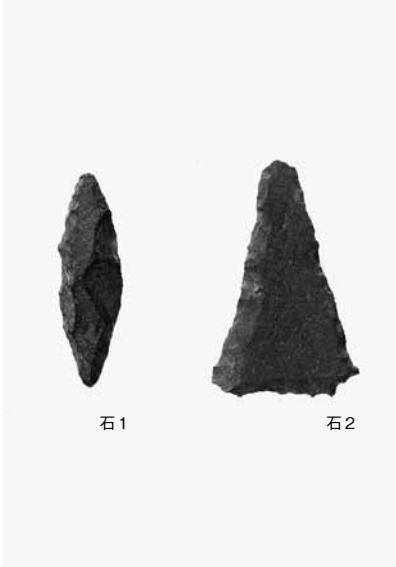
金属製品３



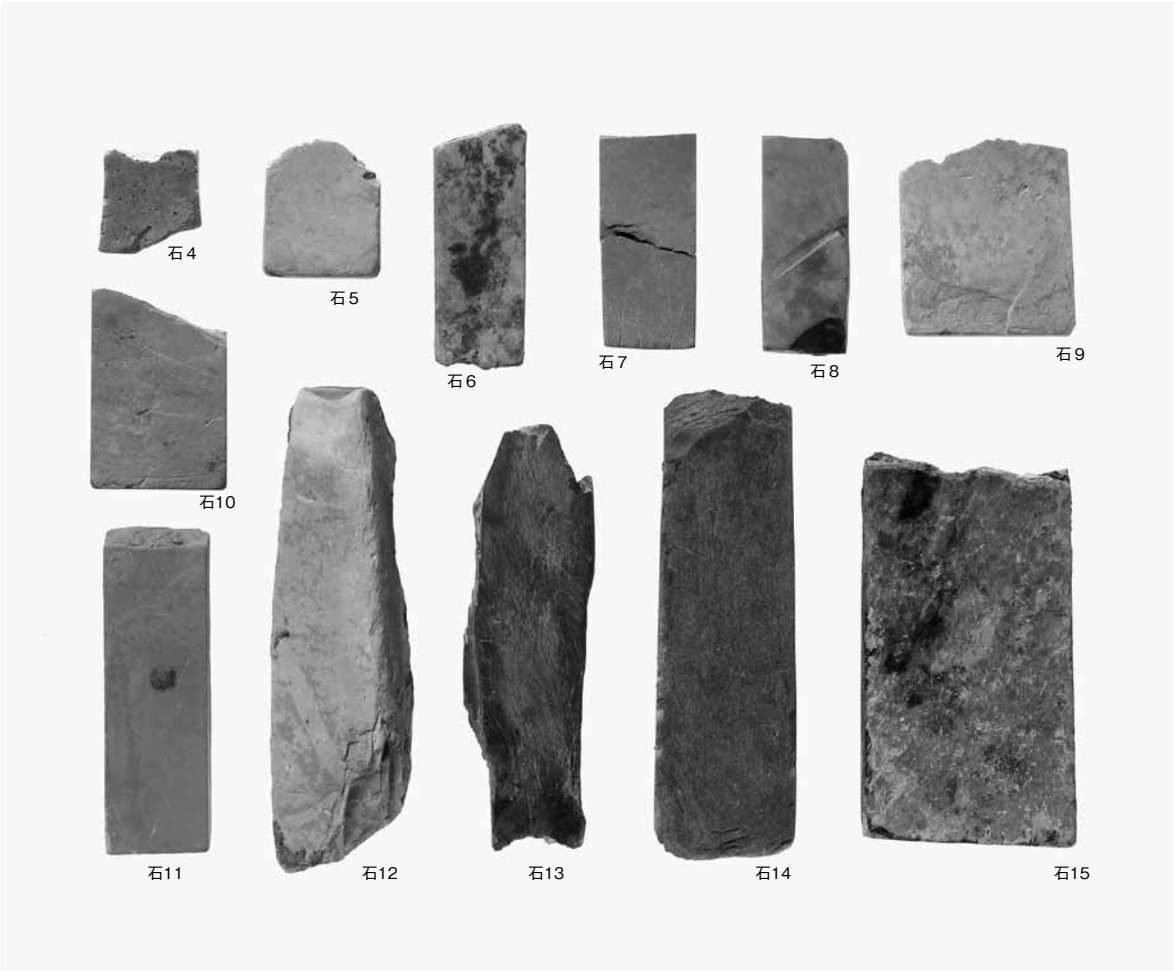
金属製品 4

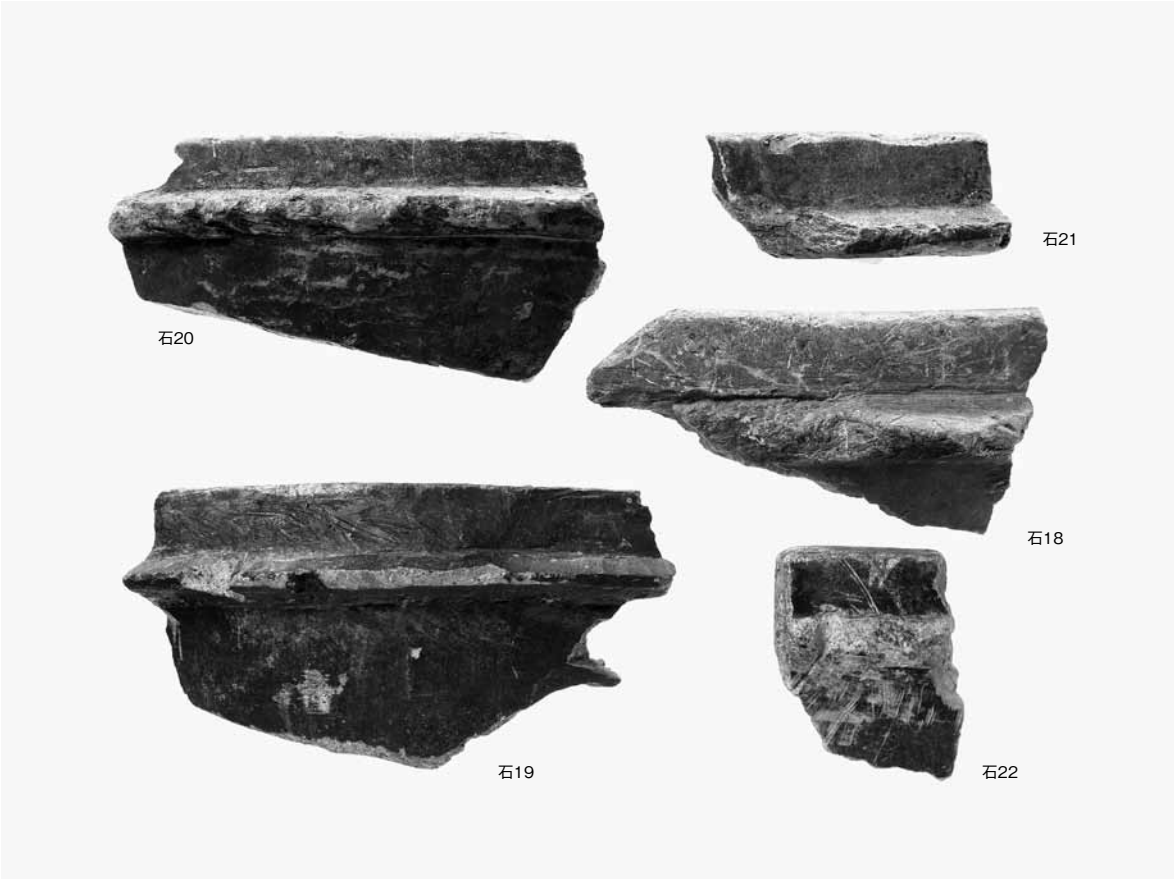






錢貨、石製品1





石製品２

石製品３、土製品

報　告　書　抄　録

ふ り が な	ながおかきょうあと・よどみずたれおおしもづちょういせき
書　　名	長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２３－９
編 著 者 名	松永修平、柏田有香、三好孝一
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2024年12月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡（ながおかきょうあと） 淀水垂大下津町（よどみずたれおおしもづちょう）遺跡（いせき）	京都市伏見区（きょうとしふしみく） 淀水垂町地先（よどみずたれちょうちさき）	26100	3 1214	34度 54分 30秒	135度 42分 59秒	2022年10月13日～2023年５月31日	3,130㎡	河道拡幅工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 淀水垂大下津町遺跡	都城跡 集落跡	弥生時代中期～後期	溝、落込、土坑	弥生土器	古墳時代の竪穴建物を検出した。 平安時代の溝を検出し、多量の土器類が出土した。 室町時代の東西方向と南北方向の溝を検出した。 江戸時代の與杼神社との関連が想定される遺構・遺物を確認した。 江戸時代以降の石積み護岸・水制を検出した。
		古墳時代～飛鳥時代	竪穴建物、柱列、溝、落込、土坑	土師器、須恵器	
		奈良時代～平安時代	柱列、井戸、溝、流路、土坑、落込	土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、緑釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨、卒塔婆	
		室町時代～安土桃山時代	柱列、井戸、土坑、溝、堀、落込、柱穴	土師器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、漆器椀、卒塔婆、金属製品、銭貨	
		江戸時代～明治時代	護岸、水制、地業、溝、流路、井戸、土坑、落込、柱穴	土師器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、船材、金属製品、銭貨	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2023-9

長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡

発行日　2024年12月28日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番
〒602-8358　℡ 075-467-5151